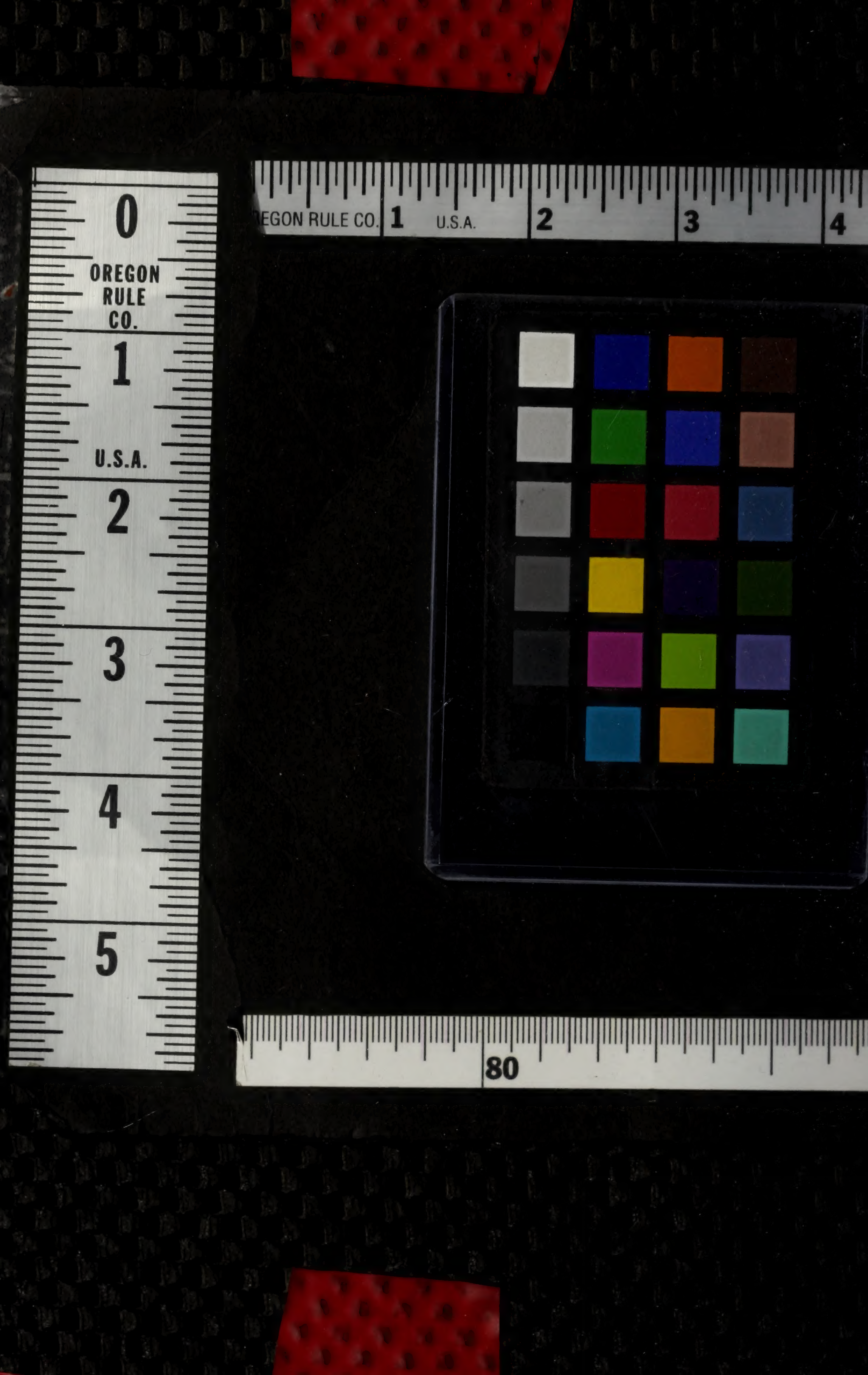
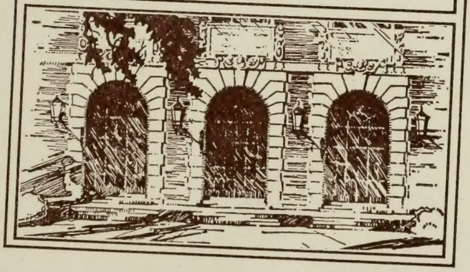

OREGON RULE CO.
U.S.A.
EGON RULE CO.
U.S.A.
80

PL
700
.M41
no.10-12

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 071411760

LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN

PL
700
.M41
no.10-12



明治文庫

短篇小說

博文館發行

明治文庫第十編

目次

僞紳士　櫻癡居士

一人娘　漣山人

母心　さゝのや主人

銃獵　松華菴主人

鏡花縁　松井十八公子翻案　紅葉山人閲

薄暮山　田山花袋

応需 永洗

PL
700
M41
no.10-12

◉僞稱紳士

櫻癡居士

○第一回　魂膽倶樂部

船板塀に見越の松、一間々口の竹扉、ごろたの延段の路次傳へ、三疊の玄關八疊の座敷など、書たるは、グッと昔の待合茶屋。ドウして〳〵世間一體がスッカリ變つたる今日、ソンナ陋矮待合は東京十五區廣しと雖ども先づ滅多には見當らず、偶偶流行後に存つて居た所が立派なお客は御光臨に相成らず、純粹の紳士ですら車を枉ないと云ふ上からハ、矧て況んや、堂々たる僞稱紳士がナンデ足踏を致さんや。去ば今日の愛顧は復昨日の貴賓にあらず當世の待合いかんぞ舊時の待合にて可ならんやと言合さねど何れも皆驚くべき長足の進歩。およそ旅宿逆旅料理茶屋みな高殿の大建築、その中でも一際目立は御待合。抑々待合と申す詞は即ち英語で云ふ倶樂部の意味、何でも宏大の家で無くては紳士がたの御座所に成らぬ、サア普請に取掛れ、物の見事に建設よと、何所をドウ算段したか、去年の夏から大工を入れてヤット頃日落成り開業したる一個の待合、大廈巍々として雲表に聳え廊下緩く繞つて輦道の如しとでも賛られさ

うな殿造り、田舍漢に見せたなら大華族の御住宅か夫で無ば噂に聞た帝國議事堂とは是で御座るかと質る程の大搆へ。是ぞ即ち木挽町の魂膽亭とて名に高く、家號をくらぶ屋とも唱ふる依て世間では魂膽倶樂部とも名を附けて當節流行の贋造紳士が朝な夕なに往來出入し玉へる惡徳の實行場秘密の相談所なり此の家の女將軍おたぬ殿と申し奉るは、懸卷も忝くも此花引邪媛の神孫なりとは宣へども、三千年來その住國草深くして實は何れの出生やら夫さへ確ならず、今を距ると二十年前御歳十三にして誰某殿と申し、官員の外妾と成り室の莟を無慙に唉かせられ、十五にして大唐髷の友禪裝束ゑんき辛苦の新橋に雛妓となつて出現し、十八にして水性の風に靡くてふ柳橋に移りて褄を取てより、或は引込み或は顯はれ、芳町三度神明二度、下谷牛込日本橋およそ東京中殘る所なく行ひ廻りて鯰公鰌子紳士山師頭取社長支配人或は巡禮古手買節季候に至るまで手當り次第に引捕へ鼻毛を數へ小蹄をすくひ生血竭れば骨までもシャブリ盡したる大剛の女夜叉なりしが。さすが狐舊巢や戀しかりけん再び新橋の畔に歸り來て、イザ去ば我神變不思議の通力を以て此魂膽倶樂部を開き世の中の妖女魔漢を引寄て思ふ存分手品に取らん、同ト相手にする程ならば煮ても燒ても食へない奴が却て此方の上等客、秘密を洩らす御心配は些とも御座りません、事業の相談依賴の掛引なんでも彼でも御遠慮なしに遊ばしませ、一寸花牌を一組なら御手が足ずばお相手しませう、利目へ賄賂の手蔓が無いなら誰君へなりと妾が内々お使いたしませう、應賴藝妓の三圓談判これは固より立商買、そのほか妾の御周旋、素人なりとも女中なりと御意に任する

御調法、愈々無人の其時は花こそ散たれ姥櫻此妾がお間に合て當座のお伽さら〳〵御不自由はさせませぬと、便利極まる手配に果して繁昌驚くばかり、猫も酌子も入込で黒塗の手車はつねに門内に絶たる事なし

○第二回　月岡桐塚菊川の三傑

雙曳の車を玄關に付させ車夫に護謨靴を取らせながら亭婢が其所に出て『オヤ入ッしやいまし』と挨拶するに向ひて『女將軍ハ居るか』と質ぬる途端帳場より飛出してハッと居りて辭宜をなしたるハ女將軍なり。是を見て『ヤア女將どうしたイ（と小聲に成て）時に桐塚は來て居るかチ』と問へバ。女將のおたぬも聲を潜めて『ハイ先きから入らッしッてヾ御座います夫に洋服を着て髯の生た四十位な立派なお人が御一所て御座いますヨ『ムヽそうか、夫おやァ彼奴氣を利して菊川を引張て來たと見えるな、ソコでモウ酒が出て居るか『イヽエお酒のお支度も出來て居ますし藝者衆も疾から參つて居ますけれど、貴君のお出が無いに由て……『ヨシ〳〵、所で女將、彼奴等が前では餘り余が戯謔る事を言まひせ『大丈夫ですヨ、ずッと着實な振で『其事サ……』と言捨て帽子と外套を女將に渡し『お連さまが入ッしやいました』と金切聲の案内と共に階子を昇つたるは月岡武藏と云へる當時日の出の流行事業家齡の頃は三十五六歳の働き盛なりこの月岡が來たるを俟たるハ是も此節世に雷名を轟かし、この三四年前より炭鑛株で大利を占てより忽に紳士の列に加はりて紳商と呼ばれ、更に一級昇進して寵商となり此勢に乘ドて

政商の極官に成うと云ふたゝかもの、其内證に入て見たら有やら無やら知ねども『資本の工夫なら心配ハ御坐らぬ僕が引受て考案を立て見ませう』と云バ大抵な相談も纒が附ほどの豪傑にして桐塚官太郎と云る年輩ハ四十三四の勘辨盛り、本職が私立銀行の頭取で何某株式會社の取締役何某合資會社の委員何の理事彼の相談役と凡十二三も商業工業の事に手を出たる懸持の名代役者。いま一人ハ菊川壽とて非職は二年前に年が明て別に是と云ふ定つたる職業ハ無けれども、何が扨辯口ハ甘し調子ハ好し、政治經濟文學詩歌なんでも口元だけハ知て居るし、半可通の英語に急稽古の舞踏洋食の獻立洋館の装飾ハ云ふに及ばず、相公に對すればへボ碁のお相手湯治のお供、モッと進んで狹斜の嚮導弄牌の指南をなし、令閨に對へバ演劇の評判藝人の噂話し此ぞと見れバ外宅の探偵摘食の隱密をも相勤むる伎倆なれバ、何れへ罷出ても通が好てヤレ調法だッレ面白いと持囃さるゝ老狸、言に言はれぬ秘密の懸引ッと操る有髯牙婆、油斷のならぬ人物とハ其口先に顯はれたり（此三人が何なる密談をなす乎それ次回を待て知り玉へ）

〇第三回　空中電氣鐵道

月岡武藏は桐塚官太郎菊川壽の兩人に向ひて『大きに御待せ申して大失敬で御座りました、實は桐塚君に御約束いたした如く今日午後三時には十分前に此家へ參り御尊來を待ませうと存じて已に車に乘らうと致した所に、御存知の甘朽秘書官が大臣の馬車で拙宅へ乘附けて『扨今日の議場は斯々の勢なれば

此場に臨んでは切盛伯も尊公の一臂を假らねば迚も圓滑に彼黨を籠絡する譯に參らぬジヤに由て至急面談いたし度ゆゑ御苦勞ながら此馬車に乘て直に御光臨を願ひ奉る』と云ふ依賴サ、大抵な先ならば僕も政治商賣は此三年來止て居るから夫は頗ぶる迷惑で御座ると斷る所だが別懇な切盛伯が大臣の椅子に列なつて政局の安危に關すると云ふ塲合をば滿更傍觀も仕惡いゆゑ據なく官邸に往て密談に渉つて來たので遲延いたし所謂紳商刻限に成て恐入つた』と口から出任せに辯ずれば、桐塚は『ハヽア左樣で有ましたか、イヤ御同樣に內閣や諸大臣から秘密の加役を時たま突然に依賴れて暇隙をさせられるには閉口仕りますテ、ソコデ今日は幸ひ菊川君が稀らしく身體に御約束が無いとの事ゆゑ御同伴いたした次第……と云ひ畢らぬに、菊川は詞の尻を續で『何か老臺方に新事業の御相談があると承はつたに由て、然らば席末を穢して或ひハ參與いたさう歟と存ドて御供は仕たが、但し月岡君御差支とあらば御遠慮なく……『どうして〱內實は思ひ立たる事業の順序に少し考案の目鼻が附たら是非とも尊君の一臂を拜借し度と桐塚君とも申合せた事も御座れば今日の尊臨は願ふて無い仕合……と御互に程のよい挨拶振は遉がに紳士然と見えたりけり

談話は漸く佳境に入たりと見えて潛々聲は自づから調子高に成て互ひに素性を顯はしたる存才詞……『コウ〱桐塚ソンナに仲間內で虚飾を言つても詰ら無いせ、是が何も御同樣に有餘つて金の置塲に困ると云ふ身代ぢやア無し『宜しう御坐る夫位の事で宜しいなら何時でも喜んで寄附いたしませう』と大

束を極て出す慈善義捐金でさへ實は一圓に付き何程と云ふ酷い利を喰て居る金じやァ無いか、ソコデ此策が實際行はれても行なはれ無ても金穴が丸ッきし皆無では話題に成らぬが『オット皆まで宣まふな、抑も此話が初まると否や某已に張良孔明の謀を帷幕の中に廻らして強氣な資本家の馬鹿を一人生捕て置た……イヤ〳〵其椋鳥の身の上は第二讀會の時に披露するとして、先づ差向は本題たる我々思ひ立の空中電氣鐵道の新案が許可に成だらう歟と云ふのが先決問題だが、菊川君どうだらう『さればサ、隨分とも六かしい問題だけれど許可される樣にさへ仕向ればナンノ許可に成るのは受合サ、所で其空中電氣鐵道と云ふのはどう云ふ工夫の新案ですかな

○第四回　運動分業の相談

『ナニモ別に僕が學理上から發明したと云ふ理窟でも無いが、稻妻工學博士が英國ワンチー氏の新發明に折衷を加へて考へ出した工夫で（と云ひつゝ鰐皮の靴包の中より繪圖を取出して菊川桐塚に見せて）此通り空中を走ると云ふ鐵道サ『ムヽ成ほどコリヤ妙だ、ハヽヽァ電信線の上を走つて居るか、……何さま電信線の上に別に強氣電線を架渡し其上を走らせると云ふ工夫だナ、是が甘く行けば面白いが、實際どうだらうテ、其研究が六かしからうぜ『ナンノ研究も胡瓜も入るものかテ、何も我々が電氣博士鐵道學士と云ぢやァ無し、幾ら研究しても識れる筈が無いに由て稻妻ぐらゐな漢で出來ると云たら出來るとして其先の考へを働かせて金儲さへすりやァ夫が第一の目的だらうぜ『御尤〳〵フゥ大主眼が判然として

居れば大に運動に張合あつて面白しョ……宜〻委細分つた、然らば金穴の方は桐塚君の持受で事業は月岡君の專任ソレカラ許可の一段は僕が擔當と分業法で遣つて利益は平等に三一三十の一三進の一進だせ『勿論の事サ、併し創業費や運動費それから事業費でも如才なく儲けねば成らぬが、目指す所は株の相場『ム、一株で十圓宛利が附ば百株で千圓五百株で五千圓『千株の一萬圓一萬株の十萬圓『三人が銘〻に十萬圓づヽ取て引込むのは瞬く中ョ、夫から先は尻喰へ觀音寺跡は野となれ山と成れ此方や搆やせんで肩抜するのが軍法の奥の手當世流行拜金宗の一大秘密『その事サ、いくら蒸滊喞筒が備へ附て有ても江戸は火事早いからチ、ぐつ〱仕ては居られねッ……』『然らば早〻發起人を極て請願書を出す手續に仕やうが何れ議會に廻るに違ひ無いから其請願書は甘く拵へ度ものだチ、誰に書せたもので有う、ナンボ菊川君の手で下拵へがスッカリ出來ても餘まり理屈に合はぬと彌次馬の議論の出るのが面倒だから……『好〻書面は僕の方で書せるに誂向の人物があるに由て其漢を稻妻の所へ向て遣て鐵道が電線の上を都合よく走る樣な工合に書せやう……『それで大體の話題は纏まつたに由て是からは銘〻必至の運動が肝心だせ、此暮の凌が附て年が越せるか女房子を置去にして出奔せねば成らぬか其瀨戸口の分れ目は是一ッにありだせ、併し菊川君夫に附ては何れ髯的等に酒も飲ませ藝者も抱かせて其上に旨い汁も吸はせにやァ成まいが裁判所に呼ばれて調べらるヽ樣な事が出來ちやァ困るせ『大丈夫サ、失敬ながら僕が綵を取る日にやァそんな間抜じみた事は仕ないョ『ソリャ君の伎倆なら例の鑛山や官林の傳で世間へ些

とも知れずに何時の間にやらチャンと運が美事に附だらうから安心は仕て居るけれど、近來は議會だの政黨だのと云ふものが無暗に口を利て煩さいから油斷は出來ないヨ『ムヽそこは千も合點百も承知だ鄭船に乘たと思つて安心して居たまへ『所が其鄭船でもどうかすると衝突したり暗礁に乘上て大怪我をする事があるからね『ハヽヽア採菊翁の小說ぢやァ無が『左な案じ玉ひそ僕が伎倆の程は此より後の手際を見て知りねかし』と云ふやつよ……『夫では相談が濟だら一寸一酌と仕らうか『云ふにや及ぶ、僕も實はそれを待兼て居たヨヽ召集の兵隊も大かたモウ來て居るだらう』と云つゝ手を打鳴して呼だりけり

○第五回　奇妙なる三猿主義

御料理ハ花月へ御注文、主客合せて三人前、僅かに椀燒刺身の三品とは蓋し當節柄とて政費節減の實行正しく此紳士社會にも波及したると覺えたり但し小井に容たる醮物と海鼠腸の二品ハ是れ當樓の魂膽較部の女將が特別なる達引より出たる獻品とは知れたれども細々勘定する時ハ冥々の間に於て自から玉酒肴の上にパラリと振蒔て夫に倍する程の臨時割增ハ掛つたり、客も去もの其邊ハ百も合點なれば食はぬが損だと云ふ風にて遠慮なく箸を下したる。招かれて參上の藝妓ハ當時新橋にて商法筋でハ二と下らぬみけ次なま助の兩人に小だるおきやんの二名を加へて都合四人ヘイ今日ハ有がたうと懸聲してズラリと其座に罷出たり。少し煩さくとも簡短に此四妓を招介いたさんが先づみけ次と云ば芳紀ハ漸く三十

二三、生際已に脱上りて齒の心正に顯はれたれども其割には更に垢脱したりとも見えず、矧や姿色も藝事も十人並より三四枚がた下つて何所に一ッ見所の無い凡物なるに、月岡が此春から既に十月餘も呼通して居る所を見れば、眦の低つたると眼の下の黒ずみたるのが他人の知らざる賞翫ゆゑなるべし。次に○○○なま助ハ名詮自稱の生利で未だ十六歳の抱ッ子の癖に乙に大姉を氣取、此間も鶴仙の會で咽が好とか語口が旨いとか或新聞の賛詞を見てから急に藝自慢となり左なきだに素よりの姿色自慢の所を高サが二分三厘弱で幅が二寸五分強に餘ると云ふ鼻を蠕めかして實に鼻持のならぬ大變者、これ即はち桐塚の寵愛と知られたり。次に小だるが十八で髮ハデコ〳〵島田に着物ハ萌黄地に茶と赤糸の入つたる木目絣の御召の上着に下着ハ中形おきやんが十七でシャ熊を入たる大天神髷に銀のヒラヒラの附たる前簪で藤色地に白と紅と入交りの井筒絣に下ハ午後五時半頃と見ゆる仕入の友禪。此兩人ハ今日のお客たる菊川への仕向ものとは桐塚が氣轉の差圖なり

不思議やな、平生ハ人より先きにシャ〳〵張出て齒が浮やうなるなま助が座敷に出ると乙に桐塚が話を外して側にも往かぬ怪しの素振、桐塚ハ酒が廻るに從つて愈〻益〻不平の色包めど面に顯はれたり。女將のおたぬハ斯と見て仔細如何と尋ぬれば。實ハ昨夜汗川で夜明に成たお客と云ふのは先月の末から御最負に成て居る猿子橋の閣下でシカモあの菊川樣がお側去らずの取卷ゆゑモシモ桐塚さんの事が彼人の口から閣下へ知れると暮の無心に春の約束忽に變替に成るのが恐ろしいとの白狀。女將へラ〳〵と打

笑つて『いくら利巧でも卿はまだ子供だネ、其お心配を藝妓が仕たのは二十年前の事だヨ、此節から夫位の事で氣を揉妓があるものかネ、安心おしよ私が附てるから大丈夫だよ』と女將は大受合で『モシ菊川様チョイ』と廊下に呼出して實は『是〳〵と吹込ば。案の如く菊川は『皆まで宣ふな、凡そ拙の境界では不見不聞不言の三猿主義を守つて居ねば此世界は游いで往かれぬ、ナンノ拙が餘計な事を饒舌のかよ、少しも御遠慮なしにジャレ附とも狂ふとも當人の伎倆一杯にするが宜しいと云てくれ玉へ』と答へて再び座敷に復らんとするを。女房は菊川が洋服の裾を捕へて『アレサまだ肝心な用がありますヨ』と呼止たり

○第六回　大天神に濃厚島田

女將は笑を含みながら『菊川さん、貴郎、二人の中でどッちにお極なさいますネ、れ氣に入た方を置て入ら無い方を返しますから』と云へば菊川は少し勿體を附て『何方だつて同ド樣な鈍栗だから餘り下さら無いネ、先づ御免を蒙ると致しやせう』と斷つたり『ソリヤア何れ鈍栗で貴郎のお氣には入ますまいが偶には鰯の天麩羅も喰て御覺なさいなネ『ナニそら程見くびつた代物でも無いが實は二圓でも三圓でも言はゞ無益だからネ『所が月岡さんと桐塚さんとお二人が是非とも貴公に御馳走を仕度から、モシ二人とも御意に入らずは差換て御覧に入て呉ろと內々私へのお賴でありますから……ナンナラおころ娘をモウ一遍貫にやつて見ませうか今日は遠出で小石川のお邸へ往たと云しますから未だ歸るまいとは思

ひますけれど『ナンノおころに限つた事ハ有やせん、彼奴今ごろハ雎屋の奥二階で大方怪異銀行頭取の鼻毛を引張て暮の算段でも附て居る時分だらうから貰に遣ても來やァ仕ないョ……ソコデ御馳走あるなら遠慮は不沙汰で一臠頂戴して見やうか『ソレが宜しう御座いますョ、夫で何方にお仕なさいます『サァ珍らしく若返ッて天神髷の小僧を喰て見るかチ、併し彼やァ女御屋で變心局長が此節眞猫浮れで乘て居せ『ソウですか驚きましたチ、あんな可愛顏をして彼薩摩芋の大物をチ、ホヽヽホ……夫ぢやァ島田の方にお仕なさいナ『所が彼島田の小だるハ一昨日の晩余も一座で爾も三十間堀の禿屋の内で氣取擬員の脊高が大熱だせ『何の搆ふ事ハ有ませんワ、脊高でも薩摩芋でも、他家ハ他家此屋ハ此屋で、所替れば客替るだから宜いでエせう『勿論サ、何の是が娼妓ぢやァ有まいし、指を突の一座廻しを取らぬだのと云ふ野暮な規則ハ藝妓社會には無いからチ……然らバ前議の通り天神髷の三娘小僧を退治ると極やうが、併し御馳走は慥たらうチ、罷り間違て此暮に及んで自腹ハ少〻激へるせ『お案示なさいますな、アンナ月岡さんだの桐塚さんだの云ふ冐險家にやァ夫位な事をさせても澤山でエすョ』…… 此女將どちらが腹心だか都て臨機應變の談判に難なくおきやんを一言の下に納得させ『ヨシ〱是で勘定の方でハ五圓とつて當人にハ二圓で追拂へば先づ是計でも三圓の臨時が貰かつたぞ、イヤ斯して見れば冐險家だつてもソウ惡くハ言へない勘定を取るのに骨ハ折れぬが普通のお客よりハ此連中の僞稱紳士の方が割ハ好かしらんと心中にて取らぬ先から割事を考へたるハ流石に鞍部の女將なり

座敷にては女將の吹込忽に其効顯はれて、なま助速かに元氣を恢復し桐塚が膝の側に摺寄て頻にシャレ附き紙莨を吸附て呑せたり喰掛の甘鯛をシャブッたりするので、桐塚の御機嫌は大直の大恐悅。みけ次は今日稀らしく月岡の洋服の衣袋に札のあるを見て俄に欲心を起し『どうでヱせう平日の通り一寸洒落に廿丁か卅丁で頭だけ二組やりませうか』と其上で責て五圓か十圓か分捕せんものをと望て勸めたれば同じ心の女將も賛成して『サア遣ませうョ、いつもの例を外すと火に祟りますからサ……』と勸めたり。月岡は菊川に對して此所一番事業家の着實風を見せ樣と云ふ心底なれば眼をパチ〳〵させて場合が惡いと差止めたれど情なや其甲斐なく早くも菊川に聞附けられ『面白い面白いサア戰はう、月岡君が否と云ふのは頗る可笑せ……マア座りたまへ……石の勘定は宜いか、ドレ親取を仕て見やう……ヤア女將が親だ、卷たり〳〵』と實行され『然らば御相手いたしませう』と初めしが、續ざまに菊川に勝を三度ぞ取れたり

○第七回　現金待手なし

月岡桐塚菊川の三傑が魂膽鞍部にて相談したる空中電氣鐵道を發明したる學者と云ふは是も頃日流行の僞稱紳士の仲間に顏出したる稻妻奇策と名乘たる曲もの『米國に五年獨逸に四年英國に三年の間留學して電氣の學問に於ては其奧儀を極めコレ此通り十五通の免狀證狀を所持いたし居る拙者だ外の事はイザ知らず電氣の事に於ては此廣い世界にて十六人と云ふ大學者の中に指を折らるゝ拙者なれば恐らく拙者

の發明に批難を容るゝ者は東洋は愚か西洋にも有るまい』と云ふ大螺を吹立てナンデモ電氣の作用を以て空中を自由自在に馳廻る事の出來る鐵道の工夫は即ち此通りと、學理の講釋から工事の繪圖設置の計算まで盡く明細に備はり箸を取て食ふ計のお膳立を仕てお客を待たるに、彼月岡がはじめに之を買込で桐塚に相談なし菊川に謀り愈々其筋に持出して一番大儲けを仕やうと云ふ迄に運びたれば是からは瓢簞から駒を出し唾壺から蛇を出す場合と成て今日は一場の交渉談判をば魂膽鞍部の樓上に開きたり稻妻は段々と談判の末に至りて……『宜しい宜しい諸君は僕が新發明の空中電氣鐵道を架設して利益を得るのが目的、僕は是で榮譽を得のが大目的だから敢て金錢の利欲は望で無い、成功の後に至て純益の中から報酬を取ても功勞株を貰つても諸君の御都合次第に任せると仕た所で、困た事は夫では差向き僕が維持に差支ゆるに依て取敢ず此書類に調印引替で何程か入金して下さらいでは成らぬ……何にも諸君の方でもさうで有うが僕の方は又別段だから特別の工夫をして貰はねば原來の約束に相違いたすデ……』と電氣鍍金の本體は忽に剝て榮譽はどうでも金が肝心と原の地金を顯はしたり

此前より五十本入一箱金十五錢と云ふ紙莨を續ぎ替〳〵烟管に指て烟を吹せたるハ梅津春風と名乘つたる當時賣出しの文學家。稻妻の談判が途切たるを見て、是からが我の順番だと云ふ風にてオホンと一ツ咳拂ひして「扨月岡桐塚の兩君、實は菊川先生から據ろなき御依賴に由て稻妻君の所へ足を運んで御說明を承はつたると前後七回の多きに至り即ち十六日間の光陰を費して認めたるが此書面で請願書趣

意書廣告案並びに各新聞社へ送致の原稿案とも都合四通、抑も文學者たるものが苟くも黄白の事を口外するのは太た野鄙で僕の深く嫌ふ所だから言たくは無いが、今日の境界は窮猿林に投ずるの場合で御座るに由て草稿料ハ即金で賜はり度子……否〻追てだの成功の上だのと云ふは俗士の言ふ所で學者の申さぬ口上ゆゑ夫は御免をかうもり傘と仕る……』と根強き懸合にて既に談判もアハヤ破裂に至らんとしたるが、トウトウ漸く調停が出來て稻妻と梅津は幾干づゝか現金を受取りて忽ちに一團の和氣となり笑ひ話しの後に程なく打連れて戸口に出て『ドウダ梅津君、甘く往たらうが子『イヤ尊君のお影で久振で阿堵物に有附たが、併しアノ新發明は愈〻實行が出來ますかナ『ナンノ彼奴等に出來るものか子、彼奴等だつて夫位の事は知て居るだらうが詰り品玉に遣はうと云ふ丈の事ヨ『成程ソウカナ、所で是から屎風屋に往て一酌し樣か『好らう、彼所に往たら顯微鏡連中も例の通り大かた來て居るだらうから一戰を試みやうかな

○第八回　捕虜の大功名

『ムッ恐入た、實に桐塚君の伎倆ハ我輩が遠く及ば無い所だ、此間梅津の文學乞食へハ一度にズラリと五十圓の草稿料を渡し稻妻の螺電氣士へハ前後三度で三百圓と云ふ大金を渡し、お負に菊川を遣つて政治家の松井眞鶴と法律家の櫻田丹作を虜にして金轡をはめ忽ち此方の爪牙に仕た手際ハ神變不思議、勿論金が物云ふ今日の世界で金さへあれば百事意の如しだが、其金の出途が更に知れなかつたに、アノ花

井和三郎を捕まへて居たとハ僕の鋭い目でも實に屆かなかつたせ『ムヽ是やァ道の月岡君でもお氣が附なかつたらうテ、ナント餘程純粹な椋鳥だらうがチ『純粹どころか、眞の手入らず大おぼこ、アレが百萬圓以上の身代を持て居る當主だから實に氣が惡るいヨ、併しどう云ふ手管でァノおぼこ椋鳥を口說落して手に入玉ふたか『ナンノ別に不思議ハ無しサ、君があらよござい〇〇〇〇〇〇の友禪を欺くらかして初物をせしめると同玄方略ョ『コレサ戲談いつちや往ないせ、僕がお酌の餓鬼を手に入れるにハ、ソレ相應に多少その代料を拂つて居るヨ、當節無代價の代物と云てハ東京十五區八郡廣しと雖ども東ハ兩國日本橋北ハ淺草吉原町西ハ牛込赤坂わたり南ハ新橋神明前その端端に至るまで唯の一人も有ハ仕ないせ『ソウ淺付て辯ト玉はずとも恐らく君の御面相で無代價とは誰も思ハ無いヨ、……ソコデ僕があの花井小僧を手に入たのハ實の所がかう云ふ手段で……』と實情を話したりければ。月岡ハハタと膝を打て『ムッ敬服極まつた御同樣に權官貴顯の止ごと無き連中の爲にハ自分で牙婆もするし會亭もするのが是ぞ流行紳士寵商の務と心得て居るけれど、現在同輩同席の紳士で然も若僧の爲に節を枉て牙婆や會亭をするとハ實に世人の遠く及ばざる所だ……何にも椋鳥に媚ると思へば腹も立が金に首を下て御來臨を願ふとさへ思へば何でも無いとハ紳士の極意恐入た……勿論〳〵當人の苗字が花井と云ふからハ花を覺えさせて其相手に成らねバ親密ハ深くあらぬヨ……何れ花の上でハ故と負て得意に成らせるが肝心要サ……『夫ぢやァ今夜僕が先に較部に獨で往て網を張て居るから君ハあの小僧を引張て來たまへ……『宜しい、萬事胸に

藏めて居るから君も如才なく調子を合せ玉へヨ『皆まで宣ふな、僕たつて少しハ腕に覺のある漢だから案じるには及バないヨ『夫でハカウダから……』と耳に口よせて打囁き『何でも是で此暮の凌ぎをバ』コレ』と制して互に口に手を當て顏見合せたるハ、テモ恐ろしき紳士なり

○第九回　後生恐るべし

此ハ例の魂膽鞍部の奥座敷、かの策略家の月岡武藏ハ膝を進めて女將に向ひ小聲になつて『扨から話題が込入て來たらモウ何も彼も打まけて卿に相談するが、卿だッて唯の鼠ぢやア無し、内幕を明されて男に賴まれた日にやア一肌脱で骨を折てくれるで有うが、尤も旨く往ば余だッて卿の骨ハ盜ま無から何でも成就させて貰はねば成らぬヨ、と云へば女將のおたねハ其要領を聞ぬ先から逸早くも『コイツ締た錢儲の話題』だと覺りて頻に笑顏を作り猫撫聲をして『ソリヤア外樣でも無し、年來御贔負に成て居まする貴君の御用で御坐りますもの何樣にも骨を折ますが、シテ其御用と仰しやりますのハ』と尋ねたり『サア其用と云ふのハ外でも無い、實ハ斯だ、此間ッから此家で桐塚や菊川と度々集會て相談の末が此度余等が設計で居る大金儲の算段を附るには其運動費を出す金主が入るのヨ、ソコデ其金主に仕やうと云ふのが一昨晩余が桐塚や松井と一座の時に誘引て來たアノ生白い面の漢ヨ……ソウ〳〵彼小紋織揃の上に黑の一樂の羽織を着て居た若僧がそれで、彼奴が花井和三郎と云ふ金持だアな、所で彼奴を旨く引摺込にハ兎も角も氣に入た奴を一疋抱かせて置て墮落をさせねば成らぬに由て、此間も桐塚と相談して花月

の二階で凡そ七八人も呼で其中には小おぢ鮭吉おたら鯽子など頗る評判の腕好が居て頻りに持掛た所が、彼奴何だか後退を仕て乘らぬ樣子ョ……夫からお慾に吹込で段〻と探らせて見ると鹿介の內の小しやまに氣が有つて彼をソウ仕たいと云ふ事さ『ムッ此二枚着からヤット一本に成た彼小さい妓をチ『ソウョ夫で彼妓ハ十四で根ッからあどけ無い樣だが其所ハどうだらう『ナンノ大好サ、尤も彼鹿介が中〻の慾張ですから懸合ッたらマダ月經も來れず破瓜も濟ませんからと云ひませうョ『月經はまだ來れまいが破瓜ハモウ濟だらうが『大濟の事でヱすョ、私が聞て知てるの計でも汗川で二人みさごやで三人ハ慥にありますもの『宜〻、詰る所が萬〻で是位も（ト指を五本出したるハ蓋し五圓と云ふ事なるべし）出したら大上等御前御の字だらうが、けれど初物の積で花井に喰はせて賞翫させると仕た所で、彼小妓の腕じやア工合よく操なす事が出來ぬのに困つたなア『ハヽヽヽア旦那、貴君も大そう燒が廻りましたねヱ、大矢絣に赤い帶でも彼奴の腕と來ちやア恐入つたものですぜ、惣別この節の友禪や矢絣にやア小紋縮緬が皆な閉口して居る中にも彼小しやまは又別段の大腕まへ、既に先月もある御客に連られて向島に往て其お客と遊戲て居る中に十錢ばかりのアルミの指輪をわざと池に落させて夫から此家へ歸つて來てから其お客をくるめてとう〳〵尾張町の天賞堂で眞珠の入つて居る高彫のゴール（金）の指輪を廿三圓で買て貰つた手際なんざア凄い樣でしたせ『ヘーヱそんな好腕かチ、實に後生恐るべしだなア、ジヤア旨く花井の椋鳥を蕩かす事ハ出來るだらうチ『お案トなさいますな、私が後を附て居さいすりやア御

注文通りに人形を廻して見せますヨ、ダガ旦那、玉祝儀は五圓すけの外でヱすヨ
斯様に月岡桐塚ハ花井と云へる若漢を面白可笑く持囃して藝妓を宛行ひ三圓まへ五圓まへの骨牌で少しづゝ勝を取らせなどして遊び戯れさせたれバ混膽鞍部の勘定ばかりでも御祝儀の立替を入れバ二百圓に近い〆高『コリヤどう成まする』と女將が尋ぬれバ『ナンノ飛騨の高山で二百萬圓の身代と云はるゝ花井の富限だもの、案じなさんな、そんな勘定は當人に出させずとも今に資本が廻つて來れバ余が皆拂つて遣ます』と兩人の大受合、扨かの空中電氣鐵道の一條の段〻に運びが附て、當局の方は菊川の周旋で書面さへ出れバ直に許可に成ると云ふ約束が粗〻纏まり、又擬院の方ハ松井眞鶴の盡力で其擬案ハスラリと通る事に秘密の打合せも出來掛つたれバ、宗徒の面々にハ月岡桐塚菊川松井それに稲妻を加へて都合五人の連印で愈〻花井が所持の公債證書十萬圓を借入れそれを運動費や創立費に廻して同盟者を募ると云ふ一段に進みたり。依て其契約や何かに附て法律家か居なくてハ將來の爲に不都合なりとあつて此日ハ右の五人の外に兼て僞稱紳士仲黨の櫻田丹作をも迎へて彼の花井が來るを俟受けたり

○第十回　電鍍の剝懸り

花井ハ當日こそ自分が懇意の工業家柳三十六と云へる學士を同道して來るべしとの約束なりけれバ即ら打合せの刻限に魂膽鞍部へ來りて右の五人に面會したり。然るに花井ハ櫻田を見るより思はずハッと驚きたる様子、また稲妻も柳に逢て『是ハ』と胸にぎツくり仕たる體なりしかども何れも心にシツカと収

めて互に色にも顯はさず時候の挨拶も濟で後に。柳はエヘンと咳拂ひなし汗巾にて口の周を拭ひ演説口調にて一座に向ひ『扨僕の敬愛すべき貴重なる朋友花井君は今度いよ〳〵空中電氣鐵道の爲に諸君の需に應じて先づ差向き十萬圓の資本を御用達申す事に凡そ豫約を仕たが、其鐵道がきッと電氣の作用で空中を自在に飛行するで有うか如何その鑑定を僕に仕て呉いその御依頼で即ち花井君と御同伴して此御席へ推參仕つたる次第で御坐る』と趣意を述べ畢りて夫より説明を聞たる上にて『ハヽア貴君が今では稻妻奇策氏と仰しやる御方ですか、然らば伺ひやさうが、先づ此繪圖面では電信柱の上に一條の大銅線を渡した計で御坐るが、是でどうして車が廻りますチ……成程貴説の如く此書面にも説明が仕て有ます、僕も一讀いたしました……何にも僕は電氣の事は專門で無いから暫く貴説に從つて電池も夫で充分なりとしても、是ぢや第一に車は廻りますまいが……否々其御辯明は素人ならいざ知らず、少しく物理を學び器械の道理を知つた者は承服が出來ないチ……縱令電氣で車は注文の如く廻つた所で其電氣は蒸滊の代用は仕ても其車の重量を輕くする用は出來ませんぜ……サアどうして是丈けの車の重量を一線の上に乘る事が出來ますか、夫を承まはらう……ハヽヽア是は怪しからぬ、電氣が如何なる作用を以て水素瓦斯の如く空氣より輕く成て車を釣るとが此機關で出來ますチ……此儘で夫が出來るなら此柳三十六が首を賭ても其道理を承まはらう』と疊掛けて質ねたり

○第十一回　頓だ所で負債の談判

電氣大先生の稲妻がいくら目の玉を白く黒くして辯ドたればとて爭でか柳三十六に敵し得べき、專門の電氣學が原來頗る怪しい上に器械學と來ては一向不通それに西洋留學滿十年面壁九年の修行と云たハ全く嘘で僅か三年前まではハ柳が何程かの講座料を取て一週間に二度ヅヽ出席したる私學校で其講釋を聽聞して居た漢だもの、忽ちにピシ／＼と論ド詰られて一言も無く閉口なし恰ら閻魔が黄柏を嘗たる如き顔色を仕たりけり。抑は月岡其他の人〻に向ひて『扨諸君が御發起の空中電氣鐵道は成ほど結構では有ませうが、其工事の上が只今もお聽の通り落意の出來ぬ廉〻計でありまするに由て左樣なる事業に巨萬の支出を致す事は何分野生に於てハ花井君に勸むる譯に參りません野生は絶對的の反對で假ひ御當人が出さうと申されても朋友上の信義と學問上の徳義を以て是を諫て止させる了見で有ます』と齒に衣着せて述たりければ、滿座白けて時ならぬ修禪の床の如き景況なり

櫻田ハもはや堪兼ねたりと見えて花井に向ひ『ヤア花井さん其後ハ如何でヱすな、時に空中電氣鐵道は工事上に議論があるなら有と仕た所て、モシ目的通りに行はるゝと相成たら君は十萬圓の公債を繰出すに違ありますまいネ』と念を押せば。花井ハ胸にぎツくり仕たれど人の見る前觀の場所と度胸を据て『ソリヤ慥と極つたら何時でも出します積りサ』『ハヽア左樣ですか。時に花井君それ位に御融通が附く譯なら先月中僕が依賴を受た負債の口へ其金を向けて君アノ債務を結了して貰ひたいネ、十萬圓の公債に比べて見れば僅に其半額に滿ざる負債でハ無いか、依賴者の方では示談で行屆かずは早く出訴して財産の

假差押を仕て呉いと僕に繁〻追つて來るけれど、赤螺氏が仲裁に入て君も亦泣様にして頼むに由て今日までは綱を寛めて置たが、融通の道が有と聞からは猶豫は仕つらぬ、と思ひ掛ない所で櫻田が法律家たる營業の皮肉究まる掛合談判『ヤア花井和三郎君と云ふのハ飛騨の高山の大〻盡で信州にも銀行が有て百萬圓以上の身代だと桐塚君が今の今まで吹聽したで無いか所が其大〻盡の大財産家が櫻田君に逢てあの談判を受け何だかグズ〳〵分疏を仕て居る所を見れば『十萬圓の公債を出さうと云つたは嘘で有たのか『サア僕は慥にあの漢の財産が有たのを知つて居るから引ぱり込だが『矢ぱり喰せ物の僞稱紳士であつたのかチ』と生馬の眼を拔かうと云ふ連中も狐に撮まれたる如き狀勢なり

○第十二回　化皮が顯はれて同ト味方

內情を聽て見ると夫も尤も、折〻この花井和三郎と云へるハ桐塚が云ふ通り飛騨の高山で先祖代〻の大金持百萬圓以上の身代で今でも夫に違ハ無いが、親の代で悲いかな開化文明の流行風に感冒して其身代に虫が附き、今の和三郎に成てからハ何が扨日本風の商內ハ埓口が無い商賣と名けらるゝものハアンナ物でハ有ませんと學校流の大生利生兵法が怪我の因で鑛山製造南洋貿易支那商賣とする事みな滯はりなく大失敗、コリヤ堪らぬと方向を變へ苦しさ紛れの東京出張、去かし古川に水絶ずの喩の如く今以て公債株券地所山林未だ當人の名前であるものが百萬圓內外なれども、何れも餘さず書入抵當、洗ふて見た日にハ差引殘り無一物シテ見れば僞稱紳士と云はんより寧ろ零落紳士と云ふ方が適當ならん、但し今日

の歴〻紳士も其内幕を明て見たら花井の類が多數なるべし

花井もモウ斯なつたら焼だと云ふ風で遠慮なく座蒲團の上に踞座をかいて『マア桐塚さん考へても御覧じろ眞鞆にある金なら誰がコンナ浮た事に出す奴が有ものかチ、君だッても好年をして夫位の目端ハ利さうなものさチ、此方も苦しい所から何ぞ旨い口ハと捜して居る所に君が持込で來た空中鐵道、かう成てハ御同様に見込違ひで草臥儲の骨折損サ、決して愚痴を云ふ可からずヨ、マア酒でも出して御馳走し玉へ、ショ〱すると大事な身體が病氣になるぜ』とウブと見せたる椋鳥ハ何ぞ量らん大擢枯しの狼もの『イヤ此奴ハ酷い辨天小僧だ飛でも無い者に引懸つた』と悔て及ばぬ此場の仕宜

松井ハ流石に危い橋を渡つて白刄の中の樣なる政治家世界を游いで居る人物だけあつて最前から默つて傍觀したりけがる横手を打て『イヤ妙だ〱今玆に花井君と柳君の兩氏を得て此事業が愈〻物に成て來たせ、禍を轉じて福とすると云ふのハ即ち此だ、それを花井君の樣に何も負債の尻を割られたと云てソウ俄に捨鉢に成ことも有まい、又花井君を買冠つたと云て桐塚君や月岡君の如く急腹に成るのも平生の智者に似合はぬ淺慮。ソコで僕が考へるにハ桐塚君でさへ花井君の內證を知らぬ位だから世間でハ恐らく未だ誰も知るまいに由て櫻田君も三猿流で啜にも出す可からずドコまでも高山の大資本家の花井で建て置て他の金方を引寄る大看板の最上囮に崇め奉つるさ、又柳君も理屈を言て打毀をせずにモソッと器械の工夫を附て、コリヤ妙だ大發明だと大太皷を打鳴らすサ、サアさう成た日にハ益〻世間が信用して

忽に本統の馬鹿資本家が顯れて來るワ。詰る所が車が廻るまいか線路が出らうが此方の儲けソンナ工事に掛らぬ中に取上て後は高見で見物傍聽、ナント諸君ソウでハ御坐らぬか』と云はれて見れば御尤と直に一味の相談が整つて『ソレぢやア祝盃〳〵、サアいつもの連中に口を掛てやれ……ム、さうか、モウ下に來て居たのか早く出て來れば宜のに……

○第十三回　不德義は即ち紳士の本性

サア斯う御互に素性が知れて來た日にやア虛飾は素より無駄な沙汰いづれも揃つた信田の狐化顯はして內幕咄し『咄が濟んだらドレ一杯『その一杯の合の手に一寸二組『至極結構『オイ女將、器械を貸てくれんか『鐵道の器械は有ませんが其方の器械なら何時でも（ト床脇の地袋の中から取出したるは一ツの茶箱、指蓋の裏が番子の乘所で箱の中には上方牌が黑茶の二色、棋石やら替環あと殘の印まで悉皆揃つて一ツも不足の品は無し。女將は緋羅紗に白金巾の裏を附て薄く綿を入たる方二尺五寸計りの蒲團を取出して廣げながら牌を改めて居たる桐塚に對ひて『モシ其牌が可なけりやア新らいしのを持て來ませうか『ム、成なら新札の方が宜ネ、併し女將、大そう器械がよく揃つてるネ『サア空中電氣鐵道の器械は尊公がたの方でも此方の器械ならいつても此通りそこは紳士がた御集會の定店魂膽鞍部で御座いますもの『ヨウ女將早い〳〵、夫ぢやア年中山氣博道會社と云ふのだ『寒中難儀政黨廢止とはどうだらう『惡故事附の無理地口だネ『ソンナ緊急痟氣……『コレサ頻さいヨ、サア牌は此通り割れた、諸君がズラリ

と帷帳面に座に着たまへ『ハヽア六人で卷切だナ『僕は月岡君の次は御免だ、松井君代てくれ玉へ『ナゼ『ナゼだつて月岡君は例の投機流でいつでも不見點〻〻で出掛るから次に座つちやァ閉口するもの『ぢやァ君は禍を他人に稼すると云ふのだチ、ハヽヽヽァ頗る不德義極まるせ、紳士たる者の本性には有得べからざる所業と云ねば成らぬ『オット紳士だから不德義をするのが本性で是を論理法で言へば『不德義ハ即チ紳士ノ本性デアル』と云ふ譯になるぜ、シテ見れば松井君の今の說は論理に合はぬに由て『…頗る不德義極まるせ夫では丸で紳士の所業と云はねば成らぬ』と改正すべしだ『ハヽヽ又櫻田君の論理法の御講釋が初まつたせ『デモ僕の論理法の講釋よりやァ菊川君の牌の上の憲法論の長いには恐れるよ『サァ無駄口を利かずとも桐塚君が三十六で親だグズ〱して居ては時間が後れるタイムイスモニーだ（時は金である）サァ蒔た〱

此車座に並んで花合戰の座に列なつたるは誰〻なりとか思召す。當時この東京で飛鳥も落すと云ふ流行の紳士で（たとひ其實は僞稱であらうが）先眞先に桐塚嘗太郎（商法家）次には月岡武藏（事業家）松井眞鶴（政治家）櫻田丹作（法律家）菊川壽（交際家）花井和三郎（財產家）の六人。黑羅紗の洋服や黑縮緬のお羽織で御前上等の紳士然とは見せ掛ても、イザ此上に成て見ると下郎の本性忽に顯はれて何れも大胡座『コウ其で定額は『例の通り5で宜からう『5の判任かチ、小額過るせ『イヤ小額の方が宜よ『ソウヨ5なら白本負ても50だから怪我が輕くッて濟むからチ『ソコデ番子には勝から一本ヅ

、上ると仕やうか『夫にも及ぶまいぜ』と異議が出掛つたれば。女將は忙て丶『イエ〱二本づ丶は上て戴きませんぢやァ困りますよ……、ナゼだつて貴君其中で一本づ丶は當然私の收獲で他の一本づ丶が諸君の方の賞與や御祝儀の塡補に成ますもの『イヤ此方に掛ちやァ中〻唯は通さ無な『ソリヤ諸君に年來仕込まれて居ますもの

○第十四回　冠が曲り出したは替環の故

月岡は時鐶を出して見て『ヤァもう十一時二十分だ、僕は用があるから是で御暇だ』と逃支度をするは續けて三ッ勝を取て囊中が暖たまつたるに依て里心が附たる故とこそ知られたれ。何條この脫走を許さんや松井は、月岡が手を押へて『是サ勝逃をしては益〻紳士の所業になるぜ、今ッから歸つても何の用が出來るものかチ、十二時まで今一組交際たまへ』と留るは是ぞ替環を二度續けだまに使つて二十本以上づ丶買はせられたる大手負『ム丶そうだ〱今一組引たら僕も一所に歸るからマァ座りたまへ、それ卷たり〱』と勸むる菊川は是も同ド手負連中の一人なり『それぢやァ泣ても笑つても一組ぎりだぜ、夫で僕は勝を續つても歸るぜ』御念にや及ぶべき、ヤァ最初鼻から雨桐は恐入た、僕の所は二十五だが十丹の大惡手、實に微運究まる（ト環木二ッと石一ッを投出して牌を捨て義太夫の鼻唄で）摩利支天にも見放されお牌冥利に盡たのか……『コレサ〱そんな氣味の惡い聲を出して呻つて吳たまふな、牌がおびえて些とも起きやァ仕ないヨ、それ見たまへ君のお蔭でお臂を仕たぢやァ無いか

兎角する中に月岡も花井も氣運忽ちに交つて勝利が敗北となり囊中の差引いくらかの不足と成たれば一組限でお暇の豫約は我方から變替して尻を落付け『女將、モウ十二時に成るが余やア少し腹が北山時雨だぜ『此方も大出來だ、何か喰はせて貰はにやア堪らんぜ『ナンニ仕ませうチ、花月も捨藏もモウ出來ますまいヨ』ナンノ其な料理よりも例の通り蕎麥が宜よ『ムヽ蕎麥なら余は天麩羅だ『余ア鴨南蠻が宜よ『大さう驕り込ぜ、宜ワ何でも見計つて言て遣ねェ『それから藝者連中の分は入て置ッし彼等が腹も減て居やうぜ『イヤ中〳〵お氣が附やすチ、歷が來て居ると菊川君はわれだ『ソウサ平生他人の藝者なら小高の祐天を極る癖に『櫻田さん小高の祐天とは何の事ですチエ『ハテサ女將にも似合は無いよ、何にも喰はせずに斷食堂で置からヨ『ハヽヽア夫でも此不動さまは藝者さへ見ると何時でも大きい長い劒を呑せたがるぜ『エヽ喧しいなア落て居る手合は少し靜に仕してくれ玉へ『オット叱られた、女將靜に仕やうぜ、桐塚が今二八の出で八環出して替環の印を戴いた所からお冠が曲てるから劍突が酷いぜ『ヤア面白い〳〵桐塚の禿頭が末で打合れに成て困てるぜ（ト場を覗いて見て）ハヽヽア彼奴赤で青の摑だな『成程胴二が空素で親が四光手と『フヽヽウ其で末が野の素と紅葉の眞を握んで居るんだナ『野は初で法度ぢやァ無いが、空素に野の素が無い所を見ちやア打た日には打當か嘗の一手だ『どうして〳〵胴二の起しなんざア特に成らぬが、併し打ッ手もあり打たね手もありだ『コウ〳〵大事な所だ見物は默て居てくれい『ヨシ〳〵默つて居るヨ此は他人の彌次馬が口出しの出來ない所だ『余ならア、するけれど『桐

塚にやァ其放れ業は打てまいヨ『ヤア末が紅葉に放れた、下手なものだな『アッ野が上で起だ『それ見た事か四這を喰つたらう、殘念だなァ『待てくれい是で末が十二本胴二が三本の出で親が十五本の取。サア大變だ、余から見りやァ向ふの石が多くなつて勝が怪しく成て來た、是だから頓間に引れちやァ外が迷惑をするヨ『ナニが頓間だイ『頓間だから頓間と云つたがどうした『ナニ此野郎め『ナニ此禿頭めと喧嘩に成らうとする機會に次の間では既にお先に喧嘩が初まつて女の泣聲

○第十五回　借せ借さぬから兩猫の闘爭

此方の次の間には、客が客なら藝者も藝者で、三毛次（月岡の敵妓）なま助（桐塚）小だる（松井）お跳（櫻田）おきやん（菊川）小しやま（花井）の六人。『コウ悄然として鼻を並べて居るのも乙夜ドみて面白く無いが此方も小さく引かうで無いか』と三毛次が發言すれば、何れも一座全會一致の大賛成、女將は『それぢやァ器械は出して上るが極りは幾らだへ、ナニ二かい、二ならば番子は二ッづゝ上て貰はうせ』と大でも小でも取る方に掛ては拔目の無い炙所の押樣。『サアお出』と銘〻がパチ〳〵と屋根屋の手間取蚊の呪。最初の中は少しは行儀も好かつたが、横座りが頽れて立膝に成て終にはあらう事か六人が六人ながら申合せし樣に二枚着の裾をグルリと捲つて怪げなる長繻袢の大胡坐。出たの、逃たの、追込だのと大亂軍、色氣も戀氣も醒る計り。二組が三組四組と成て二三人の大手負が出來た其中で……『そんなに院號を云はずとも此次に勘定するから一寸前だけ見て置ておくれよ』『フウ足にするのかェ』『ナ

ニ足にするのぢやァ無いが二番續の替環で餘り緣起が惡イからサ『夫ぢや矢張貸にするんだチ、私だつて漸と初て取た勝だから有あら出してお呉よ『マア此次までお待ヨ、本統に卿は吝たヨ、『ハア吝さ、ダガ取ものを取らうと云ふのが吝なら、有て出さ無いと云ふのは猶吝の吝の大吝だらうせ『ナニ大吝だと卿いつたチ『ア丶云つた、言たがどうした、此客藝者め『ナニ此客素脾め、斯見えても僅か二圓や三圓の事で人に義理を欠やうな藝者ぢやァ無いヨ、人を見損なつちやァ往ないヨ『大さうな事を云なさんな、明治座見物の割前を出すにせエグヅ〱云て二度も三度も箱屋に足を運ばせた癖に『大にお世話だ、卿見た樣に往來賃の催促に自分で出掛て往きやァ仕ないヨ『イツ我が其な催促に往たイ『往なくツてサ、此間も濱の屋の歸りに田舍繪を佐瀨屋の內に引張込で其翌朝取に往たぢやァ無いか、我しやアチヤンと奥で見て居たせ『ツレぢやァ奥には圓助の御祝儀で諾と云ふ調法な藝者が來て居ると云たのは卿だつたチ、エ丶此圓助め『戲謔た事をお言で無いヨ、圓助で諾と云はうが祝的で承知を仕樣が卿の寶貝を借は仕ないせ、生利な口を叩きやがるな』と言さまに拳を揚て島田の上をポカリと撲れば、此方も名うてのおきやん『ナニ我の髷を打やがつたナ、此擂粉木阿魔めが』と烟管を取てお跳が横面をハツシと打てば、サア兩虎相爭ひ兩猫相挑むの狀勢、一拳已に下る他の一拳も亦何ぞ働かざるべき、口も八丁手も八丁兩人で四八三十二町の喧嘩『アレサお止よ『摑み合ちや往ないヨ『ナニ止ずに置ておくれ『ドウデ斯なつちやァ思ふさま此畜生をこらしめて遣らにやァ腹が癒ないから』と大力無雙の小跳は龍卷の長繻絆の胴

を現はしておきやんの上に馬乘に跨がつて押へ付ければ、おきやんは組敷かれながら兩足を揚げ綿フラチルの腰卷の捲れて見ゆるを物ともせず跳返さんと爭ふたり。壯士芝居の滑稽立廻りならばいざ知らず、是が色を賣る藝者が花牌の上の爭とは東京始まつての初物なるべし

〇第十六回　法度で仲裁の貰

猫の嚙合藝者の喧嘩に興も色氣も倶に醒めたが其お蔭で今や將に起らんとしたる紳士の花喧嘩は次の間の猫連に先鞭を著られ其取支への爲に何れへか消て畢ひ『コレサ卿方もどうした者だね、女がてら腕づくなぞとは見とも無せ……』と自分たちとの事は棚の上に揚て撫鎭の小言。漸くに猫の爭ひも鎭火に及んだ所で其喧嘩の當人たる小跳おきやんよりも當座所有主たる櫻田菊川の兩人が却て何やら濟まぬ顏付。ヒヨット此喧嘩の仲裁に團扇の揚樣でも惡からうものなら忽に菊川櫻田の兩人の間に飛火がして各〻敵妓の爲に復仇の决鬪にでも及びさうな形勢。ソレと女將は見て取て月岡に囁けば、合點おやと月岡は一座に向つて兎も角も小跳令孃おきやん令夫人の爭を我〻が壓制の差止で此儘に仕て置ては何だか互に奥齒に物が挾まつた樣で宜く無い、ソコデ櫻田君はおきやんを慰め菊川君は小跳を說得して怨を解く樣に御盡力を願ひ度……否〻サウ入違つた方が和解その功ありよ、それで銘〻が承諾の上では不肖ながら僕が仲裁人に成つて和睦の式を行なひませう。其儀果して直ちに効を奏したれば桐塚松井花井の三人は立會人に成つて向ふに坐り、東の方からは菊川が小跳を連て出來り西の方からは櫻田がおきやんを連て出來

り雙方互にヅッと睨で默禮なし中央に疊一疊を隔て同時に着座すれば、月岡は正面の所にて雙方の間に坐りて立會人と向ひ合せに成る。此時女將は盃臺に盃を乘せたるを二組持出せば（但しお盆の上に猪口を置たるにて代用）生助小だるの兩人が銘々に銚子を持て對座に控へ其後にみけ次小しやまの兩人が加の役（但し此銚子加へも倶に勿論獨德利を代用したり）座定まつて月岡は少し前に進みヱヘンと咳拂して演說口調にて『諸紳士諸令孃よ、過刻是なる兩令孃の爭は固より一時の出來事で根も葉も無いに依て彼是無しに此月岡が貰つて仕舞まひす、ナゼト云て御覽ドろ一方が靑に一方が赤と云ふ譯で何方に勝を取らせても負を取らせても相成ませんに由て行司の團扇は即ち法度に成てある、法度は打てぬに依て尾の貰と云ふが憲法の定まり、此月岡が此に坐て其尾だから雙方より貰ひますのは當然でありませう（拍手）尤も一件なら貰ひまするとホだけ儲かりますが是は貰つたと云ふ丈で何も儲には成ませんが眞逆番子に聞せる譯にも往ませんに由て儲からいでも追込まれた時に役牌が一枚も無かつたと思つて見れば敢て殘念でも有ません（ヒヤ〳〵）扨御雙方が個樣に葛藤を僕に下すつて何事も水に流して見ますると僕は今の喧嘩は實に双方が平日仲の好い證據と存じて悅びます、其仔細と申すは現に我々を見玉へ、此博遊の上で時々議論を起して遂には腕力に訴へる事も敢て稀しからずで有ます、既に唯今も將に起らんと致しました（ヒヤ〳〵）然れども仲裁があつて止たまへと一言いへば直に止で再び戰爭の中直で中直の戰爭と相成ませう、是れ畢竟相互に隔意が無い故であります、令孃方とても同樣でありませう。就て

は御雙方この御盃を招上つて御取交に成て仲直が濟ましたら仲直に戰爭が宜しう御坐りませう、尤も唯今一時を打ましたれば或ハ御雙方の介添人が御入替りて御休息に相成りましても差支ハ有ません（ヒヤ〳〵）さう成ますれば僕を初め立會人も御相伴を仕るの榮譽を擔ひます（拍手）

○第十七回　御客が紳士に成て客の苦情

話題一轉て、此は何とか新道の三等煉化、入口は二枚立の世話格子で軒先には神佛混淆の紋散の看板提灯をぶら下げ喧しや大しか小しやまちやん子と並べて書たる藝者屋、此大しかと云へるは廿年前銀座の火事で燒跡に此煉化が出來た時に卅歳何ヶ月で小鹿と名乘て現はれ出で明治十三年に再勤してお鹿と改ため同じき廿三年三度目の再勤で今の名の大鹿と成て出たるあれば今年正しく五十有餘の老婆、新聞は踈か一寸湯卷の續を當るにも眼鏡が無くては縫目が分らず、歯は義歯で金とで十三圓掛つたと愚痴を飜せども新漬の大根は鈴虫にせねば食ふ事は出來ず、腰の痛むは敢て僂麻窒のせいにあらず、尻の冷るは迚もフラチル位では暖まらず、並の人間ならば月經も遠に上つて今頃は念佛三昧の佛いぢりでもすべき筈なれど、此大鹿中〳〵の大色氣で若い藝者に負けぬ派手造り、己が息子ぐらゐの若い純役を引摺込で時〳〵賞翫すると云ふ大水性、その癖飽までも慾深く現に小しやまの如き僅かの金で養女に貰ひ十三でお酌十四で水揚十五で一本今年十六の大かせぎ夫でも大鹿はまだ不滿足な面をしてもそつと稼いで持て來さうなものだと時〳〵嫌な苦情たら〳〵、ちやん子は今年十四で小粒ゆゑ迚も來年一本には六ヶしく其上三

味線に掛ては調子が些とも合はず唄は勿論胴間聲なれば流石に當人も未だ藝者には成ないと知つて居るが、其代り一方の藝は藝者も跣娼妓も恐入る程の雄物、ナンノ唐人髷に肩揚の幽禪でも玉が半分と云ふ丈で御祝儀でも一件のお金でも外の藝者衆より多と持て歸るから姉さんだつて言分ハあるまいよと云ふ高慢が低い鼻にぶら下つたり

小しやまハ今しも錢湯から歸つて來て鏡臺の前に座り眉刷で頻りに面を叩き(襟ハ湯屋で外のお酌の白粉を貰つて附て來たるなり)地體黑出の所を一面の白ペンキに塗立最中。大鹿は目鏡を掛て帳面を附掛て『オイ玄やま娘昨夜の玉はどうなつたヨと問へば。短小鼻の先を叩きながら『アノ子佐瀬屋が三本、それから屛風屋に廻つて二本で、後が魂膽亭で夜明だつたよ『そりやア知てるが、魂膽亭にやア何時に廻ッて往たい『そうさネ、十一時だつたらうヨ『ム、それぢやア十本附ても宜ヨ『宜とも〳〵、昨夜なんざわア大層骨を折らせやがつて夜ッぴて彼方むけだの此方向けだのと云て些とも人を寐かさ無くッて、夫で當然の御祝儀だもの、玉でも思ふさま多と附なくッちやア割に合無いヨ『ホンニさうだヨ、此節のお客は嫌に風が惡く成て客で狩猾で仕方がありやア仕ないヨ、是を思ふと私が若い時分のお客は皆坐で大樣で强氣なもんだッたぜ、一寸しても歴に成た日にやア大札の一枚や二枚には成つたものだが、其お客が紳士と名前替してからと云ふものは丸で了簡までが替つて仕舞つたから遣瀨が無いね、シテ見ると紳士と書て客と讀むのか知らん。時にしやま娘、卿あの花井さんの方の咄しはどうなつたよ『マア

怪しい樣だネ『デモ卿魂膽亭のおたぬさんが受合て居るぢやァ無か『いくら受合て居ても相手が此節の紳士だもの當になるものかね、此方の手に握らない中は危ないワ『さうさねェ、花井さんの口が外れると卿困らうぜ』ナニ、外れても宜やうな工夫を仕て置たヨ……と咄し懸る所に、外から小しやまさんお座敷です『オヤおなき屋さんですか、有がたう、只今具さま、宜しく

○第十八回　内情を見せぬが心性

光陰ハ矢の如しヤット盆が濟だかと思ふ中にモウ暮が押詰つて、當年もハヤ數へ日に相成まして御忙敷御坐りませうと御互ひに挨拶する樣に成て來た。矧て況んや來月ハ屹度方法を附ませうから暫くの間と云て延したる口やら、三月と云ふ條その實は滿二月で直に如何で御坐る〳〵と責て來る當座の口やらが四方八方よりの催促督責。元の代言人今の辯護士の手に渡つたるもあり、仕拂命令を懐にして返答次第でハ直に執達吏を賴まむと云ふ容易ならざる大敵の來襲に。花井ハ防戰の方略も百計正に盡て、此上ハ阿愛の岳を突て出て鹿兒島目指て引返さうか、但しハ此處で資産限の討死を花〻しく仕樣かと投首しての相談に。櫻田ハ打笑つて『君にも似合はぬぢや無いか、是位の困難ハ當節世上の綺羅を飾る所の紳士にハ正に有べきの狀況でげす、これ所でハ無い今二倍も三倍も是に上越す難狀に陷つて防戰に晝夜を分たずと云ふ連中ハ許多社會にありさま、君見たまへ、堂〻たる政府だッて議院の査定案通にハ遣繰が附ぬと云て思案に餘ッて居るし又た議院だッて十日間の停會を食て的切目算が違つて壓氣に取られて居

るぢや無いか、夫だもの君、紳士の困難ハ經濟激變の今日にハ、當然で何の不思議も稀らしい事ハ有ません、……勿論〳〵其心當が有る位なら何も議論も糸瓜も無いサ、畢竟心當が無いに由て君も途方に暮て居るのだらう、併し能く考へて見たまへ、借たものを約束通り返す樣な阿呆ハ他府縣ならイザ知らず此東京の紳士には憚りながら有ませんぜ……宜しい〳〵君とハ例の依頼一件で敵味方の思ひを成たが、今でハ空電計畫で同舟一味の仲間だもの、僕が引受た……安心し玉へ見事に打拂て見せる……、ナンだ家資分散だと……馬鹿を云ひ玉ふな、ソンナ氣の利ない債主も頃日ハ無いヨ、僕が道理と事情とを說て旨く遣て見せるヨ……ヨシヨシ家に居ない方が宜い、例の通り魂膽鞍部に往て歷でも（ト鼻の端を指して）遣て居たまへ、僕も來襲の敵を退けたら直に往から……』と云ひたれば。花井ハ夫でハ何卒、何分、然るべく、幾重にも、只管、と云ふ依托の詞盡して賴み置て逃るが如くに家を出たり

斯樣に內情切迫したれども表面ハ紳士大分限、御召縮緬の三枚襲、黑縮緬の綿入羽織、其上にハ八丈の書生、また其上に蘇格蘭衣と云ふ隆とした體裁で手車のガラ〳〵〳〵。魂膽鞍部のおたぬも乘掛つた舟、コレが盜賊に追錢に成るか、ズラリと勘定が取れるか、二ッに一ッの兼合、即ち和戰勝敗の由て分る丶境で大事の場合、尤も取れた所が此方から取て彼方に遣る取次をする丈のこと、ナニ取れなけりやア還らぬ分だ、どうで此暮ハ當身を喰はせる覺悟だから……と心算を定めたる女中の豪傑大英雄なれば調子よく花井を例の奥座敷に通したり

花井ハ向ふから云れぬ先に此方からと『時に女將此の勘定も餘程溜ッたらうチ、此頃に拂をするからネ
ッカり調て直と分る樣に仕て置てくんな』とハ成程感心な言譯の仕樣『ハイ宜う御坐います、チヤンと
出來てをりますよ』と答へたるも天晴の出來、是實に奇正を鬪はせ虛實を爭ふの所なり

○第十九回　噂をすれば影の御影向

『旦那貴君がお出に成たら是非知らせて吳ろと今朝も彼娘が態〻箱屋を越しましたから直に知らせて遣りませうとは是れ女將が小しやまに賴まれたる無心の用向。花井は胸にぎッくりしたるが、其所は紳士、顏にも出さず『小しやまも度〻は下さらねエヨ、實はモウ彼奴も彼是だぜ、とは是も其實逢た日には旦那如何と催促さるゝが恐ろしい故とは知られたり。程もなく下婢はバタ〳〵と座敷に來りて『女將さんの小しやまさんは唯た今わなぎ屋へ出た計りだと云ひますから電話へ彼娘を呼出して聞たら直に御挨拶に往ますから是非旦那を待せて置て頂戴なと掛てよこしましたヨとの報告『アッ座敷に出て丁度好かつたと思つたに御挨拶に御入來とは恐入るチ、是だから浮かり藝者にやアお世辭も言へないヨ、一昨日も此通り（と紙入より女の手紙を出して女將に見せ）芳町のが言て越して其煩さゝが大變サ、世間おやア花井などは盆が來ても暮が來ても借金乞に責らるゝ心配が無て氣樂だと一概に言ふけれども、女の來てくれ〳〵は借金乞より餘程難儀だぜ、幾ら金が有うが樂だらうが人間商賣を仕て居る中は世間の義理で暮に成りやア夫れ相應に用もあるわサ、其を知らずに彼方からも此方からも矢の催促、コレが金錢で濟む

なら都合が宜が此面を持て往て見せなけりやァ承知し無いのだから始末が悪いョ、小しやまだつてさうだチ、よく胸へ手を措て自が面を鏡に移して相談して見るが宜サ、彼顔色で此花井の色に成て外に浮氣をさせまいと云ふにやァ少し都合が悪くつて食過るワ、刷序に呼で貰うのが藝者冥利と思つてるが當然だチ、と聞もせぬのに己獨りの自分極で大色男の積りで法螺を吹立れば。女將は腹の中で可笑のを堪へ此奴一ッ愚弄てやらんと思ひ『大きにさうで御坐いますョ、旦那見た樣のお方に呼で貰ひやァ藝者の仕合ですョ……時に旦那一昨晩はどこに入らッしやいましたチ、周旋亭から女の聲で何だか度〻電話で貴君は御出で無いかと聞に來ましたよと痕跡も無い事を言へば。花井はさうとは知らずオホンと咳拂ひして『ハヽァ左うだッたらう柳橋のが出掛て來て待て居たから、ナニ實は一昨日の晩は湖月で銀行連中の集會があつたに由て據なく一寸顔出を仕た所が、例の名古屋が居て是非とも歸りにやァ穴屋に連て往て呉いと袖に縋つてヤイノ〳〵を極たけれど、不便ながら今晩はどうぞ御免をと振切て僅か三十分計りでドロンに成て。夫から製糸會社の連中がおもへ屋に待て居たから大に延引と廻て見た所ろが酒席大亂の眞最中でお酌のかつぽれお客の甚九と云ふ大陽氣サ、アッ斯いふ中に列なるのも因果と思つても仕方が無いから其座に居ると、今春の背高が居て、オヤ花井さん貴君あれッきりで餘りですよと人目も憚らず大恨のたら〳〵で胸づくしと出掛さうな勢ひサ、漸と胡魔化して手水場に往と、あの小しやまの餓鬼が待伏をして居やがつて、貴君隣座敷で聞て居たらお竿さんにアンナ事を言はれて默て居てお負に廓下

でお世詞を言て機嫌を取ッたのはどうしたですか浮氣も大體に仕て　お置なさいヨ妾の心も知らないでサ、と泣聲出して大腹立ち……と圖に乘て饒舌て居る所に。唐紙をガラリと明て『オヤいつ妾が泣聲を出しましたチ嘘ッ鉢も大概に言てお置なさいナ、と怒鳴立て其所に座つたるは小しやまにてありけり

○第廿回　一言も無い盆骨進上

年こそ僅か十六であれ貌こそ未だ小粒であれ衣服こそ矢絣緋博多であれ、何處やらと腹の中とハ平生から老妓たちも舌を捲て恐れて居る小しやまなれば、今かの花井が痕跡も無い色男を云たるを立聞して何條承知すべき、花井を捕まへて散〻に言捲り『……螺も大概にして貰ひませうヨ、人聞が惡う御坐います事よ、貴君が錢づくで何人でも此土地で藝者衆を自由に仕樣が私が何と思ひますものか、夫に脊高のお竿さんが貴君に恨を云つて居たのを私が怒つたと、戲談いつちやア往ませんヨ、私しやア怒つた事も無りやア貴君も亦初つからお竿さんを知りも仕ない癖に、……大に憚りですよ、夫よりやア貴君私に約束した事もどうしてお呉なさいます今日ハモウ極月の廿四日です、サア呉るものハ立派に下さいましな……、貴君だつて何とか紳士と新聞に書かれる程のお客じや有ませんか……、と色氣なしにせがし附ば。花井ハ螺が露顯で赤面の上に嚢中甚だ拂底の所なれば是ハ非常手段を用ゐざれば迚も切拔が六かしいと覺つて大に立腹の體を成して『コレ小しやま、大概に誤詑を吐て居ろ、取るに足らぬ藝者子供と思つて人が笑つて居れハ宜氣に成やがつて其言草ハ何だ、餘り戲謔るない、と怒鳴り附る。小しやまハ花

井が顔を見て吹出して『ハヽヽヽア大怖い、モシ旦那、花井の紳士さん、ソンナ懼ない顔をしても驚く樣な私じやァ有ませんヨ、散〻ッぱら人を弄物に仕て置て此暮に成て十か十五ぐらゐの零額を呉るのハ當然さ、此方から言出なくッても夫位ハ田舍紳士だつて默つて先から出ますせ、其に何だの彼だの滑つたの倒んだのと文句を附て今日が日まで引張て未だ出さないのハ吝にも程があるヨ、憚ながら新橋の小しやまでヱすヨ、赤坂と一ッにされちやア困りますチ、色氣が覺めるか知らないが、貴君見た樣な唐變木にやア金でも貰はなくて誰が片時だつて自由に成て居るものかね、……サア無りやア無いから了見して呉ろと有體にお言なさいナ、私だつて否な男でも其處ハ一ッ寐をした好だもの無いものを無理に出せと院號ハ言ひますまい、貴君に呉たと思つて思ひ切て上ませうが、其な橫柄面の高飛車じやア承知ハ出來ませんヨ、馬鹿〻〻しいでれ助のお丹珍だよ』、と口に任せて罵しつたり。花井も負ずに二言三言いへば、小しやまハ四言五言六言の返答打に、モウ堪り兼て最初の僞腹立が本腹立に成て立上り『此阿魔』と云ひさまに小しやまが橫面を一ッ打擲たが始まりで大立廻りに成る

表の方より護謨履の音をキウ〳〵とさせて『小しやまさん此に居りますか、私し直に大さん用あります』と大きな青い眼を釣し上て、下婢が止るを附退て『私しアノ聲よく存知ます』と言ひながら奥坐敷に押上つたるハ『ミストル、テケレッ』と云へる新橋大通の西洋人、かくと見るより赫と怒り花井が襟頸を取て宙に釣して堂と投付け『盆骨澤山進上』のポカ〳〵擲りで、小しやまが腕を取て『貴娘、私し知て

居ります』と恨の嫉妬。小しやまは其手に縋つて『此御客が言ふ事を聞と無理を云て女將さんが止て呉ても承知しないで腹を立て私を酷い目に逢はせまして……』とオイ〳〵と泣て口説き『貴君がよい所に來て下さいまして嬉しう御坐いました事よ』と口から出任せに辯ずれば『テケレツ』忽ちに機嫌も直つて『貴娘怪我ありませんか、私一所におなき屋歸る宜しい』と衣嚢より五圓札一枚出して『女將さんこれ貴婦進上』と祝儀を出し、小しやまが手を引て出たるは恩威二ッながら行つたる大俠客。花井は壓氣に取られて痛い所をさすりながら『是だから外國人の跋扈には辟易する、條約厲行も非雜居說も成ほど尤もの樣だ……

〇第廿一回　籠絡に好い都合の權的

一種不思議の妙藥は誰が發明の藥やら其利目は實に驚くべきもの。ナンノ空中電氣鐵道、ソンナ物が實際に行へるものか、電氣を利用して地上を驅る鐵道でさへヤット此節歐米でも實施する事に成て日本でも其相談が出來掛りさうに成つた位だもの、矧て空電などゝ云ふは西洋理學者の空論、ソレを直に行れうと云ふは輕薄極まる冒險の沙汰……と上でも下でも批評して幾ど齒牙に懸けざる程であつたが。扨かの妙藥が段〻と利て來るに從つて、イヤ〳〵空電だッてサウ一概に行ふ可からずと擯斥するもので無い頗る精密なる機械の道理から出で居る樣だ、是が日本に行はるれば實に國家の大裨益に成るは必定だ、先づ篤と理由の存する所を聽て見るが宜い、成程是は許可に成ても宜しからう、と歩を進めて來たは靈

妙不可思議、滋強丸の功能と雖ども恐らく是には取ばざるべし。宜なり此藥は啻に惚藥に利ばかりでは無く世が開化文明に成るに連て益々萬病に宜しと云ふ功能を顯はし是を名づけて日々に新にして又日に新なる黄金湯とや申すべき

月岡桐塚松井櫻田花井菊川の六紳士その遊軍には梅津稻妻柳の三學士、その外宗徒の面々は此空電の計畫に掛てより、表面には有餘る樣に見せたる運動費も其實は聯成機關低壓組織よりも猶面倒なる工夫にて槍栗したる運轉なりければ、月を重ね日を送るに隨つて運轉は正に停まらんとし機關は方に敗れんとし、殊に歳の暮は追々に切迫するし、アワヤ暗礁に衝突するか洪濤の中に沈沒するか、望み少なき運命に陷り、此上は各々身の覺悟を極たる九死一生の塲合。然るに右の藥の利目が顯はれて容體を見直したれば、其風聞忽ち世上に傳播つたり。何が扨て昨日までは泰斗と仰いでも自己の都合に惡ければ長老の座から取て退け一昨日までは風下にも置け無いと憎んで居ても自分の勝手では俄に親分に崇め奉るが世の習ぢやもの、況てや是は金との相談儲口の問題、イヤ僕も加入いたさう余も一口乘らうと隼眼の態鷹連中、コレ紳士の餌食なりと各々申込を成したれば、空中電氣鐵道合資會社創立所は此間までの寂寥に引替て昨今は大繁昌、晝間は黒塗の手車二頭立の馬車で諸人の往復劇しく夜に入れば發起人弁に幹事委員相談役理事たちの集會設計の相談で魂膽較部は御座敷貸切の況狀、女將のおたぬが內々氣を揉だる三ヶ月以來の御勘定も廿五日前にズラリと皆濟に成て無心の小遣着替の注文云ふが如くに賜はつたれば

猫の眼瞳グルリと變り下にも置ぬ大追從、實に人間の榮華とは此事なるかと思はれたり
今日も例の集會、……『時に一件ハ萬〻宜しい、モウ赤い印の据つた書付が表面下ッて來る計りサ『先〻恐悦千萬、併し是迄にするにやァ御同前に骨が折たせ『骨どころか壽命が五年も十年も縮まつた位よ『若し是が行なかつた曉ハ僕ハ空電でハ無くッて逐電の覺悟だつたせ『ソリヤ君ばかりドやァ無い御同様サ『時に一ッ肝腎な緊急動議があると云ふのハ、例の皮肉曲長殿ネ、諸君も知ての通り彼奴皮肉の尊稱を取たる丈あッて頗る皮肉で其上に此節の官紀振肅の風に恐れて俄に君子を行かして手ごッちに終ないのサ、勿論脹管閣下が英斷で許可すべしと嚴命を下したので曲長一言の異議ないがネ、ソレ事を圓滑に行ふ政略ハ此だて、高飛車で壓制すると其反動ハ犬糞復仇と現ハるゝが時と古今を論せず國の東西を問はず一定不動の結果と云ふもの『オイ菊川君大そう前提が六かしくッて長いネ、議場の演説ドや無いから不動でも帝釋でもどうか簡短に願い度ヨ『心得た、ソコデ右の帝釋を……オット違つた、右の曲長を籠絡手段ハ斯だ、彼奴が佐久間町に圍つて居る權的と云ふのハ御同様の調法になつた烏森の小黑で此春落籍だのヨ、所で彼奴だッて彼曲長の齒糞ばッかり頂戴ハ徹へると見えて此節內〻鹿若と云ふ嫌な純役を食て居ると慥な探偵、此手から切込で彼黑的を味方に附け夫から持込せるに限ると思ふが、どうだらうネ、尤も妙だ……ム、幸ひ〳〵彼小黑の實の妹が即ち憎まれ雛妓の泣子だ、あの餓鬼をお先に遣ッて甘く狂言を書と仕やう

○第廿二回　處世の手段ハ日進の新發明

足附の折の底を深くして干菓子の下に小判を並へて賂に遣つたと云ふはグッと昔の古い話。此開化文明の世の中で交際の德義を尙び社會の制裁を重んずると云ふ金看板を懸たる方〻に對つてソンナ事でも仕樣ものなら直に劍突で附返され散〻耻を搔された上で新聞の探訪に其廉直方正を賣られて吹聽に遇ひ忽ちに二號活字の標題圈點附の雜報に書立らるゝが結果なれバ、今以て電信柱の立ざる邊鄙ハいざ知らず、鐵道が架ッたり郵船が通ふ所にハさる間拔な事ハ曾て無し況や都會の名市に於てをや

千八百七十五年米國の伯林府にて出版に相成つたる獨逸の社會學大博士ウィクトルユーゴーの著ハされたる流行紳士處世新法と標題したる新著述に『凡そ紳士と成て巧に世渡なさんと欲するものハ五分の議論と五分の諂詞を以て權家に取入べし。權家に對してハ碁の相手となり或ハ拙い詩の和韻を爲すべし、但し彼より上手たると勿れ。藝者の周旋權妻の世話ハ進んで其任に當り十分に盡力すべし。冠婚葬祭の時にハ眞先に働きて骨折を示すべし。饗應せんと欲する時ハ先づ彼が馳走を受て後に返禮の名義に托すべし。賄賂を爲さんと欲せば先づ彼に請て些少の品物を貰ひ其返禮として莫大の品を贈るべし。高價の地面又ハ高價の株劵等を割合の好い拂ひ物と云ふが如き名義にて廉く彼に賣るべし其差金の利益ハ默しても彼ハ好くこれを知るものなり。金を贈る時には彼に貸たる積にして其證文を正しく取置べし（密に返り證文を出し置けよ）是れ彼をして萬一の嫌疑を避しむる爲なり』と見えたり。此新發明ハ二十年前よ

り十年乃至八九年前まではハ盛んに行はれしが、日進の世の中いまハ既に陳腐に屬して頤褌と成れり伊太利國シカゴ府の處世哲學大博士ギユーテ先生の新說に曰く『寵商（御用商人）と云へる名稱は壓制時代の遺物なり立憲政治議院政治に於てハ是を政商と名くるなり。紳士の稱ハ純然紳士より一變して長袖紳士となり再變して流行紳士となり又變して冒險紳士となり虛喝紳士となり自稱紳士となりて今日に於て最も行はるゝハ僞稱紳士なり、而して僞稱紳士と政商とハ密接の關係を有して或ハ同體異名たる事あり。此政商僞稱紳士が權家に結んで事を謀らんにハ脅迫三分諂詞三分黃金四分を以てすべし。正當の交際ハ決して親密の媒介たると能はず其媒介ハ即ち惡事に限るなり、故に眞目な談話よりハ彼を透引して俱に待合に遊び藝妓を相方となすべし又碁將棊よりハ俱に花牌を弄て勝負の賭を爲すべし、希臘の古哲シセローが『十回の茶話は一回の酒席に敵せず、十回の酒席ハ一回の女遊に敵せず、十回の女遊ハ一回の花弄に敵せず』と云ひたるハ交際の親密を計る格言あり。一回花牌朋友に成れば俱に相場を爲すべし、若し法律に觸るゝの恐なくば與に詐僞を與にし密通を與にし盜賊を與にするに至れば眞の親密たるを得るものなり。此心得を以て權家と同腹になりて目的を達すべし、但し彼を容視して贈賄に終らんと思ふハ不可なり、宜しく合資協力の仲間に入れ利益ハ之を分ち損毛ハ掛けざるの組合と成すべし』云云

彼月岡等ハ此秘訣を得たりと見えて皮肉曲長の妾小黑を演劇見物に誘ひ出して鈍役の鹿若と屛風の裡の

隱ン坊を爲さしめたれば、忽ちに小黑と親密に成りて此の手より思ふが如くに皮肉曲長を籠絡たり

○第廿三回　議論で取する歳暮の贈賄

政略果して其圖に當れり、左しもの皮肉曲長も御寵愛の權妻小黑の方が執成にサラリと解て大承知ソウ成て見ると御馳走に贈賄まんざら惡い心持でも無く、ソリヤ個樣いたしたが宜敷からう是は云云の書面を一應差出して伺ふ方が早手廻しであらうと二言三言の注意から段〻と深く成て纔かの中に空電仲間の顧問參謀と認めらるゝ程に至たり

今日も例の如く佐久間町の別邸（即ち妾宅）へ夕方より伺候したるは月岡紳士。かの皮肉殿と小黑の方とが桐の長火鉢を前にして何やら話しを仕て居たる所に罷出て『イヤ是は御休息の御邪魔を仕りました樣で甚だ恐縮で御座ります……と調子よく諂詞を並べ時候の挨拶ども畢りて少し小膝を進めて『實は此間中一寸御話しを致し擱ました例の鐵株一件で御坐りますが彼翌日直に命令を下して底を狙つて買せた所が、ドウモ不思議、その日の夕場から忽ちに持直して棒に上つて此四五日以來の景氣は前代未聞……ナニ新聞の相場表を毎日御覽に成りませんと……コリヤ怪からぬ私共は一ヶ月三十錢と云ふ代價を拂つて新聞を求めまするのは第一この相場表が肝要だからで御坐ります……ソコで閣下の口へ向けたのが五百株、モウ大抵此邊が高直の頂上であらう餘り慾張てマダ〳〵と云て力身むと亢龍有悔の恐と存じて今朝盡く利喰を仕つて則ち其御勘定が此通り一株に付て純益が四圓廿錢づゝ二千百圓に相成りますれ

ば御受取を願ひます』と仲買の仕切書に添へたる勘定書付と共に二千百圓の紙幣をいざ御受取下されよと前に差出したり……

月岡は頭を左右に打振つて『イヤ〳〵何程御懇命を蒙る中でも商買上の事は左樣には參りません、夫を尊慮の如く仕つた日には此月岡は忽ちに徳義上の罪人と成て頗る良心に背きまする次第……アノ時に閣下鐵株は如何で御坐る此が機會ゆゑ一ッ御手出しを成りませんかと申したら閣下が宜からうと仰しやッたに依て然らば五百株張つて見ませうと申上て置た……此相場が個樣に得が參つたに由て良いものゝ若も損に成れバ此月岡は御遠慮なく其損金も御請求申上る心得、シテ見れば此利益は固より當然閣下に歸せねば成らぬ道理で御坐ります……勿論證據金は私が御立替申たゆゑに此通り隨分高い利息で既に差引で頂きました（ト勘定書を示して）又仲買口錢其外等も盡く差引しました上の全くの純益……頓だ事を仰せらるゝ、私が自分の利益でも無いものを取る譯はありません、夫を取た日には商人の徳義を失ひます、併し此昂で此通り利益があつたのも實に閣下の御運が盛なる故で私も其御相伴で二千株仕掛て今朝この四倍を得まして御坐りますハヽヽア……イヤ〳〵何と仰せられても私は閣下の御品を閣下へ納むれば夫で私の義務は相濟むと申すもの、是から先は此金を閣下が不潔だと思召して貧民に救助なさるとも又それで忘年會を成さらうとも御勝手次第我不關焉です……』と辯舌に任せ疊み掛ての大議論。曲長は頭を掻て『君の樣にッウ正論を主張して堂〻と辯ト付られては僕も防ぐに辭なしで閉口するな夫では何

れ他日御相談をすると仕て先づ此金は預ッて置かうよ『ナンノ預ると云ふ語は有ません閣下の物を閣下がお納めなさるので御坐りますに自他の別が……『コレサ月岡モウ議論は御免だ……と迷惑さうに右の金を提包の中に入たりけり

……月岡は雜話の末程よく切上て暇乞をなして門を出で車の上にて後を振返り舌をベロリと出して『ソレ彼僞君子の曲長贋賢人の皮肉めが見事に毒を喰ひやがッたからは、モウ彼奴は此方の奴隷だ

○第廿四回　表面では知ぬ根府川の品行

『時に月岡菊川の兩君の語氣でも僕は覺つて居るが、例の一件が許可に成たら眞に發起株を賣て仕舞て重責は人に托けるが目的であらう、其事は僕も疾に承知で夫に差支ない樣に準備を仕て居るが困ッた奴は彼根府川ヨ、松井君も御存知だが彼奴評判の意地惡で殊に金剛伯の信任を肩に着て動もすれば我〻當局者の穴を捜して攻撃するには閉口だて、彼奴に惡く吹立られて擬院の質問にでも掛られて見玉へ、脹管閣下と雖も奈何ともすべからざる塲合に陷るの恐あり、だに由て諸君早くあの根府川を籠絡する手段を運らさんぢや往んぜ……とは皮肉曲長の忠告。成程コリヤ緊急問題で御坐るがシテ其方略は……『否〻、彼奴酒は一滴も飮まず、卷莨も當節は廢したし、廉潔自慢で一錢の勘定でも嚴密にして居るし、女に掛ては基督敎の信者と云ふので細君一點張だし、偶〻僚友の交際て酒席に列なつても苦虫を嚙潰した樣な面を仕て中座をするし、花牌は愚か碁將棋玉突だッて嫌だし、實に附入る隙が無くて困るぜ』、とは此曲

長も宜〻根府川委員には僻易したる實驗ありての事とは知られたり
扨それより一酌と相成て各〻所狎の藝妓が出現したる魂膽鞍部の樓上、その話題の中にも自から出るものは根府川の堅藏話。運太は甚九の三線を引ながら『モシ松井君、その根府川さんと仰しやるのは、アノ色の黒い目の窪んだ脊の高い委員さんでせう』と尋ぬれば『ム、そうだ、卿どうして彼堅藏を知つてるチ是やァ妙だ『エ、堅藏だと、堅藏どころか豆腐でエすワ……、彼人が足駄屋でお轉ちやんの破瓜を喰て此節あの妓に殺されて居るのを御存知ないの『ハテお轉は破瓜ぢやァ有めエが『ナンノ三度目か四度目ぐらゐまでは破瓜で通すのが藝妓や雛妓にや當然ですワ『ハヽヽア如是とはどうでも宜として、眞實に彼根府川がお轉を買て居るかのウ嘘だらうぜ『嘘だとお思ひなら典子ちやんに聞て御覽なさいな、チー典子ちやん『アヽさう所か昨夜も私が足駄屋に出て居たら根府川君がお轉ちやんに強請られて榮三郎と訥升の羽子板を自分で買て持て來なすつた位の大のろです事よ『ヘーエ恐入たチ、だから表面的ぢやァ其眞面目は知れ無いチ、併し歷は（と鼻先を指して）まさか仕まいてナ『所が根府川君は夫が大好で常でも足駄屋の女將だのお引姉さんだのを相手にして十二時過まで遊てお出なさいますよ『ソリャ嘘だらう、彼奴まさか骨牌は知るまいヨ『だつて現在私も二三度相手をして酷い目に會ましたもの……どうして〳〵上手の上に狡猾とを仕て中〻目が放せませんよ、夫にチー運太姉さん、私共の相手ぢやァ二十錢か三十錢で少さいのを仕てお居なさいますが、御朋友同士ぢやァ大そう大きいのを成さるさうでエ

すョ』と運太典子が兩奴の物語にて根府川が敗綻は忽に露はれたりければ、『月岡は手を打て』締た……是より根府川も亦憐むべし此僞稱紳士の爲に機關に使はれて空電の提灯持とは成たりけり。斯て此僞稱紳士連中が社會に向つて何なる事を爲すか、其計略は愈〻出て愈〻奇にして愈〻妙なりと雖ども餘りに書立ては天機を洩すの恐あれば惜からぬ筆を此に止む

（完結）

◉評判 一人娘

漣山人

○第一回　素性

京は三條通り四條下る、——其樣な處は無いから確尻の來る憂慮もあるまい、——其處に大黒屋と云ふ唐物屋ありけり。

主人は財兵衞と云ひ、女房はお祿と呼びて二人共五十の坂は越えたるが、子と云ふ者男女一人づゝありて、男は總領の甚六には三つ足らぬ甚三郎。さて女はお玉とて、是ぞ評判の一人娘。初厄は三四年前に

過ぎて、速い者なら乳呑兒の二人もある年齡なれど、天然備はる美形なれば、外見は漸く十六七、二九とは登らぬ程なるに、まだ着服の肩揚も取らず、赤い半襟赤地の帶、萬事若作りに取り仕立て丶、店頭に押し出したる美麗さ、往來人も足を踈縮めて、垂涎に地を堀る斗りなり。

さても此娘の由來を尋ぬるに。——此が兩親なる者、歴然とした息子のありながら、何故か頻りに女兒を欲しがり、如何にもして一人設けたしと、執心の餘りの神頼み。それより清水の觀世音に、夫婦代る〲日參と出かけしが。かくてもさらに効驗無きに、今度ハ遂に參籠と奮發し、女房お祿甲斐〲しくも、三七日の間斷食して、一心不亂に祈誓を籠めしに。觀世音も不憫とや思召しけん、其滿願の黎明頃、お定まりの夢枕に立ちて、御聲いとも朗かに、善哉、善哉、雜煮に餡ころ、さてお替りは大福餅、甘いは親の常ながら、兒故の闇に夜も晝も、三七日食を斷ちて、吾に祈誓を凝らすとは、天晴れともかつぽれとも、申樣なき心根なり。依て吾も感服のあまり、汝に一人の女兒を授けんト、云ひつ丶階段を下り玉ひて、手づから地主の櫻を折り、それにビードロの蠅除玉を、逆様につりてお祿が前に置き、まづ之を呑むべしとありけるに。お祿も此比の斷食に、腹の減つたる折なれば、何を今更遠慮すべき、饑餲い時の不味いもの無しと、其櫻の枝を片端より、ムシヤ〲喰ふよと覺えしが。忽ちドロ〲に成りて、觀世音の姿は見えず、吾のみ階段の下に蹲踞り居るに。さては今のは夢であつたか、あら有難や辱やと、倘も佛前に額を擦りつけ、此御禮には、鉛の燈籠貼子の御圖司、何でも御好み次第に進せます。何はと

もあれ此由を、財兵衛殿にも早う聞かせて、嬉ばせて參りましよト、勢よく立ち上りしが、夢に喰つたる櫻の枝は何の足しにもならざれば、腹は矢張り舊の空腹眼も眩んで尻餅舂くを、辛うじて三年坂まで匍ひ下り、それより人力車に打ち乘りて、三條の吾が家へと歸りしが。物をも云はず臺所へ轉げ込みて、お飯櫃の中からザックザク、三七廿一日分を、一度喰つて腹を拵へ、漸く吾に返りて後、さて斯樣云々と、觀世音が御夢想の次第を、亭主に語り聽かすれば、財兵衛嬉し悦びて、倘も清水の方を打向ひ、三拜九拜なしたりける。かゝりし程にお祿の腹は、其日よりムク〳〵と膨脹れ出して、果は飴細工の狸の如く、又は伏見燒の布袋然として、いよ〳〵懷姙と見えける程に。やがて月滿ちて飛出したるは、玉のやうなる女兒なり。其の時四邊に群がりし蠅の、パッと一度に飛び散りたるも、彼の觀音が授けたまひし、蠅除玉の奇特ならんと、名さへ其儘お玉と呼びぬ。

かゝる難有き由來ある娘なれば、はや十三四と成ける頃には、其美しさあでやかさ、聞き傳ふ楊家の女も、よも斯く迄にはあらざるべく。畫で見る小野小町でさへ、此と列べてはすべたも同然。昔時より美人の形容詞と定まりたる、沈魚落鴈閉月羞花の八字を、八々六十四遍の間呼吸を次かずに稱へても、まだ〳〵と頭を振りさうな代物。京の美人の總本家は、乍憚手前でございト、云はぬ計りの美形なるにぞ。其名忽ち洛中洛外に轟き渡りて、其爲に正午の號砲も、近來聞えなく成たと云ふ。てもさてもたまげた事だト、年々上る六條參詣者も、門跡樣よりまづ娘を、吾先にと拜み度がりぬ。

○第二回　兩親

(財兵衛) コリヤ女房！ (お祿) 何で厶います？ (財) 自家のお玉は美しいもんぢやな。(お祿) 左樣で厶います。(財) 別品ぢやあ。(お祿) 左樣で厶います。(財) 好い女ぢやな。(お祿) 何遍云つても同じ事で。(財) 何遍云ても同じ事ぢやが、何遍見ても美しいもんぢや。然し斯樣な美しい娘が出來るとは私達二人は果報者ぢやな。(お祿) それは貴郎！ 何と云つても清水樣から授つたあの娘、云はゞ觀音樣の申兒で厶いますもの。(財) 觀音樣は難有いものぢやな。(お祿) だから平常信心して居るぢや厶いませんか。(財) それは其通りぢやが、此京の町廣しと雖も、そもあれ程の美人が又とあらうか。(お祿) まづ……御座りますまい。(財) 五畿內中には？ (お祿) まづ……御座りますまい (財) 日本中には？ (お祿) さア……まづ無いかも知れません。(財) さらば日本一ぢやな。(お祿) ほんとに黍團子の樣な娘で厶います。(財) コレ勿體無い事を云ふな！ 然しお祿や！ 彼娘も段々年頃に成て來るが、……何時までも一人では置けまいな。(お祿) 元より女と云ふ物は、三界に家無しとか云つて、一生の中何時か一度は、嫌でも亭主を持たねばなりませぬ。(財) 三階の家が無ければ二階屋でも大事無い、どうかあまり身共無く無い家へ遣り度いの。(お祿) それは貴郎云ずと知れた事。あれ丈の容色を持て生れたものを、何で貴郎尋常一樣の家に遣られますものか。第一お授け下すつた觀音樣に濟みませぬ。(財) なるほど。そんなら先づ何處が可からうな？ (お祿) 妾の思ふ處では、まづ宮方か……さなくば華族方へでも…… (財) オホ——

其方は女の癖に、恐ろしい膽の太い奴ぢやな。が、まア考へても見い！多寡が素町人の唐物渡世、所得税の漸く五圓不足納める身代、此間の三大事件の寄附金すら、五十錢の割前をやつと出した位の事で、宮樣や華族方が、何で相手に成るものか。（お祿）トさ、思ふのは男の淺墓。女は其樣なけちな根性は持ちませぬ。抑も氏無うして瑤の輿に乘るは、女子たる者の專賣の德で、たとへば非人乞丐たりとも、容色が好くて藝があれば、忽ち高位顯官のお目に留つて、――今では瑤の輿は無いけれど、金銀作のお馬車に乘て、ツンと濟まして通れるのが、蓋しそも〳〵女たるものゝ德で。三界に家の無い代りには、五階六階の西洋館にでも住む事が出來るのです。妾だツて憚りながら、生母がちつと氣を利かして、清水樣へでも願を掛けて、お玉の樣な容色に產んでくれたあら、貴郎の樣なデコ助老爺の處へ、嫁いて來やしません。それを思へば財兵衞殿、お前は餘ッ程果報者ぢやぞエ。（財）エイ氣味の惡いおかんかイ！（お祿）ほんに之は話が枝葉にそれた。――處で妾の云ふ通りあれ丈の容色在るものを、つまらぬ奴に遣つたとあつては、清水樣へ濟ぬに依て、今に瑤の輿のお迎ひが來るまで……（財）其お迎ひは何時來るぢやらう？（お祿）貴郎も亦せわしない。待てば甘露の日和あり、急いては事を仕損じる、細工は流々仕上げをば、音無しう待たがようムんす。（財）然し此儘年が行たら、大切な代物が店晒しに成らう。それに此頃は彼地此地から、大分申込みもある事ぢやから、早う何處ぞに極め度いと思ふて、實は其方に相談が仕度いのぢや。（お祿）其相談なら聞きますまい。それはあれ程の容色ぢやもの、彼地此地から所望

者のあるのは知れた事。現在妾の聞き込んだ丈でも、確に七人は戀病をして居ますげな。(財) 何ぢや戀病？さても時代な物が流行るな。そんな病氣は私等が中年の時分には、早や廢つて居たものぢやが……シテ其は何處の誰ぢや？ (お祿) まづ手近から云はうなら、向ふの金物屋の銅八どん。(財) ウンあの番頭か。(お祿) 次が川原町の小石さん。(財) あのお醫者様……(お祿) 第三番が裏の町の下宿屋に居る杉田と云ふ書生。(財) シテ第四番は？ (お祿) 此間迄坂井座に出て居た不安次。(財) ウンあの俳優まで。(お祿) さて其次が府廳の宮川さん。(財) 此は官員さんぢやな。(お祿) 第六番が是色庵の淫念さん。(財) ウンあの助兵衞坊主。(お祿) さてどん尻に扣へしは……ホヽヽ (財) コレ何が可笑しい？ (お祿) 横町の質屋の隱居さん。(財) エあの隱居も講中か。成る程これはウハヽヽヽ

○第三回　客來

(財) 然しお祿や！其方の今云た中で、河原町の小石さん、府廳の宮川さん、此兩人は如何か脈がありさうぢやぜ。まづ小石さんは、第一に男振りは好し、第二に信切でもあり、第三に親ハ無く、第四に醫者も下手では無いから、半井さんや齋藤さまには迚も敵はぬ迄も、まづ追々繁昌の樣子ぢや。それに此京の町は、醫者が殊の外もてる處ぢやから。あヽ云ふ處へ嫁いて居れは、先行末が安心と云ふものぢや。それにまた宮川さんは、府廳でもズッと上の方で、月給も五六十圓はお取りに成る樣子。只年がちと更け過ぎてるのと、二度目と云ふ處が瑕ぢやけども。其代りお金がどんと在て、家もあの通り立派な

住居。下女の二人も使ふて居る樣子ぢやから、奧樣はツンと濟まして、始終長火鉢の側に坐つて居られる。此樣な氣樂な事はあるまいぢやないか。(お祿は皆まで聞かず)又しても〳〵、貴郎は目の前の慾に斗り掛つて、大きな利潤の先にあるのをお見なさらぬから……商賣も其通り、大きな損もせぬ代り、どんと一度に儲かつた例しもありません男が其樣なしみたれた了簡で、何の譯に立ちますぞヱ。——これが世間並の娘なら、貴郎が今も云ふ通り、宮川さんなり小石さんなり、それは〳〵よい婿さん、直ぐにも札を落して遣り度いけども、何を云ふにも自家の娘は、妾等二人の子にして子にあらず、云はゞ觀音樣から預かつた里子も全然。それをムザ〳〵と勿體無い、其樣な町醫者や官員連に、誰が遣られますものか。貴郎は觀音樣のお罰を、何ともお思ひなされませぬか。(財)二言目には觀音樣が出るので、私は一言も無いけれど、まアさう腹を立てゝは困る。それでは娘の緣談は、其方に一切委かさう程に、好さそうな處へ賣りつけてくれ!(お祿)さう素直にさへ出るなれば、妾ぢやとて何も云ひ度い事も無い。そんなら妾が引受けて、惡い樣には致しますまい。(財)何分賴む。(お祿)合點で厶んす。

話し中途に店頭へ、ガラ〳〵と引き込みし車一臺。さも鷹揚に降りて來たは、年の頃四十前後と覺しき男。銘仙かと思はれる不華な綿入に、まだ新しい嘉平治の袴、鐵色奉書の三紋の羽織。左手に茶の山高帽子を提げ、右の手に薄く禿げ掛つた小鬢を一寸撫でながら、ズッと店頭へ進んで來て、(男)大黑屋財兵衞と云ふのは此方かト云ふに、店番の丁稚黄な聲して(丁)ヘイ手前共で厶います。(男)さうか……

一寸御主人にお目に掛り度い。ト云ひつゝ名刺を渡せば。丁稚はそれを受取つて、急いで奥へ來り、(丁)へイ旦那樣！只今店へ此方が入らつしやいまして、旦那に一寸逢ひ度いとおつしやいますが。ト云ひつゝ以前の名刺を渡す。財兵衞受取て一寸見れば、伯爵桃谷家々扶柳園茂忠とあり。財兵衞は口の中で讀んで小首を傾け(財)はてな、知らない方だか……

女房は側から覗き込で(お祿)ドレ御見せなさい！貴郞逢つた事の無い方ですか。(財)逢た事も聞いた事もない。コレ長松何樣な方だ？(丁)矢張り日本人らしう厶います。(財)コラ知れ切つた事を云ふな！何樣云ふ風の人かそれを聞くんだ。(丁)どう云ふ風とおつしやいますと、問題が人物論に關係しますから、事に依ると誹議にでも渡つて、後に訴訟でも起つた時に……(財)コレ〳〵、其樣な屁理屈は聞き度くないワ。(丁)でも質問が質問ですから、政府委員も骨が折れます。(財)エィ議會の筆記を聞いていせん。何んでもよいからお通し申せ！(丁)此方へで厶いますか。(財)馬鹿な奴が！此樣な處へお客が通されるか。店の二階へお通し申せ！(丁)でも彼處はまだいけません。(財)何故だや？(丁)まだ私の蒲團を疊みませんでした。(財)此無精者めが、早く掃除を仕居らんかィ。(丁)へィ〳〵(財)はんとに仕樣の無い畜生だ。

店では客が待ちかねて、(客)エヘン〳〵。

○第四回　應接

暫時して丁稚長松は、表二階をざつと掃除なし、再び店へ來りて、(丁) 何卒此方へ！と云へば、客はさも横柄にヌツと上り、帽子を手に持つたまゝ、箱階子をギシ〳〵云はせて、二階の一間へ通れば、此處は漸く六疊計り、表の方は二間出格子の窓あれど、空氣の入るは其處のみにて、夏は嘸暑かるべく、右の方は九尺を半分に仕切りて、窓の方に寄りたるを床の間になし、家名に因みたるものにや、筆者は誰とも知らねど、墨繪の大黑の一軸、仔細らしくぶら下りて、其下に怪しげなる唐銅の花瓶を置き、寒菊一つかみ活けあれども、葉も花も大方茶殼の樣になりて、火をかざゝば直ちに燃えなん計りなり。其隣は違ひ棚に地袋形の如くには出來へたれど、帽子の箱洋燈の笠など、店賣の代物堆く積み重ねて、雅致と云ふもの少しも無く。まだそれ計りならば我慢も出來れど、其向ひなる押入の襖一寸五分ほど開きありて、丁稚が急ぎて片付けたる名殘にや、寢衣帶とも覺しき怪しげなる紐の、五寸ばかり尾を出したるなど、不體裁の限りなり。

客は丁稚が持ち出したる、薄汚き更紗の座蒲團の上に座を搆へて、火鉢の出るのを待ち遠う顔に、兩手を袴の中に納め、折々水鼻をすゝりながら、四邊をキヨロ〳〵見廻はし居る處へ、靜に階子を登り來れるは、主人財兵衛老爺なり。

初對面と思へばにや、態と羽織もまだ皺の寄らぬ物に着換へ、前垂を斜めに帶に插みて、靜に客の前へ進み出で (財) これは〳〵初めまして御意得ます　私が當家の主人大黑屋財兵衛奴に厶ります。以後お

見知り置かれを！と云へば。客も兩手を突いて頭を七分ほど下げ（客）はッ左樣で。拙者は伯爵桃谷家の家扶を致す、柳園茂忠と申す者。自今御別懇に。（財）何御用かは存じませぬが、不汚い處へ善うこそ御入來下されました處、最前よりお待たせ申しまして失禮斗り。（客）イヤ此方こそ御多用の處を。（財）どう致しましてどうも昨今は酷く冷えます……ト云ひかけて初めて火鉢の無きに心づき周章てゝ階子の下り口へ伸び出して、（財）長松やお火を早く。（丁稚下より）へ――イ！

漸くにして火鉢が出る、茶が出る、此處に坐も堅まつた頃、客は言葉を改め（客）さて御亭主！拙者今日推參致したは、余の議でもムらぬ、ちと御願の筋があるのぢやが、何と聞いて下さるか。（財）成る程、私風情の力で及びます事ならば、及ばずながら聽きも致しましやうが。（客）及ぶも及ばぬも、貴殿ならでは聞く事の出來ぬ次第ぢやて。（財）へ、イ、して其仔細は。（客）まづ一ト通りお聞き下されト芝居なら相方替る處、客は少し居直つて、（客）そも（此處成田屋の聲色と知るべし）拙者主人桃谷有實公と申すは、當年御年六十一才、去る四月花の頃、東京ハ芝紅葉館に於て、還暦の御祝遊ばされしより、表向き御隱居遊ばされ、御家督は御總領、光實公に御讓りある、然るに此光實公、御年廿五才に渡らせ玉へど、未だ定まれる奧方無く、尤も御同族の中にても、年頃の姫君數多在れば、諸方より御申込有ると雖も、光實公は稀代の美男。六歌仙の其一なる、在五の君も何のその、光る源氏も及ばぬ迄、實に天品の男振り。尋常一樣の婦人にては、鶴に家鴨を列べし如く、御釣合宜しからトと、御當人も御意あれ

ば、傍よりも申し上げて、何れも御斷りある程に、今以て御獨身なり、さりながら此とても、何時迄打ち棄て玉ふべきにあらず。殊には大殿有實公、大に心を痛めらるゝに依て、此度御自身思ひ立ち玉ひ、奥方御撰定の爲めとあつて、此西京へ御下向あり、是西京は昔へより、美人の本場と聞及べば。似合はしき者もあらんかと、思召あつての事なり。されば拙者御隨行致し、去る九月の末つ方より、當地麩屋町の瓦屋に滯在なし、昨日は東今日は西と、稻妻の如く驅け廻りて、日々眼を晒らすと雖も、さて美人は少いもの、眼元が好ければ口元惡く、顏の造作美しきも、體の姿醜くて、是ぞと御眼に止まりたるもの、未だ一人もめぐり合はず。若殿果は焦思込み玉ふ折から、丁度一ト月あまり前の事なり、今は美人の穿索にも飽きたれば、紅葉など見て氣を晴らさんと、御意あるに拙者畏り、御隨行致して若王子より、南禪寺の邊り見物なし、只在る茶店に腰打ちかけ澁茶に咽喉を濕す處へ、彼方の木蔭に來かゝりしは、……コレ御亭主、何ぢやと思召す？（財）手前は御伴を致しませぬ故、一向存ませぬ。（客）ハテ野暮な事を……其木蔭を通り掛りしは、財兵衛殿、貴殿のお娘御で厶るぞよ。

○第五回　妄想

女房のお祿は、財兵衛が客の方へ出で行きたる後、一人長火鉢の側に搆へて、客の名刺を眺めながら心の中で獨語。

『今來て居るあの客が、乃ち此の桃谷家の家扶柳園茂忠……何でも聞た樣な名だ……ほんに聞いた筈は

す、阿古屋の琴責の時に出て來る、あの色の白い方のお役人。其お役人が叉何だつて、妾の家へ來んだらう？何も調べられるやうな事もないに。……ホヽ、何の事だらう馬鹿々々しい！あの重忠は昔時の人だから、今時此處へ來る筈もあるまい。それにしても名が同一なのは、やつぱり骨肉か親類か、何の道茂忠と云ふ名なら、惡い人では無いに違ひないよ。處で何の爲に自家へ來たらう？……桃谷樣……御出入のお邸でも無く柳園……聞いた事も無い人……。ウン解つた、讀めた、〆めた。さては兼ての望み通り、此桃谷樣の殿樣が、自家のお玉を見初めたんだな。其處で何うぢや邸へ上げぬか、殿が達ての御所望ぢや、ウンと云へば支度金は壹萬兩。兩親へ祝儀として壹萬兩。其他を公債五萬兩。これは其方の家の世襲財產にせよ！ハイ難有う厶います。まだそれで足りずば、月々の小遣は幾何でも出してやる。商賣の資本も此方から出さう。ナニ商賣は廢めて隱居する？それもよからう。そんなら嵯峨へ別莊を立てゝ遣らう。ヘイ難有う厶います。悴は洋行が仕度いか、よし〳〵洋行もさせてやらう。ヘイ難有う厶います。親爺はラッコの襟卷が欲しいか、よしそれも買つて遣らう。ヘイ難有う厶います。生母は八ッ橋の生が好きか、よしそれも買つて遣らう。ヘイ難有う厶いますト、何でも此方の望み次第。其上娘は瑤の輿、オット金銀作りの馬車に、其殿樣と相乘りで、洋服の時もあれば、十二一重の時もあり。白襟紋付の事もあれば、またズッと小意氣に、小紋縮緬の書生羽織。さうかと思ふと大形の浴衣に、黒繻子か八反か何かの帶を、一寸引掛けに結んで、東下駄でカラコロ〳〵。オッとこれぢや

ア藝妓に成てしまふ。ホヽヽ。それから頭髪も、束髪に結つたり。下げ髪にしたり。丸髷するかと思ふと、又三輪にもして見たり。上品に高髷の時もあれば、さつぱりと銀杏返し。唐人髷も一寸可愛らしいし、お煙草盆もあどけなくて好い。赤熊は頭が輕くて樂だ、……若衆髷も威勢が好くッて……と、何でも結び度い物に結つて、毎日樂しみにする事だらうが、またあの娘が、何にしても似合ふから妙サ。其處でまた食物だ。是も華族樣の事だから、自家見たいに朝がお粥で、晝が茶漬にお漬物で晩が葱のお汁と云ふ樣な事もあるまい。まづ朝が玉子の半熟と一寸東京風に味噌汁。お晝が鯛のお燒き物に、お吸物が鱧に一寸青味、晩は西洋料理と來る處だが、あの娘は牛が嫌ひだから、別に五六十錢の會席膳を取て、さア好きな物からお喰べ！嫌な物ならお殘しと、殿樣が側に付て居て、お給事も仕て下さる……ホヽヽ其樣な事もあるまいけれども。處が華族樣なんてヱものは、何も御用の無いもんだから、ソレ芝居だ、ソレ花見だ、日光見物伊勢參宮、暑いから海水浴に行かう、寒いから湯治場だと、年が年中遊んで廻はつて、其度に親爺にも生母にも、どうぢや一所に來んかとおつしやる、へイ〳〵難有うムいます。何處へでもお伴致します。貴樣達の行き度い處へ連れて行てやるぞ。へイ難有うムいます。私ハ一度善光寺樣へ。ウンよし連れて行て遣る。妾は歌舞伎座が一遍見度うムいます。ウンよし連れて行かう。妾は極樂へ參りたうムいます。イヤ其お伴は暫らく待てくれ。ホヽヽ。それぢやアお先へ行て待て居りましよう。ハアよい場を取ておいてくれ。矢張り棧敷の方が好いぞ。ホ

、、、殿様御串戯ばつかり。』と吾に問ひ吾と答へ、果はをかしな身振迄して、頻りに浮かれて居る所へ。客を送り出した財兵衞が、店から驅け込みながら(財)甘露！甘露！

○第六回　恐悦

(財)お祿！甘露だ〳〵。(祿)ナニ甘露ですとヱ？(財)待てば甘露だ。甘露！甘露！大甘露！(丁稚は後で)甘露甘露とそりや噓だんべ(財)コリヤ喧ましい、彼方へ行け〳〵！(丁)ヘイ〳〵財兵衞は丁稚を叱りつけて、店の方へ追ひやり、やがて火鉢の側へ陣取て(財)時にお祿！實に貴君の云ふ通り、まてば甘露の日和ぢや。今逢たお客と云のは、其名刺にもある桃谷様の御家扶で、柳園茂忠様とおつしやる方ぢやが、今度若殿光氏……では無い光秀……でもないソレ〳〵光實公とおつしやる方のお伴で、此の京へ奥方を探しにお出でに成たのぢや。(祿)オツと皆までおつしやるな、其後を妾が云て見ませやう。(財)知てるなら云ふて見い！(祿)其若殿が自家のお玉をお見初め遊ばしたに依て、是非にお邸へ上いと云ふ、お話で厶んしやうがな。(財)ウン其通り。其方は立聞して居たな(祿)なんのまア！聞かいでもそれ位の事は知て居ます。(財)ゑらさうな事を……そんなら其若殿は、如何な方か知て居るか。(祿)左様さ……お年は漸く廿四五、星は五黄か六白で、御器量はちと不の字だが、兎に角華族様の事だから。(財)オツト……待たり、辯士中止ぢや。(祿)何處ぞ違ひましたか。(財)其御器量が大

違ひ。(祿) もつと悪ひのですか。(財) いゝや。(祿) 菊石か瘢でも出來て居ますか。(財) どうして〳〵大違ひ。御器量はずんと好いのぢや。(祿) そんなら御器量も悪くは無うて。(財) 悪くは無うて？ 其樣なちい、よろ臭い事かィ。光る源氏か業平か、器量が好うて金持で、それで女が褒れるなら、其時や身受をそゥれたンのンも。(祿) コリヤ〳〵。(財) コレ囃すない！ 浮かれるわナ。(祿) 貴郎から先へ浮かれだして。(財) イヤもう眞面目ぢや——さても去る十一月の末つ方、時候も丁度時雨時、樹々の紅葉を眺めんと外珍らしき嵐山、では無かつた、待てよ、ソレ〳〵若王子から南禪寺を、見物なせし其折から。(祿) 貴郎がか？。(財) 何を云ふてる。其若殿がぢや。(祿) 成る程、若殿が紅葉見にお出でに成たのですな。(財) 左樣ぢや。其時彼方の木蔭をば通りかゝりし二人の女——コレお祿、それを誰ぢやと思召す？ (祿) 妾は其樣な事は知りません。(財) 知らん奴があるかィ白痴め！ 其處を通り掛つたのは其方とあのお玉ぢやわィ。(祿) ハア左樣でしたか。(財) 白痴奴。自分の事を忘れる奴があるかィ。(祿) でも其樣な覺えはありませんもの。(財) 無い奴があるものか。無うてもあるに仕て置んかィ。(祿) そんならあるに仕て置ましやう。(財) 其處で例の若殿が、お玉をお見初め遊され奉り申したのぢや。(祿) 成る程〳〵。(財) 然し其折は、若殿もまだお玉と云ふ事を、御存ドが無かつた故、其儘お宿へお歸りに成り、あの御家來にお向ひ遊ばされて、時に茂忠、今日南禪寺で見た女は、頗る美なものぢやな。御意に厶ります、私も此通り膝に涎の痕が厶います。——あれは何處の者ぢやか解るまいか。尋ねましたなら知れぬ事も厶ります

まい。然らば早速探してくれ、乃公はあの娘が欲しいとト辱くも御意遊ばしたと思へ。(祿)思ひます。
(財)すると茂忠殿畏つて、直ぐ樣諸方を尋ねた處が、まア迂濶な尋ね方をしたものと見えて、此名高い自家の娘と云ふ事が、今日が日迄知なんだとは。馬鹿お話では無いか。其處で今日に成て、漸と自家の娘と云ふ事が知れた故、直ぐ樣飛んで御座つたのぢや。(祿)イヤ妾も大方左樣だらうと思つて、今も一人喜んで居た處で厶んすが。シテ貴郎は何と返事を仕てお置なさいました？(財)それは願つたり願つたり。(祿)何を貴郎！、叶つたり叶つたりでしやう。(財)其方こそ違ふてる。叶つたり願つたりぢや。エヽまだ違ふ。願つたり叶つたり、で厶います故二ッ返辭で承知は致したう厶いますけれど、何分自家の娘は、吾が子にして吾が子にあらず——ト一番其方の聲色をつかうて、清水樣の預り兒で厶ります故、一應親許へも問ひ合せませんでは、自家の嬶が喧ましう厶いますと申しあげたら。然らは一應相談の上、お返事を願ひ度ひ。然し若殿も大分お急き込みの樣子ぢやから、片時も早くとおつしやるから。其儀は御氣遣ひ遊ばしますな、何れお返事は後刻、御宿まで出まして申し上ますと、キッと請合ふて分れたのぢや。(祿)そんなら早く行てお出でなさい！(財)承知致しましたと云ふて來やうか。(祿)知れた事を……妾に相談するともありません。(財)でも其方が請合たと云ふから。(祿)ぐつ〳〵せずと早くお出でなさい！(財)今行くがな。(祿)ソレ善は急げ。早う〳〵。
財兵衛はお祿に急き立てられて。周章腐て出で行けば。入れ違つて戸外より、歸り來りし娘のお玉。お

祿は見るより手を合せて。(祿)南無清水觀世音樣、樣々々々々。

○第七回　說得

娘は見るより袖を口に當て丶、(玉)ホヽヽまア阿母さん嫌だと！如何したんですねエト云へば。お祿は頻りに手招きして。(祿)如何したも斯うしたもありやしない。大變お目出度い話があるんだよ。(玉)今も妾彼處の角まで歸て來ると、向ふから自家の阿父さんが、何だか獨りニコ〳〵しながら、急ぎ足で歩行て來るから、阿父さん何處へ入らつしやるの？と聞いたら、オーお玉か、何でも好いから早く自家へ歸へんな？お目出度い話があるト云ふから。何ですネまだ歲暮の中だのに、何がお目出度のです、ト聞うと思ふ中に、半町ほど先へドン〳〵行てしまつて、其風のをかしな事と云つたら。(祿)さうかイ。それはまア好いとして。早く此處へお坐はりよ。大層今日は遲かつたぢやないか。(玉)早く歸りたかつたけども、今日はお稽古仕舞だもんだから、生憎混み合つてネ。(祿)それでもう今日で盥汲は上つたかイ。(玉)やつとお仕舞にしてもらつたの。そして來年から葵上にしやうつてお師匠さんが……(祿)それはまア豪氣だネ。(玉)それから阿母さん！お彈き初に持て行くんだから、それまでに爪の好いのを買つて頂戴な(祿)爪の好いの？はアはア買てあげるとも。何しろお支度が壹萬兩だもの。(玉)ホヽ爪を買ものに壹萬兩入りやしないワ。(祿)だからさ。爪から琴から、長持から簞笥から、衣服から帶から、肩掛から下駄から、足袋から襦袢から、櫛から笄から、鏡臺から針箱から、煙草盆から茶菓子盆火

鉢から鐵瓶、藥鑵から土瓶、茶碗からお皿、手桶からお釜、塵取りから箒木、何から何まで不殘合せて、一萬兩のお支度さ。それで足らずばソレもう一萬兩。(玉)ホヽ阿母さん如何かしてるよ。まアお茶碗が引つくり覆るぢやありませんか。(祿)ト云ふお目出度い話を、お前はまだ知らないのだらう。(玉)妾は何も知りやしませんワ。一體何事が初まつたんです？ヽ(祿)何事にも蟹事にも海老にも、沙魚にも。(玉)又た其樣お下らない事を……早く肝腎の事を聞かして下さいな！　(祿)だから今云ふ處だアネ。——お前に惚れた殿樣があるんだよ。(玉)妾に？　(祿)妾にさ。(玉)アラ阿母さんに？　(祿)イヱ違ふよお前にだよ。(玉)まア……それが如何したの？　(祿)それがお前を呉れろと云ふんだよ。(玉)まア……それから如何したの？　(祿)それから今阿父さんが、お返事に行つた處だアネ。(玉)まア……それで其殿樣は何處の方なの？　(祿)桃谷樣と云つて、立派な華族樣の若殿樣なんで、先月妾がお前と一所に南禪寺へ行た時に、お見染め遊ばしたんだとさ。(玉)先月？……アラあんな事云つて、妾は南禪寺なぞへ行た事はありやしませんワ。(祿)さ、妾も行た覺はないと思つたけども、何でも先方樣では南禪寺で見初めたとおつしやるンだから、此方も其心算にして居ないといけないツて。阿父さんがさう云ふから妾も其心算にして居るんだ。お前も其心算でお出でよ。(玉)だつて行つた覺もないものを、見初められる筈は無いワ。(祿)だからさ、其處はあつても無くッても、行た心算にして置かないと、話の都合が惡いんだよ。折角先方樣が見初めたとおつしやるのに、此方で見初められた覺は厶いませんと云てしまつ

ちやア、身も蓋も無い話ぢやないか。お前も商人の娘の癖に、掛引と云ふ事を知らないからいけない。

(玉)其様な無理を云つたつて、南禪寺なんぞ行た覺はないのに、行た心算にして居ろとは、何だかを

かしい、をかしいぢやありませんか。(祿)をかしくッても仕方がないぢやないか。(玉)仕方が無くッてもをかしい

ぢやありませんか、尤も高尾へなら行た覺はあるけれど　。(祿)そんなら高尾にしてお置きな!(玉)

でも其時は御母さんと一所ぢやありませんよ。(祿)妾の方は何樣でも好いよ。(玉)何だかちつとも解ら

ない話ですねェ。(祿)ちやアんと解てるぢやないか、お前を見初め戀病をして、明日にも六かしいと

云ふ處から、御家來が心配して、是非娘を奥方にあげろと、態々今朝お使に入らしつたんだ。ちやんと

解つてるぢやないか。それにまだお前を喜ばせる事があるんだよ。其若殿樣と云ふのが、それは〳〵好い

男で、成駒屋そつくりと云ふ御器量なんだとさ。(玉)妾は成駒屋は嫌ひですよ。(祿)そんなら松島屋…

…それでも無い……まァ困つた子だねェ。

○第八回　對　面

瓦屋の奥二階には、例の桃谷家の若殿光實と、家扶の柳園が差し向ひ。卓子臺を眞中に置て、チビ〳〵

と小酒盛。

光實は成る程美男子、色は滅法白く、骨組花車に出來て。何樣な踏倒しの屑屋に見せても、華族の若殿

と札を入るに、敢て躊躇せぬ人品ながら、何故か行儀は宜しからず、而も言葉遣ひ麁末に、陰で聞けば

書生の樣なり。

また彼の柳園と云へる男も、先刻の勿體らしきには似ず、自己の主人に對して、さりとは無禮千萬、大胡座をかいて卓子臺の上に兩肘を突き、箸の先で小皿に取た作り身をせゝりながら、(柳)今にあの老爺め、屹度力味込で遣て來るに違ひ無いせ。(光)ハヽヽ可愛さうに……然し君は一體何と云つたんだ。(柳)其處ハ兼ての手筈通り。日頃から得意の辯舌。――まづ島田三郎に角田眞平を刻み込、井角と高哲の衣をかけて、夫を團洲の油で揚げたと云ふ辯舌で以て、滔々と辨じかけた處が、財兵衞老爺め悦喜しやがつて、煙管の厂首を咬はへたり、茶碗の糸底をしやぶつたりして、からもう多愛は無かつたッけが。何でも彼の家は嬶天下と見えて、兎も角も一應女房と相談の上と云ふから、成る程貴殿の一存でも參るまい、然らば篤と御協議の上、色よい返事を待て居ぞやト、一番氣取て歸つて來たのサ。あれから嬶左衞門と相談した處で、嬶左衞門も元より慾の皮の千枚張と來て居るから、二ッ返事で承知と來る。そんなら早くお返事をと、其處で老爺め遣て來る。來たらまた喝しつけるト、斯う軍略が定まつて居る以上は、此戰は此方の勝利だ。まづ前祝ひに一杯やるべしト猪口を差す。光實受取て。(光)例ながら凄い腕だ。(柳)と云ふ御貴殿だッて、あんまり凄からぬ腕でもあるまいせ。此間の角座の事件なんぞは、中々拙などの及ぶ處にあらず。第一君は面が好いから敵はないよ。僕なんぞは例も二枚目へ廻はつて、骨計り折りながら、甘い汁は皆君に吸はれる事に成てるんだから、難有い譯のもんさ。(光)だから其運動費と

して、ちやんと山配けの契約があるぢやないか。(柳) オット叱ッ〳〵！謀は機密を貴ぶ。(光) 灌腸は蜂蜜を貴ぶかチ。(柳) 其樣な事云ふとお宿が知れるぞ。(光) オット叱ッ〳〵、內證！內證！處へ廊下ハタ〳〵。緣の障紙を明けながら、宿の下女が兩手を突いて。(女) 只今あの大黑屋とか云ふ方が、一寸柳園樣に御目に掛り度いと申して……ト、聞くより柳園は態と落付き拂て。(柳) ア、左樣か暫時待たしておけ。(女) ヘイ、下女は引返す。後に光實は小聲に成て。(光) オイ如何しやう、困つたな。(柳) 惡く早く來やがつたが、ナニ困る事があるものか。萬事は吾輩に任すべし。(光) シテ此處へ通すのか。(柳) 後に君を紹介せるかもしれんから、其心算で用心をして居たまへ。其間に僕ハ下で老爺に會つて來るから。(光) 宜しい、心得た。(柳) そんなら一寸喝しに行かうかト、出でんとせしがまた立戻り、(柳) 一寸衣裳を着けなけれやト、云ひながら隅の方に脫ぎ棄てたる、袴を取て手早く穿き、エヘンと一ッ咳拂をして、肩を妙に搖振りながら、悠々と下坐敷に降りて行く。

其間に光實は、下女を呼んで其處等を片付けさせ、革袋の中から紋付の羽織を引出し、帶を〆め直して其上にはおり、火鉢の側に座蒲團を敷て、其上に陣をかまへ、何時でも來いと云はぬ計り。

暫時して階子段を登つて來る足音聞え、やがて障紙を明けて先へ這入つたは、以前の柳園茂忠。仔細らしく兩手をつかへて、(柳) 御前に申し上げます。只今大黑屋財兵衞出頭致しましてムりますが、何卒拜謁仰せ付けられますよう……ト云へば、光實さも鷹揚に。(光) ア、左樣か。苦しう無い近う〳〵。(柳)

コレ財兵衞殿、御前が御許可ぢや。ずつと此方へお這入りなされ！遠慮は却て御無禮で厶るぞ。（財は敷居の外に平伏して）ハヽア。

○第九回　密談

光實は左手を懷中に仕舞ひ、右の手を火鉢の縁に掛け、少し反り身に成て、（光）オヽ財兵衞とやら、よく來て呉れた。然し其處では話が出來ん、まづズッと這入れ、（財）ヘヽ難有う厶ります。イヤもう是で……、（柳）然しそれでは御前が御迷惑遊ばす。御旅館の事ぢやから御無禮も致し方無い。早く此方へ這入て其處をお〆めなされと云はれて、財兵衞漸く座敷の中へにぢり入り、後の障子を〆めてまた平伏し（財）これは初めまして拜謁を得ます。私は大黒屋財兵衞奴に厶ります。（光）オヽ余も初めて逢ふぞ。以後は別懇に賴む。（財）へヽ恐れ入りまして厶ります。此度はまた好うこそ御越し遊ばされまして厶ります。（光）イヤ余もな、ひよんな事から思ひ立て……大方柳園からも聞いたであらうが……イヤもう面目無い次第ぢや。（財）どう仕りまして。只今も柳園殿まで申上げ置きまして厶りますが、私風情の娘に、難有い御思召、勿體無うて罰でも當りはせぬかと、へヽ、只今も宅で家內と申して居りました樣な次第で、ヘヽヽヽ。

柳園此時進み出で、（柳）御前に申し上げます。只今財兵衞申しまするには、彼の娘の儀に就きましては、中々以て不承知處では厶りませぬさうで。元より不束者には厶りますれど、御目掛られましやうならば、

御意に御座ります。――此時財兵衛も一所に辭儀をして居る。難有い幸福と、斯樣に申て居りまする。（光）然らば承知したと申すのか。（柳）

（光）財兵衛！よく承知致してくれた。余も滿足に思ふぞよ。（柳）財兵衛殿、御前も御喜悦で御座る（財）ハヽア。（光）イヤなに財兵衛！其方が承知致した上は、娘は乃ち余が奧。余は乃はち其方が花婿、さる時は其方は、下世話に申す舅では無いか。舅と云へば親も同然、其樣に畏まり居つては、花婿なる余も窮屈でならぬ。サヽもそつと近う寄て頭を上げい。（財）へイ〳〵、難有過ぎまして痛み入ります。手前は此方が勝手で御座ります。（光）然らば其方の勝手に致すがよいが。どうぢや柳園、財兵衛に一獻遣れ。（柳）畏りました。（財）どう仕りまして。左樣な事は御無用に遊ばされませ。（光）然し折角來てくれたに何の愛想も無い（財）どう仕りまして、手前は一向無調法で御座ります。もう是で御暇を（光）まだ好いではないか。（財）有難う御座いますが、少々用事が御座いまして。（光）成る程歲暮ぢやから多忙ぢやな。然らば止めまい。（財）これは計らず拜謁を得まして、難有い幸福で御座ります。委細は只今柳園樣迄申し上て置きまして御座ります故、何卒好しなに御取計ひを願ひ奉ります。ト五分計り額を疊につけ、また柳園に向つて三分ほど辭儀をなし、やがて障子をあけて外へにぢり出て、其處でまた二分ほど平伏し、漸く立上つて行き掛る時、見れば藥鑵頭に湯氣がポカ〳〵。

柳園は財兵衛を下まで送り出し、やがて引返し光實と顏見合せ、（柳）大きに御前御苦勞で御座りました。

（光）オヽ其方も太儀であつたな。（柳）ウップ。君は實に手に入つたもんだよ。あの應接中に、一度もクスリともやらない處なんぞは、中々素人藝ぢやねェ、（光）時に返事は如何だィ、鐵札か金札か。（柳）第一番大吉と云ふお札だ。（光）シテ其の仔細は？（柳）只今申し陳るで厶らう。（光）チリ…リン〳〵（柳）オイまだ芝居をして居る了簡だから恐ろしい兎も角も窮屈袋を取て、ズッと世話狂言で行かう。（光）そんなら此方も羽織を脱ぐか。

其中柳園は袴を脱ぎ捨て、火鉢の側へドッかと坐し、少し小聲に成て、（柳）まア聞き玉へ、彼奴が一も二も無く承知と來た事は來たが、其處が掛引と云ふもんだから、此方もムンそうかと早呑込みぢや面白くねェ、先方の弱味へ付け込で、少しは勿體をつけなくッちやいけねェから、其處で一番斯う出てやつたんだ。——ト云ひながらまた面をさし出し、一層聲を低くして、何やら頻りに囁語けば、光實も頻りに點頷いて、揚句の果が、（柳）それから先は君の幕さ。（光）ずつと濡れ場になるんだね。

○第十回　驅　落

正月二日の歌留多會、表座敷には男女二三十人打ち混つて、人と云ふ字に手を重ね、戀の札をむしり合て、笑ふ者罵る者、さながら修羅場の如くなり。斯る騷動を餘所にして、足音忍ぶ廊下傳ひ、只ある小座敷の前に立止まりしは、手に持つ雪洞にそれと知るゝ、彼の評判のお玉なり。衣服は派手なる糸織物、赤地友染と黒繻子とを、腹合せにしたる帶をヤの字に結び、髪は恰好よく島田に結へど、鬢の毛亂

れて垂れたるは、是も今迄歌がるたに、勝負を争ひし名殘にやあらん。

お玉は四邊に氣を配ばり搖曲みし前髮を指頭で直して、衣紋を一寸繕ひ、障紙の外から小聲にて、(玉) 光さんト呼べば。中よりは男の聲にて、(光) オイ此處だよ。(玉) 待たして濟みません。云ひながら中へ入りしが、燈光の外に洩れぬやう、片隅なる半間の床の間の、壁の際に雪洞を押し遣り、男の側へ寄り添ひて、(玉) 貴郎よく何處へも行かずに居て下さいましたね。(光) 人を馬鹿にしてらア。自分で此處に待てろと云つて置きながら、よく何處へも行かないで居て下さいました?……ヘッ、其樣なら何處かへ行きやアようムんしたね。(玉) アラ左樣云ふ譯ぢやないんですけども。(光) どうせ私は不實でムいますから、ハイ、(玉) アラ如何しやう? 困るねエ。貴郎が其樣に怒つてしまつちや、云ふ事も云へやしない。(光) 何も怒りやしないが、先刻からお前は、何だか私に云ふ事があるとお云ひだが、一體何の事だい? (玉) 何の事ッて、妾はほんとに悲しいワ。(光) 突然に悲しいワぢや解らないぢやないか。何が一體悲しいんだ? (玉) 妾は餘處へお嫁に行なければならないんですよ。(光) それはお目出度うムいます。(玉) 憎らしい、串戲ぢやありませんよ。(光) だから眞面目で聞いてらアね。(玉) それで其先方は華族樣なんですとさ。(光) それは尙更お目出度いね。(玉) 嫌な事つたワ華族樣なんぞ。(光) 好いぢやないか。お前の御出世になる事だから……さうなればお前は奥方、お玉の方ッてな事を云つて、お腰元が大勢着いて、イザ入らせられましやうと云ふ譯になるんだね。なる程それで話も解つた、妾はもう是からは華

族の奥方だから、お前の樣な平民は相手にしないから、今日限り緣を切る、赤の他人ぢや勝手に仕やト、それを私に云ふ心算で、先刻から私を待たして置いたんだね。(玉) アラそんな事……(光) いゝえさうに違ひ無い。其樣な事とは夢にも知らず、神ならぬ身の情なや、又小遣錢でも下さる事かと、獨り嬉しく悅んで、眞暗な所にツクチンと、待て居る私の馬鹿氣さ加減、推量あれやお玉殿!(玉) オゝ道理ぢやく。それは私が惡かつた、堪忍しやと計りにて、流涕焦れ泣き玉ふ。(光) やゝありて光次郎、氣を取り直してお玉に向ひ、最前からも云ふ通り、所詮此世で添はれぬなら寧そ二人が諸共に、死んで未來は一蓮托生。(玉) オゝ嬉しや、其お言葉がほんとなら、何卒殺して……ト云ふ處だが、モシ光次郎さん、(光) 何だィ? (玉) 死んでしまへば命が無いぞへ。(光) 成るほどそれも左樣だなァ。(玉) 肝腎の命が無く成ては、可愛いお前の顏も見えない。(光) ほんとに其通りぢや。一蓮托生と云つた處で、危險い蓮の花の上に、チンと濟まして坐つて居る丈りでは一向曲も無い話で、少し痴話が劇しくなると、すぐに池へ滑り落ちて、此寒中に寒い感もせにやなるまい。(玉) サゝそれぢやに依て光次郎さん、妾はよい分別があるぞヱ。(光) シテよい分別とは? (玉) 連れて迯げて下さんせいなァ、(光) 連れて迯げて? 成る程連れて逃げぬ事もないが、芝居の道行見る樣に、手拭一筋宛では六かしいせ、(玉) 其心配も入らぬ事、妾はちやんと此通り』、ト云ながら懷中より服紗包を出す。光次郎は開けて見て、(光) イヤ此は二百圓。何うして此樣な大金が。(玉) それは皆自家の阿父さんが、妾の嫁入の支度に、餘所から借りて來たお金。

（光）これさへありや大願成就。（玉）ちつとも早う。（光）オヽさうぢや。（玉）光次郎さん！（光）お玉おじや！

○第十一回　管巻

（財兵衛）お祿や、娘は大層遲いでは無いか。（祿）左樣ですテ、歌がるたと云ふとまるで夢中ですから、夜の更るのも何にも知らないんでしやう。（財）然しあんまり晩くなると、歸途が物騒だ。それも尋常の娘なら兎に角、何しろあの器量だから、私は誠に心配でならない、殊にもう賣口の付いた代物、博覽會なら賣買約定濟と云ふ札が、ブラ下つてるンだから、若し万一怪我でもあつてはならない、早く迎ひにやつたがよかろう。（祿）其處はもう如才無く、先刻長松を遣りました、（財）然し長松の野郎も、近來は惡く色氣が付きよつたから、又下らない眞似でも仕なけりやよいが。（祿）まさか主人の娘に、（だ）其處が思案の外だから、何んとも此奴請合はれないて……。器量の好い娘を持つと、アヽ心配なものぢやなア。

此時表の戸がガラ〳〵。（財）オヽ歸つて來たと見えるな。ト頸を長くして待て居る處へ、娘では無い悴の甚三郎、（甚）阿父さん只今。（財）何だ悴か、貴樣なんぞ歸つて來いでも可い。（甚）エ歸つて來いでもよい？其樣なら泊まつてくれればよかつた。何の事ッちやつまらない。乾居や藝妓が頻りに泊まれと云つたけれど、自家には年寄つた親爺や生母が居る故、早う歸らんと惡いと云つてウーイ！引き止められる

袖を振り切て、大枚五錢の白銅を奮發して、車を飛ばして歸つて來た、お悴樣の御志、難有いとも思ひ腐らず、何ぢや貴樣なら歸らいでも可い？、何處押せば其樣な音が出る。總ドて此頃の親爺は生意氣でいかん。悴がちいと優しくすれば、直ぐに付け上り腐つて、ウーィ！何ぞと云ふと大きな面をしよる。怪しからん事ッちや、今に私が親爺を勘道する建議案を、衆議院に提出して、ちと懲らして遣るから覺えて居ろ。ウーィ！殊に自家の親爺も生母も、娘斗り可愛がり腐つて、此お世嗣の甚三郎樣を、番頭か店の者の樣に扱ひよる。これからして第一癪に障はるワ。今夜も大方お玉めが、何所ぞへ遊びに行きよつて、未だに歸つて來よらんのを、待ち草臥れて居るのぢやな。其所へ待つ娘は歸らいで、待たぬ悴が歸つて來たに依て、つまらん顏して膨れて居るのぢやな。ウーィ！成る程娘は容量も好し、今度桃谷樣とやらの奥方に成るのぢやから、それは大切な娘であらうがな。よく聞け、女は餘所へ行けば他人ぢやぞ！他人が何の力になる？其處へ行ては男の子、お悴樣に至ては、ウーィ！終身親の側に居て、死水まで取てやる、有がたァいものぢや。それを今日麁末にしては、天道樣のお罰が當るワ。ウーィ！此處な不所存者めが、ウーィ！人にばつかり饒舌らして、返事も仕腐らん。ヤイ湯でも呑ませ！咽喉が乾くッ。ト何處で呑んだか大へドレケ、熟柿臭い口から唾を飛ばして、日頃の鬱憤ありたけを、廻はらぬ舌に管卷きける。

されども親は相手にせず、他の話に餘念なければ、甚三郎も張り合拔け、（甚）此樣な親馬鹿相手にして

も仕様がない。どりや一寢入りしやうかイ。ト立上りながら大欠伸。ドス〳〵と蹌踉けながら、次の間に行きて巨燵の中へ、ゴロリと横に成ると其儘、はや高鼾雷の如し。

（財）ア、悴にも困つたものぢや。（祿）ほんにあの位少面の憎い皃もありません。何う云ふ拍子でまたあんな奴が、妾の腹に宿りましたか知らん。（財）餘程其方の腹の立つた時に出來た皃ぢやらう。（祿）イヤ貴郎が疳癪を起した時に、仕込だ種でムんしやう。（財）イヤ畠が悪いから曲ぢけた大根が出來るんぢや。（祿）イエ種が悪いから、屈んだ生瓜が實るんです。（財）いゝや畠の科ぢや。（祿）種の罪です（財）イヽエ畠の……（祿）そんなら其悪い畠に、何うしてお玉の樣な物が出來ました？（財）ソ、其處が乃ち種の好い處ぢや。（祿）左樣は云はさぬ。あれは貴郎の種ではありません、淸水樣のお種ですぞエ。（財）オット又初まつたお玉如來の緣起か。（祿）何うです一言もありますまいがな。（財）それはさうとお玉如來は、まだお歸りにならんかいなア……と云ひかけて生欠伸に、小鼻怒らして見上る柱時計。折からチン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

○第十二回　注進

かゝる折から表より、呼吸急き切て驅け來る長松財兵衞が前へ兩手をつかへ、（長）御注進〳〵！（財）連忙しい何事ぢや？（長）何事處か大變々々！（財）大變とは？（長）大變の大小柱曆や綴曆今年は巳年で元日が戊、旦那の御年も丁度戊何か驕つて頂戴な！（財）此奴の云ふ事は少しも解らん、早う大

變の譯を話さんかィ！（祿）娘が見えぬは如何したものぢや？（長）サ、其娘……ではないお娘樣。お玉樣のお身の上に、大變な事が出來上りました。（財）ナニ娘の身に大變とは？（長）お玉樣のお身の上に一大事が。（祿）ナニお玉の身の上に一大事とは？（長）サ、其お玉の身の上に、容易ならぬ事が。（財）エィ何度云ふとも仝し事ぢや。早う譯を云はんかィ！（長）さうお急きなされますと、云はうと思ふ事も云へませぬ。（祿）そんなら心を落付けて……サ、早う云や！（長）左樣ならば申します。旦那樣內儀さん！お聞きなさいまし、斯うで厶います。――先刻內儀さんが、お娘樣のお迎ひに、武邊山樣へ行て來いとの御吩咐。畏まつて此長松、尻引からげて雪駄チヤラ〳〵、宙を飛で一算走りに、武邊山樣へと志し、勝手口より大音揚け、ヤア〳〵此家の中に物申さん、斯く申す某は、辱くも畏くも、恐多くも勿體無も、七福神の隨一と聞えたる、大黑天の兄弟分、大黑屋財兵衞入道藥鑵が店に、去者ありと知られたる、丁稚長松源の白雲。今夜此家の歌留多會に、先前より出陣ありし、主君の息女玉姬君の、御迎ひの爲に參つたり。吾と思はん人々は、速かに出で、玉姬君を、吾に渡して降參せよ。否と云はゞ用捨はなし、臺所より踏込で、座敷茶の間の嫌ひなく、縱橫無盡に驅け廻はつて、用意の御馳走片端から、手玉に取て喰ひ盡さん。如何にや如何にト呼はつたり。斯る處へ奧の間より現はれ出でたる女武者。抑も其日の出立見てあれば、手織木綿のドンツク布子而もゆき丈短きを、ツンツルテンに一着なし。鱧の骨抜き見る如く細く皺寄りたる怪しの帶を、胸高にグル〳〵と卷き付け、日の丸の旗左右より、貼りつ

けたらんかと思はるゝ頰を、無遠慮に膨らせつゝ胼胝にムクミ切つたる、手足をニヨキ〳〵現はしつつ、臺所隘しと歩行くをかしさ、いかなる天魔鬼神なりとも、いかでか腹を抱へざらん。(財) コレ〳〵貴樣は調子に乘て……軍談せいと誰が云つた? (長) 其お咎めは道理千万。さりながら吾が君には、暫らく御心鎭められ、吾が云ふ事を聞き玉へ!——去る程に丁稚長松、此女武者見るよりも、天晴れ好敵御座んなれ、引つ組んで勝負せんと、進み寄りしがコハ如何に、彼が大手を振る度に、腋臭の臭氣紛々と、鼻を目掛けて衝き來るに、コハ敵はドとさしもの長松、一足下つて鼻を摘む。(祿) コレまた其樣入らぬ事……早う肝腎の娘の話を! (長) サテ是よりいよ〳〵、お娘樣のお身の上に及びまする條、明晩の前講と致しまして、一寸一服仕ります。(財) エイ此奴め! 何處まで主人を馬鹿にし居る。娘の大事を前に扣へながら、何ぢや講釋の眞似なんぞ……貴樣の云ふ事聞いても解らん、吾が自分で行て來る。ト立上る財兵衛の、袂を長松確乎と捕へ、(長) アイヤ吾が君、暫らくお待ち下さりませ! (財) エイ其處放せ! (長) そつこい放さぬ雷が鳴ても此處は放さぬ。(財) エイ斯ふする中も氣が急くは、吾が行て呼んで來る。(長) 呼んで來るとおしやつても、何處に居るか御存ドあるまい。(財) 知らぬものかイ、武邊山樣に、(長) 其の武邊山樣に居らつしやる位なら、長松は一人で歸りはしませぬ。(祿) ナニ、それでは彼處に居らぬのか、(長) もはや疾ッくに行方知れず。(財) そりやまた何故に? (祿) 如何云ふ譯で? (長) ハテ知れた事。可愛男と連れ立つて、二人手に手を鷄が鳴く、吾妻の空へ (財) 驅落か (長) 其

通り（兩人）エヽヽヽ
奥には悴の甚三郎、欠伸をしながら、（甚）それ見た事かイ！

○第十三回　嚴談

處は例の大黒屋の表二階。上手に桃谷家の家扶柳園茂忠、張り肘に眼を怒らし、嚴然として搆ふれば、ズット下つて財兵衛夫婦、頭を疊にめり込むまで摺りつけ恐れ入てぞ扣へける。

（柳）コレサ財兵衛殿、何と云はるゝ？只今承はれば、お玉殿には……何に……一昨二日の晩よりして、行衛知れずと云はるゝのじやな。（財）へイ／＼まづ左樣な譯で……（柳）是は怪しからん事でムるな。（財）恐れ入りましてムります（柳）恐れ入るでは濟まされまい。（祿）痛み入りましてムります。（柳）痛み入るでは濟まされまい。（財）痒み出でまして……（柳）お默りなさい！先前より覗ひ居るに、貴殿方お二人のお言葉は。甚だ以て心得申さぬ。察する處貴殿方には、先に承諾の旨申置きながら、此期に及んで娘を隱し、出奔なせしと云ひ拵へ、拙者初め主人まで、お欺しなさる所存でムらう、（財）是はしたりめつそうな！（祿）何う致しまして其樣な事が、（柳）イヽヤさうは云はさぬ、兼て當五日には、主人東京表へ御歸京被遊につき、其節兎も角も御同道あり、追て東京お館に於て、表向き御婚禮被遊べき手筈にて、已に其儀は貴殿にも、御承知の筈ではムらぬか。さるに何ぞや、明日はいよ／＼御出發と云ふ、其眞際なる今日に及んで、娘は居らぬお玉は出奔を致しましたとは、頗る以て奇怪千万。（財）サ

ゝ、其御怒りは御道理、さればとて私共でも、去る二日の晩よりして、心當りへ手分を致し、店の事は其方退け、(祿)夜の目も碌々眠りませず。(財)一生縣命に探しましたなれど。(祿)今以て見當りませず。(財)明日は御伴と云ふお約束を致しながら、(祿)肝腎のお玉を失ふては、(財)柳園樣に申譯が無い、(祿)こりやどうしたもので有らうと、(財)今も途方に暮れて居ります處へ、(祿)貴君樣の御入來にて、(財)イヤ是大變ぢや嚊ァ如何せう?(祿)財兵衞殿困つた事になりましたナと、(財)夫婦の者は面目無く、(祿)穴藏へでも驅け込みたいほど、(財)是が昔の武士なら、腹搔き切つて申譯と、九寸五分でも持ち出す處なれど、(祿)生憎此方の財兵衞は、若い折から大の弱虫、(財)此皺腹に灸据ゑるでさへ、(祿)身を悶搔いて苦しがるに、(財)如何して刃物が當てられましやう。命計りはお助け〳〵(祿)南無阿彌陀佛〳〵ト、夫婦は半泣きに成て手を合はす。柳園は片頰笑み、(柳)なる程素町人の貴殿には、中々に腹は切れまいて……勿論此方に於ても、貴殿の皺腹切らしたとて、何の保養にも相成らねば、其禿頭打ち切ても、東京への土産にも成らず。此儀は此方から御免を蒙るが。其代り財兵衞殿、何ぞよい申譯の仕樣が、他に無うては叶ひますまい。(財)サヽ、これ故先前も申上げます通り、今一週間御猶豫被下、其中に娘を見出だして……(柳)アイヤ其儀は相成らぬ。成る程是が小倉の色紙とか、菊一文字の短刀とか、左樣云ふ代物で厶るなら、紛失なせしを見出して、差上げなばそれでも濟まうが。此ばかりは左樣は參らぬぞよ。人間は生身の物、娘と申せば破れ物で厶る。されば一端出奔致した上は、如何なる者

の手に掛つて、如何なる疵を受けぬとも申されまい。殊に歌留多の席よりして、行衞知れずとあるからは、察する處兼てより、申し交はせし男ありて。歌留多會の混雜に紛れ、驅落なせしに相違なし。さる時はお玉殿は、立派な疵物ではムらぬか。疵物ならば此方に於ても、もはや頂戴に及び申さぬ。(財)へィ、(柳)なんと左樣ではムらぬか。(祿)へィ。(柳)さるに依て此上は、別によい申譯の仕樣を、御工夫無うては叶ひませぬぞ。(財)別にと申して……(祿)よい分別は……(柳)無いと申さるゝか。(兩人)へィ。(柳)然らば此方から申込まう。——財兵衞殿、結婚違約の罰金として、壹千圓申受け度ふムる(兩人)ヱ、、、

○第十四回　爪彈

處は東京も北の果、萬づよし原にも遠からねど、夜は猶淋しき箕輪の町に、さゝやかなる詫住居。爪彈の合の手面白く、小鍋ジハ〳〵さも甘さうに、此處水入らずの差し向ひ、爲永の小本其儘の境界は、今ぞお玉光次郎が身の上となりて。近所の者を羨ませける。

(光)一寸お手休めに一杯獻じませうかナ(玉)大きに!(光)もう其大きには廢さねェか、新地か先斗町ならよからうが、此土地へ來た上には、なんとか改良して貰ひたいもんだナ。(玉)そんなら何と云ふのです?(光)有りィ!と(玉)ホヽ、可笑しな事。(光)何がをかしいもんか。それより大きにの方が餘程をかしい。第一何の事だか意味が解らない。(玉)それは郎君、大きに憚りはんを速く云ふのです

ワ。(光) チツペラポーのキンライ〳〵が聞いて呆れらア。(玉) 郎君の方の有りィだつて、ちつとも解らん事ぢやありませんか。(光) 何で解らない事があるもんか。有りィとは有難うの畧で、有りィと斯う尻上りに云ふと、頗る其處が優しく聞える。(玉) ちつとも優しく聞えませんよ、まるで按摩の樣ですワ。(光) 何故? (玉) 按摩有りィ (あんま針り)(光) 此奴人を馬鹿にしやがる……然し按摩の呼び聲を、覺えた中が嬉れしいよ。

譯も無い事を云ひ合、さしつ押えつ互ひに二三杯傾ける其中。お玉は不圖思ひ出した樣に、(玉) それはそうと光次郎さん。郎君東京へ行たら醫者になるとお云ひでしたが、まだ初めないのですか。(光) さればさ。吾だつて何も、何時迄も此樣な眞似をして居度かァ無ヱが。何分けふ日の事だから、内務省で鑑札を、さう直ぐに卸して呉れねヱから困る。(玉) だつて郎君は以前にもお醫者を仕て居たのだから、其時の鑑札ではいけないのですか。(光) さう甘く融通が出來りやい丶けども、中々當時の規則は六かしいからチ。(玉) 左樣ですか。……妾は何もさう急く譯ではありませんけども、此間持て來たお金も、もう大方消費か丶つて來ますから、何だか心細くつて。(光) 其心配は御無用〳〵、今に吾の友達が、金子を持て來る筈だから、まァ安心して居るがい丶さ。(玉) そんなら妾も安心ですが。(光) 下らねヱ世帶話はもう止めにして、もう一度彈いて見ねヱ。(玉) 郎君も唄ひますか。(光) 唄はなくつてさ。

お玉は又三味線を取上るに、光次郎は柱に凭れて、何やら迂鳴り出さんとする處へ。表より誰とも知ら

ず、(男) イヨ明治の丹次郎、お樂しみでげすなト云ひつゝ這入り來るものあり。

年頃は四十前後、唐棧づくめの扮裝に、スコッチの鳥打帽子、左の手にズック製の革袋をさげ、衣服の褄を高く褰げて、メリヤスの股引を深く現はし、右の手に洋傘を持て居る鹽梅、今旅行より歸りし者か。

光次郎は見るより、(光) イヨ今歸つたか。(男) 午後に着いたけども、一寸腹を拵へてたもんだから晩く成て濟まねェ。(光) 何でも今日明日の中にやア着くに相違無ェと思つてた處だ。まア何でも好い早く上んねェ。(男) 邪魔に成りやしねェか。(光) 乙ゥ云ふ奴さ。――其中男は座敷へ通り、火鉢の側まで進んで坐る。光次郎は直ぐに猪口を出し、(光) 今入り三杯だ。まア呼吸次ぎに遣んねェ。(男) 難有ェ〳〵。(光) 時に首尾は。(男) まづ上の部だ。(光) 其奴は豪氣だ。(男) シテ此方の代物は? (光) 御覽の通りさ。(男) 御覽の通りも好い加減にして、早く捌いたら好さそうなもんだ。(光) だからよ。お前の歸京を待つて居たのさ。(男) なぞゝ一日も永く側へ置いて。(光) オットお靜に!

何の事やら少しも解らぬながら、お玉は二人の話を聞き居しが。折々氣味の惡い目付をして、此方をギロ〳〵見る男の顏、洋燈の光に不圖見れば、何うやら見た事のある樣なるに、尚もつく〴〵瞳を凝らせば、こは如何に此男は、兼て吾が家の店頭にて一二度見かけし桃谷家の家扶、柳園某に相違無かりき。さるにても其時の、威儀正しきに引かへて、變れば變る今の有樣――はて合點のゆかぬ……

○第五十回　喧嘩

かくとも知らぬ親許にては、娘の行衛知れぬより兼ての目算ガラリ外れて、折角の娯樂も畫餅となりしのみならず。結婚違約の罰金とありて、金千圓渡すべしと、家扶の柳園に嚴しく談じ込まれ、更に腰を拔かす程の驚愕、平身低頭、一生懸命に詫び入て、漸く三日間の猶豫を願ひ、其上罰金も半額に値切しが、元よりさまで豐かならぬ身代、五百圓の大金容易に沸いて出やう筈なく、仕樣事なしに財兵衞老爺、脚を擂子木にして諸方を駈け廻はり、血の出る樣な高利の金を、辛うじて借り集め、漸々柳園に渡して、漸く事濟みにはなりしかど、濟まぬは夫婦が腹の中、桃谷家の緣談破れしは、過ぎたる事ゆゑ諦らめもすれど、肝腎のお玉を失ひては、此上損の取り返しも覺束無きに、如何にもしてお玉を探し出し、二度の花を咲かせんものと、尙も心當りに手を配り、艸を分けて詮議すれど、更に其所在は知れず、只其情人と云ふ者は、先年東京より流れ込みし、谷光次郎と云ふ醫者の書生と、去年の秋から譯在りて、人目を忍ぶ淫奔は、はや近所でも評判なりきと、是のみ漸く今にありて知れ、さりとは吾ながら迂濶千万と、夫婦は切齒をなしたりける。

されども此儘打ち棄てべきにあらねば、かゝる折こそ淸水樣へ、御願ひ申すが上分別と、お祿は又候觀世音へ、毎日〳〵參詣して、御苦勞にもお百度を踏み、御鬮を引いて伺ひを立てしが、四十九番の凶と出て、終始苦勞の堪えぬと云ふ、難有い御告に落膽し、後には自家に引込で、疳癪のみぞ起しける。(財)

お祿！其方は全體何の爲に目をつけて居る！（祿）物を見る爲の目で厶んす。（財）其物を見る爲の目を持ちながら、娘が疾うからの不行跡を、知らずに居るとは何と云ふ事ぢや、其樣な役に立たぬ目なら、引抜いてほかしてしまへ！（祿）ホヽヽゑらさうに貴郎こそ何の爲に目鏡を掛けて御座る？妾の目玉は二個だが、貴郎のは四個ある。人並よりは二倍も餘計な目を持ちながら、今まで氣がつかずに居るとは、呆れ返つた間抜老爺だ。（財）貴樣こそ間抜ぢや。（祿）貴郎こそ阿呆ぢや。（財）うぬこそへゲヽヽタレぢや。（祿）手前こそ唐變木ぢや。（財）われこそ安本丹ぢや。（祿）馬鹿ぢや。（財）白痴ぢや。（祿）何ぬかす！（財）糞喰へ。（祿）打つたな？（財）打たいで！（祿）ア痛たく！

互ひの腹がムシヤクシヤが、纏れ合ひての夫婦喧嘩、組んづほぐれつ挑み合ふ所へ、來かゝりし丁稚の長松、主人の危急を止めもせず、手を拍て面白かり、（長）ヤー面白い、此奴は妙だ、嬶しつかりせい！親爺負けるな！ソレく殘つたく八卦好いや！……と、煽り立てれば夫婦の者、喰ひ付き引掻きなぐり合ひ、夢中に成て鬪ふ有樣、鳥羽繪の獅子の脱け出して、狂ひ廻るが如くにて、更に結局もあらざりけり。

かゝる處へ表より、歸り來りし悴の甚三、かくと見るより割て入り。（甚）コレサく如何したものだ。阿父さんも阿母さんも、頭を禿らかしたり、齒もろくく利かぬ癖に、老人の夫婦喧嘩、犬も烏も喰ひはせぬ。それよりは阿父さん？阿母さんもお聞きなさい！妹の行衛が知れましたぞ。（財）なんぢやお玉

の行衛が、(祿) 知れたとえ? (甚) いかにも私が聞いて來たが、まづ氣を鎮めてお聞きなさい! (財) 早う聞かせ! (祿) 疾く云ふて! (甚) オット只では咄されぬ。(財) エイ慾張つた奴めが! (甚) まづ玉代が一圓、に身代金が三百圓、合せて三百〇一圓と云ふ物、聞かせ賃に私に下さるか。(財) 妙な勘定したものぢや。それは品に寄つて遣らぬものでも無いが。(甚) などゝ煽動てゝ云はす氣に。其手は桑名の焼き蛤。(長) 磯の鮑は片思ひ。(甚) 蜆は瀬田の名物で。(長) 螺は壺焼が一番甘い。(財) コレサ誰が貝の話をせいと云ふた? 早うお玉の行衛をば。(祿) 聞かせて呉れや是悴! (甚) そんなら云ふが……決して膽を潰しなさんな!

第十六回　仰天

(財) 膽は潰さぬ、(祿) 氣は確乎ぢや、(甚) そんなら云ふが、阿父さん! お玉は東京の吉原で、太夫に成て居りますぞ。(祿) エ、エ、エ、(甚) ソレ〳〵さう驚かぬ筈ではありませんか。(祿) だつて此が驚かれずに……(甚) 處でまだ驚くとがあります。お玉を太夫にした奴は、あの桃谷家の若殿と、家扶の柳園が申し合せての仕業。何ぢや若殿と家扶が申し合せて。(甚) サヽ其若殿も家扶の奴も、實は眞赤な僞物で。(財) それではほんまの華族樣では。(甚) 無い處か大きな詐欺師。(兩人) エ、エ、エ——(甚) 而も若殿に成た奴が、お玉の情人の光次郎、顏を見知られぬを幸ひに、花作人と成て舘へではなく、華族に化けてムザ〳〵と、一杯喰はせた喰はせ物、なんと膽が潰れましやうがの? (財) お祿や! (祿) 財兵

衞どの。(顔見合せて兩人) てもまア……』呆れた口は開た儘三日三晩閉がらず。

* * * * * * *

偖も事の次第を尋るに、元來彼のお玉が情人、谷光次郎と云る青年は、以前東京の濟生學舍とやらに居て、醫學を脩めし者なるが、持て產れた男振が、毒に成たか藥に成たか、學問の方は其方退け、醫書を繙く代りには、細見を暗誦する放蕩家、親が仕送る學資金は、其儘遊蕩の運動費に當てゝ、花柳の巷へ撒き散らせしが。元よりさまで豐ならぬ身の、思ふ樣には手が伸せぬに、良からぬ事を思ひつき、自己が面のノッペリしたを資本にて、後は素人荒らしと出掛け、後家は後座れおさんも可し娘 結搆子守 女も恐れず、果は人の女房にまで、用捨無く切り込で、當るを幸ひ組んで伏せ、上句の果が手切れの金、相手次第に貪つて、それを商法の樣になせしが、果は此事評判となりて、羽織ゴロ付と異名まで取り、何處へ行ても爪彈きされるに、東京の土地に住み兼ねて、遂に去年の春の初め、此の京都へと流れ込みしも、元より好鳥と見たならば、取て喰はん下心、外部は猫の如くなれど、內心は虎より恐ろしき狼野郎と知られける。

かくて其後は、日々獲物を探す中、不憫や件んの狼の、目に留まりしは例のお玉。大坂の角座の芝居で初めて逢ひし時よりして、はやくも越歷を通ドて置き、お玉が生花の稽古の爲め、武邊山と云へる人の家に、折々通ふを手掛りに、自己も其處へ這入り込み、年來鍛えし覺えの腕に、よりを掛けたる手練の

早業、元より水性のお玉なれば、見事掌中に丸め込まれ、それから後は一切夢中、火見櫓の首ッ丈、昇りつめたる先方の火の手に、此方は彌々煽り立て、小遣錢など少しつゝ、せびり取ては樂みしが、かくてはまだるしとや思ひけん。兼てより仝類なる、士族上りの無頼漢、柳田茂と云ふ者と腹を合せて一ト狂言、書いて見たのが大當り、慾張り切た夫婦の者が小氣味の好いほど謀にはまり、戀の暗に踏み込だ、娘のお玉が思ふ坪、餘所へ嫁くのが嫌ぢや故、連れて逃げての紋切形。オヽ合點と早呑込み、手に手を取て東京へ、高飛すれば其後は、一ッ穴の柳田が引受け、娘の居ない弱味に付け入り、のッ引きさせぬ手詰の談判、罰金として五百圓、まんまと此方へ卷き上しが、まだそればかりで飽き足らず、お玉を散々慰んだ末、否應云はさず新吉原へ、前借三百圓で賣りこかし、それをば二人が山配にして、跡白波と失たるが、此處に憐れを止めしは、財兵衞夫婦に娘のお玉。——器量自慢と慾深が、其身に報ふ因果觀面。彼は財と娘を失ひ、是は其名と身を汚す。——是はた誰の罪ぢややら?

此事忽ちパッとありしが、常から自慢の一人娘、小面憎しと思ふ人々、誰とて氣の毒がる者も無く。清水樣の申し子なりやこそ、生ながら極樂へ行たげなト、京童子の噂取り〳〵、評判や〳〵。

（完）

◉母心

嵯峨のや主人

○第一回　きぬた

俗事紛々の世に立てば、人は時ありて浮世の事を忘れて、造化の懐に眠るのも必要なり。一年余は故ありて相州腰越の里なる賤が家に露の宿かりて住し事ありき。家には六十路の坂二ッ三ッ越し白髪の老女、と其孫なる七歳の稚兒との居るのみ。哀なる老女は去歳の秋唯一人の男兒に先だゝれて、今は甲斐なき命ながら孫と二人、嫁の手一ッにて養はるゝなりとぞ。稚兒の母は姑と我子とを養はんが爲め、東京にゆきて働き居るなりとぞ。如何なる事を働き居るにやと問ひぬれども、其はお恥かしき事なればと許、語らざれば強ひても問はざりき。老女は最も健やかなる質にて、朝も夙に起き、夜も遲く寢て、賤の手業の糸車、或は衣縫ひ或は苧を績み、休む事なく働けり。孫の兒は最も可憐なる容貌にて、又最も健やかなるが、同じ年頃の稚兒と能遊び、又老女の使ひなどして、終日家の周圍をかけ廻はれり。余も又日毎に名所舊跡の埋るゝを探りながら、三浦鎌倉の峯々谷々、津々浦々をかけ廻はりて、或は古戰塲の賦を歌ひ、或は古を吊し今を喜び、或は山の容水の姿を賞して造化の大文章を味ひつ、終日家には居らざりき。今日も今日とて朝より片瀬江の島の邊を徘徊し、夜に入りて歸り來れば、折しも秋の月半天にさへ渡りて長汀曲浦の眺言はん方なく美し。左には江山連なりて波濤の形を爲し、右には相摸灘の水渺

々として天を照せり。岸邊に寄する波の音は、どう〳〵として耳の垢を洗ひ、浦風に吹く松の聲は、颯々として天の時雨をさそへり。顧みれば江の島には宿屋々々の燈火、星の如く月影におぼろなり。嗚呼江山江水の眺、天下の美何ものか之に若かん、余は造化の懐に大なる造化の物語を聞きながら、半ば眠り半ば樂しみつゝ徐々として歸り來りぬ。小ゆるぎの磯をこゆるとて、北條氏康の

きのふ立ちけふこゆるぎの磯の波いそぎでゆかん夕暮の道

といふ歌も思ひ出され、七里ヶ濱に荒波の寄せては又返す時、雪山の碎け飛ぶ歟とも思はるゝを見ては

袖の浦にたまらぬ玉の碎けつゝよりても遠くかへる波かな

の定家卿の歌も忍ばれて面白し、斯て我下宿近くなりける時、たゞさへ寂しき山里の秋の夜に、砧の音の天に響きていとも寂しげに聞えたれば、扨は又老女が例の衣うつと覺ゆ、嗚呼いつ聞ても哀なるは砧の音、長安一片月、万古擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、といふ唐詩、其處とこゝとは事情も異なれど、此音は都にては聞かれず、此趣味は都にては味はれず、あゝ何となく心もすみて哀まさる、と思へば感に堪へ難く一首の詩を作る、

夕されば木枯軒を音づれて、月影まよふ葎の下。
白雪を髪にけづりて姥一人、月見がてらに衣うつ。
老の手のわがればうつる砧の影、槇の板戸をゆきかひて。

はら〳〵と落つる木の葉の村雨は、月すむ夜半の時雨かも。
ふり注ぐ老の波のいと深く、老の想のいとゞほく。
越方もまた行末も忍ばれて、かわかぬ袖に月やどる。
あゝ哀れ秋の恨の小夜衣、誰が爲とて歟うつならん。
あゝ哀れ砧の音の天高く、老の想をのせてゆくらん。

然り千聲万聲の砧の音の、遠山彦に木精して、遥の天に消入る如く、老女が想も之に和して、遠き昔を繰返す、六十餘年の春秋や、笑の花、涙の雨、嗚呼喜怒哀樂愛惡慾！ 覺むれば月の影、迷へば雲の波、照り、曇る、それがそも人の心歟？ 覺め、眠る、それがそも浮世歟？ 戀、命、色枯て鬢の霜！ 今將何を歟惜む？ 思へば〳〵夢一時、されど思へど捨難きは恩愛、此兒可愛ゆし、此兒可愛ゆし、と砧に老のひでを打つ、袖や涙にしぐるらん。

余は砧の音を聞きて老女の心を想像し、自ら老女の心になりて、想を蒼天の月に訴へ、ゆくともなく歸るともなく、月にうかれてぶらりぶらりと歸り來て、假の宿なる賤の伏屋の枝折戸開てずッと入り、

『お婆さん今戻ッた。』

言へば老女は砧の手を止めて笑を作り、『おや、是はお歸りなさいまし。大層お遲いから如何なすッた歟と思ッて居ました、今日は何邊へお遊びで。』『今日は陣鐘、親不知山を越へて、片瀬江の島に遊んで

居たが、日が暮てから餘り海邊の景色が好から、ついうか〳〵とぶら〳〵來たので。大きにおそくなりました。少さいのはもう眠たの。』『はい、もう眠ました此兒はもう晝間わッぱすッぽしますから、夜はまるで死だ樣で、あの通りたはいもございませぬ。』といふ老女の貌を見れば莞爾々々と微笑めり。話も孫の事は嬉しと見ゆ、余はのびあがりて、さし入る月影に照させて、おさな兒の姿を見れば、其貌の可愛らしさ、頬の肉の肥へて二重腮のぽちや〳〵、株切の髮の毛の額際に散り亂るゝ松の綠、無心すや〳〵と眠る貌、……朋友と遊びの夢でも見し歟、にこ〳〵と笑へば現はるゝ頬の靨、其には愛敬の波をたゝへてほろ〳〵と溢るゝ月の雫、掬はゞ手にも掬ばるべし。嗚呼何といふ可愛き兒ぞ、他人の吾さへ斯斗可愛きもの、肉身の祖母には其筈と思ひやりては哀に覺えぬ。袂をかいさぐりて獨樂とゴム鞠とを取り出し。『お婆さん、是は江の島で買て來たのだが、明日起たらやつて下さい。私は此兒のにこにこ笑ふのを見るのが實に愉快だ。』

老女は之を見て甚く喜び、『おや、まあ難有うございます。是はまあ、嘸喜ぶでございませう。此樣好お土產を戴てチホヽヽ、何も知らずに眠て居ること。』

言ひてさも樂しさうに、其寢貌を眺め、土產を枕元に並べて、明日目覺めし時咄嗟其を見せて喜ばする用心、何事もおさな兒の心を心とする心、是も老ひたるおさな兒なり。

余は其間に立て自在にかゝれる藥鑵、燒火の煙にて煤だらけにありし藥鑵より、糸底に落花一輪の燒附

てある、有ふれた茶呑茶碗のしびだらけなるに注ぎて茶を呑む、こゝが田舍のしんしやうなり。『あゝ好月だ、寢るのは惜しい樣だが、何時迄見て居ても同じ事だ。どら寢やう。お婆樣も宜加減に寢なさらぬか?』『はい、私も仕舞て伏せりますが、旦那は御遠慮なくお先へ。』『さうかい、其ではお休み。』言ひ捨て余は伏床へ入りぬ。老女は四下片附くる樣なりしが、既にして寢に就きたるか、暫くして音も聞えずなりぬ。後は木枯の音の颯々として、神すみ、氣きよく、心無窮に通ふ……嗚呼田舍、田舍!田舍は我爲めの安息の地なり。

○第二回

秋風の松に叫ぶ聲、小川の水の石に觸るゝ音、耳に響きて余の夢ハ破ぶれぬ。枕を擧て見れば旭日三竿に高く農家の子弟久しく野に在るの頃なりけり。衣を改めて室を出づれば、老女は椽に在りて糸を組み居たり。『お早う、相變はらずれ稼だね。』『はい、もう仕方なしにね、郎君アハヽヽヽ。』老女は最も快活に打笑ひける。余は收納塲へ出て古井の水を汲みあげ、其を手水盤に注ぎて貌を洗ひける。此時外面にありて朋友と遊び居たる我可愛き兒、二郎は我姿を見て飛んで來にける。『山中樣、今朝有難うよ。予大變に嬉しくッて仕樣がないのだ。』言ひながら咄嗟余に飛び附きて、下より余の貌をふり仰ぎて、さも嬉しさうに微笑ける。嗚呼其風の可愛らしさと言ては、余は覺えず抱へ擧て頬に接吻をなしたり、見れば手には余の與へし獨樂を持ち居け

る。『獨樂が廻はるかへ?』『あ丶廻はるよ、廻はして見せやう歟?』二郎は莞爾々々笑ひながら、紐を眞棒より胴に巻附終りて、威勢よく、『宜かへ山中樣、見てお居で。』と引て廻はしぬ。獨樂のくる〳〵廻はるのを見て、『どうだ、紐を眞棒へ巻附て、其を一寸引た計で、此獨樂が自然に斯廻はるとは不思議だらう、予は斯いふ術を知て居るのだ、』と言ひさうな貌で、さも嬉しさうに得意の體なり。余は微笑ながら、引て廻はすのでは不可ん、其は女廻はしだ。打附で廻はさなくては。』『打附? 打附とはどうするの?』『打附とは斯さ。』余はして見せける、其にては二郎には廻はらざりけり。余が二三度手を持てして見せたれど、尚まはらざりけり。

余が再度廻はして其を手に取れば、獨樂は掌で廻はり居るに二郎驚きて、『やあ、掌へのッかるの、やあ奇妙だなあ、やあ面白いなあ!』『手をお出し、お前の掌へ乗てあげるから。』差出した二郎の掌へ乗せてやれば、驚きて手を引たれば、獨樂は地に落て消へけり。『何故手を引くの』『だッてくすぐッたいもの。』『今度は手をひくのではないよ。』再び手に取て彼の手にうつしてやれば、今度は覺悟せし歟、手を引ざりき。獨樂は掌でくるくる廻はりける。二郎此樣子を見て、面白い面白いと叫びける。余は紐を彼の肩へ掛て、家へ這入り去れば、二郎も余の後を追ひて家へ入り來り、祖母に向ひて如何に打突で獨樂を廻はす事のむづかしき歟、如何に余

が掌で廻はす事の巧なる歟、如何に掌へのするとくすぐッたき歟を、さも一大知見でも發見した歟の如く說ける。嗚呼是等普通の事が、皆おさな兒の爲めには新しき事にて、彼等は鋭敏なる眼もて、總て是等の事に注意しつゝ、斯して其知識を知らず〳〵の間に發達さするなり、愛らしきは誠におさな兒ならずや。斯て余が朝餐の膳へ坐り居れば、彼は又余の傍へ來て離れざりき。『鞠は持て居るかへ?』『お持て居るよ。』

言ひてふくやかに見えし懐より鞠を取出して見せながら、『だが予には突ないや。』『突なくッても宜い、其は突く爲めのではない、投ッこする爲めのだから。』『むゝ投ッて歟、其なら予にも出來らあ、後でやらう、ね、山中さん御膳喫て仕舞ッたら。』『むゝやらう。』

余が言へば二郎はもう獨樂は片脇へ置きて、更に新しき鞠投遊をやッて見んと、待遠さうに余が食の終るを待つ。斯る所へ。『郵便!』

配達夫郵便を投込みゆく。是東京なる友人の元より余に當て出したる封書なり。

余は俄に東京へ往かざるべからず。其は余等の友人十七八人相集りて戯曲改良會を設立せしが、愈明日を以て發開の日と定めたればと報ド來りしに因る。『お婆さん、私は二三日東京へ往て來なくては』『おや、さやうでございます歟、其はまあ。是から直でございます歟?』『あゝ直だ、尤も明後日は歸て來るが。』『あゝ左樣でございます歟。』

二郎此事を聞て悲しさうな貌なり、『山中さん東京へゆくの、不可いなあ、往ッちや不可い、厭だ、往ッちや。』

余の袖を扣へて離さゞりけり。『其樣事を言ては不可い。山中樣は御用が出來たのだから。ね、其代り明後日は歸て來る、直だ。』

余は二郎をすかし、老婆に暇を告て、倥偬仕度をして表へ出づれば二郎も後を追ひて出で來り、『山中樣、では早く歸ッてお出よ。』『うむ、早く歸て來る。サアーベルを土産に買て來てやらう。』

可愛ゆし、可愛ゆし、二郎莞爾として余を見送る余は彼を殘して十二三歩ゆきしが、突然彼を顧みて、

『おい二郎、鞠をお投げ。』

二郎歡然として之を投げぬ、余は之を受取りて、更に又之を投返し、『あばよ』

余は途にて車を傭ひ、走せて鎌倉の停車場へゆく。恰も好し、汽車は發車前五分前なり。直に切符を買て之に乗込む。瞬間にして汽車はゆるぎ出ぬ。瞬間にして鎌倉を離れぬ。首を回らせば左右皆村落、遥かに見る前村の狹路斜ならんとする所、數個の村童麥車を追ふて叫びゆくを。嗚呼愉快、愉快！電飛風走は汽車の快あり。

○第三回　此女は誰

『おい山中、君が餘りゆかう〳〵言ふから來たが、これ見玉へ、發車迄は四十五分あるから。』『しまッ

た。然し仕方がない、待合室で待て居らう。』

余は腰越の下宿へ歸るのにて、友人石川は横濱へ所用ありて赴くなり、我等は待合室へ入りて、長腰掛に腰を落したるが、此時未だ一人の客もあらざりき、發車までは頗る間あればなり。石川曰く、『美人でも居れば品評會でも開くに、一人も居らんとは驚たね。』

此時十六七の少女、其兩親なるべし、四十前後の夫婦らしき人に添ふて入り來る。『噂をすれば影だ、來た。』『成程器量はさのみでもないが、鬼も十六、山茶も出花だ、あは〳〵〳〵』

石川は磊落の男兒なり、無遠慮に高く笑ひけり。暫くする間にどや〳〵と一群の人入來りぬ。三十以上の男、黒のフロックコートの新しきに、時計の金鎖をちら〳〵胸間に輝かせしは紳士なるべし、いか樣亞米利加歟歐羅巴へでも行くものと覺しく、多くの人は彼を取捲て名殘を惜む樣子なり。廿五六の婦人、額の生際そろひて、眉の匂やかなるが、鼠縮緬の袷に繻鎮の上等帶お太鼓に結びたるが、七八歳の女兒の手を牽きて紳士の傍に引添ふは、其細君なるべし、夫に代りて人に挨拶をして居りし。蓋し夫を横濱に送るならん歟、一時間の後には、彼等又千里袂を分つの人なり、其心思ひやるべし。斯る所へ又一人の美人、衣裳の着こなし如何にも意氣に、擧止如何にも洒落たるが、男に包を持せて入來りし、男は包を置きて歸り去りたるが、其時件の女は、姉樣に宜敷といふ一言を言告せり、屢壁間の時計を望みて、待遠し氣に發車の時間を待つは、何處へ急ぐものにや、眉匂やかに、鼻附可愛らしく、口元に愛敬あり

て、目に利發見え、首筋立延びて、指などのほそ〴〵としたるは、多く得難きの美人なりと余は思ひぬ、其後よりも多くの男女出たり這入たりなしたるが、孰も綺羅やかに裝ひ飾りて、正月見る樣に華美なるは、世は中々に驕奢になりたり。

既にして發車の時間となりぬ、余は石川と相携へて下等室へ入りたり、待合丈は上等室に居たれど。前きに見し人達とは一人も乘合せざりけり、汽車は瞬間にしてゆるぎ出ぬ。瞬間にして橫濱へ着きぬ。石川は余を置去りにして、然らばとて降りぬ。又瞬間にして鎌倉へ着きぬ。余は徐歩して下宿へ向て歸り去りたり。往きて我下宿五十歩計りになりける時、轆々として一輛の車の我後より來るを見たり。車が我傍を走過る時、余は車上の人を一目見て驚けり、是前きに停車場の待合室に、屢壁間の時計を見て、往手を急ぐ風わりし美人なりき。余は目を以て之を見送りたり。見送りて再度驚けり、車は我下宿の前にて止まりたれば。余は疾歩して近附きたり。此時家の內より二郎は聲を擧て飛び出せり、足よりは胴が前に、胴よりは頭が前に出て、今にも中心を失ひて地に倒れぬ計に、兩手を前へ差出して、此時彼の株切の髮の毛の風に亂るゝ風の如何に愛らしかりし歟、滿面に喜びと笑の波をたゝへて、……彼余の姿を見て飛出せし歟、否、彼は全く余の此にあるを知らざりき。彼は今車よりおり立てる婦人を望んで飛び來りし。彼女は二郎を見るや、包も何も車の上へほかし出した儘、急ぎ足にて二郎を迎へぬ。二郎は瞬間に飛び來りて、母樣、母樣！と呼びて彼女に飛着きたり、彼女は二郎を抱へて、しつかりと引寄せけ

る。恩愛の涙はほろ〱として二郎の頭にこぼれかゝりし。余は二人の涙慟する聲を聞きたり。家の內より老女は草履と下駄とをちんばに穿て、あへぎ〱出來りける、老女も余の此にあるを認めざりき、其唇よりは『おやまあ〱』といふ聲洩れ聞えける。

○第四回　親心

余は室へ入りて机に凭りて坐せり、實は二郎並びに其母親及び其祖母に意を注げるなり、其時母親は祖母の前に手を突て、『もう疾から一寸參らう參らうと思ッて居て、其で出拔る事が出來ないのでございますよ、もう此兒が此樣わやくでございますから、如何樣にお婆樣がお骨が折やうかと思ッて、心配で〱なりませぬけれども……』

祖母はにこやかに目をもて二郎を見ながら、『否いお前、此頃では飛んだおとなしくなッたよ、外では隨分惡戯をする樣子さ、然し家へ歸ると餘り世話をやかせないのが感心だよ、何卒賞てやッておくれ、宜お婆樣のお使をするから』

母親は之を聞て喜ばしさうに、二郎の頭を撫でやり『さうかい、お前おとなしくおなりかい、何だ歟あばれて、お婆樣にお世話をやかせさうだね。』

二郎は默して頭をふりながら、母親の膝に取附きひッ附きて、不行儀に兩足を投出しながら、珍らしさうに母親の貌を眺むる。恰も『如何して予の母樣は、家に居る時には彼樣に汚なかッたのに、今では此

樣に立派になッたのだらう、東京といふ所へ往さへすれば、誰でも斯立派になれるのかしら』と思ふかの如く珍らしさうに、又喜ばしさうに眺むる。祖母は樂しさうに其風を眺めながらも、流石に年寄丈に、

『これ、二郎や、さう母樣に取附きなさんなよ、衣服が汚れるわな、澤山もないのが。』

されど母樣は咎もせざりし、二郎も又膝から降んともせず、久しぶりにて母に遇ひしあれば、心は無上に嬉しいのなるべし、手を引張て膝から後へ引くりかへる樣になッたり、袖に取つかまッて、譯もなく無闇に引張て見たり、又ふと衣の手ざわりの柔きに驚きて、しげ〳〵と目を止めて見たりして居る、祖母も强ては咎んともせず、嫁に向ひて、『其にね、毎度有難うよ、送るものを送ッておくれで。』『如何致して誠に少ないので、もッと如何かしたいと思ひますけれど、如何もさう參りませんので、何卒勘忍して下さいまし、今にもう少し都合が宜なりますと、もッと如何歟致しますから。』『なんのお前、あれで澤山だよ、私もね、少しでもお前の手助をしやうと思ッて、此節では一生懸命稼で居るから。』『おや左樣でございます歟、濟ませんねへ。何卒體をおひとひなすッて下さいましよ、幾ら御丈夫の樣でも御年が御年ですから、是の世話をする丈でも充分一人前の骨折でございますのに。』と言ひける。世間普通の嫁姑は、寄ると觸ると犬と猿の樣だと言へども、之は然らず、嫁は舅を思ひ舅は嫁をいたはる誠に有難き心ばへなり。されど二郎には其樣事は分らず、母の衣の襟へ兩手をかけて引張ながら、仰向て、

『母樣、歸て來たの、え、母樣?』

母親は之を聞くと俄に頭を二郎の貌の傍へ差寄せて、莞爾微笑ながら。『あゝ、歸て來たの。嬉しいかい？』

二郎も莞爾して、『あゝ嬉しい。』

母親は暫く考ふる様なりしが、小兒を僞るはわるしと思ひけん、又斯言ひける、『だが母様は又ゆくのだよ、一寸お泊りに來たのだから、母様が往た跡でも、お前はおとなしくお留主居して居るのだよ。』

二郎は之を聞くと如何にも悲しさうに、泣きさうな貌になりける。母親はいた〳〵しげに之を見て、周章て抱き寄せて、『だが今夜はお泊りをするから宜だらう？え、今夜はお泊りをするから。』と慰むる様に言ひける、されど二郎はおいとも言はず力なげに俯向て歎息の様に　『不可いなあ！』と低聲で言ひける、其聲は如何にも哀はれに泣さうなりし、此一言は悲母の心を碎くべし、母親は堪難げに諭す様な調子にて、『不可くッても如何も仕方がない、お前ももう七歳だから、ようく聞分ておくれよ。母様が東京へ往て働いてお金を取らなければ、お前もお婆様も御飯をたべる事が出來ない、御飯をたべなければお腹が空る、お腹が空れば、さうすれば、そら、そら、お乞食、お乞食に……』

後は言ふ能はず、一滴の紅涙をはら〳〵と二郎の貌へおとして、其儘貌を反くる。二郎おさなくも七歳なり、母の言葉心に徹して、之も目には涙、下唇を突出してキット斗口を結びて、ドゆつなさを堪へるいぢらしさ、之れを見る母の心は如何に？祖母は得堪へず泣出しける、余も此方の室にて貰ひ泣せり。

暫くして母親は涙をおさへて『分ッたかへ？』

二郎は點頭くなるべし、母親はいと惜氣に。『分ッた？好子だ、利口者だ』言ひて其頭を撫でやりしが、ふと氣の着きし樣に、『あゝ、母樣はお前にお土產を持て來たのだッけ、すッかり忘て居た、お前一寸立て、彼包を持て來ておくれ。』

二郎は立上りて、よた／＼と大きな包を持來る、母親は風呂敷を解て、鐘馗の假面、立烏帽子、繪雙紙、錦繪などいろ／＼取出して之を與ふれば、二郎は忽ちにこ／＼となりて、『お祖母樣、こら、此樣に母樣がお土產を、母樣、之は鐘馗の假面かへ？』『あゝ鐘馗樣のお假面、鐘馗樣は强いのだよ、お前もさう强くおなり。』『あゝなるとも。是は烏帽子だね、烏帽子はえらい人が被るのだね、予はえらい人なのだ』

言ひながら鐘馗の假面を被り、烏帽子を戴て、目を張り、口を結び、肩を怒らせ、大足に步て『母樣、如何だ、予はえらい人だよ。』とえらい人になッて見すれば、母も祖母もいつか今の悲を忘れて、又莞爾々々と面白さうに笑へり。二郎は又假面をかなぐりすてゝ、錦繪を廣げて見て、愉快さふに叫び聲をあげて、『やあ、奇麗だなあ、天子樣だな、皇后樣や何歟と花を見て居らあ。』『見て居らあではない、御覽になッて居らッしやるといふものだよ、』と母親が直してやりける。二郎は小聲で、『御覽になッて居らッしやるのだ。』

又大きな聲で、『宜なあ！　好んだなあ！　之は何？　此御本は？』『其は繪本太閤記。』『繪本太閤記？太閤秀吉のだね、やあ此奴は槍で突かれて、面白いなあ、面白いなあ。』と叫びしが、やがて其土產を一抱にして余の室へ入り來り、『山中樣、こら、母樣に貰ッた。』言ひて誇氣に莞爾々々貌なり、余も覺えず微笑て。『其は好かッたね、山中樣もお前に土產を買て來たよ。そら約束のサアーベル、其からもう一ッは馬。』

二郎之を見て躍上り、『やあ是は有難う。宜なあ、之は好のだなあ、今日は大變に好物を貰ふ日だなあ。山中樣此サーアベルは拔るの？』言ひながら拔て見て、『やあ拔た斬れるかへ之は？』『斬れるとも首でも何でも斬れる。』『さう有難うよ、予は之で戰に往くのだ。』

言ひてサアーベルを腰にさし、烏帽子を戴き、假面を被ぶり、馬を牽て彼方の室へゆき。『母樣、お祖母樣、こら、山中樣に貰ッた、此馬とサーアベルを、之はね、首でも何でも斬れるとさ』言ひながら拔てふり廻はして見する、此に至りて笑聲家內に滿つ。嗚呼泣も笑ふも子故なり、是が親心、是が親心。

〇第五回

夜に入りては月葎の窓にさし入り、風林の梢をゆすりて、寂しさ一しほまさるめり。二郎の祖母と母と

は、塵ばみし小箱の上に乘せし小やかなる洋燈の前に相對坐して、生活の話など始むるなるべし。二郎は母が土產の繪本を取出して、母樣是は如何した所と心なくも繪釋を聞きて、二人の話を妨ぐるなるべし。母は餘議なく談話を中止して、其繪釋をして聞かするなるべし。斯て又繪釋も終りぬれば、二郎は東京の事など聞始むるなるべし。母は小兒の心に面白さうな事丈かい摘みて、話をしてやるなるべし。然して其話は小兒の心には耳新しければ、其想像を驚かして感情を養ひ、其智識を擴めて智慧を增するべし。其中に二郎の上目と下目は中よくなりて睡を始め、終には母の膝を枕にすや〳〵と寐入るなるべし。母は靜に膝を引て二郎を疊の上に置き、床を敷て其上にころがすなるべし。久しぶりにて、我手にかけて、此兒を寐かす事は嬉しけれども、明日は又置去にしてゆく事歟と思へば、親心は悲しくもあるなるべし。余は總て是等の有樣の實見者なりき。

彼女は二郎を寐かして後、余の室へ入り來りて、老女とおさな兒が世話になる旨を簡單に述べて、又隣室へ去にき。此時余は彼女は東京に在りて何を稼ぎ居るにや、見破ぶりてやらんと注意したれども、如何も判定に難かりき。彼女も又余が晝間停車場の待合室に居たるは知らぬ樣子なりし。余も必要なければ一言も此事は言はず、唯簡單に老女の世話にある旨を述べたるのみ。其より彼女は姑と共に何事を歟しめやかに物語り始めき。

余は間もなく睡くなりたれば床へ入たるが、元來非常の寐坊なれば、一度眠れば死んだ樣なり、大山崩

れかゝるも容易には知らず、翌日目覺し時は例に因りて旭日三竿の頃なりき。二郎も母親も家に居らざれば、何處へゆきしと聞けば、今朝早く起て江の島の辨天へ參詣しといふ。

晝頃になりて車の音轆々と表に響きて、我下宿の前にて止まりしと思へる時、『祖母樣歸ッたよ、祖母樣！』と二郎先づ飛んで歸りて、幸の滿てる莞爾莞爾貌にて、『之はね祖母樣にお土產、お肴だの何歟、種々おいしいものが有るよ、予は澤山喫た、母樣は少しも喫ないのだよ、皆お祖母樣に持て往てあげるッて』

祖母は淚を浮べながらころ〳〵と喜び、『おゝ二郎戾ッた歟、よく早く。』といふ所へ二郎の母も歸り來る、之より江島の話など始まるなるべし。

午後になりて二郎の母親は、何時迄居るも名殘は盡じ、日の暮れぬ中に東京へ歸らねばとて、愛を割て出ゆきける。嗚呼其時如何に二郎は之を戀ひ、之を慕ひて悲しみし歟、又彼の母も、祖母も、如何に其別を惜しみし歟、哀なる母親は、『又其中におとまりに來るから』と二郎をすかして、ふり返り〳〵出ゆきたり。嗚呼見返る人、見返る人、孰れ劣らぬ哀別離苦、と曲亭の翁なら歌ふ所なり。彼女の出ゆきし後は、老女と小兒とを慰むる役目、自ら余の肩にふりかゝりぬれば、余は種々と二人を慰めぬ。老女は淚ながらに言へり、『あれは誠に貞女です、私を大變にやさしくしてくれます、私は嫁とは思ては居ません、眞個の娘と、郎君眞個の娘と、……』

後は泣聲にて分らざりし、余は種々に老女を慰めたれど、信用に乘じて他人の秘密を聽は好まざれば、彼女が東京で何を稼ぎ居るにや、其事は全く問はざりき、二郎はおさな兒の事なれば、余の慰めに慰められて母の事は忘れし如く、否寧ろ忘れんとする如く見えしが、其中朋友の誘に來たるや、烏帽子を被ぶり、サアベルをふり舞はして飛出したり。余も家に有る事の面白からねば、下宿を出て鎌倉の方へ遊びにゆきたり。

親不知山の麓を過ぎ、極樂寺の切通へ出ぬれば、天高く、風冷かに、巖苔蒸して清水蕭々たり。嗚呼我先きに家庭の笑と家庭の涙とを見て、今此秋風淅々木葉黄落の境に入る、胸中如何で歟寂寞の感なからん、嗚呼茫々たる宇宙の間、我は父母もなく、兄弟もなく、姉妹もなく、煢々たる孤獨の身なり、心搖々として旌の竿頭に懸るが如し、嗚呼父母欲し、兄弟欲し、姉妹欲し、人生の快樂は唯家庭の中にあり、人間の眞成なる生活は唯家庭の中にありて存す、吾之を失ふ、之生活なきなり、之生命なきなり、之迷路の人なり、と坐ろに胸中の悲愁を訴へて、靜に靈山に登る。斷岸絕壁の上に箕居して、相洋に向て嘯けば、波濤千里、巖を打て大に至る。

嗚呼蒼海々々、汝の怒濤白浪は何の處に起り、何の所に向て去るそや？何の時に始まり、何の時に至りて終るぞや？、奇鬼の怒り、怪獸の叫ぶが如く、恰も我を一呑の勢にて押來り、突然巖に當りて大に怒り吠へ、白沫飛散、冷々たる狹霧を面に吹かくる。此怒濤白浪は何の處より來りて何の所に向て去るぞ

や、何の時に始まり、何の時に至りて終るぞや、千里唯渺々、萬古唯茫々、誰歟其極を知るべき。

嗚呼蒼海々々、大なる哉汝の力、汝何等の抑壓も受ず、何等の牽掣も受ず、何の目的もなく、何の意味もなく、相打ち、相怒りて、山坡の鬣を梳り、相率ひて何の處へ歟向て去る、其大なる怒號絶叫は果して何を訴へんと欲する歟、千里唯怒號、萬古唯絶叫、我汝が無限の怒號絶叫を愛す。

嗚呼蒼海々々、吾今汝に對して、如何ぞ正大の感なからん。古人曰く、江湖の遠きに居ては其君を想ひ、廟堂の高きに居ては其民を想ふ、天下の憂に先だッて憂へ、天下の樂しみに後れて樂しむ、是君子の志なり、と吾素より碌々の徒のみ、然れども唯勉強古君子の風を慕ふ、恨むらくは才識の人にすぐるものなく、江湖に流落して空しく人生の行路難を歌ふ、嗚呼我實に人情の甘味を嘗めぬ、我實に眞理の高潔を信す、我實に天の慈愛を信ず、然れども又金錢の力をも知る。

嗚呼蒼海々々、汝は亦以て此浮世に譬ふべし、百萬の群衆が齷齪として東奔西走する有樣は、何ぞ波濤の相梳るに似たるや、其喧々囂々として何事を歟爭ひ、何事を歟叫ぶの聲は、何ぞ波濤の絶叫怒號に似たるや。蒼海々々、汝は亦以て大を蒼天と爭ふに足る、蒼天は燦然たる日月星辰をかけて、千古唯默々、萬里唯蒼々、汝が千古の絶叫と正に正反對をなす。嗚呼蒼海蒼海、我天が無窮の默と共に汝が千古の絶叫を愛す。

余胸中の悲歌を歌ひて、徐ろに靈山を降り、由井ヶ濱の浪打際をゆけば、夕陽極樂寺山の蔭に落ちて、

暮煙遠く海面を包み來る、即ち踵を廻らして歸りぬ。

余は尙ほ半月餘此賤ヶ家に泊り居たるが、此邊の風色にも稍飽ねれば、老婆と二郎とに別を告げて、再び東京へ歸り來りぬ。爾來二年餘の星霜は經れども、二郎一家の事は折々余の記憶に登り來る。（完）

◉銃獵　　松華庵主人

夕陽のさすがに寒むし小六月。銃獵の好季節は來れり、滿眸の黃葉山漸く疎ならんとし、征雁高く晴空に連なり、鳥語近く園林に優かなり、眞個に銃獵仲間をして、遊意勃々禁ずる能はざらしむるの季節とはなれりけり、余も亦實に此仲間の一人にして、好獵家としては、尤も拙劣なる獵師と云へる名稱と共に、夙に此仲間の中に知られたる者にて、九月十五日より四月十五日までの七ヶ月間は、實に余に取ての最上極樂の季節、一切の要務を放棄しても、猶ほ獵銃を肩にして、郊外に日を消さんとまで、此嗜好に耽けりしなり、凡そ人其嗜好する所に耽らんには、如何なる事も必らず上達すべき筈なり、然れども余は何等の不幸ある天質なりしにや、年々歲々此季節に於て、此嗜好を專らにせしにも拘はらず、年々

歳々我仲間の冷笑の種となりて、拙劣なる獵師と云る名稱を、取除くる事能はざりし、左れど余は巧妙なる獵師と云はれて贊稱されんよりも、假令ひ拙劣なる獵師と云はれても、倘ほ此嗜好を年々歳々長へに專らにするを得んこそ、中々に願はしき事なれと思ひければ、其技倆の一向に上達せざるにも拘はらず、遂に一年だも此樂しみを廢する事能はざりき、噫此頃の好季節、寧んぞ都門十丈堆塵の間、幽暗なる室裡に閉居して、讀書三昧に日を消すべき、余は實に日として獵銃を肩にし、郊外に嗜好を專らにせざる事はあらざりし。

一日、余は例に依て未明より起出で、眠ぶたげなる眼に不平の色を現はす車夫を急がし、南郊に向て車を驅れり、日は未だ出です、淡暗き夜の名殘は倘ほ世界を掩ひ、行路闃寂、唯稀れに見るものは、忙はしげに奔走する牛乳配夫と、新聞配達と、門の戶を守る犬とのみ、左れど是等の靜かに淋しき曉の景色は、余には却て此上なき樂しき感想の種とはなれり、蓋し銃獵には尤も早き朝の風光こそ、尤も適當なる時刻なればなり、車は間もなく麻布の果て、廣尾の里に着けり、余は玆より車夫を歸へし、獨露冷かなる、秋草の路を蹈み、土筆ケ岡より白銀の火藥製造所の傍の阪道を下り、水色風に寒き目黑田圃の畔道を經て、森々たる祐天寺の森、余が此朝に於ける目的の獵場なる、祐天寺の森に至れり、左れど東天の空は紅く黃ばみたる橫雲の、僅に闇然たる裡に染め出せるのみにて、夜は未だ全く明け放れざりし。」

余は正しく時刻を違へたりき、銃獵の時刻には倘は一時間餘りの間あるなり、左れど余が好みに僻する

や、尙其時刻の早きに過ぐるを喜びつゝ、徐ろに寺院の境內を經て、黑闇々たる傍の森林の裏に潛り入るに、晝さへ暗き松柏の林、況て夜はまだ明け切らねば、其暗き事云はん方なく、僅に手探りにして落葉の音の索々たるに、塒の鳥の夢驚かさじと、輕く步み、低く踏み、漸くにして森の南端、今日の獵場と定めたる、畑地に向へる所に出でたり、余は先づ木の切株に腰打掛け、夜の明くる間を待たんとする折しも、忽ち今來し森の奥に、怪しき一種の響颯然、跡は寂然として音なし。

余は實に吃驚せり、怪し、不審し、开も是れ何等の響、何等の音ぞと、疑ひ訝り思ひ惑ひて、彼異響の發せし方を注視するものから、闇々として一物の眼に映するものなし、余は愈々疑ひ、愈々惑ひて、ツト立上り、足音忍ばし、其方に向て步を移すに、又もや一種の響颯然、跡は寂然として音なし、其響は瀧の巖に激するが如く、波の岸を嚙むに似たり左れど此傍に瀧ある事を覺えず、素より海邊は遙に遠し、且つ其響は僅に一瞬の間なり、噫是れ瀧にあらず、波にあらず、果して何者、余は思はず悚然とせり、然りしかど、再び勇氣を皷し肩にせし銃獵取直して、其響の發せし方に向て步を移せり、折しも亦もや颯然洒然、而して其響は余が步を移すに伴ふて、斷續、漸く急に、響、漸く高し。

余は素より此世界に於て、怪物妖魔の存在する事を信せさる者なり、若しありとすれば、腦裡一點の迷心より湧出づる、一の幻影に過ぎざるものたるを信ずる者なり、然り、一たび迷想の支配の下に、其神經を狂はしめんには、孰れか怪物ならざる可き、何れか妖魔ならざる可き、路畔の石佛も怪物なる可く、

空飛ぶ星も魂魄とや見えん、然れども光風霽月、一たび此迷想の外に立つに於ては、萬物一も怪しむ可きものなし、現に余は斯く斷信する一人なれば、縦令ひ今黒闇々の裡より、異種異樣の響の、余が鼓膜を襲へばとて、毫も驚く可き譯あらざる筈なれども、恥かしや余は此時に於て、如何にしけん、一種異樣の感想起り、襟元より水など灑瀉けられしが如く、悚然として戰慄せり、左れど余は兎に角此異なる響の發する源を探らんと思ひければ、僅に勇氣を皷いて、音たてさせじと輕く落葉を踏みしめ、今其音の發する所を目的として、忍び寄り、而して老木の影より其方を窺ふと同時に、余が疑惑は忽ち釋然思はず半面に笑を漏らして、自ら我身の膽豆の如きを嘲りたり。

噫是れ變化にあらず、幽靈にあらず、實に我々人類の仲間の一人にてありし、暗淡たる森の中、素より明かに見えんやうなけれども、彼は今や正しく躶となりて、此林の古井の水を、汲上げ汲上げ、彼の水垢離とか云へる苦行に、其一身を犧牲として、何事かを祈願する者なるが如し、彼の颯然たる響、彼の洒然たる音、余をして一たび心膽を寒からしめたる妖魔は、全く彼れが其身を洗ふ水の響にてありけるなり、今は余が恐れは一切消え失せたり、左れど續いて起る第二の疑問、去るにても彼れは何等の事を祈願する者なるにや、男子か、將た婦人なるべきか、孰れにもせよ思切たる擧動、是れ必らず宗敎上の迷信より起れるに相違なし、現に宗敎上の迷信ほど人をして恐ろしき決心を起さしむるものはなしと、心中私かに嘆息しつゝ、更に其方を窺ふものから、木立間なく間を隔て、夜さへ全く明け放れねば、其風

姿確に見え分かず、去りとて傍に近寄りて、驚かさんも心なき所爲なりと、余は尚ほ老木の蔭に忍びて、彼れが擧動を窺ひ居りぬ。

忽焉として水の響は絶えたり、倏然として彼は倒れ伏せり、今や彼は正しく、其全身の熱血を灑ぎ、其全身の精神を凝らし、神の感應を哀願する者にやあらん、嗚呼愚かしきかな、迷へるかな、如何に神血を勞すればとて、有る可らざる神の感應、如何でか効あるべきと、心中坐ろに其志の誤れるを憐み、好める獵の事すら忘れて、其方のみ注視し居る中、夜は何時しかに明け放れて、森の鳥も栖を出で、朝風サツト落葉を吹いて、心地好き旭日の影、木々の木梢を紅う染め、暗淡らき森の裡も、何時しか明らかになりけるものから、彼は彼の古井の傍に、打臥せるまゝ尚起きも上らず、餘りの事に余は怪しみ訝かり、獵銃片手にツト立上り、木々の間を縫ひ廻ぐりて、見れば無殘、まだ十四五の小女、濡れそぼたれし腰巻一ツ、雪の肌惜しげもなう、冷かなる朝の風に暴露し、打臥せしまゝ息絶え居れり。

余は再び吃驚せり、今は物言はん暇もなく、最愛の獵銃すら投ぐるが如く傍に置き、忙てふためき走せ寄りて、辷る足元蹈みしめつゝ、抱き起して不圖見れば、憐れむべし色蒼ざめ、齒を切ばり、肌は氷の如し、如何なる人の娘ぞ、脱ぎ捨てたる衣の垢じみ汚れたるを見れば、富める家の人にはあらざるべし、何故の苦行ぞ、親の爲め歟、將た情夫の爲め乎、否々まだ十四五の小娘、情夫持つ謂れもなし、孝心深き乙女の、其親の病平癒を祈る爲めか、然らざれば家の不幸に就て、何事かを祈願する者にやあらんず

らん、孰れにもせよ憐れむべき限りなりと思ひければ、取敢へず余は、余が外套を以て彼れが身體を掩ひ温め、さまぐ〵に介抱する程に、其効にやありけん、彼れは間もなう余が右の跪に倚れるまま、忽焉として息吹返へし、眼見開きて訝しげに余を熟視せり。

余は實に世間渾る喜びよりも、更に大なる喜びを心中に感得しつゝ、同じく彼を見詰めたり。

余は此時に於て、始めて心着けり、彼は實に絶世の美人にてありき、隆き鼻、締れる口、眼は黒眸勝ちにして涼しく、眉は濃けれども左まで太からず、其貌状と云ひ、風姿と云ひ、高尚なる事梅花の如く、清艶なる事梨花に似たり、嗚呼此美、知らず誰が家の蕾の花ぞ、余は思はず恍然たり。

彼の小女は暫し余を熟視し、且つ訝しげに四邊を見廻はせしが、如何にしけん忽ち余が手を離れ、躁急しく立ちて、余が外套を脱ぎ、手早く彼方に脱ぎ捨て置きし、自が襤褸の衣を着換へ、細帯くる〳〵と結び了りて、直ちに外套を余に渡し、二三歩退りて一禮し、突立ちしまゝ彼の黒目勝なる涼しき眼キットト見開き、再び余を見詰め『貴郎は妾を如何したのです、貴郎ハ何處の人で何と云ふ名の人です』斯く突然問ひ出して、睨むが如く余を熟視せる風彩、美にして愛くるしき中にも、自ら凛乎として犯す可らざる趣あり、余は彼れが擧動の鋭きと、其言葉の強きとに、只管驚き感じて、未だ答へを與ふるに及ばざるに、彼は再び凛然たる聲を以て『貴郎は誰です、何處の人です、早く云て下さい、餘り遲くなると阿母が心配します、』余ハ斯く屢々先んじられて、愈々答へに躊躇せしが、漸くにして先づ過刻よりの始

末を簡短に語りて、更に語を次ぎ『乃公ハ菊川俊雄と云ふ者だが、シテお前ハ一體何處の人だエ、此村の者かね、寒空に向て來た今日此頃の時候に、然かも夜も明けぬのに、ナゼ彼樣眞似をするのだエ』優しく靜かに斯く反問を試みたり、小女ハ余が此言葉の本末を聞了はり、暫し頭を下げて沈默せしが、稍稍ありて再び彼の美はしき眼キト見開き『左樣でしたか、些とも知りませんでした、誠にドウも、何卒阿母に此事が知れないやうにして下さい、知れると病氣が』斯く云ひさしてホロリと暗涙一滴、余『ナニアノ阿母が病氣とエ、ハヽア分かつた、何だね、お前ハ阿母の病氣を癒したいと云ふ一心で、夫れでアンナ眞似をするのだね、夫れは好い心掛け、感心な事だけれども、如何眞似をして拜んだつて、神樣と云ふ奴は、承知して呉れるものぢやアないよ夫れよりヤア阿母が鹽梅が好くないなら、御醫者でも賴んで診て貰つて、ソシテお前ハ傍に始終ついて居て、藥を飲せて上げたり摩たりして、好く看護して上げた方が、ドノ位ゐ好いか知れハしないよ、夜も明けない中に、此樣な寥しい所へ來て、如此眞似をして居たら、今朝のやうな事どころでハない、まだ如何酷い災難に逢ふかも知れないから、モウ今日後如此眞似をするのぢやアないよ、だがマアお前の家ハ一體何處なのだエ』余が斯く諭す間、彼ハ始終默然として、折々彼の美しき眼を見開らきて、余を打見め、頻りに感服せし如くなりしが、余が最後の一言『一體お前の家は何處なのだエ』と云へる一言を發すると同時に、彼ハ頗る困却せし面色にて、阿母に今朝の事が知れると、又た何樣に鹽梅が惡るくなるか知れませんから妾の家ハ敎へて上げる譯には參り

ません、何卒今朝の事ハ秘密にして居て下さい』と、例の無雑作なる言葉と、強き語勢とを以て言ひ放つが否や、ツト立上り、極めて簡易に余に向て頭を下げ『マア待て』と云ふ間もあらせず、一散に彼方に向て走せ出せり、而して余が立上りて跡追んとする間に、彼が姿ハハヤ生繁げる立木の影に全く沒了して、今ハ其跡だに分かずなりけり。

磨かぬ玉の疎朴なる中にも、光ハ漏るゝ容貌態度、世慣れぬ言葉の野鄙なる中にも、孝義に厚く、勇氣に富む、凛乎たる氣象ハ自から滿ちて溢るゝ彼れが姿、是れぞ乃ち天眞の美、何々高等女學校の卒業生、才智秀いで、學問に長け、音樂に巧みに、舞踏がうまいと、束髪頭斜めに傾ぶけ、効能丈けハ賣藥の廣告よろしくと云はん計りなれども、其實腐れし肉を錦繡に包む、世の所謂る美人に比せんには、玉と瓦、月と鼈、嗚呼是れぞ眞個に美の眞の美と、余ハ遺憾き事云はん方なく、思はず恍然として其立去りし跡を目送せり。

爽快なる旭日の影に、樂しげに鳴く鳥の聲、冷かなる朝の風に、心なく飛ぶ落葉の音、此靜閑清冷なる林の中に、余は今や好める獵、否な一切を忘れて、彼れが立去れる跡を目送しつゝ、恍然として立ち盡せり。

朝獵の時期ハ既に了れり、彼の少女の事に係らひし間に、一發の銃聲をも試みざりし間に、然れども余が胸中ハ、非常の喜びを以て滿ち滿ちたりしなり、或る非常の獲物を射落せし時よりも、寧ろ遙かに喜

ばしき感情を以て、滿ち滿ちたりしなり。

彼の少女が走せ去れる跡を目送せる暫時の後に於て、余は此の滿々たる喜びの感情を懷いて、漸く深き森林の中を出で、兎も角も今朝の獵場と定めたる場所に於て、一發を試むべしと、足音忍ばして彼の畑地に向へる林の傍に向て歩を移せり、日は既に高し、鳥は既に餌に飽きて、何方へか飛び去りしと見えて、一羽だも見當らず、唯貌白とか呼べる小鳥の、小川に沿へる荊棘が下に、聲かしましく鳴囀づるを聞くのみ、余は流石に心面白からず、鬱然として祐天寺の森を右に眺め、畔道傳ひに目黒の方に行かんとする折しも、不圖目に止まる一羽の鳩、杉の林の間より、暖き旭日に向て、半身を現はす枯木の枝に、餌に飽き睡りを貪りつ、鞠の如くに羽をふくらし居れり、余は坐ろに胸躍らせて、足音盜すみ、息を呑み、姿を森の片蔭に隱くして、首尾好く間僅かの距離まで忍び寄り、片膝折りて的を定め、轟然一發、濛々たる硝烟の裡に落ち來るものは枯木の枝にして、鳩は翼を驚かしつ、忙てふためき飛び去れり、噫余は首尾好く拙劣なる獵師と云へる名稱を得るに至れる技倆を、例に依て實際に現はせしなり。

凡そ技倆の定らぬ銃獵者の銃獵ほど、賴みなきものはあらず、最初の第一發にして獲物を擊ち落さんには、其技の拙なるにも拘はらず、終日好く命中して、往々案外の大獵あるものなれども、其第一發にして擊外さんには、如何に都合好く獲物に遭遇するも、擊外づす事のみ多く、往々終日一の獲物をも得ずして、空しく歸路に就く事あり、蓋し余と同一技倆の銃獵者は、必らず余が此言の妄ならざるを感ずる

ならん、左れば今や余れ、此日の此大切なる第一發を打外づせし爲め、非常に失望せり、實に是れ此日の獵の前兆として、余をして非常に失望を感ぜしむるに足るものありければなり。

果せるかな、余れ此日正午頃まで、三四里の間を獵し幾發かを放てり、然れども終に一羽の鳩すら撃落す事能はざりしなり。

余れ失望滿々、再び祐天寺の森の此方まで歸へり來れり、不圖見れば路の傍に大なる翠の傘を掩ひかざせる如く、喬々として高く繁げれる赤松の根に、一軒の草屋あり、店にれあやしげなる文字を以て、酒めしと筆太に記るせる障子を看板とし、其蔭にれ、芋、蒟蒻などの黑ずみたる煮しめ、鮭の切身、鯡魚の赤黑く煮たるなど、凄じき佳肴珍味、幾品かを古びたる皿に盛りて排列あり、店傍の庭にれ、齡五十路許の老媼の、垢じみたる手拭を被ぶり、竈に向て火を吹き居れり、其狀如何にも風流にして長閑なり、余れ常に南郊に獵する折にれ、目黑の柏屋か、遠く立出でたる折にれ、三軒茶屋若しくれ多摩川二子の渡頭なる、龜屋を以て午餐を吃する塲所と定め置きぬれども、今れ不獵より生ずる失望の爲めに、近く目黑に赴くすら懶く、此風流なる草屋に、垢じみたる老媼を對手として、あやしく珍かなる佳肴珍味に、腹を肥やすも亦野興の一つならましと思ひ、且つ今も尙ほ愛くるしき風彩の、眼に刻みて忘られぬ、彼の少女が消息すら聞かまほしう思ひければ、『御免よ』と云へる言葉を先陣として、先づ其稍々奥まりたる緣端に腰打ちかけたり。

無類の貴賓（此家に取りて）の不意の來臨に逢ふて、驚き忙て、いそがはしげに被ぶれる手拭取りて、余が腰掛けたる傍を掃除よむる老媼に向ひて、余ハ先づ午餐を命じ、彼の珍かなる佳肴と鷄卵とを肴として、飯三椀を喫し了はりたり。

余ハ食事を了れる後澁茶に喉をうるほしながら、徐かに老媼に向ひ、朝來少女を彼方祐天寺の森蔭にて救ひし始末を物語り、斯々然々の少女の此村にありやとて、ゆかしきまゝ其風彩態度を詳に說きて尋ね問へり、而して余が此の問に對し、恐る〳〵老媼が說明せし事實ハ、凡そ左の如くなりき、若し此事實にして果して眞ならましかば、彼の少女ハ眞個に孝心深き、一の薄命不運の人にてありしなり。

老媼の言葉に依れば、彼の少女は素より草深き此田舍の人にハあらず、其父ハ岡野何某とて、海軍大佐の職を奉じ、或る軍艦の艦長をも勉めし人なりしが、幸惡くして、一年近海航行の歸路、豫て難所と聞えし紀州沖にて、其乘組める軍艦の、龍巻とやらん云ふ暴風に逢ひ、避くるに間もなく、船ハ陸地近く吹寄せられ、アナヤと叫ぶ暇もなく、忽焉暗礁に乘上げ、船體微塵に碎け、乘組員中僥倖にも濱邊に吹きつけられて、命を拾ひしもの僅かに四人、餘ハ岡野艦長始め、艦員孰れも水底の藻屑となりて、遺骸すらも見當らず、左れば空しき柩の東京青山に於て、多くの會葬者に送られ傷しき名譽の碑を、同墓地に建設する事とハなりにき、此際岡野の妻女ハ姙身中なりしが、夫が最期の凶報に接するや、悲泣の餘り悶絶せし事も幾度か、漸くにして親族及良人が親しう交はりし人々の、諫め奨ます言の葉の默しがた

くて、空しき柩を青山の墓地に見送りしものから、夫れより後も折々は、失望落膽の餘り、我身を恨み、世を果敢なみ、同じ道にと思ひ迫まる事もありける、斯くて此凶聞に接せし翌々月、產氣付きて玉の如き女子を生み落せり、是れ即ち彼の少女なり、去りける程に、悲哀落膽の餘り、多く健康を害ねし上に、今又た初產の難產なりしより、產後の肥立ち思はしからず、憂ひの床に敷妙の、涙の袂乾く間もなく、日に幾度か悶絶して、夢幻の境に幾日かを送りしが、產み落したる女子を梅子と命けたる命名の祝の日までは、兎や角持耐へしも、其翌日より俄に容體六かしくなり以て行き、流石に譽高き海軍の大醫も匕を投げ、其翌々日の夕暮には、終に良人の遺寶愛子の笑貌すら見るに由なく、溘然として息絶えたり。

岡野大佐は素より廉潔の士にして、家には遺財のなかりしのみか、不幸にも親族皆な赤貧洗ふが如き人々のみなりしかば、今大佐及夫人の死後、其遺子を養はんにも、乳母を置くの力ある者一人もなく、況して大佐の家邸家財道具は、大佐が生前に、船乘の身は何時如何なる災禍に遭遇するや預期し難きものなれば、預め遺言し置くべしとて、云ひ遺されし言の葉に從ひ、皆な賣却して悉く負債の辨償に充て、尚又恩賜の御金は、親族中腹惡しき人の奸計を廻らして、橫取りしたりければ、薄情や此の不幸なる少女の爲めに、其養育を擔はんと云ふ者一人もなく、果ては僅か許りの金子を添へて、捨つるが如く此の目黒村なる柳田彥兵衞と云へる水呑百姓の許に、養女にとて遣はしたり。

此浮薄殘忍なる親族の人々の心根に引變へ、彥兵衞夫婦は誠に慈悲深き性にて、家に在りては六十に餘

る老父に仕へて孝心深く、外に出でゝは必死となりて夫婦共稼ぎに稼ぐの外餘念なければ、水呑ながらも都合好く、裕かに其月日を送り居りしに、此頃二才になる其愛子を亡ひ、甚たく嘆き悲しみし折から、計らず這度故ある人の遺子、梅子を貰ひ受くる事となりしなれば、其喜び云はん方なく、生みの子よりも最愛とて、養ひ育つる程に、素より下賤の種ならぬ梅子は、只に其風姿の美なるのみならず、氣象の鋭さ、才智の優れたる、五ッ六ッの頃より、村の評判となる位にて、彦兵衛夫婦は、末頼母敷事に思ひ、其七才になれる春より、村の小學校に入學せしめしに、其學才に富める、他に比類なく、教師をして、常に嘆賞の聲を絶つ能はさらしむる許りなりしと。

斯くて年月に關守なく、梅子もはや十歳、益々美に益々賢く、彦兵衛夫婦は唯掌中の玉の如く愛でいつくしみ、力及ばんには、東京に出して、充分修業せしめ、アッパレ善き婦人となさんものと、殊勝にも心掛け、夜の目も眠らずに梅子の爲めに稼ぎ居りしが、不幸なるかな彦兵衛は、此年の秋時疫の爲めに犯されて、一夜の中に病沒せり。

生の父は其生るゝ以前に於て亡ひつ、生みの母は當歳の折に病沒し、無情なる親族の爲めに、父が功績の報酬として、遺族に遺せる恩賜の御金は、悉皆掠め取られ、果ては草深き片田舍に捨てられ、無我無心の頑是なき昔より、幾多の苦心を經て、此春故ある人の遺子と、兩親に告げらるゝまでは、慣れ睦みて只管生みの親とのみ思ひ、今も尚は其心地ぞする、其高恩のいや深き、片時も離れ難きまでに慕ひ纏

はる兩親の中、殊に一家の命として、行末賴む父親を、今又た玆に亡ひつる、梅子が不幸果して如何、まだ十歲の少女ながらに、怜悧だけに情理にかしこく悲しみの淵瀨に沈む母親すらも、持餘すまでに嘆き悲しみ、泣きくづ折れ、葬送の砌などは、日頃の氣丈なるにも似ず、一室の裡に泣伏して起きも上らず、外の見る目も憐れなりしと。

彥兵衞死して後は、七十餘の老人と、五十に近き母親と、梅子の三人暮しなり、母親如何に稼人なればとて、此老人と少女とを對手として如何でか、今までの如く推通ほす事の叶ふべき、月を經年を換ふるに伴ふて、漸やく水呑の昔に復へり、生計向も意の如くならず、左れば彥兵衞在世の折は、あはれ東京の好き女學校に入學せしめんとまで思込みし梅子が學問修業も、月謝を出すの力なき爲め、來春の卒業と云ふ其前年の冬、憾を吞んで小學校すら退學せしむる事となりたり、家の不幸は是れのみならず、其頃より老人は中風の氣味にて、左手の働かずなり、今までは草鞋を造り、或は人に傭れなどして、幾許か嫁の手助けをなせしも、夫れすら叶はず、氣のみ燥せりて身體は漸く衰弱し、打臥す事も屢々なり、まだ十三の少女ながらに、梅子は玆ぞ我身の高恩を酬ゆる時と、賢くも思ひ極め、朝は未明より起きて、母親と共に人に傭はれ、田畑を耕し、夜は遲くまで、絲繰草鞋造の內職に餘念なき母親の傍にありて、老爺の肩を揉み、腰を撫りて、孝養を盡くす、其心掛のけなげなるに、母なる人も勵まされ、母子かたみに必死となりて稼ぐより、苦るしきながらも兎や角に、其日を送り居たりしが、憐れや日頃の心勞、

其身の健康を害ねる媒となりて、今年の夏の末より、母親は癆症とやらん云ふ不治の難症に罹り、起居も自が自由ならぬ容體となり、今は梅子の手一ッに、片手不隨意の老爺を對手に、生活の事より藥取、其他一切の事を引受けて、夜さへろく〳〵眠む間なく、立働くものから、僅かに十三か十四の繊腕一ッ、如何で力に及ぶべき、愈々益々貧苦に陷いり、今は目も當てられぬ許り、左れど梅子は少しも屈せずして立働らく、其心根の殊勝なるに、聞く者鼻うちかまぬはなく、此頃村の心ある人々打寄りて、梅子が爲めに無盡講とか云へるを起して、月々多少の金圓を義捐せん事を企む者あるに至れり。

以上は老媼が、誰知らぬ者なき孝行女、此村の自慢の花なりとて、余が問ひに對して、得意に答へし長物語の大要なり。

余は談話を聞くに及んで、朝來の疑團一切釋然として解け、坐ろに感涙を禁むる事能はざりき、左れば老媼が談話を了れる後、余は折を見て彼の孝女梅子が家を訪はんものと思ひ定めければ、先づ老媼に向て詳しく彼が住家のある所を問ひ定め、飯料の外に茶代若干を與へ、老媼が喜びの挨拶を後に聞て、獵銃を肩にし、此風流なる白屋を辭せり、彼の老媼が談話の餘りに詳かにして、餘りに長かりし爲め、多くの時間を費やし、余が立出づる時は午後三時半許り、冬の日足の短くて、ハヤ山の端近く薄き弱き光りを放ち、夕獵には恰好の時刻とはなりけり。

余ハ朝獵の不獵を夕獵に於て挽回せんと思ひければ、再び祐天寺の森に向て歩みを移せり、左れど如何

なる不首尾なりけん、一聲の鳥語をも聞かず、一羽の鳥の影だに見ず、如何に拙劣なる獵師として、人に知らるゝにもせよ、朝未明より夕暮空まで奔走して、一羽の獲物だになしと嘲られんも口惜しければ、今朝彼の少女が水垢離取れる古井の傍に暫し憩ひて、疾く鳩なりと飛び來よかしと、目を皿の如くにして待ち受け居れり。

斯くて時を移す事一時間許り、日も漸く山端に落ち、冷かなる林下の風ハ落葉を吹いて、淋しき景色を裝ふ夕暮近き頃となりけるものから、尙ほ一聲の鳥語をも聞かず、一羽の鳥の影だに見ず、今ハ流石に、無類の好獵家を以て知らるゝ余も、倦み勞れて、漸く念を斷ち、愛銃を肩にして林を出で、歸路目黑川の傍まで來れり、余ハ茲まで來る間、唯彼の少女の一身に就て、種々の想像を心中に描き、一切を忘れて步みを移せしが、茲に來るに及んで、余が勞れを興奮して、宛も夢の覺めしが如く、余に鋭敏なる感覺を起さしむるもの、忽焉として余が眸裏に現じ來れり。

他なし、川に沿へる岸の枯木の下枝に、將さに飛ばんとして未だ飛ばざる一羽の鵥の、忽焉として眸裏に現ド來りしなり。

余が手ハ余が未だ命令を下さゞる間に、實に鋭敏に、實に神速に、獵銃を構へたり、而して余ハ余が心の未だ命令せざる間に、旣に身を忍ばし、跫音を盜すみて步みを移せり、噫銃獵に於ける余が動作ハ、今や一切一の習慣性となれるなり、斯くて余ハ程好き距離にて的を定めぬ。

轟然一發、硝烟濛々、飛羽片々、正しく手耐へありき、正しく打落せり、朝來初めての獲物、余ハ思はず足を躍ばせり、忽ち聞く一種の悲鳴。

枯木の下なる田の畔に、見事に打落せる一羽の鷲、余ハ忙はしく走せ寄りて、網袋の裡に拾ひ收めたり、同時に又聞く一種の悲鳴。

若しや誤て散彈に人を傷めしにハあらざる可き乎、斯く思ふと同時に、余が心臓の鼓動ハ著るしく高く、著るしく強く、殆んど目眩きて倒れんとせしが、僅かに心を沈めて四邊を見るに、寂然として一物の眼を遮ぎる者なし、サテハ心の迷ひなりしかと、思ひ返へして立去らんとする折しも、再び一聲一種の悲鳴、打つが如く余が鼓膜を襲ひ來れり。

サテハ愈々、余ハ愈々人を傷めたる事と思ひければ、右に左に奔走するものから、絶えて其姿だに見當らず、去らば川の彼方にやあらんと、急ぎ川下の方に赴くに、茲に一ッの丸木橋あり、余ハ忙がはしく走り渡りて、又た隈なく探し求むれとも、絶えて人の影だになし、這ハ怪し訝しとて、只管心を傷めつつ、更に橋打渡りて、元の所に歸へり來り、尚は八方を捜索する折しも、又もや一聲一種の悲鳴。

其聲ハ正しく小川の中より起れり、サテこそ心づかざりしも理なりしと、余ハ周章狼狽く心を沈めて、岸邊を塞ぐ荊棘を推開き、身を曲めて流を見るに、果せるかな一人の老人、齢七十餘りなるが、右の手にて水近く低れたる木の枝を命と握り、淺黄紋羽の頭巾を被ぶり、布呂敷包みを負ひたるまゝ、首ま

で水に浸され居れり、自ら陥りたるものにや、將た余が撃落せしものにや、自ら陥りしものとすれば、兩岸 荊棘の堤あり、橋より墜落するの外落つ可き筈なし、然るに橋ハ川下にありて、川上になし、川下より落ちし人の川上に來らん筈なければ、這ハ岸邊にありしを余が射落せしにやあらんなど（但し這ハ余が一瞬の間に浮びし想像なり）想像りて、坐ろ胸轟かしつ『如何した、如何して落ちたのだ、』余ハ先づ取敢へず、極めて聲を鋭くして、斯くの如く叫べり。

余が此の叫びを聞くと同時に、彼ハ回顧り、極めて恨めしげなる眼にて余を睨み、一種異様云ふ可らざる悲鳴を以て『助けてお呉んねエ、助けてお呉んねエ』、田舎訛の言葉二聲三聲叫びつゝ、余を注視せり、噫、此聲、此叫、余が耳にハ實に無限の恨を含むが如く聞えて、余をして思はず悚然たらしめたり。

『失錯た、飛んでもない事をした、全く余が撃落したに相違ハない、如何したら好からう、如何して助けたら好からう、』余ハ全く斯く思へり、斯く信せり、今や余ハ如何にもして彼れを助けんと思ふ一心より、勇を鼓し氣を勵まし、流れに向て躍り込まんとせり、然れども荊棘の堤ハ袂を攔み、裾を控へ、胸を推し、絶えて余が進退を自由ならしめず、斯くてハ如何にして此不幸なる人を絶死の境より救ふ可きと、口管心悶ゆるものから詮方なし、西に東に奔走して、足場好き所を求むるのみ、彼は再び叫べり『助けてお呉んねエ、助けてお呉んねエ』而して一種云ふ可らざる異様の眼光を以て余を睨めり、余ハ唯彼が氣迫り腕疲れて、命の枝を保つに由なく、死の淵に沈溺せんかを恐れしを以て、一聲高く『シッカリ

しろ今助けてやるからシッカリしろ』と宛も士官が兵士に向て號令するかの如き音調を以て、斯く勵ましの言葉を放てり、而して尚川に沿ふて奔走する中、忽ち認むる一點の火光一戸の茅屋、夜は既に近よれるなり。

余は今は他の力を借るの外なしと思ひければ、猶豫なく彼の火光の漏れ來れる一戸の茅屋に向て疾走せり、實に電光の如く神速に空を跳べり而して彼の茅屋に達するや否や、余『オイ今其處の川で人が溺れかゝつて居るから、早く來て手を借して呉れ』斯く叫ぶと同時に、傍にありし梯を肩にし再び彼の小川の邊に取て返へし、生ひ繁げる荊棘の土堤を、梯を以て打ち叩き、打叩き、僅かに足場とすべき小道を開けり、又た聞く彼れが絶叫『助けてお呉んねェ、助けておくんねェ』而して其聲は漸く力無く將さに絶死の淵に落ちんとするが如くなれり、余は如何で猶豫すべき、直ちに流れに向て梯を下せり、噫余が此際に於ける力量は、決して大達に讓らざりしなり、梅ヶ谷に讓らざりしなり、實に我ながら我力量の廣大なるに驚く許り。

間もなく余が注意に依て、驚かされたる白屋の主人は、十七八の少年と共に、素走のまゝ走せ來れり、次で其母とも見ゆる婦人と、六十餘の老婆も出で來れり、乃ち彼の白屋の全家を擧げて走せ來りしなり、彼の主人ハ少年と共に挨拶もなく余を推除け、共に力を協せて彼の絶死の境遇に陷れる老人を救ひ上げたり、無殘、救ひ上ぐると同時に彼ハハヤ人心地なきが如く、グッタリとして僅かに四邊を見廻はすの

み。

『誰れだ〳〵、ナニ薩張分らねエ、イヤ孝行娘の處の爺さまぢやァねエか、ウム お梅童女の處の、左樣だ〳〵如何して今時分此邊を通つたのだらう、如何して落ちたのだらう、死にやァしめエか、ナニ大丈夫だ、其藁此方よこセエ、』彼等は口々に斯くの如く辯りつゝ、余が立ち居るにも心付かず、其傍にありし藁の束を幾束か解きて、彼の老人を其上に坐せしめ、更に幾束かを取りて、藁火に冷却せる老人の身體を温め得させんとし、而して一人の婦人ハ火を持來らん爲め、ハヤ其家に向て走せ去らんとせり。

余は曩より老人のさまを窺見るに、全く余が銃丸に傷けたるものにあらずして、全く誤て橋より墜落したるものが水ぎわの木の根傳ふて漂ひ居たる者たるを認めたれば、僅かに心を安んじ、傍に投捨て置きし愛銃を肩にしながら、先づ今走せ去らんとする婦人を呼止めて、マッチを投與へたり此時始めて彼等ハ余が姿に心付き、忙てふためき、一同に老人の爲めに余に向て簡易眞率なる謝辭を陳べたり、而して彼等ハ取敢へず藁に火をうつせり實に彼等ハ極て熱心に、極めて誠實に、老人を介抱せり、噫田舍漢の純粋無雜にして心切深き、實に奸黠狡猾なる都人の夢想し能はざる所、余ハ思はず嘆服せり。

日ハ既に山陰に沒せり、蒼然たる暮色は漸く野邊を掩へり、高低屈曲せる畔道、忽ち見る模糊たる淡靄を蹈んで、此方に向て近寄り來る一個の人影ありけり。

颯と吹來る夕風に、燃立つ藁火、余は今は明かに彼の人影を認め得たり、實に是れ余が眸裏に其姿を印

せる、彼の孝女梅子にてありしなり而して余が言葉を發せんとする間に、早くも彼の白屋の人々は梅子を認め『ヤアお梅坊ぢやねヱか、お前の處の爺さまがナア』と言へる言葉を先鋒として、過刻よりの始末を語り、且つ余を指さしながら、此銃獵者が居ねヱと、如何なつたか知んねヱヨ』と、云ひつゝ余に向て此少女を紹介せんとせり、少女は彼等の言葉に一切頓着せず、グッタリとして弱り切たる、彼の老人の傍に忙はしく走せ寄り『祖父さま梅です、シッカリして下さい』と云ひながら、心を盡くして介抱せんとするなり、余は何時まで斯くわらんよりも、疾く其家に伴ひ行くに如くなしと思ひければ、先づ彼の白屋の主人に向て、思ふ所を告げ聞えたり。

此時彼の少女は、始めて余を打見やり、極めて驚ける如くなりしが、果ては彼の美はしき眼に涙を浮べ、言葉はなくて目禮せるは、其身のみならず老祖父まで、不思議にも余が手に救はれたるを、甚く心中に感じての事なるべしと、余も亦心中坐ろに憐れを催ほし、尚はさま〲に言葉を添へて、梅子が爲めに彼等に向て、老人の事を懇ろに賴み置き、殘惜しげに見送る梅子、口喧しく禮を云ふ人々の言葉を背にして、彼の丸木橋打渡り、歸路に向て歩みを移せり。

今は全く夜に入れり、闇然たる四方の景色、水田の畔道風冷かに歩みも思ふに任せぬものから、梅子が事の胸に浮びて、更にさま〲の感想を惹起し、果ては云ふに云はれぬ不思議の情想すら現ト來り、其想像の爲めに勞れを忘れ、何時とはなしに我家にたどり着けり。

余が家には相應の財産あれども、不幸にして父母は當才の折に失ひ、慈愛深き伯母の手に、二十三の今日まで育て上げられたるなれば、伯母の心にも眞の己が生みの子の如く、余が心にも眞實の母の如く感ぜられて、相互の情愛極めて深し、左れば此日も余が歸へりの、餘りに遅かりし爲め、伯母は深く心を傷め、若しや不測の變事ありしにはあらざるかとて、思ひに堪へかね、態々車夫を廣尾の邊まで走せしめられたる位にて、且つ幾度か下婢をして、門外に出して余が歸へりを迎へしめられたりと聞き、余は心中深く其慈愛の厚さを謝し、今日の始末落ちなく告聞ゆるに、伯母は甚たく梅子が不幸を憐れみ、左まで好き少女ならんには、何樣とかして我家に呼び迎へ、敎へ育てたきものなりなど語り玉ひき。

運動も過度なるは好からずとて、伯母なる人の止め玉ふも聞かず、余は其翌朝も亦獵銃を肩にして、我家を立出でたり、然れども余が此日の銃獵は、銃獵よりも寧ろ他に目的ありしが爲めなり、余は明かに白狀すべし。

昨日見たりし美はしき野の花、實に彼の少女が、涼しき眼、愛らしき口は更なり、彼が身に纏へる襤褸の衣すらも、彼が話せし野鄙なる言葉すらも、余が眼には美はしき花の如く見え、余が耳には愛らしき小鳥の鳴音の如く聞えしなり、況して其素性を問へば立派なる海軍武官の種なり、況して其性質を吟味すれば、類稀れなる孝女なり、余が心に強く深く梅子が姿を刻み付けしも、亦決して無理にはあらざるべし、余は實に最初彼が不幸を憐れみしなり、次で彼が境遇を憐れみしなり、次で彼を愛するの心起れ

るなり、彼を愛するの心、卑しき戀愛の心を以て愛するの謂にはあらず、唯精神的に彼を愛せしなり、實に余は昨夜我家に歸へれる後、絶間もなう彼が事を思ひ、彼の老人の事を思ひ、彼が病母の事を思ひつゞけて、彼の幽邃なる祐天寺の森、彼の靜閑なる目黑の里の風光は、夜一夜我思ひに描れしなり、左れば必らず再び目黑の里に赴き、彼の不幸なる少女の家を訪はんとは決心するに至れるなり。

然り、余は銃獵よりも、寧ろ此の一の目的に向て、目黑の里に歩みを移さん爲め、今日亦た銃獵を名として、我家を立出でしなりき。

祐天寺の森の此方、生茂げる竹藪の上より、二ッ三ッ取殘されたる熟柿の紅の如くなるを、梢高く止めたる柿の樹あり、是れなん昨日、余が老媼に聞き置きたる、小女梅子が家の目標、見れば其柿樹の下に、草の屋根苔蒸して、荒土の壁其處彼處破れ、傾ける柱には、蔦蔓延び纏はり、破れたる窓の障子は、吹く風を防ぐに由なき一軒の破屋あり、憐れ是れが素性卑しからざる孝女梅子が、老たる祖父と病める母とを、十四に足らぬ繊腕に、養ひ仕ふる家居かと思へば、いとゞ秋風の身に染み渡りて、坐ろに涙ぐまるる許り。

余は徐かに進みて音なふに『何人様です』と答へながら走せ來る梅子、余を打見やりて吃驚、ヤがて面愧げに『オ、貴郎は昨夜御世話樣になりました銃獵者さん、好くマア此樣な不潔い處へ、尋ねて來て下さいましタ、』余『祖父さんは如何だい別段昨夜は變りもなかつたか子、』梅『ハイお蔭さまで昨夜は別段

變はりも御坐いませんでしたが今朝曉がたから如何したんですか、些とも身體がきかなくなつてしまひましタ、』余『夫リヤア何しろ心配だらう、何さま昨日長く水に涵されて居たから、其爲めに引起したのだらうか、ソシテアノお醫者には見せたカエ、』梅『否、見せたう御坐いますけども、まだ見せません、と云ひかけしが、少し顏を赤くして、急に後邊振向き、『アノ阿母さん、昨夜祖父さんを助けて下さつた、獵銃うちの旦那さまが來て下すつたョ、』奥には咳の聲一ッ二ッ、苦しげある聲にて、『オヤ左樣かエ、不潔くとも早く此方へお通し申しな、其處は酷く冷えるから、ソシテアノお出迎ひ申すのだけども、此樣ざまをして寢て居るのだから、お前から好くお詫を申して、』後は再び咳の聲に打消されて聞えず、梅子『夫れぢやア餘り不潔うございますけども一寸お上んなすつて』余『ナニ此處で澤山だが、阿母さんも大分鹽梅が好くないやうだね、サゾ獨で心配だらう、矢張お醫者には見せないのかエ、』梅『ハイアノ見せてあげたうございますけども、爺が死なりましてから思ふやうになりませんで、今は買藥をして飮ませたり、昨日の朝、祐天寺でお目にかゝつた、時のやうに、水垢離をとつて、不動さまに御願をかけたりして居ますけども、一向効能がありませんから、』と云ひさして、いつしか潤みし目元を破れたる襤褸の袂にてふき、强て笑ひを半面に漏らして『ドウヅ母も彼樣に申しますから、一寸でもお上んなすつて下さいまし』流石苦勞の中に生育し者とて、卑しき言葉も實深く、淸き心の奥底は、自づと面に現はれたり、余『アイありがたう、ダガ足も此樣に汚れて居るから、何なら裏の方から廻て、阿母さんや

祖父さんに逢ふ事にしませう、』梅子『ハア、夫れぢや恐れ入りますが、左樣願ひましようと、云ひつゝ自から先に立ち、案内貌に余を見返へり『アノ昨日の朝の水垢離のとは、如何か秘密にして置いて下さいまし、聞くと母が心配しますから、モウ乾度アンナ眞似はしませんから、』利口なやうでも流石は少女、余は心中に其無邪氣を感じつゝ、後に從て、南天の實の紅染る生垣を廻ぐり、裏手の方に出でたり。

此處には日あて好き竹縁あり、一室の中には病人二個、枕を列べて打臥せるさま、破障子の間より明かに見らる、少女は忙はしく竹縁の上に上り、障子を開けて、『阿母さん此方からいらッしやつたョ、』母『オヤ左樣かェ、マア御通し申せば好いのに、貴郎御免遊ばしませ』と咳一ッ、余が止むるをも聞かず立上りて、昨日夕暮其父が助けられたる事、苦るしき息の下に熱き涙をこぼして、喜びを陳ぶる顏容、年來の苦勞と長の病氣とに疲れ果てたるさま、憐れ霜前の虫、ハヤ息も絶ゆげなり、又た彼の老人は眼こそ開き居れ、昨日の水難に全身の中風を惹起せしと見えて、身動きだもせず、噫此兩個の難病人を引受けたる、少女の心果して如何に。

余は竹縁に腰打かけて、さま〲に病める人を慰むる中に、梅子は忙はしく立去りしが、間もなく彼の熟柿を打落し、栗さへ添へて持出づる、饗應振の優しきに、余は午過る頃まで母子を對手に、さまざまの物語りし、藥の料と食料の助けにもと思ひければ、固く辭ふも聞かず、貨幣幾片かを少女に渡し、名殘り惜しげに見送くる母親、涙含む目に大路まで見送り來る梅子に別れを告げ、是れより更に諸所を

獵して、夕暮頃我家に歸へれり。

斯くて余は、此後も彼等が不幸不運を憐れむの餘り、幾回か見舞ふ中、一家いつしか余に慣れ睦み、余が音訪ふを待てり、殊に梅子は今は何の遠慮もなく、恰も其兄とも思ふが如き素振にて、淡泊なる言葉を以て、我儘を云ふに至り、愛くるしき事云はん方なく、不潔なる此破屋も、余には宛も天苑の如く感せられて南郊に獵する毎に、必らず彼等を訪問したりき。

此年の終りに於て、余れ餘儀なく一時銃獵を廢せざるを得ざる不幸なる運命に陷りたりき、之に伴ふて余れ、彼の可憐なる少女の一家を訪ふの樂を亦見捨てざるを得ざる不幸なる運命に陷りたりき、开は實に此年の冬、十二月の終りに於て、大阪なる叔父の許より、大病なりとの電報、突然我一家の神經を打ち來りしが爲めなりき、余に取ては只一人の叔父なり、我父亡せ玉ひし後は、第二の父とも思て、萬づ問ひ商議りし人なり、余如何に平生嗜める銃獵の爲めに、踏み慣れし我東京近郊の地を、相離るゝに忍びざるにもせよ、余如何に彼の可憐なる少女の爲めに、我がゆかしき目黒の里を、遠く離るるに忍びざるにもせよ、余が一身に取り、余が一家に取り、此大切なる人の生死存亡計り難き大病と聞くからには、如何で他外に見て過さる可き、余ハ其翌朝、我慈愛深き伯母に暇乞ひして、新橋發の一番汽車に投じ、大阪に向て出發せり。

余ハ實に叔父の病氣の、大事に及ばざらんことを熱望せり、左れど電報を以て報じ越す位にては、實に

容易ならぬ容體ならまし、若し此度びの病氣にして到底死より蘇生る可き望みなしとすれば、せめてハ余が大阪に着するまで、余が其家に到るまで、余が其床に侍するまで、而して其後事を聞くまで、無事ならん事を祈れり、死せざらん事を祈れり烟を蹴り、雲を切て疾走する汽車、決して遲きにあらず、然れども此際に於ては、遲きこと實に牛に乘るが如く感ぜられしなり、忽然として山、忽然として川、忽然として海、車窓に上り來る途中の風光、奇ならざるにあらず、然れども此際に於てハ、一切黑闇の境を過ぐるが如く、一物も余が眸裏にハ上らざりしなり、斯くの如く余が腦中ハ、叔父の大病に就て、惑亂されつゝあるにも拘はらず、彼の幽邃なる祐天寺の森、彼の靜閑なる目黒の里、彼の日光暖き敗家、彼の可憐なる貧家の少女ハ、往々我眼に幻出せしなり、靜岡に着せし時、余ハ心着けり、余ハ實に其人を思出せしにも拘はらず、餘り出發を急ぎし爲め、終に彼の可憐なる少女に向て、我大阪行を報ずる事を忘却せしに心着けり、然れども今ハ遲れたり、詮無し。

余が乘込める汽車ハ、此日の午後十二時を以て大阪に着せり、余ハ直ちに梅田停車場より下車し、更に輕車を驅て、中の島なる叔父の住家に至れり、然れども余が安着を喜び迎へし余が從兄夫婦ハ、既に限りなき悲愁の雲を以て掩はれ、涙を呑んで余を病床に導けり、嗚呼余が叔父は、既に全く此世の人にてあらざりしなり、余ハ實に其臨終の間に逢はざりしなり。

余ハ實に其遺體に對して聲を呑んで泣けり、他に向て一の言葉だも發し得ずして。

斯くて其遺體は、三日の後に、多くの會葬者に依て見送られつゝ葬られたり、而して其跡目は幾日かの後、從兄夫婦に依て相續されたり、余は渾べて是等の商議に關りしを以て、二月餘茲に日を消せり左れど叔父が死後の事は、一切茲に了れるを以て、余は空しく悲みを載せて、二月目に東京に歸へれり、而して久振にて慈愛なる伯母を拜せり、其翌日は大阪の話に日を送りしが、明日こそは引續く不幸に書信すらなさゞりし、彼の目黒なる梅子が家を音づれんと思ひければ、余は此頃にあき嬉れしき思ひを懐いて、眠りに就けり。

サテ其翌日は、如何に好める道なればとて、此頃の勞れもあらんに、今日一日は見合はするこそ好けれと、打笑みながら止め玉ふ伯母の言葉を打消して、余は無頓着らしき言葉を以て、最早銃獵の期も二ケ月に足らず、一日なりとも空しく過ぎんは、遺憾しと云ひも敢へず、獵銃を肩にして、目黒に向て步を移せり、鳥を獵らん爲めにはあらず、可憐なる少女を訪はん爲めに。

世は既に春なり、霞める野邊の景色長閑に、うらゝかなる朝日の影暖かく、梅ケ香高く鶯の鳴音を率きて、獵には稍々適當からねども、漫步せんには此上なき季節とはなりにき、余は素より獵の爲めにあらねば、獵銃はホンの飾、一直線に目黒なる梅子が家に音訪はんと、只管步みを急ぐる程に、間もなく彼の目標の柿、去年見し折は二ッ三ッの、紅く熟せる實を認めしが、今は若葉の芽を生きて、一陽來復の春に笑へる、彼の目標の柿の樹を認めたり、暫し見ぬ間に、サテも景色の變はれる事よ、知らず少女

が上ハ如何になぜ、坐ろに聯感を起して、更に歩を進むるに、怪しきかな確かに二月前去年の冬までハ病める一家を、少女の細き手一つに支へし敗家ありしに、今ハ跡形もなう消失せて影だになく、見覺えある南天の枝に、鵯の聲のみ高し。

余ハ茫然自失せり、噫彼の可憐なる少女、彼の病める不幸なる母、彼の全身不隨意の老人、彼等ハ終に何とかしつる、抑亦た彼等が爲めに雨露を凌げる彼の破屋ハ何とかしつる、夢か夢にあらず、彼の可憐なる少女が語りし優しき愛らしき言の葉は、今尚心に刻めり、彼の不幸なる病める母の悲しき言の葉ハ、今尚耳に殘れり、幻か幻にあらず、彼の少女が與へたる熟柿の味ハ、今尚舌に覺えあり、彼の老いたる人を助けし事は、今尚我腕に覺えあり、噫夢にあらず幻にあらず、是等の事實ハ我れに終始相伴へる、我此最愛の獵銃こそ、最良なる證人として確かむるなれ、知らず彼の家、彼の人々ハ終に何とかしつる、余ハ斯く思ひながらも、惘然として夢の如く幻の如き境に立盡くせり。

暫くの後、余は漸くにして我れに歸へり、何時まで斯く此所に立盡さんも、到底此疑惑を氷解すべくもあらず、如かず最初少女が經歷を聞きたる、彼の祐天寺の門前なる茶店を叩いて、再び彼の老嫗の解説を煩はさんにハそ、僅かに思返へして、ヤガテ失望の爲めに進まぬ足を曳き、彼の茶店に至り見るに、茲は去年見し折に變はらず、めし酒と斜めに筆太く記るしたる障子を看版とし、老嫗は獨り椽端の日光暖かなる處に坐して、縫物に餘念なきさまなり。

余ハツト入りて『老媼さん去年ハ大層世話になつたね』と云ひつゝ其傍に腰打ちかくれば、彼ハ眼鏡越に余が貌つく〴〵眺め居りしが、漸く思出しけん、轉ぶ如く飛び下りて『オヽ、ツイお見それ申しました、旦那樣はナンですね、アノ夫れ何時ぞやアノ何でしたね、アノ此村の孝子娘、お梅坊の事を委はしくお尋ねなすツた旦那樣で入らッしやいますね、彼もねヱ、彼の娘もマア飛んだ不幸な目に逢ひましてねヱ、』と云ひつゝ忙てゝ茶を汲まんとするを、余は推止めて、余『實はアノ孝子娘の事に就て、些と聞きたい事があつて、今日は態々來たのだが、何だね、今通つて見りやア彼處の家も破壞しになつて居るやうだが、ナニカヱ何處かへ俄かに引移りでもしたのかヱ』老媼は余が推止めしも聞えぬ顔に、澁茶一杯汲んで出し、老媼『否、貴郎移轉す所ぢやア御座いません、實にお話し申すも淚の種、貴郎かうなんでございますよ』と、語り出せし所に依れば。

彼の老人は去年の暮に病沒し、母なる人も亦甚く寒氣に障りしと見え、俄かに容體重もり行き、梅子が誠心誠意、身を粉にしての看病も其甲斐なく、終に今年の春返へらぬ旅路の人となれり、左れば梅子が悲嘆愁傷實に言葉にも盡くし難き計り、漸くにして近隣の人々の助けに依りて、埋葬だけハ濟ませしものゝ、僅かに十四や十五の少女の身にて、唯一人にて立行くべき筈もなければ、村の重立ちたる人々寄合ひたる末、まだ婚姻する年齢でハなけれど、兎も角も然るべき年齢の人を梅子が入夫として、彦兵衞が跡目を相續せしむるに如かずと、商議一決して、其旨を梅子に告げ聞えしに、梅子は頭を左右に振り

て、中々に承知せず、妾は何時までも獨で居ます、若し獨で居る事が出來ませんなら、妾は此村には居ませんと、斷然謝絶りて、何と云つて諭しても承知せず、今は村の人々もほと〳〵持て餘して居る折から、不圖素と此村に居た者で、死んだ彦兵衞の實の弟に當る、儀八と云ふ破落漢が尋ねて來て、梅は私の姪ですから、爺や母が亡つた跡は、此伯父が引受けて世話するのが道です、と兄の彦兵衞が死んだ時も、其老父が死んだ時も、嫂が死んだ時にも、ツイ一度も見舞ひにも來なかつた奴が中に入り、結局村の人々の心切を打消して、彦兵衞の時から僅かに持堪へた彼の家も賣拂ひ、今に女郎にでも賣られるだらうと、村の者が云ふた言葉を耳にして、行く事を拒みし梅子をムリヤリに引摺りて此村を立去りしは、正月の末旬、今より一月計前の事にてありしとか。

斯く語り了はりて彼の老嫗は、余が貌つく〴〵熟視り『左樣思へば何だか若しや貴郎の事ぢやァありませんか』と、云ひつゝ暫し頭を傾け居りしが、稍々ありて再び『アノ何です、村の人達が寄合をつけて、お梅坊に入婿の事を話しました時も、彼子は妾には兄のやうな心切な銃獵者さんが居ますから、其人に商議して好いと云たら、入婿でも何でもしますが、夫迄は是非獨で置いて下さいと云ひ張りましたが、叔父に伴れられて行く時にも、若し斯々の裝をした銃獵者さんが來たなら、妾が行先を屹度敎へてやつて下さい、屹度々々と幾回も云ひ遺して行きましたが、若しや其銃獵者さんと云ふのは、貴郎の事ぢやァ御座いますまいか』、余は老嫗が委はしき物語に、一切の疑ひ釋然として解けたり、而して同時に悲愁

と云はんよりハ、寧ろ非常に苦悶を感じたり、噫不幸彼れが如き者又た世にあるべきか、實に彼が一身ハ、一切酸鼻の事實を以て形造られたるものなり、殊に其終始余を忘れざる事、余を以て天涯地角只一の賴むべき者と認むる事、實に尤も强く余が感覺を衝動かせり、余ハ坐ろにさしぐむ淚を態と欠伸にまぎらして、余『夫りやア吾儕の事だか何だか分らないが、兎に角實に可哀的な話、ソシテ其伴れられて行つた先と云ふのは、一體マア何處の方だエ、』老媼『ナンデモ其叔父と云ふ奴の云ふのには、堀の內だと云ひましたけども、ドーセ惡漢の云ふことですから、當にはなりますまい』

余ハ彼の少女に關する一切の話を聞了はりて後ち、老媼が家を辭し、限りなき不快と失望とを抱いて、此日ハ直ちに我家に歸れり。

余は是れより後、幾度か人をして梅子が行方を堀の內の邊に尋ねしめたり、然れども絕えて手係だも聞えず、余も亦幾度か銃獵に託して堀の內の邊を尋ね求めぬ、然れども終に其行方を知るに由なかりき、余は思へり、是れ全く其叔父なる者に野心ありて、其行方を韜晦せしに相違なかるべし、悼しきかな不幸彼れが如き者にして、此上にも亦た災禍の纒着はるにや、噫天道は是か非か、何すれぞ彼れが如き孝女に災するの酷しきや、余は斯く思ひつつ空しく日を消す程に、四月十五日の銃獵期限はいつしか過ぎ去りて、新綠陰裏に杜鵑、鳴音を漏らす頃とはなりにき、元來余は常に銃獵期限に於ける怠慢を、五月より九月に到る五ヶ月間の勉勵に於て回復する事に、心中規定し居れるを以て、此年も亦た此大切なる

五ヶ月間は、務めて精勵勤勉に日を送らんものと思へり、左れど余が今の身は、學校の科程は旣に一昨年、の春を以て卒業し、家計上の事は一切伯母の手に託し置く氣樂なる身上にてありければ、精勵刻苦と云ふも、其實世間普通の精勵刻苦にあらず、終日好める書を繙き、或は覺束なくも自ら小說を作り、或ハ時事に感ずる事あれば、思想を筆に寫して新聞に投じ、或は親しき友人を音づれて議論を鬪はす位の事にて、他より見たらんには、寧ろ氣樂なる境涯なる可く、唯銃獵期限の放逸なるに比して、幾分か我家に閉籠る事多しと云ふに過ぎず、余は乃ち斯くの如き境涯に於て、今年も九月の來るまでは日月を送らんものと思へるなりき、左れど余は來春を以て、歐米留學の途に上らん豫ての心構へなりければ、此年の勉勵の期限は、例年に比すれば寧ろ眞の勉勵に近き方にて、多くは我一室に閉籠りて、讀書三昧に日を消す事多かりし。

月日の水の流るゝは疾し、綠陰深き處、老鶯の聲を聞きしは、昨日の如く感せらるゝ間に、いつしか紅葉峯巒曉天の霜に、渡鳥の聲喧びすしき秋の終り冬の始めは來れり『九月十五日』是れ我東京に於ける銃獵期限の最首の日、余が心に刻みて忘れざるの日、余は此日より武相の野を徘徊し、例に依て今此冬の始めまで、我家に在る事は殆んど稀れなりし、余は殊に屢々目黑村の近傍を徘徊せり、殊に屢々堀の內の近傍を徘徊せり、傍彼の少女の消息を聞かんが爲めに。

十一月の末旬、北風樹林に吼り叫びて、落葉空に狂ふ或日の夕暮の事なりき、余は玉川瀨田邊まで獵り

歩きし歸るさ、如何にして道踏み迷ひけん、行けども行けども風の叫び激げしき樺色の林にして、絶えて心覺えの路に出でず、亦た絶えて人家ある所に至らず、況して寒き日の夕暮の習ひとて、唯一の人にすら行逢はず、今は只管心忙てつゝ、右に左に歩みを變へて、人家ある方に出でんと急るものから、益々見知らぬ道に踏み迷ふのみにて、其甲斐なし、斯くて兎角する間に、夜の世界は漸く日光を追ふて暗を送り、風益々吹き荒れて、星は大空に凄き光を放ち、寒氣さへ一入身にしみわたる心地、余は流石に氣さへ足さへ疲れ果て、唯茫然として歩を移す折しも、忽ち余が耳を襲ふ二種の聲、一は囂々として怒り吼るが如き太き強き聲、一は嚴然として犯す可からざるが如き細き鋭き聲、余は思はず耳聳立つれば、囂々たるものは正しく男の聲なるが如く、嚴然たるものは正しく少女の聲なるが如し。

忽ち余が眸裏に上り來る一點の燈火、此茫々たる野邊に於ける只一點の燈火、一喜一憂一驚一怪　余は思はず眸を凝せり。

更に木の下に繋げれる枯茅の間より、今其燈火の光の來れる方を透かし眺むるに、正しく一軒の白屋ありて、燈火の光は其家の破窓より、漏れ來る光にてありけり、余は僅かに心を沈めて、歸路を問はゞやと思ひければ、道なき枯草の間を押分け、漸くにして其窓近く進み寄るに、彼の怒れる聲は益々激げしく、細き聲は漸く打消されて聞えず、余は此際卒爾に道問はんも如何と思ひければ、忍びやかに窓の下に立寄り、破目の隙間より靜かに中の樣子を窺へり。

此時余が眼底に落つる一室の景光、三個の人影、幽暗なる燈火を中に相對しつゝ、一は怒り、一は泣き、一は嘲けるが如くなり、更に眼を凝して熟視するに、一は年齢三十四五の女、色蒼白く、眼尖く、鼻隆く、油氣なき洗髪は、輕く束ねて領邊に結び、額の左右には、即効紙とか云へる異様の膏薬を貼り、締れる口には小楊枝を弄び、折々憎々しげに冷かなる笑を漏らせり、火鉢を中に此婦人と相對坐するは、年齢四十四五の男、色淺黒く、眉太く、眼圓に、口方に、木綿大縞の寛袍を着て、屢々烟を吹き、又屢々眞鍮の煙管に、火鉢破るゝ許りに叩くは、其怒りの最極點に達せしにやあらん、遙か離れて幽暗き行燈の下に蹲りて、涕泣しつゝあるが如くなるは、面を視るに由なけれども、後姿何となく無心きより察すれば、まだ十四五の少女にやあらん、噫彼は何を悲んで泣きつゝあるにや、又彼は何に激して怒りつゝあるにや、又彼は何に對して嘲けりつゝあるにや、一切知るに由なきものから、余は今は歸路を問はん言葉も出でず、唯此不思議なる演劇の結局を見んものと、寒さ忍んで破窓の下に立盡せり。

『お前さんのやうナ温和した所爲ぢやア、如何して此强情な娘が、ハイと承知をするものかネ、尚一層如何か酷い目に逢はせなけりやア、とても温順に聞きはしまいよ』是彼の憎々しげなる年增が、冷かなる嘲りの裡より發したる言葉にてありき、此言葉は彼の逞ましき男を勵ますに於て、如何に値ある意味をも有し居たりけん、此言葉の未だ全く了らざる中に、彼は其右の手に持る煙管に發矢と火鉢の端を叩き、彼少女をハッタと睨み、一層高き聲鋭く『是れ程云て聞しても、まだ手前にやァ解らねェか、女郎

と一口に言やア、如何に酷い目に逢事かと思て居るか知らねヱが、年が年中絹布ぐるみ、滋味は喰べたいほうだい、面白い事は見たいほうだい、如何に好い商賣だか知れやアし子、マシテ汝を女郎に賣るのは、汝が常平生大事に思ふ、死んだ爺や母の、墓場を立てると供養をする爲めの入費を稼ぐ爲めぢやア子ヱか、孝行々々と云つたッて、生きてるときの孝行許りが、眞の孝行ぢやアねヱ、目黒に居たとき孝行娘と云はれたことが嬉しいと思ふなら、此叔父の云ふやうにして、生涯眞誠の孝行娘と云はれる氣になりさうなものだが』、と云ひかけて彼の年増と顏見合せ、一種異樣の嘲りを示めして、更に又彼の少女に向ひ『サア否とか應とか返答しろ、默て居ちやア分らねヱ、モウ先方にも話がしてあるのだから、今女なつて斷られたァ義理ぢやアねヱ、否と云しやア其儘にやア置かねヱから、心を定めて返辭をしろい』、余は此言葉を聞くが否や、忽ちにして疑ひ思へり、若しや此少女は彼の梅子にして、此惡漢毒婦は、彼の叔父とか云ふ奴等にはあらざるべき歟、若し果して然らんには、余は力を盡くして彼の少女を救はざる可らず、去るにても少女は果して何とか答ふるにやなど丶思ひながら、尙ほ息を殺して窓障子の破れより窺ひたり。

少女は漸くにして面を上げたり、而して凛然たる聲を以て『否です、何と云ても女郎なんぞになるのはイヤです、妾は目黒に歸へります、モウこんな家には居ません、ソンナに女郎が好いものなら、叔母さんでもお賣んなさい』、實に大膽に、實に豪慢に、實に無遠慮に、斯くの如き激語を發したり、然れども

其聲は流石に打震へり、而して此言葉の少女の口より發すると同時に、彼の年增は忽ち額に靑き筋を現はし、ギリ〳〵と切齒をしながら身を震はせり、而して又彼の男は、固有の圓なる眼を愈圓にし、天性の怒れる肩を愈よ怒らし、一言をも發せず、男女同時に立上れり、女は長き煙管を持ちつゝ、男は傍にありし樫の棒を取りつゝ、同時に立上れり『今や少女が危急存亡の運命』余は思はず拳を握れり。瞬間、惡漢毒婦が眸を裂きて、彼少女を中に打たんと進む此瞬間、少女はスハヤク行燈を引倒せり、忽ち一室の裡は黑闇々として咫尺を辨せず、今は余が影の窓に映らん事を恐れ、余は忙てながら身を退きて、枯茅の蔭に身を隱くし、万一異變あらば跳り出で丶救はんものと、身構へしつゝ透し眺めり、間もなく彼方の入口より走せ出づる少女の影、續いて出づる惡漢毒婦、最早間近く追迫れる模樣、余は今は猶豫の暇もなく、手に持つ獵銃空に向け、轟然一發劫の爲めに發砲せり、果して彼等は躊躇せり、余は得たりと續いて又た一發、『誰だ』と云へる男の聲、『盜賊』と叫ぶ女の聲、彼等が躊躇の間に、ハヤ少女の影は遠く見えずなれり、余は最早要なし、見出されては便惡るしと、急ぎ忙て丶千萱の裡に身を投ト、夫れより唯一散に道なき道を走れり、成る可く彼の少女の走せ去りたる方に向て。

斯くて走しる事一里許、忽ち川ある所に出でたり、今は流石に息迫り足勞れて一步も移し難きより、川邊の堤にドッカと坐し、暫し息を休むる折しも、忽焉として彼方の橋上に現はるゝ黑き人影、余はモシヤ少女にはあらざるかと思ひければ、ヤカテ身を忍ばし足音を盜すみ、極めて靜かに步みを移して、其

方に向て進み行けり『ツマラナィ死んでしまェ』、噫是れ橋上の人影より發したる言葉、余は思はず跳り出でたり、而して余が走せ進むが否や、彼は俄かに逃ぐるが如く走せ出せり、星の光に透かし見るに、正しく少女の姿、然り如何で猶豫すべき、余も亦た更に勇氣を皷して、同じく續いて走せ出せり、夜はいつしかに更け渡り、風はいつしか止みたりと覺ぼしく、四望閴寂、唯聞くものは兩個が跫音、高く、低く、遠く、近し。

斯くて余は余が足の運ぶだけ夫丈早く走る程に、漸くにして彼の少女に追付きたり、余は追付くが否や、直ちに彼が袂を握りて引止めたり、然れども彼は又た直ちに余が握れる袂を振拂へり、同時に彼は逃げもやらず、儼然として余が方振向けり、而して余は彼を知らんと欲し、彼は又た余を知らんと欲するが如く、互みに面を對せつゝ透かし眺めたり、星の光は極めて微なりし、然れども朧げながら其面を認むるを得たりし、認むると同時に少女は極めて喜び忙てたる調子にて、突然、『銃獵の旦那さま、菊川さま、俊雄さま』、余『梅子ぢやないか』彼も愕然余も亦愕然、噫是れ梅子にてありし、噫是れ實に梅子にてありし。

余は簡短に曩よりの始末を告げたり、而して彼も亦た其身の危難を涙に咽ぶ聲の中に語れり、果して余が推測に違はず、曩に彼の白屋に於て危難に逢ひしものは、此少女、此梅子にてありしなり、余は斯くて玆に物語り居らんには、彼の悪漢毒婦の追迫るやも知れず、事、極めて危しと思ひければ、兎も角も

人力車ある所まで急ぐべしとて、少女を道案内として歩みを移せり、且つ語り且つ進みつゝ。

道々彼が語る所に依れば、梅子は此一年間に於て、生れて始めての苦辛を感ぜしなり、目黒にありける折は、貧こそ苦しくも感ぜしならんが、兎に角當歳の頃より育てられたる慈愛深き母親の傍にある事なれば、朝夕慰めつ慰められつ、苦も左までの苦と思はざりしものゝ、母親死して後は父親在世の折、僅かに両三度逢ひしまゝなる叔父の許に引取らるゝ事となりしより、其辛苦は一方ならず、叔父とは云へど名のみにて、血統あるにもあらぬが上に、況して其妻と云へるは、五宿邊の宿場女郎あがりにして、此上もなき莫連なり、似た者夫婦、とも〴〵の虐遇酷待に、流石に鋭敏活潑なる梅子も、涙の袂乾く間もなく、亡き父母の慕はしさに、遥々世田ヶ谷村より目黒なる、父母の墓所邊まで彷徨ひ出でし事も幾度と知れぬ許り、此際彼が心の悲しみの暗に於ける一點の光りとも云ふべきは、只余に廻り逢はんと云ふ一の希望のみにてありしとなり、去る程に今年の夏より、叔父夫婦は往々其本色を現はして、梅子に向て聞くも汚はしき、娼妓出稼を勸むる事あり、疾くより賢き心根に、斯くあるべしと思ひ居たる事なれば、いつも儼然として謝絶するのみ、受付けん氣色だも見せざるものから、時には威力を以て刧かす事すらあり、左れど大膽なる心にはビクとも思はず、彼方より威を以て迫る時は、此方も亦威を以て應へ、彼方より欺き賺さんとする時は、此方も亦温和かに謝絶するより、終に夫婦談合の上、今宵彼の如き殘忍なる擧動を以て、迫れるに至れるなり、左れば梅子は曩に余が發砲の謀計に依て、僅かに危急は

逃れしもの丶、頼る方なき身の習ひとて、絶望悲嘆に思ひ迫り、彼の橋上より投身せんとせし折、計らず余が爲めに認められ、結局今茲に再會を遂ぐるに至れるなりき、噫彼れが如き不幸薄命の少女、又と世にあるべきか、嗚呼彼れが如き孝義に厚き少女、又と世にあるべきか、余は彼れが話の一語一句毎に、坐ろに暗涙の催ほし來るを禁ずる能はざりき、斯くて此の談話の間に、いつしか三軒茶屋に達したれば、茲にて豫て賴みつけなる車夫を雇ひ、終に車を同うして夜更けて我家に歸り着けり。

翌朝余は少女が孝義と薄命とを憐れむの餘り、伯母なる人に談合して、出入者をして彼の世田ヶ谷村なる叔父と云へる惡漢の許に、金五十金を齎らしやり、終に之を說かしめて、將來永久親族の關係を絶たしめ、是れより梅子は伯母の手に預けて、或る女學校に通學せしむる事となせしが、天性の才華類稀れにて、其進步の著るしき、何人も舌を捲いて驚くばかり、此分にて進み行かば、アッパレ和郎の良妻なりとて、打笑みながら伯母なる人の、余等兩人をして赤面せしめ玉ふ事も屢々なりけり。

其翌年、余は豫期の如く、伯母及梅子を始め、親族朋友に辭して、米國に渡航せり、而して渡航後は余は平生嗜める銃獵すら廢して、一に身を學事に寄せたりければ、苦學三年にして、終に法律博士の學位を得るに至りたりき、斯くて余が此學位を得たる頃、本國なる伯母の許より來信あり、乃ち梅子が第一等の成績を以て、高等なる女學校を卒業したる報知にてありき、而して梅子よりの書狀も同封中にありしが、其文章の情厚くして意濃なる、其文字の雄麗にして典雅なる、是れまで屢々送り來れるものに

比すれば、又一層の光彩を放てり、實に余をして再讀の後、思はず一種云ふ可らざる喜びの笑ひを、半面に漏さしむるの價値ありしなり。

是れより余は、歐洲諸國の巡歷に一年餘の日子を費やし、二十八歳の春、我最敬の伯母、我最愛の少女、及知友歡迎の聲の裡に、無事歸朝せり、四年間客遊の人たりし身には、目に見耳に聞く者一も珍らしからざるはあきが中にも、殊に余をして驚愕せしめしものは、伯母なる人の甚く年老い玉ひしと、彼の鄙びたる少女の、何時しか端麗高尚なる一の絶美の婦人となりし事にぞありける。

斯くて此年の秋より、余は又た銃獵仲間の人となりぬ、而して久振にて故郷の野に屢々例の拙劣なる技倆を試むる事とはなりぬ、然れども此年より、余に向て甲斐々々しく獵服を着せしめ、獵銃を渡し、而して遙かに余を門外に見送るものは、慈愛深き伯母にはあらずして、實に余が最愛の妻、其名は梅子。

◉鏡花縁

（其一）

松居十八公子翻案

紅葉山人閲

唉わが終焉の期は近づきぬ。わが魂魄はこの痩せさらばひたる肉體と共に、恐ろしき『死』の手に攫まれむも、想ふに一週日を出ざるべし。
今一度は必らず愉快の望ありと、醫師は我を慰むれど、かばかり衰へ果てゝ、爭か永く此世に在るべき。
已みなむ／＼、わが臨終は近づきぬ。
わが寢室の床柱に懸けたる時辰儀は恰も十時を指せり、雪にやならむといひし下婢が今朝の言空しからで、室の裏薄暗うなりける頃より、枕邊の窓さら／＼と落葉なんどに掃はるゝ音して、今も猶庭面の松の下枝に北風のわたる折々、微けき物の落つる音響の聞ゆれば、滿地の雪は早寸にも餘んぬらむ。
われは先刻より胸裏に集まれる、希望の光無く、愉快の色無き、暗澹たる過去の感想、未來の憂愁に疲れて、『死』を待つにもあらず、待たぬにもあらで、耿々としてわれを瞻視貌なる一穗の寒燈を伴侶として、此世を去りたらむ人の如く、寂寞として一時餘を送りぬ。
室の一隅に据ゑたる煖爐には、數時間前に投げてみたる石炭の幾塊盡く焚爐して、力なく立ち騰る白蛇の舌の如き最后の炎焰は、ごつとりと崩れたる石炭の灰とともに、消え去りし後は、室内一入寂寥になりまさりたらむやうに思ふにつけて、われは胸部の疼痛を覺えぬ。こは咽喉塞りて、呼吸に苦しむべき兆候なれば、急ぎ藥劑を飲まばやと、下人を呼ばむとて枕頭の呼鈴を鳴らさむとせしに、憐むべし、今日は思ふまゝに手をさしのばすだに愜はざりけり。力なき滿身の力を萃め、身を伸ばして呼鈴を一打

きけるに、誰應ふるものもあらず、あまりに力の弱くして、音響の庖廚までは達かぬにやと、更にあらむ限りの力もて打敲きしかど、仍ほ返答するものもあらざりき。果は焦れてみて、自ら起たむとせる途端、不圖憶ひ出だせば、返答のなかりしも道理なり。雇ひ置きつる兩人の下男下婢はこのほどより怪しき中となりたりしに、今宵些少の事より口說をはしめ、互に顏色變へて抗論けるが、下婢は、女心のそぞろにやありけん、晩餐の箸をも取らで、わが家を立ち出でたるに、下男の驚愕は一方ならず、入水などせむにはと、慌てふためきて跡を慕ひ行きしと、過刻小間使の少女が、おのれ一人取殘されたるを喞ちつゝ、涙ぐみて物語りき、嗚呼彼等が眼には、われは一分時も手離しがたき大病人とは見えざるか。今をも料りがたき危き命の器とは知らざるか畜類さへ飼養主は忘れずとぞいふなるに、淺間しきは彼等が所業かな。然れど、噫、然れど彼等のみかは。わが既往の歷史を顧れば、尙幾層哀れ果敢なき境界に沈みしこともありけるを、今さら何をか悲み、何をか慨くべき。

（其二）

孤影を照らして朦朧たるランプは、次第に消えなむとして一種の惡臭室內に充ちたりぬ。

最後の力をあつめてまた一敲せしに、唯一人なる徒然に、居ねむりこけて居たりける彼少女も、流石に熟眠の夢を破られけむ、眼を擦り〳〵入來りて、この有様を見て打驚き、慌てゝ藥をわれに與へけるに、やう〳〵必死の苦痛を免がれぬ。この少女の來ること今數十分遲れたらむには、わが命はこの苦痛の底

に果敢なくなりたらむものを。

『死』よ、『死』よ、爾は永遠にわれらが生命を埋め去る力あるか。爾は今其下に呻く胸部の疼痛も、咽喉の遏塞も、過ぎ來し方の愉樂も、未來を憂ふる心の恐懼も、天も地も、山も河も、みなことごとく未來永刧沒し去る力あるか。

『死』よ、我は常に漠々たる爾が昏闇の世界を蹂躪りて、わが理想の彼岸に達せまほしと思ひ居たりしが、日暮れて路遠く、今は早我力及ばず。われはたゞ黑闇々、陰森々たる爾の底に止まるをもて滿足すべし。唯願くは其時の至らんまで、わが心を靜にして一片の經歷を書殘さしめよ。

我は今ぞ白狀せまし。われは從來我親にさへ十分に心の奥底を開かざりければこの世のあらゆる人間もまた、誠實に心の秘密を明して、我に同感の情を表はさむとは、露ばかりも信ぜざりしならむ。されどかゝる冷淡なる衆人もわれらが亡からむ後には、或は惻隱の心を催ほし、些の涙を灑ぎて、我墓に一枝の花を手向くるもののなきにしもあらざらむ。我曹がこの世に在らむ限りは、彼等は鬼の如く恕さず、敵のごとく假さず、われらが雙眼に露を含みて、彼等の同情を求めむとすれば、かれは冷々氷の如き一瞥もて、　われらが眼の露を凍らしめ、われらが靈魂の使者なる、雙の耳の物の聲色を分たむ間は、かの囂々たる嘲罵の聲、諷刺の語もて、何事をもえ聞こえざらしめなむ。もしそれわれらが眼は閉ぢ、耳は聾ひ、心臟の皷動は絕えなむか、彼等は始めて我曹を憐み、われらを記臆し、われらが事業を賞ふべし。」

かく謂へばとて、我は敢て身後の名を冀ふものにあらず。われは此世に在りて何一つ成就したる事もなく、また我が爲めに墳墓の前を立去りかねて、號泣ばむほどの親しき親戚とてもあらざれば、われ死したりとて、塒求むる鳥だも號かざらむ。噫我はたゞ我死を自ら悲まむ哉。

我幼稚の時代は晩年に比べて、幸福のやうに思はれぬ。そは未來の黒幕はわが眼の前に垂れかゝりて、少しも杞憂を抱かしめざりしかば。さればその日〳〵の愉快の外には、心にかゝる雲もなく、殊には母なる人の鍾愛深く、朝まだきより日暮るゝまで、温かき膝に載せたまひ、柔かなる手に抱きたまひ、玉の如き頬にて撫でたまふなんど、嬉しくも樂しきことの數々は、今こゝに幾多の星霜を經て、幾千百の艱難苦勞に磨滅されたる心にも、尙歷々に刻まれて、片時も忘るゝ暇はあらざるなり。

（其三）

されど、かく長閑なりしわが、生涯の春はいと短かくて、母人の敢なくなり給ひて後は、兒心にもわが生涯のいと冷かに面白からずなりけるを覺えぬ。其頃われは馬丁の源太に扶けられて、小さき白驢に乘りて遊ぶ事を好みたりしが、母の亡せたまひてよりは、わが馬上に揚々たる姿を見て喜ぶ人も、わが歸り來て馬より下らむ時、兩手を擴げて待ち玉ふ人もなくなりけるにぞ、この遊戯も樂からずなりぬ。

今より追想するに、われはいと幼かりし折より、普通ならず感情強き質にてありしかば、何時までも母の事を忘れかねて、かくまでに悲哀を覺えたりしなるべけれど、この幼稚の時の悲哀は、更に我一生涯

を支配したりき。

われはまた種々の音響を聞く毎に、一種の情感に迫られて、思はず絶叫することしば〳〵ありき。

されば其地方に威權ありける顯官にて、其當時は去る大會社の社長なる父上が他所より歸らるゝとて、門内の敷石に戛然として馬蹄の響く時、あるはまた輕車轔々として玄關に轟けば、飼犬のポンペーが前に跳り後に狂ひて、狺々として高く吠ゆる時なんどは、何とも知られぬ感情の、わが頭腦に衝き上るらむやうの心地せられし。

特にわが家近きあたりの兵營にて、幾百の兵士が隊伍を整へ、喇叭を吹きならして、勇ましくも練兵せる有樣を見し時のわれは、得知られぬ感情忽ち胸裏に湧きて、身中顫ひ、双眼に露を湛へけるも幾度なりけむ。

父なる人は親たるものゝ義務として、爲すべきことのあらん限りは、心を用えてわれを育くみ玉ひしかど、さりとてわれを痛く愛したまひしにはあらず。わが母上は繼妻に在して、われは次男の身なりしかば、もとより寵を專らにせむは、惬ふべくもあらざりき。父上は一度いひ出で玉ひし言は、決して跡へは退かぬ剛毅の性質に在して、いたく曲事を憎ませたまひしかば、おのづから他人の尊敬も少なからざりしかど、かゝる名譽は塵埃の如くにや覺されけん、少しも傲りたまふさまはあらで、おのれがなすべき職務を怠らで果し玉ひ、雨にも風にも心を動かしたまふことなく、憂愁も喜悅も得知らぬ人のやうに

見えぬ。

我は父上の前に出づる時は、何と無く窮屈に、且つ恐ろしく思はれて、おのづから態の臆病らしう見えけるにぞ、父上は我を、其頃東の京に遊學せられし阿兄とは、全く異れる方針を取りて、教育せんものと心を定められける。

阿兄は文雄とて、その頃高等中學の上級にありて、政治學を研究し玉ふよし。客人毎に父上はほこり顔に語り玉ひだりき。されど此頃に至りては、少年を教育せんには、高尚なる哲學、優美なる文學なんどをもて爲むよりはそが思想を精密にし、そが感覺を緻巧にせむには、科學に如かじといふ説を主張し玉ひし折あると、且我の如く怯懦にして、感情に馳せ易き少年には、雜駁なる學問を修めしめむと、然るべからじと、わが故國なる尋常中學の校長宮野理學士が我田に水を引きけるより、父上はいよ〳〵われをして、重もに數學、理學なんどを學ばしめむとえたまひたりき。實にわれは器械的の考案に乏しかりければ、理學を修めんこそ肝要なりけめ。實にわれは分類的の智識に乏しかりしかば、動物學、植物學なんどを學ばむも、亦必要なりしならむ。實に我は人間の內界の事のみに意を留めしかば、この物質界の事物に心を向くるも必要なりしならむ。されど天の性は容易に枉げ得べきにあらず。われは同學の朋友に、數學的の腦髓なし、科學的の智識に乏しなど擯斥せられたりしが、平素の感じ易くして、よしなさ事を心に懸くる性質に似もやらで、然ばかり慙かしとも念はざりき。

（其四）

閑暇だにあれば馬琴の八犬傳、種彦の田舎源氏、英文にては初學に讀易きあらびあんないと等を愛讀して、日課の修學は全くわが心裏を離れて、われは一向に小説三昧に日を送りぬ。

例の理學士校長は苦々しきことに思ひけん、何故に水は下方に向うて流るゝものなるか、その理由を知れる人こそ、はじめて賢こき人ともいはめなど、さま〳〵に我心を魔界より曳出さむとしたりけれど、われは何時も冷笑して、我は世の中の最も愚かなるものとこそなりたけれ。さる賢こき人にはならずもがな、と答へけるにぞ、流石の校長も呆れはてゝ口を箝みぬ。

我とて水に對し、山に對し、はた自然萬有に對して些かも心に感ずるところなきにあらず。潺湲として小石の間を潜りて、漣立つ細流に映ろふ夕陽の、錦を浸したらむやうなるを見れば、自然の奥妙なる化工に感じて、思はず感歎の聲を洩せしことも少からざりしが、何故にかく流るゝものなるかなど、さる理屈じみたる事は、推究ねむとも思はざりき。

我この年頃の生涯は、くだ〳〵しう書付るほどの事もあらず。但わが性質のいと感情に鋭く、空理にのみ馳する傾向ありたるに、その教育の方針は全く相反對したりしかば、わが學問は更なり、精神の進歩のいと鈍かりけることをだに謂はゞ足りなむ。

やう〳〵十六の春を迎へし時、父はわが望む學術を修むべしと我を折り玉ひてわれを、西京なる同志社

にぞ送りたまひける。

西京の地たる、今さら、云までもなけれど、鴨河の水、東山の雪、嵐山の花の曙、通天の秋の暮、観るとして詩情を慰めざるはなく、處として詩料ならざるはなきに、われはさながら、天國に入りたらん心地して、其後五年が間はこの愛すべく掬すべき自然の美に沈醉して、朝も夕もたゞこの秀靈なる山精水靈に接して、只管大詩想を養はんことをのみつとめたりき。かく謂はば、われも幼なき折より、自然を樂しみ、天然を謠ふ詩人の如くありたらむやうに見ゆれど、不幸や我はさる幸福を獲ること難かりしなり。

さる文學者のいひけんごとく、詩人なるものは自然の美を知覺する大能力を有し、天然の眞理を認識するにいと敏き才能を要するは謂ふまでもなけれど、また一方には、箇社界に向つて熱涙を濺ぐ可き至誠と、同情とを以て我が人間界の眞面目を發揚せむことを勗めずばあらず。我、憐れなる詩人ならざる詩人は、沙煖かに水麗はしき鴨川の涯に、一卷の詩書を繙きて、自然の好風物に接し、折々耳朶に起る塵世の動物が、喧しましき叫喚に襲はれて、思はず涙を催ほし、あるはまた月下に三井寺の門を敲きし高風の慕はしさに、曉の霜を踏むで叡山に遊び、遂には紛々たる俗塵を厭ひて、早くこの囂囂たる汚濁の人間界を脱離して、無限無究の寂寞界に入らまほしなど、物くるはしき冀望を抱きては、なかなかに同窓の友をだに容れざりければ、いかでいかで圓滿の詩人とならむことなんぞは、企て及ぶ

べくもあらざりしなり。

我かく寂しき境涯を好みたりしかば、一週の星漸くめぐり來て日曜日となれる毎に、一人短艇に身を委ねて、漾々たる琵琶湖上に自適の樂を極めし時、獨り心に念ひけるは、我十年以前親愛なる母を喪うてより爾來、曾てかばかりの嬉しさを人間界より求めしことはあらざりしに、大慈悲なる自然の神は、われを迎へてかゝる逸樂を與へ玉ふかと、坐ろに瞼の濕ふも、また例の癖なりき。

（其五）

我はかゝる幽寂の遊樂にのみ耽りければ、他の勇壯活潑なる同窓の青年等に容れられざりしは勿論にて、纔に睦まじう語らひし友といふは只一人ありしのみ。

其名を高野馨とて、われよりは二歳許りも年長にて、其嗜好は全くわれと異なりて、科學修行に熱心なりしかば、我なか／＼に渠と交情を結ばむこと容易からざるはづなれど、渠はいと貧しきものゝ孤子なりしを、さる西洋人の拾ひ上げて、この學校に入學せしめしに、件の西洋人歸國して後は、校費をもて修學せる身なりしかば、同學の友人に輕蔑せらるゝ傾向あるにぞ、その原因こそ同じからざれ、彼等に容れられざるは等き我と、この人との交情の、おのづから深うなり行きしは、さばかり怪しむべきことにはあらざらむ。われらは休日毎に、一卷の書、一塊の麪包を腰にして、東山西湖を跋涉し、翠嵐滴らむばかりなる長松の下に、夏草折り敷きて寢轉べる渠は、おのれが學得し理學上の學說、さては將來

に抱ける大發明の企望など、爽快なる辯舌もて講演一番するに、我はよくもその意義を解せざれど、たゞ何となく面白く耳を傾け、折々はおのれもまた翠流白雲目の觸るゝ自然の光景につきて、思ひわたれる節を覺束なくも論談せり。

かゝる些細なる事實を、事々しう爰に記さむは、要なき業に似たれども、この友人はわが將來の生涯に起れる、いと恐しく、はたいと奇しき事實に大關係を有すれば、くだ〳〵しとてこの事實をえ棄つべきにあらず。

西京に於けるわが生涯は、激しき熱病の爲に襲はれける時を以て、全く畢を告げぬ。父はわが病に臥しける由を耳にしたまふや否や、取るものも取りあへず、急ぎ此地に來りたまひて、われをさる病院に入れたまひ、いと深切に看護したまひしに、疾病はおもひしよりも容易く懈りて、數十日の後には纔くばかり健かになりしかど、精神はいちじるき變動をうけて、床の中に起りける幾週の事件の過半は、夢よりも淡く記憶に存するのみ。やがて四五日を經るまゝに全く床を離れて、醫師は垂籠めてのみあらむはよろしからず、折々は城外を散歩せられよなど、勸むるまでになりけるに、一日父はわれに向ひて、『われ今朝院長に訊ねしに、汝が病も今ははや殆んど癒えたれば、倘四五日經たむには、旅行せむも差支なしとの事なれば、一先爾を家に伴ふべし、幸ひ今日は隣家なる松浦夫婦も、京都見物に來たりたれば、共々に名所古跡を一見して、軈て歸途に就かむと思ふなり。兄の文雄も東京にて待つよしいひおこした

れば、彼所をもまた十分に見物して、さて我邦第一の奇觀と聞えたる、奥州松島をも……』その語未だ了らざるに、來客ありとて、父上は從者の爲に呼び去られぬ。我は獨り室内に遺されしに、父上の『松島をも……』といひける此簡單なる四字は、忽ち我腦中に風光明媚なる一幅の幻影を映出したりき。我は嘗て松島の畫をだに精くは見ざりしが、今默想の中に遊びける山水は、或ひは其眞景にあらざるかを疑ひぬ。

われは曩にも謂ひつる如く、感情最强く、神經いたく鋭かりければ、夜半人靜かなる時、恐ろしき夢に魘はれて蹶然と刎ね起き思はぬことを口走りし事なんどもありけれど、夢の裏にても、はた幻影にても、かくばかり實際らしき影畫を認めたることは絶えてあらざりき。

東山の新樹は風死して、檐頭の鐵馬全く嘶きをとゞめたる夏の日、蒸しあつき南窓の下に眠れるにもあらず、眠らぬにもあらず、瞢騰としてある折々は、幾度か既往の夢、未來の幻をくりかへして、種々なる忘想を描き出すこと多かりけれど、かくばかり歷々と眼前に現はれしことは、また絶えてあらざりき。

（其六）

こはこれ一種の幻影、想像力の發現にして、實に詩人の本色のみ。ホーマアがトロイの戰場を見たりしも、ダンテが地獄の景色を寫せしも、ミルトンが失樂園を謡ひしも、皆此想像力に據れるにあらざ

るはなし、思ふに疾病の爲に幾多變化をうけし精神が、次第に健全になりゆきて、嘗て痛く過敏なりし神經もまた舊に復して、わが想像力は世のあらゆる詩人の如く、いと高雅に純潔なる方に移り行きたるならん。

われ屢々これと等しき事實を記したる小說、殊には多くの詩人の傳記を見たりしが、われも今はさる詩人等と同じき境界に逍遙する身とはなれりしならむ。

かく思ふにつけて、われはこの幻影の、眞箇かの松島の眞景なるべしとは思ひもよらざりしが、とにかくにわが新らたに得たる詩才もて、一氣呵成に亂塗したる一幅の有聲畵なりと信じたりしかば、其後も幾度か我想像の彩筆もて、この幻ならぬ幻影を描き見ばやと試みしが、終に再びこの奇絶壯絶なる自然の好景の、わが眼底に映ずることとてはあらざりき。

父上は其の翌夜われを訪はせ玉ひし折『例の松浦の婦人達が、此の地の名產物をくさ〲調へたしといへば、われは汝を案內者となすべしといひにき。明日十二時を期して迎へに來るべければ、衣服を着かへて待つべし』といはるゝに、その日〱を徒然にのみ送れる我はいと喜ばしくて、切りに其時を待ちたるに、かねては何事にも精密におはして、一秒の時をも苟且にはなし玉はぬ父上が、今日のみは如何にし玉ひけん、はや三十分間ばかりも定めの時を後れさせ玉ひけるに、疾病にかゝりし後はいと性急になりたる我は、頭腦何となく騷がしく、兩腕むづ〱と震はるゝやうに覺えて、今ははや室內に在るに

堪へざれば、つと障子を明けて、鴨川東山を見晴らしつゝ、紛れむとすれども、仍一念に父上のみぞ待たれたりき。

わが物思ひに沈みつゝありし間に、父上は二人の婦人を伴うてわが室に入り來たまひぬ。父上に續きて入り來りしは、五年の間相見る事はなかりしかど、わが記憶には尚歷々に殘れる隣家の主婦松浦夫人なるは見紛ふべくもあらず。この人の風采容貌は、さしてこと〳〵しう謂ふべきほどにもあらず、たゞ『夫人』なる文字は、この人に適當したる名詞にやあらん。夫人に續きて入り來りしは、勝れて丈高く、色白く、夜會結とやらむに束ねたる雲の鬢は房々として瘦肉の身に堪ふべくもあらぬばかりに見え、容顏端麗にして擧止閑雅なる、なか〳〵に多情の風流才子が腸を寸斷せむばかりの婦人、年齒は二十に滿たずと見ゆれど、流石に大人びて見ゆるは、心性の普通ならぬを表すにや。げにこれ一箇の尤物、世の俗物は定めて絕世の佳人ともたゝへつべき容色なれど、わが詩人的審美眼をもて見れば、その薄き唇と、休みなき眼光の女性らしからで、人を見るたび〳〵に嘲笑の色を帶ぶるは、明白に渠が心の底に潜める邪推、傲慢の氣性なんど見え透きて、三十二相圓滿の佳人とし見られ得べくもあらず。彼等が入り來ると等しく、わが面に投げたる一種の微笑は、いたくわれを刺衝して、凜冽たる北風の身に浸みたらむ心地ぞしける。父上は『雄兒よさぞや待ち遠にぞありつらむ……』と語は猶耳に殘りつるに、不思議や今までありける三人の姿は搔消すごとく見えずなりぬ。

折から看護婦の入來りて、『若樣、何となされました。』と謂はれて我はいと焦躁ち、『父上は如何せられしぞ。まだ見えさせたまはぬか』と問へば看護婦は受附にて尋ね來らむとて立去りぬ。われは精神の何となく恍惚となりしやうに覺えしかば、廊下の彼方此方を散步し、さて病室に立ちかへれば、はや父上は例の二人の婦人と共に、われより早く室内に在したまうてわれを見るより『雄兒、さぞや待遠しくぞありつらん……』

其後の語は聞かず、其後の事は知らず。われは安樂椅子に腰懸けて首を垂れ、看護婦と父上とに介抱せられて、惘然としてありし我身を見出すまでは、何事をも知ざりき。漸くわが正氣づきたるを見て、父上はじめて安堵したらむやうの面色にて『雄兒よ、今日は例の約束は中止にしたれば心靜かに休息せよ。今日は汝に松浦夫人が養女をば紹介せんとて伴ひ來りしかど、生憎に汝が病の俄かに發作たるは遺憾なり。かの娘はお花とて、松浦の姪にあたれるものなれど、松浦夫婦は實女のやうに愛しむなり。汝も家に歸へらむには、隣家づからのことあれば、朝夕昵懇にせよかし。殊にはわれも松浦もいひ合はせてこそはしね、汝が兄の文雄には、相應しき伉儷と思ひ居れば』。父上の語によりて我れ始めて我幻影に見たりし事實は、我空想の夢ならざるに驚きぬ。

（其七）

扨この二箇の事實は、十分にわが疾病にかゝれりし後の性癖を示すよすがともなるべければ、わが西京

にある間、幾度か起りける同じやうなる現象につきては、さのみはくだ〳〵しうこゝに記さんえうあらずと思ふ。

たゞこゝに特筆せまほしと思ふは、わが例の偏屈なる意思の、いよ〳〵偏僻になり行くのみか、人々のいふ言の葉の、兒の手柏のそれならねど、必らず二面の意味あるらんやうに覺えて、賞へらるれば譏らるゝが如く感じ、褒めらるれば罵しらるゝより心ぐるしく、遂には人と交際せむも面白からずなり行きし事なり。世の人は父上が權勢よきに阿ねり諂らひ、われをばさま〴〵に賞めそやしなぞして、親しげに物いひかくることも尠からねど、われはその度毎に、え堪ぬばかり五月蠅くて、彼等が側を離れて、獨り妄想に沈みつゝ、靜かに時を移さむ時、始めて頭腦の熱の去りたらむ心地せり。

程なくわが一行は東京に着きて、阿兄に逢ひぬ、阿兄はこの時廿六歳に在して、正に是れ一箇の好紳士、その豐なる頰、紅なる顏色、卒業の時近づきたればや、鼻下に蓄えたる八字髯も、いづれか人の愛敬を惹かざるはなきに、胎こそかはれ、そが實弟なる我は、肉落ち骨高く、色蒼白、兄上が何事にも悠々自得せる氣象は、我小かなる事にも動じ易き死心とは其面の異なるよりも異なりき。

我嘗て父上と共に、その頃都下幾百の畫工中にて、最も妙手の聞え高かりける何某畫伯を訪ひし時、彼の畫伯は白き髯をば撚りつゝ、われを見て冷かなる笑を洩らし『アヽ御身こそわが此頃切に望みたる例の人の死したる形相の好粉本にてありけるよ』といはれし事ありしが、實にわれは面上生色なき死骸の

如くありつるなり。されどこれぞ詩人の詩人たる所以、思索家が本領にこそあれ、と自ら強ひて心を慰めたりけれど、さて古來の詩人美術家なんどの寫眞肖像を蒐集めて、打かへし〳〵尋見るに、わればかり怪しきまでに痩せ衰へたるは稀有なるに、はては慰さむる力も失せて、みづから不幸を歎ずるのみ。」

永の年月幾百里を隔てゝ、相見るとも稀有に、かつは手紙の往復すら疎かりし間柄なりしかど、人に卓れて性情柔和く、天禀惻隱の情に富て、人と爭ねば人に憎まるゝ事もなく、敵を作らねば敵の恐るべき事をも知らぬ阿兄は、殊更われには親切を盡して、心の限り柔和う待遇し玉ひしにも關らず、われは阿兄に對して少も誠實なる心を開くことあらざりし。われは我性情のかく偏屈に、わが意志のかく偏僻なることなく、通常の人の如く心豁達にありつるも、なほ阿兄にはいさゝか嫉妬の心ありしとは謂ひがたかりしなり。加之、われは幾度も謂へりし如き性情にて、阿兄とは全くその趣く所を異にしたりしかば、われは阿兄が爲る事、爲す事、こと〴〵く不快の種とならざるはなく、われ平常にも無く固く結びし唇の封を切りて、得意に放言せる折にても、阿兄の姿の見ゆる時には、さながら怪異物がわが前に忽然として現はれたらむ如く、われは再び唇を開くべき勇氣を失ひぬ。かくて、わがいと薄弱き意思は、兄上が何事にも輕快に在して、わが思ふ事も、なさんとする事も、盡く先鞭を著け玉ひ、かのお花孃の機嫌を取るとの、われよりはいと巧にて、わがいまだ十分にお花孃が心を得ざる間に、彼等ははや兄弟の如く、夫婦の如く、いと昵懇なるを見ては、一般の人に抱きし不快の念は、蒐めて兄上が肩にぞ上りけ

る。

されどかゝるとのあるべしとは、露ばかりも知らで在せる兄上にハ、げにも氣の毒なるとゑてけるよ。われハ未だわがお花孃に於ける親交に就きてハ、何事も記さゞりき。今姑らく簡單に説來らむ。

（其八）

怪しく物狂はしきまで、他人を容れざりしわが狹隘偏癖なる性情も、お花孃の前にハ粉末微塵に打碎かれて、この女王のみハ唯一の大能力をわが心の上に有ちたりき。されどわれハ彼女の心は、如何なる方に傾きゐたりけむ、これのみ心がゝりにて、二人同じ室にあらむにハ、頻りに彼女の顏色を伺ひてハ、其胸中を推量り、何事か相談せむとするときハ我ハ全く無學のものとなりて、只管その意見を質ねぬ。

彼女の一顰一笑、都てわが安危のかゝりけむばかりに、心安まる折とてハあらざりき。アヽ眞箇彼女ハわが一身の命運を左右すべき大魔力を有てる女王にてありけるよ。

わが彼女に捧げたる心情ハ果して如何にありつるか、われみづからも明かにハ謂ひがたし、それわが彼の女を愛するハ、たゞ小兒の折に美しきものを見て、得たしと願ひ、甘きものを見てハ、食はまほしと思ふ感情のみにハあらで、一種の從來ハ知らでありける感情の、其間に交りたるやうに思はるればなり。

彼女ハ他人に對してハいと冷淡に、何事にまれ冷笑を含みて評らふを好みながら、さて想像力に乏しく、殘忍とまでにハあらねど、よろづ惻憶の情深からず、そうあくハ悲しき事嬉しき事にも心を動かさず、

ことさらわが折々作れりし韵文漢詩あんどを見てハ、鼻の先にて應ふを例とせり。彼女は當時わが最も愛讀したりし源氏物語なんどハ、讀むにも足らずと嘲けりしのみか、その容貌風采こそハ普通勝れたれ、わが小さき詩人的理想に適ひたる佳人にハあらず。かくても尙ほ慕はしさ戀しさの、わが胸間を去りがたなきハ、怪しともまた怪しきかぎりなりき。

今より懷ふに、わが他人を容るゝ能はざりけるハ、わが意思の強くして一徹なるが爲めにもあらねば、さりとてまた意志のあまりに弱くして、臆病の心が胸中を占領せしが爲にもあらず。こハ肉體上の關係と天稟物事に感じ易きとによりて、日増にわが志想の萎けて、霜に凋める草の葉の如く、氣を呑み、水を吸ふ力の足らざりしなれば、今この女神の前に蘇生りてよりハ、その同情同憐を希がふ心ハ、朝に夕に絶ゆる時なかりしに、この女神の唯我獨尊におはして、人の語を斥け、人の意に逆ふを事ともしたまはぬ性質は、われにハ少からぬ重荷の苦を負はせ玉ひたらむやうに念はれて、宛然わが運動を支配し玉ふ大御神が愛憎いづれとも分きかねて、其の紅の玉垣の御前に跪きて、神慮如何にと心を煩はす人の如く、たゞ〳〵女神の震怒に觸れまじと祈れりしも、いと効なきやうなれど、當時の性情にて初めて「戀」なるものを知りそめたることなれば、かくありけるも强ちに無理ならぬことゝやいふべき。

われハかくばかりお花孃を慕ひけるに、渠ハ却りてわれをして徒勞なる空望に渇かしめ、わが初戀の情をして、いよ〳〵熾ならしめ、その一顰一笑ハ、わが身を呵責む器械とも見つべかりし。邪推かハ知ら

ねど、わが今日の想像をもて當時を想見れば、彼の女神は私に己が才と美とに誇るところやありけん、この小詩人が熱し盡したる戀愛の的となれりしを見るよりも、その感情をば弄びて、件の小詩人をば戀愛の水と嫉妬の炎との呵責をもて、責めさいなまんとまでに、淺ましくも憎くむべき企望をなしたりしならむ。されどわれは彼方にさる大膽なる企望ありとも知らざりければ、阿兄が彼婦人の前にては、小心翼々として只管に機嫌を取るに、彼女もまたいと喜ばしげに語り合ふさまなんどを見る時は、おのれの身の上とも露知らで、哀哉兄上は彼女の翫弄となり、終極は失望の淵に陥れられて、口惜しき夢をや見たまふらむ、と心密かに冷笑ひ居たりき。

（其九）

渠は阿兄の前にても、些少も憚るさまなく我を愛しけれど、戀人として愛せしにはあらで、さる浮きたる事は少しも知らぬ、病ほゝけたる一箇の小兒としてなりき。われはこれを見るにつけても、いと齒痒きことに思ひてしかど、かくてぞ兄上はいさゝか心の落居たりしならむ。されど二人の外には、兄上は勿論誰一人とてもあらぬ折は、渠はわが膝に凭れかゝりて、さも嬉しげに小兒らしきクダラヌ事を語り出で、わが身體のおのづから打震はるゝを見ては微笑みて、語の端々、身の素振に、阿兄よりはわれにこそ、深き意のありげに微見かしければ、わが愚かしき望は次第に勝さりて、今日や我心を打明けん、明日こそはと高峯の花に手のゆかぬ心地して、仇なる夢にあこがるゝ我身ぞ、哀にも果敢なかりける。

渠をば得らるべきや、否やとの、希望と恐怖との波間に搖らるゝ我は、渠が冷笑を含める蒼白き顏の眼前にあらはるゝ時は、さながら風凪ぎ空晴れたらん心地せられ、人の心の險しき波も、世の中の恐ろしき嵐も心の外になりて、われは唯戀情の芳醇に醉着れぬ。

宿醒いまだ醒めやらざるに、われはまた一入激烈しき一杯の愛情の杯に醉はされぬ。東京の見物もはや果てなんとしける折のことなりき。お花孃が二十年の誕生日來りしかば、われらは各自何物をか祝儀にとて貺る約束をしたりしに、われはもとより價貴き物品を貺得むよすがとてもあらざりけれど、非常の奮發をもて財嚢の底をはたき、オーパルの指環を買ひ求めつ、さて之をば紙につゝみてお花孃に貺りぬ。われはお花孃に手渡せる折言葉を添へぬ。『これ價値なき物品にはあれど、その日光に映ずる毎に、さまざまに色をばかゆる有様の、さながら魂魄ある人間の情體にも似たらんかし。これ詩人なんどが貺物には、いと相應しと思て御身にまゐらせぬ。價値は低しとて打棄て玉ふな。但この色のうつろひやすきは、婦人たらんものゝ學ぶべき事にあらず、かまへてこの指環の如き心ばし持ち玉ふな』。

われはわが貺りし苞苴の、價値こそ他人のには劣りたれ、兄上なんどが俗臭を帶ぶものとは較ぶべくもあらず、早く夜に入れかし、かの客人達が集れる宴會の席上、紅燈白日の如く輝ける中に、かの女が彌生の頃の箏とも見つべく、爪紅ほんのりと白き指にかゝれる燦然たる指環を見たらんには、誰かはわが美術心に富みたるを賞へざるべき。人々が賞めそやすを打聞きて、嫣然と笑ふ彼女が面こそ、千金萬金

にもかへがたけれ。我輕き財嚢を倒にして、西施の一笑を購ひ得んには、マニラの富闔を買ひあてたるにもまさりつべし。來れ夕暮よ、來れ夜よ。

何時とても等しかるべき日脚の進歩は、今日のみはいと遲くして、夜は徐々と八百八街を掩ひぬ。地方にては門地たかき松浦氏のことなれば、知れる人も少なからねど、旅路の空なればとてワザト同行の一連と、四五人の知友とのみを招待して、小宴をば枕橋の八百松樓上に張りぬ。われは旅宿を出づる時、頭にはわが父の貺り玉ひたる鼈甲の櫛と、兄上がおくりたりといふ純金足に五分ばかりのルビーの珠をつけたる束髪簪をさし、いと高等なる明石縮の單衣をつけたるお花孃が姿に、暫時見惚れて居たりしが、心附きてその兩の手を見やりしかど、平素に箝めたりし純金の指環の外には、一ッの指環だも見えざりしかば、一時は勃然として彼女が方を打見やりしに、渠が嬌然たる微笑は、平素にかはらず。さてはわれより貺りたりと、人に知られんことを羞ぢたるにやと思ひて、いさゝか心落ち居しが、再び考がふれば、兄上より貺りし物は人の目に觸るべき頭の上に簪せる程なるに、わが送りしものゝみを、人にかくさむは心得がたき渠が胸裏かな。たゞし酒樓に行きて後に、俄かに人を驚かさんとの意匠にもやと、靜まらぬ胸を無理にしづめて彼處に行きしが、杯は幾度かめぐりて、筵につらなる人々玉山既に頽れて、躋り座敷に燭消え客散じたるに驚かされ、車をつらねて旅宿にかへりし後までも、詩人が意匠を凝らして貺りたる指環は、一度も美人の指頭に上らで已みぬ。

わが愛情を籠めたる賜物は、わけもなく斥けられしのみか、兄上が賜り物のみ時を得顔に燦然として、渠を一入美しう見せしめける、黒髪の裝飾とだになりけるに、わが口惜しさ、嫉ましさは、今なかくに記し盡さんやうもなく、その夜は少しもまどろまで明かし去り、翌朝渠が起き出づるを遲しと待ちうけつゝ、渠が心の餘りにつれなくて、わが心の眞實を容れざるとの恨めしさよと喞てば、渠は例の冷笑を唇邊にたゝへて何事をもいはず、懷中の守袋を取出し、二重三重に卷きこめたる緋縮緬の帛の裏より、かの指環を出して『わが愛する詩人よ、われは御身の賜物なればと思へばこそ、耻かしながらわが膚に着けて、束の間も離さゞるなれ。御身は世の人の目に見られん表面のみの愛情をこそ、よしとは覺し玉ふならめ。人知れず二人が眞心を通はさむと願ふ妾が心をば憐みもせで、不足がましき事を謂ひたまふとやある。』

かくいひつゝ、彼は再び守袋に入れんとはせで、左の藥指に箝めたるに、われは雙頰焚ゆるばかりに血の逆しるを覺えて、えうなきことを、いひ出でゝ、いたづらに渠が心を苦しめしことの面目無さよ。渠にしてさる心を有ちたりしならんには、肌身につけて置かれむこそ、わが本意なりしものをと、思はず太息をつきたりき。

われはこの事ありてより、全くわが理性を失ひけむと思ふばかり彼女に醉うて、其後二日ばかりが間は、渠なくては花も月も目に入らず、心は上の空になりぬ。

（其十）

われは旦暮に渠と相見、相語らうをば此上なき快樂としけるに、辿りならはぬ戀の道、其時々の愉快苦悶にうか／＼と日を送りけれど、今ははや全く彼が奴隷となりはてゝ、渠が片頬の微笑には身體の疾病も頓に忘れ、渠が一片の顰蹙には三日の食をも絶ちつべし。みづからその意氣地なきに驚くばかりになりけるが、さて其他の人に向ひては、偏僻なる氣質は例の如くにて、父上も、阿兄も、松浦氏夫婦も、誰も彼も、われにはこと／＼く五月蠅ものに感ぜられて、今はたゞ渠のみぞ、わが怪しき心の沙漠の綠野ともいふべかりしなる。

かの指環の事のありける後なりき。上野公園の美術展覽會を見ばやとて、一同つれ立ちて行きたりき。われは繪畫彫刻なんど、わが嗜好に投ぜるものを見る時は、何時にても非常に精神を勞して、好からぬ結果を來せし事もしばし／＼なりしかば、今日もわづかに參考室のみを見て歸らむとて其の室に入りけるに、最も我眼を惹きしは狩野何某が筆に成れる淀君の畵なりき。

彼佞才猾智に長けて、牛を賣り損ひし風情は、わづか數尺に足らぬ素絹の上に躍然として、われだに問はゞ桃山御殿興亡の恨みを洩らさんばかりなるに、殊さら妙を極めしは、其眼光のいと鋭かる中に、一種冷笑嘲弄の色を帶べるさま、まことに其人の精神を寫し出して、些の遺憾だもなきに、われはさながら魔王の金縛りに遇ひけむやうに、怪しき感情に攫まれて、畵像の前に立てるまゝ、われみづからを失

うて茫然として居たりけり。

父上は此體を見て『また例の疾病の起りけるよ、さらば暫時戸外にありて、頭腦を冷せかし、彼方の庭には長椅子を据ゑ置きたるを見たれば、彼處に憩ひて、われらが見了るを待てかし』とて、われ一人を措きて立去り玉ひぬ、われは綠蔭清く青苔滑かなるあたりに据ゑたる長椅子に身を寄せて、雛を養ふ燕子の飛びかふさまなど打眺めてありたるに、誰とは知れず柔かき手の、我肩にかゝるを覺えたり。

この婦人の手は何等の魔力を有ちたりけん、われは何とも知れぬ愉快なるこゝちになりて首を仰げて打見やれば、お花孃が過刻のほど見し淀君に髣髴たる容姿して、われに凭れかゝりたるにぞありける。

されどこの夏の日の景色は瞬間に消え去りて、身は暗々黑裏に入りぬ。入りしと見しも暫時が間にて、一點の微光、眼前にあらはれしが、次第に光明を増し來て、吾は何時しか父上の書齋の裡に座りたり。

われは何とも知れぬ一種の苦痛煩悶に惱まされて、默然としてありけるに、光明は一入明るくなりまさりて、お花孃は左手に手燭を携へ、例の冷眼もてわれを見つめつゝ入來りぬ。

お花孃は白き舞踏服をつけて、綠色の寶石もて作れる蛇形の装飾を胸部につけたる樣は、一見思はず我を戰慄せしめぬ。かれは『狂人よ、馬鹿よ、汝はなど手づから死なざるよ』といはまほしげにまたわれを睨みぬ。われはさながら奈落の底に落ちたらむ心地せられて、覺えずアッと叫びたるに、書齋も、蠟燭も、お花孃もみな一時に消え亡せて、われは一人かの長椅子の上に居睡りこけて居たりき。

これより後數日がほどは、この恐しき幻影によりて胸裏に投入られし苦悶は一方ならず、今は肉體もその苦痛を分たむとするばかりになり行きしかど、わが心の一方にては、この幻影の一半だけは眞實なれかしと祈る心の絶間なかりき。詳かにいはゞ、お花を妻にせんことは眞實にて、彼女がわれを冷遇するとのみは全然空事ならんことを願ふ心ぞ切なりき。われは實に此の如くして、渠が一顰一笑の下に、わが生死をも賭むとする迄に戀しくも亦幽しかりき。

東京市中はいふもさらなり、横濱鎌倉なんど近傍の名所古跡は殘る隈なく歷觀せしかば、いでやこれより松島見物にとて出立せしが、仙臺に宿れる夕、松浦夫人は暑氣に中りて、身體非常に衰弱せしに旅の宿居にかくてあらんはいと便なければ、この度は松島をば簡略見物してたゞちに故國に歸らんとの事に定りぬ。われは彼の幻影の眞實や、あらずやを知りたしと思ふ心の切なりしかば、願くは二三日も彼處に逗留して、思ふまゝに跋涉したしと思ひしかど、わが願ふまゝにもならぬに、シブ〳〵同意を表して、一行の人々に伴はれて、蜑が燒く鹽釜につきぬ。ここより船を雇うて、纜を雲霞縹緲の間に解けば、其風景さながら幻影に見たりしに異らず。暫時は茫然としてこの宇宙の大觀に呑まれてありける間に、船は松島灣頭に着きぬ。

さてはわが見し幻影も、たゞいたづらなる幻影には、あらざりき。前の幻影の空事ならずば、後の幻影とても亦一塲の虚夢にはあらざらむ。よし、兎にも角にもお花孃ゝわが妻とこそなるべけれ。

（其十一）

庭面の白菊霜に凋みて、春に誇りし櫻桃杏李孰れか秋に逢はぬはなく、一樣に枯葉とありて、金風になぶらるゝぞ哀れなる。この哀れ催ほす時節は端なくも、一層の悲哀を我心に與へたりき、その年の秋の末つ方、阿兄とお花孃とは、いよ〳〵結婚の約束を固め、來春早々表立ちて合卺の禮を擧げむとのこと明らかになりぬ。そを耳にせし時の我悲憂は如何なりしぞ。さながら深夜燈火黑き時恐ろしき夢に魅れたらん心地して、かゝる事實の眞箇に世にあるべしとも思はれで、この夢早く覺めよかし、と夢ならぬ夢に迷ひけるも幾日なりけむ。

われ松島に遊びて、我幻影の實際に髣髴せしに會ひてより、お花孃は遂にはわが細君となりなむとの幻影の、また波の面の泡沫ならで、眞實ならむ時あるべしとの期望は、常にわが胸裏に充ち滿ちてありければ、幾度か明々白地にこのよしをお花孃にうち明けむとは思ひ立ちしかど、かゝる險岨しき戀の途には踏みもならはぬ悲しさに、何時とても口には出だしかねて過ぎにし昔のみぞ悔みつゝ、彼はわが感情を弄びて、遂にわれを失望の淵に陷れぬ。

失望！失望！われは實に失望の淵に陷りぬ。されどわれはこの深淵の裏にありながら、誰やらんわれをばもとの多望の境界に拯ひ上げむとする人のあるらん心地せられて――明白にいはゞ、阿兄と渠との伉儷は久しからで仲絶えて、この玉再び我手に入る時あるべく想はれぬ。

われハかく五里霧中に彷徨ふ身の、一點の微光をはるけき彼方の空に認め得たらんやうなる想するものから、なほ彼等二人がいと睦しきさまを見てハ、心に心を叱りてやう〳〵靜めたる心の海に、はしなくも風波の起り來て、嫉ましさ、口惜しさに枕の紙を濕しけむも幾夜ぞ。かゝる夜を過ごせし曉にハ、霜に冴えたる落月のなほ山の端に落ちあへぬ早晨に、一卷の詩書を手にして野山に分け入り、自然に對して心境の有耶無耶を拂ひ、日落ちて四顧冥曚となれるに驚かされ、心ならずも悄々家に歸りて、そのまゝおのが居室にたれこめて、強ひて書卷に眼を曝らせば、一時ハ心氣爽然となりつれども、さて例の二人が擧動を見てハ、滿腔に潛める嫉妬、不平ハ、噴火山頭の石の如く飛散りて、一日の清遊も無益になりぬ。かくて日を送るまゝに、我身を果敢なみ、この世を味氣なむ心ハいよ〳〵まさり行きて、かの將來に抱ける一點の期望の光明さへ、今ハ眼前の渴望と悲哀との暗昧を照らし破り得ず、終日昏々として一室に籠り、かの戀愛ゆゑに失望落膽して、世を厭ひける古來の詩人の如く、心ならずも樂しからぬ月日を送りぬ。

われハかく憂愁の牢獄の裡に繫がれたるを、誰れ一人この中より救ひ出さんずる慈悲心ある人なく、わが父上さへ『かれハ生涯何事をも仕出さむと思ひもよらず。かれハ我より讓受くる財產をば、徒らに消費するのみにて、用無き一生を終るならむ』など、いと冷淡にわれを顧みたまひしほどなれば、其他の衆が一向に無頓着なりけるも、道理なりけり。

世の人にはいと樂しく麗かなる、光輝を與ふる太陽は、われにのみ暗澹たる黑影を投げて、其年もはや十二月となりぬ。朝來北風収まりて思ひの外に暖かなるに、われは玄關のほとりに佇みて、力なく日影を索めて飛びとぶ冬蠅を眺めつゝ、呆然としてゐたりけるに、われには唯一の伴侶なる飼犬のポンペイが、尾を打掉りてわが傍に蹲り居たるが如何にしけん、俄かに蹶起りつ、厩の方へ走り行きて、烈しく吠えたつるに驚かされて振返れば、阿兄は何處へか遠乗を試むるにやあらむ、馬上服に凛々しく身を固めて、鞍の上より鞭を鳴らしてポンペイを撻ち居たりき。われは今かゝる事までも打明けんは、いと恥かしき業なれど、われは其時ポンペイが所業の、いしくも如此なしけるよと、思はず唇邊に微笑を湛へたりき。われにはかばかり邪念の蟠かまりてありたりしかど、阿兄は少しの隔心だもあらざりけるにや、わが方を見かへりて『雄兒よ、御身も折々はポンペイを牽きて、遊獵に出でよ。氣鬱の症には此上なき藥石にてぞあるべきに。』

（其十二）

氣鬱症？さても淺はかなることをいふものかな。誰れかは氣鬱の病にかゝりたる、さる病は御身等ごとき、心鄙く量狹き人の上にこそあらめ。われら詩想に富めるものゝ如何でさる病に罹るべき。もしそれこの世の事に不平を懷だきて、鬱々として樂しまぬ風情の見ゆるは、これ詩人の特性のみ。われらにはもとより俗物凡庸の輩が見て、以て幸福なり、快樂なりといふものゝ、などか幸福なるべき、將快樂な

るべき。

阿兄が後姿を見送りつゝ、われは我知らずかくあざみ笑ひぬ。されどわれも遉にわが心のいとも卑しく、いとも低かりしことを知り初めしときは、見る人なきに面を掩はまほしかりき。實にわれにだに癖がみたる心あらざりしならんには、柔順にして何事にも貪着せざるわが阿兄は、かならず我好友にてありたらんに、噫、噫。

松浦家の邸宅は隣家とはいへど、門より門までは距離一二町にもあまりぬべきほどなれど、庭と庭とはわづかに枝折戸を境界とせるのみなりしかば、兩家の人々が訪ひつ訪はれつみな此口よりするに、われは今しも阿兄が遠郊へ出で行きしこそ幸ひなれ、下世話にいふ鬼の居ぬ間の洗濯、機好會乘ずべしと、柴折戸押しひらきて、直ちにお花孃が部屋の方へ行きけるに、お花孃は折しも煖室にさきける薔薇花、赤き白きとりまぜて二三輪、得ならぬ香薫するを携へて歸り來りけるに會ひぬ。これを見るより、例の冷かなる笑を含みて、『よくこそ來玉ひたれ、いざ諸共に花園の中を散歩せむ』、とて、隔心なく待遇なしつゝ、『この頃は何故にかく遠々しくせらるゝぞ、たれ籠めてのみ在せしと聞くに、病にても起されなば如何はせんと心を痛めしもいかばかりぞ』など、悦ばされて、われは渠が手に持てる薔薇花にも、いやまして得ならぬ香氣にうたれたらん如く、たゞ渠が面を見まもりてのみありたりしが、卒に聲を潜めて、さて問ひぬ。『お花孃御身はいかばかり阿兄を戀ひたまふや。』

渠はしばし呆然としてわが顔を見詰めてゐたりしが、良ありて例の冷笑はまた渠が頬にのぼりぬ。『何故に御身は、妾が御身の阿兄を戀ひしたまふと思ひ玉ふぞ。』『何故とたづね玉ふ御身が意志こそ問はまほしけれ』。

『さては御身は女といふものは、わが夫と定むる人をのみ愛するものと思し玉ふか。御身は詩人にあらずや。詩人にしてこれらの理を知たまはざるか。』と渠はわが手を握りしめ、じつと我面を眺め入りて、意ありげなる微笑を洩らしぬ。たゞこの一刹那に、わが嫉妬も怨恨も跡なく消え去りて、正に是れ老衰白髪の夢さめて、紅顔の少年に若がへりたらむ心地して、胸間に躍る一種の激情の外には、われはわれをば忘れはてたり。『お花孃、御身はわれと契りたまひし言葉を末かけて忘れたまふな。』と聞くよりお花孃は握りし手を放して飛退り、いと驚ける氣色なりければ、我も倶に驚きて、『免されよ、お花孃。われは今何を謂ひけむ、更に覺えぬほどなれば。』『御身はまた例の病症の起りしなるべければ、はや歸りて頭腦を冷し玉へかし。げにわれもなすべき事のありけるを忘れ居たり。』

さらばとばかりお花孃は後をも顧ずして、部屋の方へぞ立ち去りぬ。われはこの不首尾に心緒亂れて胸中沸くが如く、思へば思ふほど、わが嫂と定まれる人に、道ならぬことといひかけし罪の、今さらそら恐ろしく、庭の草木にも顔見らるゝことの恐ろしきばかり耻ぢらひて、密にもと來し枝折戸を押あけて、わが家の庭園にぞ歸りける。

（其十三）

近づくまゝにわが家の方を見れば、僕僮下婢等のゝしり騷ぎて、彼方此方に驅けまどふに、何事の起りけむと、いそぎ母屋の方に行きて、一人の僕に何事ぞとたづねけるに、南無三、阿兄ハ死し玉ひぬ。——遠乘の歸途に馬より落て腦をばいたくうちたまひ、その場を去らで死せ玉ひぬと。

われハこの淺間しくも、いたましき凶報を耳にすると等しく母家にかけ入りて見れば、奥の間に香烟篆字を書きて蠟燭の光明微けく、汚濁の此世をのがれて、憂愁もなく、怨恨もなく、靜けく眠れる阿兄の死骸を護りて、煢然として青さめたる顏に涙の泉源はや涸れてか、露さへ帶ばで座り玉ふ父上を見し時ハ、過刻まではわが心を占領せし、お花孃の事も、此日頃阿兄に抱きし怨恨も嫉妬も、はた性來の偏癖、人を容れぬその性情もさながら、旭日にあへる淡雪のごとく、ことごとく消え去りて、寂然として横れる死骸ハ、無聲の聲にわが心を和らげ、不動の動にわが胸を鎭めぬ。アヽ父上ハこの世の中にてハ最も幸福なるものゝ一人として、世の人々に羨まれたる身に在して、その家ハます〳〵富み榮え、其身ハ老てます〳〵壯に、中頃失せ玉ひし夫人の憂愁ハ、再び娶りたるわが母上の睦しさに打紛れ、わが母上の失せ玉ひしも、また久しからでわれら二人が成長の喜悦に紛れたるに、アヽ何事ぞ、何の役にも立ちまドう思さるゝわれのみ後に殘りて、來ん春にハ妻を娶り、次回の總撰擧にハ國會議員の候補者ともなりにたる兄上の、今あへなくも不慮の災禍のために此世を去り玉はんとハ。壯年の悲劇ハ將來に慰むる舞

臺のなきにあらざるべけれど、はや大詰の幕ともいふべきこの晩年に、唯一の期望を失ひたる老人の悲劇を見るわが心の中は、爭でか筆も語も及ぶべき。

父上が失望落膽を見るにつけて、我は同感の情に迫られつ、今卒に新たなる愛情湧きいでゝ、わが父上に接する有様は、全く面目を改めぬ。父上は二三ヶ月の間は、わが此頃の擧動を心得ぬ顔しておはせしが、それ實に道理なりき。巨萬の富は今わが手に落ちなんとする時なりければ、われに卑しき野心ありて、俄かに温しうするにはあらずやと、怪しまれける父上が、そうなくはわが熱心なる愛情に答へ玉はざりけるもさる事なりき。されど眞心には石佛も點頭くべし、程經てわが眞心を知り玉ひし父上は、わが曾て被りけることなき愛情の雨を、注ぐばかりに下し玉ひぬ。

わが喜悅はこれのみに止まらず、お花孃は其後わがかの無禮なる言行も、怪しきばかりなるわが性情も、こと〳〵く忘れたりけんやうに我を愛しがりて、渠が一言一行はこと〳〵く我に心あるよしを現はさゞるはなく、ことに渠が阿兄と約束せしは、たゞ情にのみ馳せやすき、定見なき少女の常として、おのれを慕ふ人の何となくいとしかりけると、徒らなる容貌形狀の麗しきとに迷ひたるにて、さるはかなき夢のさめたる今日には、片時も我なくては靜心なしなど、明らさまに語り出で、父上とても強ちに二人が交際に喙を容れ玉はん心なきのみか、仕誼によりてはわが嫁ともなさん氣色のあらはるゝに、野分の風に吹かるる薄ならねど、わがこゝろの間なく打騷がるゝもいとはかなしや。

（其十四）

霜枯の木々は再び紅の花を着け、緑の衣をかさね、秋と立ち冬となり、またこゝに一年あまりを過して二月の、煖かき日影はありながら、霰たばしる肌寒の夕、今日こそ黄道吉日と出入のものゝ歡呼の聲、知己の紳士貴女が祝辭の裡にわれら、二人は千代八千代玉椿の末かけて、爰に偕老の契を結びぬ。

父上は平常には喜怒哀樂の情を面上にあらはし玉ふこといと稀有なりけるが、此度の喜悦のみはまことに普通にはあらで、婚儀の夕なんどは、物に狂ひ玉ひけんと思はるゝばかり興じ玉ひて、老木の枝にまた花を咲かせぬと囁きし客人もありたりき。されどこは父上にとりては、實にさるべき所由のありけるなり。父上はこの結婚の時を期として、わが性質はまたまた一變して、日頃は騷々しとて一向に避けにさけたる社會の潮流の裏に立ちて、世の人並に舵を取るべき人間となることならんと、豫想し玉ひければなり。われはその時年齒やうやく廿一にて、連れ添ふ細君は活潑にして事物に精細ある婦人なりしかば、わが疎雜にして空想に耽ける詩人的生涯も、次第に矯正せらるべしと思ひ玉ひしはげに道理なるけり。

アゝ、我は痛くこの小歷史を記すに倦みぬ。わが心裏の鏡にうつりし微細なる事に立入らむには、中々に何時果つべしともはかりがたく、その煩縟に堪へがたければ、今はたゞわが眼前に映じ來りし表面の事實のみを記すべし、胸中に溢れし幾多の秘密は、いざわれと共にわが墳墓の裡に葬むらなむ。

われらは合卺の式を擧ぐる間さへあらせず、初契月にとて近縣旅行を思ひたちぬ。今まではわれより一頭地高かりけんやう思ひ居たりしお花孃をば、俄に呼び捨てにするきまりわるさ、お花もまたわが名を呼びかけて、慌てゝ袖もて口を掩ふなど、かゝるところに從前は得も知らざりける一種の面白味ありて、一週日の旅の空、天氣にこそ雨もありけれ、風もありけれ、道路にこそ山もありけれ、川もありけれ、われら兩人が胸裏は玲瓏たる水の面の如く、快樂に快樂を竭して、心ならずも家に歸れば、旅行の疲勞を休めむ、閑暇だにあらばこそ、彼方の招待此方の饗莚、其隙間〳〵には親戚知友を招くなど、前七日の淸閑にひきかへて笑語放歌杯盤狼籍の裏に此身を埋めて、俗殺せらるゝばかりなりき。われはかかることには少しも習ざりけるのみか、いと苦々しきことに思ひ居たれば、今はこの社交の紛々たる俗塵の爲めに、あへなくも埋め去られんかと、いと淺間しう念ひぬ。

綠酒紅燈もとよりわが願ふところにあらねど、これも社會の義務よと觀念して、二月ばかりをかゝる騷がしき間に送りけるが、尙その頃はお花が心の裏に潜める本領は、覆面をもて罩まれたりしかば、われは一向に渠が脣と動作とにあらはるゝ、一言一行によりて渠が愛情のほどを推しはかり、渠が意志なく出だしたる言葉の端も、無心に起れる脣邊の微笑も、みなわれに托れる愛情の表現にこそと嬉しく、おのが一擧手一投足みな渠が心が喜悅を與へまほしと思ふわが下心も、夏野のしげみに埋もれたる山の井のそれならねど、渠はそれをも酌知らでや、折々は我儘なる事をいひ出でゝ、いとさがなき爭論な

どせしとも少なからざりき。されど始めがほどはさばかりわが心にはかけざりしかど、倘幾月をか經過せし後に至りては、渠のわれを遇ふ冷淡さ、二人が心の裏には未だ温かき愛情の日光全く消えやらぬに、はや凜冽たる苦寒は二人の交情を冷却せしめむとぞ為たりける。

（其十五）

われハ記臆す、われハ忘れんとすとも、生涯この事を忘るゝことあるべからず。わが心は倘ほかの女を愛し、かの女をわが半身とも思ふ心は、倘十分にわが胸裏にありたりける其間に、アゝ渠はわれに向ッて、いと傲慢にいと我儘に、はたいと冷淡になりはてぬ。父上が六十有餘年の榮枯盛衰の夢を觀やぶりて、彼の世に旅立たせ玉ふ夕のことなりき。われは實に渠が心情のいと冷淡なる事を信じそめぬ。あゝこの夜こそ未來永劫わが命のあるらん限り、魂魄に印して束の間も忘れがたかるべき最大不幸の時なりき。最愛の父上を失ひ、最愛の妻が愛情を失ひたるこの夕は、恰も日輪月輪ふたつながら大空に沒し去げんごとく、わが生涯はふたゝび曖昧の域に沈み畢んぬ。われはこの夜の事をつばらに書いつけたしと思ふ、されど、思緒餘りて筆隨はず、不覺の涙いたづらに硯の海に水嵩をますのみなれば、アゝ已なんく。いざさらばこれよりは走り書に其後の事を敍でまし。

渠がわれに向ひて、かくばかり冷淡になりけるは、重にかれが移り氣なると、物事に倦き易き性質とに據るなるべけれど、倘かれはわれと結婚したる後に、大なる失望をなしたりしなり。渠はわが齟疎なる

詩人的感情にのみ富むを見て、われをば日常の物事につきては、何事も渠がいふまゝになし得べしと考へたりしなり。

げに渠はその智識にては、『感じ易き』性質と『意志の薄弱』といふことゝ一様に見たりしならむ。さればば渠はわが感じ易き性質を見て、この意志の弱き男、われいかに我儘をいふとも、それにつきてわれをば叱咤するほどの力はあらず、いざわれわが思ふまゝにこそなすべけれと思ひたりしならめど、事情は全く案外に出でたりき。結婚の前こそ渠はわが心を支配する女王陛下とも崇められけれ、渠が心の秘密の藏は開かれて、かれが心の裡に目論見し、淺はかなる企望の手に取るごとく知られたる今日は、われ爭でか渠が自由に頤使せらるべき。渠は結婚の前には、われを掌裡の小玉の如くにあしらひて得たりし愉快、はた其後も續け得べしと思ひけん愉快――一口にいはゞ、われをばおのが自由になし、臀下に敷かむと思ひけるその我儘なる心――は今は全く空だのめとなりけるに、かてゝ加へて渠もわが亡き父上も、何時かは一變すべしと思ひはかりたる我性情は、毫も疇昔とかはる所なく、渠が心の裏には噴火山坑の如く焚え立ち居れる此世の野心、社交的の虚飾、一時の名譽なんどは既に業にわが心の底には消え去りて、わが身は然ることにはや枯木死灰ともいふべきばかりにあり居るにぞ、渠がわれに向ッておのづから冷淡になりたりしも、強ちに無理ならぬことにてそあれ。

かくばかりその性情全然異なりける渠が、かゝる夫を持ちたること眞實に憐れむべき限なりけれ。こは渠

一人の心のみにはあらず、世の人々もまたかく風評せしとぞ聞えし。
げに渠の如く華奢に、嬌艶に、朝まだきより、來客に接して高く笑ひ、面白く興じ、舞踏音曲なんどの集會はさらなり、演劇寄席、あらゆる人のつどふ處を好みて、騷々しう月日をおくらんことを歡ぶ女性が、わが如く多病にして、空想にのみ耽り、ある時は物くるほしき所業ある良人に侍かむは、なか〳〵に容易かるべきことならねば、渠がわれに同情を表はさざりしのみか、いと冷淡なりしも、責むべきことにはあらず。われは遂にはわがたゞ一時の愛戀の鹿をのみ見て、兩人が性情の山を見ざりし、淺はかなるを悔めるのみ、さても愼むべきは夫妻の撰擇にこそ。かゝれる後は、われも可成お花の所爲には干渉せぬやうになりて、さながら互に面のみを見知れる二人の男女が、同じ家に住めるにひとしく、召使ふ下婢僕僮等に至るまで、各われに附くもあれば、お花に附くもありて、家室の風波立騷ぐとにはあらねど、天の一方に黑雲ひろごりて、今にも怒風疾雷の押し寄せ來らんず有樣なるを、知れる友人等は私に眉を顰めて、かにかくと忠告せしもありしかど、われとても固よりこの境涯に沈み居らむことを望めるにあらねど、他に詮すべのあらざるより、心ならずもかくある事なれば、いたづらにかれらが厚意を謝するのみにて、家室の嵐は日を送るごとに烈しうなりまさらむ有樣なるぞ果敢なかりける。

（其十六）

われは二人が愛情の、如何にすとも舊來の如く濃かになり得むこと、かなうべからずと思ひさだめたり

しより、わが意志は少しも枉ぐるところなく、斷然としてわが、爲まじと思ふ所を決行するにぞ、渠はいよ〳〵不平の念に堪へがたかりけん、折々は痛く我を怨める如きさまも見ゆるばかりになりぬ。

火龍天に舞ひ、金蛇地を奔る火災の折は、檐頭の馬鈴だに微すけき音を出ださゞる凪ぎたる空も、俄然に風吹荒みて、火の手に力を添ふるが如く、お花はいさゝか我を怨むる心の起り來てよりは、わがいふ事、わが爲す事、こと〴〵く不平の材料とならぬはなく、われを見る事さながらおのれが所爲を監督せる、學校の舍監なんどのやうに邪魔になりて、一日にもあれ、良人と住居を異にすることを得ば、如何ばかりか心の長氣からましなど、心に適ひし下婢に打明けゝる事もありて、果は、あはれ我良人の例の疾病の高じて、自殺にてもせよかしと望む心は、よしや穗にはあらはれずとも、胸の底にありけるは疑ふべからず。されど我は決して如何なる悲慘なる境界に陷りたりとも、自から果てなん方の人にはあらず。われは一種の信仰をもてりしかば、なか〳〵に自殺の一箇の罪惡なることを信じて、さる行爲をなさむとは念はざるのみか、此世の中の事物はみな受動的にて、わが薄弱き力もて自由にし得べきにあらねば、如かず萬事を擧げて天に任せんにはと、心を定めたりし折なりしかば、兩人互に別居して、ことさらこの閨門の風波を世に知らしめむは、えうなき事なりと思ひあきらめて、別居せむなどゝの心はあらざりき。

僅かに幾頁の間にかいつけたる我等夫婦の有樣も、まことは一年有餘に渉れる間のことにて、この間の

兩人の交情は、さながら裂目ある壁の物の響にいよいよ大きうなりまさる如く、一事一物のひゞく度々潰裂し去りて、相互の胸間に面白からぬ感情を增せるのみ。かくて七年の短からぬ星霜は、面白からぬ日光の下に面白からず輾り去りぬ。

なほ謂はまほしきことはあまた〳〵にこれのみには限られねど、我は少しも早くこの小歷史の末尾に『完』の字を記さんことを望むなれば、ざばかりくだ〳〵しうは書いつけまじ。『簡單』てふことは、容易く事物を了解する人の爲めにも、はた決して了解せぬ人の爲にも、等しく都合よきものなればなり。

わが父上の亡せ玉ひてより幾年を經たるのちなりけん、北風寒き正月の中浣、われは唯一人兀然として書齋に垂れこめて、薄暗き燈火の下に文を繙きてありたりしに、後の方に戸を開く音して、一箇の婦人忽然として現はれぬ。こはいふまでもなくわが妻君お花にて、身には白き舞踏服を着け、左手に持てる手燭の光明に輝く胸間の裝飾は、彼が最も好みたりし例の綠色の寶石の蛇の形狀したるにて、室の入口に立ちたる姿は、さながら西洋の名手が丹精を凝らして描ける、クレオパトラが像にや似たらん。

わが若かりし頃上野公園にて、幻影の裡に見たりし淀君に似たる美人の事、今さらに思ひ出でられて、われは思はず身を震はせぬ。今宵もまた例の知事が許にて催ほす、舞踏會に出で行かんとてか。さても出行くことの好きなることよ、げに臀の輕きことよと、われはおのづから輕蔑の色を面上にあらはして見かへれば、渠もまたわれをば侮りたらん面上にて『馬鹿よ、愚物よ、など爾は自ら死なんとはなさゞ

る』といはまほしき有様なりしが、俄に氣色をかへ、何事か思ひ起しけんやうに聲高かに『われらは新たに下婢を一人雇ひ入れねばならず。お冬はこたび嫁にゆくよしにて、渠の母が解雇を乞ひに來りたれバ、定まりたる給料の外に、それ〳〵手當もせねばなるまじ。お冬は明朝未明に歸りたしといへば、願ふは、はや〳〵それ〳〵の手配せられたし——わが良人よ、はや〳〵何とか爲玉へかし。われはいと忙しき身の上なれば』

（其十七）

『何、忙しき身とや。忙しき身の夜更くるまで舞踏狂ふは何事ぞ』といはむと玄たりしが、また爭論の種子をや蒔かむと自から戒めて『よし何事も爾が思ふまゝにせよかし』とわけも無くいひ放ちければ、お花は默然として書齋を去りぬ。

われは未見の人に遇ふ毎に、え堪へがたき不快を感ずるを常と玄けるに、殊さら新たに雇ひ入れたる僕婢等を引見するは、一入不快に覺ゆるなり。あくる朝お花がわが部屋につれ來りて紹介せし下婢は、お春と呼べど、名には似つかはしからぬ打萎れたる風采にて、其瘦肉にて身の丈の高さは、木枯の風に吹荒まれたる落木を見る心地せられ、その冷々たる眼元、人を嘲けりがなる唇端の微笑、わがお花が同胞といはんも眞實らしきばかりなるに、われはお花の身體を二箇にして見るが如く、不快はこゝにいや增したり。それのみか居馴染て見れば、其性情さへお花と相似たる所すくなからざれば、彼等は三四十日

過ぐる間に、同胞も及ばぬばかりの間になりぬ。

滄桑の變遷は思ひ設けゝるよりもいと速かにて、わが知己なりし人々は次第に少なうなり行きて、朝夕相逢ふはいと稀有になりたるものから、われはつとめて新たなる友をば避けたりければ、わが交際ふ人々の區域は、日増に狹隘り行けば、わが厭ふべき人も隨ッて少うなりまさり、あらぬ邪推の念なんどを起さんよすがも減ド去るにぞ、父上の亡せ玉ひし後十年ばかりして、われは往昔にくらべては、やゝ温かき心となり、偏癖の情も多分を減ドたりき。

かくて日を送るにつれて、例の妄念も幻影も心を苦しむること次第に少なうなりて、われはたゞ靜かに穩かなる生涯を送ることのみ、此上なき快樂と思ひて、いよ〳〵世事には遠ざかり行きぬ。今までは夫婦てふ名こそありつれ、仇敵の如くなりしお花も、今はわが性情の漸く變り行くに心着きけん、折々はわれと共に一間にありて、四方山の事を語らうまでに睦ドうなりゆきて、とにかくに世の訂情深からぬ夫婦交情程にはなりぬ。されど我はさまでに之をもて心を慰め得べしとも思はざりければ渠が餘りに何くれとなく饒舌を掉ふ時には、はや五月蠅くなりて、全くは耳をば傾けで、一向に作りかけたる詩歌をば推敲することなど多かるに、渠はわが渠の言に返答もなさず、よし返答をなすとても、あらぬことなんど答ふるにぞ、遂には氣色ばみて、默然とするとも少からず。かくて其日一日は一語をもかはさで果つる事もありて、世の睦じき夫婦等が、中々想像もよらぬ有樣にてありしなり。

ア、わが心緒は痛く亂れぬ。今ははや當時を追懷するに懶く、痩せたる手は筆を把るに疲れぬ。お花が當時の思想をば、詳細に心理的に說明せんはわが願望にしあれど、わが裏へ果てたる氣力は、なか〳〵に手をも心をも許さぬに、いざ、さらば我れわが生涯に最も紀念すべく、最も恐るべき事實にこそ移り行かめ。

（其十八）

その年の暮れの頃にやありけん。われは昏々たる懶眠の裏より喚起され、再度ハ得べからずと諦らめたりける幸福は、其一部分を將て我にかへり來りぬ。一朝從僕は例の如く數通の郵書を持來りしが、其ハ例によりて面白からぬ家政上の事、輕薄なる輩が年の暮の存問なんどの書信なるに、よくも讀まで傍に卷き棄てしが、さて最後に殘れる一通ハ、ア、これわが生涯に於て、最も親しかりし友人高野馨よりの手紙なりき。われらは少年の折東山々畔に手を別ちてより、存問漸く遠く、かれは其後大學を卒業して醫學士となり、今ハ東京にて威勢よき醫師となりたるよしハ、われ仄かに聞き知れりき。今かれが送りこしたる手紙によれば、彼は近來大に健康を害したれば、數ヶ月間地方を漫遊して健康を回復せんとて、はや其途に就きたり。閑散の身となりぬるにつきて、頻りに思ひ出でらるゝハ既往の事なり、既往の事の思ひ出でらるゝにつけて、殊にわが胸に躍然として一種言ふべからざる感情を惹起さしむるは、君ならで誰あるべき。こたびは其地あたりをも漫遊したしと思へば、一月ばかりして必らず御身を訪ふべし。

願くハ共に疇昔の少年となりて、當時の快樂を回復せまほしなど、いと懇ろに認めたりき。

朋遠方より來る、また樂しからずやと古人の言を引くまでもあらず、故人ハ猶ほこれ春風の如し、わが胸底に結べる冷かなる氷も雪も、みな一時に融去るべし、わが悦喜ハいふべうもあらず。

やがて彼ハ來りぬ。悦喜と愉快を携へて彼は來りぬ。我住む里には東山こそなけれ、琵琶の海こそなけれ、われらハふたゝび疇昔の少年にたちかへりて、一週日ばかりがほどは、日に〳〵手を携へて近きあたりの青山碧流を跋渉して、過ぎにし事を打語らふに、げに歳月は人をしてさま〴〵に變らしむるものかな。高野は今は交際社會に持て囃やさるゝばかり、綺羅美やかなる紳士となりて、貴婦人達ハ一度この人の手を握らまほしと願ひ、紳士等はこの人の名刺を得まほしと望むほどなれど、アヽわれハ何時もかはらぬ田舍紳士にこそありけれ。かれが年頃なしたる醫學上の經驗、治術上の熟練、聞く事毎に漸奇ならざるハなく、その學識の世間に秀でゝ、その手腕の凡庸に擢んでたる、驚くの外なし。われハたゞ感に堪ふるのみなりしが、さて自己をかへり見れば、仍是れ呉下の舊阿蒙、かれと別れし其折より、何等の學識をか增せし、いかばかりの才力をか錬磨せし、彼に較べては、さながら玉と瓦にもあたらぬばかりあるに、世事には頓着せまじと思ひしわれながら、尙鼻白まれて思はず太息をつきぬ。されどわがかく埋れ木となり果てつるも、其重なる原因ハ、年來の多病なると、一種偏僻の性情との所業なれば、彼が卓越せる手腕もてせば、或ハ治療の途なきにしもあらざるべし。よしや全く回復せんことのかたく

とも、この人の同感の情をだに惹き起さば、如何ばかりか心の平和を得らるべけんと思ひてハ、幾度か謂出でんとは为たりしかど、閨門の事まで打明かさんことの、さすがに口惜くて躊躇てのみありたりき。

高野學士も名殘は盡きねど、何時までかくてあり得べき身にしあらねば、はや旅立の準備を急ぎける中、端なくも一場の風波は我家室の海にこそ起りたれ。もとよりわが家には表立ちてこそさばかりの風波はあらざりけれ、裏面には一日として靜かに穩かなる日のなかりしなれど、この度は特に激しくしてわれは危くもこの風波の裏に捲きこまれて、溺れはてなむと为たりしに、天佑はわれを棄てざりけん、親友高野學士を下して我を拯ひ玉ひしにぞ、われは今日までも餘生を貪ることを得たるなりき。

（其十九）

この大事件が爆發せし噴火口ハ、下婢の春が俄然に大病に罹りしに因れり。高野學士がわが家に着きし數日前細君ハお春を伴ひて親戚を訪ひしことのありけるが、二夜ばかり泊りて歸り來れる夕、一場の諍論二人が間に起りて、お春ハ何やらん消魂しき聲ふり立てゝ、口善悪なくもいひのゝしりぬ。洩れきゝたるわれハ、何事とも事の由ハ得知らねど、とにかくにかゝる不敬なる婢ハ逐ひ出さんこそ然るべけれと思ひ居しに、不思議にもお花ハ例の氣質にも似ず、放逐せむ心ハ露ばかりもあらざるのみか、間もあらせでお春が病を獲て、床につけるよりは、人手にかけんことのいとわりなしとて、朝に夕にみづから

枕邊につき添て、傍のものにハ手も觸れさせで、看護に怠慢あらざりき。われハたゞ折々に見舞ふのみなりしかど次第に重り行くやうに見えしかば、お花が何故か切りに辭みけるに關はらで、強ひて高野學士に診察を乞ひぬ。學士は診察し畢りてわが書齋に入り來りしに、われは讀みかけしみるとん文集を下に措きて『高野君、下婢が病は如何なる症にや。はかゞ〴〵しからぬは重症なるにや。』『されば、輕からぬ病症なれど、治すべき方法のなきにあらず。されども、他の醫師の手術にかれこれ喙を容むは、みづから快く思はねど、外ならぬ君の事あれば、打明けていはんに、これまで手掛たる醫師は、全く誤診せるものと覺ゆ。されば渠が一命は、今宵一夜も覺束なからむ。とてもかくてもなき生命ならば、願くは渠にわが近頃發明したる新手術を試ましめ玉かし。彼が心臟の鼓動せずなりける後に、動脈に血を注入するまであれば、決して彼が身を傷け、彼を苦ましむるほどの事はあらず。われは從來人類に試驗せし事こそなけれ、動物の肉體には幾度となく施したることなれば、さばかり心を勞し玉ふな。憂ふるほどのことはあるべくもあらねば、枉て我に任せたまへ。たゞし動脈に注入すべき血液は、わが腕より取るべければ、片手は暫時用に堪へず。願ふは君も暫時醫師になりたる心算にて、わが助手を爲たまへ。このあたりの醫師を依賴まんは容易けれど、成功せむまでは彼等に泄さむことの願はしからねば。』『御身はこの事をわが妻に打明かしたまひしか。』

高野學士は手をふりて『渠には決して打明け玉ふな。かゝることは婦人には面白からぬ感覺を與るばか

りにて、何の甲斐もなきものなれば、打明けんとは思ひもよらず。準備だに調はゞ、唯われら二人の外は、盡く室内の人を退けて、手術を施すべし』

かくて彼は其手術の方法を詳細にわれに語り、少しも危險ならぬよしを言張るにぞ、われも終には辭みかねて、彼が語に從ひける。

準備は全くとゝのひぬ。萬事を理してわれは書齋に待ち居たるに、高野は下婢が臥したる女中部屋へ幾度となく行きつ戻りつしてありしが、最後に書齋に歸り來りて『御身はかの女が細君との間に何事か面白からず思ふよしあるを知りたまふか。』『されば、聢とは知らねど、渠が疾病にかゝれる數日前、何事か諍論せしことありたりしが、そは頓に解たりしならむ。さることを尋ねて何にか玄玉ふ。』『われこの最後の五六時間、絶えず渠が面を熟視るに、かれは回復の望を絶てる、青蒼めたる面に、苦痛と衰弱との爲めに遮られて、言出でかねたる、ある事を洩したげなるさまの見らるゝのみか。片時も休まず細君の方へ向くる眼光の、一種恐るべき色を帶ぶるは、何事か兩人の間に潛める秘密あるに相違なし。この病は段末魔に至るまで、氣性精確なる病症なれば。』

われは何事のあるべしとも知らざりければ『そはさもあるべき事なりかし。渠はわが心にこそ入らね、わが妻には二なく思はれたる下婢なりしかば。』

かくいひたるに、高野は默然として返答もなくて、首を垂れてありたりしが、再び立ち上りて病室に行

きしが、今度は例よりは少しく手間取りて歸り來つ『いざ來給へ、手術を始めむ。』

（其二十）

われは高野學士に從ひ、彼室に入りて見るに、室内暗澹として死の影の充ちたらむやうに覺えぬ。わが入り來るを見るよりお花の蒼白たる顏は一入蒼白うなりまさりつ、高野の方を見かへりて、口惜しげに何やらんいはんとせしが、高野は手をふりて之を遮り、亡せゆく婦人の顏を屹と視てさて脈を診ひぬ。可憐なる下婢の顏は、肉落ち骨秀でゝ、既に此世のものにあらず。冷かなる汗は額に玉ぎりて、力なき瞼は大きやかなる眼を掩ひぬ。一二分して高野は病者の枕邊につきそひたるお花にむかひ、いと叮嚀に、暫時の間こゝを立去りたまへと望みぬ。お花は深き仔細のありてにや、如何にしても立去らん氣色なく、わが語にてもなか〳〵承引かず、只管かの幽靈の如く恐ろしき下婢の面を打ながめて、何やらん心にうなづく樣なりしが、彼下婢が力なき眥はきり〳〵と昂りて、涙をふくめる眼もてお花を眺めし一刹那、寒戰お花の身を攫みて、今は如何にしても此室を立ち去るまじと心を決めけむやうに、撞乎と坐して動かずなりぬ。

下婢が眥は再び昂ることあらざりき。哀れなる下婢を熟視れるお花を一瞥せるに、アヽその面色の如何に鋭かりしよ。炯々たる鷲の眼の如き眼光は冷かなる輕侮の色を帶び、緊と結べる唇は殘忍なる呪咀の形相を留めて、亡せ行く人の苦痛をば、此上なき快樂よと感じたらむ酷薄しき形相は、見る目凄じく覺

えけるが、かの下婢が最後の呼吸の吹切れし時、怪しや一點の微笑は、忽ちこの慘憺たる面に上りぬ。知らず、兩人が間に如何なる秘密のありけるや。とにかくにお花は、下婢の死は渠が平素心にかゝれりし大秘事に密封を施せしやうに思はれて、心を安んじたりしならん。感謝す皇天、われにもその秘密の封ぜられしまゝに殘れることを。

高野學士は慘ましげに『はや縡切れぬ』と靜かにいひしが、また妻に向ひて、此室を立ち去らんことを求めぬ。妻は最早辭むにも足らずとや思ひけん、さらばとて立ち去りしが、間もなく二人の下婢立ちかはりて入り來ぬ。こもまた妻が命令をば內密に奉じて來りしならんと思ひしかば、今少し經たらんには、呼鈴をば鳴らすべければ、それまでは何人もこの部屋に立ち入るまじと嚴かに命じつゝ、彼等をも立ち去らしめけり。

高野國手が起死回生の妙術は、わづかに廿分時ばかりにて畢りぬ、國手は血液を動脈に注入れし後、靜かに呼吸器にて呼吸を通はせしに、驚くべし、一度去りにし生命は、かの冷かになりたりし死骸の上にかへり來りぬ。呼吸は微かに通ひはじめぬ。次で心臟は鼓動し來りぬ。瞼は纔かに微動ひぬ。かくて魂魄はふたゝびお春が肉體に回り來りぬ。われは學士のいふまゝに呼吸器を外せしかど、呼吸はそのまゝに通ひて、切りに唇を動かしけり。

戞然と音して室の戸は開きぬ。わが思ひし如く、お花は二人の侍婢が立退がされしに懸念して、再びこ

ゝに來りしなり。
病者の大なる眼は豁と開らきぬ。入り來りしお花が顏を睨みてありたりしが、瘦さらばひたる顏を打動かし、葬式の鐘よりも人の心を打つらん聲色にて『御身は大惡不貞の婦人かな、……おのが良人を毒害せんとて……其毒藥は今も奧の間の戶棚に……御身の爲めに我調へたりし……秘密の漏れむことの恐ろしさに、われをも……さても嫉妬の深き人よ……。脣はなほ震きぬ。されど語は分明らずなりぬ。語は途切れぬ。身體は動かずなりぬ。今までは力なき光線を投げし夕陽の影も、今は全く西山の端に落ちて、室の中はたゞ寂寞と暗澹とのみ時を得顏なりき。
侍婢が持ち來れる燈火の影にて照らし見れば、お花は色靑ざめ、髮はおどろ〳〵しう打亂れ、兩眼血ばしりて、宛然野獸なんどの四圍を圍まれ、逃れ出でんよしなくて、躊躇ひたらむ風情にて打戰へつゝ坐り居たり。高野學士はたゞ死人の顏を打守りて、沈思に餘念なかりき。我、ア、我は如何にありけん、自からいふ言の葉を知らざりき。

* *

われは彼女の秘密を問ふことをなさゞりき。たゞ何事をもいはで彼と別居したり。彼の事を知りしは、われと高野學士とのみなれど、高野學士もわが爲めに生涯秘密を守ることを約しければ、彼は夫に棄て

られたる、不幸なる婦人として、世人の同感を得て、去年肺病にかゝりて敢果なくなりけるまでは、誰れ一人彼女を悪さまにのゝしるものはあらで、折々はわれに再び舊交を煖めよかしなど勸告する人さへありけり。

＊　＊

別居の後は變れることもなく、われは十數年を一日の如くに送り去りぬ。元來多病尩弱なるこの身の、今は新らしき疾病をさへ獲たれば、かく臨終の時を待つばかりなり。

筆を起せしよりはや十日になりぬ。思ひしよりは生を貪ることの多かりけるよ。今はこの世に何の用もあらず。來れ死の神！何時にても汝が招待に應ずべし。唉我終焉の期は近づきぬ。

（をはり）

◉薄暮山

（上）

田山花袋

一日山中を驅け廻りたれど、一疋の兎にすら出逢はざりしは、近頃に無き不運といふべし。山は落葉に痩せ、水は落葉に留りて、一度見出せし獸の隱場無く、獵夫に取りては、雪ふらぬ間の冬を、一年中の好時節とも言ふべきものなるに、昨日も今日も、かくまでの不獵のつまらなさ。今年も亦、好き春は迎へられぬ事かと思ひながら、獵銃を疲れたる肩に載せ、小鳥四五疋を入れたる小袋を、右の手に携へて、岩石險しき山路を、縫ふやうにして下りしが、不圖葉疎なる杉の梢に、二疋の猿を認めぬ。いつもならば、見逃して通る可きほどの獲物なれど、不獵なる身の、せめてはこれをだにと、二歩三歩岩陰に後退りして、充分にねらひをすましつ。一發の銃聲は葉も無き空林を騷がしぬ。

確に手答はありけりと、急ぎて行きて見るに、落ちたる猿の影も無し。怪かしく思ひて、あたりを見廻せば、獲物は早くも遙なる枝に移りて、玉は空しくその杉の幹に當りたるなりき。重ね〳〵の失敗に、むしやくしやする心を自から押靜め、夕鴉の塒にかへる聲を聽きながら、瘤に似たる小山を越れば、下にはさして狹からぬ谷ありて、いまだ散り殘れる紅葉の上に、落ちむとする夕日の影は、おぼつかなくも照り添ひぬ。

見馴れたる景ながら、今日は又殊更に、淋しく物凄く思はれたるこそ怪しけれ。初雪の近づきたればか、小鳥も大方は飛去りて、只きつゝきとかいへる鳥の、怪しげに鳴く聲のみ、をり〳〵に聞えぬ。加之、刃の如き風は、むかひの山の頂よりおろし來りて、用捨なく我面に吹付るその寒さ、耳も手も、ほと〳〵きるゝばかりに思はれつ。されば、常には眺望好きこの山の一角に、一日の疲勞を休むるを例とすれど、今日はそこ〳〵に此處を下り、勾配はげしき山路を、二町ほどたどれば、一帶白き谷川の音、微かに聞えはしめぬ。

いよ〳〵下れば、いよ〳〵音高き谷川の岸に近きて、屹立せる岩石に架したる板橋を渡り、やがて一面平坦なる處に出でぬ。此處には、枯れたる芝草、氈の如く生ひて、谷川の一支流ちよろ〳〵と中央を貫きところ〳〵に、櫻、楓等の紅葉したるもあり。まして山懐に當れば、風もあまりに寒からず。

我れこゝを過る度毎、いつも一種異りたる感情に撃たれぬ事は無かりき。我れこゝに昔を懷ひて、悲しく情なき我身の不幸に泣き、今を憶ひては、つまらなくあぢきなき我身の末路に泣かんとす。まことにこの感情ほど、我身を惱ますものはあらざるべく、我身を悲ますものもあらざるべし。思ふに口痴の業なれど、昔はこの山も、この水も、皆愉快の料となりて、春の麗なる朝、秋の靜かなる夕、蕨取茸狩にと、おもしろく樂しく、遊び暮しゝ所なりしを。

又も或事も思出して、我はその時の無念さを心に繰返しぬ。我が肉は躍るばかりなりき。我を失望の境

に沈ましめたる人の幸福を、今の我身に引くらべて、我は心の底に泣きぬ。

されども、暫くして我は思返しぬ。母樣ー母樣は遲しとて待ち玉ふらむ。我のやうなる腑甲斐無き男をも、力にして下さる母樣は、煖き夕飯の準備とゝのへて、待ちてゐて下さるなるべし。我心を知り玉はねば、女房持たぬを、日頃非常に御心配なされて、この間も隣村の某の娘を、御周旋なし下されしが、好まざる女を妻に持ちたりとて、何にかなるべき、それよりは、いつまでも獨身にて、この世を過さむこそ、かへりて心安からめと、折から吹おろす木枯の風に震えながら、落葉のみだるゝ中を、とぼ〳〵とたどり行きぬ。

紅葉にさしたる夕日の影、次第にうすれゆきて、山際うすくらくなれるは、時雨れてかへる雲のかゝれるにやあらむ。顧れば、遠山の頂早見えずなりにき。

風は寒し日は暮れむとす。谷川の音いよ〳〵高くなりまさりて、一しきり吹散さる木の葉の音も、淋しさを增す料となりけり。我はいよ〳〵路を急ぎつ。

谷川のすさまじき響して流れ落つる處、紅葉の錦のごとく染盡したる所、岩石の梯の如く林立する所等を過ぎて、今しも禿げたる山に上りかゝらむとする時、不圖我耳にひゞきたる物の音あり。樹の風に鳴る音にもあらず、柴人の木を伐る聲にもあらず、――鹿か、狼か。

微かにきこゆるなり――路の程も遠かるべし。我は足をとゞめて行くべきか、歸るべきかと、暫しは二

途の思に迷ひぬ。されど若しよき獲物にてあらむには、天のさづけを取らざるにひとしかるべし。行かむ〳〵と、沈みたる勇氣を振起して、そのまゝ怪しき聲の方へと走り行く。一町行きて耳を欹れば、鹿の聲に似たり。勇み立ちて尚一町ほど行けば、この度は獵犬にはあらずやとも疑はれぬ。路無き林を眞直に拔け、淺き谷川を徒歩にて渡り、低き瘤山を一吸呼に越れば、我はその聲の下の森より出るものなるを認めぬ。その聲は獵犬の盛に吠ゆる聲なりき。

獵犬のあれほどに吠ゆるは、何か事あるに相違無し。それにしても獵犬を率ひたる獵夫は、何誰ぞ。いづれ我村のものには相違なかるべし。狼か、豺に出逢ひて、一人の手に餘れるならむと、その瘤山を一直線にかけ下り、我が來れるを知らせむ爲め、一發の銃聲を試みぬ。

獵犬は聲を止めたり。わが放ちたる銃聲は、靜かなる岩壁に返響して、すさまじかりき。我は佇立みて暫しその容子を窺ひたりしが、何一ッ異狀なきに、偖そのまゝ足を進めつ。獵犬は悲しげに又吠えはじめぬ。その聲におぼえあるがごとし。

森に入りて、我は聲も絶えなむばかりに吠ゆる獵犬の姿を見たり。この時、我は亦一種の不快を心の底に感じぬ。この不快は、先程平坦なる山地を過ぎしとき、起りし感情にひとしかりき。この犬の主人は、我を失望の境に陷いれたる舊の朋友なるを思ひて、我足は少しくためらひたれど、更に又心を靜めて森の中に進入りつ。

見廻せど一人らしきものも無し。只その獵犬の、しきりに我にまつはり、我を導かむとする風情あるのみ。怪みながらも、犬の導くにまかせて、二十間ほども行けば、其處に獵銃、獵袋などの落ち散りたるあり。不思議?

なほよく見れば、傍に枯草にかくれたる一箇の忘れ井あり。我はヅッとして寒慄だちぬ。この獵犬の主人は、誤りてこゝに陷り、無殘ある死を遂げたるにはあらざるか。

(下)

引揚げし死骸は、我が從妹の夫にて、わかむかしの友達なりき。あまりの事に、我はほと／＼あきれ果てぬ。如何にせむとの考も、とみには胸にうかばざりき。傍を見れば、獵犬は四足を折りたる儘、死骸の傍に寄添ひて、かなしげに一聲高く吠えぬ。

お高樣は嘸々かなしみ玉ふべしといふやうなる感情は、第一にむら／＼と我胸を襲來ぬ。我胸はまことに悲しきやうなる、氣の毒なるやうなる、一種の感情を以て包まれたりき。この昔の友は我を失望の境に陷いれたる人なるを思へば、悲しさも何となくうすらぐやうなる心地はすれど、夫を失ひたる從妹の心は、果していかにかなしかるべき。

茫然自失して、我は首を上げしが、不圖心付けば、夕日は大方山陰にかくれはてゝ、森も次第にうす闇くなりぬ。如何にせむと、我は自から心に問ひぬ。

兎に角に、及ばぬまでも藥をと思付きて、腰の印籠より一貼取出し、古井の水にて口に含ますれど、落ちてより久しくやなりけむとおぼし。齒を結びたるまゝ、口をすら開かぬに詮方なく、此上は一刻も早く、村に歸るに如かじと心を決めて、濡れたる死骸を其まゝおのれの背に負ひ、泣叫ぶ犬を曳きて、歸途に就きぬ。

日は暮果てぬ。風はます〱強くなりて、高根の木の葉散ること雨のごとし。路の淋しき物凄さ、中々言葉には盡しがたし。まして己が背には、死したる屍を背ひたりとおもふ毎に、我は我身の戰慄するをおぼえぬ。おのれの蹈む落葉の音は、この友の亡き魂にはあらざるか。

かくて我は、路すがらつく〱も、人生の無常を感じぬ。今迄この友を妬み、且つ羨みし我心のはしたなさをも悟りぬ。

思へば、わが今迄の失望も、まことにたはい無き一場の夢なりけり。我とこの友は、垣一重の隣同士にて、四ッ身の衣着る頃よりの仲好なりし。それにかの從妹。この三人は、久しき間にも、喧嘩一ッせし事無く、いつも連立ちて、あの山の平坦なる芝生に遊び、まゝ事の筵を敷きて、春の長き一日をも、いとゞ短かく暮しけるが、その頃より、お前は御亭主、私はお女房と、無心に過ごせし月日いつか積りて、我は十九歲、友は二十歲、從妹は十七歲の春とはなりにき。

我はかの從妹を昔の如く慕ひて、何卒一生を同穴に契りたしと、片時も思はざる事とては無かりしが、

我家の田地も無く、財産も無き獵人なるに引替て、友の家は昔よりの財産家。その上、從妹は居常我よりも、寧ろ彼の友を慕へる樣子の見ゆるに、我は心も心ならず。母に打明けて、おもてむきより女房に貰はむと幾度も心を決めたれど、母一人すら養ふに事を缺きたる身の、それとも言出しがたく、空しく月日を過す中に、從妹は友の家より、公然たる嫁に貰はるゝ事に定りぬ。

それをきゝし時は、我は身も世もあられぬ程悲しくあぢきなく、その四五日は仕事にも出でず、一室の中に閉込りて、人に顏見らるゝも面目なきやうに思ひたりき。然るにその結婚の二三日前、從妹はいかにも晴々しき顏色して我母を訪ひ、かの友を夫に持ちたるを、この上なく喜ぶごとき話振に、我はいよ〳〵情なく、心に燃ゆる戀しさをそのまゝ心に秘めて、決して人には語らざりしが、その結婚の夕、花嫁の華奢姿をひそかに窺ひて、我ながら無念骨髓に徹し、いつそ死んだ方がとまで、思つめし事もありき。されど母、一人の母の爲めに、思切られぬ戀を無理に思切り、それより家を村はづれに移して、友とも交際はず、從妹の丸髷姿も見ず、昔の戀しき蝶ゝ髷をのみ胸に包み夢に見て、今年までは最早二年。お高樣も懷姙して五月と、昨日母より聽きたるに、かゝる非業の死を夫に遂げられては、お高樣も可愛想この死したるわが友の魂も、どれほどか殘念に思ひたるなるべし。されどこれも何かの因緣かと思ひながら、背に負ひたる死骸を肩にゆすり上げむとすれば、冬のはしめの山の寒さよ。濡れたる友の衣は氷りはてゝ板のごとし。

ゆき〳〵て、いつか里近くなりぬとおぼし。折しもきこゆる入相の鐘は、殷々と雲も無き大空にひゞきわたりぬ。無常を世界に傳ふるにはあらずや。

* *

山境を劃れる最後の谷川を徒歩にて渡り、通ふ人も無き空林を一ッ過ぐれば、やがて見ゆるは百軒ばかりの我村なり。模糊たる暮色既に一面に蔽ひかゝりて、ところ〳〵に昇る夕炊の烟も、大方は沒し盡されぬ。

その中には、わが夫の歸り遲しと、門に出でゝまつ寡婦もあらむ。わが子の爲めに夕飯を暖めて、今日の獵の獲物を樂みに待つ父母もあらむ。

（完）

短篇小說　明治文庫第十編　終

版權所有

明治廿六年八月三十日内務省許可
明治廿七年五月十一日印刷發行

明治文庫 定價	
一冊（二百頁）	金拾五錢
六冊前金	八拾五錢
十二冊前金	壹圓六拾錢
廿四冊前金	參圓拾錢

郵税一冊六錢

編輯兼發行者 大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

印刷所 杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

發兌元 博文館
東京日本橋區本町三丁目

大賣捌所

東京 東京堂
仝 水野慶次郎
仝 東海堂
仝 巖々堂
仝 信文堂
仝 石川商店
仝 上田屋本店
大坂 盛文館
仝 吉岡平助
仝 柳原喜兵衛
仝 梅原龜七
仝 岡島新聞舗
仝 平井新聞舗
仝 中村峯雄
京都 東枝律書房
仝 田中治兵衛
名古屋 川瀬代助
仝 新文舍
仝 片野東四郎
神戸 熊谷久榮堂

神戸 舟井新聞舗
仝 吉岡支店
熊本 船山堂
鹿兒島 長崎次郎
長野 吉田幸兵衛
松本 西澤喜太郎
仝 水琴堂
四日市 高美書店
津 伊藤善太郎
岡崎 河島九右衛門
濱松 愛友舍
仝 谷島屋源三郎
沼津 林新聞舗
甲府 蘭契社
横濱 柳正堂
仝 丸屋書店
鴻ノ巣 里見亭太郎
東金 長島爲一郎
千葉 多田屋本店
仝 仝支店

佐倉 吉田德兵衛
佐原 朝野利兵衛
水戸 川又銀藏
大津 澤一二郎
仝 太田支店
上諏訪 宮坂日新堂
小諸 廣文堂
飯田 皆川文星堂
前橋 煥乎堂
宇都宮 内山港三郎
栃木 宮川庸三郎
平 清光堂
白河 奥村書店
福島 上野屋彦太郎
仙臺 木村文助
仝 佐勘書店
石ノ巻 山口德之勳
盛岡 佐藤庄兵衛
仝 便益堂
弘前 野崎九兵衛

青森 鎌田商店
山形 八文字屋書店
仝 牧野德太郎
米澤 素月長平
秋田 成見清兵衛
仝 鈴木秋穗堂
横手 大澤忠四郎
增田 東海林書店
酒田 鈴木喜八
福井 品川太右衛門
武生 安立庄三郎
金澤 雲根堂
小松 宇都宮源平
富山 清明堂
高岡 學海堂
新潟 櫻井產作
長岡 覺張治平
仝 目黑十郎
高田 室直三郎
仝 高橋書店

水原 西村六平
松江 川岡清助
岡山 武内彌三郎
姫路 朝榮社
廣島 松村善助
山口 宮川臣吉
和歌山 平井文助
德島 阪井萬吉
博多 積善館支店
仝 森岡商店
久留米 菊竹儀平
大分 山川正三郎
長崎 虎與號書店
仝 鶴野書店
佐賀 河内汲古堂
函舘 魁文堂
札幌 聚文堂
仝 野前長發
仝 小鹽自治堂
仝 萱間左右太

校訂 楠廷尉秘鑑

全部百卌卷合一冊

脊皮洋裝上製　正價金五拾錢郵稅拾六錢

楠公の精忠大義、兒童走卒も亦これを耳にせさるものなし、されど當時の情況を詳知するものは世なかくに多からざる、是れ何ぞや、世に好書少ければあり、楠廷尉秘鑑百三十卷、頗る楠家殉國の事蹟を詳記す、以て元弘建武の史を補ふに足る、然るに從來寫本のみにして且訛誤甚たしきを憾み、玆に數本を集めて校訂補正、以て印刷に附す、天下始めて此書の完本を得たりといふべし

校訂 風來山人傑作集

全一冊 紙數一千頁

脊皮洋裝上製　正價金五拾錢郵稅拾六錢

江戶文學社會の奇傑風來山人平賀鳩溪の傑著を集む小說あり院曲あり嘲世罵俗の快文あり、滑稽諷刺奇矯激勵の偉觀實に他にその匹を見ず

校訂 通俗吳越軍談

校訂 通俗漢楚軍談

二書合本壹冊 紙數千三百頁

脊皮洋裝上製　正價金五拾錢郵稅拾六錢

支那歷史の軍記中、尤も波瀾あり光彩ありて、璀璨陸離の奇觀あるは吳越漢楚の兩軍談に如くはなかるべし一は勾踐夫差と互に相復讐し、伍子胥の忠憤、范蠡の奇策、以て其偉觀をして益々偉ならしめ、一は高祖項羽と鹿を中原に爭ひて、范增韓信蕭何張良等の諸豪傑之が帷幄に參畫し、以て其活劇をして愈々活きしむ、彼の三國以下の史を讀みたるもの、及び讀まざるもの共に先づ本編を一讀せざるべからず

幻燈會

巖谷漣山人著

全一冊

和裝美本　正價金拾錢郵稅四錢

本書は漣山人が得意の妙筆を揮ふて物したる滑稽談にして幻燈に映照する種々雜多の物に就き面白可笑く巧に其物語を述たる者なり故に一度之を繙かば一讀三笑再讀絕倒殆んど頤の外つるゝを覺へざるべし

歌舞伎座新狂言史劇脚本

福地櫻痴居士新作（五月四日より發賣）

武内桂舟氏密畫

日蓮記

製本既成

全一冊洋裝 彩色密畫入　正價貳拾錢　郵稅四錢

日蓮上人は宗教開祖中の一大豪傑なり從來世に行はるゝ日蓮記の院本脚本の大に上人の眞相を失へるを慨ひて櫻痴居士この新作あり**團十郎を**これ**歌舞伎座**に演せんとす其立案の斬新豪宕なる其詞句の通快雄壯なる脚本とは云へ實に北條時代を寫出せる一編の史論にして之を讀めは慷慨悲憤に堪へざるの感あり蓋し**居士晩近の一大雄作は此編**あり

幸田露伴君著　寺崎廣業密畫

●日蓮上人

正價拾二錢　郵稅四錢

高橋太華山人著　富岡永洗密畫

子供のてがら

全一冊和裝密畫入　正價金拾錢　郵稅四錢

これは昔ばなしの兎のてがらの類にはあらで今時の感心なる小供のてがらなり、小供のてがらとは何ぞ、無邪氣なる三吉の失策ばなしなり、失策をてがらとは、をかしきやうなれども、三吉は實に失策をしたるなり、その失策を自分にて取返したる處が即ちてがらにして、種々の可憐無邪氣なる面白き話もこれよりぞ起れり

武田仰天子著　小林永興密畫

二代忠孝

全一冊和裝密畫入　正價金拾二錢郵稅四錢

忠孝の道に厚き我國には古來一門にして忠臣孝子を並べ出だしゝ家少なからず隨つてそれ〴〵人口に膾炙したれど獨り澤橋兵太夫母子の忠孝に至りては只歷史に存するのみ世子多くは知らざるを歎きて仰天子の筆を執られし前記澤橋母子の忠孝美談行文なだらかにして巧みなれば御子樣方が御覽ありても尊くして面白き冊子なり

短篇小説

明治文庫

毎月一回發兌◎毎篇讀切◎彩色密畫挿入◎洋裝大判美本

正價一册(二百頁)拾五錢◎六册前金八拾五錢◎十二册前金壹圓六十錢◎郵税一册六錢

◎第壹編目次　巖谷漣山人著　武内桂舟密畫

辻占餡　秋の蝶　けなげさ　黒衣魔　白面鬼　梢上月　山時鳥　京自慢　花の旅

◎第貳編目次　小林永興密畫

川上眉山著 雪折竹　村井弦齋著 福の神　廣津柳浪著 佛魔一紙　嵯峨の屋著 薄命の鈴子　石橋思案著 姥櫻　江見水陰著 驚く鷗

◎第參編目次　江見水陰著　武内桂舟密畫

劍客　秋嵐　痼癖太守　骨武者　畫師　斷絃　信天翁　初楓　故家水　漁郎　わかれ霜　畫師の妻　一夜の宿　雲烟過眼

◎第四編目次　小林永興密畫

幸田露伴著 縁外縁　巖谷漣著 媒介人　多田漁山著 新學士　川上眉山著 風流狂言記　田山花袋著 隅田川の秋　嵯峨の屋著 庭の敎子　渡部乙羽著 都土産

◎第五編目次　山田美妙齋著　三島蕉窓密畫

みゝずはれ　曙の春　月花の見立　紅墻記　朝顔の墓　雪折れ竹　大龍王　田舍聖者　古切手　くされ縁　ゐなか娘　母のなさけ　春の花鳥　鴉の道行　戸隱山記行　都門雜興

◎第六編目次　武内桂舟密畫

櫻痴居士 忠義お安　學海居士 當世二人女婿

◎第七編目次　中村花痩著　三島蕉窓密畫

俄長者　狂蝴蝶　合歡花　俠魂　片時雨　破鏡

◎第八編目次　富岡永洗密畫

山田美妙著 村上義光　巖谷漣著 若水　嵯峨の屋著 國民大帝　田山花袋著 廿日月　西森骨皮著 滑稽二人男　松華庵著 夜行汽車　眠花道人著 江戸舞蹈會　原抱一庵著 青春夢

◎第九編目次　渡部乙羽著　寺崎廣業密畫

浮田一蕙　捨扇　邪正一如　戀の今様　京屋娘　こぼれ梅

◎第十編目次　富岡永洗密畫

神田七不思議　新奥の細道　玉川河童泳記　故郷の錦繪　吉野初瀨花摺衣　櫻痴居士著 僞稱紳士　漣山人著 評判一人娘　嵯峨の屋著 母心　松華庵著 銃獵　松居十八公譯 鏡花緣　田山花袋著 薄暮山

◎第十一編目次　遲塚麗水著　寺崎廣業密畫

月雪花物語　懸想文賣　餓鬼　心字池　寳刀　畫師

圖書出版
東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第拾一篇

遲塚麗水著

月雪花物語　畫師

懸想文賣　諧樂園梅

餓鬼　啼美々

心字池　新佐衣姫

寶刀

明治文庫第十一編目次

雪月花物語……一
懸想文賣……三二
餓鬼……五〇
心字池……一一五
寳刀……一二八
畫師……一六〇
偕樂園の梅……一六五
啼美人……一七二
新佐世姫……一八六

以上

◎雪月花物語

麗水生

雪の卷(上)

道路一白鞋を沒せむとする雪は、吹き下す筑波下しの寒風に凍つて、花か、香なくして冷たきもの、面に照り添ふ十四日の月、兩ながら銀の如き靜夜の寂寞を擾して、さながら玉の屑を踏むが如き路行く人の下駄の音も絶えたり。

時はいつ、元祿の十あまり五年師走月十四日の夜、本所松坂町の吉良上野介の邸宅にては、此頃八百八街の辻々に流れ渡りたる赤穗の浪士が亡君工匠頭が仇打せんとする風聞に驚き、祿に離れて骨秀でたる瘦浪人が暴擧を避けて、翌日より宗家の上杉家に行むとて、此宵は冴へたる十四日の月を雪の庭に賞翫して、賑やかに名殘の宴を催さむにと、知友俳人さては家臣の重なるものを喚ひ招きて燕を張りたり、黃昏ごろの吹雪に埋もれたる假山のもとに、常には碧の水湛へられ鱗の紅きもの小々波を吹ける、淸らなる泉水は、雪に照り合ひて黑う澄みたり、汀のほとりより薄氷くまどりて、その上に映つる月影を、さ

ながら薄紗に包まれたる寶珠と見する好風景を受けて、障子をさッとあけ放せば、曲々として流れたる椽の上に落つる銀燭の影滑べりたり、殿の吉良義英は、兩鬢のあたりに霜やゝ滋くして、眉の間に篆書したる火の字に似たる筋淺く刻ざまれ、眼は黒眼少さくして濁りたるなど一癖あるぎき老爺と見へて、他には意地惡く、つれなく、邪見、慳貪なるともあるべきなれども、己が知人家臣の面々は、主とし仰ぎ朋とし親みて、差す銚子、とらする盃の間には、一片の和氣靉れかゝるらしく、興ある遊びに夜の更くるも知らでありける、

義英にこやかに盃を啣みながら、侍らしめたる小冠者に吩付けて、彼の庭の飛び石の上に置かせて小降の雪を枝に積もらせたる室咲の梅の鉢をもて來さすれば、小冠者ハ唯々と答へて、二の字がたなる庭下駄の痕を印して捧げもて來て參らすれば、義英自から起ちて之を床の間に据へ、さそくの歌題に之れを詠まむと料紙なんど取り寄せつ、酒も再び温うなりて興は復た圓かにありぬ、　上杉家よりのつけ人なる小林平八郎、和久半太夫等の面々も、この席の端に召び出されて、永らくの警固神妙に存ずるとの、優しき言葉と共に、義英は自から大盃一個づゝを與へ銚子とりて侍る侍兒に命じて、濺げなみ〳〵と、黄金の色の凸うなるまで盛つたりやと慰勞るゝ、ありがたがりて兩人等は痛く酩酊して其座に堪へずなりにける。

斯くて床の間なる掛時計の四ッ半を報じたるころ、この名殘の燕は撤せられ、義英は奥に入り、招か

れたる人々は己がしゞ退りける、小林もその座を退りて玄關に見き行れば、何に悲しきにや流るゝ涙の盡きなむ臘燭のほのくらき光を髭面に浴びて、鼾の音は嵐吹く猪のやうに、肉瘤たちたる腕を曲げて枕とし、反ざまに倒れて睡むは和久半太夫、さては醉ひしどれたるか不覺候と、平八刀の下緒をはたとさばけば、和久は疊を蹴て坐直りざまに眼を瞬り、是れハ小林殿にて候か、頂戴の酒は五臟六腑をきりゝやきりゝと馳け廻りて、心地の快美につひとろりと睡みたり、平八ハ大笑して、吉良殿翌日は御宗家に移り給ふとの風説を聞きつけて、今宵ならでは打ち入る時はなかるべしなど、もしも左あらむ時には不覺を取り給ふな、上下ともに酒を雪の夜寒にこと寄せて、温き衾のうちなる置炬燵の炭團の灰を掻き下すなど不用心なる今宵なるに。　油斷などやはか爲すべき、此和久こそ今宵御玄關の宿直を承つて候なり、瘦浪人の押し寄せ來るとも、敷臺なりと泥鞋には蹈ませじ、大の字なりに突き立ちて、大兵小兵の嫌ひなく斬りに斬りて、年代記の外に見し事もなき紅き雪を御覽に入れむ、貴殿は早う部屋にもどりて休息あるべし、あゝ醉覺の水の欲しや、小林、小林、貴殿ちよと行きがけに、敷石のかなたなる、人の蹈まぬ清淨の雪を一掬して、投げて吳りやれ、醉はぬ印には、見ン事それを受けて見せむ、フッハ、ゝゝゝゝ。

雪の巻(中)

平八郎は己が長屋に歸り來りて、火桶の火を火奴に移して、行燈に點し、蒲團を布きて夜具ひきかつ

ぎ、さても和久の元氣よき事、凡人の酒飲みたるやうに魂まで醉ひはせで、心は醒めたる和久に玄關の宿直を任したれば、先づ〳〵今宵は足を伸ばして休息すると出來るべし、されど穩かならぬ風聞頻りに聞ゆれば、若し万に一つこの夜雪に乘じて襲ひ來たる事あるまじとも云はれず、好しさらばと靜かに起きて、龜甲形にさしたる稽着を素肌につけ、肉くひ込まむまでにした帶しかと結びくゝりて、小倉の袴を裳短に穿ちたるを其まゝころりと横になりて、眠れども武夫の心の訝へは、風吹き落す檐端の雪さらりと音するにも覺むるべし。

やがて夜ハ陰々として闌け渡り、月を浴び雪に埋もれて、凍へたらむ獏の腹を肥やすに足らざるほどの家々の人の夢、天地寂寞として萬籟休する夜半、平八郎ふと眼を開けば、月に響きて鼕々と鳴り度る陣大鼓の音、ソを敲つものは誰ぞ、腕の冴へこそ正しく山鹿流の鼓法。

平八郎枕を突きのけ、隻手を夜具の襟にかけて、少時は息を沈めて耳を欹つるに、今まで夜を警むる擊柝の音疎なるの外、絕へて音なき邸の門前、玄關のあたりに、風吹き起りて吹雪の狂ふ如き聲さつと聞へけるが、やがて大浪の一時に岩に激する如き物音の凄まじく折しも刄よりも尖き寒風一陣、雨戸の隙間より枕畔なる有明の燈火を薙ぎて、吹き送る太刀の音。

さてこそ推參、赤穗の瘦浪人奴。

斯く叫びながら、平八郎は衾蹴りて跳り上りて、額眞向に鉢卷して、先づ跪きつゝ燈ひき寄せて太刀

の目釘を撿め、そを佩びて静かに厨の方に行き、杓柄とッて一喫ミ水呑み乾し、稽衣古の筒袖こきあげて、雙の腕に霧噴きかけ、拳かためて丁々々と兩打三打して、やをら雨戸を推し開けて跳り出でむとするに、雨戸に中つて戛々と音するハ雹に似てそより音高し、さては長屋の中なる士が馳せ向はむとするを出さじと、敵は家根に攀じて矢を兵と射かくるなりけり。

周章ふためきて跳り出でなば、矢に中つてあたら犬死せむ、瘠浪人と侮慢たりしに其用意の周到たるこそ殊勝なれと、平八郎は静かに耳を雨戸に貼けてよく聴けば飛び來る矢ハ雨戸に中つて貫かず、中ると其儘からり〳〵と地に落るさま、矢は矢なれど正しく之れは矢根なき恐嚇矢なり、秋の田に立ち盡せる案山子の弓矢は、村雀を嚇すなれども、杉箸よりも脆き矢をもて嚇さむとするこそ笑止なれと、平八笑ひながら静かに雨戸を引けば、眞白に冴へたる月に雪、眼も眩まむばかりなるに、忽ち兵と音して飛び來る矢は、正しく眉間を望むて電より逸く閃めくを、退きざまに拳を揚て敵き落し、腕を額にかざして外の方に頭を出し、見れバ彼方に矢聲太刀音凄まじく、廊下の障子に人の影走り合ひ亂れ合ひ、さッと紅吹きかけし如きもの障子の紙にかゝりたり、さては娘人奴、中の間わたり書院のはとりを泥足に蹴て、殿の寝所に亂れ入らむとするにてあるか、この平八書院口に立ち塞がり、叢がる刄の楯となりて、一歩たりとも退くものかはと、飛び來る矢の間を潜りて身を縮め、敵に吾が影を見られじと雪を踏みつゝ庭傳ひに、高椽の上に跳り上るや、直くさま女中部屋に走り入りて、架けありたる女

房達の花を縫ひたる振袖衣を取るとそのまゝ、頭よりひき被りて、高椽飛び下りつ、眞白なる中庭を斜めに奥殿さして走るや一散に。

雪の巻(下)

この時大石良雄は、中庭のこなたに床几を据へさして腰うちかけ士四五人槍を立てゝ圍むだる裡に大皷を左手に撥を右手に、進めや進め、北ぐるものは追ふて斬るなかれ、女童ハ避けて進めや、見ざす仇は只一個ぞと呼はりゐから、火事頭巾の庇の下より眼は四方を睨むで威風凜々たる相貌、隈なく照りたる十四日の月に白みたる大刀鎗尖、雪は夜寒に凍て、戰ふ人の喉霑さむと掬ぶにも、粉となつて風に飛ばむまで、

中庭の雪は未だ武者鞋に踏みたくられず、板橋の霜の上に紅葉散り布く如く見ゆる血の痕も印されず、天地一白の其間に、今しも、かなたの高椽を飛び下りて、走しり行くものあり、見れば綵繡ある振袖衣を頭より被り、躰をかゞめ雪を飛ばして行く姿こそ、女房達の追はれて遁ぐるものなれや、眞白なるものゝうちにひら〳〵〳〵飜へる花の被衣、折しも風颯と吹き來りて彼の裳のひるがへる其下より、きらりと月に閃めきたるは鍬形しろ金の太刀のこぢり、大石之れを見ると共に、それッ追ひすがつて打てやと叫べは、二人三人は飛鳥の如く槍を揃へて走せ行けば、彼は今ま高椽の上に隻脚かけて顧さざまに、無禮もの奴、推參なりと叫びつゝ被りたる衣を隻手に攫むで掲げながら、袖

の蔭より屹と睨めつけたる眼の光は人を射むまで、前に進むたる一個が突き出す槍の穗先に投げつくれば、　露はれ出たるものは﨟だけたる處女ならで、稽古衣、短袴、鬢邊の髪一ッだに散らげざる大兵一個。

盜賊奴、我は小林平八郎候ぞ、夜陰に奥殿を騷かすの條、奇、奇、奇ッ怪、ふためきて怪我すな曲者、　大音聲に叫びざまに腰をひねりて拔く二尺三寸の大太刀は、月に閃めきて電のごと、額眞向に中てゝ跳り上れば、一人はひきからむだる衣をハネ上げて、穗先は、鋭く、胸板望むて突き來るを、片膝つけば槍は肩を流るゝを、横に拂つて却き起てば右手左手より突き出す槍は胸を距ると一寸あまりの邊に交叉たり、平八躍り込むで攫まむとするを颯とひきて再び操るを飛びすがりて斬りこみ〳〵勇鬪すれば、三人のものは後へ〳〵と退きて、一個ゝ泉水の汀の雪に滑りしが、薄氷裂ひつ叫を殘して水烟を起たしぬ平八太刀提げて嘲笑ひながら、用なき戰は好まぬものに、いざゝらばと踵を返へして高椽に飛ひ上り奥をさして行かむとするを、後より堀部金丸追ひすがつて、手槍のさきに貫かむとするを、身を縮めて避けながら、再び勇みに勇みて戰ふほどに、浪士は浪の如く押し寄するとも大堤に拒がれたるやうに一歩も進み得ざる所を、後馳に走せ來りたる堀部安兵衛武庸、關の孫六三本杉の大太刀もて、飛びかゝり渡り合ふ、哀れ平八が鬢邊に隕ちて宿りたる雪一塊は蒸して飛び散りたるまでに苦戰しけるが、果ては紫色の腥き烟さつと起ちたるうちに音もなく、血と創とをもて飾られたる骸横はりぬ。

泉岳寺の老松長へに青き邊に、古香を吹く苔に包まれたる四十七個の墓石は、幾多の人の涙痕を印されたり、同じく義の爲に死したる彼の可哀剛者の骨は、那邊の寺の石の蔭に埋もるゝる歟、知る人あらば問はむとぞ思ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

月の巻(上)

崩れかゝりたる築地のほとりに立ちたる枝もなき二本杉は、凄う照りたる一輪午夜の月を挿みて、ろれさへ凍りつきたる如き秋の夜、かなたよ一とむらの竹藪ありて、そを透して滑り出したる佛燈の影は奈良の寶藏院、この明き月のなかに木魚敲きて念佛まうす人はなきかはりに、梟さへ肉に飢へてか啼かざる靜夜の凄味を擾して、呵〳〵と高笑するものありけり、彼の燈火のより〳〵見へつ隱れつするかしこに。

世ハ亂れにみだれて、腥き風聞はをちこちにどよみ渡りたる時、村時雨さては小夜の松風さへ、温かゝらぬ衾のうちなる夢は、矢叫鬨の聲とき〻ひがめて、頻りに愕かれぬる人の心、村外れの松並木の蔭

に、今朝見れば首塚一個殖へたりと眼の色變へて噂するものあれば、鎮守の森のほとりなる地藏堂に、一昨日旅人らしきもの一個斬られたるが、八出の葉の散らげれるやうな掌形の血汐は破れ椽の一面に粘きて濃紫の色滑めらかに腥さかりしを、昨日たそがれ時の雨のうちに、怪しく青き光を放ちて燃へたるを見たりとの話しするあり、朝より晩まで畏らしき噂ばかり、されば平常强がりの男ども、黄昏ならざるにはや雨戸をさして、燈もともさずに、心も身体も毬のやうに夜具ひきかつぎての臆病者と成り果つれば、犬追ひ鬼ごっこする童部等は、竹藪の竹を截りて弓つくり、河邊に生ゆる枯葦折りて箭となして、我こそ八幡太郎候と可愛きかぶきりに鉢まきして跳るいさましさ、爹々に貰ふたる反故紙に、山水天狗さへろくに書き慣れざるにじり書きに、かたちをかしき笹銅筒の紋を書きて竹竿の先きに結ひつけ、九郎判官義經と小さき肩を張りての廣言、襁褓のうちなる稚兒さへ犬よ猫よと大平の今の兒の口眞似はせで、物の名呼ぶかた言の一番には刀よ弓よと廻らぬ舌をうごかして、でん〳〵太鼓鳩ぽっぽに厭ひたる身体を、やわらかなる衣にくるめられ、すや〳〵と夢なき睡を乳母が懐に温められつ、寢子歌に搖らるゝ味を知らざりける。

されば、平常のそらくに振舞ひて、酒よ臟腑を腐らせつ、鐵よりも堅きとよと掌を伊達に喧嘩を賣れる無賴ものは、運は寐て待てと手枕したる肱をつき張りて、かた唾のみつゝ飮みたき酒を辛抱して、革づか赤鰯の山刀に一斗の酒の代を投げ出し、爺が草刈稻刈の鎌を磨ぎたる荒砥もて來て、菜刀磨ぐ格に研

ぎ光らすものもあれば、我に一升の酒飲ますれば喧嘩の楯に竹槍一本吾が太股にくらはせて、迸しる鮮血を二升にして買て呉れむと大言吐ける壯丁原も、時こそ得たりかしこけれと、夜逃げにあらで晝日中に負債ある家の前にさへ大手を振りて、己がじゝ失するもの多かり。

斯く騷々しき世のさまなれば、山櫻咲くと詠まれたるこゝ奈良の清淨區も、今は全く荒れ果てゝ、昔しながらの色は斂けたる甍の苔に寂びたり、日々に薄き行ける業の鐘の音讀經の聲も果ては聞へずなりて、樒線香なんど賣れる門前の媼が一人兒も、敎へられねどすら〳〵と暗誦みしたる盤若經を忘れて、神童と呼ばれし昨日の名さへ消へ〴〵なるを婆に叱らるゝほどなりけり、されば富士の白雪に木魚の屑少しばかりと摘み入れて、さゝやかなる皿の中なるおろし大根を肴とて、戸張深くたて籠めたる一室のうちに、盤若湯を濺ぎたる茶碗の緣に鈴蟲の音をさせて、袈裟を外してゆつたりと終日讀經のうさ晴し、微醉の心地よきにも人を憚かる小聲にて、十万億土のあなたに地獄なく、吾が掌の上なるものに極樂ありなどゝ洒落るはまだ心憎きところあれど、今は誰れ憚らず酒のみては打ち興じ、法衣の袖をからげて、動もすれば太刀薙刀など振り廻はし、遠くあなたの山を越へて落武者の鎧を剝ぎ、或はまた近きはとりの家を嚇して無事に瘦せたる力瘤を肥す荒法師もありけり。

かゝる忌はしき世は夢と過ぎたれど、寶藏院の和尙は一流きわめし槍術の達人とて、長刀佩ひたる浪人どもの多く出入して敎を乞ふもの多かりけり、されば六間四面の本堂は疊を取り退けられて、こゝを

稽古場となし、穗長短穗の稽古槍は其數二三十本、かなたの壁のほとりに流れたり、金色の佛の前も憚からず、荒布の袴の裳高う褰げ赤脚現はに、氣勢かくる矢聲鋭く、どう〳〵と蹴ッては鳴らす床板の朽ちたるわたりをメキと踏み折ッて、向脛の肉を腐れ折れたる鐵釘に削れながらも、周章しく膏藥の詮議もせで、勝負を競ふありさま勇ましくもまた物凄じ。

彼の竹藪を滑べり出でゝ靑う光れる燈火こそ、この稽古場のうちなりけり、打ち見れば、古鏽つきたる佛燈に火を點して、そを圍みたる荒坊師二人、浪人めきたる髭男一人あり、法師の一人は荒布を墨染したる衣をつけて、扉わざと明け放したる紙障によりかゝり、襟くつろげて胸毛あらはに、紺だんだらの布をもて便々たる腹のわたりを括ッたる大法師、席は他に敷かせて我は熊の皮に大胡坐し、爐のうへに掛りたる鍋の中に旨き肉の香、温むる酒の薫と共にこぼれける、大法師は先づ呵〳〵と高笑ひして顧きざまに、紙障のほとりに月影うつす松か枝のやさしき枝を見て、まづ〳〵このやさしき枝ぶり見て一杯飲まむと煎へたる村醪を髑髏盃とか呼ひそうな大茶碗に灑がせ、碗のうちに浮びたる泡を吹さつゝやがて反らざまにあほりつけ、さても旨き酒なるよ、あら見よ、吾か把てる盃の緣を掠めて、やさしくも松にからまる蔦の葉の二ひら三ひらの影、よしか此の影を外らさずに把て居るほどに、今一杯灑ぎて呉りやれ、さても一入旨きとよ、あら笑止、紙障の破れより覗きこみたる月影が、見よ我か禿げたる顱を滑べりて、かなたの板敷に大入道の影法師を落したるとよ、こたびは此の大入道の影法師見て飮まむ、

酌めなみなみと、つゞけさまに三四杯あほりつけて、やがて天井睨むて吹き出す大放笑、こなたに扣へたるは斷れたる髻を麻もて結びたる一個の浪人、こめかみのあたりに蓴菜のやうなる青筋蠢めかしつ、醉に蒸されて秋ながらたら〳〵と湧く玉の汗を平手打ちにひたと敲きて、その掌をもて頤あたりの荒髭ざらりと撫で、隻手を後に支へて身を反らし、是れは覺禪坊先生の氣逸りものよ、今ま少時まち給へ鍋のうちなる鹿は熟するものを、我が冴へたる槍をゑぐられたる肉を寛くりと賞翫して、酒飲み給ふとのよかるべきに、大法師はしり眼にかけて笑ひながら、よいはさ三郎、たかゞ鹿の一疋半疋を獲たりとて、跛ひきたるか病めるものならば何にあるべき、げう〳〵しく鼻うごめかす肉は旨かるべきも我は欲しからじ、それ遣るは見んごと乾せと手にしたる大茶碗をさしつくれバ、居直りてそを受くると、すかさず傍の青法師は瓶子とりて酌みやれば、散りかゝる黄金の花を掌にうけつ一口飲むで、先生が酒の肴は松が枝さては影法師、吾が酒の肴はこの肉じや、いざ先づ我より賞翫せむに默善汝も筋つけずや、大法師はあざ笑ひつ、松杉昏き山路の篝火を股にして、落武者來れ剝ぎ取つて臂うち呉れんと永々し夜を待ちくたびれて、落葉のうちに埋めたる灰くさき酒に舌うち鳴らしたる昔の味を忘れぬ汝、終日の托鉢に喉からして、米買ふ錢の半ばを剝ひて買ひたる酒の、土瓶の底にちよろ〳〵と私語く音を樂しう聽きて、ちびり飲みする默善が鐚錢くさき酒の味もて、我がこの酒中の趣を解きて見よ、酒は同じ酒ながら、白玉蓮の葩に結ぶ白露と、卒都婆の蔭に生白く咲ける夕顏の花に宿る白露と、露ハ同じ露なが

ら、そこにはけじめわるものじやろが、されば手慣れたる槍ひごきて醉氣は迸しり出づる十指頭大兵の敵の下腹貫かば、さながら皮たるむだる大皷を裂く音する心地よさ、貫きしまゝ地を蹴りて跳り越ゆる陣頭朝酒の醉ごろ旨かるべけれ、或はまた靜夜の席に端りなくも昔しのばるゝ憂を酒に掃らひ、大刀拔き放して斑に咲ける血汐の鏽に醉ふきかくる、想へばこの酒も旨かるべきに、それはさて、盃をこせ。

大法師が大言に打たれて傍の二人は口を噤みぬ、折しも庭の古池のわたりに水音せり、浮べる月を吸はむとて、魚の跳ねけむ、鳴き居たる蟲の音はかなたより消へて來ぬ。

やがてかなたの扉をほと〳〵と敲く音す、三人は耳を欹てゝ聽くに、再び扉たゝく音す、筋捨てざまに應と譬へて、三郎と呼びなせる浪人めきたる彼の男は、走り出でゝ扉のうちより外の方を竊見れば、霜かとばかり訝る眞白なる月を浴びて、髻優に結ふたる一個の美少年、千鳥模樣の袴やさしく着て、長やかなる袖は桔梗の花をわけぼの地ょ染め出して床しき空だきの香たき籠めたるらしゝ、ふこやかなる二重頤を領の間に半ば埋もれさせて物思げなる眼光ハ白玉に漆したらむうつくしさ、三郎走せ戻りて眼つぶらに斯くと告ぐれば、大法師はやをら起て歩み豐かに、半面を扉の外に現はせしが忽ち頭を縮めて嘻々と低う笑いながら、圓顱をつるりと一と撫でして、

「何寺の稚兒ぞ奇ッ怪候、この眞夜中に訪ふこそ」

「これハこのあたりに世をしのぶ小冠者、覺禪の御坊ょ見參せむとて來つると告げ參らせてよ、」

月の巻(下)

覺禪は某でおじやると半面に月を浴びて、戀慕の繡毬を搏たむと睨みつむる獅子王の眼光するときを見上ぐる流眄にやさしく受けて、微笑する美少年の愛らしき唇より情は飜ぼれ落つるらし、覺禪の御坊とな、御名を慕ひ參らせて小夜闌の門を敲きたると免し給へや、

なにこの髯法師の名を慕ひてとな、いざたまへと怪しみながらも覺禪手を伸べて招じ入るれば、少年はさながら胡蝶の花を舐りて飛ふその翅の輕ろげなるやうに、あけぼの地に桔梗縫ひたる小袖ひら〳〵と聽くに音なきまでに、高欄のほとり近く歩みたり、奥の一室に入れて覺禪蒲莚を美少年に與へ、吾が名を戀ふて何にしにおじやつた、語りて吳りやれと立膝したる膝頭に兩の掌を重ねて、頤をその上に載せながら言葉短かく返答待ち顔、とろりとしたる眼に丸絹燈の火影ちら〳〵、その燈の火は碧抹ひたる暮山のかげ涼しかる眉を滑べりて豐かにして紅蓮華の色ほやり〳〵としたらむらしき頬を掠むるに、顏を少しく背けて、眞夜中の推參おん免し候へ、八幡、吾身は讎を避けてこゝ奈良のかたほとりに世にあるか無きかに忍ぶ小冠者、近頃入懇なる柴刈の翁京に行きての土產話しに、今ま京の町にときめきたる劍客ありて、道行くにも從者七八人を伴ひて威勢すさまじく街の塵を掃ふと語りぬ、思ひ當る事ありて、一日京に行き、厚笠の蔭より奴を見たりしに、不倶戴天の吾が仇なり、痰吐きつけてと候はん存せしが、彼奴は劍を好くし、おまつさへ長柄の槍を善くつかひ候と聞き、淚を呑みて彼が張り昂りた

る鷲のやうなる肩に風を截りて行く後影を見送り見失ひて還りこし候ひしが、　覺禪は髯を撚してにじり寄り。皆まで言はずともいや解れり、汝がこの覺禪の入道に劍を學びてその讎を打たむとの意でれじやろうがな。　さん候、と今まで可憐かりし美少年は、屹と覺禪が髭面を仰ぎ見たる光景、春の海の色麗かなる眼のうちに、何にやら燈火に射られて閃らめくものは露か。

軍の神も照覽あれ、この入道が片臂の肉瘤を削つてなりとも、汝が腕に添へて呉れん、この覺禪が腕の筋を拔きてなりとも、汝が臂に與へて呉れむず、今宵より、心神澄みたる靜夜のうちに學ぶこそ善かるべけれ、孝子起て、　と席を蹴りて起ちあがりざまに美少年の肩を敲きて、來よとばかりに道場へと案內して、眼を瞬りて怪しめる三郎、默善を叱し銚子なんど彼方へと退かしめける、

覺禪手慣れたる稽古槍を提げて片袒ぬぎし、そをリウ〳〵とシゴきたる音すさまじく、穗先はさゝ、ゝらの如く見へて勇者も眴かなん、猪の逆毛よりも剛かるべき毛の生ひたる胸を丁々とふたゝび敲きて雀躍りしつ、燈火散らげむまでに矢聲銳く、いざ來れと仁王立、美少年は彼の桔梗縫ひたる長き袂を背に結び、袴を甲斐〳〵しく端し折れば、冬の大根よりも白きやさしき脛あらはに、授けられたる蛤刄にこき上げたる木太刀を、雫滴る前髮のあたり眞向に押し當てゝ、　御坊に物申さん、劍をもつて相ひ闘ふ時には、失禮ながら御坊を不倶戴天の吾が仇と見て打ち込まむ、御坊は我を憎くき敵の一塊肉として、一ト貫きにと思召し候へかし、　覺禪かや〳〵と高か笑ひして、微妙くも言ひつるよ、好し打て

之れを、と額のあたりを敲きていへば、御免候へと叫びざまに、電のやうに飛びかゝりたる美少年、風を截る音高く、碎けよとばかりに覺禪が頭を斬りつくるを、覺禪どうと槍の石突もて板敷つきて、一足飛びに踵そろへて却ぞきつ、つき出す槍は美少年の肩を掠めて流れたり、ぬかッたりと繰らむとするを、美少年は左の腕を伸べて槍の柄むづと攫む一刹那、揮り上げたる木太刀は兵と音して、あはや柄も折れんところを、覺禪金剛力を出だして曳けば、よろめきながら端し折りたる袴の裳を我れから踏みて、片膝つき、木太刀は板敷を空に打つたり、得たりと覺禪双の腕の力を籠めて南蠻鐵の鎧も碎けよと突き出だす鋭き槍さきを、倒れながらも下より拂ひ上ぐる大刀の冴へ、飛び退りつゝ槍を立てゝ、起きよ小冠者、息いれて今ま一と度、

傍に見居たる三郎、默善の二人が呆れ顏なるをかしさよ、覺禪は白湯もて來さして、美少年にも與へ、我れも飲みて、少時のあひだは休み居たりしが、再び起き上りて槍を横へ、小冠者來たれと麾く、美少年は靜づ〳〵と起ちて、こたびは袴の裳を高〳〵と端し折り、散らけたる鬢をかき上げたる其の樣子の美くしさ、頰よりかけて兩の瞼のほとりまで紅く潮したる色のほんのりとして、霞のうちに匂ふ櫻花のながめ床し、つと起ち上りさまに、木太刀とりて青眼にかまへたり、ホゝ笑して少年は　御坊、痛く醉ひ給ふたるらしゝ、御つかれの候はゞ復た來む宵のことゝなし給うこそよけれ、あまり槍さきの御さびしう候まゝ、御手やわらかに願はしうこそ、覺禪は苦笑しつゝ、さん候、醉眼いたくちらつきて、汝が

身体は嵐に吹かるゝ一輪の梅の花のやうに見ゆる哩、敵うつか打たるゝかの必死の境に戯言は入らぬものよ、己れ打ちて見よ、鐵よりも堅かるべき吾が身体、小冠者奴。

少年片頬笑して、御免、猛々しき廣言きゝ苦し、十年あまりの秋の霜夜に研ぎ澄ましたる恨怨の刄、斬つて見せうず瓜を割くより易々と、と跳りざまに拂ッたるを、板敷蹴ッて覺禪坊は宙に飛ぶと見へしが大喝の聲と共にくり出す槍先を、身を反ざまにして少年はそを避けて、こ度は諸手づきに突き出す太刀のきつさき、平手うちにハタと拂ひて鳩尾のあたり見がけて繰り出せば、龜の如く身を縮めながら、槍を潜りて脛拂はんとする手練の早業、さながら蜻蛉の浮萍の花に點じては復た飛ぶやうに、また散りたる菜の花に紛れながら黄金の蝶の吹かれてはまた息ふさまにも似かよひたり。

覺禪はしどろに疲れて、よき潮見て槍をひき、さても小冠者ながら汝の劍法の達し居ることよ、明日の宵にまた來よ、その時の勝負にて汝の讎は竢もなく汝が太刀に斬らるゝものよ。少年は幾度か辭儀して七日の後の宵にまた來んとて扉を出でぬ、覺禪見送りて後影を眺むれば、明かき月の影を踏みて小路の草の露分けつゝ、何にやら唄ひつゝ姿は失せたり。

その宵になれば覺禪はさきの夜の不覺にこりて、酒も飲まず、用意なして、腕を摩りて待ちたりしが寢よとの鐘の音も疾くに響きて更は痛く闌けたりと思ふに、美少年は約を履まざるか扉敲く音だにあらず、覺禪は大欠伸してつぶやきつゝ、やおら起ちて、閨の板戸を推さむとする後より、御坊はそこに在

しますや、さき程よりこゝに待ち詫びて候と、やさしき聲は正しく彼の小冠者、覺禪ふりむき見れば、織月薄く照らしたる高欄のうへに腰かけて、眞白に布かれたる椽の霜に、映りたる美くしき彼の顏、玉を骨となし珊瑚を肉となしたるやうなり、先刻よりそこに居りしとな、我はそを知らざるまゝに、睡を堪へて人待つ宵のなが〳〵し秋の夜の味を覺へぬ、などて名のらずして居たまひしや、いざ來よ、と槍とりて道場の眞中に突き起ちたり。

こたびこそはと睜りたる覺禪の眼には、睡氣いつしか飛むで恐ろしく睨めば、さながら青柳の春風に靡けるやうなる袂を結びて、太刀かざしたるありさま、雪にすねたる白梅とや見ゆるらむ、やさしき矢聲と鋭き矢聲のぶつかるや、再びどう〳〵と板敷蹈み鳴す凄まじさ、さきの宵にまさりて鬪は劇げしけれど、負け色六分へ亂るゝ槍の穗に出でゝ、覺禪大汗になりぬ、

少年は太刀を捨てゝ、御坊の疲れ給へむに、此宵も之れにて罷り歸りたく候、翌日は京に登りて讎の動靜を屹と見定めての後、今一度ゆッくりと御坊の敎を受け、それより再び京に行かむとこそ思ふなれ、されば七日あまりたちての後、靜かなる宵を卜して推參せむに、と瓢然として行きたりける。

小冠者が後影に太息吹きかけて、槍を採ては天下に敵なき我とのみ思ひしに、小冠者めに負を取たる意氣地なさよ、假令金剛力士が大斧を揮つて向ひたりともこの一本の槍あらば、紫の雲のやうに血煙たゝせて、音もなく貫きくれむと大言吐きたる愚かさよ、手にもてる槍を投げもやらず、小冠者が後に躡

さて、高欄よりひらりと飛び下り、見送くれば、少年はゝや狹霧のうちに姿埋もれぬ、桔梗の花ひとむら、湛へたる露の白玉を飜さじとや、冷やかに吹き渡りたる夜風になよなよとして、かなたの二本杉の梢にかゝる新月は、研ぎ澄ましたる利鎌のやうに細く懸りける。覺禪槍を肩にして、只そこらあたりを彷徨しが、猛然として、小冠者めは跳るに逸やく、潜ぐるに妙なり、肩のあたりに流れたる吾が槍を斯くしてこそ、潜りたる渠の胸板を貫き呉れむか、渠が跳りたる時には斯くして鳩尾あたりを貫き呉れむか、さるにても揮ふ木太刀の電のごと、風を截る木劔の聽くに聲ありて見るに影なき早業よ、槍の柄幾度か斬り拂はれむ、斯く突きてこそよかるべけれ、と覺禪は槍をひねりて、吾が影法師を相手に思はず矢聲を發して、低う照りたる北斗の星を睨むで奮撃せしが、やがて疲かれたりけむ、桔梗さけるあたりの古池の汀に槍を立てゝ、石を掃ひつ腰うちかけ、水に浮べる二三輪の秋の花、冷たき風に皺みたる小々波に漂へるを、無意無心に眺め居りしに。

折しも三日の月は二本杉のかしこを離れて、中天に懸りたりしが、落ちて池の眞中に影を宿せり、小魚は沈みたる鈎と訝かりけむ影吹くものあらす、凄味を湛へたる池の面なる萍藻の蔭に映れる星の幾個ぞ、さながら鏽華咲きたる古鏡とも見るべきに、今ま覺禪が立てたる槍の影長く水の面に映つるや端なくも、彼の新たに研ぎたる小鎌のやうなる水上の月は、穗先は宿りたり、無念無想の覺禪は、忽ち滿面にこやかに笑み、少時は靜まり返へりて小搖ぎせす。

十文字の槍はありながら、吾が槍の先に宿りたる、新月を其儘に、造り出でたる三叉の槍こそ面白けれ、電のやうに揮ふ太刀も、もぎからみ碎き折つて、貫ぬき通さむ、拒ぐと撃つとの兩用こそおかしけれ、さても新月槍こそおもしろけれ、おかしけれ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

槍工に命じて作らしめたる新月槍一柄、かなたの壁のほとりに立て懸けて、身は其下に熊の皮敷ひて大胡坐せる大法師、怪しき小冠者と約せしは今宵なり、來よ、來よ、突きまくりて呉れむものを、思へば怪しかる彼の美少年、風に乘りて來るものか、跫音もなく何時しか紙障のほとりに我を喚ぶこそ不思儀なれ、吾が鋭き眼の光もてよもや今宵は遁さじ、と豐かに人待ちて午夜の鐘を算へつくすとき、風一陣颯と吹き渡るや、紙障のかなたに衣の觸るゝ音せり。それなるは小冠者か、さん候と警して靜かにさらりと紙障を明けて、先づ半面を出したり、四邊を見廻はす眼のやさしきうちに、凄味ゝ白眼の反へるたび閃めくを、つと起ちて覺禪は少年が右の手を碎けよとばかり緊しく攫みてひき入るれば、攫まれながらも、戲れ事なし給ひそ、先つ宵にくらべて畏らしき御坊になり給ひしよと輕くホヽヽと笑ひたり。

時を移すな、いざ來よ小冠者、今宵の手並にて父の讎は易う討たれむ、と板敷碎だけむばかりに石突つきたる大法師、わざと兩袒ぎたれば、胸、肩、雙の腕の肉はめき〳〵と飛動せむありさま、名工の

精神刻みこみたる金剛力士の相貌風采、瞳より射出したる勇氣は四邊を拂つたり。

美少年も今宵こそと、衣の袂まきわげて、法師を仰ぎ睨むで太刀かざす、新月槍、蛤刄の太刀、矢聲を後に殘して飛びくる小冠者の影閃めくを、覺禪新月に太刀をからむで曳とひけば、流石の小冠者も腕のしびれむまでに死力を出して、破り呉れむと押しに押す其勢を借りて、新月忽ち躍つて木太刀ハ宙に飛びたり、今まで丹花を啣めるやうなる可愛き小冠者の唇は、こつ時さながら紫の炎を吐かむが如くに舌を現はして、板敷蹴て雀躍するや、瑠璃のやうなるやさしき眼は、血脈もつれ走りたる白眼をむき出し、亞と一聲叫びざまに、却きて小走に、紙障の外へ遁げ出すを、己れ奇つ怪、この槍陷へと突き出す穂先きは、慥かに背の眞中に中りたり、覺禪高やかに、三郎、默善、追ひすがつてひつ捕へよ。

三郎、風の如く飛び行けば、怪しき小冠者は今しも高欄の上より飛び下りて、桔梗咲ける古池の汀に行きけるを、己れ怪物ござんなれと、猿臂を伸して彼の袖を攫めば音もなく、斷れて主は水音を後に殘して、かなたの山の端に隱れむとしたる月影のおぼろなる光の下に、浮萍のあはたゞしく皺めるのみなり。

御坊、とり遁がして候が、片袖は吾が手に殘りたり、笑止や三郎の攫みたるは袖と見しがこはいかに、桔梗の花兩三枝なり。

三郎、其桔梗の花を、吾が新月槍の穂先に懸けよ、酒温めてもて來よ默善、秋草の花に埋もるゝ眉月

の姿を熊皮の上に眺めて、酒のまむ、時にとりての好下物ぞ。

花の卷(上)

竹椽の上に西の空を眺めつゝ立ち盡せる一個の﨟だけたる女あり、眉も抹かず唇にも紅臙さゝず、翠なす、黒髮も結ばずして、夕べの冷たき風に亂だせるまゝ優さしき雨の肩のあたりに垂したり。花を縫はしたる衣さへ、昔しの春はやう〳〵に褪め果てゝ、袂のあたりにゆかりの色のまだ僅かに失せやらぬ飾糸さへ、亂れそめたる吾が思を誰ヱ告げむとや、より〳〵可愛き唇を洩るゝ獨言も聞へざれど、裝はざる天眞の美しさのうちに、猶は千草の葉末に風渡りて万顆の露珠こぼるゝやうに、裳ともいはず袖ともいはず哀れは落ちて、籬の外より竊見る人あらバ、之れも片袖に冷たきものを宿して還り來む。

この女は年二十ばかりならむ美くしければ其年齒も弱ふ見らるべく、實は二十を踰たらむか、傾きかゝりたる竹椽の柱に吾が身躰を靠たせ、眞白にして温かるべき頤を襟の中にさし入れて、物思ひげに打ち萎れたるさま、古りたる喩品なれど女郎花の露おもたげなる如し、その女郎花は前栽のあたりに荒れすさみて、うちに色も蒼白き桔梗の花雨三枝を交へたるが、ひときハこの荒れたる家に哀をとり添へて、

この乙女が少さき胸も悶へぬめり、折しもこなたなる破障子をしとやかに明け、閾のほとりに両手を突きて辭儀するは、この家の老女なり、

御姫さまには、復しても物案じげにこのひや〳〵衣を通す秋の夕の風に中りて、なぞてふのやうに御椽の端しに立ち給ふや、御母君の御病氣も今日はおこたりたもふとて、さきほどまで妾は御枕元に源氏を讀み參らせて居たりしが、侍の軍太夫は、御城の方に所用ありて今宵は遲くならでは還り來むとならず、妾は今まで水汲み薪を割きて、灯を點し候はんと御部屋を覗ひ參らせしに、御影だに見へざると、またしてもと存じにき、御母君の御病氣さては御父君の御消息なければとて、そのやうに明けても暮れても、くよ〳〵と物案じし給ふとも、何のそれは畫餅の事にて候、母君の御病氣は之れより日に増しおこたり給ハんとは今日の御顏の紅うなり給ひ、昨日までハ御齒を妾に見せ給ひし事もなきに、先程は御機嫌麗らかに打ち笑み興じ給ふにても解るべきとにこそ、御父君の消息こそ御子として案じ給ふは無理ならざれど、劍を採りて御軍にへと御出馬されたれば、師の御神も上に照覽まし〳〵て、冥護あらせられむと必定なるべけれバ、やがて勇ましく御歸國あらせ給ふべし、萬づのとにつけて、思ひ思ひてうの思ひの屆くものなれば、それ〳〵源氏のうちの誰れやらとかいふ美くしからぬ女房も、光の君にいとしと思はれ給ふらむ、太古よりの戀する人も皆その意中人と添はむとなるべきに、妾も今は色も香もなきものとなりたれ、耻かしながらこれでも昔は樂しき春に逢ふたものと、何やら竊み聞ける人の耳には解

からざる言葉ながら、思ひに沈みたる乙女には慥かに解りたりしと見へて、襟に埋れ居たる可愛き頤のあたり頬のあたりに、さつと紅筆もて一拭したるやうに紅うなりて瞼のほとりまで潮しぬ、またしても乳媼が輕口、退ね〳〵何といふぞ、退ね〳〵早うあちらに行きて灯に火を點してよ、退ね〳〵早うと、やさしき手に袂をもて兩度三度打つまねすれバ、沈みたる姬が心を浮せむと勉むる乳母もはりあひぬけて、オヽ恐や〳〵とて障子ひきつヽ現はしたる半面は笑も堪へす、唇のみ笑へる其心根は乙女も流石に酌みとりたるらむ無言となりぬ、

乙女ハ少時竹椽のほとりに低徊しつヽありしが障子ひきあけて中に入りぬ、先づ奥の方に行て、母君の病を訪ひ參らせ、その元氣よきを見てうれしがり、媼が讀みさし置ける源氏の卷を採り上げて灯のもとに之を繙き、柴折いれたる條より妾讀みて、徒然なる夜の伽をなし參らせむと姬はいへば、母君は頭を掉り給ひて、否とよ御身ハ早う部屋に退りて伏せり給へ、每朝よくも山邊の觀世音に日參して、吾が身の病の癒らむと、父君の恙あらせず還り給はむとを祈念して來るとこそ、今日乳媼の語りたりき、菩薩も御身が眞心より捧げ參らする祈請を受け給ふてか、吾が身の病も昨宵よりやう〳〵に癒りしと見へ、夜もすや〳〵と心地よく睡りて、夢を見たれど惡き夢にはあらで、汝が父君の勇ましう綿袍を緋威の鎧の上に被り給ひ勝鬨揚げて凱陣し給ふ夢にてありき、勞れて在さむほどに御身は早う部屋に罷りて伏せよといふ。

姫はしとやかに手をつかへて、勿体なき仰せかな、父君吾が君の御催促によつて、京都にむかつて山名殿の軍に馳せ加はり給ひしより早や三歳にあまりたれど、より〳〵の風聞を聴けば、皆な愕かれぬると許り、家の子等も忍び〳〵て落ち行きつ、今まは只ゞ軍太夫一人のみ殘したる此いぶせき家のうちに、淋しう暮らし給ふこそ何ぼう御心細う思召し候はむ、心ばかりの行したりとて、思ひに任せざる節のみ多かり、一日も早う癒り給ひて、父君が御武運高う勇ましく御凱陣の日には、とも〴〵彼の箒川のかなたなる山の端に歡び迎へ奉らむにと姫はいふ。

戰國の習とて、親は子を思はざるにあらねど親の行もなりがたく、子は親を思はざるにあらねど子の行もなりがたく、事あるときには、親も子も十年の霜夜に研ぎに研ぎたる刀を提て、血を滑かに塗らでは還へらざる淺間しき悲しき時なれば、これ喃う姫、姫、御身も二十を過ぐると早や一つ、世が世にてあるならば、立派なる婿がねを御身に得させて、妾を母ぎみと呼ばふもの二人となり、また早蕨のやうなる可愛き手を揚げて妾を老母さまと廻らぬ舌を搖かして喚ふものも頓て出來つらむに、思へは幸なきは妾身ならで、御身の幸なきとは妾にも增して、只いぢらしうこそ存ずれ、喃う姫、あの、それ、あの香坂六郎どの、京都の軍に勇ましく馬首を向けて行きにしまゝに消息もなきは、眠らば戟を枕に、覺めなば戟を手に、腥き風雨のうちに終日の戰につかれて、消息かく隙もなかるらむと、思へば〳〵、妾も心のうちにて、嘸と御身の心を思ひやりて、いやが上にいぢらしうてよ、喃う姫。

姫は含羞げに頭を垂るれは、髮はさらりと肩を滑べりて破れたる疊のうへに垂るゝを、搔上げもせず、聲は僅にうるみたれど、悲哀を二點三點の涙に讓り、哀れに御心細さとを宣ふものかな、また來む春は近さわたりに侍ものを、やがて父君御凱陣の祝宴の席に、此頃の味氣なき物語を、過ぎにし昔の事と語り草にせむもいと〳〵興多きとにて侍るといひさして、流石に香坂六郞のとは言はであるこそ實にいじらしけれ。

姫は起ちて吾が部屋に入りぬ、軍太夫は城下より歸り來たれりとて乳媼は厨より奧へと行き、病の床に侍べりて徒然のお伽話をなす

荒れたる部屋のうちには灯火一個照せるのみ、外には何物もなくして陰々たる秋の夜の淋しさひとさわ凄う、寢よとの鐘の音おとづれたる後は、前栽の千草にすたく蟲の音のみ高う聞へぬ、此時まで姫は物思ひげに危坐り居しが、やがて灯火ひきよせて火影を床の間の方に向くれば、床には一の軸だにあらず只花瓶の中の兩枝三枝の秋草の花挿され、柱には卯の花威の鎧袖一片懸りたり、姫は起ち上りて靜かにその鎧袖を把り來り、長やかな袂を折り返へしてその上に載せ、やがてそれを抱きて、性あるもの丶如くそれに物いふ、物いふ節々ハ慥かに聞へざれと、一切の事はこの姫の樣子によりて明々地ならむ。

彼方と此方の親々は心に許るし、二人は言ふまでもなく思ひつめたる香坂六郞と靜子姫、應仁の年細

川山名の兩家兵を交へて京都のうちに亂れ戰ひたりし時、爰信濃の國の小名等も軍兵の催促を受けて各々京へ馳向ひたりしが、六郎も靜子の父と共に一隊の兵卒を率ひて翌日は啓行せむとする宵、ひそかに靜子姫が部屋に訪づれて手を把りて名殘を惜みしが斯くてあるべきあらされば、六郎は曾て十六歳の初陣のとき着けたりし卯の花威の鎧の片袖を絕ちて、之れを遺物とし與へつゝ猛然として行きにける。

戰の便は誰が傳ふるにや、おり〳〵都より鄙に度たれども、その度每に心とゞろかれぬるゝ吾が意中人の消息、三歳にあまれどもなきぞかなしき。

花の卷(下)

數騎あり、蕭々として今ま箒川のほとりに馬を立てゝ互に甲を傾むけ式代するは戰場よりの歸と見ゆたり、やがて一個の武者を殘して他の騎者は皆な駒の首を後へと立て直しつ一と鞭揚げて走り去りぬ。

折しも五月雨の頃にて、雨は細々と鎧の威毛を霑らし、尙ほ橫さまに兜のうちを吹きぬ、小河は野潮汀を踰へて、度らむにも板橋なく、まして渡守もなし、殘されたる武者はかなたこあたに馬を步ませて瀨の淺さところを見やり居しが、やおら叱々と馬を乘り入るれば、水は馬の腹帶を浸すまでなり、靜かに涉して岸に躍り上りつ、馬は鬣を振ふて一と嘶す。

何處の戰塲より還り來れる武夫か、鎧の威毛は古りにふりて糸は亂れぬ、草摺は半ばは落ち半ばは欠け、血汐は蒸して金具には綠の華を咲かせ、袖しころのあたりには太刀疵矢疵の痕あり、手にせる馬の

手綱にも紫になりしもの丶痕を殘し、鞍鐙の漆は剝げて、幾點白梅花の粘きたる如くに見へしは下地の白く露はれしなり。

此武者こそ、十年あまりの永き戰に倦みて、僅かに床かしき吾が故鄕へと引き返へしたるなり、名字は誰そ、香坂の六郞。

六郞は懷かしき彼の靜子姬の家を訪づれて、十年あまり思ひ明したる話を渠に語り、懷しがりし靜子姬の十年あまり思ひ暮したる切なき話をも聞きたしと、さては駒を早めて來たりしなり。

床しき姬の顏を見るは樂しけれどまた悲し、昔しは同じく駒の首を聯ねて武者ぶり勇ましく故鄕を出でたりし靜子の父は、空しく戰塲の露と消へて、我たゞ獨り生て還れるなれば、姬も姬の母君も、さぞや吾が鎧の袖に縋りて悲まむ、思へは我は何の面目ありて見へむやと、六郞は手綱を扣へて少時は駒の歩みを停めたりしが、やう〳〵に思ひ返へし、再び駒を早めて姬の家さして走らするに、このあたりの景色は昔に異りて人家も疎らに道行くものも見へず、尙更一株の老松挺でたるところこそ、姬の家の目標なりしに、それさへ何處へ移されけむ影もなくなりて名なしの草のみ蹄を沒せむばかりなり、

山を出で丶七代の孫に逢ひし故事はいざ知らず、十年あまりの歲月たちたるばかりなるに、眼に映つるもの皆な變り果てたるに、六郞惶惑ながらも、おちこちに駒を廻はし辛うじて、それかと思はる丶家の門に手綱を扣きぬ。

馬より下り立ちて內に入らんとすれば門は固く鎖されて推せども開かず、拳を揚げてはたゝと敲きたれども應と譍へする人の聲だになし、不思儀がりつゝ扉の隙より內を覗ふに正しく住ふ人のあらざる躰なり、轟ろく胸を撫つゝ馬を門邊に繫ぎ置き、走りて彼方なる農夫の家を訪つれて事問へば、機織り居たりしこの家の老女は、梭を投げ出ざして忙しく飛び下りつ、しけ〴〵六郎の面を打ち守りたりしが、やがて語り出すを聽けば、

* * * * * * * * * * * *

主君の馬の轡採りて軍に從ひ行きし郎黨の一個は、翌日は打死と覺悟を決め給ひし宵に召し出されて、軍の中にて萬づにつけ事缺けると多かるに、少やかなる肴に添へて一陶の酒を飮ましめ、故鄕なる可愛の妻への遺物とて、蜀江の錦の袋に包まれたる黃金作りの匕首一口を取り出で、吾が亡き後は之を我と見よ、靜子姫を人に嗤はれざるやうに敎育して好き婿がねを配らせ、家の名の落ざるやう、女ながらも是よりは大丈夫となりて我を慰めてよと吾妻に傳言せよと言ひ聽かせ、黎明に決死の士二十餘人を率ひ、潛に枚を啣むで敵陣に忍び入らむとするに、郎黨は草摺にシカと取り縋り、同年同月同日に生れずとも、同年同月同日に死せむとは軍の神かけて誓ひてし言葉なり、君を叢がる刃のうちに捨てゝ、我獨り生きて還らむとなか〳〵に死に勝るの耻辱あり、我も共に將て行き給へ、消息もて故鄕への使は誰れにても

行くべき者ありと言ひざま、大刀ひき拔きて髻弗と截りつ、決心を隻手に捧げて參らすれば、馬上の君は兜の庇より明星のやうなる眼を怒らして、不覺もの奴と叫びながら、鐵鞭一つ郎黨の肩口に與れて、風の如く馳せ行きたり。

折しも月は彼方の山の端に落ちなむとして、微白は悄々として行く二十有餘騎の鎧の上を薄う照す、死路をたどり進む人の影やう〳〵に消へ行くまで、郎黨は怨めしげに見送りしが、やがて涙を揮つて京を落ち、三日三夜ひた走りに走りて故郷にころ消息を齎らして歸る。

母君はこの消息を得たまひて、癒りし病は頓みに革まり、夫が秘藏したまへる彼の錦の袋のうちのものに刺されてその跡を追ひぬ。

姫は父君と母君とを一時に失ひて、夢のうちの夢見るやうに、うつら〳〵と日を送り居しが果ては物狂しう成り果て給ひて、何とやらん名乘り給ふ云ひ名けの婿がねが殘し給へる卯の花威の鎧の片袖を柱にかけて、その下に香を燒きて潸然と泣きに泣きつ、やがて姫も父母の後を慕ひて逝き給ひき。

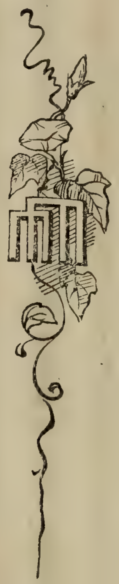
家の子も老女も何時しか影を止めず、雨風空しく關せる門を敲ひて、昔しながらの庭の櫻花のみ、散りてハ咲けると爰に五度。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

六郎はこの賤の女が物語を聽きて、さてはとばかり打ち愕かれ、甲手の上にはらりとかゝる涙をまぎらして、せめてハ床しき人の住みにし跡を訪づれて、今ま歸り來つると一言なりと吊ひて、兎に角にもすべしとて、その賤の女に案內させ、先づ破れたる垣の間より內に入り、竹椽のほとりなる扉を推せば、屋の幾年は風雨になぐられて空も見ゆべく、床は殘りなく朽ち落ちて、傾きたる柱のほとりに、焚れたる繩よりも猶ほ古りて色褪めたる一條の緒懸り、その下に一叢の卯の花咲けり、

噫、六郎が情を籠めて遺したる片袖は地に落ちて朽ちたるなり、

無言に頓首ける香坂六郎が鎧の上に、花は風なきにはら〳〵と落す露の白玉、彼の人の魂は今ま六郎が袖を扣ひて私語かむ。



○懸想文賣

第一

塵紙を揉みに揉みたるやうな稜もなき下士烏帽子、濃紫の纓色褪めたるを片やの字に頤に結ひ衣一貫模樣は年に磨れ塵に落て綻も縫はざるを寒むげに着け、裳のあたり砂埃に暈られて怪しき裾模樣を染め出てたる袴を穿ち、藁靴はきて、夕まぐれ嵐山の山路を低徊しつゝ、風颯と吹くごとに足を停め表を仰きて無心に無邪氣に一咲齒を現はして耳傾くる男ありけり。

長松十數株、路もせに枝を交へ、亭々として夕暮ながら翠は黄昏に染めぬきて古りし褐も青む許りなるその松の根の塵を拂ひ苔蒸しに蒸して蒼鱗を疊みたる上に腰打ちかけ懷より取り出すは古びたる一卷なり、さら〳〵と紐ときて微かに打ち誦ずるを聞けば

白たまか何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを

斯く打ち誦して徐ろに頭を擡ぐれバ片われ月今しも峯のあなたにかゝりて光り水の如く横さまに男の半面を滑り、くり披げし卷物の上に墨繪の松を畫き出しぬ。

サハ〳〵と松か枝動きて片われ月の彼方此方にいざようは風梢頭を渡るなり、男嬉し氣に面を上げて耳を欹つる樣子、松聲の起るや初は須磨琴をかすかに奏づるやうに、漸く高まりて谷間に落つる泉のやうに果ては浪、岸頭の百尺巖に觸れて飛び散り碎け迸るやうに、幹なる苔の甲鱗もめき〳〵と飛び動ひ

て老龍雲に嘯たらむが如し、やがて風過ぎり去て痕なく、月は松の亂髪を櫛づるか、銀の小櫛は停る梢頭の第一枝。

さても世の中に微妙じく妙なるは物の音なりけり、若し自然の音聲なかりしならば、この世ハ誠に面白からぬものなるべし、月は無言に萬象を照して美しけれど杜宇鳴きつる方も白雲に埋もれ行く夏の曉は、無言の月も人の心の奥を射て眞白なる其光さへ言ふに言はれぬ歌あるべし、花は星と咲き霞と盛り雪と落ちて無言なれど風そよ〳〵と花の唇を搖かすやうに見ゆる中には、姿見えねど優さしき長閑けき黄鳥の音に、花も語らむやうに見られて口に言はれぬ趣あり、柴垣につゝまれし草の屋の中に細々と洩るゝ爪琴の調べを聞かバ、この中に住む人の何ぼう床しき人ならむと坐ろに戀しさは益すなるべし、まして小簾垂れ籠て空焚の香風にゆらぎ、ホヽヽと笑聲の聞ゆるはその聲の主人こそ定めて世にも稀れなる美しき女房なるべしと覺ゆめれ、總てむくつけなるものゝ聲は其人も亦卑しく、妙に美くしき聲は其人も妙へに美くしきものなりかし或る瞽者の「女兒の眉目容貌の美しきは其聲何となく床しく懷しく嬉しき處あるにて知られぬ」となん云ひける、詢に左なり詢に左なりと何やら獨りぎめの哲學じみたるを獨言して、巻に落つる四ッ五ッ七ッ八ッの松葉を手もて掃ひながら、耳を澄すは不可思議なる男なり。

夜は尚淺く都の方は燈火星の如し、男は頓て塵うち掃ひて立ち上りさまに卷物まき納めて内懷に入れ静かに復た山を下り行けり。

渡月の橋を渡りさまに、こゝに暫し立ちとゞまりて欄干に衣の袖うち重ね、其上に兩腕を組み頤を又その上にのせかけて餘念なく見とれ居るは何ものを見つめ居るか、水に落つる片われ月の影は小々波に碎かれ、揉まれて、水音チョロ〳〵と石に激するは月が水に私語くか水が月に私語くか、それに耳を澄すなり、四邊茫と蒼く烟たて籠め、今までありし嵐山もやがてうすむらさきとなりゆくまゝに男手を拍ちてこゝなり此處なりと二聲三聲呼ばはりて面を仰ぎ高く笑ふ其聲の床しさに﨟だけたる若者かと見れば年二十四五なる髭むくつけき男なりけり。

第二

渡月橋の欄干にもたれかゝりしこの若者は、漣漪に碎けては流れ流れては碎くる、一片の缺月千々の趣を餘念なく打ち眺め、何やらおかしき歌を打ち誦して小夜更くるまで在りけるが、やがてそこを歩み出てゝ橋の袂より左に折れ都の大路さして行きける。

二條も過ぎて爰お池のほとり、姉が小路にぞ差しかゝりける、今は秋の初めにて夜風しめやかに細々と頬を掠めて大路も小路も狹霧の中に眠り初め、渡月の水に碎けし月はこゝまでも見送りて市塵の甍の上に息ひしが、頓て落ちて今は星のみ鮮やかなり、街は打ちしめりて犬の聲も薄ら眠むげに聞え、我が草履の音さへ、高〳〵と聞ゆるを聽きながら、細き小路一ッ二ッ三ッ四ッ打ち過ぎて嚴めしき大門の潛戸ほと〳〵と打ち叩けば、午夜の鐘のみつかれし樣な風に便りて音しぬ。

尙續けさまにはと〳〵と打ち敲くに內より戶を推して半面を見はしたるは白髮頭の門番なりけり「五太夫又しても夜遊びか、馬鹿らしい、折角死んだ噂を夢に見て面白かりしを無殘と叩き消されて仕舞た哩、もう是からは夜遊はやめにせい」と欠を半分齒の土手に嚙みつぶしていふ、いつもながら閉口なりと額のあたりをしたゝかに平手うちして低く笑ひ、つと內に入りて己が部屋に歸れば、燈火もなく螢火三ッ四ッ、爐の灰も白みぬ。

此男の父も此家に仕へ主人の卿が朝參の伴する雜式なりける、老の身にては朝早くより伴するは大儀千萬なりと仕を致せし後は、此男そをつぎ父の名さへ受けて五太夫といひける、祖先といふは司人のはしくれにて、歌も咏み、文字も書き、笛もふき、糸も奏でゝ、或時は加茂の射的にて重籐の弓を持ち、白矢負ふて金的退がさぬ文武の人なりけるが、家道漸く衰へ來りて雜式とまでなり下りける、五太夫の父はむくつけなきものなりしが、五太夫は端りなく祖先の氣象を受けしにや弓取り馬のはるとは得せざれど、物の音を痛く好みそれをこよなき樂みとなしける、學問せるとなければ歌は咏みも習はざれども、此男の心には慥かに歌の神といへるを解るにや、いみじき天地間の萬象は心に映つりて面白おかしく會得し得ふるゝか、小夜更けて嵐山の嵐を訪ひ有明の月を度る渡月の橋の袂に彳て、明星帽子の庇にまばゆく、或は嵯峨の奥に獨り歩きして誰か手に奏らるゝ爪琴の音を竊み聞きては護花の犬に吠られ、鶉野のうづらを聞きてはあたら涼しき蟲の音を露と共に蹈み碎きけるときへある都男なり、家は古るく

秘藏せる伊勢物語の寫本一卷、妻はなけれど若しあらばその妻よりも可愛からむまでに、用なき時は之を日暮の友となして打ち誦し、漫ろ歩きする時はいつも内懷にかひ入れて行きける程に、友達のものども此男の振舞を怪しがり面白がりて五太夫とは呼ばず唯伊勢の昔男となん呼ひぬ。

伊勢の昔男は斯くなむ物の音を好み樂しみ慰みて、雜式の身に在りながら心のみは優にやさしければ、主人の卿は痛たく五太夫がさかしくおかしげなるを愛で給ひて使はれけるが、此の主人の卿といへるは貧乏なるこの頃の公卿の中にも別けて貧しく、垂籠めたりし小簾も糸とくに朽ちて破れ傘の風に簸るやうに、竹一筋々々に散らげるを纔かに蜘蛛の巢もて編み綴りたるまでにいぶせく荒れ果て、緣板も雨に朽ち風に晒らされ無宿の名無し艸も好き宿見つけ顏に萠へ出るづまでにすさび、軒、屋根は更なり築土のあたりは童の犬小屋立てたる跡の竹柱傾き、雨あがりの新泥をコネて造れる怪しき土偶の骸も乾きて捨てられたる、犬を追ひ自からも走せ登りて御山の大將と言りながら稚兒の遊び戯れて、跡は土も崩れ垣も傾き内外痛く暴れ果てぬ。

父なる五太夫は萬づにつけ不性者なりしがこの五太夫は父に似やらす潔癖ありて内外の掃除に精を盡すも斯くまで荒れ果てしなればその甲斐あらじと囁きつゝ或朝箒手に取り落葉を掃ふてありける後に主人の聲して

「五太夫仕度せよ、疾く〳〵、我れ出て行かんに」。

指先の泥さへ掃ひ落さで直樣烏帽子の紐を結び直し栗ヱガ髭をざらりと撫で牛部屋に馳せ往けば牛は今何の夢見るらむ四足を藁の上に折りて哀れに鳴ける秋蚊三ッ四ッを角に宿して喚べとも起きざりける。

失念れり我れ宵の間に飼料なくなりにきと殿に請ひたりしに調せよとも宣はざりしをひたと忘れたり嘸やさぞ淡き夢の中にも飢ゑらむと立ち惑ふに、やがて牛も眼覺たりけむ長き耳を左右に動かしてウルサキ蚊を追ひ拂ひつゝ靜かに首を擡げて五大夫の顔を見るも怨めしげなり獨りキメかは知らざれど萬物の靈と極めし人間さへも金冠を頭に戴きたる人もあり靴も穿かずに霜柱立てる路をあるく人もあり哀れこの牛も生中に公卿の宅に畜はれて笏より重きもの持たとなき瘦せ男を車に載せて八葉の輪も輕ろくげに頸の皮肩のあたりの力骨さま痛まぬは氣樂ながら飼料さへ錄に與へられざるは辛きとなるべし背の童が吹きすさむ横笛に狹霧裂けて角の尖に突かば穿たむまでに低き一團の大月山里の夕暮、あるは又桃花一枝差し出てたる籬のあたり煦々たる夕陽に背を曝らして無邪氣よ眠る長閑き村の春など淡き彼か夢に入りて覺てはさもしき寢藁の上に啼くべきにと哀はれがりて五太夫叱と聲かくればのそりと徐ろに起き上りて牟と一聲啼きぬ。

蟲の音、松風、笛、琴、箏など種々の音に心耳を澄して嬉しがる五太夫この牛の啼き聲哀になりて緒を取り車のほとりに曳き行きながら鞭もて拍子取りつゝ戞々と角を打ち敲きつ。

式臺の前に車を据ゆれば、頓て立ち出てたるは主人の卿なり冠正しうは戴りたれど紺地の直衣は色とくに褪め果て、腰のあたりは東紅染めし春の曙のやうにほんのりと白うなりたるなど只おかしけれ、尚更袖口のあたりに縫れし綴糸さへ元は白かりしならむに大内山の嵐は年古る便りを見はしてか黃みて、黑みて、斷れて、亂れり、髹靴の處々漆地剝け落ちて下塗の白地見はれ出てたる樣は去年の春大庭に蹴鞠したる時飛び糊さし落花の其まゝに殘りし樣に見られたり半ば履を隱せし袴は紳の垂れし處だけ色褪めやらず、他の色褪たるは言はでも知るらむ、衣の裳を蹈みたくむを恐れて刻み足に敷臺を步み出でゝ車に乘りぬ。

衢に砂を揚け辻に犬追ふ小兒を散らして車を轢らすれば日麗さに風なぎて衣の縫目に奠め奉る千手の觀世音菩薩も娑婆の風に吹かれ給はむ好日利、おり／＼落る鞭の影は輕く鼻端をなぶつて牛の步も驚かず、角を廻れば築土續きてこゝには咋宵の雨の痕も失せで洗はれし樣なる草の花の色秋ながら流石都なり。

車はやがて、とある冠木の門に入りぬ。

門の中、築土の陰に車片寄せて牛のみ獨り淋し氣に睡むけに力なげに見へたり五太夫は獨り傍の石に腰打ちかけ足延してツクチンとして身搖ぎもせで眼を冥りて、木偶の如く橫はりしが、つと立ち上りて兩步三步。

妙なる爪琴の音、今しも絶えて歌吟口む女の聲、其聲のいみじさは、松風、鳥の聲、蟲の音、琴箏管絃、あらゆる音は物かは、

五太夫は今骨の髓より出する身顫ひ一ツ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第三

柴折戶の外に立ちて耳を欹つる五太夫頰のあたりに喜びの色を動かして我れ知らす身を寄すれば垣の根に生へし玉萩の枝を摺りて露はら〳〵と落しつゝ柴折戶は自れと開きぬ。

蹌踉つゝ纔に蹈み止まり頭を縮めしまゝ回顧けば破れたる小簾の中に彷彿として見ゆる女の俤、物の本らしきを披きつゝ誦する聲はなほ止ます朗らかに淸く、麗かに妙に、細々と渡る聲の聽くに消えなむばかりなるは蓮の絲のつゞけるやうに、淸く妙なる其聲の、如何ばかり美しく如何ばかり綺麗なる人の喉よる出るが、やがてまた朗々と聞ゆるは谷の戶出るつ鶯の春蘭に囀するやうに端なくも好事の心湧き返へりて堪へ難し。

風そよぎ小簾は紋を描きて僅かに簸りぬろれかあらぬかに見る女の俤も皺みて其聲も暫し止みたり急ぎ柴折戶の片影に身を潛めて尙ほも窺み見るに、

眉の暈れ定かには見えざれど頬のあたり眞白なるは確かに笑ひほのめく色を籠めぬ古りたれど紅さうちかけの裳、哀れ空焚の香も風に度らす、しどけなき様なるは見る人なしと思ひしならむ、さてこそ〳〵、美しき聲のみ聞きて美しき顔を見ざると口惜し、そよ吹く風め、いらぬ粋だてして小簾あはるも尚々口惜しかりと我れ知らず香爐峯の雪、香爐峯の雪と口に出づるを我れと吾が手に抑へけり。

やがて蝶一ツ、粋の使か小簾の中にひら〳〵と飛び入りぬ「あらやさしや蝶が妾の琴柱に宿る」と、獨り言してやをら身を起しつ白きかわゆき雙の指、小簾の端に現はるゝや、しなやかに其小簾を捲きはじめぬ、古りたれどうちかけの裳摸様、流れにもみぢ縫ひたるが見ゆ、小簾の捲かるゝに從ひて色褪たる帶のあたりより、しどけなき衣服の褄は大童になりて雪を欺き玉とも見つらむ脛のあたり見ゆるに、五太夫唯打ちまもりて息を凝らしぬ。

次第に胸のあたり現はれ出でぬ衣紋埒もなく寛ろぎてぼてりとして温かそうな胸の肉色衣襟の間よりクッキリ白く現はれたる、尚更衣の上よりもそこらあたりが乳房なめれと思はる迄フクリとふくだみたるけはひに五太夫の心はゆら〳〵と其懐の中に飛ひも入らなむ眼のみ圓らにして身搖ぎもせず。

今二三寸、陽炎立てる温玉の如き美人の富士額、黛したらむやうに濃き眉、涼しき眼ざし、無邪氣なる笑みの絕へす湛へらるゝ頬、早く早く見たきはこの女の顔なりその聲のいみじきに比べてさぞやさぞその顔のいみじく美しからむ。

麗らかなる日影、紅き襟を掠めてほんのりとその頤のあたりに映りたるが、今しも小簾の端に現はれぬ、雨の拳を握りつめて、爰なりと片唾飲み〳〵見つめたるに、我折れこれは、生憎や蝶めヒラ〳〵と小簾の外に飛び出でぬ。

「あな蝶々」と輕く言ひし女の聲の美しさ、うつとりとなる五太夫の後より「五太夫、五太夫、車の用意せよ」是れ正しく主人卿の聲なり。

五太夫の魂は今その雨の瞳より脫けてやさしき小簾の端に宿りぬ、この一刹那、喚ひ返されて魂ハ宿に迷ひけむ、口惜さを忍びて魚蹈む鷺の足元おかしく音を竊みて二足三足回顧さざまに見れば、捲き上げし小簾は女の手を離れサッと音して垂れ下れり美人の姿は狹霧の中の蓮花、只ぼんやりと透けて見ゆ。

* * * * * * * * * * * * * *

こゝぞ命と云ふ所を情しらずの主人に喚はれて、一番若き富くきを握りしやうに口惜しくいま〳〵しく罪もなき牛の臀に八ッ當りの鞭、牛は嘸ぞ驚きつらん。

此度は正体拜み奉らむものをと殿の主人の行くを覗ふに其後はその家にはぷつゝりと行き給はず獨り心に悶えて打ち託び居たるか思ひやう〳〵に逼り來りて黄昏時に水汲む時の間を竊み、あるは文箱持て

文遣ひの途を迂り、冠木門の蔭にたゝづみ築土の側に立ちてゆかしき人の聲音聞きたしと耳を欹て思はずも一寸一寸に時を移してその歸るさには何時も胸の中にて詫び草の言葉に埒なき思案を費すこそおかしけれ。

五太夫が戀人は、只影もなきやさしき聲なり聲の外には懷しと思ふものはなきあり變なるこの五太夫が獨りキメの理窟にて凡そ世の中に聲ほど妙なるものはあらじ聲あるが故に万有盡く活きて麗はし尚更美しきものは美しき聲をなし美しき聲は美しきものより生ると之のみ思ひキハメてはかの小簾の内より和歌打ち誦したる女子の聲美しかりしかばその顏のいかに優美にその心まで如何に優しからむと思ひつめし一念は中々に拂ふに由なく鉄面皮こそ戀するものゝ奥義なりとの諺に洩れすいつしか其家の下士輩と時候の挨拶、暑し寒むしの辭儀に華さきて冗談口を叩き合ひ笑ひ笑はれつる仲とはなりぬ。

これを棧にして近づかむとの野心增長して今は一分の額一ッも取らして我がおかしき望をかなえてと合掌して頼まむハ流石に髭面さげし男のすべきわざならず、尚更ら美しき聲の主人を見むとのみ思ひ焦るゝも及はぬ事とは知りながら愚痴に驅られて心の駒は停まらす雪より白く玉より美しき腕を吾か頸にからみつけて、白魚植ゑたるやうな指の先きに痛たからぬやうに我が頰のあたりをツ子られて、あいたしこと眼を細くし涎すゝれば何の是れハ夢であつたか。夜な〳〵斯る夢のみ見ぬ。

れかしき五太夫の振舞いつしか主人の殿の耳に入りていきまき罵られたる末ハ可愛ゆき牛にも分れ門

番の爺よりも齒を洩るゝ意見を面白からぬ馬のはなむけとして、難有受納しつゝ此邸を追ひ拂はれける、五太夫さま〴〵打ち詫ぶれどいかなと主の怒靜まらず吝き仲人の長刀草履をあたら踏きらせしのみにて埒あかず五太夫今はと我を折つて三條小路の裏長屋に賃居して世に在るやなしやまでにひそみ暮せり。

一人鰥の氣樂され米なし炭なし薪なしと ヤキ〳〵せがむものなければ湯腹も一時とシタヽカに呑み肱を曲てその儘其處にごろりと眼を瞑れバ何時しか食前方丈の席に連なり舌鼓叩き打ち笑みて、やをら筋を下さむとするを犬の遠吠にハカなく破れ、空しき腹を撫で摩りうんどん蕎麥きりの賣聲懐かしく夜を明すとさへあれど何にはさて只何となくおかしきは貧乏世帯を張れる男鰥なり。

上衣いつしか脱げて米と化け袴もとくに飛び去りて竈の下の細き烟とは消えぬ、調度衣服次第〳〵になくなりて今ハ破れ衣一貫、底なしの藁靴、形崩れし烏帽子のみ、穢れ汗じみたる絹を洗ハんには、そが乾かんまで膝を抱きて閉ぢ籠め居るより詮方なく、まどろむ内ょ雨降り出でゝハ一夜を嚏に明すなどれかしきこともあるなるべし。

追々年の暮に近きたり、空ッ風衢に號びて履の音も寒天に冴ゆる月に答へ、行き交ふ人々の人相も變る師走の空になりぬ五太夫は日々に賴み來る人の消息など書きて僅かの代を得、やう〳〵に日を送りしか、故癖尙ほ止ます隙を竊みては秘藏せる伊勢物語を懷にしてそこらあたりを彷徨ひ歩き嵐山の松風に耳を澄まし嵯峨、小室の生垣の外に琴、笛、の音など聞き獨り之を樂みに夜更けて歸る

第四

或夜ふと嵯峨野に行き例の如くあてもなく音を尋ね明かして彷徨ひしが今宵は如何にしてけむ一ッだに聞へす、囁きつゝ立ち還らむとするにかたへの柴垣の中なる庵に琴の音す、其いみじさ今まで聞きしところに勝りて妙なり。

この宵は月朧ろにほふて更もいと闌たり里の寂しさは薄冥を縫ふて飛ぶ五位鷺の聲よりさび初め、空を過ぎつてゴウと音する風のあとを目送れば空林のあなたに當て波濤の聲をなしぬ。

斯くまでに淋しき里のそこらあたりを更闌くるまで彷徨ひありきたる五太夫吾影さへありやなしや、まして提灯の星も通はす犬も吠へざる靜閑區、心耳に澄み渡る琴の音を生垣のあなたに聞て雀躍の跫音をぬすみ小夜嵐の中に只獨り立ち盡したる五大夫、其魄魂は凍りつらん。

主人の殿に追はれたる後は疎放の伊勢の昔男も飢へたる時には粟粥の工夫に世の味氣なきを喞ち寒むき時には破れ衣一枚の詮義をぜねはならずされど其苦もいつしか忘れ、物の音を漁りて漫歩する故体に返へり、うか〳〵と耳の保養に幾日かを經る程に復も眉に火のつきたらむやうに周章しく。それ米よ。衣よ薪よ。

斯くして伊勢の昔男は氣樂なる雜式なりし時とは異り好事の心も幾度か妨けられ只其苦しく辛き時のみにハ苦しき辛き思を好きなもの丶音に打ち消さんとて漫歩き、微妙き物の音に饑も忘れ凍も忘れぬ五

太夫の心の糧は物の音にて若し之を得たらむには天厨に入りて珍羞を嘗むるよりもこよなく嬉しがりける。

今しも此琴の音を聽きて床しさに堪へやらす、琴の音絶へて後も暫しは去りもやらす、やがてざんざと吹く松風の中に、姿は見へす。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

月ある夜は流石に風雅の閑靜區、心まで冴へむばかりなり、月なく風なき夜に扉を洩る燈灯の影優さしき爪琴の音に搖らくは尚更床しく幾夜か獨り往き獨り還りて耳を澄しけるが年やう／＼に逼り來りて大晦日の前二日ばかりに成ける、鬼といふ恐ろしきもの日毎夜毎ゝ門口に佇みて口々にはたりの錢乞ふ聲のげふ／＼しく肉を啖はむ骨をも咬まんとひしめき猛るに是れはかなはじと一時逃の辭儀に言ひ延してはたりの書を披き見るに好きにあらねど靜けき宵に誰やらの謳を聽て一陶二陶と傾けし酒の代も眼玉をむき出して驚かるゝまでの銀となり淡粥煮たる釜の底の些かに黎黑くなつたりと思ふ間に薪炭は是も亦仰山の嵩となりぬるにハタと呆れて眉間に逼りし此難義を如何に逃れんと悶え苦しむも頭に鉢卷するのみにて名案も出てざりける。

されば好きな嵯峨、嵐山小室あたりの漫歩も氣浮ばざれば足も向はずうつ／＼と薄き衾打ち被ぎて臥

しゐしが今日大晦日の夕暮となれば一ト際胸轟かれて死罪と極まりし囚人が今ぞ三尺の氷ひやりと頸に落ちやせむと魂消ゆる時の樣に心も身をもあらぬ心地して斯るときこそ凡人は死ぬものなれ、氣を大きく持つべしと自から勵まして氣を晴さバやと、恐しきもの丶來ぬ間に家を脫け出ていつも聽き慕れし嵯峨のあたりに心なき足も自然と運び、頓てそこらあたりに耳を欹つれば床しき音も今日のみは聞へざりける、凄き星の光も搖らがむまで寒風劇しく衣の破綻より吹き入りて斬らる丶許りなるも吾家ながら足のび〳〵と延して眠ることもならす世間知らすの男女どもか酒のみてげう〳〵しく笑ひさゞめき、うめき聲してれかしき歌を謳ひの丶しるを聞くにつけ結ぼれし心愈やか上に固まつて球の如くほの〴〵と春立ち初むる曙の色晴やかゝ若水汲む車井の音も何とのう長閑に、一番二番三番の鷄の聲さへ勇ましく爰新玉の年となる夜明け方、町並に連ね懸たる提灯の火影五六七八と次第に消え行くを怨めしげに眺めつ丶音もなく我家の扉を引き明け鐵のやうに凍ゐたる吾か身躰を昆布のやうに垢つきて領もヒヤリとする衾に包みやれ〳〵、先づ〳〵、生死の關を斬り脫けて一年生き延びたりと獨り言して橫になりし後は畏ろしき夢を見つらむ齒ぎしりの音す、初夢なるに是れは又。

心ばかりの松飾を門にしたれど之れとても年の始より餠も食へられす屠蘇も祝ハれす三百六十五日ブツ通しの淡粥、是れさへ煮るにも薪なければ松も折られて焚かれたらむ五太夫今ハ絕体絕命、伊勢もの語の一巻を命にかけて餓死せむは愚も愚も大呆痴なり何がな世渡りの道をつけて男一疋大道を濶歩に歩

みたし、されども身につけし業とてあらず、いざさらば、吾か聲音の好きを資本に懸想文賣して見んものを。

嵯峨のあたりの床しの琴の音の主人もなつかし、其床しき人の顏を見んにも懸想文賣のさもしき姿にては成るまじ思ひ絶たむかなど埒なき事を考へて又も空しく日を送るに爰餓死底の覺悟なくてはと或夜意を決し其翌日は支度せむと、辛きを忍びて衣一貫をひき剝ぎそれを資本に萬の調度などをとゝのへ、さて終日家に蟄居して夜に入ればやう〳〵に烏帽子つけ袴はき、つと家を立ち出でたりしが繁華の辻にハ臆して聲も出でず、同輩の者どもが聲おかしげに文賣るを聞くにつけ、我れもと思へど往き來ふ男女の眼は正しく訝しげに吾顏吾姿のおかしけなるを笑ふやうな心地して堪へやらす、文を懷にかひ入れつゝ一散に淋しき街の方に逃げ行き、おちこちを打ち眺めて人なきを見定め朗々と高く呼ぶに我ながらうの節のつたなきに失笑しつゝ復たも繰り返すに辻のこなたより足音高く來かゝる人のあるにおじて、頭を俯げつ、歌口吟む眞似して空ら嘯きぬ。

やう〳〵節に慣れて我ながら面白く砂揚くる風に吹かせては面皮次第に厚くなり行き、拍子づきける程に若き女房娘子等は其聲其姿のおかしくおどけたるを嬉しがり面白がりて買ひける程に五太夫得意がりける。

さても忘れられぬハ嵯峨の床しき琴の音なり如何にして一目なりとも其床しき音の主人が顏を見んと

六尺ゆたかの髭男心を碎きつく〴〵と或夜考へしが何にやら獨りニコ〳〵と墨すり流し思ひのたけを短き懸想文に書きしるし紅さして印をつけ、他しの人にまぎれじと工夫を凝らし、さて其翌日は衢に出でゝ浮かるゝ節も口の先き黄昏近きに嵯峨のほとりにつきぬ。

今更に心耻かしくそこらわたりを喚ひあるく聲も常よりは高からずやがて例の家の門近くなるまゝに心何となう躍りて歩遲きを勇み勵まして爰ぞと一ト際節面白く「懸想文」と呼び立てたるに柴折戸の蔭より「暫し待ちや文賣り」とやさしき聲す、此の聲電のやうに耳を射てうつとりと停まればやさしげに柴折戸開けて半面を現わしたるは顏白く臼のやうに肥へたる女なり「文二ッ賜はれや、一ッは妾、一ッは御主人樣の分なり、いざ二ッ」と掌の上に錢のせて差し出すに五太夫にこやかに「承りぬ、いざ之れを」と例の文を取り出しこれは主人の女房さま、忘れ給ふな其紅さしたるが女房さまの分なり、念入れて覺ゑたまへ、是れは其方の分なり、よしかよしか間違ひ給ふな、さらば謳ひ祝ほき申さんとて

青柳の糸なつかしみ夢うつゝ戀わびてのみ住の江のきしに生てふ忘れ草もゆかしく

侍り、淺香の沼の淺からぬこゝろのほとを春風の便りにつけて知らせ參らせたさ…………

と歌ひつゝ柴折戸より彼方を覗へば燈火に映る人の影障子にさらりと衣の觸る聲。

やがて柴折戸は閉じられぬ五太夫しばし佇みて耳を欹くるに笑ひさゞめく聲も聞へす、只獨り門に近き部屋の中にて忍ひ笑ひする女の聲す。

* * * * * * * * * * * * * * *

明る夜月を踏みて忍び來れバ柴折戸とくに開けて人待ち顏なる女袖もて半面を藏しつゝ佇めり、いそ〳〵と五太夫寄り添へは物をも言はす手をしつかりと握りて跫音を竊みつゝ家に誘ひ入れぬ、夢路をたどる心地して燈火の影に身を竊め背きて座する女の顏差し覗けば南無三、是れは、昨宵のはした女なりける「主人の女房は如何に」「後生參りに連珠つまぐりて今日は都へと寺參り、今宵はむこがねの家に泊り給はむくつろぎ、給へ」「あな是れハ」柴折戸蹴破て五太夫逃け出しける。

（完）

◉餓

第一

秋なれど日は烈しく、北に向ひ尾を啣むで飛ぶ赤蜻蛉の影明瞭と溝板に落つる殘むの暑堪へ難きに、見るも寒むげなる一個の男、情けある誰が女房をせびつて拜むで貰ひしか身に纒ひしは四ツ身の單衣、肩縫の痕鮮やかに、それさへ八ツ口肩のあたりまで綻び裂けて鮫膚に肋骨殘らす現はれ、垢つき泥塗れて鷄の脚のやうに鱗の生へし兩脚踵のみ白みたり、影薄くして歩むに力なく悄然と跫音なし。

名にし負ふ爰は芝の新網町とて聞へたる貧民窟なり九尺二間は天下の法度なるにそれはまだよし五尺の身体を屈まざれば鴨居に額うちつけむまでに低き家の建て連ねたる、是ぞ廣き世界を喰ひつめて天に跼し地に蹐む五尺に足らぬ意地なし男が露を凌く處と知られぬ。間口一間又は三尺奥行之に準じて狹き田樂長屋、烈日窓もなき一棟の表裏を射て夏は宛ら灸らるゝか如く、雪路次を埋む冬の夜は犬を抱て鞠のやうに臥ぬる頭と足の先きさへ冷たき花の積るに任す、黄昏ならざるに常に薄暗く、羶腥き風は何處ともなくひやり〳〵と頰を舐るやうなり、曉は車井に走る釣瓶繩の音なくて夜は明け、夕にはたなびき白む炊煙の影なくて日は暮れやがて陰々濛々の中に犬の聲さへ細うして哀れげに、他に音なし。

さても何ぼう命の惜しきものかな、斯るさもしき境界に沈みたりとて六尺の丈夫何をなすともせす、いで我が身につきし資本なくとも腕、脛、は鐵もて鑄たらむ如き男兒、熱沙に面を吹かせ烈雪に踵を嚙

ませ己が稟けたる力を資本に車挽くと少しいくじなけれど是もよし、たゞ枯葉につきし蟬殼のやうに微風にだに周章しくひよろ〳〵と倒れむばかり、當にもならぬ人の情に翌日も知れざる三寸の息を續き、陰濕に生ゆる飜れ種子の瓜のやうに花も實もなく枯れ果てゝやがて淺き墓のうちに埋もれ、名なし草の翠肥やせし後までも無緣施餓鬼の棚の上に供物を爭ひ、或は又死に後れたる我が仲間がやゞとの事で涙の出でなむ錢を集めて建て呉れし一本の卒塔婆さへ、若草の萌へては枯るゝ二三年の間には脆くも霜に朽ち風に敲かれ雨に曝され、つゥばなつばなと優しき歌うたふて嫁菜つむ兒女の賤こゝろなき草履に蹈み折られてさても敢果なきものなり。

窶にやつれたる此男のさまを見れば親の代よりは貧しきものにはあらざるべし、その顏色の何となく一種言れぬ愁あるを見ても此男初めより賤しきものにはあらざるべし、この町に並み居る乞食兒等の此世にこよなき樂はまぐれ當りに忌中簾を洩るゝ線香の匂を嗅ぎつけて錢一緡を貰ふか又は法事の家の門に味噌する擂木の音を聞きつけて箸に暴されたる名も知れぬ料理を貰ひ得て久しぶりに濁酒沽ひ、腹を身の外となして飽まで食ひあるは、蛋とり眼して往來のおとしものに氣を配り万事賴みなき世のそら頼みとして暮すなればかゝるさもしき身の上もさまで心に關せざる如く笑ひさゝめき、罵るなり、さては皐月ならぬに雨は家毎に降りそゝぐと思ひしが今はその涙も乾きたらむか、されど此男は正しく斯る白徒にはあらざると明なり。

哀れこの男何のなすともなく、あるかなしかに朝三暮四の營に魂魄を糜らしてやう〳〵にたどる老の坂、やがてがつくりと疲れ果てし魂魄、苧売のやうに枯れすけたる身躰を離れむよりは、影を梁下に垂るゝさもしき鬼とならざるも聲を橋邊に飛ばす愚痴ならすともせめては男一疋唇嚙むで銹び果てし無柄の庖丁把て背につく腹を抓き裂き眼を瞑つて一ッ息に、是れは好かるべし、又は穀を絶ち水を飲ます音もなく枯れ死する、是れは少し坊主臭けれど是もよかるべし、斯くでそれかしけれおもしろけれ心地よければ氣味よけれ、是れさへ得せでゐるかなしかに其日を送りつ、何處で拾ひきしか一枚の乾魚いつしか鼠まれて口惜がるを家根裏の猫に嗤はれ、影淡くやせさらばいし後姿、穢れ破れし裳の地を曳ひたるを嚙へられて犬にさへ蔑づられたる、是れは誠にかなしけれ、落魄れたれと男は男、斯る境界に甘ずる理由なからずや。

赤兒の啼く聲す。男沈みたる眼を亂髪の間に光らせて回顧ざまに二歩三歩、後に返へり耳を澄すに、やがて啼きやみたり、折しも朽ち果てし溝板を周章しく踏み、音たてゝ走せ來る小兒、叱と手眞似して靜かにと制すれば小兒は踏み停まりて芋のしり尾を口一杯に含みながら瞼のあたりに指をさして赤んべいと惡まれ口して愈々尻切れ草履に溝板を蹈鳴らして行きぬ、啼きやみたる赤兒この音に驚きて又たいたく啼き出したり、おのれ小兒まで我を阿呆と見くびるかと追ひかけむとしたるを抑へて、きしむ雨戸を明けて入りつゝ、寢こかして食漁らんとせしに無心の赤兒薦の間より這ひ出てゝそを踏みたくり龜の

子を倒に放したる樣して手足空を蹴て啼くをかい抱き、よい兒ぞよい兒ぞ、坊に旨ひものたべさする程に少しの間ねんねして吳れと言ひつゝ繿縷をまくれば哀れ兩足は鹿の子絞り膝に上せながら雙手を伸べて隅より把り出したるは缺けたる片口なり。中にあるもの一口飮みて泣く赤子の口に口移しにしぬ、赤兒は啼かすなりぬ、斯く二口三口口移しゝてやりしは淡き粥にやわらむ溫き母の乳房を瞼にすりつけ甘露の乳の味さへ知らすさもしきこの怪しの粥に可愛ゆき舌を敲ひて父の顏を上眼に眺め淋しき笑を頰の笑渦に見はしたる其いとしさに男眼を瞑ればはらりとかゝる一ト雫の雨。

うと〳〵と眠る吾が兒の顏をつく〴〵と眺めて、やがて靜かに下に置き繿縷を音せぬやうに打ち掃つて二ッ三ッ四ッ五ッ母指の爪に罪なき殺生して打ちかけ、繩とり出でゝ赤兒のつけひもに結つけ、その端を動かぬものに結ひつけたるは眼さめて啼きたりとも土間に落ちて怪俄させむを氣づかひてか、心を鬼にしてつと立ち起り雨戶をひき立つるにも音なくすご〳〵として出て行て復も二步三步戾りつ漸くにして去りぬ。

夕暮になりぬ、終日町を漁り廻るこの町の貧民は今しも群をなして還り來る幾團のもの、骨立ち髮亂れ面の色は日蔭唐瓜のうらなりの樣に蒼白き男もあれば、或は又面色黃みて沈める上に瞼のあたり薄靑にて一刷したるやうに、睫毛とくに脫けたる後の紅く糜れたる、そこに一ト筋眼滓の乾きたる女、あるは又額のあたりに日角のごときもの三ッ四ッ、熟したる杏のやうになつて眉なく面の眞中に母指の這入

らん大穴一ッ、薄毛ぼーッと頭に生へ、のッぺりとしたる癩病者車を手つから捲きて細き道次口にすつくと立ちて歩み來れる、其あとよりは犬の糞をも舐むバかり二重になつて腰屈りたる其猫背にぼんぼこ三味線を結ひつけ左の拳を腰に廻はし右の手に杖つきて足には冷飯草履と麻裏とを片々づゝ穿きながら二歩三歩行くかと見れバ水飲む鷄の眞似して腰をのし天を仰ひて又とぼ〳〵と行く老婆の後より火事場よりの還りならむ髪はぼう〳〵と耳を隱くし領に入り眼白く光つてこけたる頬を肥らかすは物食ふならむ曲木の剝れて底破れたる味噌漉の中に針いくつか入れたるを片手に持ち尙己か丈よりも長き燒木杭を抱へつ灰に吹かれ炭に塗れたる小兒五六人、尙其あとよりは田螺のやうな眼をむき出し、見へざるに舌の根見ゆるまでに口を開きて橫さまに空を眺め凄き笑を片頰に洩らして何にやら解らぬ獨語して杖をわだに打ち揮り來る按摩、尙其後より還り來るは大凡十六七人、赤兒を瓢のやうに背にくゝりつけたる、肌に負ふて片肌脫けかけたる、歩まるべき兒は左と右に手をひきて、來たる女ども各口さかしく罵り合ひつ、手に一つの折詰といくらかの錢を握りたり、先なる一個は我より先に行く例の按摩を喚ひとめて、やい鼻市、之を見なせいと折を鼻のさきに押しつくれば、やあ是れは大層旨ひ香かしますな。握れる手を開けバ油手なれば煙は錢より立つをちやら〳〵と音さすれば豪氣じやの、何處ぞか立派の葬式でもありましたか、あつたともあつたとも。後れて來るものどもは之を見て口々に羨ましがりける。まことに哀れなり。

後より來かゝりしは例の男なり八ッ口ある袂のうちに何にやらかい入れたるは情けある人の惠なるらむ、刻み足して路次を出れば吾が兒の啼聲も聞へず。まだ眼覺めずに眠入り居るか、さては啼て、啼て、啼き明して精氣つかれて、聲も立て得すなり居るかと。逸早く歩を運べは生憎、さきの男女など口々に巳が功名話して、誰れ憚らず狹き路次に立ちはだかりたり、身を斜にして腰低う、間を通れば一人の女、其後影を指さして齒ぐきを見はし、は、は、は、アノ青瓢簞め、青痰眉間に吹きかけられしときのをかしさ、小氣味が好かつた、あれ〳〵溝板踏み外した樣を見ろ、青瓢簞め。

第二

小石交りの大地を喰ひつきさうな下駄、指に蝮をこしらへて忙がし相に小桶抱へて粉米を買ふて行く女房、目の敗れたる笊の中に一山八厘の量炭、吹き竹の一息に灰となつて飛ぶ消炭よりもタワヒなきを盛りたるが底より洩れて地に落つるを拾ひながら來る兒童、三尾一皿四十五文の炙鰯を指の先ヾ打ち返へして少しにても大きさうなるを撰り採りては澁團扇持てる男に叱られながらも僅か五文の價を直きらむためヾ口を酸くし、漬物屋の店頭に牛の尻尾ほどの澤庵の價を論じ、鹽とも泥とも分らざるものに漬けたる一把三厘の漬菜、生づきは旨からずと故に怪し臭あるを求むるなど、さとれさもしき暮する此の人々も埒なきものに哀れある伊達、或は金杉の夜店を漁りて鮭の切り出し、芋屑、大根葉、牛の碎屑、ふすまの粉、乾魚の折れ屑、孔のある幾個の錢に求め歸り、今宵の膳に上るを見れば蕎麥粉を湯に解き

鹽一摘入れたる吸物、芋屑に大根葉を刻み込みたる雜炊、鮭の切り出し炙りたる燒魚、或は又粉米の淡粥、それをシャブリ、舐め、食ひ、飲み、あるかなきかに淋しき命を續ぐなり、一段下つては腹も一時と錢の用らぬ水をしたゝかに飲みて是を今宵の命とあきらめ、正宗の薦一枚に身躰を柏餅にして殘むの酒の香淋しき夜半の夢を驚かし、燈火なき眞黑の家の屋根に食つく樣な一片の半月、冷たき光は五臟六腑に浸み渡りさもしき思の消へ〴〵なる、さても哀れなるものかな。

この夕暮の賑ハしさはまだ初夜ならざるに野分の吹きし後のやうに忽ちに寂しく、吾妻の橋邊、袖ケ浦のあたりにハ床几の上に捨てられし團扇の面にちら〳〵と雫落ちなむ月の影も、只うすくらき光もて包みたるこの町の眺望いと悽し。

疊なく床の上に薦布きて居並ふ、一團の人、こけし頬、秀でし顴、凹みし眼、袒ぎし膚は肋骨出で鳩尾陷ちて肚皮は脊骨にひたと粘きならむやうに、腕細く肱と手首のみ太やかなる、數個の男女皆一樣なり、雨氣摸樣の月は屋根より洩れて個々の面容鬼の如し、中に怪しきものを圍みて打ち食ふ樣を見れば、箸もたす五本の指に攫みては食ひ食ひてはその指を舐りつゝ我勝ちに奪ふ有樣恐ろし畏はし。

木乃伊のやうに黑く痩せたる男歛唇の間より白き舌を出して舐すりながらいふ。この飯は大層コツく出來て居るで泥棃たと奴は吝い爹と見へるせ、久しぶりで膏がのつた、脊の千手觀音さまも驚くだろう、一個貰て懷へしつかり入れ、も一つシメて吳うと出す手を拂て人足の畜生め、畏い眼玉をムキ出して、

襤褸の破綻から鈍間の折が顏を出したを見つけて、剛つく張めと厭といふ程肩先を突き飛され、貝殼骨を駒留石にぶつゝけて、見ろこれを、紫色の疵痕を見ろ、手前はどうして二個しめたといひなから口一杯に投こみしろの手もて、ばり〳〵と爪音さするは脛に吹き出し怪しの疥瘡を掻くにやあらむ、散らげし髮は棕梠の毛のやうに、垂し下より一眼をきらつかせたる女。疾くより一ッ貰ふたが、どうそや御情、背の餓鬼ゞ下されと十年越しの鍛錬に甘露の飜れる聲をもて、やす〳〵二ッしめたのよ、此頃の葬禮は旗を立てたり造花を練り出したり儀式ばかり立派にしても頭の圓い生臭坊主の財布を肥して我等は少しも沾はネー。思へば乞兒に成りたてには三日しては止められぬと思ふたが大平樂の昔は夢よ、今日の葬式ハ剛氣なうちさ、後は只物を嚙むの音ばかり。

眞青なる面の額に杏のやうな腫れ物一ッ、眉毛脫け落ちて額より頰にかけて黃みたる怪しき汁の流れたる男、はたと膝を敲き嗄聲して。そう云へバ此間あすこにひよろりと舞込んだ男、それ〳〵お時婆々のごねたあすこの家へ舞ひ込むだ青瓢箪め、今日の葬式に後れ馳にひよろ〳〵と踉めきながらやつてきて、御情けに一ッと人足の後より半纏の袖をとれバ人足手に殘る二個の折を與へ殘り物には福があるよと手渡したすると怪しいあの青瓢箪め、何と思つたか不思儀の顏つきして受けながら人足を見上ると其まゝ折を空に擲げつけて逃ける後より鷲攫みに青痰眉間に吹きかれられた。

聽入る一座の怪物。中にも恐ろしきは。上唇とろりと溶けて大黑齒二枚睨むが如く突き出したる女房

の笑ひ顔なり、その口の邊りに、斑々たる韓紅あるは、魚の腸を食ひしならん、腥風吹きて人皆凄く笑ひぬ。

嗚呼哀れ。稚兒の眠れる間を竊み食漁らんする彼の男、己れ無禮漢畜生めと韋陀天走りに追ひかけられすくむ所を細首攫めば衣領裂けて瘦さらばいし膚現はれ、艦褸のみ手に殘るをうちつけて猿臂伸すや領かみ攫み、己れ餓鬼めと男の面を我が鼻の先にすりつくれば、兩手に顏をかくしながら、許せ許せといふも耳に入れず、かつと吹きかけし青痰一ッ、眉間に散りぬ、哀れ昔しなれば耻辱の極印、今は拭ふに手巾持たで、乾くに任す意地のなさ、髭面さげし男一匹も落魄果てゝハさらばいし腕に宿る力瘤なし。

* * * * * * * * * * * * * * * *

一更二更と闌け渡り辻占豆賣る聲もとまり按摩の笛の音高うなるにつれて佛前の木魚の音細々と消ては又周章しく音するは昨夜の通夜今日の葬式に疲れて念佛いふ女兒の我れ知らず舟漕ぐなり白木の位牌豆のやうな燈火にうつり、土器のうちにさしたる幾本の線香は半ば白き灰となりて烟眞直に立ち昇りてさながら絹糸を糾せしやうに先は亂れぬ、陰々たる午夜の鐘いつもよりは凄くて呻る樣に音づるゝ中に雨を呼むて啼く五位鷺の聲さへ疲れたる守夜の女兒の淡き夢を驚かし周章て線香を添へ燈心をかきた

て、氣味の惡さに二人三人の人を喚ひ覺して。大層淋しうなりました佛樣は陽氣な事が御好きなればチト談話でもなされませ、オヤ鐵瓶の湯が冷却ましたと獨り心得顔にいそ〳〵と打ち働き勝手知れたる臺所さへ手燭して灰ふるひに消炭盛りつ上草履を隻足にひつかけしまゝかけ來り火を吹き茶を苦く煎じて。サア眠氣覺しに苦いのを喫つて恐くない談話をなされませと泣き腫した眼の中に一時愛嬌を浮ぶるは一人の淋さを分けむためなるべし、疲れたる眼を摩りて頭を擡げたる男女、やがて茶媒の菓子を食みながら語り出す老人一個、話は次第に哀を添へて。さても此家の御孃さまも飛むだことで、宛で夢のやうで御座ります、御可哀そうに戀に氣も魂も揉みつきて、あの清助めを慕ひかなしみ、因果は可愛の赤兒に宿りて今頃は落魄れの清助の懷に泣てゐろう。いとしきは御花さまなり我か兒なからも添へ乳する間は三日五日、鬼のやうな、イヤナニ親父の手に、やらじと抱きしむるをもぎ取られて、不義の小兒は吾が兒ならずと可愛や無心に早蕨の手を爹々が頬にあつるをあの清助に投け與へたるは律氣一遍の父親としてはさるとながら、いとしきは御花さまなり、可愛いき吾が兒の顔見たしと袂を嚙で戀しがりしが、終にさもしき心になりすまして小夜の眠覺めに枕を抱きしめてオヽ坊や、乳のみや、笑みて見やと、あられもなき言を口走り、又もよゝとなきて眼を天眼といふにして、オヽ二重頤の美しいのと眼の涼しさは清助殿によう肖て居ること、笑渦の愛らしいと、乳のましよと眼にうつる幻影に氣をつからし魂をへらして、果はふら〳〵と病の床につき狂ひ〳〵て一年あまり折々影の如く見ゆるいとし兒に凄く

笑みて………是れはしたり拙老としたとが大分話は淋しうなつた、何はさて木魚叩ひて賑やかに、念佛申さう。折しも乳を離れし小犬の啼聲、是れも哀れ彼も哀れ、

第　三

晝の暑にひきかへて、西より來る秋の色は立て籠むる夜の狹霧に白み初め、單衣飛白の上に散りかゝる月の雫さへ氣味惡きまでに冷たく、その圓なる影も半は凄みて照り渡れり。黑塀の中より立ちたる蒼梧の一葉兩葉、哀れ秋に先ちて夜半の木魚の音に飛へぞ、また雨を洩さゞるその木蔭に人一個悄然と佇むさまなり。犬に吠へられむ警夜の人に叱られむと息を屛し影を竊みて無言なる、後くらきとある者が家の樣子に耳を澄すと見へたり。

この怪しの人の懷より稚兒の啼く聲せり、慌てゝ搖り〳〵かい撫でて木蔭を歩み出で落ちなむ涙を隻手に受けつゝ天を仰きて吹きかくる息も眞白なり、穢ならしき手拭もて頰冠したるその蔭より眼の窩みたるが凄く光り、尙更その手拭の破れよりこゝかしこに髮の毛の洩れ出でぬ、襤褸にまとひて吾が懷にかい入れたる稚兒は夜風に吹かれて可愛の夢の破れしならむ忽ち餓を感したるか少さき掌にて父が胸のあたりを撫で廻はして啼き出し又も指を擧けて澄み渡る月を仰き見ながら何やら解らぬ舌を動かして哀れげに笑渦を頰に現はし又もベソかいて啼き出さむとするを、男、啼き出されてはたまらじと手もて赤兒の口を抑ゆればその指をちう〳〵と音させつゝ温かき唇に舐づり柔らかき舌にからみて、やがて又

啼き出しぬ、怪しの男堪へきれず逸早に驅け出して大路の方に走り行きぬ、流石に都の大路とて四六時中人の往き來の絶ゆることなければ左まで人目に怪まるゝとなしと武骨なる寢ン子兒歌に兎角して稚兒の啼を留め、搖り撫でつ、靜かに春風の息すや〳〵と胸毛を吹くに心始めて落つくや、端りなくも紛れし愁憂一時に湧き出たり。

哀しさは人の身の上、脆きは人の命なり、我をたゞ乞食兒と見て嘆吹きかけし車夫の力造夜半に響きしあの木魚の音とを思ひ合すれは病氣と聞へしあのお花さまが無常の風に散り給ひしこと必定なり、アゝ我、元の身の上なりせば羽織袴いかめしう葬禮の前にたちて万づの世話すべき身でありながら、腐れたり我が魂魄、溶けたり我が身体、思ひ出す每齒の根も搖かむばかりなり、去年の三月雛祭の夕、嗜さる酒の毒物我を呑みて、甞かしき一封水莖の跡に思ひ亂れ心ちぎれ、仇し情に身を爛らしてうつら〳〵〳〵、さッても、さッても、天魔我を見くびッてか父も母も恐ろしき病に失せて、遺言さへ殘し玉はず、今まで行き來繁かりし人も鼻を掩ふて吾が家には入らさりけるに、やがて又その年の夏の最中、或夜紅き風吹ひて我が身と蓄猫のみの外は灰となつて空に飛びける、二度三度の凶事打ち續きたるに、淺ましや人の心は秋の空の頼みなきもの、追從輕薄の薄ペラの唇叩き、お爲めごかしとは知ざりし者共あるかないかの物を掠めて輕き尻に得手の帆をかけ、得たり畏こしと逃げ失せたるこそ、是れは固より我が愚痴なれば詮方なけれど今まで温顏にこやかなりしあの伊勢屋の伯父、お花さまと譯あるとを知られたり

しが、いつも店頭より追ひ還へして。留守じや留守じや、清助には用はないぞと。主の眞似する白雲頭の丁稚小僧が尖口してけんもほろゝの挨拶、すご〳〵と立ち戻る後より廉暖を洩る笑聲、むら〳〵として回顧ば暖廉の蔭より小僧二人三人冷笑の眼を見はして指さしける面の憎さ、いとしきお花さまには逢ひたけれでも未練なりと詈られむは流石に口惜し、逢たからじ、親戚は彼處一人なり、せめて我が父母のうち一方なりと生存へ居られ玉ひしならむには、斯くまで我を毛蟲の如く嫌ひ蝮蛇の如くこわがり鬼の如く恐ろしがり玉ふまじと無念の切齒して我れ知らず立ち還へらむと端りなくも見上けし時、いとしきお花さま二階の欄干に悄然と立ちて、あの蒼梧の葉越しに我を見て、わざとらしき笑少しばかりしたる後はさめ〴〵と袖に顏をかくし、心の丈を明さむにも詮なき風情眼にて胸の思を通はさむにも是れのみは人眼を耻ぢて只恍然と立てる耳元に、盲奴め退けと賤しき車夫にまでだしぬけに一喝されて踉跟ながらもいとしき人に此狀を見られじと故と鷹揚に踏み停まりて見上ぐるに、アレと一聲驚くれ花さまの領つかみて、うちにひき入れしは正しく留守と云ひし伯父あり、玻璃障子を越して見ゆる無道の折檻、奴と固むる拳宙を飛むまでなるをやう〳〵に撫りなだめてすご〳〵還るとありしが、さッても、さッても、落魄てこう人の情の奥は知らるれ、我れに罪はあれどこの小兒には罪はなきに、哀れ薄命の符を握て生れ來りしこの稚兒は、温き母の懐に乳舐らで、猫の子を與るが如く吹けば飛ぶ十枚の紙幣を鰹節の代りとなし、吾が子でなし汝が兒なり、のめるも死ぬも勝手にせよと言はむ許りに我れに投け與へられ

たる、必定我れより起りし事とは言へ、情知つたる人の業か、爪を燈し千葉を咬みて吾が身をだに可愛がらさる貪食爹、暴き風にも當らせじと大事がりしお花さまを今ぞ無常の風に散らしたるは自業自得と言ふべけれ、いとしきはお花さまなり、狹き心ふら〳〵となり玉ひて斯くまでに零落したる我を思ひ稚兒に焦れ果てたる後はもろくも失なり玉ひたる、我れ斯くまでに愚痴ならざりせば。　さつてもさつても我ながら呆れ果てたり、我がさもしき乞兒の中間に入りしといふとを風の便りに病の床に聽き知りてお花さま、如何ばかりか情けなく悲しく呆れ玉ひしならむ、果ては吾が名さへ聞くを嫌やがるまでに蔑すみ賤み玉ひしか、それとも亦忌はしき此風音を聞き玉はで息ひきとらむその時まで我を慕ひ兒に焦れ給ひしか、斯くなり果てたるこそ是非なけれ、車輪になつて一働きせむにも魂氣つかれて歩むに呼吸劇しく動悸強きは唯ならぬ病ありとは疾くより知れど買藥さへ出來ざる上は一日力限りに車挽きたりとて何のそれは沙利を咬むて死なむまでなり、尚更いとしき此稚兒をかい抱ひでは何事をせむにも出來ざるは知れたる談なり、世には佛も神もありて人の頭に照臨ましますといふ、佛も神も幸なき我を見棄玉ひしか、男女の戀は神も佛も見許し給ふべきに、父母を喪ひ家屋を焚かれ、斯くな情けなき境界に追ひ込まれて飢には責られ病には襲はれ頑是なきこの此稚兒までに辛らき悲しきとを見せて廣き天地に身の置き所は犬小屋よりも無造作の家、盲たりしか神、聾たりしか佛、さツてもさツても、神にも佛にも見放されたる我、あるかなしかに音も立てずに此苦しき世に生存へむと愚かなり、ア丶悔ひても是非なき

となから思ひ返せば口惜しき限りなり、知る人の眼に笑はれ街に遊ぶ小兒等に石を投げられ、犬猫よりも倚下つたるものを食ひ、やがて餓死せむ時を俟つとなさけなし、あの車夫までに蔑まれ青痰吹きつけられたる、面憎けれどエヽ是れも我が罪なり、いざヽらば我も男の端しくれぞ。

斯く意を決したりけむ、今までとぼ〳〵と足音立てず歩みたりし清助、破れし裳蹴たくッて大地を蹈み鳴らし、瓦斯燈煌めく大道を大跨に歩きて新橋を打ち過ぎ金杉ばしを左に折るれば我か家なるに見向もせで右に折るれば芝山内、夜色寂び渡つて松杉の影青く、佛燈いつしか消へて古寺の風物寂たり寞たるにも心を置かず悠々とこヽを打ち過ぎ、やがて麻布の丘に登り、只在る寺の潜り戸開て忍び入りぬ。

この寺こそ此男のいとしがりし女子の葬られし所なり、觀經の聲いつしか絶へて梢を渡る風の音ごうッと鳴て万事休する眞夜中頃、いくつかの石塔、亂塔婆薄暗き月の光を浴びて淋しげに立ち盡したる、蒼白き名なしの草の露の宿に幽かに啼き出づる蚯蚓蟋蟀の音、地下の鬼も此聲聽かむと脱け出てなむ、あてもなくうろ〳〵あたりを歩き行くゝ眼に映つる一本の墓木新らしく、香火燃え盡して白き灰も業風に飛むで痕なく、造花に欺かれて其上に置き布く露も哀れ。是れぞ吾いとしの人の在す所と清助無言に叩額けば、白張の提提風なきにさはりと動くを、なつかしと思ふ身にも、亡き人の魂かと流石胸とゞろきぬ。

第四

意を決する一刹那に、惡鬼心に宿て月も星も照夜の燈火も眼に映らで、只眞黒々の街に立てる清助、

我なく兒なく、辛き悲しき戀しきいとしき事も忘れ、後をも顧かで一散走り、やがて耳輪に觸るゝ風の音に心眼倏ち開くれば、快刀頸に當りしごとく滿身の毛戰き、我れ知らず踵を回へして立ち還れば床板の上に眠るに慣れし兒ハ惡魔の父の手を離れて小砂利の上に天を衾に地を枕にたわいなくスヤ〳〵と眠り居る、薄明りに其寢顔の愛らしく無邪氣なるを見つめては、恐ろし畏ハし何故かく淺間しき心を起ししかと思ふや否や邪慳の角俄かに折れ、胸轟かして四邊を諦し視て、竊み見る人ありやと心を配り、兒を抱きあげて頰に吾頰すり付ければ荒髭ざらりと無殘夢なき眠を破られて兒は半眼に父が顔を眺めつ、うと〳〵と復も眠りぬ、エヽいぢらしきこの寢顔、假へあの月血を濺て溶け落ち、星爛れて雨ふる世界覆滅の時になつても、金輪際離れじ離さじ、我なから、見下け果たる心を出したり、いとしや汝が母、細き腕を幽界より伸べて、汝が頸にからみつかせ、土色せる冷たき唇を汝の頰に當て、出でざる乳房を汝の口に含ませ、魂は宙宇を翔りて汝か身を冥護するにやあらむ、いとしの事よ、假令大地が裂くるとも汝とは離れじ離れるものか、離れじ、離れじ、離れざるは善けれども、如何にして身を立てむか、魂氣失せたる吾か身躰飢に寒にせがまれて苦しまされし上にこの兒あらば、果ては梁の下に情なき最期を人に笑はれ、袂にかい入る小石ゝ沈みて名も知れる魚に食まれ、冥夜の打網にかゝりて嫌がるゝを浮世の名殘として、果敢なき無緣の鬼にあらむハ必定なり、一時の情を忍びて五十年の運を天に任せ、子なきを喞つ慈愛の人の手に拾はるれば、乳母に撫でられ、風車でん〳〵太皷にアヤされて、果報愛たきこ

とあるハ例ある話にて、皆無の事ならず、万一にも其樣なとあらバ我が身は如何に落魄果たりとて、樂しみは此兒の行末を蔭につきてそが樂みを我が命となし嬉しきこともあるべきなり、あの伊勢屋の伯父ハ別物としてこの世の中に鬼はなきもの、一時の愛に我と吾が眼に鱗を拑めて一寸前を冥になし、粥さへ食はず襤褸さへ纏はず、瘠せさらはひし身躰を抱き合ひて死ぬるこそ阿呆の限りと謂ふべけれ、いで、いで、いで、心を鬼にしてこの此兒の爲め、砂礫を食ひ泥水を飲むでも我か兒一人を育くむとかなはざるは意氣地なき男なれど、冥護に盡きたる我、何とも詮なし、いで、いで。清助は再び唇咬むで我が兒を石なき路のほとりに靜に卸し、西の方に向きつ兩手を合せ、お花さま、嘸ぞや草葉の蔭より我を情なき男と怨恨み玉はむ、死なんと迄に意を決して樹の枝に細紐打ちかけ、幾度か今ぞ今ぞと死を急ぎたりしも無邪氣に眠る此兒のいとしさに、心臆して躊躇うちに、端しなくも夜歸の坊主に見認められ、揚枝咬へし酒臭き御坊さまも眞實この憐れなる樣を見屆られて、人相變て呉々も不心得を誡められ、勝手に伴ひ飯くへ、酒も飯め、其兒に粥やらうと慰められ、尙淳々も難有說法を聽かされ漸く思ひ停りてふら〳〵と寺を出でたりしが、つく〴〵考ふれは考ふるほど寸前如漆、前途に望の光明なき我、我れ最早此世の中に望もなく欲もなく、只暮然にかけ渡りてノメつて死なむそれまでなり、佛も頼まじ神にも願はじ、只幸なき此兒の行末を幽界より護らせ給へ、いざ〻らばと立ち起り、踵を回へして後さまに回顧きつ〻胸に溢る〻思を殘し逃げ出さむとする前方より夜氣に籠りて提灯一ッ、淋しさを鼻歌に紛らし

て來るものあり、逃路を失ひて礑と行きつまり、又も踵を回へせば張り切つたる心の弓絃ぷつりと絕れて、忙しげに兒を抱き上げ、故と知らぬ素振して悠然と歩みながら來る人の側を通れば、其人袖を觸られては堪らじと思ひけむ、二步三步退けながら鼻を掩ふて生垣の蔭を通りつ丶手にせる提灯を高く揚げ、彼姿を照しながら。ヱ丶穢い、この眞夜中に薄氣味惡い奴じや。と鼻の先にて言ひながら打ち過ぎたり。

灯に照されたる我が姿、塔より長く大地に曳ける其影のそぼろしきを眺めて情けなしと思ひつ丶回顧けば彼の人は已に數十步のあなたに在りて灯影ふら〱、一ト際聲高う埒なき鼻歌打ち吟するさま酒席の歸途と見えたり、行き違ひさまに言はれたりし言葉今しも胸に殘りて無念の齒がみをなし、是も我の意氣地なきなれば、詮方なきも、其言葉振り何となく耳慣し音聲なりと想ひ出しぬ。夜眼なれば確かには見分け難けれど、洒落れたる中形の浴衣、裳を端折り、提灯の光にキラ〱と光るは何か柔らきもの丶羽織ならむをひきかけたる男、横鬢の禿けたる工合、其身幹の短少なるは八造に瓜二ッなり、それ〱何時ぞや我が家の店藏普請落成の折、醉た紛れに脫て取らせしはあの羽織に善う似て居るは、あれ〱あの歌ふて行く鼻歌こそ、彼が得意の隱し藝とて、いつも我に追從輕薄の舌を動かし平手に彼の露額をつ丶け打して、盃投け取らすれば宙に受けておかしき笑に相を崩し、散ります散ります一滴千金、黃金の花が散りて候とおかしき振して受ながら眼とろりと耳紅くなる時は妙な手つきをして濁聲ふり立て歌

うたふて得意がるは正しくあの歌なり、己れ八藏、我が阿呆なるを見くびッて我をたらし、果ては後脚に砂を蹴かけて逃げ出し、犬猫にも劣たる所業しながら、天道も彼を見赦るし玉ひしか不義の榮運いまだ衰へず、酒のみ歌ふておかしく暮すと面憎けれ、穢い薄氣味惡い奴と好くも言れしものかな、襤褸こそ纏ふたれ、汝の如く心に虱はまだ生かざるぞ、面憎き奴めと淸助端りなくも眼前のとを打ち忘れ、散る二三點の雫、懷なる兒の顏にかゝるを慌てゝ拂ひつ、復も歩みを停めて後ろざまに唾を空に吹きかけて、苦惱る淸助の心地憐れなり。

何たる惡因緣ぞ、天下晴れての親ならずとも親となりし我、日蔭ものながらも子となりし此兒、情愛は世間の親より厚かるべく、緣は世間の子より深かるべきに、親として兒を育くむともなし得で之を道に捨て、兒は又親に育まれざる大薄命者、緣切れ捨てよと我に私語やく惡魔に耳を貸してさもしき心になり果てしと是非もなし、アノ隣の雷婆が、今日は銀座の地藏尊の緣日なれバ其兒を一夜借して呉れよ、貸り賃は儲の上の勘定なれど哀れげに好く啼かば一夜二錢が極り價なり、いつも貸りる長屋の餓鬼は、今日に限りて皆貸りきられて一人も居らず、臀もつめらす頭も打たず大切に襤褸着せて薦の上に寢せ置きて飾り物とするなれば貸し與よ、どうせ一晩懷に入れて抱きかゝへても一文にもならぬ譯なり貸せばお前も幾何の錢にもなり、妾も亦其御蔭にて少しばかりは儲る譯、どつちの爲にもなるとなれば貸せと、せかまれし事もありし、鬼とも蛇とも言ひ樣なきとながら我れ始めて瓦斯燈の蔭、橋の袂に叩

額く乞食女が伴ふ二人三人の小兒等は己が兒ならで借りものなるを知り、借る人も貸す人も鬼のやうな心なるに呆れ果てたり、斯くいつまでも目前の愛に心後れて、おめ〳〵と餓へつ凍へつ居る間には哀れ此兒さへ堅き大地の薦の上に僞ら啼き僞ら眠りして情を求むる料となり果てんと必定なるべし、思ひ切つて捨つべし、捨てゝ運を天に任すべし、世には鬼なし何ともなるべし、もし情ある人に拾はれずとも可愛の孤兒を救ふ所もありと聞く、假へ一夜を犬の鼻にせゝくらるゝとも我慢すべし、されど今は眞夜半時、往來絶へし此町にては不便なり、金持らしき家の建て並むだる町中に捨てやれば誰れかゞ見つけて救ふべしと、哀れ貧すれば情も愛も漸くになくなり果て、慈悲恩愛の心今は只豆の如く罌粟の子の如く濱の眞砂の如く少さくなつて世の光明たん〴〵と見へずなりしこそ是非なけれ。

斯く心を決して歩み出しつ、犬に追はれ角燈に踊られながらも幾度か好き塲所擇むて、捨てむ、捨てむと立ち停るも、流石に惡事に慣れぬ清助、心臆して躊躇ふ間にいつしか東方白み渡り滿天の星の數一ト二タ三四次第〳〵に消へ行きて曉の明星のみ輝ける頃となりける、見ればいつしか新橋京橋日本ばしを夢路の中に渡りて爰石町の中程、塲所も恰好、人も起きず、いざゝらばと、只在る家の軒下に小兒を卸して、早や氣も狂亂、空を蹴て一散に走る後より啼り聲我を追ひて來るを、耳を掩ふて走ると七八町。物蔭に潜み入りて耳を欹つるに啼聲聞へずなりぬ。

輕塵を揚て馳せ來る車一臺、減さッ腹に轟きて行きぬ、首を物の蔭より見はして見送れば何處の內儀

にやはらむ、冷たき朝風に鬢を吹かせて寢亂髮に緩く挿したる銀簪の光、狹霧を縫ふて馳せ行きつ忽ち見えずなりぬ、扨は急の用事ならむ車輪の音の停らぬは吾兒を氣付かざりしならむ、清助心元なく軒の下のまだ小昏に跫音竊みて歩み行くに辻の角より逸早に馳せ行く男、驚きて身を鞠めながら睇視すれば、何の是れは郵便脚夫、次の辻を折れて見えずなりぬ、やがて又彼方より來る男は顏青み頰こけ、裳を高く揭けて徒跣に露乾かざる大地を蹈み、楊枝を口に含みて、とぼ〳〵と歩み來るは脚氣まだ癒えやらぬ人の朝起ならむ、之も知らぬ顏して打ち過ぎぬ、暫して頰冠したる男二人、天秤肩にして胸のあたりに拳固を藏めつ、埒なき事を高々と話しながら歩み來るは魚河岸に朝魚買はむとなるべし、訝ふかしげに清助の後姿を見送りつ是も亦行き過ぎぬ。

一團の鴉の背に朝日さして、夜は全く明け離れぬ、消えゆく明星を怨めしげに眺めて立ち盡清助の心哀れ、知る人ぞ知る。

第五

いとしの吾兒は誰か情ある手に拾はれしならむ。鬼瓦嚴しう軒並の甍を睨むて店藏八間ぶッ通しの家の前に捨て置きて拾ひ給へと念じたる甲斐ありて必定彼の家の人に拾はれたらむか、帳場に寛々と安坐りて、鼈甲緣の眼鏡の上を越して細き眼に慈愛の色を湛へ、眉毛長く低れ、耳房ふッくりとして曇なき額に青海の波穩かに、福々したるアノ大檀那の手に拾はれしか、もし實に拾はれたらむには吾兒

の爲めには無上の幸福なるべけれ、アノ横手に坐り居る男は、大檀那らしき人に比べては年弱きやうなれどアレは若檀那らしくも見えず、終日白き齒を見はさすして、あれをあアしてこれをこふしてと算盤の裏を返して指に彈きて胸計算に餘念なく、白眼勝の眼を厭に凄く光らせて。大檀那の顏は何時も草書、忠兵衛どんは年中顏を楷書にして居る哩と、いつも薄暗き行燈の蔭に手習しつ囁き合ふ丁稚小僧の惡口に、嚔しながら續けさまに畜生々々と己れと自棄る番頭に相違あるまじ、外に息子らしき人の影も見へぬはあの大檀那は子寶持たぬ人と見へたり、斯樣な人に拾はれし吾兒は大幸福なり、拾ふて吳れたか知らむ、實に拾ふて吳れたか知らむ、さては柔かきものに包まれて、忠兵衛乳母探せ、長松翫弄物買ふて來よ、女房喜べ、昨夜の夢見が好いと思ふた、日頃信心の觀世音菩薩が授け給ひしとならむと、撫でられ摩られ頰舐ふられて果報愛て度き兒となつたか知らむ、されど復た思ひ返へせば昔は言はで今ハ只さもしき乞食兒の子、如何に情ある人なりとて、何にやら怪しき蟲の這ひ回り居る穢き襤褸に包まれて垢に食まれ餓に病みたる見ず知らずの拾兒を拾ふていとしがる人やある、綾羅に包まれし玉の如き兒童なれバ拾はれむとあれど、噫我れながら惡魔に誘惑され可愛ゆき我が戀人の情を忘れて振り捨てたるこそ大愚痴なれ、捨てたりし吾が兒は、早起の小僧に見つけられて雜巾桶の泥水を濺ぎかけられ、竹箒の先さに突き退けられ。ヱ丶穢い氣味惡い、關係になつては堪るものかと隣家の門口に押しやられ、無東西の稚兒ながらも今まで懷にかい入れられて可愛がられし我れの見えずして知らぬ人の情なきに驚き畏が

り、絶入らんまで啼き出すを、アの隣の男ども其啼聲に驚きて是も無慈悲に押やり押やり、町並の門邊〳〵に送られ、果は惡き犬どもの鼻に嗅れて小さき魂を冷やし、砂礫に曳すられ泥に塗れ、さもしき餓鬼となりしならむか、數知れぬ栞刀豆煙管の疵を負へるあの店頭のシカミ火鉢の買はれぬ前より奉公し居る番頭どもの、情知るべき事はなし、悔ゆるも及はざるとながら我ながら口惜し口惜し、吾兒は何處ぞ吾兒は何處ぞ、此町並の人に拾はれたる景色も見へざるは、涙ある眼を持たざる幾多の見物人に圍まれながら小砂礫の上に穿捨草鞋を枕としてはかなくなりしか、噫。噫。それとも亦運善く慈悲の手に拾はれずとも、万一劍佩たる人の腕に抱かれ警察署に連行かれて、育兒院に送られたるか知らむ、それはせめての幸福なれど、髭むしやくしやと色黒き數多の人の前に面を晒らし、オビヘ恐がりベソかひて啼き出すを、漸く旨きものにスカされて、育兒院の一間の中に、哀れ〳〵同じ多くの小兒の群に入れられ、無心ながらも氣兼苦勞をなし居るべきか、噫。哀れ。

淸助垢じみたる手巾に顏を隱して黃昏時よりとぼ〳〵と、捨たりし可愛の吾兒の全くこゝらあたりの人に拾はれ居るべきかを蔭けながら見屆けむとて來りしなり、吾兒なりとて之を拾るは天下の大罪人、公然白日に顏を暴して吾兒の成行を探らむとを誠に恐ろしく。己れ待て兒を捨てし畜生めと、腕を背に捻じ上げられ、手首に食ひ入を手錠の痛みをかこちて薄暗き鐵格子の中に投げ込まれむを恐ろしがりて、蝙蝠と共に吾家を出でゝ悄然と歩みつゝ眼を睜り耳を欹てゝ餘所ながら吾兒を覓むるも、拾はれし景色

更になし、流石に我罪恐ろしく吾兒哀に、走せ來る人も我を追ふものゝ如く、高く呼ばうものは我を噂さするものゝ如く心は縮まつて拳石のやうに血は凍て流れぬやうなり、今は屹と心を定めてやう〳〵に人形町を右に折れて、晝は我と同じ長屋の立ン坊が捨て石の上に背を曝して虱捫て居並べる荒布橋をも打ち過ぎ日本橋の邊に出れば橋の袂に建石一ツ、迷兒の標石ならむ「知らする方、尋ぬる方」と刻まれたり。

見るともなく打ちやれば、何にやら書きつけし一枚の紙貼られたり折釘流に書き記されたる文字は斜に瓦斯燈の光を滑らしぬ「眼小さく、鼻高く、口は受口にて少さく、眉細くして濃く、髮かぶきり」さてはと一時眼を凄く光らせて、あら、能くも吾兒に似たる人相かな、必定拾ひし誰やらが斯くは掲示して其親を索めむ爲か、斷念つたる清助も流石未練の絕れやらで、懷しと尙能く見れば、「衣服　縮の大辨慶縞」、さては我兒にてはあらさりけりと石標の面を見れは何の是れは、尋ぬる方なり。

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

蒲團二ツ重ねたる上に胡坐寛かに煙草くゆらして、灰吹敲く音も靜なり、後より水玉絞の浴衣着たるクツきりと色白の女、岐阜團扇に我が夫を扇きながら片頰の笑を吾膝の上なる稚兒の顏に落しぬ、やがて男は氷に浸せし泡盛を手酌にして、臟腑に浸み渡るや醉は沸々として迸る五本の指先、椽に落つる簷

馬の音に男仰さまになり隻手を後につき、頭さし伸べて、月よ月よ、好い月よ、燈火の用意は入らぬぞ、月を肴に汝も一盃を傾けよ、それ其兒を我によこせと抱き上ぐれば、稚兒はにこやかに笑ふ父の顏を見上げて、廻らぬ舌に、お月樣いくつ、十三七ッと、あどけなく若楓の指に月を指して是れも笑ひぬ。籬の蔭に竊見居たる清助、ヤ、吾兒よ、吾兒よ、嬉しや此家の主人に拾はれて、アレアの通り撫られ舐られ可愛がられ居るこそ果報ものなれ、ヤ、眉秀で眼涼しきあの女房、お花さま其儘なり、是れも不思議彼も不思議、慥かに黄泉の人と思ひしにさてはまだ娑婆に在せしが、月を眺めて三人して笑ふ其笑顏のどれも美しさ、此垣め入らぬ邪魔だてすな、懷かしの花吾兒の顏を見たし見たしと、垣の間に頭差入れば、已れと言ひさま何物か碎くる計りに細首擢みて宙に吊す。

あなと呼ふ聲に夢破るれバ、隣に眠り居る寢相の惡き男、毛むくじやらの泥足を清助の胸のあたりに踏み伸ばして、鼻の嵐に怪しきおかしな匂頬を打らぬ、噫夢なりしか夢なりしか、此夢全く正夢にして、吾兒ハ斯く樂しき家に拾はれしか、死せるお花の居るを見ればさては此夢さか夢にて吾兒は誰が手にも拾はれず、啼て啼て絕へ入りしか、十日あまり吾兒の成行に氣を揉みきり磨し切りて、只うつとりと步むに力なく物言ふに懶くなりて霧の中に彷徨ふ心地、袖乞の錢も僅か一錢あまりの日掛の家賃を拂ふに由なく、夜に紛れて逃げ出し、今は此木賃宿に一夜の露を凌ぎ、明日の糧はいまだしも、今日の朝餐に燒麵包一片食ひしのみ、噫喉渴きぬ水を飮まむか。

眼覺むるは我のみと思しに彼處に人の聲す、笑ふものハ音を忍び、語るものは聲を竊む、何事がおかしきにやと清助耳を澄しぬ。

第六

十布の一方を割ひて二ッ繼ぎ合したる蚊帳の半ば黄み半ば青みたるが、一重ならで二重三重怪しく色褪たる中形の布につぎ當られ、尚此處かしこを拳攫みに觀世捻もて絞られたるは蚊の入らむとを防ぐなり、將碁倒れに算を亂して・柏餅の皮を剝て大の字、くの字に打ち臥したる二十六七個の怪物、五尺ゆたかの大男、僅か疊半枚を呉越の國境として嚴めしく肱枕の關を搆へ、足伸すな、脊が觸るは、何處で濁酒かつ食ふた、少しは遠慮もすべきものぞ、面を彼方へ向けよなど、拳を伸し足踏みたくりて、あられもなき雜言罵詈、頓てすや〳〵と眠りながらも、夢より訴ふる埒もなき寢言の種々、天花降り來る佛の說法も、甘露散り飜る丶聖の名言も、魂は緋鯉に食ひ缺けられし燒麩の如くふは〳〵に、心は石山に生ゆる自然生の如く、曲り歪みたる是等の人々には半文錢にも値らざるこそ哀れなれ、この哀れなる人々が樂からぬ夢ながら圓かならむとするところを、蚊帳の破綻より數知れぬ蚊ども、得たりかしこしと、血にかつれたる鋭き嘴もて翔り交ふ其恐しさ、承塵に掛たる反故張の行燈は、誰れやらの手に書れし消息の殼、稚兒が惡戯せし山水天狗そのま丶を貼りつけたるが油煙煤ぼり返へりて薄暗き火影は、蚊帳の天井より重くろしげに落ちて、陰氣充ちに滿らたる光景、この惡氣を吸ひつ吐きつ、青白き額の上に

刻まれたる「死」の文字は、若木に彫られし文字のやうに、日に月に大きくなりて、學者が囂しう囀る罪悪とか言ふものも、早桶を膳とおして欠茶碗に芋粥啜る輩には、我が命より外に可愛きものなく、人を欺き物を盗みて之を我が世渡の生業と心得へ、果ては麥六米四のモッソう食ふを結句氣樂と嬉しがり、魂魄スガレたる我が身體を離るゝ時、胸にヒヤリと散げる鬢の毛を摩りつけて涙おろ〳〵麻痺し掌を握り呉るゝいとしき女房もなく、末期の水を紙に浸して焦げるやうなる吾脣を濡らし呉るゝ可愛ゆき吾兒もなく、卒塔婆に閼伽灑きかけて、吾が思のこの水と共に黄泉に流れ行けよとかき口説く朋友もなく、只犬に送られて淺き墓の中に眠り、萠へ出づる無名草のみ涙を飜しくるゝばかりなるこの淺ましき境界。

清助、嬉かりし夢を寝相惡るき男に攪き亂され淋しげに肱枕を外して氣力なき欠伸しながら頭を擡ぐれは、惜しや今一時可愛の吾兒、いとしきれ花のたわいなき笑顔を見て、蕣花の絕へ間敲きて椽の端に腰打ち掛けうれしく語らむと思ひたりし旨き樂しき夢のまだ殘るを、用捨なく爭ひ食ふ蚤、蚊、南京蟲の刺の鋭さ、痒し痛しとバリ〳〵と爪きむしッて起き上り、水飮まむと蹌踉きつゝ踏み出せば、宛から鮓をつけしやうに寢亂れたる怪しき男の數々、歩むよ路なきをやう〳〵にして腹を越へ足を除け、辛うして蚊帳の裳を搴て勝手の方に這ひ出で、音な立てぞと念じつゝ、歩む度に怪しき音する板敷を、泥鰌踏む童部の足元おかしく、冥ながら兎角して柄杓かい探り、手桶に差し入るれば、生憎や、水は只底のかたに在り、靜かに柄杓を回はして三杯四杯五六杯、したゝかに簸りつけて腹撫でさすり、とぼ〳〵と

我が寝所に返らむとする折しも、不思議や我より先きに眼覺むる男ありて、しかも細々と打ち語ふ聲音の、沈みたる、澱みたる、黄色なる、嗄れたるが迭みかはりに聞ゆるは五六人の團欒と見ゑたり。障子は閉ぢられたれど黄ばみ煤ばりて性も失せたる紙は處々破れ、骨もこゝかしこ折れたれば、人名指に唾つけずとも室の中は殘らず見へたり、この室の天井際にも例の反故貼の掛行燈ありて、其光影のいとゞ薄暗きは油盡きたるならむ、蒙々たる此の室内、語る男の顔は定かに見ゑ難かけれど、時は眞夜半、場所はさもしき木賃宿、細々と語る聲音の打ち沈みて、停ては續くは、何にやら恐ろしき相談ならむ。

草も木も人間も眠り了り、小川の水も月の影を碎かざるまでに死せるが如きこの世界に、上野の鐘ハ午夜の風に傳はりて宛がら引導を渡す老衲の呻るやうにひゞき渡る丑滿時、あやしきは此六個なりと、清助畏かりながらも眼を瞬り耳をひき立つれば、室の隅の闇きところに一點星の如き火光は煙草吹くにや、やがてはた〳〵と音するは吹殼敲きたるならむ、暫くして復も煙草を吹くと見へて、掌に殘る吹殼の火を轉はしながら吸ひつくる其火影の顔に映るを見れば日に燒けて黑光りある顔、緡に貫されし鐚錢のやうにぶらり〳〵と螺れたる髮の額に垂れ下りたる其間より刀瘢か、打疵な、左の眉を斷ちて斜に目眥の際にかゝれり、殘り五人の男、暗きなからも燈火に照らされたれば微かゝ其の顏容恐ろしきが見られたり、土色なせる唇厚く齒は古池の亂杭のやうに突き出でたる、或は鼻柱頬より低く、眉は梟のやう

に倒に立ちたる、又は顴骨棚のやうに出ではりて一段窪みたる底に眼の光鋭く、頤ひげ喉を傳ふて胸毛に連り、破れたる肩のあたりの繿縷の間より、一眼睨むが如く現はれ出でたるは、膚に大蛇の文身せるならむ、各毛むくじやらの脛を出し膝を抱て頤をその上に載せ、或は片肱曲け隻脚を折りて横ゞ臥したる、壁に倚りかゝりて足伸せる、頤のあたりを兩手に支へて、踏れたる蛙のやうに匍匐せる、皆一癖あるべき面魂に、淸助思はず縮み上りぬ。

煙草一息に弗と吹ひて、一人の男濁聲にいふ。アゝ旨い酒の味も忘れて仕舞ふたが、下總、貴様は毎晩氛と美い薫をさせ居つて、譫言まで何が嬉しいか、寢苦しうて眠られぬ折、それを聽いて居る其辛さを少しは察して貰いたし、一ッ鍋の飯を喫れたり貰ふたりして年中この室に寢起する朋輩甲斐も無い男だ哩。　旨く言ふな甲州大哥、思へバ一昨日夜の十一時過ぎ、周章しく裏の水汲口をコヂ明けて、オゝ恐い惡い犬に惡戲されて痛し。痛し。向脛をしたゝかに食ひつかれたと呟きながら息を絶らして柄杓に三四盃水をたてつけた其様子のおかしければ、窃と障子越しに窺て居るとも知らず、何やら有難いものらしきを懐より取り出して、星明りにカスし視て居たあれは何か、朋輩の好誼に愛でゝお福分が欲しい哩、　エ。誰れが、甲州大哥が、己れも欲しや、そんな冥い隅の方に蹲踞て居らずとも此所へ來い、此の二三日は終日外へも出でず閉籠つて居るは怪しと思ふたが、何所か怪我でもしたのか大哥。怪しい怪しい、事によつたら面白いぞ。

二個の男立ち起りつ、片隅に眼のみ光らせ居たる男の腕を攫みて曳むとするを片手拜みに掌を打ち揮りて。痛たい〳〵。靜かに、靜かに。

チャラ〳〵と錢の音す、油盡きたりけむ燈火俄かに明くるなりて貼れる反故の文字も鮮やかゝ見ゆると思ふに又も暗くなり行きて。怪しき六個の人も冥に埋もれ了んぬ、細き聲して打ち語る話も、杜絶れ〳〵なり。ャ。これか、五個の口を銜て出づる驚きの叫び、やがて默して言葉もなし。

清助、頭を縮め足を跂てゝおぞげを振つて恐ろしがり、もしも竊み見居る人あるをアノ鬼のやうなる男に見つけられむには、鷲攫みに攫まれて肉をや喰はれむ、骨をや舐られむ、早やく〳〵と氣は逸やりても、足は枯木のやうになつて歩まむにも意從はず、暫し柱に兩手をかけて息を屏し居るに、忽ち呵々と笑ふ聲して、チョッ燈火が消えて仕舞た、冥でも話の出來ぬ筈なし、折角貰ふた此金を褌にくるんで、溫めて、酒樽枕におかしい夢見る翌の晩を樂しみに眠ろふか、いや〳〵蚊帳もなきこの室の中、翌を思寐の旨い夢を、むざ〳〵蚊、蚤虱に食はしてやるも殘念なり、面白き話を迭みがはりに話し合ひて、睡とうなつた其時なりに談話すると面白からむ、誰れも同じ白髮頭、四十年來の懺悔話も興あらむ、大哥の額の刀瘢には一段面白き話あるべし、話して聽かせよ、聽かばそれより花が咲いて銘々の手柄談も湧き出づべし。語れ。聽かむ。

悽い話、恐ろしい話は今宵一夜に話しきれぬ程あるが、何はさて。人殺しほど畏き話はあるまじ、二

十餘年前の昔には我も血氣盛りの十七八、朱鞘無反の剛刀閃かして、松並木の木の下冥に、旅人が提灯蹴て、魂消る聲を知るべに太刀颯と音させて罪な殺生したりし事ありしが、人を斬る氣味のよさは肥へ太りたる男を斬るに限るなり、幼き頃初午祭稻荷の社前に打ち敲きたるアノ太鼓を裂くやうにて、其氣味の好さは得も言はれず。

腥き話冥を迸つて淸助の耳にぶッかるや、是れは又恐ろしと、眼を据えて耳を欹つれバ、ハヽヽと低く笑ひて一個ハ言ふ。我も亦箱根の關跡に網を張りし蜘手大哥の子分とて、少しは草鞋に血汐を蹈みし事もありて、首ちよん斫るはうら成瓢簞もぎるよりも何とも思はざりし、人を斬るには丈ずんぐりと筋骨硬き男に限るは、冴へたる腕に手答して、斧振り翳して松の切株割くやうに、生温たかき血烟ぱッと鼻の穴に咽び入るこそ氣味好き限りなれといふ。

席ざら〳〵と音したるは一個の男にじり出でたるならむ、得意の鼻を蠢めすかにや、聲音も稍〻高く、さもそうず、さりながら聽け、聽け、人を殺すは美人を殺すより氣味好きはなかるべし、揮りかざす刀の下より、雨霰と落つる涙を袖に受けてかき口說きつ、かざしの花は散り雫飜るゝ鬢は散らげて魂切る聲の空に響き、やがて腥き風吹ひたる跡の凄いほどに靜かなるは、氣味好きとの頂上なるべし。

流石是れには、荒膽拉かれけむ、答ふるものなし、鼠一匹梁を走つて嘻々と鳴くのみ。

餘りの恐しさに、淸助溜息ふつと吹けば、蚊一ッ鼻に紛れ入りて銜き上げ來る嚔をやうやくに飮み殺

し、竊み聽きたるとを知られ如何に辛らき目見るらむと、魂を空になして我が室に匍匐ひ來り、周章しく蚊帳の裳を攫み上げて飛び込めば、したゝかに眠れる人の頬を蹴つけ木枕宙に躍つて隣れる男の胸に落ちぬ、我破と跳ね起きたる荒くれ男己れと言さま臂を伸へて清助が襟を攫みぬ、飛び來る鐵の拳は鬢に當て眼もくら〳〵と怪しき五彩の紋形チラつきぬ、隣れる男も飛び起きながら夢中に已れと枕投け返へせば、清助にハ中らで荒くれ男の頬を拂て、蚊帳に觸れてふワりと滑り落ちけり。

南無三寶と清助死力を出して攫まれし手をモギ放し、逃け出さむとすれば、蚊帳に包まれて、身ハ網の裡の魚の如し、やかて釣手弗りと截れて、苦爭けば愈やが上に身躰搖かず、雹と降り來る亂拳の痛みも、やう〳〵にうすらぎて、魂我が躰を脫け出づるやうに、あれ、あれ、漆よりも黑く凄き穴の中に、ふら〳〵と墮つる心地のするハ、おゝ冷たき風が頬を吹ひて、氣味惡い、アレと思ふ眼の先に一點の燈明、カッと睜けば、はや硬くれ男七八人に圍まれ居たりけり。

免し給へ、疎忽なれば、決して決して故意とならぬとなれば容赦したまへと詫るを聽かず、見れバ一昨日舞ひ込むだ新參者、久し振の嬉しい夢を蹴破られては堪忍ならぬぞ、ひらめの樣に平たくなつて蟋蟀のやうに百度千度頭を低くるも、汝の舌が爛れるまで詫いふても、それハ汝の勝手なり、赦さじ、赦さじ、赦すものか。拳の先に鼻を摩つてフヽンと冷やかに笑ひながら、宵にひッかけた兜の醉も醒めて仕舞た、平あやまりに詫びたりとて、無償では堪忍がならぬ哩。後よりシヤシヤり出でたる男いふ、人

騒かせな阿呆らしい、酒買ふか買はゞ巳が詫言ふてやらむ、貴様が如何に掌を合したとて、それそこに、色をつけずば押しの太いと云ふものなり、酒買ふか、買はゞ我れ詫言ふて呉れむ。

地より湧きたる眼前の災難免るゝに由なし、酒買ハずと頭を掉らば如何ならむ、亂拳の下に我が身は糜肉となるは必定、酒買はむには終日聲限りに袖乞ひしたる二錢三錢、なんの是れは詮なきとなり、飲むと牛のやうなる血氣の惡漢、醪酒なんぞ買ひたらむには吐き返へして、銘打つたる酒を所望と、罵られむと火よりも明けし、こゝ絶體絶命の所なりと、淸助意を決し。よしさらば、翌日酒買はむ、買はゞ盃洗の水にさらりと今宵の罪を流して下さるか。生意氣な買ふならよしと襟つき放せば、ひよろ〳〵と横さまに倒れかゝりて柱の角に額打つて、あいたしこ。

理屈といふものハ眼鏡かけたる顔の青い人の言ふものと心得へ、萬づ强いもの勝なるこの社會の男の前には、理屈ハ乾袋を被りし猫のやうに跡じさりして、力あるもの、氣負へるもののみ尻尾を燒かるゝ牛のやうに角を揮て横行し、ちョこ才な。舌吐け、抜かむと口の邊をしたゝかに捻められて、痛や紫の痕を紀念に逐ひ出さるゝに極つたる恐ろしき此社會、一寸の踈忽に眼をムキ出して、我が拳の痛まむまで打ち敲きて、果ては慾にからんで酒買へと弱を見クビッての雜言、口惜し、口惜し、口惜しけれど是れも命なり、命と諦むればそれまでながら、幼き折に字つきに導かれて讀みたりし論語とかいへる本の中にて口癖のやうに空覺へたる仁義禮智、やかましき講釋は忘れたれども万づの物の靈と崇められし

人間、我から好むで惡きとする者なしと思ひしに今にして思ひ當れば虚僞の大塊が此の世界なり、物取らせ、金銀を撒き散らせば、世にも有難き活佛と拜かまるゝも、心より嬉し忝なしと掌を合する人は幾何ぞ、顔四角に膝も崩さず、左樣然らばと言葉正しく、貴下とか閣下とか僕とか拙者とか、口先ばかりの禮義は立派なれど、若しも蛙が腸を洗濯するやうに、他の心を吐き出さして淨玻璃に映せるならば、言葉の文麗はしき舌は、霜色寒むき劍と見へ、額には邪慳の角突き出でざる人は幾何ぞ、尚更我社會の人は運の棧道を蹈み外して眞黒々の谷底に墮落したるものなれば、仁義も禮も何物か吾身の慾より急なるはあるべからず、今まで斯くとは心づかざりしが、さッても何により情なきは貧、我を愚にし、我を惡魔にするは貧。世に鬼らしき人はなきものと思ひしに、この家も亦鬼住む窟にて、我も亦一個の鬼となりたるこそ詮方なけれ。エヽ儘よ。

打ち叩かれし節々の痛み、靜なるまゝにやう〳〵強くなりて胸のうちに糾れ紛れる千万の思。さても清助吾が身の力なきをハカなむて、惡魔となり果てける。

第七

飢へたる身の脚は重く、むかでよりも少さな砂礫にさへ、幾度か躓きて蹌踉めきながらその度ごとにズンとこめかみの邊に浸み渡る痛み、鼻に皺を疊まして眼口眉を一處に集めつ、痛や、痛や。

辻を左に折るれバ生憎茲は道普請したる後とて一面に布きつめたる砂礫は邪慳に尻切れ草履の間より

嚙み付きて其痛み堪へ難し、足趺て丶後へひき返へさむとする脚底にチャラリと何にやら有り難たさうな音してけり。

宵冥ながら身を屈めて諦し視るに、あら、冥を染め抜て圓き少さき白き物小石に交りて光れり、我知らず砂礫と共に鷲攫にして、鼻の先に摩りつれくば、ヤ、是は五錢の白銅貨なり、ほろ〳〵嬉しがりて、石を拂ひ砂を吹き飛し、袂もて清潔に拭ふて、薄葉鐵の片ではあるまいかと掌の上に打ち返へして、ためつすかしつ、視れば正しく十六の菊章打つたる白銅貨、終日聲嗄して袖乞したりとて、孔ある錢の十個二十個、是れハ又何の神よりの授りものかと、隻手に緊乎と握ッて、曩にも似やらす、濶歩に二歩三歩。

草履の先に觸れて亦もチャラリと音す、しめたり復かと眼をむき出して大地を諦し視るに泥に塗れし馬鞋の外、眼に入るものだになし、さては嬉しき音の耳に殘りて、それに誑かされしに極つたりと思ひながら、クスリと輕く笑ひたりしが、未練の心は手を騙り出してそこらあたりをかい探らむと隻手に錢を握りしまゝ小砂礫を攪き廻せば音もなし、いらだちて尙もあたりを探らむと握みし白銅貨を袂に藏むれば、芋の尻尾を入れ置きて忘れしを何時しか外より鼠に食ひ破られけむ、拳も出つべき穴ありて錢は洩れ落つ、周章て四邊を撫で探り、音を知るべに拾ひ上ぐれば、こはそも是れは二錢の銅貨なり、是れハしまつた、白銅貨が二錢の銅貨に化け居ッかた、忌〻しと尙四邊を視回せば、先きに投げ捨てたりし

馬鞋の蔭より白き光眼を射る、飛びかゝつて拾ひ上ぐれば、是れこそ、さきの白銅貨なり。十歩ならざる間に鳥渡七錢、三錢足せば十錢なり、一日三度縄暖簾の門を潜つて、醤油樽に腰打ち掛けつ鮪の煮つけ、鰌汁、鰯のヌタに醪酒一本、腹ふくるゝまて飯食ふても澤山なり、酒買へと强請られし昨宵にひきかへて、ろろ〳〵果報の福の神が頭に宿たと見へる哩、一時遁れに敲かれ損ながら彼奴等を胡麻化して虎口を脱れしからは彼の宿には歸らし、定めし今頃ハ喉より手を出して舌なめづりつ、我を待ち居る阿果者の馬鹿氣た顔か眼の前にチラツキ居るぞ、アツハヽヽ、どれ醪酒でも食ふて足伸びと〳〵旨い夢ても結ぶとすべしと歩み出すに、

チャラ〳〵と音すると前の如し、ビツクリ踏み停まれは白き光の四個五個六個、腐れ草履の下に散り布かれたり、飛びしさりつ頭を襟の中に縮まして口吻尖ちし、錢握りたる拳に額のあたりを礚と敲いて、眼を睜り暫しハ唯守りにまもる。

砂礫と共にかき集むれば白銅五個銀貨一個、掌に盛つて雀躍しつ、頬を敲ひて其音に耳傾けて、何時聽ても快よきは此音なり、乞食と成り果しより二年の間、斯く多くの錢持つたる覺へあし、今宵は如何なる吉日ぞ、二日三日ハ樂寢して氣保養するにハ十分の料なり、おや、何にやら向ふに光るものが見へるやうな。

あな。是れは。冥に散り布く梅の花か、遺り水の面に落つる星の影か。

躍り上つて、攫み居し錢を我が口に頬ばりつ、そこにも、こゝにも、あしこにも、それ又そこにと、砂礫とも云はす泥とも言はす攫み上ぐれば、白銅銀貨混き交せて二圓あまりありける、ヤと一聲我知らず叫破すれば、噴き出す幾個の錢、ふためきて、是れは、是れは。夢の中に夢見る心地して、夢か知らむと頬つめらにも、生憎兩手に錢をシッカと握りたればつめるに由なし、拳のあたりをシタゝカに嚙みつくに、痛ければ夢にはあらじ、嗅げと怪しき臭せざれば狐狸の戯にもあらじ、さてハ誰やらが遺しゝものか、遺しゝ人は一時の厄拂と諦むべきも、我には十年の果報なり嬉しやと四邊を視れば、我より五六間先きに何にやら怪しき黒き物こそありける、馳け寄れば、溝泥に塗れし駒下駄隻あし、笹折の底拔けたるが旨き香も犬の舌に舐られけむ、さてこそ醉えしどれたる男が、財布の緒の解けたるをも知らで小歌うたふて千鳥あし、あなたへチャラリ、こなたへチャラリと遺し行きたるものならむと低くゝヒゝゝと笑ひながらも、持ちつけざる金なればうら恐しく、とやせむ斯くやせむと猶豫しつ暫し佇む折しも人の跫音す、回顧つゝひた走りに走しる。

銀貨二ッを取り出てゝ殘る貨幣は帶ひき裂き、おしくるみて内懷に藏め、何も思案は醉ふての後、久し振にて一杯やらむと肩に風を截りつ、何時も身を鞠めて潜り入る繩暖簾、今宵は兩手にかき分けて樽に悠然と腰打ちかくれば、隣に酒飲み居たるものども、上唇舐づりつゝ拳もて眼を摩つてヂロ〳〵清助が風姿を見つめしがやがて、避けて膳を彼方に移せしも道理、垢に埃に汗に塗れて怪しき臭四邊を拂

て、髪は古りたる棕櫚箒の如く白き牙のきら〳〵と洋燈にひかる恐ろしさも、獨り得意に肱つき張り、婢女が黄色な聲を振り立て丶種々の献立いふも耳に入れず、いくつかの砂鉢に盛れる肴を頤の先きに指圖して、それも持て來よ、之ももて來よ、そして酒は上酒もて來よ。

杯の縁に鈴蟲の音をさせて、甘露々々と額を叩き飽まで飲む、陶然として心漸くに大きくなり眼中に世界なく、見る〳〵陶四五本を見事倒し、天井に醉吹きかけて高楊枝、床几に銀貨投け出せば口あングりとあきる丶婢女、阿呆め己を誰と思ふ、ハハ憚りながら何時まで落魄れて居る己と思ふかと眼を据へて睨みながら剩錢攫むで、のさり〳〵と出て行く後姿を指して舌吐かれしも知らで唯我獨尊、夜風にホテリ返へる面を拭かせながら、さて此金の遣ひ道はと、先づ翌の朝柳原で着物一枚買ふて、下駄買ふて、髪を剪て、髭剃つて、風呂に二年越しの垢を流して、綺麗さつぱりと男になつて、商買は何にがよしかな、資本入らずの商買はと、氷屋も少し遲すぎる、芋屋は早やし、しる粉屋はむだなり、食物商買でないもので、時候搆ずの薄資本で出來るものは、オヽそれ、屑屋、屑の御拂は御座ませむか屑エイ、旨いぞ〳〵屑屋と極つた、此頃の不景氣で不用のものは賣り拂ふ、書畫骨董の堀出し物、世辭で丸めて二束三文に買ひ受けて百倍の儲け口、小百兩の金は瞬くうちに出來る、金が殖へても奢てはなるまいぞ、時機を見てチョイと相場に手を出す、其翌日の暴風雨で一足飛に相場は騰る、一夜の中に大富限となる、さア是れからが面白て、先づ根岸あたりへ瀟洒とした家を搆へて愛妾を住はせる、オヽ根岸はやめるぞ

世をスヰた恐ろしい文學者の巢だからやめるとして、綾瀬あたりに黑板塀、見越の松は御行の松を其儘根コギにして其上に嵐山の櫻を移し、座敷開きには祇園の舞子を臨時滊車で呼び上せて都踊、紳士淑女を招待して河では烟花を打ち揚げる、終に己も紳商とかいふもの丶仲間入りする、そうなれば此髭も入用だ、電話機も架けずばなるまい、馬車も買はずば成るまい、やれ園遊會、それ慈善會とお花か居れば夫人といはるゝ事だが惜い事した、そうなれば眼の廻るほど忙しくて浮世がほと／＼蒼蠅くなる、中禪寺あたりへ別莊を出來へて、昨日都、今日ハ深山の杜鵑と洒落てスマす、イヤ面白い事になつたぞ、時々東京に歸れば其翌日の新聞には、氏は昨日歸京せりと吹聽されて其上に柳橋の白拍子に何したとか埒もない事を書き立てられ、うツかりした事も出來ないやうになる、やれ會社の社長に推選するとか銀行の頭取になれとかセガみつけられ、厭や／＼ながら是も義務とかいふものなれば承諾してやらずば成るまじ、益々金が殖へる、困ッたものだの、ハッハ丶丶丶、其資本ハ玆に在る。

內懷に雨手を入れていか探りつ、ャ。有る、ある、玆に在る。忘想を湼ち丸めて、意氣昂然、高笑を山彥に答へさせ、大跨に歩み來る上野の山下道、星も驚きつらむ、藏れて眞冥。

第八

搗きたての羽二重餅のやうに、ふつくりとした絹布の夜具にくるまるは心地よけれど、ざら／＼と垢されしたる踵のあたりがからみ餅では閉口／＼、そこにもこゝにも三文備の大さの綿の固塊ころ／＼こ

ろりと轉かる居る煎餅蒲團を柏餅となし、ろれ手が出る足が露ると身体を弓形にして、痛き木枕の間より、氷のやうな寒風肩のあたりより大袈裟きりにひゆうと吹き込むで折角旨かりし夢も凍て仕舞いし、昨年の冬ハ苦しかりしが、一夜二錢の貸し夜具被りて、濁酒の醉の醒めやらぬをひつくるみしを、蚤に食はれて身体は胡麻もち小豆餅、ぼり／＼かき餅是れも辛らけれど、一杯の醉いまだ醒めぬうちに、砂糖もちの旨き夢見て寢ぬることそ是れぞ自在餅、あアこのふッくりとした絹布の夜具では何やら嬉しいやうな、畏いやうな、薄氣味惡い心地がするぞ、何にやら枕元に來たやうな。

久しく飲まざりし酒、を嬉しまきれにアホりつけて痛く滿飽したりけるを、さもしき心は尙あき足らで、道傍の夜臺店に砂餡入つたる大福餅を三ッ四ッ買ふて、半月形に食ひ缺きたる一個を大事そうに隻手に持ちて、今しも淋しき山下道のかたへなる木の下に横はり大地を枕となし大天を衾となして、大忘想を少さき胸の裡に畫きながら、やがて齁々と鼻毛戰がして夢の中にも大自在の境界、こゝらあたりの喪家犬ども、おかしがりけむ、髭むくつけき口のあたり頤のあたり頰のあたりをペロリ／＼と舐づり回はし食ひかけし大福餅を鼻の先にせゝくる、折角面白くなりさうな夢を破られたる清助、どんどりしたる醉眼を細う開けて上唇なめずりつ起き上り、呂律も回らぬ舌に何にやら譯の解らぬ小歌をころがしながら大手を揮て踉々と歩み來る。

犬ども驚きけむ、尾を卷きつ逭げ出して近づかず、只清助の身邊を遠輪にかけて高う吠へぬ、清助鼻

を擁して低く笑ひつ、犬メの遠吠も二上り水調子、埒なき口三味線して、嗚呼面白し。

吾が跫音に追はれて幾度か心を冷やし、心なき角燈も我を蹋け來るやうに覺へて膽を縮ましたる曩にも似やらず、したゝかに飲みたりし酒は二年あまり縮みに縮みたる氣力を膨張まして睡けなる眼中に我なく他なく天地なし、思ひつゞけたりし妄想次第に大くなつて、さてもさても、愈々金が儲るぞ、餘り殖へても困たものぢやて、少しは損をする事を考へずばなるまいて、金銀の中に埋まッて居ては身が冷て疝氣の衝心、それは餘りアッケなき話なり、オヽそれ北海の鯨獵、鯨獵こそ面白けれ迅速の獵船をこしらへて、屈強なる獵手を募り集めて、風雪激浪の中を劉て漕ぎ回り、外國の密獵船を追ひ拂て我獨り手當り次第に屠り〳〵臘虎幾百鯨幾頭、さても是より世界に何人と指屈らるゝ男になるて、今年は己は二十五、三十歳の曉には大したものだの、妻を貰はずばなるまいて、花のやうな美人を世話するものがある、やれ妾が方様の妻になりたや、いや〳〵吾か身の夫じやワ、あら嘘わたしがと、都の美女がやいの〳〵と思を文章にからみ、心を袂にこめて蒼蠅ければ我は頭を掉て承知しまいぞ、愈々面白い事になつて來た哩、しかし幸運ばかり續くとはないとして或年の秋あたりに北海名物の黄霧に迷ふて漂流するとしやうかな、さては靺鞨か安南かへ流される、波裂けて天風簸り出す一團の大月を大盃に浮べて、いつぞや寄席にて聞き覺へたあの三國志の曹操氣取りて、槊を橫へて唐歌高くうち吟ずる事は出來ないが、舷を敲ひて酒のみ遊び明かせば、この漂着したる處は南洋の無人島、海には珊瑚眞珠がある、陸には

不思議の鳥獸がある、愈々金が殖へて困つたものだの。
襌のわたりに緊と藏めたる一塊の包こそ、この途方もなき大妄想を湼ち出せる基なれ、淸助復も兩手を內懷にかい入れて、そを握りつ、あるぞ、有るぞ、屑屋より歷上つて大盡となるかな己が、大口開ひて呵々と笑ふ。
喉ひり〳〵と乾ひて水欲しやと諦し見れば、傍に井戸のあるやうなり、蛙二ツ三ツそのほとりに鳴きぬ、冥ながら、釣瓶かい探るになし、身を屈して井戸側の中に手をさし伸すに微かに指の先に觸るゝは釣瓶竿ならむ、愈々手をさし伸すに蛙一疋飛び込みけむ、水音しぬ、脚元浮きてあはや倒に陷らむとすを僅かにこたへて釣瓶とり上け、息をも續かずシタゝかに飲みて頰打ち敲きつ、忘れてしまうた醉ひ醒の水の味は甘露のやうな、
いざさらば醉の醒めぬうちに翌日を思ひ寐に樂しき夢を見るとしましよと、口にこそ言へ醉ひは今ま圓かにして脚元危やうく、百万兩を產みなす金の顏を今一度見て置うか、冥に見へねば有難き音でも聞こうか、
內懷をかい探る、觸るものなし、下腹より背を撫で廻はす、觸るものなし、袒くつろげてそこらあたりをかい探る、觸るゝものなし、醉俄かに醒めぬ、膽倐ち縮み上りぬ、髮ハ竪ちぞんどりと細き眼に睡氣飛むて圓らになりぬ、帶解き放ちて襤衣振ふに、扨てそ右の袂に物あり、周章てゝ攫めは何の是

れは食ひ缺きし半月形の大福餅。

さては醉解の水飲まむと釣瓶とりし時、水に飛び入りしは蛙と思ひきや、命より大事の大事の金なりしか、

一散に馳せ戻りつ、釣瓶取つて井戸の中をかき回すも、詮なき業なり。

昔しは吝嗇の僧ありて、金を小庭の片偶に埋めて、他人を見なば蛙と化けよ、我を見なば金となれよと譬言いひし話はおかしかりし、今は清助が懐の金は蛙となつて飛び失せて、襤衣の領に挿みし一本の小楊枝と、食ひ缺きし大福餅をかたみとなして、大忘想もうたかたの水の泡、哀れ威風堂々たる大盡も、倏ち襤衣一貫の乞兒男。

清助只おろ〳〵と泣きほとぶ。

第九

何時ぞやの春、はやり〳〵と暑からぬ日光を綾絹の蝙蝠傘によけて、汝もお飾容盛りであつたげな、今こそ額際に二ッ三の小皺こそ見ゆれ、其頃は亭主ながら已も惚れ〴〵するやうな汝の薄化粧、笑ふてなるまいぞ、老母さまと一所に淺草の觀世音詣のとき、早やう可愛ゆき初孫を授け給へ、男女どちらにても異存ハ毛頭なきとながら、成うとなら女の兒にして欲う存じます、大悲大慈の御冥護もて早う〳〵この嫁に兒を授け給へ、蝶々髷を手つがら結ふてやり簪をかざさせ、行厨提げて傅しながら幼稚園へと、

向ひの隱居さまの笑湛へて、細い眼をして孫持たぬ妾の前をも憚らず嬉しそうに、やれ君が代を歌ふて見せよ、霞が雲かを歌ふて見よと、いつも歸途りに孫の手を引いて我が門を音づれての自慢話し、羨ましうて何うも斯うもなりませぬ、何卒孫女を一人授け給へと龕前に叩頭きて珠數をもみ給ひたる事ありしが、やがて我と汝の耻く佇むをふりむき給ひて、お前方も祈念せぬか何を呆然して居るかと叱られて、愈々耻かしう思ひたりし、それその時、本堂前の水茶屋に憇ひて茶一服飲み居たりし時、頭禿げて眉さへ雪のやうな品高き老人十德着けたるが、

右の手に杖をつき、左の手には六ッ許りなる男の兒の手をひきて來る、翠のかぶきり房々と美く、新らしき靴を刻み足に踏み鳴しながら、鳩の群れつゝ豆啄むを見て嬉がりて、ひかれし手を振り拂ひつ、今祖父をセビつて買て貰ひし洋劍の鞘を掃て、武者振しつゝ小走りに、洋劍打ち振り、周章しく起つ鳩を追ひ回し居たるが、やがてこれも厭き果てゝ、走せ歸りつ祖父が袖にぶらさがり、豆買ふて、アノ白き小鳩にやらむとせがむ風情の愛らしきを熟視て、老母さま、あれ見よと指さして餘念なく見つめ給ふ、祖父らしき彼の老人はやがて傍の豆買る店に就て一皿を得さすれば洋劍地に投げいだし、滿面にこやかに笑を湛へて、楓葉の手に受けて撒けば、舞ひ下る幾羽の鳩の爭ひ啄むを見て、手打ち敲きて喜び居る、啄みつくして鳩あなたに飛び去れば、愛らしき彼の稚兒は復も豆買てと袖に縋りていふ、一皿とらすればバ又も播き散しつ、自も鳩と共に飛ひ回りて、頬もゆみ破れむばかりに打ち笑みつ喜ぶ、斯く四盃五盃

六七盃と播き散らして、鳩の喜び、祖父の喜び、稚兒の喜び、豆賣る媼の喜び、餘念なき四の喜悦のさまのおかしさを我もうつとりと眺めて、卷煙草のパイプに燒けつくを知らざりしが、老母さまは、只今觀音さまに孫女を授け給ひてよと祈りしが、惜しい事をなしたり、アレあの稚兒の勇ましく可愛げなるよ、我も男の孫が欲うなつた、少し憩ふて待ちや、ちよと戻て男授け給へと祈念して來る程にと、いろ〳〵と珠數つまぐつて行かれし事もあつたげな、捨松は寢覺めたか、連れて來よと、四十恰好の品よき男、胡坐寛に煙草吹ひて、障子越しに妻に語る。

妻は笑ひながら稚兒を抱きつ出て來れり、亭主が惚れる程ありて、深山の姥櫻、何所やら昔の色香退めやらぬ楚々たる風情、稚子を渡して直居りながら、ひどうに瘦せさらばいて見る蔭もない兒でありしが、此頃は、これこの通り頰も肉つきて二重頤の愛らしさ、オホヽヽ、何にやら語て居りまする、生みの兩親の顏も知らぬふびんの稚兒ながら、この肥へて來た頰の鹽梅、凉しき眼の樣子、眉の工合、笑ふた顏はなくなつた坊に愈〻善う似て參りました、坊によう似た兒、むさけれど犬の鼻にせゝくられむは流石にふびんと拾ひ上げしが、此頃は可愛き盛り。舌を鳴らして夫婦はあやしにあやす。

門口に人影あり、微かに錢乞ふ聲の哀れに聞ゆ。

妻は起ち上りつ火鉢の抽子あけて錢一つ取り出し門に出づれは、あら穢くろしき乞食男、病み上りの力なげに、淚おろ〳〵格子に縋りつ、眼のみ凄く光らせ頰はこけにこけて顏色蒼く沈みたり、錢投げ與

へつ、後をも向かで奥に入れば乞食男ハまだ去らざる樣子、氣味惡ければ下女に吩付けて、口きたなく退けと叱る、彼はとぼ〳〵と歩み去る。

夕日紅うさして門口に映つる蓬頭亂髮の影法師、一寸とも動るがざりける。

第拾

まだ賑はしかるべき萬世橋の大路ながら、月より吹き出す清風ハ河添柳の裏葉に殘る夕照を拂つて、今朝始めてシツケの糸取つたる袷の襟より散りかゝる銀の光凄う白みて凉しかるべき黄昏の頃より、定めなきは秋の空と何にやらの心、舂ける夕陽を蝕してむら〳〵と拳のやうに立ちたる雲、夕やけ小やけと歌ひはやす稚兒の天氣占も空となりて、何時しかその雲攫み合ひ揉み合ひて一天漆のやうに、雨は街の小石を敲き出して凉味一しほ團扇に描かれし萩の葉に凝つては哀れ打ち捨てられ、竹椽の油團之も用なしに、酒飮む人々は奴豆腐は齒に浸みて旨からずと却けつ、湯豆腐之は旨かるべしと所望しける、

夜に入りて雨降りしきり風さへ吹きに吹く、いつも賑はしき大路も人の往來杜絶へたるに燒饅頭賣る一軒の屋臺店のみ路傍に在り、薄暗き火影、雨凝つて無數の水晶流れ轉べる玻璃を透して微かに照らす一個の老人。此屋臺店こそ俄かの雨に降りスクめられて暖簾疊むともなぁらす障子卸すこともならす、まいて今朝より客足停らず錢函輕るければ、未練の心は眉顰めて流盼に怪しき空を眺め、今少し待て、待たば霽るべし、霽るれば清風明月の 趣 面白く、すこしは涼し過ぎれども日和下駄の齒に新泥の香床

しく、塵も沈んで夕吹の心地よきにつれ出されて、漫歩きする人の多かるべきに、今一時、今一時と雨に詫され風にスカされつ膝を抱へて霽を俟つに、颯々とやうやく風雨劇しく、果ては藏六を學びて頭を縮め、手を懷にし、夜更くるまゝにやがて舟漕ぐ。

暖簾の間より吹き入る雨に横面を擲くられて、ふと眼を覺す、冥を射る雨の音强うして、街に人の跫音なきハ、夜も痛く更け行きつらむ、ぬかッたりと拳もて眼を摩りつ欠を齒のなきぞてに生嚙みにす、薄火とろ〳〵燒金の上にふつくりと狐黄色に焦したる饅頭幾個、商買ものなから、口淋しうてならぬから一個せしめてやりたいものじやと見れば、不思議や算へ置きたる數に二つ足らさりける。さてはとろり〳〵と風雨の音も漸く耳より遠くなり行きて、軒端を度る春雨の靜かにやがてそれも聽くに、聲なくあの家の玉めがそぼぬれたるに、さては雨かと知りし晝の長閑さ、おゝあの婆に茶を入れさせて何にやらを茶媒として五稜廓で戰死したと噂ありし軍太夫殿と碁を打つて之を日暮の友と遊ひたりし俊德院さま時代の夢を見たるやうなりしが、夢の中より手を出して我が賣り物の饅頭を茶媒と旨がりしよハあらさるか、ても不思儀の事ぞもなり、そうじや、そうじや、それにしても家の媼は嘸淋しがりて我を待つらんに、夕網の鰯荷ひて勇ましき棒手振りの賣聲街に走りしが、そを買ふて、半分を鹽燒に半分を酢につけて、薄ら寒ぶければ例よりも、白鳥の酒を增して待ち居るらむに、あゝ昔五人扶持の貼り紙相場に年中豊かならぬ生計しなからも、小楊枝削つて、殘る屑ハ是れも餘祿と蚊遣り火の料となし、大祖脫ひ

て妻を相手に紫蘇酒飲みたる樂みはなか〳〵なり、或年勸めらるゝに否みかねて厭〳〵なから月掛の頼母子講に入りしが、嬉しければ今も猶忘れられぬ十二月の十五日六番の當り鬮我に落ちて、翌年の年始には三ッ紋の黒羽織に何にやら光澤る袴を着け久しぶりにて崩れし束糸を紺のじやばらに卷き代へさして、髪はかぶせ銀杏勇ましく、急ぎたるより袴の右に兩足さし入れて、之は變じやと刻み足に歩む後姿のおかしさを、妻は腹を抱へて元旦早々大笑ひに笑ひしは緣起よしと、それなりぎりに外へは行かず、重詰の旨からぬを肴として終日醉ひしどれたりしとありしか、今はその袴さへ何處へか失せて、昔の春の餘波は、七日おきの風呂に垢を摩る布に留めたるこそ情けなきことどもなれ、ありし昔は短き夢と諦らめても、髪の白うなるにつれて愚痴はやう〳〵昔の夢見し寐覺の床に滋く、愛くるしかりし妻も、今はおばこ髷にさへ髪毛足らずなりしアノ媼を相手として短か夜の明くるを語りて待つと是も何にやら怨めしうなつた、ヤ、風も吹きやんだ、雨も細うなつた、あれ、手習双紙の裂に包まれし螢のやうに、あれ、星影一個ぼんやりと薄雲より透て見ゆるハ、やがて雲吹き晴れて、月は再ひこの屋臺の上に照るべし。

老爺は斯く獨り言しつゝ鬼殺とかいへる疎刻の煙草を、叩き潰せし栞刀豆煙管につめてスパ〳〵とそを吹ひつゝ、又も淋しさに薄ら睡むく、煙管を口に啣みしまゝ再びコクリと船漕き始めぬ。したかゝに額を打ちつけて憫然と眼を開けバ、あら、梅鉢なりに形儀よく並べせ置きし饅頭、見る〳〵足なきにす

るりと驅け出してやがて失せぬ、ピックリして眼を摩すれば、殘るは唯四個のみなり、やがて微かなる火影に映りて、痩せさらばひし蒼白き腕、音もなく障子の破口より現れて饅頭一ッ攫みて消へぬ、昔採つたる束柄、爺は腕に捻りをかけて、故と坐睡る眞似をしつゝ眼を細くして、細き腕の再ひ現れ出でなむときは、手首攫むて、拉ぎ、折り、碎き呉れむと待つとも知らで、怪しき彼の細き腕は再び音もなく現れ出でぬ。躍り上つて無三と攫みつ、拉き折らむと力を込めて勢ひ猛にで曳とひけば、怪しき腕の主人は、蹌踉めきながら、倒れかゝり、障子の骨二小間三小間ぶち拔きてヌッとばかりに現はれ出てたるは、髮を被りておどろ〱しき痩せたる男の顏なり、爺は流石に魂を消して、振り上げし拳を宙に迷はして打ちもやらず。

怪しの男ハ隙を得て頭を障子より引き拔きつ、逸足さして遁げ出さむとするを、さはさせじと飛び出して、案山子の風に搖くが如く蹌々と遁けもせで、只ふためくを腰骨蹴れば、倒れて少時は起きも上らず、領髮つかみて引き立てつ、斷りなしに我か賣り物を盗み食ふものは何奴、盗賊、盗賊、喝と一聲頭を擲てはさても此奴の石頭、痲痺んまでに痛き拳を我から舐て爺は物言はず。

痛し。錢あればこそ汝か餅を食ひしなれ、食ふて何の惡しきとやある、能くも客を打ちおつたな、今錢拂ハむ、錢拂ふて後は見よ、ベソかいたりとて釋しはせじと泥濘の中に隻手をつきて起たむとしては起ちもやらず。

爺は意たけ高に、好う綺麗に言ひおつたな、錢あらばさきに出して快よく食ふとよし、店の前に立ち塞がりて立派に明白に食ふてそよけれ、障子の破より細き手を現はして我が眼を竊み、闇の中に音をも立てゞ食ふは怪しと誰も見るべし、錢あらば疾く出せ、出して機嫌よく餅くへ、茶も進ぜん。

飢ゑ驅られて一時の出來心、爺が坐睡れるをこよなき幸として竊み食ひしなれば、固より錢のあるべき筈なし、漸くに起き上れば袖ともいはず肩とも云はず泥に塗れしその穢ろしさ言はむ方なし、薄闇き洋燈の下に袂返へして、眼圓らに、口小言しつゝ探り居りしが固より錢のあるべき筈なし、

免し給へ、錢は何處へか遺したり、翌日まで我に貸して呉れよ、必ず〳〵相違なく持參すべければ、斯く言ふて凄く冷かに笑ひたる面の憎さ、こけゑこけたる頬のあたりのヱガ栗髭も半は泥に塗れたり。

* * * * * * * * * * * * *

終日賴みなき他人の情を空ら賴みとし人の門に悄然と立てバ、やさしく斷はるとぞよかるべきに、嚙みつく如くはしたなき女に劇しく罵られたる、是れは心地惡しけれど我慢もなりやすきも、細赤松をスカしたる洒濡とした格子の鈴音靜かに、花崗石の沓脫に優しき駒下駄形儀よく並んだる門に錢乞へバ、なまめかしき女の聲の細々と打ち語り居しが、忽ちげう〳〵しく、明き盲め、手が塞つて居るよと、畜猫にさへくさしく物言ひながら、我を突然に叱り飛ばす、不意を打たれて蹌めきながら立ち去らんと見

上ぐれバ、手の内無用と書いつけたる少やかなる木札格子にからまりたり、今しも叱り飛したる女は、口紅いやらしう塗りたる唇に少き歯を見れして、吹く鬼灯の音もなまめかしく、散ります〳〵と何にやら男と酒打ち飲み居る樣子、業は吾が胸の中に煮ゑかへりて、昔は濃くして美くしく、今は疎らに脱け落ちて、力なけなる我か髪も、破りし手拭を穿ち銜かんまでにいきまきたりしが、噫はかなき命を何時まで生活ふべき、何ぼう命の惜しきとよと人に笑はれむ。

されど幾度か夢の中に訪づれて覺ては眼前にチラつく我が兒の顏もやう〳〵に薄らぎ行きて、今は小夜更の枕も冷たからざるまでなりしが、因縁まだ冥々の中に續がつて、あの夕日照り添ふ懷しの人の門邊に我ながらも邂逅たりしとの嬉しさよ、富みたる人の家にはあらざるべけれど、見越の松の年古りて、車井の柱にからむ蔦の工合、砌に立てる石燈籠の青みたるより考ふれば、貧しからぬ身代に苔つきて確乎したる家なるべし、いとしき獨兒を喪ひたるその愛を拾兒に割ひて、夫婦して撫でいつくしむとのありがたさ、それとも知らで我端りなくも錢乞ふて是れは堪らじと逃げんとせしが、障子しとやかに明けて出で來る婦人は吾が兒の母かと、睫毛に貫く露の玉を拂ふに遑なく、心の中に掌を合して、錢受けつゝその婦人の顏を見れば、剃り落したる眉の跡青く、口元しまりて雫の散らんまでに愛らしけれど、一ツの疵は白眼勝あるとなり、下山白とて人相見の忌む眼差しなるは、外邊は優にやさしく見ゆれど、邪慳の心は胸に凝れるに極つたり、いや〳〵知らぬ稚兒を拾ふて養ふて可愛がる其人の心は天女、何に

そのやうなることあるべき、其語ふとを竊み聞きたるに、今に立派に修業させて、學士とやらに爲んと云ひし。

生き甲斐なきは吾身なり、最早惜しくもあらぬ命は、莖を折つたる蓮藕の絲を曳けるやうに、切れもやらず續きもやらず、あるか無きかに生活ふとの腑かひなさ、外ながらいとしき吾兒を見るにつけ、其捨てたりし時の心地のそら恐ろしさ、如何に我耳を惡鬼の私語に貸したるものかな、捨つ、捨つ、捨つるに極つたるものならば千金の玉を朝市に擲つべし、一時の愛にひかされて抱き撫で、日々にめき〳〵と肉落つる吾か兒の頰を、乾いて冷たき唇に舐づりしあらば、今頃は黃泉の客なり、捨つる、狂犬の牙にかゝるか、拾はる、慈人の腕に抱かるか、浪の花岩に碎けて散るやうに、やかて砂礫を嚙むで絕へ入るか、又は日葵の朝日を受けて露色滋かる如く生氣返へつて助けらるか、死ぬる六分生きる四分の境界を運よく這ひ出して、今は彼は知らぬ人の溫顏に笑ひ、知らぬ人の乳房を啣み、知らぬ人の腕に抱かれ、知らぬ人の膝に眠りて、その黑眼勝の愛らしき眼の中には、此の爹々を却て知らぬ人と見てハニかまむ、

されど捨して我が心根の切なきは、之を拾ふていとしがる彼の人の心と何れぞや、犬の鼻にセヽくられんを哀れがり、其顏の何處やら亡りし吾か兒に似たりとて拾ひたるは、其愛や眞の愛ならず。

あゝ我昔しならば羽織袴凛々しく禮物を從者に持たせて天下晴れて親と呼ばれ子と呼びて會はんと易

すけれど、今は障子を洩るゝ聲を聽て吾が影にさへ心を配る意氣地なし。

黄昏まで影の如く彼の家のあたりを彷徊ひしが、生憎雨降り出でゝ風さへ吹き暴れたり、往きかふ人ハ袂を被りて急ぎに急ぐ、傘させるものどもゝ、風颯と倒に吹きて盃の如く仰向になり、骨折れたれば捨てゝひた走りに走る、清助其傘を拾ひ取りて走り來れば、裂けたる間より吹き入る雨ハ、銀の針を射るが如し。

終日食はざりしより痛く飢へたり、雨にたゝかれて身も寒むし、果ては一時の出來心に驅られ、坐睡れる老爺の隙を窺ひ、さもしや二個三個の餅を食ひたりし後は、無殘細腕碎くるばかり攫み上げられ、耳元に轟く叱聲、錢あり袂の中に在りといふは是れ遁辭のみ、故とならぬふりに驚きて何處へか落したり、いざ見て來むと踵を返へせば傍の家の蔭より現はれ出でたる一個の人、泥下駄揚けて清助が脛を蹴上けぬ。

倒れざまに其男の顏を見れば、あら是は、彼の木賃宿に小夜更けの寢覺話、聞くも腥き話したる甲州と綽名されし男外套纏ふて鳥打帽子を被ぶりたり、冷やかに笑ひつゝ、免してやらむ、明朝は必ず拂ふてやるべし、さなくば探偵の役目に對しても容赦し難し、疾々去れ。

否々容さじ、己れやれ、錢拂はむうれまでは、不動の金剛縛、一寸たりとも搖ぎて見よ、爺は齒ぐきに洩る聲していきまく。

第十一

勝手口の障子に何時しか映つる見馴れぬ影法師、昨朝の味噌汁は水のやうな、今朝の汁は若芽の善哉見るやうなと珍らしくも奥様に叱られたり、されは翌朝は程よくこしらへて誉られましよと、吾の膝小僧を擂鉢の縁にかけて、人も見ざるに風采を賣てわざと片襷、右の袂の端を前歯に嚙みて味噌擂り居たる山だしの下女、又しても誰やらが惡戯、その巧のうらを書いて、嚇して、膽を潰させて、笑ふてやらむと、采配片手に提げつ、周章しく障子を明け放ちて突き出せば、吹き消すやうに影法師は失せて、さても不思儀と下女は投げ首。

煤けたる行燈の光影、針さしたる痕より透けて、星のやうなるりの數を算へ盡して、さても、今宵にかぎりて奥の客はまだ還り給はぬと見へたり、宵雨の淋しき夜は早う横に起ちたいものと忍び音に生欠して、早く客の還らざるが恨めしく、今年の春の年玉に鹿子絞の半襟、元結簪に添へて紙に包みしものを、アノ御客樣の奥さまより頂戴せしことあれば、恨めしう思ふは勿体なし、勿体なけれど吾が眼れ燈火に暈を見るまで疲れて果てゝ何うも斯うも睡てう、睡てう成らぬと、部屋の隅に箒を立てゝ頰冠させつ悄然と坐り居れば、軒端より落つる雨の何にやら笠らしき物に當つて、今まで拙手の爪先にかき鳴さるゝ琴の音のやうなるが何時しか止みて、盆の上に豌豆落すやうな音す、薄氣味惡るけれど窓の戸を推しもやらず、高く咳す、されど怪しき音はまだ止まざるに、愈よ氣味惡るけれバ、故と音さしてつと

戸を推しやれば、雲の如き人の姿ふッと消へぬ。

　礑と戸を締めて、かけ金の釘を嚴うさせば、骨の髓より出づる身震一ツ、領より冷たき手に撫でらる心地して打ち伏すに、呼鏡劇しく鳴らさるゝに唯と答へて奥に行けば、いざ罷らむ程に、車一個を索めて來よと客のいふ、袖扣へて夜も更けぬ、宿り給へと主人の留るを、只罷らむ罷らむと頭を掉て否める客の恨めしくはあれど、大黒傘を傾けて、射る如く吹く雨を衝きて、吾が家の門を二歩三歩刻み足に進み行けば、霧のやうな人影、吾が袂を掬めて冥のうちに見へずなりぬ、魂も身につかずひた走りに走りて車を索め、その歸途は、愛嬌なき武骨の平日にも似ず、車夫を相手に、雨が降れば路が惡い、晴天になれば路か好い、御尤の挨拶に車夫も心のうちにおかしかりなむ、客を還へして臥戸に入れば復も雨垂のあやしき物に當て、薄氣味惡ろき音の、彼方へ細り、此方に高く、やがてその音家を繞りて門のあなたに聞ゆると思ふに、忽ち枕元の戸蔭の雨垂の音常ならず、夜具ひき被ぎて畏はがりぬ。

　花もまた睡げに見ゆる曉より童の群れつ嬉れつ、紫、しぼり、瑠璃の朝顔の花を垣の間より摘みとりてい、朝のまゝ文字書き習ふ机の上の水斗に挿して眺め、殘れるを讀本の中に押し乾かして我が花の輪こそ大きくしてしかもその色の美しいとよと誇らむと、培へる主人の睡氣を醒さむと競ひて、咲に咲きける花こそ心ならずも稚兒の可愛ゆき指に摘まれて、殘れる花の露光湛々と美しかりけるを、坊にも見せて進せむと、むづかる稚兒を脊負つゝ、寢亂れ髮を朝風の冷たきに吹かせて飛石傳ひに蹈む庭下駄の

音は、泉水の萍を吹ひて行く小魚を愕かして、そこらあたりを歩むうちに、背の我が見何におびへけむ、緩く肩に載せかけたる双の手に緊乎と襟のあたりを攫みて身を反らしつゝ、後を顧きて家へ家へといふ、負ひし手に輕く叩きて、おかしき兒かな、玉も笑ふて居ることよと、池の汀に端坐まりて、浮きては沈む魚を餘念なく見つめて、折り〱前脚を揭げて顏を洗ふ眞似し居る猫を頤もて敎へつ母はいふ、頭を横に振りて足つき張り、手綱ひき絞つて勇める駒を停むるやうに身を母の背に仰けざまにして、愈よ家へ〱とむづかる、大人しくせよ父さまに叱られむと何氣なく打ち見やれば、破垣のあなたより朝貌の葉越しに、やせさらばいし男、掩はれし亂髮の中より眼を白く光らせて、瞳を据へて覗ひ居たり、恐ろしがりて急ぎ緣に上り障子ひき立てぬ。

この事朝餐の膳に向ひし時の談柄となりて妻は頻りに畏がれば、給仕の盆を側に置きて下女も先つ頃雨の夜の事、陰法師のことを恐ろしがりて語り出でぬ。

主人は埒なきことゝて、生返辭して、隣家の娘がげう〱しく長歌うたへるその節まはしのおかしさに耳を貸して、より〱笑めるを、下女は吾か話を興がりて聽くとひがめて、得意に語る、妻の眼を圓にして返事も漸やく力を籠むるに、主人も何時しか耳を欹てゝ聽き入りしが、さては我も怪しきことを見たるあとりき、去年の秋の末、夜永の眠り覺めて初雁の音枕に落る小夜更に、庭の柴折戸風もなきに開く音するに、窻の戸細く引きて庭を見やれば、冥に跫音のみして恐しきもの〻見へざりける、その翌宵は

遅くまで眠らでありしが怪しきものも來らず、その翌晩は宵より夢を見て、朝早う起き出でぬれば、柴折戸は明け放たれぬ、今年の春の門の梅の散らぬ頃、微醺を冥より逆る香に吹かせて門の戸打ち敲かむとするに、我より先きに人ありて音もなく吾か袖の下を潜り脱けぬ、誰じやと咎むるよ、答もなく、人もなくなりぬ、不思議なるは此事なりと打ち語るを、下女は話に氣を奪はれて主の顔を見つめたまゝ飯匕とりつゝ飯を茶碗に山と盛りぬ。

それにつけて。去年の冬頃より春にかけて、日々に門に錢貰はむと來たりし乞食男、病み居るか、病みて死せるか、都を追ハれて田舍に行きしか影さへ見せぬは怪しゝと語る話柄も、煎花の香薄らぐとまゝに、これも何時しか消へたり。

或日の夕暮、門口に訪ふ聲す、下女襷は外しながら小走りに、走り出で誰さまと見上ぐれば、黒羽織を着け、薩摩ガスリに濱縮緬の兵兒帶寬かに、雪のやうな足袋に疊打つたる駒下駄を穿たる男なり、ハツとひれ伏しつ上眼にその人の容貌を見れば何處やら見覺へあるやうな、なきやうな、知れる人なりしならばその名を問はむは失禮なりと、嚔の出んとする前の心地にさも似て、其人の名は喉より舌の先きへ轉ばり出でんとしては出でもやらず、唇のあたりに大きなる黒子一個あるより不圖心に浮びしは、垢面亂髮の乞食男の姿、さてこそ其服裝の綺麗なるにも似やらずして、彼の顔色の今も猶非人の如く蒼白く瘦せさらハひしを怪しく思ひしと、下女が瞳は眼の中を漂ひて呆れに呆る。

奥様に御逢ひ申し度く推參したるよしを取次ぎ下されといふを半ば聞くか聞かぬに、不女は轉ぶが如く奥に馳せ入りて、周章しく奥、奥、奥様、奥様、急に聲を潜めて、例の乞食男が、今日は大變立派に著飾て、今、門口に、今、奥様に御逢び申たしとて、今、門口に待ち居ります、今、今、あしこに、うろたへて言葉の條理も分からず、

急ぎ玄關に出づれば、是れは是れは、正しく彼の顔のみは乞食男に相違なし、呆れて言葉も出でざるに、彼はしとやかに頭を低う下げて、先頃中ハ日毎に御情けを受けて報果なき命を今日まで續きたるも是れ偏に御當家の御蔭あり、漸う〳〵果報連り來りて辛らき悲しき恐ろしき境界を脱け出ましたれば、今日は御情に預かりし御禮までに伺候ひしなり、坊さまは嘸御成人なされしならむ、御留守ならざれば御眼にかゝりたしといへば、障子の蔭より小走りに走り出てたる稚兒、母の肩にもたれかゝりて流眄に見馴れぬ人よと怪しげに見る、オヽ成長さうなつた、イヤ御成人なされました、幾度も浴したれバ、はや垢も何も落ちて終ひましたれば、一寸暫らく爰へ來て、爺に抱かれ給はぬか。

意味惡し、行くな、避けよと口には言はざれと袂を曳ひて母はいふ、何より結構な事なり、されど昔を忘れて驕ては成まいぞへ、竹や坊をあちらへ連て行け、下女は稚兒の手を把て起たむとするを、男は周章めきて手を揚けつ、今少し、今少し、愛らしいあの笑顔、かぶきりの房々としたる、何時しか睫毛を貫く露の白玉、さとられじと顔をそむけつ、今暫し、今暫し、

妻は、けむもほろゝの素振、何用あつて來かたと言はぬ挨拶ぶり、彼ハ力なげに立て起りつ、恨めしげに奥の方を打ち見やりて、悄然として行きもやらず、妻ハもどかしく、竹や、檀那さまも程なく歸り給ふべきに夕餐の用意は如才なく膳立して置きしか、洋燈の掃除は出來居るか、火を點す用意せよと、邪魔ものめ、歸れ、疾く歸れと言はぬ計りに云たりける。

恨めしげに主人の妻が顔を流盼して、さらば罷出申さむと起ち上りつ門の格子に手をかくれバ、奥より洩るゝ稚兒の聲音、嬉々と何におかしきや無邪氣に笑ふ、己れやれ、眞の父は今汝が門邊に追はれて膓絶ゆる悲しさに、心に泣きて居るをも知らで興ずるか。

今は人の子なれども、そがいとしさに可愛さに、汝故にやう〳〵と魔界にさまよい入りて、十年の命を五年に縮め、五年の命を三年に縮め、三年の命は翌日の命と縮めても、逢はむと思ふ一心は矢も楯も堪らずして、今日も迷ひ來れる心根を神はしろしめさずや、佛は受納し給はぬか、我と汝が親子の縁は前世の約束斯くまでに薄く、斯くまでに疎く、斯くまでに情けなきとに極つたるか。

散りかゝる涙を隱しつゝ腰をかゝめて格子の戸靜かに明けて外へ出づれば、細君はツンと起て礑と障子を締め、穢い、竹や、鹽まけ。竹は出格子の三日月より彼の男の後を見送れバ、門のあたりを暫し低回してやがて一町あまり彼方に行きたりと見へしが、彼は何に驚きけむ、血相變へて、下駄拔き捨て、一散に走りける。

跡より追ひ來るは三個の巡査、さてはと妻も下女も胸轟かしぬ。是れより後は彼の男の影も見へずなりぬ、夫婦は吾が兒を花と愛で蝶と可愛がりて、幾年の春秋、さても待遠しかりし十年は一と昔、小夜の寢覺にをよび折れば夢とたちて、坐敷の疊の黄みては又青むと十度廿度。

第十二

＊　＊　＊　＊　＊　＊

早乙女が梭を投ぐるより早く歳月たちて清助常闇の中に埋もるゝと二十餘年。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其方は清助と申すか、衣冠正しき法官の一言、人の血を啜り人の肉を喰ふて、霜氣吹く匕首を我が頰の荒髭にざらりと當てゝの刄尖に肝をさし貫きてそを下物に髑髏の大盃あほりつける不敵の惡漢も、橫木のほとりに顏さへ得上げさるべきこの嚴めしき法官が弩よりも鋭き一言を、胸つき張りて受け止めつ、右の腕は背にくゝられながらも左の腕は前に橫はる橫木を鷲攫みにして針の如く生ひ茂れる胸毛は冷やかに吹く風にさへ戰がす、法廷の砂礫に兩の踵を沒して古木のやうに突き起たちる男、顏色黑うして而も光澤なく、頰を劃して刻まれたる幾條の皺、半白にして螺れし髪を裂ひて露はれし額骨のあたり蒼み

沈みて、眉の麓よりきらり〳〵と白く光れる眼鋭く、こけし頬に凄らしき笑を湛へ、眥を決いて法官を仰ぎ視つ。なに、なんと、清助とな、清助、清助、如何さま二十餘年の昔には我が名を清助と呼びたりしかも知らず、わゝ、慥かに清助とは我が事なりし、されど今ハ吾が父母がつけし名も我が徒の口に上らず我も亦忘れ果てたり、只蛇の金太と人も呼び我も許せり、見給へ是れをと對へざまに、左手を懐に入れて片袒脱げば。

背一面に蟠まる大蛇、焔の如き舌を吐ひて兩眼に血を濺ぎて擡ぐる頭を大斧に抑へて力身返へる金時、丹青の色麗はしく、しかも肩より彼の蛇が頭にかけて深く刻まれたる太刀瘢一條、蒙茸として生ひ茂れる毛の間を縫ふて流る。法官も倍審官も縲絏を採れる獄丁も、此男の不敵なる振舞に驚きけん、神々しき法庭の中は大風吹ひたる後の如し。

法官は椅子を離て躍り上りつ、卓に兩手をつきてさながら乳虎の水に映れる吾が影呑まむと猛るやうに、髭を竪てゝ、清助無禮、この法庭を何と思ふか、神妙にせよ清助、縄採れる獄丁等はふためきて、彼が腕を拉き折て袒をし入れんとチジ上ぐるを突き拂ひつ、周章るな青鬼ども、吾が名の譯を解さむために袒いて見せたるに何が惡いか騒ぎ召さるな、六尺高い臺に登て、頸のあたりに荒縄のかゝる時、呼吸弗ッと吹き切つて機踏む時には、せめては是れまでの馴染甲斐に痛くないように、苦しくないやうに、尚更冷へてしやッチこばつたる吾が屍を早桶に納める時には、汝等の世話にもなるべし、この蛇の金太

の眼の黒きうちに、何處なりとも指一本觸れて見よ、騷くなと言りながら悠々と膚押し入れて、黒き舌を現はしながら高く笑ふ。

清助、清助と續けざまに法官のしかゝつて言葉劇しく。默れ、默れ、默して我が問ふとを靜かに聽け、聽て明晢と答ふべし、されば先つ問はむ、汝が背の太刀疵は。ハゝゝ此太刀瘢か、この太刀疵こそ蛇の金太が身体の錦なれ、この疵あればこそ大手を振て我も威張り人も許して大哥といふなれ、幾年の昔、年も月も日も忘れたれど、片割れ月の影波に落ち潮の花飛び散て闇を照せる小綾洵の濱邊、ざんざと鳴れる松の音浪の音こそ屈強なれと、宿を急ぐ旅客をやり過して木蔭より躍り出でつ、力を籠めし雙の拳を聯べて脊骨したゝか突きて、彼が一聲叫んで擲けつくる提嚢を拾ふ一刹那、闇を射る電光閃めいて、我が背にヒヤリと中つたりしを、避るに急なりし我は知らずして走りに走りしが、やがて松の切株に躓きて倒るれば、怪しや肉をチギらるやうに痛み劇し、掌を背に廻せば、脂の如きもの流れ出てゝ而かも腥さきは、さてこそ斬られたれと心付き、波打つ際に這ひ行きつ、潮に疵を洗はすれば、血汐僅かに乾いたるより漸くに力を得て、やう〳〵に蹌踉きながら濱邊傳ひに箱根の山の路なき草木を分け入り大谷の中に木の實食ふて潜みけるに、不思議や岩間より流れ出づる泉の温くしてしかも藥氣の強きより、さては里人のまだ發見さぬ藥湯ならむと、その泉を湛へて浴みするに、日ならずして拭ふが如く痛も消へ傷も癒へぬ、其時なりし關所の跡に網を張りし蛛手が子分と呼ぶ男にて、何時しか下谷の木賃宿に在り

し下總とか云へるものと邂逅ひて、幾年の間淋しは山の中ながら少しは賑しう暮たりしが果ては木曾、東山のあなたこなたに飛び行きて、何時もこの太刀瘢が吾身を飾る錦となり、なんと。汝が都を彷徨ひ出たりしは、さればさ、怪しゝと思はるゝはお尤なり、京に居りし其時はそれはそれは言ふも耻かしき意氣地なきことをなし居りしが、いとしく思ふものありて、それが餘の可愛さに漸く惡魔にソゝのかされて、果ては都のうちに身を置きかね、さまよひ出し時は朝顏の咲きたりし頃なれば七月の下澣なるべきか。

いとしく思ふものとは妻か、兒か。

噫、可愛の妻、可愛の兒、妻とも兒とも法官が思はるゝに任し申すべし、唯吾が命を打ち込みたる可愛のものに迷ひ、迷ひてやう〳〵魔道に彷徨ひしなり。

いとしきものゝ愛を買はむには、力なき我は人の物を奪ふより方便あるべからず、況して僞虚と利欲を捏ち丸めたる此世界の中に生を禀けたる五尺ゆたかの我か身幹、小さき胸の中に潛める我が思の十分に遂げ得ずとも、せめては人間並に面白おかしく浮世を渡らむとの心次第〳〵につのりては、薄き唇を叩ひて追從の舌を動かす者が榮耀を極むるを見るにつけ、無暗に頭を低けておへいへい云ふものが白晝大手を振て横行するを見るにつけ、むら〳〵と業を煮やして、ゑい儘よ、我も人間、五十年の一生夢なり夢なり、夢ならば畏い恐ろしい悲しい辛い面白からぬ夢を見るは阿呆ものと悟つてからは漸うに惡

事は業もなく藝もなき人の爲すべきことゝ心得へ、何時ぞや他の家の窻より飛び入て眠りたると思ひし隱居の叱と高う叫ぶに膽縮み上りて、早速の氣轉に猫の聲色の出ざるを笑ひ、又たこれ遣ては今宵より露に宿て原野の中に臥ばならぬ、病める故郷の母指折りつゝ待らむに、心は矢よりも走つて堪へがたし、遣らし遣らじと涙片手に拜む姿の哀れなりしに、あたら情ゝからみて取り逃したるを笑ひ、やう〳〵惡運つのり來つて、さても面白おかしと思ふ間もなく、二十餘年は夢となつて、去月の廿日宵冥ならばむざ〳〵繩にかゝらざるべきに、さても詮なし。

汝か二十餘年來の惡事は先つ頃の自白の如く相違なきと必定なるべし、唯問はむ汝がいとしきものとは何か。問ふて下さるな、二十餘年後の今日まで胸のうちに轉ばり居るゝそのいとしきものゝ行衞、眼のさきにちらつき居るに其いとしきものゝ俤なり、我が身には一人の稚兒ありて、一歳の時、我之を路に捨てたり、捨てたれど流石に恩愛のきづなは冥ふの中に續つて、端りなく我が兒を拾ひし人の家に邂近ひてより、やう〳〵我は魔道に彷徨ひ入り、影のやうに我が兒の家を離れざりしが、病みて五日ばかり打ち臥したる翌日蹌踉つゝ、懷しき家を他所ながら訪づれば、何處へ移りけむ、晝ながら門の戶固く閉されたり、垣の破れより內を覗ふに石燈籠の蔭に鬼を避けて二人三人の童部蹲踞りつゝ、やがて鬼が來たとばら〳〵と散て走る賤心なき草履下駄に草花も大方踏みにじられぬ。　いとしきものゝ、消息は夫よりなし。

今我いとしき兒の成長し居るあらば年は幾何ぞ二十有五、八ゝゝ失禮ながら法官樣程の年頃ならむ。

此の日はこれにて廷を閉ぢられたり、幾日かの後再ひ開かれぬ、撿事と辯護人とのやかましき論辯を耳を掩ふて更に聞かず、豪膽を裝ふ虛居睡の耳にも十年の懲役と聞ては流石に顏色蒼白くなりぬ。

食に飢へたるもの、錢に飢へたるもの、さまざまの餓鬼は、さもしき囚屋のうちに聲を呑めど義に飢へ道に飢へ愛に飢へ情に飢へたるすさまじき餓鬼は、槿花一朝の榮と人は云へど浮世を面白おかしく渡るもの多かるべきか。

噫、　親子は實に一本を橫木の隔てゝ相對し居たるなり、清助が罪を斷ぜる法官は是れ清助がいとしきものなり、父母は憚て語らざりし故、この若法官は夢にも是れを知らざりしなり。

哀れ清助は石川島に送られぬ、人間定命の歲を活き延びたれど、再び天日を見るの日は未來永劫あるべからず島根に寄せては散る浪の花、もろくも消へて行く最期の時まで、背につく肚の皮のうちには、唯いとしきものゝ思一塊。

清助は捨てし吾が兒と知らで、そが爲めに我が罪を審判せられ、罪を斷ずるものは我が眞の父なるを知らずして審判く、茫々漠々兩ながら相識らず。

（大圍圓）

◉心字池

其一

思へば思ふほど、不思議でならぬと

斯く獨語して白磁盞の洋燈の邊に、悄然と雜巾さす針を停めて、思ひに沈めるは、四五日前より此の小陶綾の濱なる花谷子爵の別業に上つた新參の侍婢、洋燈に照されたるその顏を見れば、眉秀で眼清く、淡雪に半ば埋もるゝ紅梅の花一輪と眺めらるゝ愛らしき唇、外の方は小夜の嵐簷に音づれて、芭蕉の葉の婆娑〳〵と戸を敲く、寂しさはいや增して、この美くしき侍婢の膝に載せたる銀剪も、氷より冷たかるべき秋の夜。

合の襖を推し開けて、ヌッと顏を出したるハ此の別業の下男百介、酒の香を芬とさせて乾笑、オヤお春さん、何を其樣にお鬱さなさる、夜も大分よ闌けたから、早く臥つたが好かろうよ、ハイと微かに答へながら、可愛き唇より眞珠のやうな牙をチラと露はして、弗りと縫ひかけし糸を截り、ホンに夜が闌けましたこと、柔順に針箱なんど收めむとす、百介ハ火桶の傍に坐を占めて、紅熱かへつた顏を兩掌に摩りながら、二つ三つ四つ續けざまに飛び出す欠を揉み潰して、お春さん、お前はまだ此の家の若殿樣のお顏を見た事はあるまいチ、言はれてお春はサッと瞼邊に紅を潮して、顏を燈火に背けながら、イヽエまだ一度も見上げませぬ、妾ハ此の別業へ上りましてより今日で六日目、酒掃をする役ながら、奥の

御坐敷へ來てハならぬといふ仰せ、とんと合點が……と思案顔、百介は低く笑ひ、ろうだろう〳〵、一度お前が若殿樣のれ顔を見たら、それは〳〵喫驚——喫驚して氣絶するほど……
お春の優しき眸は此の時異しき光を放ちて、喫驚——氣絶、ソレハマア如何いふ仔細で、百介はニヤリと凄く笑ふて、ソノ美しいのにサ、業平朝臣を苔の下から喚んで來ても及ばぬ程の美しさは、誰れ知らぬ者もない筈、お前のやうな妙齡の女兒が見たら、定めて眼を舞はすとてあろうよ、言はれてお春は何やら返辭も耻かしき躰、それだからサ、お前を奥座敷へ入れないのよ、氣絶でもされては大變だからよ、解たか。
腑に落ちぬながらもお春は優さしき返辭、ハイその事は解りましたがコヽにまた一の不審儀、嘻昔の夜半ごろ、ふと奥の方に聞ゆる女子の啼聲、怖がりながらも耳を欹て聽けば何やらアノ老女の聲らしくて……百介は梟の如き眼して。聞へたか。ハイ聞へました。何と言つて啼て居た。ハイ。ハイでは解らぬ何と言つた。れなさけないといふ啼聲、と微に答へたるお春の聲は震さて、散らげし鬢の毛も戰ぎたり、エッと言つて百介は眞面目を裝う微笑の色、それはお前の夢であろう、夢だ〳〵正しくお前の夢だよ、都より遙々とこの寂しい小陶綾の濱へ來たから、我か家の事のみ思いつゞけて、そういふ怖い夢を見たのだよ、不思議なとは何にもないこの別業。何うやら夢ではないようナと、お春は消へ入るやうな答をして、跡はさゞんざと吹く濱の松風、嵐のうちに兩人とも悄然、やがて臥床に赴さぬ。

夜の午を過ぎたらむと思はるゝ頃、墨より黒い冥夜を染め抜きたる、一輪卯の花のほのめく如く、長廊下のほとりに眞白の面露れたり。
誰ぞと視れば彼の侍婢のれ春。
とんだ處へ奉公に來たものさ、今更家へ手簡をやつて、母様に譯を話して退ろうにも、父様の生存中から恩あるアノ生野さまの御周旋、それに對しても暇を取るといふとは出來ぬ譯、ハテ如何したら善かろうぞ、竊と行きて奥の様子を見て來ようかと、哀れなる孤女のお春は靜かに廊下を辿行く。
廊下の彼邊には有明の燈籠淋しげに置かれ、其の光は廊下を滑べりて釘の頭は星かと閃めく、雨戸一枚隔てたる庭の方は松風の音、波の聲、散る波の花に夢を敲たれて、悲げに濱千鳥啼く。

其二

十年の間、孤兒の悲哀を雨も月も洩るゝ破屋の中に味ひたる女ながら、其の名に縁みて唯だ優さしきれ春、まだ無邪氣なる童心失せやらずして怖い物見たさに、魚を踏む鷺の如く抜き足さし足して進み行く、その心下には漣たてゝ。
兎角して有明の燈籠の邊に歩み寄りフと顧みれば煙の如く淡く障子に映つる吾が影法師、跫音にさへ心置かるゝ夜闌の長廊下、思わず後へ却きてホッと一と息。
オゝ今夜はど凄い寂しい夜はないと、妾としたとが何して此處まで來たであろう、不思議ナと、何う

して來たろう、オヽ怖いと、戻つて早く臥せりませうかと、言へど胸の底よ潜み藏れし好奇心は、この優さしき乙女の耳に私語きて、戻るな、行け〳〵と嗾かける、乙女の手は障子に觸れたり、我知らずる〳〵と推し開けて中に入る。

有明の燈籠は幻の如く幽かよこの客間に照し入りて、正面の床の間に懸けられたる誰が筆の山水幅は、さながら夢の中の山を看るごとく有るか無きかに見へ、高麗縁の疊には苔でも生へて居そうにシト〳〵と濕ひて、歩み行く氣味の惡るさ、何處ともなく冷や〳〵と吹き來る風は、乙女の頰を舐るに似て、お春の骨まで徹る心地。

骨の髓より出づる身震して、オヽ怖い、怖い、何の分別もなく此樣な御座敷へ忍び込むで……若し家の人に見付けられたら何と言譯が出來ようぞ、紙一枚失せたりとて、ふりかヽる無實の罪、何と吾が身の濡衣を乾うぞね、都に在ます母樣のお嘆は素より、恩ある生野樣に申し解があろうか、早く戻りて臥せりませうと、言へと猶ほ立ちも去らず。

二間三間を隔たる奧の方にて、姨、姨と二聲ばかり少時して老女の聲、若樣お目覺で御座りますか、續て襖を推し開ける音、

さら〳〵と衣の裳を曳ける音、

お危險う御座りますと、うるみたる老女の聲、

立ち盡したるお春は、さながら飛箭の眉間に中つたるが如く、我にもあらず躍り上りて、裳を蹈みて顚ばんとせしが、僅かに蹌踉めく脚をふみとゞめ、袖を面に掩ひしまゝ、心は躁ど尙ほ急步の跫音を竊みて、障子の外へと逃げ出し、音せぬ樣に立てきりたり。

とたんに彼方の襖の開く音して、障子に映つる洞燈の光、衣の裳曳く音は益す近し。

お春はハヤ絕躰絕命、胸には大波うちて、兎やせん角と氣はどぎまぎ、猫のやうに背を丸めて有明燈籠の蔭に身を潛め、見るともなく仰ぎ見れバ、あら不思議障子一杯に映りたる、影法師、其の頭顱は甕よりも大きくて、蓬ッと竪ちたる髮の毛は彼方こなたに一と束づゝ、その髮の毛のうちにこそ、鬼のやうなる角の藏くれて居らめと思はる程の怪物の姿。

ぎッよとして胸がす視つめ居の乙女の眸より、その魂ハ脫け出でたるべし、驚きながら仰ぎ見れば、彼の恐ろしき影法師は、裾ひく音の次第〳〵に近づくまゝ、漸くに少さくなりて、やがて一個の瘦せたる男の姿となりぬ。

その影に傍ふてまたも映つる老女の影。

僞言を言ひしとなき乙女なから、窮すれば惡智慧が働らくもの、お春ハ痺るゝ舌を勵まし。奥のお里さま、戶迷ひをいたしまして。人なき夜闌けの廓下より女の聲、愕きたる老女ハ左の袖にて伴ひし人を掩ひ、誰れと銳く問ひかくる。ハイ私……、春で御座ります。

エッと言ひざま障子を僅かに推し開け、右に持ちたる洞燈を高く掲げて。春か、ハイ、何うしてお前は、睨みたる老眼は紫の異光を放ちて、れ春は電に射けずられたる蓮の葉の露、魂も身も消へむばかりに、ツイ戸迷をいたしまして……

其三

其夜は怖ろしき夢にのみ魔はれ、暁ならざる頃、お春はハヤ雨戸をくりて、厨の方に立ち働き居しが、心地悪しとて、朝餐も茶につけてソコ〳〵に仕舞ひ、何にやら物思ひに勝へぬ顔色。

亭午に至れば、下僕の百介は周章しく厨に走り來て、膳を取り出し、さながら流星の如くに茶漬飯を食ふ、春は訝かしげに、底事ぞ、その様に蒼皇て御食を上つてサ、お肴も煮へますに、といへば百介は頭を掉りて、はや滊車の着く頃じや、急きて出迎ずばアノお里さんにまた叱られむ。東京よりの御客様とか。ウン東京よりお客様が來る筈よ、箸を投げ舎てゝ忙はしく、新らしき衣を葛蘢のうちより取り出し、それを着易へて走りながら帶ひきしめ、衣紋つくりつゝ行きたりける。

下僕のれかしき風姿を目送りて哂ふ春の肩を叩き、れ春さん、と喚ぶものあり、驚きて顧けは老女のれ里、さては曩昔の事の糺問かと、心躍りてハイと答ふればれ里は聲優しく、今日東京よりお賓客が來る程に、御酒の支度を早くとばかり言ひ舎てゝ、意ありげに春の顔を見て笑ひぬ、春は彼方の棚の上なる筐を啓けて葡萄酒の瓶を取り出し、之を淸らなる膳に載せ、罐詰の口を解きて、香ばしき菓子を青磁

の皿に盛り居るうち、はや門邊に車の音しけり、玄關に人を呼ぶは、道しるべしたる百介の聲。
奥の方より老女は飛で出たり、春も襷を忙はしく外して、玄關の敷臺へと跪づきぬさて、恐る〳〵見上ぐれば、靜かに車より下り立ちたる一紳士、フロックコートに高帽子、金縁の眼鏡をかけて葉卷煙草を燻らし、胸には金鎖を閃めかして、萬華奢の服裝、出迎へし老女に輕く一禮して、やをら脚をさし伸せは、車夫心得へて跪き、雨に濡れたる鴉そのまゝの靴に手をかけ脫がし參らす、老女は紳士の持てる革筺を恭しく擎げて此方へと奥へ導きぬ、續きて侍婢らしき若き女二人、車を下りて春に挨拶し、東京の本邸より當分此方に參りしもの、何分よろしくと言ひて老女の後に從ひぬ、春は再び厨に在りて打ち働き居、百介ハ町へ買物に行きぬ、例時の料理屋の稚丁、膳籠擔ふてくさ〳〵の料理を運び來り、今日はまた東京からのお醫師さまかネ、サゾ忙しからう、お醫師樣かゑと春は始めて彼の紳士の事を知れり、稚丁は頷きながら、お前はまだこの家の事を知らないかエ、アノ庭に古い池があるだらう、それに毎年人が落ちて死ぬよ、去年は己の友達、一昨年は己が隣の娘が身を投げて死だ池だよ、此春此のお別業が出來てから、今年の夏落ては死ぬものもなくなり、町の者は大悅びサ、そしてお前は若殿樣の御病氣なのを知らないか、御病氣かゑ。御病氣だつて尋常の御病氣ではないと聞いたぜ、
談話の最中、今日來し侍婢の一人は奥より來たり、御酒をお客間へといふ、稚丁は蒼皇てゝ逃げ行きぬ、春はハイと優しげに膳を捧げて客間へと行けば、床の間を背にして悠然と坐り居るは彼の醫者なり、

側に傍ふて老女ハ憂ひ顔を仰ぎて、醫者と何にやら語り居しが、やがて涙を袖に掩ふてツト起ちて奥に入り、立ち停りて襖の蔭より半面を露はし、春やお客樣に御酌をしてとて行きぬ。

袂の端を噛みて葡萄酒の瓶を取り上げ、白玉を展べたらむ如き手を伸べて醫者の鍾へ灑ぎたり、羞しげに差し俯むく春の眉の霞み初めたるあたりを流眄に覗きて、醫者は把てる鍾のうちに漣を立てしが、やがて醉のほろ〳〵と廻はりし頃、さて〳〵善ふ肖たものもある、若殿のなつかしがるも……、ハテ何の意味やら春には解らず

其四

微醉機嫌にて東京より來たりし醫士はやがて罷ん出ぬ、老女も二人の侍婢も悄々として玄關に送りたり、下僕の百介は逸早く裳を搴げて走り出でぬ、滊車の切符を買はむとて行くなるべし、春は曦昔見たりし怪しの影法師、さては先刻聽きたるおかしけなる稚丁の話、庭の古池の事など思ひ合せて、さては若殿樣の御病氣の、重もらせ給ひしにはわらぬかと、小さき胸に徂き徠いしげき疑の雲、そを吹きはらすに由なくて、唯だ默然と立ちたるのみ、醫師の歸りし後も、家のうちは今朝より尙ほ陰々として、侍婢の折り〳〵笑ふ聲も、冴へ〴〵と浮き立たぬ樣子。

春は客間にとり散らされたる酒器など運ひて、厨に打ち働けば、今日來し侍婢の一人は、甲斐〴〵しく襷かけて、手助けせんとて出で來る、桶を分ちて器を濺ひながら、女同志のこゝろ優さしく、二個と

も假初めながらの旅の宿、その寂しさを話し合ひて、はや無二の親しき朋とはなれり。

用を終へて侍婢は奥へと行きぬ、春は端りなくも稚丁の話したる庭の古池の事を思ひ起しぬ、さても年毎に人を呑みたる古池は、如何に水蒼くして底も知られぬ凄味やあると、庭掃く次手に鎖されたる柴折戸あけてソッと奥の庭の袖垣の蔭より、彼の池のほとりに行きて看れば、稚丁の言ひしに違はずいと凄し、浮萍生ひて魚の過ぎる毎に、彼方此方に漂ひ、風吹くたびに木の葉はら〳〵と舞ひ落ちて、小々波は忽ち万疊の愁を皺み、さながら冷やかゝ笑へるに似たり。

黄昏の輕寒を怕れて雨戸くらむと縁に露はれしは彼の侍婢、春の物思ひげに汀に立ち盡すを見、庭下駄穿きて傍に來り、　れ春さん何を御覧なさるのと問ひかける、　浮萍の花を吹きて小さな魚の泳ぐさまのおかしくて、と春顧みて言へば、どれと春の肩越に池の面を見る、この時鯉一尾浮べる新月を空に呑みけん、水を打つて跳ねたるあたり、波は蒼皇しく起ちて萍は開き、そこに露はれ出てたる水鏡に、映るは美しき春の面、侍婢はホヽ笑みて、貴女はゑらい罪造り。　訝ふかしげに春は、何が罪造りよと言へば、彼の鳩邊男爵の御孃様にそつくりの美くしさ。　たんとソンな事を……鳩邊様の御孃様とは何に……、　貴女はまだ知らないの、ソレ若殿様の……若殿様の、　知らないの、そんならお聴せ申しませう、　丁度此の春、アノ若殿様は、　鳩邊さまのお孃様と御婚禮を遊ばす所であつたが、　お可哀そうに若殿様は尋常ならぬ御病氣となり、　御婚禮の日も延び〳〵となつたところ、　鳩邊さまよりは御斷りの使たて

られ、戀にやつれ給ひし若殿樣は、お孃樣の寫眞を毎日眺めてはこがれ給ひしが、たゞならぬ病なればとて父君はこのお別業へ若殿樣を遣はされての御養生、昨夜貴女の姿を老女の里の袖の蔭より見て、若殿樣は鳩邊の孃樣そのまゝの貴女の姿のなつかしくてサ、今朝より貴女を枕邊に呼べとの仰せ、今日來し東京のお醫士さまも、この前の日曜日よりは御容躰も重りし樣子と話されて、老女のお里さんは唯だ泣きて居らるゝばかり。

春は羞かしげに雨の袂をうちかへして差し俯き、またしても戯言いふて、と笑へる眼元の愛嬌は、露となりて落ちなん風情、やがてまた細き聲、若殿樣の御病氣は、といひかけて顏を背むく、貴女はまだ知るまいが、尋常ならぬ病氣にて、御兩親の御心配は如何ばかり、此の春まではそれは〳〵美うて、今業平と綽名を受け給ひし程の若殿樣ながら、今日見上げれは、悲うて涙のこぼれる程のおいとしさ。といひさして四邊を見回し、その御病氣とは……、サア其の御病氣とは……、言ふも辛氣、言はぬも何にやら……。掲げたる侍婢の袖の蔭に、二個の顏は藏れたり。

其　五

下僕、丁稚、醫師の獨言、さては前夜の怪しき影法師、春は一切の事を初めて知り得たり、猶は思ひ行くまゝに、見しもの聞くもの、皆な筍の皮を捲くが如く次第に明白と成り行けり。

今まで底氣味惡しく思はれたる彼の老女のお里は其の翌日よりは青眼にやさしく春に親しむ樣子、さ

ては覺めては枕屏風の邊にちらつき、寐ねては夢のうちに訪づるゝ彼の姫君の面影ある我を誘ひて、若殿樣の傍に置き、その意を慰めあば、名醫の匕を投げたる病なれど、萬に一つはおこたる事のあるべしとは、乳まゐらせて育て上たる若殿樣を、吾兒の如く思へる老女の心底なるべし。

さても前世如何なる業因をか作せしぞ、面影の戀人に肖たりとて、人もあらうに忌まはしき病ある人に戀はるとは。春は之を思ふて魂ちゞみ上り、領より冷水を濺がらるゝ心地。

その夜は鐵よりも冷たき衾のうちに明かして翌日となれば、天は麗かに晴れ風は和かに吹きて、小春日和の温かさ、嚮昔過ぎりし村雨の砌に咲ける菊の花の香を蒸し、二輪三輪咲かむとして、葩の一片二片解けかゝりたるさまは、稚兒が來む春かゞなふ可愛き指にさも似たり。

春は箒を手に把りて、落葉を掃はんと庭に下りたつ、今日こそは東京の母の許へ消息して、義理には勝ちがたきも、吾が命にも易へがたければ、萬の事情を生野樣にお話しゝて、明日のうちに暇を得て歸らむなど思ひ〳〵て、箒持つ手を少時停めて亂れかゝる鬢の毛を小櫛もて櫛き上ぐるところへ、庭下駄の音して人來りぬ、春顧みれば、

帽子を眉深にかぶり、領には襟卷して、頰の半ばを沒し、手を袖よして歩み來る、男帽子の廂の蔭を見れば顏は熟せる柿の子の如く紅く照りたり、

さては若殿樣と愕く春、

ニッコリと凄く笑ふて進み來る人、その笑へる眼には睫毛なくて皆爛れ、眼のうちには紅き絹絲を紛したる如く血脈あり、

春は遁げんとて箒を捨てゝ踵を回へす、踉跟ながら彼の人は追ひ來たる、後より續て追ひ來たりしは老女のお里、若樣アレといひさまその袖を捉ふ、春は古池の汀に走り來りしが、絶体絶命くるりと水を背にして屹と立ち、泣聲だして、アレ御免し遊ばせ、御免し遊ばせー

呂律廻らぬ聲にて、邪魔するなと袖を拂つて拳を揮れり、見れば指は殘るもの僅かに兩三本、揮ふとたんに戴きたる帽は飛べり、さながらかげろふの如くぼーッと堅ちたる髮毛、眉もなき渾沌たる顔のみか、襟巻外づれて現はれ出でたる口を見れば、唇半ばは溶けて、睨むが如く露はるゝ歯の凄さ、かつと開けば宛ながら熟せる柘榴の如くにて、恐ろしなんどいふばかりなし。

春はキャッと叫びて汀を傳ふて遁げ行きぬ。

懷かしき姫の面影ある春とやら、逃ぐるな、來よと呼びながら追ひたれども、はや影さへ見へぬに失望して、池のほとりに立ちて見るともなく水の面を見れば、今まで鏡を遠ざけられて看るに由なかりし吾が面影、水に映つりて愕くばかりに變れる有樣、

痛恨、絶望、跳り上るや心字の池の眞中に彼の影は飛べり、浮萍蒼皇しく開けて、水珠は驟雨の如く汀邊に咲ける菊の花にふりかゝりぬ。

* * * * * * * * * * * * * * * *

一月の後ち此の別業は一の廢宅となれり、落葉鳥跡二つながら狼籍たる庭のうちに、心字の池は獨り長へに蒼み、血に飽きて色濃かなる浮萍の間に、夜毎に宿る星の影見て、亡き人の魂かと行く人畏て近かず。

◉寶　刀

其　一

心なき賤が鍬先に壞たれて、ありし昔の城の俤は、年々歳々田に侵され、嘗て神牛の血を濺ぎて据えられたる基礎さへ、今ハ運ばれて誰が家の庭の石とはなりけむ、亭々として晩翠を含みたる一本松のみ、獨り北風に枝を鳴らして、昔ながらの音を停めける。

さても此の僅かに殘りたる城の昔を回想へば、この城の主は誰ぞ、路行く人は馬を停めて、草を燒きて古塋を索め、惆悵してそこらわたりに耕やせる農夫を喚び、懇懃に借問へど、彼は鍬を植てたるまゝ、己が爹々のそのまた爹々の時に、何でもこの四邊に威勢ゑらく、箭射飛ばさずとも空行く厂を睨め落した、それアノ何の守とかいへる大將樣の居られたところと、一昨年御涅た己が婆々樣が話されたよと、言ふて訝かしげに旅客の顏を眺め、やがてまた鍬を揮うて見向きもせず。

哀れ、この地下十丈の鬼の爲めに、其の世に在りし時の歷史を誰か說く、小なりといへども一城の主、家號濃く印したる軍旗の下に、數百千人の騎步を養ひ、百千斛の糧食を蓄へ、必定勇ましき大將軍として、當の敵と戰ひつゝ、城の周圍見度すかぎりの山もを野もを其の領地となして城に向へる武者草鞋の痕一個だに印さしめざりし事のありつらむ、その勇ましき軍談、さては、或日の戰に打ち破ぶれて城は敵の圍中に落ち、兵士多くは討死して、殘り尠なのものどもは、糧に乏しく水に窮し、病馬の血を

刺して爭ひ飲み、死鼠の肉を炙りて競ひ食ひ、果ては城の門を我から打ち開き、刀を舞はして蹌踉めきながら、枯れたる腸を絞ぼる吶喊をあげ、敵を斬りて其の肉を啖ひ、あハれ餓鬼道には落ちざるよと快よく討死したるその譚、大將某の勇戰など、このあたりに昔を今に語り繼ぐ人やある。

狹霧を裂きて、月出で靜かに彼の松の梢頭第一枝に懸りたり、昔しながらの月の影ハ昔ながらの松の翠に宿る、月もし語らば、松もし物言はゞ、兩個は應ゝ在りし昔の譚りして、幾夜を語り明さなむ。

夜は更け行けり。何處より來たりけん、一個の男ありて、この松の下蔭に踞れり、月の光の下より視れば、髮おどろ〳〵に振り亂れて面に被むり、その間より烱りときらめきたるは、哀れ涙に月の宿るなりけり、身にハ鶉衣を纏ひながらも、その上にはふりたるものこそ、年故て定かに看分けがたけれ、おぼろに見ゆる圓一文字の家號染められたる肩衣、この怪しげなる男は、良や久しく掌を額のあたりに合せて、何にやら獨り細々と喞ち居たりしが、やがて垂れたる髮をかき揚つゝ、星眸靜かに月を仰ぎて起ちたりける。

看れば眉は凉しく眼清く、きりゝと緊く結ひたる唇は、その眞白なる顏に照り添ひて、さながら雪の中なる一點紅梅の趣あり、さてもこの美くしき少年は、誰が家の兒なれや聞まほし。

美少年はやをら歩みてこの城の跡をば一周し、いたくも今昔の感に勝へざりけん、低徊顧望して去るに忍びざる有樣なりしが、彼方より夜歸の人の來たるに心づきて、忽ち踵を回して急き故と來し路をさ

して走り行きけり。

風はこの美少年の襤褸の袖を皺りたり、とたんにきらりと月に映りて閃めきたるば、腰に挿したる銀鍬形の刀の鐺

其　二

「此の家のうちゝ物も案内も、是れは行き暮れたる旅人が、一夜の宿を乞ふものにて候、あはれ、簷の下蔭になりと露を凌ぐを許したまへや、灯の影を見てまだ睡らぬ人ありと推し參らす、一夜の宿を貸したまへや」

卯の花の絕間ならねど、一町四面結ひ繞らしたる生垣の中央に、田舍には珍らしき黃茅の門、その扉を八文字に押し開らかば、駟馬大車をも容るべき程の大さなり、門に傍ふて小々やかなる一軒家こそ、門を守る翁の捿めるところなれ。

障子を洩るゝ灯影かすかに、生垣を透して見ゆるは、門守る翁のまだ寐ずして、草鞋なんど作くるにやあらん、訪づれし人は二度三たび門の扉をほと〳〵と打ち敲き。

「夜闌の門を叩きて甘睡の夢を喚び覺すもうたてけれど、月洩る林のうちには、霜を浴びて一夜を過ごしかたかり、あはれ、この家の人に物申す」

と喚べば、僅かに應と答ふる睡氣の聲、大門に傍へる潛門の扉を半ば啓き、そこより半面を現はした

るは五十路にあまる老僕なり、髪も眉も眞白になりて、憂き世の年波は額に多くの皺を刻み、赤黒き顔にてり添ふ醪の醉、隈なく照らす月の下より訪つる人を只視斯う視、

「さては僕を識れる人かと見れば、見慣れぬ人ぞ、この眞夜中に何用ありて推參しつる、コゝはこの四邊の村々を管領かる赤羽の殿の御内にして葛が谷どのゝ邸なるぞ、用あらば翌日また來たれ」

「某は諸國を武者修業する名もなき浪人、今宵は宿を失ふてこの眞夜中まで徨彷ひ居るも、霜繁き夜寒に木の葉を蒲團の夢も結ばれかたく候な、其方の主人に頼み聞えて、一夜の宿を借ろうと存ずるにて候、聞けば赤羽どのゝ御内に名も高き葛が谷どのと承はる、我も幼き折より御名は承はりぬ、葛が谷どのも我が名を知り給はんに、其方は早うこの趣を取次きてよ」

「さらば何人が訪づれ來られ候と申すべき」

「椿が孫なる人の訪づれ來しと告げ知らさば、葛が谷殿は頷き給はん」

翁は少時待てとて扉をたてつ、跡に手を拱ぬきて屹と月を仰ぎたるは彼の古城のほとりにて、見たる壯年なり、壯年は吐く息を白まして、さてはこの家が、國を賣りし葛が谷が一子なる行宗が家邸なるか、己れ狗にも劣りたる葛が谷、その狗の兒なる行宗は、鼠よりも劣りたる曲者なり、今宵久しく拜せざりし亡君の墓に詣でゝ、その歸途に端りなくこの家に來たりしを、是れしかしながら亡君の導きしたまふならむ、いで、面接は其の面に唾はきかけて、不義の白徒を罵り呉れむ、と、拳を固めて俟ち居る

ところに、老僕は再び扉をひらき「殿ははや寐所に安眠て在しませば、唯だこの繁き夜の霜を、僕が部屋のうちに凌かせ給へ、明日になりて、殿の見參に入れむに」といへり

壯者は頷きて「そは忝なく存じ候、さらば其方の情を頼みて今宵一夜を其方の部屋に明させ給へ」と導かるゝまゝに内に入りけり、

老僕は幽かなる燈火の華を落して、靜かに賓客の顏を打ち守り居りしが、老眼忽ち星の如くきらめきて「其方はまだ晩饗をもしたゝめざるか、冷へたる飯なれど熱き湯につけて食召さすや、手造の酒も候へば、温めて進ぜんに」「否、飯も欲しからじ酒も欲しからず、眠りをこそ欲う候へ」

僕は起上りて棚の上より取り出したる二枚三枚の蒲團、木枕添ゑて部屋の眞中に延べ「さらば休み給へや、僕もやがて眠らんに、其方は僕に遠慮せずして疾く〳〵臥り給へ」と言ひ捨てゝ、已は次なる部屋へと行きけり、壯年は先づ腰に佩びたる刀を採り上げ、額のあたりにおし中て、何にやら默禱し居たりしが、之を枕の下に藏くし、兀然として蒲團の上に危坐りつゝ、何にやら感憤に堪へざる有樣、眠りをこそ欲しけれと言ひたりしが、枯木の如くなりしまゝ睡まず、

僕なる老翁は次の間に在りて是れも眠らず、より〳〵弗と吹く大息の聲す、さては乏しき衾を皆なこの賓客に與へ盡くし、己れは獨り覺めてこの夜を明さんとするか。

合の障子に衣の袖の觸るゝ音しけり、危坐りたる壯者は屹と顧みぬ、燈を負ふて大魔の如く映りしも

のれ、正しく彼の老僕の影法師なりける、

其 三

蒲團の上に危坐まりて手を拱き、思に沈み居たる青年は、顧みて大魔に似たる影法師を抑さつゝ、隻手を蒲團の下に差し入れて刀の柄を握り、髻解けたる髮を婆娑と振りける。

曾て此の青年の祖父なる人と、大紋の衣の袖を搖り合せて、共に一君君仕へたる嵩が谷、其の君の國を足利將軍に賣りて、大義の萃まるところたりし竪四目一文字の軍旗の蔭より、一個の不義の武士を出したりとの耻辱を世に流して、利に趨りて浮雲の榮華を貪りたる行宗が父、其の手に把れる弓を舍てゝ牙籌に易ね、腰に佩びたる太刀は擲げて墨斗に代えてこそ當然あれ、實に蝸牛の角の先頭の露ほども利を競ふ商人にも勝りたる腐れ武士、その腐れ武士の子なる人の家に端りなく宿を求めたる青年、敵の中に我から入りしなれば落葉扉に吹かゝりて雨の如き聲をなすにも、明月障子に木の影を映し出すにも、見て俄かに人かと驚くそのところに、この怪しげなる影法師を見る、青年は、零ちんとしたる藕の子を望む泥龜の如く頸を延べて其の影法師を仰ぎ視たり。

少焉して影法師は次第〳〵に少くなりて、障子はさらりと開けたり、現はれ出でたるものは何者ぞ、是れ門守の老僕なりける。

老僕は異しき微笑を皺たらけの顏に湛えて、靜かに入り來りしが。

「其方にはまだ休まれ給はぬか、手造の酒あり温めて進せんと申せども酒は欲しからずと辭まれ、冷たれど飯も候へば、白湯につけて參らせんと申せば飯も欲しからず、さて何が欲しく候と申せば唯だ眠をこそ欲しう候とのみ答へられたる其方、はや夜は闌け行きて曉も間近う候、何とて腕こまぬきて危坐まり居り候ぞ、僕には別の衾の候、穢くはあれどそれに安眠みたまはずや」

青年は吾が疎忽を肚皮のうちにて我から嘲けり笑ひながら、怪しき素振を覺らたじと何氣なき態を裝ひ、

「忝なく候、天下到るところを家となして旅に旅を重ね候身ながらも、この寂寞しき秋の眞夜中には、未練にも我が故郷の知邊に頼み聞へて預け置たる母なる人の事を憶ひ出で、思ひ〳〵て行くまゝに睫毛に宿りたりし睡氣ははや何處へか飛び去りて、越し方の事のみ獨り胸にゆきかひするのみにて候」

僕は呵々と高く笑ひたりしが、見る間に再びニコやかなる顏の色は軒る眉毛のあたりより消失せて、

「最前より其方の顏をつく〴〵と視たりしがさても〳〵世には肖たるものゝ候ぞ、椿が孫なる人の訪ひ來しと主人に告げ知せてよと貴殿の言はれしが、さては貴殿は、椿の六郎どのにて在さずや」

「何と申され候ぞ、某が椿、椿の六郎とや、正しく椿の六郎とは某にて候、して其方は……」

「ハヽヽヽ、六郎どのか、六郎どのか、よくマア成人しやつしやたのう、この老爺は貴殿のまだ振分

け髮の稚兒の時に、竹馬、狗追ひの相手ともなり、また吾か背に負ふて、磧の石戰をも看に行きた事もあり」

「さては其方は葛が谷どのゝ僕熊三どのか、健勝で居ると愛度存ずる」

「六郎どの、諸國武者修業と最前語りたまひしが、その武者修業する士は、行き暮たるところは山も野も嫌はず、木の根岩角を枕とし、または狐棲み荒したる野祠のうちに眠りて、心地を錬り鍛ゆるものと聞きて候が、さて〳〵貴殿の武者修業は安樂のものにてある哉、月も露も洩れざる家に宿を求めて、薄しといへとも綿を入れたる蒲團を衣て、雨をも露をも厭ふとは、如今世の中僅かに靜まりけれど、まだ折り〳〵血腥さ風の吹く今日此頃、公卿の公達なんどの武者修業とは、貴殿をこそいふべけれ、解れり〳〵、酒も欲しかちず飯も欲しからずと辭みしは、吾か主人なる葛が谷どのゝ首級が欲しいといふ意なりしか」

青年は刀を把りて踊り起りぬ、僕も亦た拳を揮り環すと二度三たび、その鈍刀もてこの骨ある腕を斬つて見よ」

其四

六郎が肚皮の血は、今この老僕の吐きたる毒言に激して、面上に遡ぼり來たり、眞白なりし顏はさながら紅のごとくなりぬ、

僕は尙ほ舌を鼓して六郎を罵りつゝ、その拳を揮り回す、六郎は刀の柄を碎くるばかりに握りつめて兩つにせんと氣は苛だてど、容易くは抜かざりける、

さるにても、六郎の手にせる刀一たび室を出れば瓜を割くが如く老僕の頭より龜の尾かけて、兩つに斷ては易けれど、この刀は亡君が父なる人に下し賜はりしものなれば、穢れたる血汐を塗らんは畏多しと、六郎が室のまゝ老僕が眉間を望みて打たりける、

打たれてアッと叫びながら、掌もて額のあたりをヒタと押へて、老僕は後に倒れたり、尙は打ち懲さんとのしかゝりて、再び刀をふり翳すこの肱を下より支ゑ、押へたる掌を眺むる僕、血汐はさながら紅き薔薇の花の如く掌につきたりける、ャゝッ血が…、高く人を叫びつゝ、身を毬にして障子の外に轉げ出さんとす、六郎追ひ來りて脚を揚げ、顚け行く僕の肩を踏みて「無禮もの奴、今ま一度その舌をたゝきて見よ、武士の意氣地に對しても、老耄れたる人の譫言として大眼には見捨てがたし、無禮もの奴」といきまきたり、

金剛力ある人に踏まれて老僕はそのまゝソコに匍匐し「公卿公達の武者修業と言ひしが惡きか、この家の主人葛が谷どのゝ首が欲しかろと言ひしが惡きか、腰脱武士、この汚木に均しき老人を斬つて何とするぞ、斬るならバッサリと心地よく斬れ、腐れたる武士の腰には竹光ならでは重くして歩みがたかるべし、竹光なればこそこの僕を善う斬れぬなれ」

憤に勝へかねたる椿の六郎、屹と睨みつめて眼は皆さけて、睫毛に宿す露一雫、紫蛇の影迸しり出ずるところ、紅の烟りさつと起て丶この老爺を兩段になすは易けれど、忍べるだけは忍びこらえて、傳家の刀を穢さじと、さながら氷を嚙むが如く牙をばりぐ丶と鳴しける、魂宿りたるこの刀も室のうちに啼くなるべし、

忽ち障子の紙を貫ぬきて、弗と音して迸しり出たる短穗の槍一條、六郎ひらりと身を飜めかすや、槍は空を流れて胸を距ると一寸ばかりの邊を過ぎり、右の袖を透して背後の柱に中りたり、仕損じたりやと高く呼はりつゝ、其の槍を手下に繰らむとするを六郎千段巻のあたりを緊と握り、曳とひけバ障子諸共堂と音して倒れ來たる一個の武士、

障子は寸碎て倒れたり、蔭に刄を露して伏せりたる六七個の武士は皆な一齊に踴り上りて進み來たれり、愛んで拔かざりし六郎が手裡の刀は、寒氷を裂きたる如き影を現はさゞれバ如何とも爲しがたきに至りたり、されど六郎は尙ほ愛んで拔かざりける、

六郎は先づ飛鳥の如く進み來たりて、彼の室なるまゝの刀を揮ひ、前なる武士の利腕丁と拂ひ、落したる刀を拾ひとり、さながら金輪の如くこれを舞して「だまし打とは卑怯なり、主の國を怨敵なる足利將軍に賣りて、不義の榮華を貪ぼる葛が谷が家來のものどもあれば、實に肚は唯だ飯を容るゝの器として、一寸半分の腸なき人間を斬るに尊とき吾が刀を用ゆるは穢はし、進み來たれ無二無三に、相手する

は好まねど死なんと思ふものは死なしてやらん、怖くば逃げよ、無二無三に、素より好まぬ相手なれば逃ぐるまゝに任せてやらむ」

「椿の六郎、今宵が運の盡なるぞ、吾が主人の首欲しと滅想な望みを抱きて、我れから首を授けに來たりし阿呆奴、神妙に首渡たせ」と武士は口々に罵りながら進み來たるを、六郎刀を環して、一人を斬り倒すとたんに、匍匐居たる彼の老僕は六郎が脚を緊しく抱きたり、蹌踉きながら刀逆手に、床まで通れと刺し貫ぬかんとするを、一個はまた背より抱すくめぬ、不意を打たれて六郎は倒れたり、折り重なれる武士は、太き繩もて、さながら稚女が毬を作るが如く、ぐる〳〵〳〵と縛しめたりける。

寳刀は敵の手に落ちたり、己が命も亦たこの曉の霜と共に消えなんとす、六郎ははや死を決せり、曳かるゝまゝに幽き一室に投げ込まれぬ、

武士は口々に「明朝まで貴樣に命を預け置く、殿が荒刄の刀を受けて、兩つになつて快よく亡せて行け」

其五

葛谷行宗の女まゆかりと呼び倣せるものありけり、芳紀を問へば圓なる月に加ふると三、春風二十四番の俤れ盡くこの玉を展べたらむ如き身躰に宿りて、一たびその佳麗なる姿を垣間見るものは、神は吾が躰より飛び行きて、恍然たらざるものはなかり、笑める姿はさながら汀に咲ける櫻花を風吹き落して、

清波たちまち漣をたゝむよ似たり、憂ふる姿を譬ふれば、小夜の村雨に零ちて散り行く梨の花そのまゝ、色好みたる足利將軍、遙にこの由を傳へ聞きて呼び登せんと數度の使者、利に敏き行宗これぞ立身出世の端緒なると、女に之に勸むれど、ゆかりは唯だ頭を掉るのみにて諾なはず、果ては病と披露して一間に籠り、衣うちかつぎて伏るのみ、

將軍の權威をもて、恰も猫の兒を貰ひにおこせし如くにては、など妾はうべのうべきか、思へば父ながら吾が父の耻を知らぬことよ、怨敵なる足利將軍に首を下げ、昔は主君の前にて吾が膝は鐵の如し、敵の許に使してもなどて彼の大將の前に折るべきやなど誓ひてし言葉を忘れ、村の童が弄べる蟋蟀とかいふ蟲のやうに頭を下げて諂諛ふのみならず、この妾をば進めて其の歡を買んとなし給ふこゝろ根、情なき限なりと、ゆかりは彼の椿の六郎が訪れ來たる夜半に、寂しき夢に魘はれて驚き覺め、枕かいやりて侍婢を喚び起し、白湯もて來さして飲みつゝ斯くは思ひつゞけゝり、

忽ち廻廊の彼方より跫音荒く馳け來たるものありけり、口々に罵しる聲を聽けば「何んと六郎は餘程の勇士でれじやるぞえ、某は槍を奪られて、ハヤ斯うよと覺悟を仕まいた」「哀れなるは山家どのと矢橋どの、とう〳〵討ち果たされて」「アノ僕が脚をとり、貴殿が後より抱きすくめずは、我々達も山家矢橋の後を追ふて冥途の旅を致せしも知れず、武運盡ざる我々どもの目出度さよ」「このことを疾く〳〵君に知らせ候わん」

六七人の武士は、廻廊を踏みならして彼方へと走せ行きける、ゆかりは之を聽きて、さては豫て父より聽ける椿どのゝ孫なる六郎どのとやらを、父は家の子に仰せて亡ものとせられしか、さるにても何日六郎どのが吾が家には來たりしぞ、訝かしき限りなりと、やをら起上りつゝ、洞燈を侍婢に持たせて竊かに父なる行宗が寢處の隣の房、母ある人の化粧の間へと忍びやかに隱れ、洞燈を吹き消して冥のうちに耳を欹つるに、

父なる行宗の聲「ウム椿の六郎の爲めに、山家と矢橋とは討れしか、して六郎は何處に囚へて置たるか」「さん候彼の玄關傍なる窄き一間に」「油斷して遁すまいぞ」「毬のやうに手ともいはず脚ともいはず縛しめ置きたれば、達摩のやうに轉がり出る外には遁ると叶がたく候べし」「よしさらバ山家矢橋の亡骸ハ善きなに取計らへよ、翌日は遺族のものどもに扶持とらせん、大切なる囚徒に油斷臭るゝな、椿が所持せしこの刀は、其方どもに預置く、はや曉にも近からむ、大儀千萬、まかん出よ」武士は再び廻廊踏みて跫音次第に微になり行きける、

姫ハこれを聽きて、さてこそ椿六郎どのは、今宵吾が家に忍び入りて、亡君の仇うたんとしたるか、噂に聞けハ六郎どのは、世にも希れなる美くしき郎とかや、翌日ハ父の刀にかゝりて亡せなんとおはれなりと、思ひつゝ、忍ひやかに再びソコを立出でゝ、吾が房へと歸りしが、六郎どのとは如何なる人か見まほしと、頓てまた侍婢に、案內させて、彼の囚はれ居る房の邊りに、覺束なくもたどり行けり。

人やあると四邊を視れば人影なし、姫は侍婢に持たせたる洞燈を高く掲げしめ、些かに障子一寸ばかり推しあけて中を視れば、十重二十重ゞ縛めの繩をかけられたる亂髮の人、房の眞中の柱にくゝりつけられ居たり、六郎ハ霓の如く障子を洩れて射し來る燈火に驚きて屹とばかりに障子の隙より半面を露はせるゆかりを視めたりける、

憤怒に蒸して六郎が顔は、さながら霞の如く紅くかゞやけり。

第六

ゆかりは洞燈を掲げて椿の六郎の姿を照し見るや、眼は星の如く閃めきたり

姫に一人の弟ありて名を靜丸と呼べり、性質極めて敏慧しうて父母の之を愛すると甚たしく、最も姉なる姫と睦まじかりしが、父なる行宗は利に趨りて親を忘るゝ白徒なれば、其の十歳になりける年の春、靜丸を足利將軍の許に致して質となしぬ、靜丸涙を揮うて父母の膝下を辭し、遙々都に登りて將軍に仕へしが、毎月朔日には父への消息息るとなく、その消息の折には、姉なるゆかりへの文章をも添ゐて、喜びにつけ憂さにつけ、水莖の跡細やにか報せをこしが、去年の夏より弗りと月毎の消息絶えたり、さては病つるかと流石の父も心を痛め、屢々文章を郵致しが絕えて返しの消息あらず、姫は殊更心を惱まして、幾度の玉章を送れども、木曾の丸木橋のそれならで、ふみ返されしためしなくして梨の礫、秋の末、冬の初に至り、或夜雁の音哀れに臥戸に訪づれし時、一つ心ゞかけてのみ思ひわたりし靜丸よりの

消息あり、父と母とは姫を喚び、三個額を鳩めて手忙く封押しきりて披き看れバ、筆の跡瘦に瘦せて些かに震けるは、病の床にありながらつゞりたるものと覺しく、墨のにぢみ勝なるは、零る涙を硯にうけて書けるならん、三個は心先とゞろきて讀み下せば、その文に、この夏、加茂の祭を看ての歸途に、ふと惡しき風を身に受け、それより心地日々に疎く慵くなり行くまゝ、名ある藥師を呼び迎えて療養に旦夕怠ることなかりしが、今はハヤ斯うよと覺ね候、重のまだ重らざる前にこのよし申し進せんと思ひしが、父上母上また姉上の御心配も如何ばかりぞやと存し候まゝ、申し進せず、病の重りし頃、今こそは申し進せんと思ひしが、是れも得なさず、されど病はいよ〳〵重う行きて、ハヤこの世に望は絶ね候と覺悟いたし候より、思ひ切りて爰に一筆を染め參らせ候、この消息の御手許に屆き候節は、最早この靜は西の方に旅行いたし候と思召下されたく候、前世の結緣うすくして幼き時より御膝下を離れ、初冠の勇しき姿をも、他鄕にわだし人に讃られ候のみにて御眼にかけず、當年ハ十七歲、先だつ不幸の罪は、宿業とのみ思ひ極め給ふて、ゆめ御悼あるまじく候かしこ、と書かれたり。

それより以後、夢にも現にも忘れかねたる靜丸が面影、常に眼前に去々來々して暫時も消ゆる時なき其の人の世に在りし時の面影と、露だに違うことなきは、この椿の六郎の顏なり。

姫は洞燈を取り落さんまでに愕きたり、六郎ハ屹とばかりにゆかりの顏を視つむ、姫も亦た其の父を刺さんとて忍び入りし恐ろしき仇人なるを忘れて、星眸を凝して六郎の顏を視たり、さても靜丸に善く

肖たる漢なるよ、雨山の俤こまやかなる眉の軒りたる、白玉に濃漆一點したる眼の凉しさ、彌生の花も羞ろう如き頬の麗かなる、一文字に堅く結びたる唇の邊、視れば視るほど靜丸に瓜二つなり。

〓姫は、この人は是れ靜丸ならずやとまで惑ひたり、されど靜丸は正しく去年の秋の末に此世を捐てゝ骸は鳥部山の一片の烟りとなり、送り來たれる翠の黒髪は菩提の寺に納めたれば、亡せしは必定、椿の六郎、六郎か、靜丸か、アヽ六郎どのと我にもあらで喚びかけたり。

喚ばれて六郎、其方は葛が谷行宗の女なるか、何用ありて我を喚ぶ、不思議千萬ソコ退き候へ」眼は紫電を走らしてはたと睨みけつ、一番の叱咤に優しき胸をうたれて、ゆかりはたぢ〳〵と却くと二歩三歩されど、尚ほ洞燈を掲げたるまゝ、六郎を照らし視る、六郎は面を背けて「夜陰に當りて女兒の來たると奇怪至極、翌日は斬られて亡せぬべき我を嬲りて何とする」

姫は睫毛に宿す露の珠「六郎どの情なや」

其七

荒莚の上に胡座する椿の六郎、身は毬の如く縛くられながらも、その猛けき心は千曳の巖、誰れかこれを轉ばし得べき。

六郎が背後には、刄を露して立てる五六個の武士ありけり、

さながら仙墓の月を望みて嘯ぶける如く、六郎は眉を軒げて屹と仰ぎ見るその眞向には、この邸の主

人葛が谷行宗、二毛まじりの短髪を頂に緊しく白布を裂きて結び、袴の裳短かく毛脛を露はして、隻脚は庭の石を、隻脚は縁の板を踏み、手に剛刀を撫して、つく〴〵六郎が顔を視つむ、視むるや否や、行宗の眉は顰みたり、

その行宗が手にせる剛刀は、近頃買ひ求めたる、肥州菊池住國時が鍛え成せし荒刄にして、その刄はいまだ人の膏を塗らず、されば我が寝首をかゝんとて忍び入りし椿の六郎こそ、この刀の鏽となすに屈强なれ、曳き出して兩斷に斬て見んと、さてこそ六郎は庭に曳き出だされたるなれ。

六郎は既に覺悟を極めたれば、少しも騒がず、唯だ眦裂けんばかりに行宗を睨めぬ、その紫電の影きらめきたる眼光は、行宗の面上より、その腐れたる肺肝に透り入りけむ、行宗は猶豫つゝ刀の柄を握りて搖かざること石の如し。

「狗の骨に猫の肉を添え、それに人間の皮を被せたる葛が谷行宗、汝のやうなる腐れ武士の手にせる鈍刀にて、この椿の六郎が斬らるゝか、よしこの身は斬らるゝとも、吾が碧血は汝の面に濺ぎ、不忠不義の大文字を染めなして呉れん者を、斬れ我を疾く〳〵斬れ、怨靈宇宙を翔りて惡厲となり、汝の狂ひ死せるその肉を啖ひ盡くさん」

罵りたる椿の六郎、罵しられたる葛が谷の行宗は赫と憤り、汝が舌の根の爛れんまでいきまき罵しるも、釜中の魚に均しき汝、先づ〳〵汝が舌を裂きて呉うかやい」「舌を裂くとはコハ面白し、君の國を怨

敵なる足利將軍に賣りて、不義の榮華を貪ぼる狗め、野干め、斬らるゝなら斬つて見よ、裂かるゝなら裂きて見よ」行宗は覺えす庭に躍り起ちぬ「ものども六郎を拉ぎ伏せよ」背後に立たる武士は應と答へて、ばら〳〵〳〵と進み來たりしが、猛き六郎の勢に怖れて、唯だ環りたちたるのみにて指さへ觸れす。

六郎は仰きて武士を廻看せり、呵々とうち笑うて「腐れ武士の家の子、吾が髮の先、吾が衣の端にても手を觸れて見よ」一個は手を揚て六郎の肩を捉えぬ、六郎は背に腕をくゝり上げられながらも、隻脚踏み伸ばすよと見ゑたりしが、先に進みたる一個を蹴飛ばしぬ、驚き倒るゝその武士は、後より進み寄らんとせし武士に衝き當りて、ばた〳〵〳〵と將碁倒れ。

行宗ます〳〵怒りて、きらりとひき拔きたる彼の剛刀、一揮ふりて鍔元より鋒尖を眺めたり、さながら寒氷の如し、六郎は之を見て靜かに眼を冥れり。

あはれこの剛刀一たび閃めかば、六郎が頭はさながら果の如く地に落つべし、

忽ち父上と高く叫ぶ聲と共に、障子の外に轉び出たるものあり、行宗は揮り上げたる刀を扣えて顧みれば、是れぞ女なるゆかりなり、續きて轉び出でたるは妻なる紅葉の前、行宗聲荒らげ「何んじや、姬」紅葉の前は面を軒げて悲げに夫か顏を打ち眺め、零つる一と雫を長き袖にかくして「あれなる青年を何の科にて斬り捨てになし給ふぞ、姬がいふを聽きて、今ま視れバ、まことに去年の秋都に亡なりし靜丸

に瓜二つなる面影、明日はまたりの靜丸の一周忌、哀れのものと思召給ふて、あれなる椿の六郎とやらを救け給はれと言ひつゝ、姫を顧みて「姫、姫、其方も父上に申し上げよ」「唯」と低く答へながら「父上……父上……靜に肖たる彼の六郎とやらを……」その言葉は藕の絲の絶ねんとしては絶えざる如く、いと微かにいと細し。

其八

大紋の袖をかき合せ、雨の肩を鷲の如く聳かし、眼に稜たゝて主君の坐前に苦諫せんよりは、其の後宮の阿嬌を倩ひ、夜半人なく私語の時に於て梨花雨を帶るの娜態をなし、もて寸言を進めしむるに若くはなし、説くとは一なれども一は聽く人の耳に苦く、一は聽く人の心を悦ばす、韓非子二千年の昔に説難を設く、而かも尚ほ這般の消息を知らざるなり。

行宗は今ま椿の六郎を斬らんとして、端りなくも其の可愛の妻といとしの女の爲に説かれたり、亡たりける去年の秋より常に其の懐に去來して忘れかたき靜丸の事に寄せて、女ゆかりハ於邑と泣き、妻はさめ〴〵と泣きて、共に刀ふり上し行宗の袖を控ねたり。

石の如く堅く、灰の如く冷やかなる行宗の心も、兩人の熱き涙に逢ふて溶けんとし飛んとせり、況いてその可哀の亡兒の面影に、この椿の六郎の肖たりといひ、また明後日ハ其の亡兒の一周忌なりとの言は、深く行宗が肺肝を透し貫きたり、行宗は胸の底にて我と吾が心に私語きぬ、先刻始めてこの六郎を

見たりし時、乃公も此奴の面影が、亡兒靜丸に肖たりけりと思ひたりしよと、六郎は端りなくも、仇人の妻と女とが、ひたすら吾が命を乞ふに呆れて、面を仰げて二人の顏を視あげぬ、行宗の妻は泣を掩ひたる袖の蔭より六郎の顏を見て、いよ〳〵さめ〴〵と泣きぬ、他人の空ら肖とはいへ、これ斯のやうに善う肖たる青年があろうか……、女もよゝと泣きぬ、靜丸そのまゝのかはかたち、憎うても父上、あまりといへば心强し……

近よりて曳き倒したる家の子等は、六郎を打たんとしたる拳を宙宇に迷はして、唯だ眼つぶらに相顧みて呆れ顏す、行宗揮りあげたる剛刀を引き、肚を撫し天を仰て長へに歎息せしが、忽ち戞と鍔音させて刀を室に藏め、命冥護のある六郎め、唯だ亡兒の靜丸に面影の肖たればこそ、貴樣の首は今より三日の間貴樣に預け置くなれ、珍重して努め奄匇には預かるな、者共此奴を曳き立てよ、

言ひ訖るや否や、さながら疾風の如く緣に上り、裳を荒々しく蹴つて奥に入りける、跡にてもみぢは家の子に向ひ、コヤものども、その六郎とやらを大切にしてとらせよ、かまえて手荒の事は爲まいぞよ、家の子は畏こみて頷きぬ、靜かに六郎に立てよといふ、やをら六郎はもみぢとゆかりとを仰ぎ見つゝ起ちぬ、一個の家の子は六郎が衣の塵を拂ひぬ、六郎は冷やかに打笑うて歩みたり、

黄昏になりぬ、蕭々として葛が谷の門より出る三個の人影を見る、二個は葛が谷の家の子にして、一人は正しく椿の六郎なりける、

六郎は尙ほ毬の如く縛められ、其の背には刀を結ひつけられたり、これ椿が傳家の寶刀にして、愛んで室を拂はざりしものなり、哀れ六郎は仇家の庭に足を入れながら、仇とし覗ふ行宗が首を獲ず、却りて死すべかりし命を優さしき女兒に救はれ、斬るべかりし吾が首を獲て、悄々この家の子に送られて、領地の境に追ひ放たれんとす、

官道の松は月を孕んで、露は風に吹かれ落つ、松盡きて一道の流あり、これ葛が谷の領地の境なり、川を渉れば復た松並木、

家の子はコヽにて六郎が縛を解き放ちぬ、六郎は痲痺れたる腕を揮りて、やがて受け取りたる寶刀の柄を握り、屹とばかりに故路を望みたり、家の子は走り還りぬ、六郎後より、大音聲に、還らば姫に傳言を賴み參らす、助けられたる恩は忘れねど、今より我ハ義を知らざる人となりたり、ソハ如何にといふに、貴孃の父は二世も三世も我が仇人なれば、

其九

葛が谷行宗が揮りかざせる剛刀の下に、椿の六郎の首は、さながら霜に飽きたる柿の子の隕るが如くなるべかりしを、辛くも仇人が最愛の女、ゆかりの、はふり落つる淚を拂ふ其の優しき纖手に繼とめられて、さゞんざと鳴る黃昏の松並木の蔭に追放たれし後の渠の消息は如何、颯と吹き度りたる靑嵐のうちに渠の姿は見えずなりける、

一輿あり、蕭々として山の陰を度る、騎馬の人一個、手綱を緩くかいくりつゝ輿の先に立ちて、靜かに駒を歩ませぬ、輿を擔げるもの都て六人、素跣にて腰に刀を佩びぬ、輿を圍みて武士七八人、薙刀を携ふるあり、槍を擔ぐあり、甲は擐かざれど甲手脛當をなしぬ、輿中の人は何ものぞ、

輿の兩方に垂れたる青簾は、より〳〵風に煽りて、ソコより紅き衣の裳の露はるゝを見る、尙は善く諦視れば、青簾を透して隱々として白面の人を見る、眉の暈、瞼の環は、をぼろなるとさながら霞を隔てゝ花を看るが如し、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

騎者ハ馬を停めて武士を顧み「こや者共、少時休息候へや、まだ日も高し次なる宿に着くハ黄昏より早かるべければ、大事の使を承はりし我々ながら、はや京へは近くなりて候ほどに、祝着の至で御座る」といひたりけり、

武士は歩を停めて輿を擔げる人夫に吩付て、靜かに其輿を紅葉せる樹の蔭に据えりたける、馬より下り立ちたる彼の人は、やをら輿の前に跪きて「輿のうちに物申す、長亭短亭幾日の旅を穿ませき御輿のうちにのみましまして、さぞや窮屈にて在しまさん、コノあたりは景色いと妙に美くしく候まゝ、御輿のうちより御歩を運ばれて、山川の景色を御覽じ候へ」と申しけり、

輿のうちには何の應もあらず唯だ衣の袖の音のみさら〳〵としけり、侍士は再び跪づきて「御歩を運ばれ候は御意に叶はずば、青簾を揭げまゐらするほどに、御輿のうちに寛坐ぎ給ひて、四方のおかしき風物を御覽じ候べし」とて青簾に手をかけ半まで捲き上げたり、

露はれたる麗人の顏を見れば、是ハこれ葛が谷行宗の女なる、ゆかりなりける、さては邪なる心をもてる父なる人は、またしても珠といとしみ花と養ひたる、最愛の女を百貫の邑に易ゑて、足利將軍の侍妾となして、今は將軍の家の子なる青侍士に輿を護らせ、上洛を急ぐの途中なりけるよ、

旅衣、たつ日は如何に苦しかるらん、父は利欲に朦みたる眼には涙乾けど、母は姫が花摺衣の袖を扣きて、惜しき分袂を門出の時にかき口說けん、これよりは金屋のうちに捿み花よりも鮮やかなる衣をきて、方丈の膳に象牙の箸を擧げ、歌舞管絃の團欒に周旋して、長への春を樂しむの身となりたれど、朝雲暮雨幾日かの旅の憂は、柳葉の優しき眉に上りて、麗かなる眼は霞み、散げ落つる鬢の毛ハ瘦たる頰を掠めて、やつ〳〵しさに朱色の帶も綏まん、

「風のいと冷たきほどに、早う〳〵青簾を下して給べ、景色も何も見たうはない、妾に關情ふとなく其方たちは寛乎と休息しや」と姫は衣の袂もて面を掩へり、

輿を卸して青侍士は、木の根、岩角に腰うちかけて休息ひつゝ、くさ〳〵のたはれ話し、または彼方の山、こなたの谷など指さして語合ふところに、笠深く傾けたる一人の旅人ありて、輿のほとりを掠め

つゝ、些かに猶豫しが、やがて眞一文字に行き過ぎんとす、姫は何氣なく見送れば、錦の袋に藏めたる刀を肩よりかけて、身軀たかく凛としたる後姿、愕く姫、

こやのう〳〵、ソコに行くは椿の六郎どのならずやと、姫は言はんとして尙は見送れり、

其十

靑簾垂れてよと吩附し言葉の下より、唯と答へつゝ靑侍士は跪づきて手を簾の緒にかけんとするを、纖き指をもてその端を抑えつゝ、少時俟てといひさして、つく〴〵と見送る弱き旅人の後姿、折しも颯と吹きたる山風に、紅葉は千片萬片の花を飛ばして、彼の旅人の姿を隔て、やがて彼方につき出てたる碧巖の下に路を折れて、凛々しき旅人の影は見えずなりけり、

時も移りぬ、はやく次なる宿に着かばやと、彼の侍士はこのよしを靑簾のうちなる麗人に申し上げ、己は馬に騎りて手綱を緩やかに按じ、輿の前に立ちて道しるべし、丁夫はやをら輿をもたげ、靑侍士等はそを環りて警衛しつゝ歩み出しぬ、

今まで麗しかりし天氣なりしが、山風一陣吹き來たりしより、鮮かなる山も、明かなる水も靑み渡りたる嵐にかき消えて、樹々の錦は愕き飛び、仰げば一泓の碧曲々として流るゝ如くに樹の間を洩るゝ天の色も、やがて雲蒼皇しく往來し、彼方の山の蔭、此方の谷の隈よりは、さながら巨魔の口より吐かるゝ白氣の如く、霧は濛々として起ち上り、山を包み、谷を掩ひ、巖を繞り樹を貫ちて、この一行がた

どり行く路は半ばより消えなんとす、

輿の前に進みたる騎者は驚きて「さても秋暮の空ほど變りやすきものはなし、今まで晴れ渡りし空は俄かに怪しく成り來て、冷めたる風吹くよ、激しき雨もやがて降らんとするよ、急げよ者共、大事の使命若し旅のうちにて過あらば、某は腹を切らねばならぬ、疾く〳〵次なる宿へと走せよ、夕餐の膳には酒一陶を添えてやらむに」といひつゝも一鞭あてたり、

應と答へて丁夫等は早歩となれり、濃き霧を窄ちて山を下る、霧のうちにをぼろに見ゆる巨木の影、大岩の影、巨木の影は風に震ひ大岩の影は風に吼ゆ、其のさまさながら天魔の狂ひ號び跳り舞ふが如し、日はまだ高きに、山路は黄昏の如くなりにけり、

忽ち上方より一陣の風さつと吹き來たるや、霧は慌忙しく裂たり、裂たる霧の間より見れは、山樵らしきもの都て十六七人、手に〳〵斧を携へて高き巖角に立てるを見たり、

一個はさながら狙の如く飛びて下り、つゝと進み來たりて騎者の前に立ち、屹と仰きて斧を杖きつゝ呼はりたり「コゝに來ませしは足利將軍の御内の御武家と見かけ參らす、先刻風御輿の簾を簸りたりし時、ちよと見かけ參らせしに、麗人のその輿のうちに在ましき、それこそ、此國の白峰よりも名の高き葛が谷殿の御女、縁由姫と推し參らせぬ、この四邊は黒雲と呼ひ倣されたる巨盗の横行して、旅人を惱ますところなり、大事の御使に過あつては恐れ多し、賤が男畏まりて最前よりコゝに御輿を待ち受け

奉つりぬ、次なる旅館まで、警固し奉つらんほどに、その御輿を御渡し候へかし、卒爾ながら、この山に住める山樵の頭、某し謹んで申す」といひつゝ、馬の轡を把りて動かせず、

青侍士も丁夫も蒼白となれり、馬上の人は鐙を踏んばり、刀を撫して睨つけつ、下郎推參、奇ッ怪候ソコ放て、無禮の事あらば眼にもの見せんず」

轡を把りたる髯男は憎さげに呵々と打ち笑ふて、賤の山樵か親切に警固して進せんといふに、その樣な恐らしい面相は何事ぞ、野郎ども、來い」馬上の人は大に憤ほり、馬に一と鞭あてぬ、馬は鬣を振りて掉の如く立ち、前蹄を揚て、一と蹴りするを、髯男はひらりと身を閃へし、輿の方へと無二無三に進み來たる、青侍は皆な刀を拔きて輿を圍みつゝ揮り舞せり、髯男等はどつとおめきて斧を環舞つ、霧はいよ〳〵濃くなりて咫尺も辨すべからずなりぬ、天の雲もいよ〳〵低れて地を去ると尺五とまにでなりぬ、風もいよ〳〵烈しくなりて刀聲人聲兩つながら聞ゑず、

第十一

怪しき風は、上方の蜂より黒雲を吹き落し來りて、青簾ふかく垂れたる藍輿のうちなる、一枝可憐の紅梅花を無二無三に碎き散らさんとす、

警固の青侍たちは、夢のうちなる夢見る心地しつゝ、唯だあはてにあはて、うろたゑにうろたゑて、輿の周圍に環り立ち、薙刀を巴と舞はし刀を卍字と揮りて、寇なす盜人等を近づけじと打ち拂ふ、風は

いよ〳〵急にして雲は吼え霧は渦なく、その間に刄の光りのみ、さながら叢れる電の如くきらめきて、敵味方、いづれをそれと分ちがたし、

異しい哉、天より降りしか地より湧きしか、一陣の雲を帶びて烈しく吹き來たる嵐に駕りて、一個の人影ありて、刄と刄との間に躍り入れり、青侍も黑雲の手下ども丶、敵か味方かと蒼皇てまどひ、斬りもやらず拂ひもやらず、霧排し分けて、その人の顔を見んとす、されど霧ふかくして定かには見えがたし、黑雲は「さてこそ、此奴ハ入らぬ邪魔だてすると覺ゑたれ、斫れ、打て、薙ぎよ、突けやと呼ばはれば、應と答へて叢り揮れる刄の光、霧ハ俄かに裂けて飛びぬ、裂けたる間より見れば、一個の男兒、根より曳き拔きたる松の樹を打ち揮りて、見る間に薙ぎ倒すと五六人、

雄風四邊を拂ふて雲は却き霧は消ゆ、蕭然として岩の蔭に横はりたる一青輿を圍みて、刄を手にし呆然としてうち眺むる青侍ども、この人應しく上方の峰に棲める天狗の、この必死の場合を雲の上より見て、宙を翔りつ來り救ひしものなるべしと、皆な南無八幡とぞ唱えける、

松の幹を横へて莞爾と微笑しつ丶、顧みて、菜色なせる青侍の面に一瞥を呉れ、更に青輿のうちよ流盼を滑らしたるこの青年、眉目清秀、その眉と眼とのあたりハ、紅筆とりて一抹はいたるが如く美はしく血氣潮して、品高さと言はん方なし、

青輿の小簾はうちより掲げられたり、轉び出でたるハ縁由姫なり「是れ喃、椿の六郎どの」

言はれて青年は横たへたる松の樹を靜に傍に置きて「久濶や葛が谷が御息女どの、先つ日の御身の恩受けしに酬ゆるといふにはあらねど、仔細ありて京地へと志さす途中、圖ずも御身の不思議の災難を見て、仇なす人を追ひ拂ひしまでなり、嬉しやこの椿の六郞も、今日よりは、又た不義の人なりとの嘲は免れぬ、御身の父は吾が祖父より三代の讐家なれば、露より脆かりし命を御身に救はれしも、御身が父を首にして君父の墓前に捧げんとの思は、晝はうつゝ、夜は夢のうちにも忘れかたし、今ま圖らずも御身の危難を九死の中より救ひ出したれば、曩つ日の恩にははや報ひ了りぬ、嬉しやなく〳〵、本月本日唯今より晴天白日讐と名乘りて、御身の父を討つことを得るよ」と言ひ訖りて、さらば行かん、緣あらば復た逢ふ日もあらんにと、飄然として立去らんとす、

「喃、椿の六郞どの、御身は是より何處へと行き給ふか、今日の御恩は南無觀世音、忘れまじ、復た逢ん日は、定めなき浮世なれば、今しばし語り給へや、喃六郞どの、妾は是より、京都に赴く途中にて候、旅はさびしきものといへど妾には樂しかり、京都に着きし後の事に想ひ較べては………」

六郞は錦の袋に盛りたる寶刀を背に搖あげて、兩歩三歩踏み出し、屹とばかりに緣由姬の面を視つめ「さてハ御身も、京地へと赴き給ふか、某も亦た……」「何用の候ふてや」「唯だ些しの志ざすとの候へば……」

其十二

夜來一番の酥雨は四方の霞を蒸して、花の都は春正さに闌なり、

京の町の人々は朝早くより大路に集ゐつまり、清く帚れて寸塵を留めざる道を挾みて堵の如く立てり、將軍花見の御成の行列を觀んが爲めなり、

前驅の騎者は來たれり、警固の青侍も來たれり、譜代の武士に圍まれて一輿靜に度るうちに、便服して端坐するものは足利將軍義滿公なり、續ひて更に一輿あり、花の如き女中は裳を曳きてその周圍を警め守れり、輿は青簾を深く垂れて、輿中の人を見るによしなけれども、彷彿として有るが如くまた無きか如く紅き衣の色の簾を透しぬ、妙なる香も細々として洩出でぬ、空焚の匂なるべし、觀居たる多くの人々は「この輿のうちの人こそ北越葛が谷の御息女にて縁由の方にましますなれ、いにし昔の小町は更なり、唐の西施、楊妃も羞ろう容顏の美くしさ、將軍殿下の御寵愛は世に並ぶものなし、さても今日の櫻がりも、この方ましまさすは、殿下は花も美くしからず酒も甘からずと思召し候て、召し具し給ひしならん、女と生れし甲斐には、せめてはこの方樣の十分の一つにても、その榮華を受けたきものよ、と年若き女兒どもは、皆な嫉みつゝ見送れり、

さて將軍の輿は清水觀世音堂へと着きたりける、丸二つ引の幕を堂のあなたこなたに打ち繞らして、花を看るに尤も好きところ、正座を据ゑ、將軍は寛々として坐り給ひ、膳所の青侍が運び來たれる酒肴を前に置き、こや縁由、進みて余が酌をせい、實に美にして艶なる花の色かな、されど、ものども、美

くしき花は物言はぬ、物いふ花の縁由とは孰れか佳きと、戯言いふて大盃を擧たりける、

さて舞は始れり、妙なる管絃の聲は起れり、花はソヨ吹く春風に散りて、將軍坐上の蒲團に落ちぬ、もろ人は皆な花に醉へり、將軍は歡ぶと限りなし、

この時ゆかりはしとやかに兩手をつかえて、流眄に將軍の顏を見上げぬ、眼には無量の情あり、黄鳥の初音の如き聲して「斯る目出度花の御燕にて、願まゐらするも如何なれど、妾が一人の弟にて靜丸と申すもの、先年この花の都に身まかりて、その墓はこの地主の權現の境内に在りとかや、深雪に埋れて世の春を知らす居るべかり、妾、昨年の秋より將軍の海山の御恩を受け、この京地に榮華を極め居れど、一人の弟の墓に手向けの花捧ぐる暇なし、幸ひ今より些かの御暇を賜はるとを得て、參詣いたし度く存じまするわひだ、御許われかしと言ひつゝ、眞珠を聯ねたらんごとき齒を花の唇より露はして、一笑しつゝ顏を伏しぬ、

「地主の權現とはこの境内なり、其方に行かれては酒も旨からず花も美くしからず、我も共に行かんと思ふよ、葛が谷の一子靜丸、彼は其方に肖て中々の美少年でおじやつたが、秋を告ぐる桐一葉と共に散し事の哀れさよ、余も生前の誼あれば、御身と共に行かんと思ふ」と宣ひけり、

さて將軍は件人を促し、紅梅姫を携へて徒歩して、花の間を潜りて權現堂を守る人の家に入り給ふ、この間にとて、ゆかりは侍婢に折せたる美くしき花を携さえて、侍婢二三人を從がへ、導かれつゝ來て

見れは、一基の墓標苔蝕みて、去年の秋その儘の落葉に埋もれ、蝸牛の篆はおぼろに觀夢居士と梵名刻られし文字を塗り、鳥の跡は四邊に狼藉たり、

涙を流して、ゆかりは墓の前に額首つゝ、良久らく念佛し居たりしが、やがて携え來たれる花を墓前に供へ、淸き水を濺ぎかけ、尙は悵然石を撫して低回するとたん、後の竹藪がさ〳〵と風なきにさわぎて、數羽の鳩は驚き啼きて起ちたりける、

折しも靑侍一個走せ來たり御前の喚び給ふほどに、早々歸り給へかしと促しぬ、ゆかりは優しき掌を合せ、再び二三遍の念佛して、蓮步を運びつゝやがて堂に歸り來たれり

日は花影を移して欄干に上せぬ、あな心地よやと將軍はゆかりの膝に頭を加て、片手に大盃を擧つ、兵と音して何處より飛び來たりし白羽の箭、將軍が把れる大盃を射摩りて、ゆかりが花摺衣の袖を縫ひ、無殘や、懷に向ふて樹つたりける、

聲をも立てず箭を抱きたるまゝうち伏す姬、憐むべし、その淡雪を圓めたらん如き乳房を射貫れたるなり、將軍は蒼白となりて起ち上り、眦を決して、狼籍者奴ッと叫びたり

侍士は一齊に刀を拔きて走行けり、樹の間よりヌッと現れたるは一個の青年、大聲に呼ゞはりけるは「あら、殘念、正しく射たりと思ひしに、あら、罪なき緣由姬の胸に箭を樹てゝ、怨恨重なる足利將軍は遁したるか、いざ傳家の寶刀の切味見せんと疾風の如く將軍目がけて飛び來たる、

叢がる刄は霜夜の月に映ずる茅の如し、已ぬる哉と青年は高く叫て、刀逆手に我と吾が肚に突立ぬ、
嗚呼、落花を浴びて苔の上に二個の血髏あり、これ椿の六郎と縁由姫。
愛んで人を斬ざりし寶刀の、今は自から其肚を屠りし料となしたるこそ哀れなれ、花はこの人の恨怨の盡きざるが如く、當年の碧血枝に上りて、歳々紅。

◉畫師

其上

日月星辰山川草本禽獸蟲魚さては人間を六寸に足らぬ命毛短かき筆の先きに現はして今の世にたゝへられ後の世に慕はれつゝ綾絹に包まれて幾重の桐の箱に秘められ、是れぞ萬代の珍寶と文に書かれ口に傳へらるゝ名畫を留す人は幾何ぞ、兒女の爪紅なまめかしき指にゆびさゝれて、そが嬉しがる笑渦を買はむが爲めに、むくつけき髭の間より疎く厚き唇敲きて賞むる俗物か歡を得んが爲に、利欲を硯の水に捏ちて描きたる畫こそ穢なけれ、まいて黄かね白かねの爲に描きたるころ、その畫を採て地に擲たば賤しき瓦礫の聲すべけれ。

されば我名もなき山里のむぐらの宿に人となりて、今は素堂とて京の片田舍の草ひき結ぶ庵の中に獨り寂然として畫をかくとを學びたりしが、さても魯鈍き吾が腕には筆眞の宿らずして、禿せし筆に林の如く筆架に挿されたるも、描き捨てし反故は現はれし壁を補ひ、露雨滋く漏る天井貼つて尙幾束は梁の上に煤ばみたれど、いつかな／＼我が業の進まぬこそ口惜けれ。

我か心は腕を忘れ、我が腕は筆を忘れ、筆は紙を忘れてこそ、眞の畫を描くことを得べけれ、心は湛然として万象を映して亂れざると古潭の水に月を浮ぶるやうに、筆は汎然として天風の平波を度るが如くにして始めて畫の眞を捉ふべけれ、自から我を卑下して、聲なき詩とたゝへらるゝ貴きものを穢らは

しき黄金しろかねに代へ、寝酒三合肱を曲げて旨き夢見ればよかるべき我を忘れ、膝を容るゝに餘りあればよかるべき分限を越へ、美味を食ひ佳屋に住みたがると我は眞に嫌やなり嫌やなり。

されば我このいやらしき仲間を脱れ出で、名山大川を跋渉して文氣を養ひたりし古の人の流を汲み、筆硯を載せて何處ともなく徨彷ひありきて、筆眞を捉へ來らん、山を見ば靜かなる心を養ひ、水を見なば動かむとを思ひ、雲を見ば變ぜむとを欲し、巖を見なば貞ならむとを望み、會神獨詣して、造化を硯の海に投じ、天翁を一枝の筆に驅つて、よしさらば俗畵人が膽を破ッて呉れむ。

斯くなむ獨り言しつゝ大口開きて笑へる男、色飽まで黒く眼のきら〳〵と白く光を放てるさまは、古りたる木偶にさも似たり、あたりに銚子一個顚ばり居るより考ふれば、ねじけにねじけたる、埒なき不平に數碗の醪酒潑ぎかけ、胸中の怪 物勢を得て躍りつ跳ねつ、不平いやが上に結ぼれ返へるならむ、やがて拳を伸て大の字形に突き立ちつ、五臟六腑も見へむまでに大口開ひての大欠伸、天井裏の鼠も聲を竊めつ。

鰥居の氣樂さは、袂扣へて歸らん日を問ひかくる可愛き稚兒もなき代りに、および折りつゝ幾夜の夢を午夜の雨に驚し、蔭膳据へて心中盡すいとしき女房もなき代りに、我れ亦行き暮れて淋しき古寺に宿りても、疲れし脚に夢路たどりて故鄕に向ひ、覺めては寢汗冷たき苦しみもなく、曉に山路の狹霧を裂ひて、故鄕の親兒殘せし旅の人には哀しかるべき猿猴の聲も、我にハ耳珍らしく、猿を描かずと巴峽

の景を寫さむは爰なりと心面白く、万事世帯持の羨ましかるとのみなるべし。
隣の媼が餞とて贈られし藁踏穿いて、何時も可愛がりし犬に送られて、一笠一笻瓢々然として只吾か脚の向ふまゝに。

其下

碓氷の川は雲を縫ふて下界を封したる妙義山、千年苔蝕せる百尺巖頭に圓座を布きて、何時よりか結跏し居る一個の行脚。

今宵は万壑靜かにして恐ろしき獸も啼かず、頭に當る北斗の星は大さ盃の如く華やかに、手を伸べなむには攫まるべきまで低う照らせり、天地縹緲として身は仙槎に乘つて空水を渡るが如し、素堂拳もて腕を敲き、爰なり爰なり、あら微妙き景色かな、寫さで止むべきやは、

忽ち天風蓬々として、雲を吹き拂へば、吾が胸に當て輾り出づる一團の大月、白う見へたる碓氷の川は岩に激する急瀨玉を飛し黃金を碎きつゝ曲々として、果ては茫ッと涯りなき彼方へ細りて消え、凝つたる嵐は愕き流れて、渦をなしつゝ峯を蝕み壑を藏して星の光さへ搖ぎ初めたる其景色の崇高さは言はむ方なし。

素堂長へに嘯きて嗒然と高く笑ひつゝ、あな微妙き景色かな、一年あまり旅寢の數を重ねつゝ、造化の大觀を探らむと路なき山を跋へ橋なき水を渉りつ種々の辛酸に骨をも身をも惜しまさりしが今宵ぞ都

をさまよひ出しより三百六十五日、一周年の今月今夜、端りなくもこの大觀を見たるとの嬉しさよ、いざさらば筆を驅つて描かむに。

岩間に湛ふ大古の水を硯に灑き、筆を清め紙を展べて意の向ふまゝに墨を飛ばしてはひき裂き〳〵、いらだッて筆を走らすれば腕は心に隨はず、やがて呆み果てゝは只もだへにもだゆ。

冷やかにして、しかも微妙き香する花片のひら〳〵と我が面を輕ろく掠むるに、不思議がりて素堂面を仰けは、ヤ、輝り耀きたる白玉の顏美しく、髮は流雲の如く、戴ける瓔珞は星を聯ねたらむか如き天女、雪の衣を翩へして、中宵高く停り給ふ、素堂あつと圓坐を飛び退きひれ伏せは手を伸べて來れ素堂と招かれたり、素堂心もふら〳〵と身も輕げに、夢の中なる夢路をたどる心地して雲危なげに踏み行けば、彼は漸々に遠かりて、只來よ々々といみじき言葉の聞ゆるに、いらたちて進まむとすれば、雲はあやしく脚にからみて今は一歩も搖ぎがたし、ホヽヽ、と笑ふ優しき聲の心耳に澄みて聞ゆるに、恍然として眼を開けば唯天風の耳輪に觸るゝ聲すなり

さては夢か現か、あら尊とし、我が筆慥かに畫の眞を得たるに極つたり、このいみじき大觀を寫さで止むべきと、素堂喜びつ又も颯々と筆を走らしぬ。之れも拙しとてひき裂く、再び三度筆を走らしぬ、之れも拙しとて、ひき裂きぬ、百度千度書きてはひき裂く。

あらむかづしやと巖頭に突き立ちたる儘、持てる筆をへし折りて碓氷の川に投げ込み、硯は見上る傍

の巖に投げ上げて、行衛は何處ぞ。
寒嵐風に咽び、白雲固く封じて、昔しながらの水を湛へし硯が岩のみ、苔は蒸す百千萬世。

◉偕樂園の梅

（一）

花見の使を承りて三月の望の日といふに水府へと行く、されど吾が心は梅のみにはあらず好文亭を看むが爲めに、常盤神社に詣でんが爲めに、弘道館を訪はむが爲めに、谷中廿三夜祠畔に東湖先生の墓を覓めむが爲めにはこよなき序を得たる哉と竊かに喜びつ、萬づ禮義の遊びせんと三ツ紋の黒羽織を被り袴を穿ち故と靴は踏まず、例の黝然たる愛撫の酒壺のみは携へもて行く、中には洋酒は盛らで極々上の日本酒を溢るゝまで盛らしもて行く、ソは瓢兮先生の碑に濺ぎて幽明を隔てゝ相献酬せんと思へばなりける、上野へと車をひた走りにはしらせしは午後五時を過ぎたりその四十五分といふに車に打乗る大宮にして黃昏、浦和、久喜、栗橋の長短亭は唯た二三四五六星の如き依稀たる燈影の車を迎へて冥を縫ひつゝ螢の如く消へて行く行く、古河あたりは只だ黑山黑林黑樹の影の周章しくこけつ走りつするのみ嵐はいと高う吹きて脚底には湯たんぽを踏まへながらも奇寒侵し來たりて指も龜したり、濃墨圖畫の中に飛び行く身のこの際、壺中の阿堵物を閑却すへきとやある、されど初穗を瓢兮先生に捧げざるうちはとて愛しみ惜しみて飲まざりけるぞ殊勝なる

この夜は小山の驛に宿りて醒て寐ねぬ、寒むさいよゝ烈しくて衾は素肌に鎧きたらむより冷たし、膝を抱きて箙枕せんより痛き木枕に淋しき夢を載せつ身を重籐の弓の如くして眠る、夜闌けて靜にめさむ

れば何處の鐘の音枕邊に落ちく、起ちて窓の戶を推しやれば西の天は怪しく曇りて數點の星の閃めく見ゆ、その二顆は螢と燈火にはあらで、停車場に傍ひて立ち盡せる去來標の燈にてありける、

明旦婢の起きざるに先づ起て四邊の窓を放下す、上州の山も野州の山も常陸のやまも新雨の後か未雨の前か、翠微細やかに渡りきて眉の毛を輕うソヨ吹く、見渡すかぎり雪かと見ゆる霜厚う布きて二の字の痕分銅の痕など疎らに印されたるは早起の人の殘したる下駄草鞋の痕ある、都男の勇ましさを知らせんとお嗽の湯もてこんといふ婢をとゞめてやをら水瓶の氷を拳もて丁とうち碎き顏洗ひ且つ髮沐ふ

六時半を過ぐる頃水戶行の滊車へと打ち乘る窓よりふりさけ見れば敗碁の着くる所なきか如き浮雲のうちに筑波の峰見ゆ、やがて打ち烟ぶり打ち霞みたるうちより双峯はさながらあげまきしたる美人の小簾のうちに澹として有りやなしやに見ゆるか如し、やがて巨人に似たる雲ひとむら起つ、筑波の雙峯こそその巨人を載せて走しれる天馬と見ゆらめ、あたりの山も峯も皆な余を載せたる車を迎へ長揖しつゝ南に走る、是れより禮義の遊びぞ始まる

(二)

結城を過ぎりて江を渡る、この朝少しく時雨れたればゞ四圍の嵐ハ細々として吹き來たり、窓の玻璃に豆と凝りたる數顆の露あり、遙かに野州の雪尙ほ殘るの山を望めば、さながら皓人の朝衣をつけて端坐せるか如し、やがて日は麗かなり、山角の雪は瑪瑙の色となる、琥珀いまだ凝らざる底の仙釀に醉ひて

玉山將さに崩れんとする處子とも見ゆべし、天は瑠璃の色を澄まして處々に點綴せる水晶村、この絶景に對して語るに朋なき車中の一孤客いざさらば腰に佩びたる例のものを取り出でゝ語らんかと思へば〱、我を迎へて孱顔にこやかに一笑して、車を避けて南へ〱と走りしにはしる筑波の山の醒めたるを目送しつ、默せる酒壺を撫して余もまた醒めて行く

いくつかの長亭短亭を過ぎり去れば車は今し千波の沼に傍ひ偕樂園の邊を過ぎる、左窓は花、右窓は水、白きものは雲の如く走り青きものは煙の如く行く、やをら水戸の停車場へとつく

車を下りたちて先づ〱偕樂園へと行く、上市を過ぎり左に折れて雷神祠を覗、丘に沿ふて小坂を下り行けば一碧千頃の千波の浦、浦に添ふて行けば一華表を望み見る、これ常盤神社、景公を奠れる所、偕樂園のあるところ、好文亭のあるところ、今は則ち水戸公園の在るところ、万梅の今し亂れに亂れ咲ける所、偕樂園記の碑のあるところ、山に登りて神社に詣る、ぬかづき了りて第二の公園へ行かんとす、祠畔の樂堂に袴を穿きたる男あり、撥とりて時の大鼓を鼕々とうちならす、沈み度りたる寒香この時うづまく、うづき來りて袖ともいはず面ともいはず吹く、霜柱たてるところに優しき雀の足跡を藏したる落花も、皷の音に驚き起ちて、巴なりに流れ〱て吾か駒下駄に吹きかけ吹きかく、第二の公園に入れは一目皆な白く、花は今ま盛りにてさそふ風あらば散らげ飛ばん風情、凡そ園中の梅千餘樹、樹の老ひたるは百年外、若きものも數十年外のもの、幹ともいはず枝ともいはず蘚は蒸しむす、時に千波の浦風

いと高う吹きく、こゝかしこに秀てたる百尺の青松はソを受けてざゝんざと鳴る、万花亂れに亂れ、散りにちり、遙峯の嵐は颯と再びくしき香を載せもて千波が浦へと吹き落す、處々の酒旆の翩へるわたりに、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、はうほけきよと啼き度る流鶯もありけり

温うして而かも香ぐはしき吹雪を浴びて立ち盡くせると少時、更に長松の下に立てる偕樂園記の碑を看、石逕の斜なるをたどり行く、逕くつれば好文亭、亭榭石木皆古朴にして趣はなはだし、物申さんと呼びて訪ふ、男あり出でく、亭を看んと乞ふ、渠小硯と筆とをもてきて名字を小冊にしるさす、筆とりて東京の人名は某、氏は某とかいつけやる、渠喜びつ遠來の客の爲めに案內して進せんと起ちて余を導く、先づ景山公常に燕居せる茶室へと導かる、極めて幽邃、砌に千年外の古燈籠を置き、軒には公の自から書き自から彫れる『何陋庵』の扁額を揭ぐ、去て樓に登る額して『樂壽樓』といふ、亦た公の自書自彫のもの、廡下に起ち危欄に凭りて眺望を檀にす、導者指さしいふ、水を隔てゝ鬱乎として蒼々たるものは綠が岡なり、霞めるうちに二點の遙靑、さながら美人翠眉の暈を印したる如きは筑波の山なり、彼の一帶の松林を洩れて日光の山も見ゆ、峯の端に雪を宿めたるは薄化粧したる處女にも似たるらん、南の方を見よ、寒嵐凝て流れざる如き、遙林のかなたこそ大洗の勝區なれと、眼下は則ち碧膏を湛へたらん如き、千波の沼、一葉兩葉、木の葉の如き舟に掉さす蒿人のさながら豆の如きが見ゆ、風一陣吹きく、千頃の小々波は皺み、万樹の花は愕き、廂端の鈴鐸鏘々鳴る、身は空外に在るかを疑ふ

壁間當年の諸名流の合作せる一幅を掲ぐ、うちに抱一畫くところの淡墨山水あり、書上更らに濃墨をもて一詩の書かれたるを見る、抱一の山水ゝ二十八個の字下に隱現す、何人の書きたるかを導者に問へば、是れ曾て惡客の爲めに汚されたるなりといふ、噫、この惡詩と惡客の名字とはこの幅のあらん限りは諸名流と伍し、知らざるものは見て以て名家の作ならむとを思ふ、今の世に一小豎子にして彼の惡客の如く名を僥倖せるもの多きを見ると、余は高か〳〵と笑ふ、導者も笑ふ、果ては二人して大に笑ふ

（三）

欄外四媚の風景に去らむとしては去りやらす低回顧望すると少時、やをら愛を割きて樂壽樓を下る。更らに廻廊をたどり〳〵梅、菊、松竹の間を看、古畫障、古書畫幅を看、案内者ゝ仔細に導きくれたるを謝し、好文亭を出で、再び石逕を行き梅を穿ちて偕樂園を辭し、いざゝらば東湖先生表誠の碑を谷中に廿三夜祠後に訪はんとて行く

行けども〳〵迷ふて廿三夜祠を覓め得す、漸やく覓て得て渥丹の色褪めにさめたる一祠門へとつく、門には二個の仁王立つ、仁王の胸には赤布もて作りたる小兒の腹掛をつく、之れ痘神に供ふるものか、仁王の額ともいはず頰ともいはず、呵と開かれたる長廣舌の上までも投げつけられたる紙丸の乾きたるが滿面微塵の痘痕の樣なるにも拘らず、この無數の飛丸をうけて呵吽と腕を載して睨みたちたる仁王こそおかしけれ、

門扉の蔭に卜を賣る雪眉の老翁ゐねぶる、負暄の夢いと穩かなるを呼び起さんは心もとなしと思ひしかど、他にと問はむ人なければ喚び起して東湖先生の墓はと問ふ、渠慇懃にその所在を指し示めす、萬鬼のうちを過ぎり墓木の蔭を傍ひ看れども見へず、再び茅茨を敲きて先生の墓はと問ひ、兎角して幽樹の間を洩れて甃石のほとりに二墓碑の秀で立てるを見る、就て之を視れば一は藤田幽谷先生の墓、一は則ち藤田東湖先生の墓、先生の碑は綠色の寒水石もて作る、高さ七八尺『表誠碑』と篆額したるは烈公の手書なり、柵を繞らす、石燈を上りて扉を啓く、いざとばかり腰邊の酒壺を解きて口に付たる銀盃ならぬ鉛盃に波々と琥珀の色の凸とならむまで濺きつゝ、やをら碑前に向ふて跪きつふりそゝぐ、酒は墓碑の半字を浸して甃石の間へと入る、その餘るものは白蛇の如く流れ／＼停りとゝまる、濺き了りてこたびは我と溢るゝばかりに盛りて簸る、再びそゝぐ、再びあほる、そゝぎ、あほり、簸りてそゝぐ、四たびするまに酒壺を朶頤して餘瀝を殘さず、ほろ／＼と我は醉ひぬ、愛撫の酒壺を敲きて瓢兮を歌はむとす、さるにても我が誠の通ふあらば、濺げる酒よ載せもて行きて、黃泉の下に流れ行けとぞぬかづきける。

去て再び弘道館へと行く、壕に沿ひ縣廳の後に出づ、コゝにも万梅の花くあり、香ある吹雪のうちに古雅なる六角堂たつ、靑丹を施さゞる所極めて趣あり、連珠格子のうちより覗へば『弘道館之碑』立つ、雪白の寒水石にて高さ丈餘幅一間あまり万梅照らし來りて玉の如くかゞやき、飛花は吹きかけ／＼格子を洩れて音もなく碑を敲く、

更らに弘道館を訪ふ、冊子に名字を書かすると好文亭に於ける如し、南堂のうちに稚兒三四十、書を讀み石盤に書かく、この館いまは幼稚園となりけるなり、曾て絃誦の聲をむらからせたる所を想へば、風に紛るゝ飛花の影のみ、『游於藝』と篆書したる大額を掲けたる廡下に課書を披く稚兒の影のみ、花に埋もるゝ弘道館碑の影のみ、館を出でゝ再び飛花のうちを低回すれば遙かにオルガンの音聞へ君が代の頌歌聞ゆ、彼の保姆の奏で彼の稚兒の歌ふらん、歌止むて花いよゝ寂しく、唯だ放課に逢ふて落花を拗び遊ぶ稚兒の姿ちらりほらり。

偕樂園、好文亭、東湖先生の墓碑、弘道館、皆な看了る、更らに去りて偕樂園畔の酒亭を訪ひ夕餐くふ、食ふうちに時刻迫る、周章てゝひた走りに長廊へと走しる、駒下駄の緒截る、抱きたる酒壺を落さんとして僅かに免る、裳を踏みてこけつゝ片手に下駄を提げて走しる、踏皮はひたもの泥ゞ汚さる、袴を搴げて轉ぶが如く車へ跳り込む、驛夫の口にせる呼子笛は已に吹き終り、猩紅蒲團に身を投くるや車はゝや走しる、若し同車の人あらば何といふぞ、初めは禮をもて來たり終は非禮をもて還へる、今は是までなりと肱曲げて坐睡る、小山に至り遽々然として覺むれば、筑波の山の端に一團の大月かゝり、寒風青く四野けぶる、端りなく月下の偕樂園、弘道館の梅を憶ふて神往かんとす、

◉啼美人

第一

野州鹽原の山は、恐ろしき殺生石の在りと云ひ傳へたる那須の荒原を麓にひかえて、峯高く谷深く、瀧のかづ十あまり山谷に轟き渡り、霧を吐き雲を起して白き虹は常に現はれ、尚奥く深き山には、那落の底にも通じ居らんと思はるゝ穴ありて、凄しく噴き出す硫黄の烟に、草も、木も、鳥も、獸も生へず住まず、中にも血の池谷、もぐら谷のあたりは一ときは物凄く、蝸牛に似たる滑りありて冷たき怪しげなる苔は千年の岩を蝕し、古綿の如き氣味惡き植物は、差牙として瘦せに瘦せたる老木の枝に垂れかゝり、忍草、山蕗、山百合は一面に生ひ茂り、名の知れざる幽樹幽草の花咲ては散りて谷に落ち、深山の春の消息は岩にせかるゝ谷川の水に載せられて、里人が泥洗ふ鍬のさきに名殘留むるばかり、昔より旅人の草鞋の跡も印さず、白雲濕り凝りて流れざる凄き此山の半腹に、妙雲寺となん呼る寺ありける、其昔平 重盛が乳母尼の開基なりと云ひ傳へけり、前は谷に臨み後は山を負ひて極めて靜かに極めて寂し、此寺の住持は年七十を踰へたる聾僧一人の外誰も住さりける。

斯る物凄き此山の秋の夕暮は愈々物凄し、木は瘦せ峯はさびにさびて、颯々と吹く山風、深山楓の霞をなぐつて、散るや錦の溪に落つる自然の妙畵を眺むるものもなく、塒急きて飛ぶ鴉の背に夕日さして、尚は骨立たるれちこちの山の角を紅く染め、暮近きに黃昏告ぐる鐘の音もいつか絶えて、時こそ得たり

かしこしと蝙蝠は、昔は鶴の棲ひたりといへる鐘樓の廂より飛び出し、凄きこわき深山の色はさびしげに啼く梟の聲より呼び出されて、山端の斜照の色漸く薄くなり行くまゝに、此古寺のあたり愈々物凄く、瓦は落ち軒は傾き、結搆を盡したりし本堂も、百年の風雨に吹れ洒されて柱板戸の骨高く、承塵、梁にかゝる蜘蛛の巣は、松の落葉、枯れたる蝶々蜻蛉の屍をかけしのみ、僧の叩く木魚の音、木魂にひゞきて氣味惡き此寺に、不思儀やいつの頃より移り住みけん、眉目よき女一人現はれける。

傾し樓門の前に流るゝ箒川を、浮世と淨土の境界にして、架せる獨木橋のなくば、樵の男草苅の賤女が持て來る種々の浮世ばなしも聞くことならぬ此寺、まして世はかりこもと亂れたる時なれば、本堂の鰐口鳴るは風にさそはれて、香爐の中に烟絕へ灰固く、廚子天幢は破れにやぶれて、瘦たる鼠も今ハ出ず、かづ々の凄さ、寂しさ、氣味惡き此山寺に、枯木に均しき耳聵れたる老僧と共に、年若き女子の住めるは合點行かず、鬼か、魔物か、恐ろし、畏はしと、大風の後に落木拾ひに行きたる里人の娘、眼圓らに血相變へて話しける、里の誰れ彼れけゞんなる顏つきして、アノ古寺になら美しい姉御が居るとなおはん女郎、狐に摘まれたかおはん女郎、慥かに見たとな是れは滅想な、如何いふ姿して居つたかおはん女郎、お寺さまの御開帳に見た掛け軸の畫にあつた、天女の樣なとおはん女郎、おはん女郎、明つた解けたは、それこそ己が老爺に聞ひた「さとり」といふ魔物に違ひなし、違ひなし、箭に毒つけて射てやろうか。

不思議なり怪しやと、此話いつしか擴かりて、さひしき夜永、爐に榾焚きくべつゝ埒なき話しの末にはいつも此話しを落ちにして、皆々おぞけを振ひ、年若き女小兒は白鳥さげて、隣村に酒估ひに行くを辞みける。

第二

力自慢の男ありて其話を聞き、我行きて正体を見屆け來るべし、たかが獸の化けものなり、人間さまを詐らかす性根憎しにくゝし、毒をつけたる箭なんどは入るものか、是れさへあらば大丈夫なりと、研きすましたる鎌を腰に挿み、反身になりて意丈高に、拳もて腕を摩り〳〵、老人の諫むるをも聽かず、袂叩ひて山に入り、妙雲寺さして行きにける、九折の山路漸くにたどり行きて、妙雲寺に到りけるに、住持の僧は何處に行けん影もなく靜かなる折しも、異しや本堂のあなたに若き女の聲しけり、是れなり是なりと心に點頭きつゝ、我れ知らず腥き冷き風の領元に吹き入りて、ゾッと總毛立つを、是れであらじと氣を取りなをし、身を大木の蔭に隱して、耳を欹て瞳動さず屹として動靜を覗ふに、やがて破障子にサラ〳〵と髪の毛の摩れる音しすると思ふに、忽ち障子ひき明け、朽ち敗れたる縁の板敷ミシ〳〵と音させて、さむしげに眼を擧て空飛ぶ鳥を見つめたりし美女、年は廿ばかりなるべし黒髪おどろ〳〵にふり亂して、春の花を袂に縫はせたる衣を纏ひ、綾羅の帶は緩みて解けやせん、襟元たわいもなく寛げて眞白なる雪の肌を見し、尚袖口のあたり敗れ裂けて見ゆるが、屹と立ちたる其の氣高さ、怪しみ、

恐れ、一時に胸に湧き來り、血氣充ちに充ちて摩る腕もうなるべかりし勇力ガックリと折れて、まじろみもせず睇視居たるに、彼の美女は何思ひけん、やをらそこはかとなく縁の上を徘徊して、紅く美しき唇の間より、眞珠を聯ねたらん樣な歯を見わしつ「おみなべし折手にかゝる白露はむかしのけふかあらぬ涙か」と細々と打ち誦じつゝ、草履も穿かず素跣に縁を下り、そこらわたりに咲き亂れたる女郎花の飜す白露踏み分けて、一枝折りては袖に包み、二枝折りては頭にかざし、尚幾度か「おみなべし折手にかゝる白露は」と、反覆し〳〵て、女郎花を古池の中に投げ入れ〳〵、悄然と汀に立ちて、蒼く沈める池の面に映る我が俤の小々波に皺みて見ゆるをつく〴〵と打ち眺め、又も此方に歩み來りて、女郎花を手折りては袖に包み、頭にかざし、餘念なく歌を口吟みつゝ、やがて折り取りし花をむしり〳〵、黒髮サッと兩手に握りて、顧回さざまに嘻々と笑へる其顏色の凄さ恐ろしさ、眼血走り唇裂けて、眞紅の炎を吐かんばかりに見へにける、魂れ五内の中よりふらふらと飛び出して、冷たき水を浴せらるゝ心地しけん、男は頭を縮めて四肢は槁木の如く成り居たりしに、美女は何に思ひしや呵と叫びながら、長き兩の袂を面に當てゝ縁にかけ上りつゝ障子礑と明けて、姿は見へずなりぬ。

男は魔に魅入られし如く、うつとりとなり居たるに、やがて於邑と啼く女の聲、や御前樣は如何なされし、サゝ御飯を召し上がれ、そして靜かに御眠みあされませ、御膳はたふべとうないと御仰しやるか、それは御無体で御座ります、御口にわ合ひませぬが少しは召し上られませ、サゝ早く召し上られ、今朝

方前の箒川で捕りました小魚が御座ります、煮へました程に召し上れ、サヽ早く、アレ何をなされます、御危う御座ります、御止遊ばせ、アレ危い事。

細々と語り、細々と泣き悲しむ女の聲、男魂消て一散に歸りける後は、里人皆不思儀がり畏がりて、山に入り柴刈るものもなくなりぬ。

第三

杉の葉越しの月青く、荒れ果てし伽藍の破れ戸を覗き込みて、凄みは幽鬼の語を聞くが如き木魚の音と、彼の贖僧の唄かれたる念佛の聲ょ一倍まして、やがて、其音、其聲も疎らに成り行き、一聲雲を縫ふて飛ぶ名の知れさる異しき鳥の聲、風はなぎて谷の水音は雨の如く、山も眠り、林も眠りてシンとしたる此古寺の一間、緣に向ひたる障子一枚サラリと明け放ち、さむしげに頭を翹げてつく〴〵と月を眺め、といきつく息の月ょ白みて何にやらん思に沈み居たりし女、年三十を越したるが、是れさきに現はれし若き女の侍女にやあらん、暫くして部屋に入り屋漏る月の雫の冷たくかゝる衣の袖をかたじき鏽花眞青に生じて古びに古ひたる佛燈の、かすかなる火影の下に、さみしげに獨り言して喞ちけり。はかなし、情けなし、實に昨日の榮華は今日の夢、いとしきは奥樣なり、あまたの侍女にかしづかれ給ひて、今日は花見明日は月見とうつら〳〵、浮き世の風にさへ當らず、世の中の寒さ、あつさ、悲み、畏はき事はなきものとして、只樂しく喜はしく遊ひ暮し、膳所の者の巧をつくせる萬づの旨き物にまで、箸とらぬ

とさへある花車を極めし奥様、さもしや今は落栗を峯に拾ふて、猿と食を爭ひ、溪川の冷たき水を渉りて小魚漁り、ひもじき腹に栗粥の味氣なき世を過し暮すと如何なる因果か。噫。折りくべて焚く柴の打ち濕りてや、吹き白む烟眼に浸み入りて、つらき事かず限りなけれど、何卒早く大殿さまの御消息、早く、早く、早く知れて、嬉しく御家を起し參らせんと、朝夕持佛に七草手折りて、吾が身も魂も捧げ參らせ、主の和尚にも賴み聞へ、一念籠めて祈り居るも、今に靈驗見へざるは、神も佛も見放し給ひしか。噫。思へば悲しや去月の今日、猛火を潜りて覺束なくも、峯の細道たどり上り、岩角木の根につまづきては、名なしの艸に紅染め、棘からたちに袖裳をひき裂れ、鬼も住むべき此の古寺に隱れしを、思へば茫と夢の心地、猿の聲、松風の音、溪の水音、世を潜ぶ身には皆心置かるゝ其恐ろしさ、是れ許りかは、さびしき夜半のうすき衾にハラリ〳〵と墮つる露、枕かひやれば怪しき松が枝、畏らしく障子に映つるに魂消へて、心は鞠の如く縮み上り、曉まつ夜も多かりき、明くれば又もれ奥様のあさましきれ姿、見るもいた〳〵しくなさけなし。噫。早く御武運目出度なりて、今を昔の夢と語りたらば、嘸々嬉しき事なるべし、ヤ。時雨が降り出したり。去年の秋の初時雨降りし宵、そを題にしてと色紙短冊にみやびの文字をつらね、面白く遊びたりし事もありけるに、今は其時雨さへ、薄き我が衣には寒さまして。オヽ寒し。

月に映りてやつれし顏のいや青く、睫毛に宿る涙の白露枕にかゝるを拭ひも遣らす、暫しうと〳〵と

睡みたりしが、やがて又起き上り次きの間の襖静かに明て、れ奥様、ミミミと兩聲三聲しとやかに呼ぶに何んの答もなければ、晝の御心勞にハヤ睡み給ひしやらん、今宵は寒さ一きは増しぬ、風邪召してはなるまじと喞ちつゝ、脱て捨て置きたる衣取り上げて、衾の上に打ち掛け、裾のわたり叮嚀に打ちたゝき、尚枕元の燈火掻き立てゝ、さむしげに寢顏さし覗き、ハラリと落つる雫拂つてソコ〳〵に次の間にひき下り薄き衾にまどろむ夢の、月に透りて冷たきなるべし

第四

緞子のふすまを被き、小夜の寢覺めの淋しきに、侍女に昔物語、草紙など讀せて、そを聽きながら、うと〳〵と復眠れるは、是れ此國の土豪那須三郎秀景なりけり、秋のはじめより氣分勝れず、うつら〳〵と奥殿に閉ち籠りて保養したりけるに、時しも天下麻の如く亂れ英雄豪傑四方に起り、簇とぎ太刀を研き、互に白眼むき出して、攻め合ひ屠り合ひ、醒き風血の雨は吹き降りて斷間なく、奥羽の伊達政宗も、屈強の兵を養ひ馬を肥やして、天下半分一ト呑みにと勢ひ強く、那須近傍の豪族は、皆欵を贈り質を納れて、從ふもの多かるに、日頃剛膽なる三郎秀景のみは、旗を倒し髻を截つて降を納る事ヽせじ一快戰して花々しく、武運の强弱試し見んと、家來のものを勵して、軍議れさ〳〵肝膽を碎きけるにや心地勝れず、昨夕は嫡子秀政が同族より嫁迎かへ、武運長久と臣下の祝ふ祝言の嬉しさに、我れ知らず病みたる身を顧みず、酒痛く飲みたるものから、八枚しころの冑着ても、烏帽子冠るより輕々しき頭さへ、今

は重くなり行きて、枕あがらず打ち伏しける。

合の襖手暴く明けて、兩手つかへたるは嫡子秀政、父上、父上、あれ、あれ、遠く聞ゆる螺貝、もしや敵軍、油斷を見て、ヤ、ヤ、近く聞ゆる吶喊の聲。

我破と衾を跳ね除たる三郎秀景、蹌めく足を踏みしめて仁王立ち、胸板丁と打ち叩きて、物共鎧を。

秀政は逸早く床の間に飾りありし鎧匱を持ち出し、投ぐるが如く蓋を明け放し、攫み出せる大鎧、胴を紺絲に威し、袖、草摺を卯の花に威したりけるを投げかくるに、秀景そを攫きて意丈け高に、兩手擴げて髻サラ〳〵と搔き上つゝ、緊乎と鉢卷して、佩ける太刀を引き拔き、侍女の差し出す雪洞の燈に映して鍔元より切先まで眼を滑らしニツコと笑み、片手を伸べて。酒を。酒を。心得て差す大盃、立ちながら一トあほりにあほりかけ、柱に向つて打ち擲くるに、微塵と碎けて散る盃、馬の蹄に眞つこの通り。

秀景天を仰ひて笑ふ。

侍女の叫ぶ聲、僕の罵る聲、館の中に充ち〳〵ぬ、太郎秀政は逸早く廻廊傳ひて、己が部屋に入り、卯の花威の大鎧を着、承塵にかけし長刀把て一ト揮りリウとしごき、石突立てゝ武者振り勇ましく、馳け參せんと力踏する後より今迄屛風の傍、燈の火蔭に居たりけるいとしき妻の花姫、女ながらも花々しく合戰せんとや、甲斐々々しく花を縫ふたる裳を揭げ、襷かけて白玉の腕を見れし、草摺しかと攫みて見上る顏、黑髮サラリとかゝり、涼しき眼に湛ふる涙ハラ〳〵と、夫が草摺に落つるを見られじと、幾

度か顔を背けて、空しく、唇のみ動かしつゝ、まだ娘心の脱けやらで、一夜限りの新枕、あさき契りの今は早や、是なりきりと氣遣ひてか、凛々しき顔に愁を湛え、見上げつゝ暫し言葉なし。

鬼を拉くべき武夫の、眼にも涙のあるものよ、秀政槊を横へて回顧さまに、何にか花、何にか花、花姫漸く口を開きて、勇ましや其お姿、敵を破りて恙なく、跡は涙に流されて聞へず、秀政呵々と打ち笑ひ、白檀磨の甲手を握りつめ、石突つひて力身ながら、何條敵の木葉武者、鎧の袖を一ト揮り振らば、彼れは自から轉ふべし。ヤ。矢叫ひの音、逸足さして踏み出す秀政、追ひかけて又も縋る鎧の草摺に、秀政屹と振り向きて、軍の門出に不吉の繰言、ソコ除け、ソコ除け、情けを籠めし石突に、輕く吾か妻つき除けつゝ、椽飛び下りて韋陀天走り、兵と音して飛び來る流矢、鎧の片袖縫ふて。戛。

第五

空は曇りて、怪しげなる黒雲、缺けたる月を呑みては吐き、陰々として物凄し、岸邊の蘆のサワ〳〵と風に戰く小川の邊に馬を立てゝ、屹と此方を見返へりたる武夫一騎、館の方に當りて炎々と燃え上る焔顔に映り、惡鬼羅刹の暴たる樣に、見れバ卯の花威の大鎧は朱に染りて、緋威着たらん樣に、蓬ッと顔にかゝる亂髪の間に刀痕一ッ、裂けたる柘榴の如く、流るゝ血汐の頬のあたりに傳はるを拭ゐもやらで天に向ひて、息フッと吹きながら、血に塗れし太刀片手に二度三度、ヒユッ〳〵と風を截り、手綱ひき絞づて唇嚙みたる太郎秀政、袖、草摺、胸板のあたり、折りかゝる箭は簑の如し、エゝ殘念、武夫の

戰を知らぬ宇都宮三郎め、憎や不意を襲ふ鼠武士、敵に背を見する臆病武者、追ひかけて斬る一ト太刀鞍を割つて取り逃かしたるこそ殘念なれ、父上は早ヤ御最期を遂け給ひ、母上もなくなり給ひけり、花は如何にせし、己れ三郎、吾が太刀風の下を潜りて危き命を拾ひ得し生命冥加ある宇都宮三郎め、いで、いで、大刀の刃の續かん限り、馬の蹄の缺けんまで、斬らん、蹴飛し踏みにじらんと、眼瞬りて意丈け高に罵り猛り、鎧の袖をベリ〳〵と裂て捨て、いざさらばと馬を返へして見渡せば火は一面に擴りて、凄き紅の舌を吐き、矢叫ひの音、吶喊の聲は、落つる瓦、折るゝ柱の聲と共にすさまじく聞え渡り、火の粉は雨と降りかゝりて、腹帶のあたり、焚くるも臆せずめげず、太刀の背に鞭うちつゝ、敵をめがけて馬を走らするに、忽ち一團の火の粉流星の如く飛ひ來り、馬首に當つて碎け散るに、馬は一聲高く嘶き、鬣サッと振り立てゝ蹄をあげて躍り上るに、秀政鞍に溜らず鐙外して地に落ちけり。

落ち合ふ敵の兵士二人三人、折り重りて草摺踏み、背に跨り、口々に罵りて、ヤ、須那太郎、最早汝の武運も盡きたり遁かれんとても遁かしはせじと、左手を背にねじ上るに、秀政足を縮めて一人の武士を蹴倒し、右手を伸べつゝ今一人の、草摺攫みて曳とひくに、片膝つひて仆れけり、背に跨る一人の武士は聲暴げて今は是れまで觀念せよと脇板揭け、鎧刀の鞘を前歯に咬みて、いきまきながら、ひき拔く白刄に、あわや今こう、太郎は熱灰を咬んで。ムゝ無念。

ヤ夢か、オゝ畏はし恐ろし、思へば心外千萬なり、妾もし男ならば、匕首持つてアノ宇都宮三郎を、

生かし置くべきか三郎め、大殿館に亡び給ひ、殿も御武運つたなくして、敵に囚はれ給ひけるにや、平常恩顧の侍士ども殿の馬前に立塞がりて、飛び來る矢丸の楯となり、腹帶切つて撫づるや肚を、那須家の武士の死樣見よと、敵の冑の前だてに、腸つかみてタヽキつけ、討死するものなくなりて、臆病風に散る木葉武者、アヽ情けなし、館の跡は草黄み、秋風吹ひて灰白み、涙片手に昔吊ふものもなきか、殘念なり宇都宮三郎め、アヽいたはしきは奥樣あり、千代に八千代とこめし契のはかなくも一夜の夢と消え失せて、情けなく、味氣なく、あさましくも惱み給ひし事いじらしけれ、アヽ殿は今頃如何になり給ひしか、此の月影をさむしき牢の格子の中に眺め給ひて、袂に月を宿し給ふか、それとも今は敢へなくなり給ひしか、大殿もさぞ〳〵御無念なるべけれ、オヽ寒し、寒し、情しらずの風め、妾とした事が淋しき弱き心出してはならじ、ならじ、那須家の奥樣と呼ばれし方さへ、斯く恐ろしき山寺に世を忍び給ふを思へば、何ん寒むかろ、何んの寒むかろ、女ながらも大事の身、弱き心を持つまじ持つまじ、忠義の武士の生き殘れるを語ひて、及ばずながらも那須家を興すは吾が役目ぞ、緊乎りせではなるまじ、なるまじ。

折しも次の間に聞ゆる笛の聲、さては奥樣も御目覺めなされしか、枕かひやり靜かに起ちて襖細めに覗ふに、花姫は凄みし月を眺めつゝ椽のほとりに佇み、餘念なく歌うとふて、吹きすさむ笛の音空にひゞけり。

第六

横笛把りて花姫は、黒髪おどろに振り亂し、やつれし顔の月に映りて青く、さむしげに、怨めしげに月を睨みて、月よ、月よ、無情の月よ、吾か言ふことを、聽け、聽け、聽けと凛々しき眼に湛ふる涙ホロリと隕しつゝ、怪しき歌をうたひては月を睨みて笛吹きすさみ、又も月よ、月よ、無情の月よ、吾が繰り言を聽けよ月と叫びつゝ、笛吹きすさむ、今ハ此花姫も、いたはしやさもしき狂女と成り果たるこそ哀れなれ。

聲を竊みて細々と語り、忽ちに又聲を怒らして罵る聲の暴々しく、眞紅の唇を返へしつゝ、覺束なくも繰り返へし繰り返へし、小さき胸に湧き立つ思を吐きつくす、狂女の心根いぢらし、

峰の松風もいつか吹き斷ね、靜けき山のさびしさは、谷間の水に落つる月の影を、掬ばんとや岩の木蔭に叫ぶ猿の聲、一ッ二ッ、蒼を仰げば、さやけくひかる北斗の影、手を伸べなバ撫でらるべきまで間近く見え、秋高く、氣は澄みて、沈々と更け行くにつれ、此古寺のさびしさは譬へんに物なかるへし、斯る畏はく、すごき深山の夜半の獨寐さびしく、ゆくりなく見る樂しき昔の夢の中に泣きて、やがて昔の跡追へば、榮華は衣の袖の露に宿る月の影と喞ちつゝ、狂ひたれども流石に昔忍ばれて、月を睨みて繰言のかづ〳〵。

やがて花姫は笛をやめて。思へば床しや去年の春、園生の櫻の散り初めて、ソヨ〳〵と吹く風にさそ

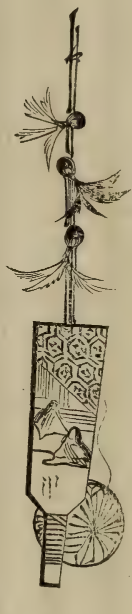
はれ〳〵散る花の吹雪を袂にうけつゝ、一夜を千夜の思ひして戀しき吾が殿をまつ宵こそれかしかりけれ、まちくたびれて假寝せし閨の板戸を洩れて、枕邊に落つる有明の汝の影、吾が淡きさびしき夢を白まして、照したるを知るか月よ、知らぬか月よ、ソレ、ソレ、戀しき殿に逢ひ初めて、忍ぶ思を呉竹の小笛にこめ、吹きすさみつゝ、千々に碎けし吾か思ひの神に通じ、嬉しき樂しき夢を見たりし時、汝のひかりやわらかく、白銀をのへだる樣に輕く此の世を包みたるを、知るか、知らずや、月よ、月。あら情けなの月よ、うれしき樂しき昔の我れを照しながら、我か言ふとの返答もせで、澄まし居るこそ憎くけれ。

さめ〳〵と泣きて花姫ハ、小笛とりつゝ吹きすさみ、又も音を停めて、ア、ふら〳〵と我か身が輕うなつた心地がするよ、輕ふなつた、輕ふなつた、己れ月め、無情の月め返答もせで、黒き雲間に顏を隱したな、エゝ返答聽きたし、聽きたし、飛んで行ひても返答聽かんと、破れ朽ちし縁の上を躍り跳ね、アゝ情けなの月め、月め。

花姫はたけり狂ひ、手に持てる横笛を折りて、咲き亂れたる女郎花の中にたゝきつけ、黒髪サッとふり亂して裳しどろに狂ひ〳〵、縁とび下りて馳けいだすに、侍女魂消えてアレ奥樣、跡追ひかけて共に行く衞白雲山の奥に。

* * * * * * * * * * * * * * *

行きにし後は山青み、月も青みて風青み、折りすてたりし横笛のいつしか元の竹に返へりて、一夜と呼べる竹のみぞ、昔しながらの色青く、今に殘れり美人の啼痕を染めしまゝに。



◉新佐世姫

第一回

九州福岡の近在に、大山砕也と云ふ我子ひとりを心の主人として、夫の無きに甲斐〲しく世を經る剛氣の後家、亡き人の遺されし僅かなる金を働かせ萬事つましく活計向油斷なきも女の痩腕、入るものなくては朝夕の烟もやゝ細るに、埋木の花さく事なく此子を片山里に朽ち果さしては、魂に骨に刻み込で今猶忘られぬ御臨終の時の其言葉、砕也を頼むと言はれし我夫に對して申譯なし、嗟。我其折御心安く御思召せと漸く袖嚙ひむしりて對へしに、寂しき笑ばかりを片頬に見せて其夜の中に亡せられしが今のまゝにては行末何となるべき、緊乎せでは叶はじと思ひ切ツて那日よりか身を落し、賃針仕事の看板を窓竹に結ひ付て、夫れより微なる燈火を晷に繼ぎ、針だこの痛み堪へながら他人の晴衣を縫ひては不思手をとゞめて、我も昔しは花を縫はせた振袖着て、春の野邊に土筆摘みたる事もありし、今こそ零落たれ、末を見よ、砕也を天晴なる男に仕上げ好き嫁貰ひ、此頃の愚痴を昔しの笑話になして、芋粥の味知らぬ當世の花車女に聞かしてやらんと狹きだけに一筋なる女の念力、砕也を針箱の斜筋に坐らせてきびしく讀書勉强さするほどに、貧苦の中に育てられし甲斐ありて砕也も世の常の小兒ならず、必死となりて學問に餘念なく、斯く母子心を合せ傾ぶく軒を憂ともせず、業風吹き暴る浮世を十年あまり驀然に渡る程に、まづしきも馴れては苦しみ薄らぎ行しが、情ある同郷の人の今は東京にめで度暮し玉ふ方よ

り見込みありしが便ありて、碎也殿も年比、片田舍にては修業心に任せがたかるべし、是非〳〵出京させられよと深切に言ひおこされけるに、嬉しや天道のお助けと心を定め、海路遙かに舟の中も親子行末のみを語りながら東に上りて、其人の世話になり我は身を惜まず下女ばたらき、碎也は或る學校へ通はせて貰ひける。

月日早く過て碎也當年取て廿六歲、大學の助教授命せられ、今は立派に一家を持たり。眉一文字に鼻たかく、眼凉しき內に何となく人を射る光あり、口元きりゝとしまり、身の丈けゆらりと高く、天晴明治の御代に耻ざる大丈夫、今年學成り業を卒へて其の心愈々堅く、愚人のうらやむ學士の稱號得ても其の昔善く復習し褒美に母の手づから菓子戴きて小兒心に嬉しく思ひたりしに比べては何の難有もなく、せめては亡き父の名を顯はし貧苦の中に我れを養はれし母には尙々海山の御恩を報ひたく、思ひ積りし强き心を廣き額の內に潛めて都の柔弱風も骨逞しき碎也の身には寄り付ず。平日は手織木綿の洗ひ洒しに白き兵兒帶くる〳〵と捲き付け、同じ學びの窓を共にせし誰彼の、細ズボン細ステッキ、雪なす白襟に飾り鈕の玉を光らせ高帽子を役者の寫眞見たやうに眉を隱してかぶり、薰らす煙草に贅澤の詮儀唇小賢しく動かす浮薄なる世の風を追ひて邊幅を繕ふ其の心の卑くいやしきを見て片腹いたく、獨り腕を怒らしては學問の上に捨身の覺悟きはめし人なきを口惜しがりけるが。流石は男の樣な母も、骨折甲斐のありて碎也を是迄になしたるに心すッかりと寬み。嫁取るも碎也の年には早からず早く可愛き初孫出

來て、風車でん〳〵太鼓にあやしかはいがり、老樂の信心參り、鳩に豆買ふて遣りて喜ぶ笑顔見たくなり、或夜靜かなる時碎也に對ひて、其方も最早身も固りたるに嫁取るも早しと云ふ年ならず、しかも若男のひとり世に住むはよき事ならず、意に叶ふ娘もあらば貰ふて善かるべしと言へば碎也は、母上の御蔭にて是れ迄は我も男一疋となり、是よりは活たきる世の中にて一ト働き致たき所存、少しの間御辛抱なされて下され、私考へにハ此世の中に男一人では眞誠の人間とは申されず、結婚の曉に始めて人間一人前となるもの、天地陰陽の道理にて片々では眞の世の味も解らず一生鰥寡で暮す人は言はゞ片輪もの、されど其婚姻と云ふもの至極の大事、若しも我と意合ぬ女なれば夫こそ一生を誤る基なり、朝夕の業御大儀なれバ倘今一人下女を雇ふても埒明き申すべし、少し思ふところも御座れば此儀は今暫くと、明瞭言ふに母も強ひ兼て此話はやみける。

斯くて二三月を經る程に日頃快活なる碎也、此頃何か迷ひけん思ひに沈める樣子親める硯の海も今ハ涸て書册に塵の堆く、毎々親しき朋友と臂を把り膝を交へ數盃のビールに耳紅くして醉を吹く高聲の議論、小夜更るまで興じける其元氣も次第に脫けて、うつらうつらと日を暮し太き息宵の衾を洩るゝ事も折節はあるに母親心配して、慈愛の言葉繁く問ひ玉ふにつゝみ切れず、或日心を定め胸の思ひを打ち明けて母に話しける、母ホヽ笑みて、それ、言はぬ事か、扨も、其方の學問は齡ふけたれど世事にはまだ小供なりけると言はれける。あやしや武骨ある大山碎也、今ハ敢なく戀と云ふ曲者にむざ〳〵組み伏ら

れてか、それとも他に何か〳〵。

第二回

碎也が家近き町に住みて、輦下一ばいに名高き娘、昔しならば名工の一枚繪に書かれて、若い男を見ぬ戀にあくがれさすべきほどのもの。然も二人。一人はお玉と呼びて京都生れ、比叡の雪の肌、地主の花の顔、流石は雅嫻の風絶せぬ京に育てられし程ありて、容止しとやかに、當世風の束髪、薔薇の簪のさし樣にも、何處やら床しき處あり、アノ束髪をやめさせて、品のよき島田に結はせ、女學生流儀の田舎びた着物の替りに、ちやんと振袖着せたらば、天晴京人形の姿しどけなく、嘸や可愛い事なるべきにと、碎也の母は毎々話しける、一人はお露と呼ばれ、神田上水に産湯遣ッた丈けありて、高輪の新月眉に涼しく、墨陀の霞の色、面にやわらぎて、どうも云へぬ價値は、ぱつちりとしと黒目勝の目付なり。しかも純粋き東京ッ娘、姿つくるにも趣きありて、着物も光るものばかりは嬉しがらず、万事に付けて意氣〳〵しく、健氣に振舞ひすべて、洒落としたる風情、母の心遣ひも思ひ知られて、可愛げなり、お玉は今年二九の春を迎へ。お露は芳紀廿年に一ッ足らず、お玉は曉の風に、眠いまだ足らで覺たる海棠のやうに、見る人の眼も、うッとりとなり、お露は花あやめの新雨の後に咲きたる樣に、見る人の眼もハッキリと覺む、お玉は何處までもやさしく、從順に、耻しげある娘風情、お露はやさしき中に、何處となく凛々しき處ありて、是れも憎からず、

兩人の家は、柴垣一重隔てゝ、庭づたひに往來して、眞實の姉妹の樣に、其性質の違ひ居るより愈よ睦しく、鞠つき、やり羽子の幼な遊びより、學校まで同伴に通ひて、毛糸の編み樣、一つ敎師の手に敎へられ唱歌の音階、互に聞き合ひ、聞かれ合し事もありて他の生徒も、嫉む程の中よし、一ト年春の運動會にれ玉例もに似合はず、芝原馳け廻りて袴の裳踏み失ッて腕を石に傷けたる時、お露逸早に走り寄りて、買ひたての絹ハンケチ惜氣もなくべり／＼と引き裂き結へて遣りたる事もありて、敎師にも褒られし、此恩柔しき胸に刻み込みてれ玉はお露を姉とも賴みて交るに其學校も昨年卒業首尾能く遂げ今は互の部屋に行き通ひて、時々面白き議論をもなして父母に嬉しがられける。

ふたりの父母も、今は娘も嫁入り時なり。今の盛を過してはなるまじと心掛けるにお玉の親宮川の知れる友に曲淵爲直といふ若者ありて、或る日宮川の家を訪づれ四方八方の話しの中に、其知れる朋友に大山と云へるものありて、此邊に住める事を語り出で、且つ其人の履歷一ト通りを話し。妻欲やといふ年なるに妻も迎へず、母と二人暮しに今尙は苦學の窓に節を折りて、奇行朋友の間に隱れなく、後々は天晴ねらい人になるべしとの話しに、宮川は內々喜び、其曲淵の紹介にて、碁に交際のはしをひらき、何時となく大山の履の跡を、宮川の門に殘す樣になり行きける、お露も折節はお玉の家に居合す事ありて、つらつら大山の人となりを見るに、其氣性さッぱりとして少しのいやらしき處なく、花車に／＼を盡して紳士ぶる曲淵に比べては、額廣く眼はッきりとしたる氣高さ言はん方なく、話し聲腹より出で何

となく確實よ、かますの煙草入、菜刀豆の煙管叩き減らしたるに煙草吹ふては、メションのパイプにかめをの煙匂はす曲淵の卑しき心地推し計られて小面憎く、碎也の爲す事言ふ事信仰の胸には殘らず氣に入りて、果てハ其俤の朧に小夜の夢に見ゆる樣になッては、堪らず、ます〳〵お玉が許に行通よひの繁くなるもおかし、お玉も元より同じ思ひに沈みて、是れも小さき胸を痛めける、曲淵ハ元來狡猾にして姦智長けたる白徒なればバ旨く宮川を手の中に丸め込みて、お玉を己れが手活の花と眺めんとの野心、胸の中に潜めて見れさず、薄き唇に輕薄の言滑らし、自分の朋には良きものあるを誇りて、碎也の噂我れ知らず話せし談に、思ひよらぬ花さきて、主客俄に處を異にし、嘸御暑かろと言ふては團扇に情の風を送り、御寒かろと云ては火桶に炭を差し添へて愛嬌賣りしお玉は、今も通常一遍の辭儀に埒明けてちつとも待遇ず、アノ碎也めに宮川親子ちやほやするのみか、隣の娘まで彼れが言葉は耳に聞き我言葉は盆の窪で聞くやうなそぶり、憎らしきは大山碎也、恨めしきはお玉の心ばへ、我を白痴にして好くも袖にしたりと、豚を抱きて臭きを忘る小人の常、或る夜書齋に思ひ沈めて、飲みかけし茶をあたら水にしける。

第三回

椽側艶々しく、軒の風鈴の音冷しく、芭蕉の葉翠を滴らす圓窓のあたり、風通しよきお玉の部屋、片足椽に投げ出して敷居に腰かけながら、柱によりかゝりたる曲淵爲直、大縞の浴衣しどけなく、濱縮緬

の兵兒帶寛く捲き付けて金鎖だらしなく。今日は宮川夫婦佛參に行てまだ戻らず、下女のお松と畜猫のポチを對手にして留守の寂しさを喞ち居たる折柄お玉もいそ〳〵しく待遇すに、恐いものなく流眄にお玉の顏を見上げて、まことに人の素性程解らぬものはなし、アノ大山。大山も外面ハ鹿爪らしく狸の皮を被ッて居れど、心は中々の魔物、我れも初めはだまされて知らず、一概に堅い男と思ひしに、近頃きけば學校に居たりし頃も、或やんごとなき令孃に恐しき思ひを運び、鵞洋筆にインキの跡いやらしく、人には知れざるための英文に、直ならぬ道を、走り書の文まゐらせしとか、夫を友達ㇸ拾はれしとか、好色の噂さかまびすしく、其戀も出來しやら出來て捨られしやら、或日はこり顏に机の引出しより取り出して我に見せたる寫眞ハ、藝妓風の女なり、これも怪し、夫れに彼筑前の片田舍に暮せし素性しれぬもの丶子、母もすれにすれたる莫連女、斯る白徒とは知らずに御前樣にも紹介せしは、我罪深かりしと云ふ

お玉は其性質温馴なる丈けに、心の緒にしッかりした、くゝりめなく、且つは隣のお露、我を差し置いて數々大山に愛嬌の言葉を賣り付け、小賢なる振舞心憎く、碎也も亦我世辭を斜かけに外らして、獨りお露めに通はす眼づかひの繁きも尚更憎らしく思ひ居たる所にかく云はれて愛想忽ち冷へ娥眉梅を嚙んで蹙み、其後は夏菊の香を追ふて狂ふ胡蝶も、可愛らしうはながめず、埒もなき不思議の氣のもつれに、罪作りせる事もありけり、

其後も曲淵は、幾度となく、お玉を音つれ、其たびごとに愛嬌とり〴〵の媚言の數を盡し、胸の一物に鍍金の黄金の光を粧ひ、段々とお玉に良く思はるゝ仕掛、女も今は親切の人とおもふてか憎からざる情を素振にあらはして、話も常にむづかしく搦み合ひける、此先何となる事か。

お玉は何日となくれ露に疎くなりゆきて、昨日までは親の土産も半分は互に贈り合ひ、分け隔てなく睦みしも、今は適に會ふも言葉少なく、お露も何となくお玉の振舞に面白からず打とけて串戲言ひ合ひし言葉も漸々と禮義の苦味にもどりて、元氣よく話しても、果てはお玉の生返事に張合ぬけて口數少なくなる程に、無殘や今ハ疎なる垣一重を國界にして掛がねかゝる柴折戸の關。

第四回

大山さんは此の頃何して居らるゝや一周に一度位は互に行き來して元氣よく、玄かも明晢としたる御聲にて、いろ〳〵のおもしろき話しに、我も物識に成ッた樣な心地するのみか、誇るにはあらねど、來客の折にも好き話草に成ッて、近頃は貴殿も學者に成られたりと世辭言ハれ内々は嬉しかりしが、碎也殿影さへ見せられぬに、我のみあらず娘も心配して居る樣子、如何せられしやと案じわび。晝寢の夢を行水に洗ひ落した暑に苦惱る腸も、氷に浸す奴豆腐の旨さにハ、一本脱けし齒の間より五臟に浸み渡る夕暮の涼風、幾盃かの直しに機嫌よきお露の親生田は、夕涼みがてらお玉が親の宮川を訪つれて、一局の碁に幾目の勝負ありて置き石の講釋も止み、今一局と黑を把りしか、いらだつ宮川を留めて、茶碗片

手に持ながら、大山の噂仕出せば我が家にも先月來られし限り其後は來られず、洒落したる人なれば、つまらぬ俗人の禮義のよしあし氣にかけて、面白からず思はるゝ事は決して、決して、なき筈なれど、何か仔細あるべしと内々心配して此間曲淵さまに尋ねましたに、母刀自不例の事ありて、此頃ハ引き籠りて居らるゝよし、夫にアノ樣に堅固に見えられても、木石にあらぬ身の折節は面白き話柄もあるとの事と話されたり、實は娘もお露さま同樣に年頃、間違ひでもあつてはなるまじ、早くやさきしきものに、かたづけて、安心したく思ふ矢先親子水入らずに暮さるゝアノ碎也殿、じかも學士の肩書さへ持たるゝお方、是れこそと思ふに、此の頃は娘何となく碎也殿を嫌ふにはあらねど、先頃の樣に碎也殿〳〵と箸の上げ下しに噂せることも忘れたる樣子、かつて碎也殿の歸られし跡にて遺れて行かれし金巾のハンケチをも、丁寧に皺延ばして手文庫の中に納め、其の次來られし時、恩を着せて返せる事もありし其情も今はなく、最早歸らるゝかと拂ふ袖停めかね、下女に耳語して帽子隱くさせ、じらせし事もあッたるに、何故か此頃の樣子、親の眼にも少しは悟る處あり、就てはお喜び下され、御存知かはしらねど、アノ曲淵の申入れありて、玉も近々に嫁にやる話し大概整ふたり、お互に早く初孫の早蕨の樣な手で、顋の白鬚をいじくられ、廻らぬ舌の可愛らしく、菓子強請られる樣になッて見たきものなり、七月は佛月八月ハはなれ月と云ふて不吉なり、十月にもなりて黃道吉日を擇び祝言さすべし、娘も内々は待ち遠しがる其心を汲みては、早く冷風の起よかしと祈るも老人の短氣、兎角若い内が花、お互に年老ッては

けなせし和尚の説教にも、自然と耳搔きて耳の垢取る樣な心地し、惡る口叩たきてさげすみし碁も、行燈の蔭に舟こいで、睡がる媼の辛さをかまはず、うか〳〵と夜更するまでおもしろがるやうに成ッては世の味も寂たり、何でも唯若いもの良かれより外に望みなしと、碁石を盤の上に投げる樣に置き、疎らに長き鬚を動かして、笑ふ、それは耳よりの話し、大慶至極とあいさつして生田は歸りける、

扨て其の翌日、お露を膝元に呼んで碎也の母病氣の事より、お玉が曲淵に片付事など話し聞かせて、日ごろ中よくせし碎也どの斯かる時に等閑に捨て置きては惡かるべし、何がな見はからひて、見舞の印許りと其方の手より碎也殿に參らすべしといはれてお露部屋に下がり、父が言はれし後の話に、つく〳〵と此頃のお玉の素振りに照し合せて我を疎むやうに成りし數々の不審すッかりと晴れ、嫌な事かな、アノ曲淵さんに何處に可愛き處あるかは知らねど、日頃利發のお玉さんの目に、迷の雲かゝりては、口先きに甘き蜜をたらして、心に名利の毒深き男をも見透しがたく、哀れ輕薄の小人を五十年の伴となさるゝつもりか、先頃作ッて我れに見せられける高慢ちやくれし結婚の議論も、さては口許り能く言ふ鸚鵡の嘴青く、百年の大事を一寸眼前の樂みに消すこと笑止々々、やがては眼のさむる時あるべしと思ひつゝ、それに引き比べて、また大山が塵に染まぬ心を、氣高く。尊とくおもひつゝ、程遠からぬ碎也の家を訪づれ、見舞の言葉後先き不揃に述べそこ〳〵に歸りける、碎也は見送りて少しは顏あかめながら母に向ひ、先日お話し申せしは彼の娘の事なり、アノ美しき眼差しよりも、アノ氣高き眉よりも、尙ゆ

かしき心ばへ、我慥かに見通したり、母上の賞められけるうつくしきお玉、あのお玉と比べものにはあらずと、ほのめかす碎也の言葉に、病の中なれど母も笑ひけるが、老の身の心短かく、我息ある内に我子が意に叶ひし嫁とりて婚禮すまさせ、それを手柄に彼世の我が夫にも見ゆべしと生田の家に出入る知人に口きかせ、滑かに其事ほゞ整ひしに安心してか、おこたりし病俄かに重りて、哀れ初孫の可愛き味も知らず、秋に先だッて早や落る窓前の桐一葉。

第五回

我れ大山碎也身丈六尺には足らざれども功を萬年に遺し敎を百世に垂れんと欲す、何ぞや今時の木葉學者、古人の糟粕に舌皷を鳴らして口賢しき鸚鵡の眞似、心は讀む横文字に緣ある蟹の腸なく、靑眼鏡の底に千古の心胸を開拓するの元氣も脫け、一世を推倒する勇は洋筆より重きもの持た事なき腕に鈍りて、蟻の甘きに集る樣に蜂の香しきに群る樣に、周を渭濱に釣り漢を桐江に釣る大謀もなき癖に、針の孔に駱駝を追ひ込む樣な大言を吐き散らして、兎の毛の先で突いた樣な小さき名利を攫み合ひ奪ひ合ふ、其了簡の狹き事、斯る人には「ピン」より細き息も吹き得ざるべしと我れは思ふ、嗟、世の中の學者物識の中に斯る人はまだしもの事、其より下ッては、言ふも小面憎きえせ學者、腦味噌を學問の取次所にして耳から口へ行抜けの品物に、三割增の法螺をかけ、英吉利の誰れに肩揉ませて獨乙の誰れに足をさすらせし樣に、罪なき瞽者を瞞し込み夜半の枕邊に我れと我が罪に魔はれて、めき〳〵と瘦る我が面を撫

でふ、ハヤ呼吸器の詮儀、人生五十七十は古來稀に、黄粱炊しぐ間より短き夢のさめやすき軀をもつて、百年金剛の身と思ひ込み、哀れ傀儡のすこしも活氣なく、細き機關の糸を頼みに、躍り、狂ひ、跳ね廻りての大得意、見るさへ笑ふに堪た話しなり、我れを人となし給ひける大事の大事の母上は、はかなく成り給ひて、今は浮世の孝養致す所なし、よしさもあらばあれ我在天の母の御靈に奉るべき我胸の中の眞誠は、ますます凝りこつて衰へず、いざや是より身を學問の上に擲ちて、天晴快男兒の手本を見はし、此子此母の懷抱より出しと人にも歌はれ、且は巾幗丈夫の汚はしき腸を抉り出してやらんものをと、燈火烈々たる室に讀殘の書物擲ッて、虹を吐く長嘯さてもおそろし、此功名心には、戀も何者、色も何者、碎也はやがて筆の先きを噛んで書き續きける

人は此世に出ると直ちに慥かに一の職分を持つことは避くべからざる事なるは御前樣も御存知なるべし、我は我の爲すべき事を慥に或者より命ぜられたるを知り候故、常に我職分のために道を求めて進むものに候、我母は今我母の職分を盡されて終られ申候、我は是より我職分の一なる母に對するの事を果し候へば、直ちに我本來の目的に取りかゝらざるべからざるを認め申候、御前樣に我が心を運び我母の意によりて喜ぶべき事の成就するまでの運びに到り候も、結局はお前樣を見て、お前樣は御前樣自身の職分を盡さるゝに勇敢なる御方と存じ候より起り候事に御座候、今最も良き機會を得候事あるより、我身を學問の犧牲となして、直ちに南洋に赴き、生物研究にまかり出候、機會は得が

たく、失ひ易く、殊に時日も甚だ切迫いたしたれば、わざと御暇乞には參らず候、是れは耻かしながら我未練心あるよりのわざにて候故、御うらみ下されまじく願上候、將又御前樣、我を人情にうとき怪物などゝ御思ひは無之事と、たしかに信じ申候、世の常ならば新婚を濟まして旅行に双蝶の痴を學ぶべきなれど、それは愚人の所爲にて少しもうらやむには足らず候、我等の前途はまだ〳〵遠く候に、飴をふくみて兒に與ふる如き腰拔の家族的快樂は、望み不申候、互に山川万里を隔て候とも、是は赤肉團の上ばかりに候へバ悲しむにも當らずと信じ候、唯々萬々一にも我を强ひて矯め、空しく飾るものかと御疑ひも候はんかと悲しく候のみ、千言万言盡さず候へ共、次の詞だけに止め申候

我れは我が最も良しとする所をなすべし御前樣之れを賛けざるべからず

御前樣は御前樣の良とする所をなさるべし我は之れを妨けず

碎也方

お露樣　參る

斯く走り書きに書き續けて溜息と共に筆を投げだし流石に涙ぐむ眼を閉ぢて少時は在りしが、又筆を採りて我は之れを妨げずとある所を塗抹し我れは之れを祈るとあらためける、扨もむごい男哉。

第六回

嬉しや心の誠、神も感じ佛も受納し給ひしか、我が念力通じて床しき人に見ゆるも早や二月の外へは出ざるべし、さッぱりとしてしかも風采凜々しき碎也殿に初めて見えし時より、御氣に入られんと思ふにはあらざれど我れ知らず簪の差し振り口紅にまで氣を配りて、斯くては又なまめかしき女めと嫌はれてはなるまじと、鏡に片頬の笑みを映して折節は母上にも見付られ、近頃は其方もおしやれになられたりと言はるゝに恥かしく、扨碎也殿に逢ひては何となく胸の動悸も細かく刻み、日數も少なく、歸られし跡にて、さては淺ましき女とさげすみ給ひしにてはなきやと、埒もなき物案じに其次はわざと身裝もたしなまずに行けば、殊の外元氣よく、しまりし唇の間に白き歯を見せられて笑ひ興ぜらるゝに、まづ〳〵安心して嬉しく思ひたりしに、行く度毎にお玉殿の素振何をすねられてか、つれなく我に當るのみか、折節はあのいやらしき曲淵殿も落ち會ひて、トランプ花合せの勝負にも、お玉殿變に曲淵のかたを持て卑しき心の企みを萩に伏猪の姿やさしく、いつも碎也どのを一人にして、白眼をむきいだし意地惡げなる言分、其つらさを推して我れ知らず碎也殿をかばふ氣になり、しッぺ返し小氣味宜かりしに、我が心根を憐れに思召してか、あの四角の膝も折ゝは崩されて、武骨な串戯も何處やら床しきに、心嬉しく、いつも來らるゝ日曜日の夕暮、まだ影見えぬに待ち遠しく徒然の思ひを笛に寄せて、流石に忍ぶる戀の人に聞かれなば、音色にも現はれんと、小簾たれ籠て忍び音に吹も我ながら知ず〳〵、小夜更るまで待詫びし事さへありて、此次來られし時には、斯う言ふてすねても見たしと思ひたくみしも、逢ふて

見れば言ひ出しがたく、千々の思ひも一言の情に脆くも散りて跡なきは我ながら可笑、お玉殿あの曲淵と首尾よく結婚なされ、西洋風にホネームーンとやらをなさるゝよし、宜き夫撰り當てゝ、えらかろ〱といふ風を見せて高慢顔にお玉殿我れに話されける、今に見よ我れも負けじ。一日も早く御傍に行きて學校にて習ひ覺えし家政學の應用、今までの樣にうか〱としては居られず、世帯の經濟惡しく萬事に付けて締りなきは、家庭の和ぎもなくなるべし、夫に付ても母上の忌服に、髪ものび、鬚ものびて、めツきり痩られし碎也殿、浮き〱しく話しかけては慰むる我が志も仇とならんと、いつも口數少なく、罷り歸ることのつらさ、若し御不例の事もあらば如何せんと、屈託顔に讀みさしの書を推しやりて、お露は思ひ沈めるに、下婢いそ〱しく大山さまよりの御文と差し出すに、忙がはしく取り上て見るに上書の文字も力あまりて、しかも淡墨の走り書き、胸轟きて披き見れば。無殘。一句は氷、一句は火
岩を貫く男心の一筋に、弗ツリとも我に知らせず、遠征給ふ其心の猛々しさ、熱沙脛を爛し黒風面をなぐる恐ろしき島に渡り給ひて、椰樹の木蔭に篝火消えては猛獸の遠吠に夢を破られ、荒磯に舟を寄せては飛び散る波の花に魂冷えて、波間に映る大白の光は枕を覗ふ鰐魚の眼恐ろしくも、學問の爲めとは言へ情けなく一封の書束に我れをふり捨て、しかも結尾の二句恨めしき御心と、胸は有耶無耶振り落す簪を弗と踏み折りて猛然として立ち上り、風を截る十里の火輪車、もどかしと車の内に足ずりして魂は飛ぶ天の一方。

第七回

滊車横濱停車場へ着くや否や、お露は落ち合ふ人を突き退け突き退け、一散に波止場の方へ走り行く元結弗ツリと斷れて黒髮風に亂れ、涼しき眼いつしか血を注ぎ、帶もしだらなく白玉の脛現れに、身は宙を踏む飛行仙、血相變へし其の凄み、戀に凝ッては我れも我ならず、瞬く間に波止場に走り付きて沖の方を見遣れバ今しも一艘の滊船、煙突に黒烟を漲らし車輪に觸るゝ波雪を噴き滊笛海原に響き渡りて勇ましく、次第〳〵に進み行くに張りつめし心もガッくりと折れて、あだに眺むる眼は唯波の間にかすかに殘れる白き海路に迷ひて魂は床しき人の船を追ひ行くお露、わづかに我れに返りて、是迄來たる甲斐もなく、おめ〳〵と歸りては父母の手前も面目なし、聞けば彼の船神戸に寄港するよし、せめては神戸まで馳せ付き碎也殿に逢ひて我が心の誠を一言なりとも明し申すべし、間に合はざれば是れ天命、我れも自から信ずる職分を慥かに、慥かに、遂し爲げて天晴大山碎也の妻に耻ざる行して、浮薄なる當世女の眼を覺させんと意を決めては、憎くや時計の針の歩みも遲く、一時を百年の永き思して、神戸行きの滊車に乘り込みけるが、今迄晴れし空俄かに曇り强き雨に風を加へて山も川も白み渡り唯石炭の烟窓の玻璃をなぐッて渦巻きては吹き散る凄まじさ言はん方なきに、忽ち滊車の進行停まりたり、哀れ片山の岩崩れて進むに由なく女ながらも山を拔く念力失せて、黒風白雨に埋れし大磯の旅籠屋に、夜もすがら魂も眼も冴へ渡りたるお露、獨り碎也が遺せし文をくり返へし見れば、彷彿として眼に映つるその俤

キリヽとしたる眼に涙を湛へ、作り笑ひして、我は我が最も良しとする所をなすべし其方は之れを賛けざるべからず、其方は其方の最も良しとする所をなすべし我れは之れを祈ると、骨に刻み込まれる樣な聲、瞭然聞こゆると思ふに姿は何時しか消えて、藍色なせる大濤の碎けては復打ち上る間に、船体半ば傾きて折れし檣の上に攀ぢ上り天を仰いで、丈夫玉碎瓦全を愧づと吟聲高く、いらだッて打つ大濤に姿見えず成りたるは正しく碎也、やれ傷ましと立ち上れバ、有明の燈かすかに照りて。夢か。現か。

扨て其翌日は、わらしもすッかりと晴れて、波に洗はるゝ朝日まばゆく、起つ水鳥の間から眞帆片帆の影見えて、何も言はれぬ景色も、お露の眼には入らず、朝餐の給仕しながら世辭言ふて呉れる下女の、覺束なき東京言葉も尙は更耳に入らず、舌乾いて味なきを漸やく茶に漬けてあだに食ひ最早神戸に行きたりとて間に合ふべからず、之も因緣とあきらめて宿やを立ち出で、獨り車の上に悄然と思ひ沈めるに、計らずも邂逅ふお玉と曲淵、お玉ハ派手な洋服きて片手に袴を摘んで踵小さき靴の小意氣を見せて刻み足、曲淵は是れも流行の洋服、右の腕いやらしくお玉と搦み合ひて思はずも見合す顔と顔、お露は唯極めて冷かに。極めて凄き笑を漏せるのみ。見向きもせず、車を急がして走せ去りぬ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是れよりお露はたゞかすかなる望を便りに、うつらうつらと日を暮し、小夜の寢覺に初雁の音を聞きて獨りむかしの跡追ば、唯扉漏る月のみ白し。

（完）

版權所有

明治廿六年八月三十日内務省許可
明治廿七年五月十八日印刷發行

明治文庫定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十二册前金	壹圓六十錢
廿四册前金	三圓拾錢
郵税一册六錢	

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　曲田成　京橋區築地二丁目十七番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所

發兌元　博文館　東京日本橋區本町三丁目

中川龜三郎。小林鐵次郎。巖崎健造三先生校閲

圍棋大鑑

一白一黑、目たる三百六十有一、而してその相戰ふに當てや千變万化奇正錯出、運用の妙究極する所なきものは圍碁の戰なり、本書は近古斯道の名將老師と稱せられし人々の手合を詳記したるものなれは斯道の六韜三略といふべし

全二册　大判和裝　正價五拾錢　郵税四錢

大槻東陽先生著

五連碁秘傳

靈變妙化、意を遊戲に發して機を盤面に爭ふ、碁石並べ圖解を加へて、其秘訣神術を説く、餘薀叩き盡くして此技の徑捷なる虎の卷たり

全一册銅刻　正價拾錢　郵税二錢

坂田孫四郎君纂譯　朝田一舟密畫

春夏秋冬 遊戲指南

トランプ花合も珍らしからす、おにごつこ、かくれんぼう事古りたり、何をがなめあたらしき遊戲をと夢うつゝにも待焦れ給ふ小供衆の爲めに、こしらへ上げたる玉手函開けば中は獨逸種の面白をかしくめつらしき四季折〳〵の遊び方、其數凡そ六十餘種之を坐にひろへ給はば長々しき春の日物淋しき秋の夕も樂しく遊ぶ道を知る實に此上もなき良書なり

全一册　和裝美本　正價四拾錢　郵税四錢

瑞穗主八百足　登君著　密畫入

横笛之栞

本書雅樂の越天樂太平樂を始め、神樂の囃子民間の數へ唄、秋の七草、勸進帳、越後獅子等に至るまで、細大漏らさず最丁寧詳細に説き明かしたる者なれば世間無絶の獨習書なり

全一册　雅裝美本　正價四拾錢　郵税四錢

博文館發兌小說稗史書類廣告

書名	册數	正價	郵稅
英文忠臣藏	一	五十錢	四錢
歌舞伎座新狂言 日蓮記	一	二十錢	六錢
夜と朝	一	廿五錢	六錢
櫻痴滑稽談	一	廿五錢	六錢
新御伽草子	一	十八錢	四錢
○猿蟹後日譚	一	八錢	二錢
○鬼桃太郎	一	八錢	二錢
八景隅田川	一	二十錢	四錢
政談月の鏡	一	十五錢	四錢
痘痕傳七郎	一	二十錢	四錢
佛蘭西二人皇后	二	廿四錢	八錢
めをと	一	十五錢	六錢
ロビンソンクルーソー絶島漂流記	三	一册十五錢	六錢
鈍機翁冒險譚	二	一册十五錢	六錢
コサアク兵	一	十五錢	六錢
大氷海	一	十五錢	六錢
闇黑亞弗利加	六	一册十五錢	六錢
村上義光錦旗風	一	廿五錢	六錢
大久保彥左衞門	一	二十錢	六錢
平野次郎	一	十五錢	四錢
女楠	一	十五錢	四錢
十二時會稽曾我	一	十八錢	四錢
東鑑拜賀卷	一	十五錢	四錢
關ケ原譽凱歌	一	二十錢	四錢
佐倉宗五郎	一	近刊	
天下之糸平	一	近刊	
西洋妖怪奇談	一	十二錢	四錢
滑稽敎育談	一	十錢	四錢
骨皮滑稽談	一	十錢	四錢

二

●眞書太閤記	四	一冊五十錢	十六錢
●源平盛衰記	一	五十錢	十八錢
●南總里見八犬傳	三	一冊五十錢	十六錢
●東海、木曾、奥羽、江ノ島道中膝栗毛	一	五十錢	十六錢
●梅暦、春告鳥	一	五十錢	十六錢
●通俗三國志	二	一冊五十錢	十六錢
●三馬傑作集	一	五十錢	十六錢
●柳澤越後黒田加賀伊達騷動實記	一	五十錢	十六錢
●京傳傑作集	一	五十錢	十六錢
●種彦傑作集	一	五十錢	十六錢
●星月夜鎌倉顯晦錄、北條九代記	一	五十錢	十六錢
●甲越軍記	一	五十錢	十六錢
●武王軍談十二朝軍談明清軍談	一	五十錢	十六錢
●漢楚軍談、呉越軍談	一	五十錢	十六錢
●楠廷尉秘鑑	一	五十錢	十六錢
●風來山人傑作集	一	五十錢	十六錢

西鶴全書 二 一冊五十錢 十六錢

●少年文學こがね丸	一	十二錢	四錢
●仝 二人むく助	一	十二錢	四錢
●仝 今辨慶	一	十二錢	四錢
●仝 維新三傑	一	十二錢	四錢
●仝 雨の日ぐらし	一	十二錢	四錢
●仝 寶の山	一	十二錢	四錢
●仝 姉と弟	一	十二錢	四錢
●仝 二宮尊徳翁	一	十二錢	四錢
●仝 當世少年氣質	一	十二錢	四錢
●仝 親の恩	一	十二錢	四錢
●仝 紀文大盡	一	十二錢	四錢
●仝 大石良雄	一	十二錢	四錢
●仝 暑中休暇	一	十二錢	四錢
●仝 近江聖人	一	十二錢	四錢
●仝 河村瑞賢	一	十二錢	四錢
●仝 甲子待	一	十二錢	四錢

●全 太閤秀吉 一 十二錢 四錢
●全 德川家康 一 十二錢 四錢
●全 俠黑兒 一 十二錢 四錢
●全 陸奥の長者 一 十二錢 四錢
●全 新太郎少將 一 十二錢 四錢
●全 賴山陽 一 十二錢 四錢
●全 上杉鷹山公 一 十二錢 四錢
●全 菅相丞 一 十二錢 四錢
●全 日蓮上人 一 十二錢 四錢
●全 五少年 一 十二錢 四錢
●全 二代忠孝 一 十二錢 四錢
●全 平賀源内 一 十二錢 四錢
●全 寧馨兒 一 十二錢 四錢
●幼年玉手函 新年狂言春駒 一 十錢 四錢
●全 紀元節 一 十錢 四錢
●全 子供のてがら 一 十錢 四錢

●全 幻燈會 一 十錢 四錢
●全 春夏秋冬 遊戯指南 一 十錢 四錢
●全 幼年劍舞 一 十錢 四錢
●春夏秋冬 競馬 一 十五錢 六錢
●全 夕すずみ 一 十五錢 六錢
●明治文庫 第一編 辻占飴 外八種 一 十五錢 六錢
●全第二編 雪折竹 外五種 一 十五錢 六錢
●全第三編 劍客 外十一種 一 十五錢 六錢
●全第四編 緣外緣 外六種 一 十五錢 六錢
●全第五編 みゝずばれ 外十五種 一 十五錢 六錢
●全第六編 忠義お安 外一種 一 十五錢 六錢
●全第七編 俄長者 外五種 一 十五錢 六錢
●全第八編 村上義光 外七種 一 十五錢 六錢
●全第九編 浮田一惠 外八種 一 十五錢 六錢
●全第十編 僞稱紳士 外五種 一 十五錢 六錢
●全第十一編 月雪花物語 外八種 一 十五錢 六錢

四

圖書出版
東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第拾二篇

思案外史著

斷腸花
片破月
禿木魚
美及東
可愛以子
わが戀
羽抜鳥

明治文庫第十二編目次

斷腸花……一
片破月……二一
禿木魚……五一
青大將……五七
美人車……六三
可愛い子……九五
わが戀……一〇四
羽拔鳥……一二七

以上

短篇小説　明治文庫第十二編

◉斷腸花

思案外史

其一　雨夜の述懷。

「オヤ大層降て參りましたこと、其方の牖の戸はしまつて居りますの、とヅカ／＼と寐臺の傍に進で來て、玻璃窓から外方を眺た一個の婦人。年の頃ハ二十四五、一体に肥ゑた方で、濃く三日月を畫て居る眉の下に、鈴を張た樣な明眸、二重瞼から愛の雫ハ滴りさうな。頰の邊少し紅色を帶て、其中央に深い靨言語いふ毎に現る。引しまつた口元の愛らしさ得も云へず、一度此婦人に面を會すと、其風采の如何にも高尙く、加も高ぶるといふ處微塵も無いのに、十年も一處に住つて居た樣な氣がして來て、自然隱して居た事も打明したくなる樣な。實に愛の化身！　慈愛の後光は、常に此婦人の後方に輝て居る樣に思ハる。髮は束髮に結て、下着は何を着て居るのか、上に純白洋麻の洋服を被て居た。寐臺に寐て居る病人の顏を、夜着の端から覗込で「よく寐てゐらつしやる、と少し高い調子で獨言いふに、病人思はず眼を開け「オヤお千代さんで厶いますか、ちつとも貴女の居らつしやるのを存せずに、飛だ失禮を致

しました、あんまり睡魔がさしましたので、ツイ今しがたトロ〳〵と致したばかりで……と、さも濟まないといふ顔附。此方の婦人は打笑ひ「妾こそお睡眠のをれ起し申て濟みませんでした、もうそろ〳〵時間が參りましたから、お藥を差上ませう、夫に今の內モ一度繃帶を取替て置きませう、此度は隨分時間がムいましたから、嘸濃汁が蓄りましたらうと何事も苦にせず、ニコ〳〵笑ひながら慇懃に云れ、此方の病人思はず釣込まれて、ニコリと笑つたが、急に又顏の皺を殖して、さも氣の毒さうに「どうも每日朝から晚迄、何から何迄お世話になりまして、三度〳〵のお藥ハ申すに及ばず、汚い足の濃汁迄、厭なお顏もあさらず仕末して頂くとは……。先達圖らず途中にてお目にかゝり、御親切樣に此病院迄お連れ下すつた上へ、かうやつて見ず知らずの貴女に親身も及ばぬ御介抱受るといふのも、何かの因緣！　何と謝禮を申上ていゝのやら、勿体なくて難有泪が溢る樣で……と云ひ終て、老の目の涕にかすむのか、幾度となく夜着の襟で目の緣を拭く樣子。此方の婦人は益〻笑傾け「何がそんなに勿体無い事がムいませう、斯うやつて御病人を御介抱申上るのが妾等の職務。サアこれを召上れ、と差出す水藥を病人は漸く飮終り、チツと婦人の顏を見詰て「此間から伺う〳〵と思て居りましたが、貴女は御標緻も人並勝てよくゐらつしやるし、第一お年もお若いのに、看病婦をして居らつしやるのには、何か原因がムいませう。何時もニコ〳〵笑つて居らつしやる貴女のれ顏の內に、何處となく引立ないやうな、御心配でもある樣にもお見受申ますが……若しお差支がムいませんのなら、どうか其原因をお聞せ下さいましなと唐突の疑

問に、此方の婦人「よく御親切にお尋ね下さいました、宜う厶います、妾が斯な看病婦になります迄の經歷をお話申ませうと、云切て言語ハ無く、見上た眼は早露を宿して、風に揉まれる糸萩の、雨を浴びたる如くなり。

其二　路傍の捨子。

阿母樣がお沒り遊ばされる時、妾を枕近くお呼びなされ、苦しき呼吸を吐き、皺枯たお聲に力無く、所詮此度の業病、全快は思もよらない、イヱサお前等は治る〳〵とお云ひだが、どうして此度は迚も助命るとは思はない。妾が臨終の際に、少しお前に話したい事がある、と眉の皺延んばかりに力を入れてのお言語に、妾の悲しさ、阿父樣のいらつしやらなくなつた後は、杖とも柱とも賴むは阿母樣ばかり。お一人の阿兄樣は、始終家へ居らつしやると云ふではなし、日曜毎に戾ていらつしやるばかり、今阿母樣が若しもの事でもあつたなら、外に近しい親戚があると云ふでハなし、年齒も行かない妾一人、明日からどうしていゝのやら途方に暮れるは知れたこと。思へば思ふ程、悲歎は狹い胸を衝て來て、母の顏見る勇氣も失せてしまつたが、又考て見ると、妾に遺言したいとおつしやるは、全体何事！　氣にかゝると、ハフリ落つる泪さへ、打拂ふ力も泣き崩打れました。母は幾度も起直うとするが、身体の衰弱に枕から頭を離す事も出來ず、凹んだ眼球を力一杯に見張つて、シゲ〳〵とお千代を打眺め「阿父樣のお口からおつしやらふとなさつた事ハ、幾度あつたか知れやアしなかつたが、成る丈けお前の耳に入れた

くないから、と妾が無理にお止め申し、今日が日迄こればかりも、お前の耳に入れなかつたが。妾が此儘アノ世へ行て仕舞へば、誰もお前に話して聞かせる者もないから、思ひ切つて云つて仕舞うが……（言語暫く途切れて）由次郎とお前とは、ほんとの兄妹ではないよ。霹靂一聲先づ娘の膽を取挫いだ。「エ！阿母樣何とおつしやいます？　アノ阿兄樣と妾とハ……。云ふをも待たず「お前は妾の實の子でハありません。佶ばり云はれて、娘は魂消る迄に打驚き、顏色サツト眞紅に染めて、言語はなく首を垂れて仕舞ひました。老婦は苦しひ咳一とつ仕て「決して忘れはしない、今から十六年以前、正月十二日の朝早く、まだ薄暗い内、淺草へお參詣しやうと、七曲の所まで來ると、現時と違ひ其時分のお邸町は、一体にシーンとして居て、夫に朝早く昔でいふ五つ、今の午前八時頃だから、只朝商人の賣聲が遠くに響いて居るばかり。今や町の角を曲らうとすると、頻に犬が吠えて居るから、何氣なく捨石の傍を見ると、生れて一月も經たかと思はれる赤子が、茜木綿の產衣を着て、菰の上に載てあるから吃驚して、犬を追散して抱き取ると、虫が知らすかパツタリ泣止んだ赤子の頰のあたり、ふつくりと丸まつちく肥つて居て、何も知らずスヤ〳〵眠むつて居る樣子、神樣も同じ事。これを捨ると云は、鬼か蛇かよもや人間ではあるまい。觀音樣へお詣の途中で捨子を拾ふのも何かの因緣、北風がピユー〳〵頭巾をあほる此寒空に、此儘見ぬ振りで、行過る事が出來やうか、と懷中へ入れて動搖りながら、二歩三歩進みかけて「よしさ〳〵、泣くぢやない、誰がよ〳〵（以前の犬、不思議さうに此方を向ひて、一聲高く、ウツワン）叱ッ

〳〵。

其三　枕頭の婚禮。

十六年が長の光陰、眞身の親も及ばぬ養育受け、可愛がり給ふに附上り、我儘ばかり。アノお向ふの菊ちやんのやうな鹿の子が掛けて見たい、阿母さんアノお柳さんの召物のいゝ事ねヱ、と直接やら間接やら、強請申すたびに可厭な顔もなさらす、何時も唯々と買て下さるその嬉れしさ、義理ある關係と知つたなら、どうしてそうんな氣儘氣隨が言へやうか、是迄の御恩、海にも山にも比例やうはない、その御高恩の萬分一をお返し申さうと、漸く氣の附く頃は、明日をも知れぬ御大病、今更云つても仕樣がないが、も少し以前にかう〳〵と打明けてお話し下すつた事なら、又仕樣もあつたものに、と道理も無い事までに、お恨み申したいやうな氣がして、此儘お別れ申しては、何時御恩が報せやう、と思へは思ふ程彌勒の世まで勿体なさに空恐ろしく、我と我胸を掻きむしりたいやうになつて來て……。　泪の中にまた思ひ運らせば、これから何の顔して阿兄に逢れやう？　今迄眞實の兄妹とばかり思ひ切て居たからこそ、阿兄々々と、叩いたり、撲つたり、引掻いたり、泣いて喧嘩をした事もある、笑つて冗談を云つた事もあるソノ阿兄が、これも義理ある關係と聞いては、妾の恥かしさ、妾も一處に死んで仕舞ひたいと思ふ程の恥かしさに、小さい胸ハワク〳〵。心の縺ハこんがらかるばかり。　老母は苦しい咳をして「只此上の妾の願望は、お前とアノ由と夫婦となつて、一生仲よく暮してお呉れ、斯うやつて十五年餘

りも一とつ處に、同じ樣に生育つといふのも、よく〳〵深い因緣。よもやお前に異存はあるまい、ねエお千代、と打笑み給ひし母の顏。何んで妾に異存がありませう、御器量と云ひ、御人品と云ひ、おちらしなさつてお恨みなと、勿体ないが此中で母を怨むやうな心も起つて來て、喜憂交も胸の中に湧き返へる。　折しも間の襖子をスラリと音して現はれたは、腕に赤線の入つた黑羅紗立襟の洋服を着た、年齡二十を餘り越したと思へない一個の好男子。太き眉勇ましく、細き脣凜々しく、日每の步兵操練に、可惜顏の色少し黑づみたれど、威嚴は却つて增すやうな。目禮する間も待たず「阿母樣お加減は何うです？」小女は振返つて打驚いた体「オヤ阿兄……が、いらつしやいました。急に母親の枕邊を離れて、部屋の隅に畏縮る。病婦は苦痛も打忘れて、布團を少し乘り出し「オヤ由か、今もお前の評判をして居た處だつた。サアもつと近くへ來て、よくお前の顏を妾に見せてれくれ。若者は思ふに增して母の窶れたるに打驚いたが、さあらぬ体で「アハヽヽ阿母樣何んです、平常に似合はす、そんな氣の弱い事を云つてからに（急に詞の調子を改めて慇懃に）さう脆く人が死で堪るものですか。病婦は力の無い目を見張つて「どうか妾の呼吸のある内に、お前とお千代が、責めて杯ばかりでもいゝから取替はすのを見せておくれ（皺枯聲張り上げ）そんなに隅にばかり引込んで居ずと、お千代早くアノお坐敷の違ひ棚にしまつてある、此前お上から頂戴したお杯を持つて來て……。云ふ聲さへに力無く、霜夜の虫の我から弱行く。

其四　盛裝の新婦。

幼年學校のそも〳〵から士官學校迄何年と云ふ間、螢雪の苦學を積んで、外の學校と違ひ日曜日に外出しても、飯時には必ず食堂に列ばねばならぬ程の嚴正な規律に、遠藤由次郎禁足一日喰つた事なく、苦い顔を名物にして居る校務掛の石山が、遠藤に遇ふと、相好を崩して笑ふぜ、と朋友間の美談に數へ擧げられる謹直男。品行何處迄も方正で、しかも學業は何時も優等で、試驗の毎に第一等の賞品を獲るは、此人に限る樣だと、同窓の人々が皆羨ましがつたのも、既に昨日の談柄となつて、明治九年の秋、最優等で學校を卒業の日、學生總代に選ばれて、祝文朗讀の榮を擔ひ、やがて獨逸帽の縁に、金線ピカ〳〵と輝すやうになつた。お千代の喜悅は、實に形容の外を馳せて、昨日もお湯屋で三助に、お孃樣そんなにお磨きになると、お顔の皮が剝けて仕舞ひますよと嘲笑れる仕末。自分で只非常に可笑しくなつて來て、クス〳〵笑つた事もあつた。さる程に明けて明治の十年、二月の十二日の紀元節の佳辰に、去年同じに卒業した新士官の内で、一番年長の吉村夫婦が、覺束なくも媒妁役を勤め、着附けもしない仙臺平の袴に、吉村が閾で蹉跌いた其風の可笑さに、花婿も花嫁も思はず吹出したが、茲に芽出度新夫婦一組の登記を濟ませた。三々九度の杯に一昨年の木杯を使つたに附け、阿母樣が今迄お出でなさつた事なら、何の位お喜びなさる事だらう、其時のお笑顔がアリ〳〵と目先に髣髴くやうな氣がすると、薄暗い丸行燈の下に新夫婦が囁いた事もあつたが、婚禮の翌日は朝早く、新夫婦が車を連ねて、谷中の方へ行つたのを認めた。

二月の中旬と云ふに、寒さなか〳〵に堪へがたく、垣の間から見え透く梅の梢に、固い蕾がチラホラ見える。天氣こそ快晴なれ、霜溶に墓地の路は、雨上りより却つて歩行き憎く、門前で車を降りてから、懶げに三枚重ねの褄を取るお千代、霜にかゞけた水仙の如く、威かめしく袴の股立高く腰に挾む由次郎、雪を拂ふ松ヶ枝に似たり。孰れ劣らぬ人品のいゝのと。衣服の華麗しさに行遇ふ男女、目を峙てないものはなかつた。兄と呼んで居た昔を想ひ、此朝の恥かしさは八汐に増して、お千代の頭首の上る瀬はなかつた。由次郎の影を力に漸く茶屋の前迄來ると、男は例の無頓着に「お千代常時の通り花を買つて呉れ。此大聲に茶屋の老婆は飛んで出で、早くもお千代に目を止め「オヤ遠藤樣のお孃樣、よくお早く（鐵漿の半ば剝落た前齒を露して）オホゝゝ。笑はれて出かゝつた挨拶はお千代の口の端に上らず、顏の色はいよ〳〵照り勝るばかり。由次郎はます〳〵無邪氣に「これを持つて行つていゝかと、其處の桶に挿してある梅を取らうとするから、老婆は不思議さうに若者の顏を覗き込んで「へヱ、今妾が取て上げませう。前掛で手を拭きながら、高さ三分ばかりに磨り減らした日和下駄を突つ掛けて出で來り「今妾がお水を汲んで參じませう、と閼伽桶提げて井戸の方へ行く途端、お千代の袖をグイと引ひて「何時御婚禮が濟みましたの、鳥渡あちらを向ひて御覽遊ばせ、オヤお笄のよくお似合ひ遊ばしますこと、お髪は矢張お竹どんで……オヤ……ヒゝゝゝゝ。

其五　墓前の感慨。

幾基となく立列んで居る石塔の下に、如何なる英魂が埋めてあるかと思ふと、流石心細いやうな感慨い、胸を衝いて來る。見上げるやうな八寸角の木標に、何某の墓と墨黒々と書き做した、菱湖風の文字が、鮮かに讀まれて、處せきまでに列んで居る生花造花は、時ならぬ花壇を現はして居て、幾筋となく立昇る線香の烟は、天を焦さんばかり。如何なる人の新佛だらう？　生前の衆望も知られて、頻りに敬慕の念も起つて來る。それに引かへ此處はまた、墓所の境界も定まらず。雜草彌が上にも蔓つて居て、打倒れた石上の文字は、青苔の爲に一字も讀めず、其上鬼蔦が十重二十重に纏つて居る有樣を見ては、地下の冥鬼も、嘸怨んで居るだらうと、二十二歳の今日まで、無常の何物だかを知らなかつた遠藤由次郞も、思はず一鞠の泪を墓邊に濺ぎました。　寬永寺の疇昔を、夢に見る五重の塔を右の方へ、二十間許り行つた處に、枳殼の垣根で行儀よく仕切つてある墓地は、掃木目がよく行屆くかして、落葉一トつもなく、正面に高さ四尺有餘の同じやうな石塔が、二基列んで立つて居るのが、卽ち此新夫婦の兩親の墓碑と見ゆる。由次郞は墓前に進んで、先づ花生の樒を取り捨てゝ水を換へ、左手に持つて來た梅を、其中に挿し、殘りの水を石塔にかけて居る間に、お千代は線香を墓前の土に挿しました。お千代は腰を屈め丁寧に、先づ父の墓前に禮拜した後、母の墓に手を合はさうとすると、急に悲しくなつて來て、漸くは今朝の厚化粧を、泪に剝すのも知らなかつたが、急ゝ思ひ返して、泪の中に一笑して「斯うやつて由樣と御一處に、阿母樣の處へ參るやうになりましたから……どうぞ御安心遊ばせ……。と呟いたやうで

あつたが、餘り微音であつたかして、傍に立つて居た由次郎にさへよく聞取れない程であつた、がお千代は又石塔を見詰て、これが阿母樣かと思ふと、情けなくも又悲しくなつて來て、今は袖で顔を被ふ樣子を、由次郎は不思議さうに見て「お千代、何も泣く事はない、お前と一處にお詣りしたら、阿母樣も草葉の蔭で嘸喜んでゐらつしやるだらう！ 云へど答はなく、お千代は泣崩折れました。其處に腕組をして佇立で居た由次郎は、何を考へ出したか、天を仰いで太い息を吻き「吁！ 阿父樣が御在世の時、始終僕に被仰つたが……くれぐ＼も名を擧げ家を興さんければなりませんぞ、今でこそ私も老耄したか、若い時は幾度も戰爭へ出て、一命を惜まず國家に忠勤を盡した功勞で、官職を辭した後も、安々と其日を送つて行かれるのは、お前、全体誰方のお蔭だと思ふ、元をたゞせば皆んな君恩の有難さ、お前も男子に生れたかられ、忘れても君へ忠義を盡さんければなりませんぞ、先祖の名前を汚してはなりませんぞ、と嚙むで含めるやうに被仰つて、阿母樣とれ心を一とつにして、小さい時から軍人に育てゝ下すつたれ蔭に、去年首尾よく士官學校を卒業して、軍籍に列したからは、天晴れ軍人の龜鑑よと（遙に巍々と立つて居る、御影の石碑を眤んで）英名を千載に殘さんければ、第一此お墓の阿父樣に濟まぬ、と奮然とお千代を見返つた勇ましい顔色は、お千代が終生、深く胸に刻んで居た。

其六　青天の霹靂。

今迄晴れて居た蒼空に、一塊の黒雲が起るよと、見る間もなく、空一面に掻き曇つて來て、降り出し

さうになる、此頃の花曇は、天候ばかりで無く、征韓論の破裂で、西郷の一味がプイと本國へ歸つてからは、世の中何んとなく騷がしく。十年前に沒つた祖父が、ひどく秘藏して居た、粟田口とか云つた名刀を、ツイ此間町田へ拂つて仕舞つたが、かういふ事と知れたなら、も少し手離すんぢやアなかつたが……と悔む若旦那もあれば、日頃腕に覺えの柔術は、かういふ時の効だと、罪もない小僧の白雲頭を張り飛ばして、どうだ己れ樣の力量ゝ？　と疊の上で自團太踏む番頭も出來てきて、横町の熊床、果ては新道の小町湯まで、寄ると觸ると今にも目の前で戰爭が始まるやうに騷ぎ立て、行かふ人の顏までが自然と殺氣を含むで來て、北風が木戸を一枚倒した音にも、傍り近處で耳を引つ立てる樣になつた處へ、前の陸軍大將西郷隆盛が、桐野、篠原以下私學校の面々總勢一萬五千人を引卒して、新政厚德の旗を鹿兒島に飜したといふ飛報が、新聞紙上に現はれて、朝野愕然！　陸軍騎兵少尉遠藤由次郎、時期到來と雀躍りして、腕の力瘤ます〳〵堅く、鐵拳空に響かせて、功名を千載に殘すは此時と、馬の足掻を早めて、富士見町の自宅へ歸つて來た遠藤、玄關まで出迎へたお千代を見向きもせず、ヅン〳〵奥の居間へ通つて、洋服着たまゝ、褥の上にどつかと据つた。お千代は平常の通り、湯呑に茶を入れて、夫の傍へ持つて行つて、手を支へ、夫の顏を下から覗き込むで「今日は少しお退出がお早い樣でございます子。これには返答も與へず、湯呑の茶をグイと一息に飲み干して「お千代喜んでくれ「ヱ何を？　とお千代の問に「なにサ一番駈けに戰地へ出發する組に入つたから……。戰地の一言は、鋭くお千代の胸板を刺

したが、勇ましい夫の顏容に飛び立つ嬉しされ直ぐ消えて、無限の悲哀は端なく湧いて來て、返へす言語もなかつた、が「もう躊躇しては居られん、と叱るやうな夫の言語に勵まされて、お千代は漸く「シテ御出發は何日でございます？「出發か、出發は明日の一番汽車で、橫濱迄行つて、其處から直ぐ汽船に乘込む筈だ、「エッ明日！　「なにもそんなに驚くには及ばん、それより今の內手荷物だけでも詰めて置くから、先達お前と熱海へ持つて行つた革提を出してくれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

停車場で泣き顏を人に見せるのは夫の恥と、我と我が胸を押へて、無理に自宅の門前で、夫の影を見送つたお千代。その時は目の緣こそ赤くして、泣腫した跡を留めて居たが、淚といふものは一滴も落さなかつたが、家へ這入ると、急に悲しさが込み上げて來て、自分の部屋へ來る間も待たず、ワッと其場に泣伏して、暫くは正体もなかつたが、淚の中に「お千代壯健で待つて居な！　とニッコリ笑つた夫の勇壯を思ひ出すと、泣いて居る處ではないと、思ひ返して起き上ると、何時の間にか後方に泣いて居るものがあるのを見て、何時に似げない荒々しい調子で、竹、めでたいお出立に泣くといふがあるものか、と女中を叱るお千代さへ又淚なり。

其七　　夜半の惡夢。

高島田に髙引を掛け、裾摸様の三枚重で、あの八疊の坐敷に、生れてから覺えた事のない、極りの惡るい思想をしてから、日數二十と經たか經たない内に、最愛の夫をもぎ取られて、一人取殘されたお千代。夫が出途の後は、夜半の嵐に暖い夢を破られ、冷たい泪枕紙を濕すばかり。風が雨戸を撫でる物音にまで胸を轟せて、四布々團を彼處此處寐返りして、此頃は夜一夜、目蓋を合はせておち〳〵した事はなく、見るもの聞くものが、皆悲哀の媒となつて、三度の食事も思ふやうに箸が取れず、常時の茶碗で、漸つと一杯嚥下やうにすると、食物が咽喉の邊りで塞えて、胸先が何んとなく引〆められる苦しみに、精神はます〳〵沈むで行つて、身体はいよ〳〵瘠せて行くばかり。床の間の影膳を替へる毎に、お千代壯健で待つて居なと、ニッコリ笑ひながら被仰つた、お顏容があり〳〵と壁の面に現はれて、どうしても其處に居らつしやるとしか思はれず……そんな事があるものか、心の迷想と知つて居ながら、責めて其幻の影さへ見たいやうな心地もして來て、今日も今日とて、お向ふの內儀の談話では、それ程までとは思はなかつた賊軍が、熊本城へ押して來て、さしも堅固な熊本城さへ、危險い塲合だとの風評。さう賊が強くなつては、無事にお歸りは難しからう、若し萬一此儘お別れ申すやうな事になつたらどうしやう、と女性の心細くも、想像はそれからそれへと擴がつて行つて、お千代の目は、ます〳〵冴えて行くばかり………。

* * * * * * * * * * * * * *

初は、何の一揉に揉みつぶして仕舞へと、侮り切つて居た賊の軍勢が、思ひの外に猖獗で、今は破竹の勢を以て、熊本城めがけて進むで來た。此城賊の手に渡してはと、野津少將の麾下に屬して賊の背後に向つた遠藤少尉、近頃官軍の敗色を見て、大に怒つて日頃の勇氣ムラ〱と堪え難く、僅かの兵士を引率して、群れ居る賊の中へ割て入り、勝誇つたる奴原を、馬蹄の塵と蹴散らして、ホット息を吻いて、四邊を見ると自分の外續くものもないのに、遠藤撫然と賴み甲斐のない味方の軍勢、此儘此處に空しく軍兵の來集を待つて居ては、逃げ足立つた賊が、又候引返して來るは知れた事、さわつては一大事と、此時まで少尉の傍を離れなかつた只一人の軍曹が「少尉殿、血氣にはやり給ふなと、馬前に兩手を廣げて止めたるのを、何に糞ッ！　と馬に一鞭當てゝ走り出した有樣を、最前から此方の森の樹立に身を隱して居た、洋服の上に袴を着けて居た、私學校の生徒らしいのが、背負つて居た鐵砲取り下ろし、目的を定めて一發、ヅドン！　響に應じて、さしもの少尉、咽喉の急所を深く射貫かれたと見え、迸る血液に胸のあたりを、韓紅に染める間もなく、顏色紫よして、右手に手綱を握つたまゝ、馬上から撻と落ちたのを、目のあたり見たれ千代の驚愕、「オヤッ！　旦那樣が、と冷汗に身体をびつしよりにして、戰慄へ上つて仰向くと、雨戶の隙から朝日がちら〱、寐間を窺いて居る。處へ女中の竹が間の襖子を開けて「奥樣ッ、あの熊本から御手紙が…　「ナニッ御手紙！

其八　戰地の音信。

想像に疲れた勢で、明方に漸とトロ〳〵するかと思ふと、恐ろしい夢に胸を搔き捩られ、死ぬにも增した苦痛に、あれ〳〵と叫ぶ途端に目を醒して、やれ嬉しや、今のは夢かと、醒めた後も痛を覺える胸を撫で下ろす折も折、熊本からお手紙の一言に、胸先づ潰れ、夢から夢に入るお千代は「何に、お手紙、と女中が枕元へ差出す書狀を、捥ぎ取るようにして、暴々しく封押切つて、讀み出すお千代。面色土の如く、唇は顫へ、手は慄なく、

取急ぎ鳥渡申上候、追々暑さ嚴しく相成候處益御機嫌克大賀の至に候。偖賊の勢益猖獗を極め熊本城も餘程危殆に赴き候まゝ、今の內賊をくいとめ不申候ては と、明朝未明に木の葉まで進擊致し候手筈に御座候。小生は幸に未だ手疵一箇處も負ひ不申、至つて壯健に日々戰塲を往來致し居候間、呉々も御安心被下度、一昨日植木の激戰に、味方の軍勢百餘名を斃し、中島由武君も、敵の流丸に中りて、遂に討死被致候。小生も御仝人とは、兄弟同樣の間柄、片腕を捥ぎ取られ候やうの心地致し、一時は大に落膽致し候へども、軍人の戰死は此上も無き大名譽、死後の光榮今更羨ましき儀に御座候。只れ花樣の御愁傷の程、遙察致候へば、小生もテントの內に、夜半の夢を破り申候。お花樣に御面會の節は、おん前より御呆めの附き申候やう、よく〳〵御慰め被下度願候。親しき友又部下の兵士を、漸々に失ひ候には、慟哭の外は無之、是皆賊徒の所業かと思ひ候へば、一時も早く敵の奴原鏖殺にして、死骸の山を築き不申候ては と、勇氣は益加はり申候。何事も皆天運に御座候へば、小生の安否に

附き、決して〳〵御心配無之やう致度、おん前は日頃より少しの事にも、物を氣に被成候性質に御座候間、心痛のあまり持病の心臓に障り申す樣の事無之樣祈居候。何卒軍人の妻女たる事、よく〳〵お忘れ無之樣爲念申上置候。未だ申度事澤山有之候へども、心のみ急ぎ候て、無器用の手ますく〳〵思ふやうに動き不申候間、これにて筆を擱き申候、餘は後便に讓り可申早々不具。

六月十三日夜　　由次郎

お千代どの

呉々も時候御大切に被成度、くどく申候樣には候へども、決して〳〵御心痛無之樣祈居候。少しにても胸痛み候はば、早速例の久原先生へおかゝり可被成候。

餘程急いだものと見えて、日頃の惡筆いよ〳〵讀み惡く、文句の前後した處もあり、文字の消した處もあるが、かゝる中でも、自分の身体を、これ程までに、案じて下さるかと思ふと、勿体ないまでに嬉しくて、思はず伏拜んだ程喜んだお千代も、吉村の戰死を聞いては胸塞り、一昨日も奧樣が久し振でお入來になつて、マアお互樣に夫が無事で、とれ喜びになつたが、今頃は嘸吃驚してゐらしやるだらう！　れ氣の毒とも何んとも申しやうはないと、立上つて寐巻を平常着に着替へ、帶留を〆めやうと、すると何うした機會か、帶留の金具が、疊の上にばたりッ「オヤ！　妾も人に悔みを云はれるやうにならなければいゝが……。

其九　想像の魔力。

お花を慰めんものと中島の宅へ訪問したお千代は、慰められるものより、慰める方が遙に泪脆くハンケチを絞る仕末に、極り惡るく一時はお花の斷念のいゝのに、妾のやうな氣弱いものでは迚も軍人の妻女にはなれぬと悟り。凶事には必す兆候があるものと信じて居たお千代には、今朝の帯留の金具が非常に氣になつて堪らず、若しやあれが前徴にでもなりはせぬかと、夫れから夫れへと想像の蔓が纏繞つて行くと遂には、長く此處にお花と對話をして居る事が出來なくなつて來た。今迄知人の中でも一番親しくして居たお花、少く氣でも鬱した時には何時でも、あアかういふ時に、中島の奥樣が來て下さると……と、思ふ程の親交の其人の顏を、今見ると最早嬉しいといふ感想より、寧ろ悲しいといふ感想が起つて來て、其悲しいといふ感想は、自然其人の顏を見るのを可厭がらせる、何故可厭なのかはお千代自身も分らないが、それ程顏を合はすのが可厭なのなら、外方を向いてなり、成る可くれ花の顏を見なければいゝのだか、又何んだか此日に限つて妙にお花の顏が見たくなる、見ると氣の故か、ツイ此間迄肥つて居た頬の邊りの肉が、急に瘦せ落けたやうに見ゑ、皺などは決して見られなかつた、ソノ顏が今は言語を言ふ毎に、目の側に深いのが三筋許り寄るやうに見える。此皺は實際何人にでも見ゐるのだらうが、お千代自身は氣の故で、自分にばかり見えるのだとしか思はない程、自分で自分を疑ふやうになつて來ると、今迄艶のあつた薄桃色のお花の顏が、自然に蒼味を帶びて來て、今迄可愛いと思つたのが何んだ

か怖くなる。妾と一處に銀座でお揃に求めた寶石入の指環は、其時分妾の藥指に箝つたのが、此方には小指にしか合はなかつたもんだから「お千代さんはお手までが御尋常でゐらつしやる、とお冷かしになつた事も覺ゐて居るのに、今見るとソノ指環が藥指に箝つて居る。買つた時から最早五六年になるとすれば、其時より指も幾分か生育して居なければならないのに……。あゝ！　憂愁は斯うも人を痩させるものか。氣の強い方でさへかうだのに、もし妾がお花さんの地位に立つたなら、どうだらうと想像から想像を生み出して行くと、熱い泪は際限なくお千代の膝の上に落ちて來る。慰めに來て、これでは……假初にも軍人の妻女が……と力めバ力むだけ、氣は弱つて行くばかり。あア所詮此處に長居は出來ぬ、と思ふと何んだか或るものが後方から押すやうで、居ても立つてもゐられなくなつて、一時も早く家へ歸らう、此處を離れたら少しは悲哀が薄らぐだらう、とソコ〳〵に此家を辭さうとすると、彼の憎らしい怖い、罪なお花さんは「淋しくつていけませんから、どうぞ今夜は私處に宿つて行つて下さいなと切込れてお千代が心の內、どうして宿る事が出來やう！　それでなくても早く歸りたいのに……と思つて居ながら、又お花の淋しさが胸の中に湧いて來て、無理にも妾を引止るのが道理だと、無下に振切つて歸る事も出來ず、又此儘歸るのは日頃の交誼にも背く譯と考へ出すと。可愛さうに！　お千代は歸る事も、また居る事も出來なくなつて仕舞つた！

其十　亡夫の菩提。

風の音にも、若しや！と耳を峙てゝ居たお千代が、天にも地にも、否生命にも替へがたい、最愛の夫が戰死したとの電報を受取た時は、寧そ一思に、自分も夫の跡を……とまで思つた程で、血だらけの顔、血だらけの手足が、歴々とお千代の目に映じて來て。其時から見るもの聞くものが皆悲しくなつて、此儘耳も聞えなく目も見えなくなればいゝがと思つた程だが、遮莫耳目は其作用を防ぐ事が出來るとしても、心情の活動は益機敏に働いて、益お千代を煩悶さするより外はなかつた。其内に夫の遺骨と帽子が屆いて、天晴夫の戰功を賞揚した其筋からの報知も來たが、お千代には最早讀む事が出來なかつた。お千代は夫の帽子を手に取上ると、裏に小さい白い布、それに遠藤と夫の自筆。此布も一度外れたといふので、自分が縫付てあげた事迄記臆て居る。其時例の細井さんに「オヤッお睦ましい事と、酒臭い呼吸を吹掛けられた事まで浮むで來て、涙に嗚咽ぶばかり。いくら妾が悲むだからとて、死んだ夫が歸るでハなし、熊本から最後のお手紙にも、軍人の妻女たる事を覺悟せい、との御教訓は此處だな、如何に悲しめバとて、最早仕樣ハないと、充分心に了知て居ながら、どうも斷念めやうとするだけ、斷念る事が出來なかつた。

世の中に隨分哀れな身の上の人も澤山あるが、若い女の其夫を失つたより甚だしいものはあるまい。寡婦の心情の悲哀は、他人の救ふ事の範圍を脫して居る。お千代は年僅に十七。膨んだ椿の花を一輪挘ぎ取つてさへ、無情と思ふのが人情なるに、是は又一兄と册き妹と呼んで十六年は一處に居たにしろ―

夫婦となつた團欒の快樂は、此後何時迄生るか知れないお千代が一生の中で、僅か三十日にも過ぎないかと思ふと、お千代の悲哀は全く想像の比較を取る事は出來ない。年齢は若し、子は無し、世間には三十島田で連子をして嫁入するものさへあるに、單獨でいらつしやる事は無いと氣を揉むで、うるさく勸めるものもあるが、お千代が精神は常に墨染の衣を着て、贈正七位勳五等陸軍中尉遠藤由次郎の墓邊を逍遙つて居る。夫も御國へ忠義の爲に、果敢なく田原坂の露と消えたのだから、妾も何か婦女の力の及ぶだけの事をして、天晴軍人の未亡人に恥かしい事をしようと、種々考慮た末に、不圖看護婦の事に氣が附き、奮つて特志看護婦の試驗を受け、今では此慈善病院の看護婦長を勤めて、貧困外に訴ふる事の出來ない哀れな病人の病症を、萬死の中に一生を取留めた事なら、亡夫の菩提の爲にもなると喜んで居るが、日の丸の旗が軒端に飜へる日などに、金線を附けて勳章を下げた馬上の人を見ると、妾は未だに思ひ出して……と、哀れにもまた殊勝なお千代の談話に、或は泣き、或は悲しみ、或は驚き、或は恥ぢ、或は痛み、病苦を忘れて、寢臺の端迄出て來て、軟かなお千代の手を握つたまゝ、以前の老婆は太い溜息を吻き、肺腑をしぼる最後の一言「アヽ惡い事ァ出來ない、お前イヤサ貴女の經歷談を聞いてァ、罪滅しとは云へ、迚も妾の今迄の所業は云はれない、(急に語調を替へて)お前の側で死ねば妾も行く處に行かれる……。ニッコリ笑つたまゝ、老婆は眠る樣に天國へ赴くと、雨後の月光は、蒼く淸く玻璃戸に映つて居る。

（完）

◉片破月

第一回

晝の繁華も夜風に名殘なく吹拂らはせて、橋の上を通る人も斷續に、今迄僅に光を地上ゑ洩らして居た二十日餘の片破月、それも雲の裡に隱れて世界は暫く闇黑となつた、遠くを透して視ると黑い影が二ツ三ツ往つたり來たり、それも漸々に減つて仕舞つた。長く光芒を水中に垂れて居た川端の燈火も一點消え二點消えて、遠くの漁火が螢のやうに波を照らして居るばかり。今しがた鳴つたのは金龍山の十一時、川の底へ沈むで行く鐘の音が物凄く響いた。今此處へ淺草の方から動いて來た黑いもの大小三ッ。

貴郎さうお急ぎなすつちや坊が可愛さうですよ、妾だつてさう早くは歩行けません。

云かけられて、脇に動いて居た黑い影ば急に立止つて、

さうか、おれは又ひどく今夜は遲くなつたから、さぞおふくろが待ち遠しがつて居るだらうと思ふ。」

今打つたのは十一時でせう、どうして今迄母親樣が起きてゐらつしやるものですか、お夜食も妾が出る時ちやわんと仕度して置きましたから御酒でも召し上つて、今時分はいゝお心持で御寐なつてゐらつしやいますよ、

さうさね、

まあ少し此橋の上で涼むでいきませう、もう家へもさう遠くもありませんから、妾は又急いだ故か

呼吸が切れてたまりません。松坊、おまへもさぞ草臥たらう、まあ少しこゝの欄干の處でお憩み、
云ひかけられた小さい影ハ可愛らしい聲音を出して、
おつかちやん坊はそんなに草臥ないけど、おつかちやんは草臥たかい………アノ先刻買つてくれた
お菓子持つてるかい？
あゝちやんとかうやつて袂に入れておつかちやんがお家へ持つてつてあげるよ、
うんと大きい影を見上げる樣にして——
家へ歸つたらお婆ちやんにも少し上げやうねエ、
あゝ善い坊だこと、お婆樣も坊のお土産ならおいしいとおいひだらう、こゝへおいでおつかしやん
が汗を拭いて上げるから——
今迄自分の手に持つて、頻に額のあたりを上下して居た白いもので、小供の額を撫でゝやりながら、
オヤ風の涼しいので、みんな汗が入つて仕舞つたのか、坊のお顔は滑乎して居るよ……。もし貴郎
もう少しこつちが……おゝいゝ風だ、
風のいゝ處で一服していかうか、
マッチを點火ませう、
云いながら軈てパッと燃えたマッチの光で始て此黒い影が、微に其正体を現ハした。一個は年の頃三

十近い瘠ぎすな女房――マッチの火も少の間で消えたからさう詳くは見ゑなかつたが――鼻は隆い方で、眉毛は際だつて黒く、目は少し凹んで居る方で、目の下に深かい皺むしろ筋があつて――マッチの火でさう見えるのか、眼がギョロッと反射して、とにかくけんのある容貌。紺絞の浴衣を着て黒い帯の上に白い扱帯が夜目にも冴えて見えた。それと向ひ合つて蹲踞で居た男は、其夫と見えて年の頃は三十四五で、顔の色ハ淺黒く少し肥大とした方、其割合に鼻が大く、そして唇の厚い、頬の肉の垂れかゝつて居る鹽梅、至極良さゝうな男で、これは白地の飛白を着て居た迄は漸く分りました。

れきわ、家も狹い割にはよく風が入る方だが、此橋上ハ又格別だね、かう涼しい風が顔に當る處はどうとも云へないいゝ心持だ、

ほんとに歸るのを忘れて仕舞ますね、貴郎お煙管があるなら鳥渡お貸し下さい、妾も一服いたしますから、

とやがて煙草を二三服喫んで仕舞の一服は夫に吸附けて、少しの間此夫婦はさも樂しさうに餘念なく世間話をして居ました。暫くして夫は煙管を筒に斂め、立上がりながら煙草入を腰に挿して、

あんまり遲くならない内に歸らう、さあ松坊もういゝ加減に行かう………松坊、松坊はどこへ行つた？

女房も松坊〳〵と前方をすかしながら二三度呼んだが小さい影は見ゑず、

おやッ、貴郎松坊は何處へ參りましたらう？

あんまり話に夢中になつて居る、內退屈だもんだから一人先へ橋を渡つて行つたのかも知れない？

と兩人共橋の袂へ少し早足に四五間も行つたかと思ふ內、兩人の鼓膜を貫く入水の音ドブン！兩人ハ轉けつ轉びつ橋の中央へ取て返し、若しやと欄干から首を出して水面を見ると、闇黑にもきらめく波の光を遮る黑い影が浮きつ沈みつ。

おやア、マ、松坊が……ア…あすこに……。

おきわは涙の聲高く

あ、あ、あ、誰か助けて——。

第二回

此處は厩橋を渡つて左へ曲つて行くこと四五町も隔たつた或る格子戶造の一ト搆、今しも此處へ來かゝつた男女の兩人連、尋ねる家でもある樣に、格子戶の前を往つたり來たりして居たか、其家が見當らぬかウロ〳〵して居るかと思へば、急ぎ足でヅカ〳〵と其黑板塀の脇へ身を寄せかけ、節穴の隙から家內の樣子を窺く……かと思へバ又二三間後方へ戾つて、以前の通り格子戶の前を往來して居ます。何さま此家と目星を附けて來ては見たが、思ひ切つて入りかねたかの如くに見えた。あまり家の前を徘徊するから忠義一圖の此家の洋犬は癖物ござんなれと、板塀の下から兩人の足を見附出して、矢庭に板塀の下から

其半身を現れしながら吠えかけました。兩人は此深夜大きな聲で犬に吠えられ困つたものだと思つたが、叱つとこれを追拂ふ勇氣は無かつたと見え、ます／＼逡巡したから、犬はます／＼怪むで、こゝぞ主人の日頃の恩を報る處だとワン／＼と囂く吠え掛け、とう／＼板塀の下を潛つて兩人の避ける跡を追ひ駈け、嚙み附く如く吠えかけました。兩人ハ二三間も後の方へ此犬をれびき出してろして始めて、これ黑……ッ！何んだいと小さい聲で諭す樣に叱ると、犬は早くも聞覺の主人の聲に驚き、遽に首を垂れ、尾を振りながらチョロ／＼と兩人の足元にまつはり、鼻でフンフン嗅ぎながらぢやれて居たが、最愛の主人を怪しいものと思ひ違へて吠えかけたのが、畜類ながらうら恥かしいとでも思つたか、さも極り惡るさうに四五間前の方に駈け出して、板塀に向つて何も目的なしに頻に吠えて居たが、それも暫くして聲を止め、又兩人の足元の處へ飛んで來て、嬉しさうに尾を振つてぢやれて居るのを見て、兩人はまた玆に泪の媒を求めた樣に悄然として居ました。犬は最愛の主人が首を垂れて、何か物案じ顏に何時までも格子の內へ入らないのを不審とでも思つたか、格子の內へ入れと云はぬばかりに首を振つて先導して居ました。此夫婦のもの自分の家へ入るに、何んの遠慮も無いが、今夜に限つて全で始めて行く處へでも入る樣に只モヂ／＼して居ましたが、夜もだん／＼更けて行く樣子、何時まで此處に立つても居れらないから、兩人共思切つたかして互にうなづき合つて、男の方が先づ右の手を格子の間から入れてかきがねを外づして戶を徐々引きわけたが、夜陰の事ではあり町の中がシーンとして居たからガラリッとした響が、老

人の耳にも入つたか、

オヤ、今お歸りか?

南無三! まだお婆樣は起てゐらつしやるかと思ふと、どうしたものか『ハイ』といふ返事も急には出ません、老婆ハ重ねて、

大層遲かつたぢやアないか、何處をそんなに歩行き廻つて居たの?

大刀眞向に振り翳して、あびせかけた老婆の一言、夫婦の者どうして刄面に立つ事が出來やう! タヂ〳〵と思はず二三歩引下つたが、漸く踏み止まつて、

は、はい。あ、淺草の方へ……。

と言ひは言つたが、それも口の內で、言語を口の先に發するといふより、腹の中で呟いたと形容した方が適當といふ程の微かな音調だつたから、耳のあまり近くない老婆、何んで聞えやう? 暫く無言であつた內、夫婦ハ漸く上へあがつて、老婆の寐て居る部屋を通過する時、又幾度か後戻りしたが、決心して其老婆の寐て居た蚊帳の脇を通つて、自分達の部屋へ行く間も、足の先が震ゑて居ました。夫婦が部屋へ行つてやつと据つたかと思ふ內老婆ハ聲高く、

あの平常の處へ火鉢に鐵瓶を掛けてれいたから、れ茶でも飲むなら……。

云はれたが今夜此夫婦、何んで一滴の液体が咽喉へ通らう? 水も此夫婦の腹中に入つたら湯と煮え

立つであらう！

何んとお婆樣へ言譯が出來やう？　川へ子供を落しました、とう〳〵溺死して仕舞しまた、何んでそんな無慈悲な事が云へやう？　これがまだ淺草の仲見世で迷子にしました、ツイ人込で坊の姿を見失ひました、なら云へもしやうが、現在兩親が傍に附いて居ながら……、子供の川へ落ちるのも知れずに……、其死骸さへ見附出す事が出來ずに阿容〳〵と何んの面目あつて歸られやう、責めて死骸でも引取つて來たなら、また斷念の附け樣もあるが、それも見當らず、あの時近所の衆や水上警察の巡査さんまでが百方盡力して……、態々舟迄出して探して下すつたがとう〳〵、見當らず、汐でも餘程急であつて遠くへ流されて行つたのか？　それとも藻の内に引きかゝつて居るのか？　泥の中に潜つて居るのか？思へバ思ふ程ゾットする程である。若しお婆樣が坊の事をお尋ねなさつたら何んとお答が出來やう？これが何時まで知れずに居るものではなし、何時か一度は知れてしまふものなら、一層此方からかう〳〵で……と申上げた方がよからう……と、口の端まで言語が込上げたが、イエ〳〵少しでもお婆樣に御心配をかけては濟まない、もう夜も餘程更けて居るし、程なく夜も明けやうから、夜が明けてからかう〳〵と申上げた方がよからう？　少しでも……たとへ一分時間でもお婆樣に御心配を掛けない方がよからうと、夫婦は只忙然と首を垂れて萎れきつて居る處へ、次の間から老婆の聲として、

坊、坊は何うした？　もう寐て仕舞つたか？

わッ！　霹靂一聲、夫婦の五体は總て此一言の爲に痲痺し終つた。

第三回

坊はどうした？　の一言に全身を打碎れた夫婦は、兼てから聞かれると覺悟はして居たもの丶、今更胸の動氣に『はい』又は『い丶え』の返答も急には出ず。夫婦只互に顏を見合せて、吐息を洩らして居るばかり……。神ならぬ身の老婆は、今夜の變事を知る由がないから、眞逆最愛の、此世にあるとあらゆる自分が出來るだけの愛を、其一身に負はせて居た孫の、川へ落ちて溺死したとは夢にも想像しない、否想像する原由がないから、夫婦の『然り』といふ返事は聞かないが最早とうに孫は寐入ッたものと信じ、

うゝ、もう寐入ッた……そうかい……よく搔卷をかけてやッておくれ、坊ハ寐ざうが惡いから……、それに又近頃は惡い風邪が流行るといふから……、若し寐冷でもするといけない……。

あれッ！　お婆樣はまだ坊が此世に居る事とばッかり思ッつてゐらッしやる！　勿論さう申上げないから、まだ坊の果敢なくなッた事をご存じないのも無理はないが、やれ風邪を引く……やれ寐冷をする……、死んだものが何んで風邪を引かうか……何んで寐冷をしやうか……。沸き返る胸の悲歎に夫婦は堪へ兼ね、わッと其塲に泣き崩れましたが、隣室の老婆に其泣聲が聞えては……と思ひ返して、袖を口にあてゝ僅に啜り泣きをして居ました。其中に行燈の薄光で何氣なく蚊帳を透して見ると、夫婦の枕の間に、茜木綿で造ッた、眞中に麻の葉の片布で卷いてある小さいくゝり枕が、不圖目の中に入ッた時は、

夫婦のものは何う感じたらう？　清が（下女）平常の通にとッてれいてくれたこの寐床、今夜も兩人の間に坊が寐る事と思ッて清があゝやッて……清にハ坊も至極慣れて居て……清が來てから今年でもう丸三年、此間も宿入に行ッた歸よ、これはお坊樣が不斷おすきだからと、淺草で輕燒を澤山買ッて來てくれた。あれ飴屋が參りましたと坊を背負ッて見せてくれる、あれ兵隊が通りますと門口へ連れて行ッてくれる……、それは〱宛然自分の子のやうに……、自分の子でもあゝは可愛がるまいと思ふ程……可愛がッて呉れた清が、今夜の事を聞いたら、まあどんなに吃驚りするだらう？　どんなに泣くだらう？　平常一方ならず可愛がッてくれた清に對しても、坊をあゝいふ風に……殺しては、私達が合はす面は無い。悲歎はます〱夫婦の胸を衝いて來ました。あゝ！　今夜からあのくゝり枕も不用になッたと、泣腫らした目蓋の間からその小枕を透して見ると、何んだか黑い圓いものが其枕の上に乘ッて居る。よく〱見るとそれが矢張坊の頭に見える、否坊の頭に違ひない。五分刈の可愛らしい鳥居旋毛の坊の頭に違ひない……、さあ頭が見ゐると其つゞきに朦朧と坊の顏が見えた、それがだん〱濃なッて來て可愛らしい額、眉毛、鼻、目、口、が一々に明瞭と見ゐて來た。あれ寐ながらニコ〱笑ッて居る、面白い夢でも見て居るのか、今日淺草の觀物を見たがそれでも思出して居るのか……と、暫く見とれて居たが、二三分も經つと忽ち其口が見えなくなり、目、鼻、眉、額もだん〱消えて行ッて、とう〱可愛らしい顏までが見えなくなッて、頭も何處へか行ッて仕舞ッた。矢張枕の上には何んにもない、どう透して見ても何者も居ない……

併し此夫婦の心ではまだ此小枕の主人が居ないとは思ひ切れない、どうしてもまだ此世に居るものと想像して僅に心を慰め、否寧ろ悲みの種子を求めて居た。あれも今年漸く五歳になッて、此五月のお節句に鯉を上げてやッたのも、たッた此間の樣に覺えて居る。其時お隣りの叔母さんから坊が貰ッて來たと自慢して示した鍾馗の幟――おいらもあゝ云風に鬚をモヂャ〳〵生して威張ッてやると、こわーい顏をして玩弄のサーベルを振り廻して居たが、それもみんな今は仇となッて仕舞ッた。此九月の初旬からあれも幼稚園に遣らう……と云ッたら、自分もまたお向の光ちやん見たいに、早く色紙のお細工が造ッて見たいと、始終口癖の樣にさう云ッて九月の來るのを樂みにして居たが……、麹町の叔父さんが坊が幼稚園に行く時お使ひと、黑ひ皮のカバンを此間くれた、其カバンをかういふ鹽梅に提げるんだと、小さい可愛らしい肩に掛けて、あの大黑帽子を被ッて、威張ッて、どし〳〵云はせて大股に……轉びさうに、あの廊下を今朝が今朝迄歩行いて居たが……、それもこれもみんな今は仇となッて仕舞ッた。その帽子も、そのカバンもあアやッて依然あそこにかゝッて居るが、其主人は……今頃あの世の幼稚園に行ッて仕舞ッたらう！。三角の紙でお細工物を造ッて居るだらう！。思へバ思ふ程、考へれば考へる程、むせかへる泪に夫婦の胸は寸斷れて行きました。今夜此夫婦が一瞬時の睡眠を貪る事が出來ましやうか！

第四回

翌朝になつて老婆が始て孫の入水を聞いた時の悲歎愁傷は、此處に描出するのも堪へ忍ばれない程であ

ッた。ヤッとの丹精で五歳迄育て上げ、もう一ト息といふ處でおれに先立れてヽ。今更幾度云ッても仕樣がないが、おれをこれ迄にするのには並大抵の事ではない、やれ種痘だ、それおできだと、ヤッとまあ此頃少し手を離された樣なもの丶、それ這ひ〳〵をするから其煙草盆に氣をおつけ、あれ緣側から落ちさうだ、それ柱に頭をぶつけると、それ〳〵大抵氣の揉めたものではない、立てば立つにつけ這ふ時より一倍……ちつとも……一時も目が離されたもの、てはない……、それもこれもみんな末を樂みにして、もう一ト息といふ處でおれに行かれて仕舞ッては……妾も生き甲斐がない、いつそ一昨年の肺病の時死んで仕舞ッたら、妾もこんな悲哀は受けなかッたものを……、妾も此先幾歲生きると云ふでもなし……此年になッて……。泪の糸は老婆の皺を傳はッて、力なく落ちかゝッて居ました。

おきわ、鳥渡これを見ておくれ、此浴衣は坊に着せやうと思ッて、鯉の瀧登の摸樣は威勢がいゝといふから、少しも早く着せやうと思ッて。老人の針仕事、捗とらないのを承知で、昨夜が昨夜まで夜業までして……もう上げをあげて、つけ紐を附けるばかりにして……今更何遍繰り返しても仕樣がないが……明日あたりはおれにそれを着せて、妾も久しぶりで觀音樣へでもお參詣をしやうと、年甲斐もなくどんなに妾迄が樂みにして居たが……（急に聲を張り上げ）おきわ、これを持ッて何處ぞへ捨ててきておくれ、早く此着物を捨てゝおいで……妾はこれを見ると、尙々悲しくッてならないから……早く……少も早く……。

と嗚咽かへる泪に持病の咳をさも苦しげに續けさまゴホン〳〵と云はせて居た。これを親しく目撃した夫婦へ何んで默ッて居る事が出來やう……併し慰めるにも慰める手段を見出す事が出來なかッた。おきわは僅に泪を斂め、

さう貴女の樣にお泣きになッては又御持病のお咳に障ります……さう貴女がお歎きになッては……若し御病氣にでも障ッたら……それこそ妾等は生存ては居られません。

この生存て居られませんの一語には流石の老婆も僅に泪を斂めたがそれもたッた二三分の間、で又元の悲歎の泪に返ッて、前の水量より一倍泪の堰を破ッて泣いて居ました。今此三人の心の中には只『悲哀』といふ二字より外には何物も無かッた。此世にあるとあらゆる悲哀を、此三人が專有したに違ひなかつた。今玆で此老婆及び夫婦の關係を述べるのは强ち不用でもあるまい。抑も此夫といふのは其名を上條定夫と云ッて、二月ばかり以前までは濠端の或る役所へ勤めて月給二十何圓かを貰らッて居たか、例の節減の無情ない掃木は此定夫をまで、ペンキ塗の威めしい門の外へ掃き出して仕舞ッたが、先代の遺産も少しはあり、今まで節儉した効果には、それ程外のもの丶樣に――同僚のもの丶樣に所謂めんを喰はなかッた。先づ小女の一人も使ッて不自由ないまでには暮して居た。全体此定夫は先年此處の養子に入ッて、家附の娘の婿になッて間も無く男の子を生んだ。其男の子が即ち前回に入水した松夫といふので、今のおきわは二年前から繼妻に此家へ來たものである。だから松夫は家附の孫、此上條家（若し家といふ

時があッたら）にては、系統から云へば一番大事のものであつた、あつたゞけに老婆の歎きも亦一層激しい道理であつた。

松夫が入水した翌日の午前になッて、三人が益々悲歎にくれて居る處へ、吾妻橋警察署から至急此處の主人に出頭しろとの使者、若し万一……松夫が責めて生命だけでもとりとめて……と、愚痴は未練を驅り出して――まだ幾分か望を抱いて急ぎ出頭して見ると、松夫が見る影も無き水死の遺骸、面のあたり見ては沸き返へる胸の中、人目も耻ぢず定夫は泣き出したが、諸人に慰められて泣く〳〵其死骸を戸板に乘せて家へ運んで行ッた時、老婆が飛んで出て敢へない孫の水膨れの死骸へ、ひしと取り附き、

れう！　ま、ま、松坊、も、もう一度笑ッて見てくれ……。

と前後正体なく泣き叫んだ時は、傍に居た人々までも思はず目の端を赤く染めないものはなかッた。

さて何時迄かうやッておく譯にも行かないから翌日兼て此家の菩提所なる淺草の本願寺へ幾斛の泪と共に、此可愛らしい死骸を土の中へ可惜埋て仕舞ひました。

此翌朝の事、妻のれきわがあまりの悲哀に神經を刺激したものか、突如坐を飛び上ッて其處等中跳廻ッて居るかと思へば、又どッかと其場に坐して、太い吐息を吻くかと思へば、又さめ〴〵と泣いて居たが、急に大きな聲を張り上げ、

あ、あれッ！　ま、松坊が、あれ、あ、あすこに……。

第五回

世の中に神經の作用ほど妙なものはあるまい、所謂神樣が――果して此世の中にあるものと信じたら、其神樣が假に人間の身体を借ッて種々の作用を其行爲に現ハすと云つてもよい程、靈妙不可思議のものと云つてよからう。併し此等の六しい議論は心理學者、神學者、哲學者の本職に讓ッて、黄口の作者は可惜筆を勞すまい。

さて餘りに急激な變化を神經に與ふる時は其難、作用を狂はして仕まうもの、あまり急に鍵を卷いたらいくら精巧の時計でも破毀れて仕舞ひ、爲朝傳來の强弓でも此れを彎くに緩急常なかつたら、遂には柄が折れて役に立たなくなつて仕舞うだらう。上條定夫の妻おさわは最愛の子息松夫が入水したのに痛く神經を刺衝したものと見ゑ、僅か二三日も經ぬ内少し氣が變になつて來た。此發狂は驚愕といふ感想が其主因であるが、此外にこれを增進した種々の原因があつたに違ひない、其内でも近處の誰彼が松夫の入水に附いての批評は、大に其發狂の度を高めたものと思はれた。

鳥渡とお美代さん、お向ひの騷動をお聞き？

へエ　何か騷動でもあつたの？　オヤどこに？　あのれ向ふの上條さん處で……へエ……妾ア些ともしらないのよ。

あれ程の騷動を知らないの？　れ前も餘ッ程うッかり……

「ぽん」との繼句お袖で口を掩ッた跡であッたから、對手のものには聞えなかッたと見えた。此方は眞面目で、

あの又洋犬も喰ない例の喧嘩が高じて、お内儀さんが出刄庖丁で御亭主の向脛でも……といふ譯？」

あれッ　オホヽヽヽ（大きく口を開けて黒づんだ齶を現はしながら）そんな事ッちやないんですよ、そらあそこに松夫といッた坊ッちやんが……居ましたらう……。

えヽさうよ、あそこに五歳ばかりの、それは〳〵可愛らしい……それがどうしたの？

あの子をねエ、あの可愛らしい子をねエ、あのお内儀さんが……恐ろしいぢやアありませんか……」

お内儀さんがどうしたの？　何んとも云はずに自分ばかり承知して……只恐ろしいぢやア何が恐ろしいのか、妾にやア薩張譯が分りませんワ、

ねヽツ、短氣な……今妾が話しますアね、默つて聞てゐらッしやい、ぢれッたい。

何方がぢれッたいのか、自分こそ短氣なくせに……それよりかア、まアおちついてあのお内儀さんが坊ッちやんをどうしたの？　早く話て聞して頂戴ッ。

妾アもう思ひ出しても胸がつまつて……あヽ——世間にかうも無慈悲な親があらうか、なんぼ自分の生みの子でないッて……妾アあんまりだと思ふワ、妾アあかの他人でも口惜しくッて〳〵ほんとにあのお内儀さんの横ッ面へでも喰ひ附いてやりたいと思ふワ。

さなきだに凄じい顔に凄味を見せて、歯を剝き出して飛びもつかんず其風情。對手の婦人は何が何んだか薩張分らず只忙然として居ましたが、暫くして、

全体まアどうしたの？

まア聞きよ、あのお内儀さんが恐ろしいぢやアないか……あの子を川へ落して……とう〳〵殺して仕舞ッて……。

えゝッ　こ、殺した。か、川へ落して殺した、えゝッ――。

と暫く呆れて續く言語だになかッたが、話しかけられた婦人は潸然と泪を流し、

道理であの子が昨日から見えないと思ッたら、おやさうだの……あのお内儀さんがとう〳〵殺して……あんないたいけ盛りな……可愛らしい罪もなんにも無い子を殺して……なんぼ繼母だつて、よくもそんな恐ろしい眞似が出來たもの、あの坊ッちやんは家の梅とおないどしだが、家のと違ッてほんとに温順しい……よく人のいふ事を聞く、あんな可愛らしい、良いお子は近處にも少ないと評判な位なのに……。エゝッ、思ひ出ても妾ア可哀さうでならない……。

鬼神をも取挫かんばかりな暴くれな女房等も思はずメソ〳〵泣き出したのは、餘程感動したものと見えた、が暫く經ッて、

さう云へば常日頃、あのお内儀さんは人前こそ大變あの子を可愛がる樣だが、蔭では隨分酷い目に遇

はして居た評判も……よくあそこのお清さんが妾等にも話しますが、お婆さんやお亭主の留守の中は、夫程の事でもないのに直ぐ角立ッて、ガミ〳〵あのお子を叱り散して……煙管で頭を喰らはした噂も……後方からあの子の背中を痛く捻ッた事も度々あッて、生疵が絶えなかッたといふ事だッたが、とう〳〵あの鬼の爲に殺されて仕舞ッたのか、可愛そうに……。繼子は何故そんなに憎らしいものか……。」聞けばあの內儀さんは懷妊で、もう五月といふ噂、倘の事坊ッちやんを邪魔にして憎むだものでせう、なんぼ女の淺墓とはいへ……。

ヱヽ、どうせあの內儀さんも（何時の間にか內儀さんの上のおの字がなくなつて仕舞ッた）ろくな死に樣はしますまいよ、あヽ恐ろしや〳〵。

不圖これを耳にした女房おきわ。ます〳〵病勢を募らすばかり。

第六回

あ、あれ、あすこに、ま、松坊が……。

突然坐を立ッて飛び上ッた妻君おきわ、ニタリッと笑ひながら四五歩前の方に駈け出したが、其處にかけてあッた生徒用の鞄を釘から、捥ぎ取る樣にして、それを矢庭に首から肩にかけ、さも嬉しさうにニコ〳〵笑ひながら、緩々部屋中を歩行いて居ましたが、軈て次の部屋へ入ッて其隅の帽子掛にかけてあッた小さい——可愛らしい大黑帽子を取ッて突然それを自分の前髮の上に載せながら、さも樂しさうに

こんどは少し早足に歩行き廻ッて居たが、仕舞には坐敷とも云はず廊下とも云はず駈け廻ッて終には女子のあらう事か、其處等邊をくる〳〵跳ね廻ッて居ました、が軈て草臥たものと見え十五分もたつたかと思ふ頃、突如前髪の上に引ッかゝッて居た帽子を取ッて荒々しく疊の上に投げ出し、其次に自分の肩にかけて居た鞄の紐を切れんばかりに急に外づしてこれも疊の上に投げ出して仕舞ッたが、此時今迄の温顔は忽ち夜叉の如くに變り、目眦凄じく釣上げ、頭髮恐ろしく振亂し、喰ひもつかんず權幕で、ヅカ〳〵と部屋の隅に置いてあッた簞笥の前へ行くかと思ふと、上の段から順々に抽斗を開けて、中にあッた種々の衣類を手當り次第引摺り出して、其中松夫のが見當ると袖とも云はず袂とも云はず、其着物を自分の頰へ當てゝ、擦り附けるやら叩くやら氣味惡く笑ひながら弄んで居るかと思へば、突然それを其處へ投げ出し、投げたのを又拾ひ上げて此度は、さも口惜しさうに齒を喰ひしばッて、ハラ〳〵と涙を流しオイ〳〵聲を出して泣きながら、其衣服をビリ〳〵と所嫌らはず引裂て居る爲体。傍に見て居た老婆、夫、それゝ下婢の淸、それさへあッけに取られて茫然……止める事も出來ない仕末、餘處の見る目も氣の毒に思はれた。これも畢竟愛子を失つた過度の悲歎から起つた發狂かと思へば、實に其不幸憫むべきの極です。

併し此處におきわの發狂について不審と首を傾けるのは、かゝる發狂の徴候として、其食物の分量に變化を及ぼすの一事です。或狂人は常日頃小食のものが極て大食になり、平常大食の者が全で食物を取

らぬか、又其量が極めて小減するのが常です。食物分量の變化極りなきので、其病症の發狂なのが知れる程だのに、此おきわは食物を取る事從來に異る處なく其分量に變化なく、それに又食事の時は、今迄いくら暴れ廻ッて居ても平穩になッて、平常の通りちやん〳〵と三度〳〵食事をするとの二事は頗る怪むべき事でした、が病症が發狂でわッただけ、家内の三人も別段この事には氣を留める餘地がなく、松夫の入水で胸中を惑亂して居る處へ肝腎の妻君が此發狂、只どぎまぎして居るばかり。どうしたものか早く醫者にかけなければなるまい、誰がよかろう? 本郷丸山の病院まで遣らねばなるまい? 抔評議區々で重ね〳〵の變事に三人が三人、心を轉動するばかり。かういふ場合には決斷力妙に其影を隱して、どうともこれを所置する事が出來ないのも無理は無い。三人の内でも老婆の驚愕は又格別、此天下にこれ程可愛いものは二つとないとまで、自分の心に深く刻んで愛して居た――老後の樂みはこれと定めておいた唯一の孫松夫。己の腰の曲るのも氣が附かず、彼れの背丈の延びるのを願ひ、己のかすむ目で、彼れの明々した目を嬉しさうに見て居た――此世にありたけの文字を以てしても、現はしきれぬ程愛して居た孫の松夫に先立たれ、一時は自分も一處に土の底までと泣き悲んだ揚句、またこれを慰める、これに替るべきものを見出す隙がない内に嫁の此發狂。驚愕に驚愕を重ね悲みに悲みを重ね、泣くにも泣かれぬ憐れな光景、骨の現はれて居る老婆の胸は波立つばかりに激動しました。あゝ! もう何程言ッても死んだもは歸る氣遣は無いが、あれまでにして行かれては……妾も生甲斐がない……これも妾が

前世で餘程の罪でもした事があると見える、あゝこれもそれもみんな其人々に向く運だと呆らめるより外に仕様がない（心の内は張裂くばかり……）責てあのおきわの腹にある子の生れるのを樂みにして、男？　女？　それはまだ分らないが、なんしろ其子の生れるのを樂にして、もう五月との事だから間も無い、只それぱつかりを頼みにして……まだ「責めても」の繩で僅に未來の望をつないで居たのに今又おきわの此發狂。今からあァいふ鹽梅でハ所詮急に全快は覺束ない……よし全快したにしろ腹の中の子がどうして滿足に生れよう、あゝ！　どうしたらよからう？　世の中に此妾程不幸なものが又と外にあらうか？　あゝ！　もう一時も早く死にたい、早くあの世に行ッて可愛の松夫に遇ひたい！　あゝ、どうしたらよからう？　死にたい〳〵と、ワッと其塲ゑ泣伏した老婆の心の中、思ひ遣るだに……。

第七回

表の格子戸ガラッと音がしたと思ふと同時に「叔母さん」と一聲高く叫んで這入つて來たのは向家の小兒光太郎。小兒の無遠慮にもヅカ〳〵奥の間に通ッて學校の帽子を被つたなり取りさうにもせず、其處に突立ながら造作なく、

叔母さん今日は……。

少し背中を曲めて覗く樣に老婆の俯向ひた顏を見たが、老婆は鳥渡上を向ひて其小兒の顏を見たと思ふと、直ぐ又下を俯ひてハラ〳〵と泪を流した。小兒は不審氣に、

叔母さん、どッか……お腹でも痛いの？

云ひながら其處へ据ッた、老婆の膝の直ぐ脇に進むで可愛らしい聲——少し甘えた口調でかう問ひかけた、問ひかけられて老婆は嗚咽返り何と返答もないてばつかり。様子を知らない小兒は小兒心にも不審と思ッたか、いよ〳〵膝を進めて下から老婆の顏を覗き込んだが、まだ老婆が默つて居るのに、平時は坊が來ると直ぐおゝ、よく來たね、さあ叔母さんがお菓子を取ッておいた……と、ニコ〳〵笑つて欵待してくれるのに今日は又何故？　泣いて居るのかと、こんどはとう〳〵老婆の膝の上に這ひ上つて、可愛らしい細い両手で老婆の胸のあたりをたゝいて、充分甘えた口調で、

叔母さん、どうしたの？　何故泣いてるの？　坊がお腹を撫て上やう！

云はれて餘りの悲歎に忙然と自失して居た老婆も、此一言に堪へきれぬと見え、おゝ！　と一聲高く叫んで其小兒を犇と抱き上げたが、熱い涙は小兒の見上げた顏に落ちかゝッて居ました。老婆は多時たつてさも苦しさうに、

おゝ、光ちやん家の松はもう居ないよ。

僅に斷續にかう云つた。涙はます〳〵雨とふりしきッた、が此方の小兒は一向平氣で、

さうだつてね、松ちやんは川へ落ちて死んだつてね、

無頓着に云はれる程老婆の胸は張裂くばかり。小兒は倘語を續けて、

叔母さん、松ちやんが居なくつて坊はお友達がなくッていけないよ……。

かう云はれても、おゝさうだと口には云へず、やつと首肯て其意を示して居るばかり。

叔母さん、坊は松ちやんが九月から坊と一處の學校へ行くッていふから。坊は樂みにして居たのだよ。

云はれて胸先へ衝き上つて來る悲歎に老婆は堪へ切れず、矢庭に膝の上の小兒を疊へ投げ出す樣に荒々しく下ろして、自分は其處に俯伏して泣いて居ました。此方の小兒は手持不沙汰に不圖隣の室を見ると、見るも恐ろしげに長けなる黑髮を振り亂して、其端を四五本脣にくわへて例の鞄を振り廻して狂ひ跳ねる狂女の光景、光太郎は錦繪にもこんな可怖もの見た事が無いから、あれッと一聲高く叫んで思はず老婆にかぢりついた、が顏を老婆の胸の處へ犇と當てゝ居ました。暫しの內はなか／＼外を向く勇氣はなかつた、がこはいもの見たしの傾向は小兒にもあるから、もういゝ時分だ、どうしたらう? どんな鹽梅だらう? とこは／＼後方を向くと彼の狂女の影は見えない、何處へか行つて仕舞ッたから、あゝいゝ鹽梅だと、始て老婆の膝を離れて、其處へあぐらをかいて、目ばたきもせずに老婆を見詰て居た。暫くすると今迄頭を下げて泣いて居た老婆が急にニコ／＼笑ひ出して、光太郎に向ひ、

おゝ松坊か、よく歸つて來てくれた。どうした? 今迄何處へ行ツて居た? さあ早く此處へ來てお婆さんに顏を見せてくれ。

云ひさま前に居た光太郎の手を突然引ッぱッて自分の脇へ寄よせやうとしたから、こちらの小兒ハ二度吃驚、あれッと思はず二三歩膝行りながら飛び退いた。老婆は又不審さうに、

何故坊ハさうれ婆さんがこはい？　何にもうんなにこはい——ひどい目には合ハせないから、早くこゝへれいで、さあ早く……。

云はれて小兒はます／＼膽を毟がれ、逃げもならず進みもならず、泣き出しさうにべそを搔いて居る。此方の老婆は一切頓着なくます／＼咲傾けながら、

おゝ少し見ないうちに大層坊は大くなッたね、全体おまい今迄何處へ行ッて居たのだい？

前後揃はぬ尋ね方法に、小兒ハ何んと返辭が出來やう、今は其坐に堪へきれず、矢庭に其處を立ち上ッて格子の方へ一目算に逃げて行く。老婆は跡追ひ駈けながら、

あれ、坊が、あ、あすこへ逃けて行く、おい何處へ行くのだ、其方に出口はありやアしないよ。

其内に小兒の影は見えなくなッた、すると老婆は突然其塲にどつかと坐を占め又元の樣に泪はら／＼／＼、これを認めた定夫の心の中、

おやッ、こりやア變だ！

第八回

最愛の孫に先立たれて驚愕失望のあまり、未だこれを慰藉する間がない……あれを見るにつけこれを

を聞につけ万感交も老婆の狹い胸を衝上つて來る……衣服を見ても鞄を見ても帽子を見ても皆な松夫の笑顔に見え、定夫の聲もおきわの泣叫ぶ聲もみんな松夫の舌ッたるい聲音に聞えて、暫くも悲歎の情は老婆の心頭を離れない。どうぞして此苦患を自分の胸の中から取り除け樣と務めれば務めるだけ、ます〳〵それを取り除く事が出來ず、全く此快樂の世を去ッて悲歎の淵に沈むで居た處へ、かて丶加へて嫁の此發狂。こ丶で老婆の全くの望の綱も斷れ果て自分の將來を思へば思ふ程、考へれば考へる程……もう生先も短い妾の身、なんの因果で此樣な……あ丶！　生きて居ても何の樂があらう……ながらへて何の嬉しい事があらうかと全く失望の域に陷つて仕舞ッて、死にたい〳〵と口癖の樣に歎いて居たが向家の小兒光太郎を見るに附け、孫松夫を想ひ出すの念慮も强くなり、其極は自分も發狂して其處等中跳ね廻ッて口癖に松坊や〳〵と悲鳴して泣くやら笑ふやら實に其聲音の凄じさ……哀れさ……聞くに堪へない程でしたが、それも二日ばかりの間、軈ては狂ひ廻る力も無くなッて仕舞ッた。老婆はおきわと違ひ一切食物を取らない全く絕食であッたから、さなきだに老衰の身体ます〳〵衰弱して行くばかり。松夫が入水してから六日目の夕暮の金龍山の鐘の音と共に五十六歲を一期として敢なく消えて仕舞ました。老婆の不幸薄命今更茲に記さずとも、なんぽう悲しき事ではありませんか。これを親しく傍觀した嫁のおきわ、急に泫然と泪を流し、

あ丶濟まない事をした、とう〳〵お婆樣までを見殺にして仕舞ッた。

と始めて天性の善に返ッた大毒婦のおさわ。さアかうなると良心が自分の胸を攻める事といつたら……居ても立つても居られない……。

あゝ（と太い息を吐き）どうして妾はかう恐ろしい大それた事をしたらう……なんぼ近處の人々の目を眩まさうと僞……僞狂者となッたさへ空恐しいのに、お婆樣ハ又御自分の正直な心からそれをほんとの狂人とお思ひになッて、とう〳〵あアやッて狂ひ死に死んでおしまいなすッた、松夫の入水もつまり自分で落ちたとは云ふ樣なものゝ、しかも脇にちやんと附いて居ながら、あアいふ事になるのも知らないで、とう〳〵溺死さすとは矢張妾の不注意からに違ひない。松夫が落ちた瞬間ハ、どうしたら宜からう……、こりやア大變だと一度は思ッたものゝ、それが一分もたゝない内に……此入水ハ妾の身に取ッて僥倖だ、妾のお腹も今月はもはや五月、自分の子供が生れては松夫は邪广に違ひない、假令それが女の子にしろ……若し男の子でゞもあッたら尚のこと、邪广になつてならないといふ念慮は始終妾の心緒を離れなかッたのに此入水、始めこそ悲みもしたにしろ直ぐに僥倖だと心の中では大に喜んだに違ひない、それに今迄世間の手前松夫を可愛がる樣にして居たも、實の處はお婆樣や夫の前ばかり、蔭に廻ッては隨分無慈悲な事をして居たに違ひない、まだ五歳の小兒頑是ないのを承知で叱り散した事もあッた。時には煙管を松夫の頭に當てた、否頭を酷くたゝいた事もあッた。後方から酷く捻ッた事も度々あつたが、あの子はどうしたものか、一度も妾の云ふ事に逆ッて口返答一トつし

た事がなかッた、只ハイ〳〵と云ッてばかり、近處近邊でも評判な順良い子であッたのを、それを罪も無いのに酷い目に遇はして。ガミ〳〵頭から叱り倒して居たが。思へば思ふ程どうしてあの時はあアいふ無慈悲な事が出來たらう、考へれば考へる程、後世の罪障も恐ろしい。それに妾には大切なお婆様をどう〳〵アヽいふ狂ひ死に殺して仕舞ふとは……自分で手こそ下さない、我手で殺したのも同じ事、あヽ我身で我身が恐ろしい程……どうしたらよからう、何とお詫が出來やう、お詫をするにもあの世へ行ッておしまひでは……嘸お婆様はあの世から妾を恨んでゐらッしやるだらう……、無慈悲な酷い嫁も世間にあればあるものだと嘸思ッてゐらッしやるだらう……それに今迄ツイどれ婆様が妾をお叱りになッた事もないのに……よく世間でいふ姑とは妾のお婆様は大違ひで、それは〳〵おきわ〳〵とどんなに妾を可愛がつて下さッたか、恩こそあれ……恨みといふは何處一トつ無い……其大恩受けたお婆様をあアいふ風にお殺し申しては……思へば思ふ程、妾し見たいな大惡人が此世の中に……

と良心の呵責はます〳〵おきわ一身に集ッて來た其苦しさ、火に燒るゝよりも、水に溺れるよりも。

第九回

凡そ人間が惡事を働く——惡事を働くその時は既に本性の善心が全く惡心と變化して居るに違ひないが、自分のする惡事を決して善事とは思はずに行ッて居るに違ひない。之れを惡事と知らずに惡事を行

ふものは十中の八九はあるまい、云ひ替へれば皆その行ッて居る惡事は之れを善事と信せずよ、惡事は惡事と信じて尙行ッて居るに違ひない。惡事を惡事と知つて行ふとはテモ情けない人心ではありませんか。本編のおきわも最初上條へ嫁ぐ時は夫定夫に貞節を盡すのは無論の事、姑に孝養を盡し、先妻の遺子松夫を自分の實子と思つて撫育するとの決心で來たに違ひないが、ろこがそれ凡婦の悲しさは。その始めころ殊勝げに此決心を決行して居たが、此上條へ居つくに從ひ自分の權力が增すにれつ、どうも松夫を自分の實子と同じ樣に思ふ事は出來ない、おきわの心中では其處に松夫の間に眞の母子の愛情といふものは起らなかッたものと見ゐた。起らない處ではない これを厭ふ念慮がおきわの心中に發生した、さあからなると松夫が憎くてならない。人間は妙なもの！ 可愛いと思ふと其人の一言一行皆悉く、可愛くなッて來て遂には其人に叱られても、ぶたれても……甚だしきは殺されても……可愛くなるが、それに反して憎いとなると何をされても憎くなる、其人によくされゝばされるだけ尙の事憎くなるとは……ハテ人心といふものはまゝならぬものと云ッてよからう。さあ松夫が憎くなると其次はこれをいぢめる事になる、朝起きるから晩寢るまで、おきわは松夫をいぢめたに違ひない。行爲にこそ現はさない松夫をいぢめ樣と願ふ念慮は常住坐臥おきわの心中を離れなかッたに違ひない。夫や老婆の手前こそさも可愛がる樣に見せかけたがそれは外面ばかりだから、松夫の身にとッては何んにもならなかッた。かく繼母にいぢめられた松夫、年こそまだ五歲の少年であッたが感心な事には實の母が居なくなッてお

きわが來てからはそれを實の母とも思ッて孝行に使て居た、幼心にも家附の子息、おきわは後から來たといふ心も持つて居たが決してそれを口にも行ひにも現はさずに父や老婆の留守に煙管でぶたれたり、酷く捻られた事抔は決して一ト口も父や老婆ゑ云ひ附け口をしなかッた。得て此年頃はある事ない事年長のものに云ひ附け口をするのが常だが——此年頃の時分が自分の家の前へ來て急にワアーッと泣くのが常だがそんな事は決して此松夫になかッたのはかへすぐも感心な事であッた、松夫の心では自分とおきわとの間に眞の母子の情愛を得やうとまでに願つて居たかも知れなかッた、併し松夫が順良であッた事が却ッて自分の不幸であッたかも知れなかッた。松夫が順良くすればするだけ、よくすればするだけおきわには面白く感じなかッた、なほく憎さか增すばかりであつた、これが松夫が灣泊者で、なあに繼母に來やアがッたくせに、家附のおいらを酷い目に合はしやアがるとでもいふ逆ふ念慮が少しでも松夫の心中にあッて、あれ繼れッかさんが坊をいぢめます……酷い目に合はしますと父や老婆に云ひ附け口でもしたなら、斯程にいぢめられなかッたかも或は知れない、尙々云ひ附け口して憎らしいといふより、なかく少さいとて油斷はならない恐ろしいといふ心がおきわの胸中に起ッたかも知れない、三のものは二に差控ゑたかも知れなかッた、かう考ゑて行くと松夫の入水は不幸は不幸に違ひないが、なまじ長命して繼母にいぢめられて悲しく月日を送る、繼母の腹の子が生れた後、それと對してますく酷い目に遇ふ位なら、むしろ早く入水して死んで仕舞ッた方が或は幸福であッたかも知れないと、作者

にまで思はせるのは松夫の不幸が實に甚だしかッたに違ひない。前回にも度々云ッておいたがおきわも一度ハ松夫の入水を驚いたが、まだ悲しいと思ふ迄に、もう僥倖だと喜ぶ念が浮むだ、自分が親く手を勞さなくッて厄介拂ひをしたといふ、いと恐ろしい、鬼にも等しい邪念が生じたに違ひない、斯程の大惡人たるおきわでも老婆の狂死、自分の假發狂を眞實として空しく狂ひ死に非業の最期を遂げた、その苦しむ樣を目撃しては流石の大惡人も飜然本性の良心に返ッた、良心に返ッてはかへすぐ\も今迄自分が行つた惡事の罪が自分の心を攻める其苦しさに堪へかね、居ても、立つても居られない處から、老婆の死去の三日目に裏の井戸に我と我身で陷つてこれも非業の最期を遂げて仕舞ッた。其井戸へ身を投げた瞬間のおきわは善良無垢の人であつたに違ひない。アノ世へ行ッてお婆樣はじめ松夫にも詫をしやうと果敢ない事を賴みにして身を投げたに違ひない、これを見ても惡い事は出來ない、因果應報は必すあるものに違ひない、と今更事新らしげに云ふ程の事もないが……人間は何所までも善を勸め惡を避ける樣に務めなければなるまい。おきわの惡心も子兒の入水から化生して遂に大逆とまでになつたがそれには松夫の入水といふ偶然の出來事が大に其惡意を增進したに違ひないと思へば多少恕すべき廉の無いでも無いが、之れを僥倖と思つたのは既に心中に邪念が蔓つて居たに違ひない、同し人間でおきわの樣なものがあらうとは實に概歎の至りです。

深夜人定まつてから森林を逍遙する時、見上げる樣な樹立の間から二十日餘の片破月を見なら、どん

なにそれが凄く感ずるだらう、萬物皆凄く蒼白く照されるに違ひない、が程經て日數たてば凄い片破月が愛らしげな圓滿な眞如の月と變ッて行くだらう、れきわの惡念は實に森林を通して片破月を打眺むる樣に凄かッたが、善に返ッて身を投げたときに圓滿の月とも拜まれたに違ひない、が惡の報には吾人か其眞如の光輝を認る事が出來ずに腹の子さへ闇黑から闇黑へやッて仕舞ッたのが、即ち積惡の餘殃です。

◉禿木魚

「憚ンながら此明治の世の中に、箱根から此方に、化物があつて、お堪りこぶしがあるものかよ。

と鼻の先で應接つて居ると、一人はます〳〵眞面目になる。

「處がよ、あるから乙力なんだ。マア源さんの前だが、己れが現在目のあたり見たんだから、お前も後學の爲に物は經驗だ、一度は見て置きねヱ。マア斯ういふ譯なんだ。ヱッヘン（ト身体を斜に搆へ）夜も早や更けて丑滿の、遠寺の鐘が、ボーン……。

「オイ冗談ぢアねえぜ、何もそんなにねェに可笑しく、顔の造作を形づけて、イケ氣障な眞似をするナイ。

「處がよ、其時分になると、それ前も知つて居る、此間迄穢多町てな處があつた、あの寂しい田畑道へ、此頃毎晩何處ともなく、雲突くばかりの大入道が（急に兩手を前の方へ突出して、妙な手附をする）ニウッと現はれる。オヤッと思つて、よく〳〵月の光りで透して見ると、源さんの前だが、眼球は百錬の鏡の如く、デロは耳の端まで、斯ういふ鹽梅しきに、ヅーウと裂けて居て、其中から時々眞紅な長い舌の先を、ペロリッと出す其凄さといふものは……。

「オイ可厭だぜ、コウ代は見てのお戻り、大黒樣の御縁日て、評判ぢや〳〵が聞いて呆れる。

「處がよ……」
「又處がよか、うるせゑなア」
「まア混ぜずに聞きねエ、處がよ(ぢやアなかつた)其大入道が一人ぢやア乙でねエんだが、其入道先生の傍に女が一人附いて居る、其女が素的の別品と來て居るから可笑しいぢやアねゑか……」
「ウーム」(と口を結んで、吐息を吻く)
「徳の野郎めゑ、別品の談柄といふと、直ぐに感心しやアがる、あの位えまた女の談柄に身を入れる奴もねエもんだ」
「東西〳〵」其女といふは、年の頃がさうさ……十九か二十の色盛りで……エツヘン、色が目の醒めるやうにクツキリと白く、少し瘠形とおいでなすつて、目眦がヤケにキリヽツと釣上つて居て、ひどく凄い處があるかと思ふと、また可愛らしい處もあつて、月の光が蒼く其女の顔に映つた奴に、鬢のほつれ毛が、二三本バラリツと、かういふ鹽梅に、額際に吊下つて居るのを、ヱヽぢれつていと、鳥渡きん歯で咬えた處なざア、一目見てせゑゾーツと寒氣がする程いヽ女だ……」
「ウーム、それから……」
「其女がよ、またいやあに其大入道の傍に、ピタリと寄添やアがるから、第一癪に障らア」
「エ、どうだつていヽやな、お化同志で勝手に道行をするのに、娑婆の奴等が、グズ〳〵云ふ事も

ねへス。

「處がよ、其入道奴、いゝ氣になりやがつて、毛むくぢやらな太い手で、其美女の眞ッ白い細つこい首ッ玉に、かぢり附くから、ヱッコウ、猶々癪の虫が納まらねえ。あんまりいめ〳〵しいから、恐怖も何も忘れてしまつて、後方から石でも投てやりますべエと、思つてる内に、アレー！ 擽いんですよう、あゝ、疳走つた黄い聲がするぢやアねえか、あんまり豪腹で堪らねヱから、どうするか見ろッと、夢中で小石を二つ三つ握むだまゝ、其跡を附けると、奴さん卵塔場の中へ、夜露も構はず、ヅン〳〵這入つて行くから、はてな？と小首を傾ける内に、其大入道と美女の姿は、石塔の影に搔き消すやうに、失せにけりだ、チヨン。

「それで談柄はおしまいか、ヘン何んの事たい、アハゝゝ。

* * * * * * * *

町の名は勿論分らないが、何んでも其邊で、新開の戻り橋といふと、直ぐに分るとは妙な處だが、表から見ると、さ程間數が多い家とも見えないが、中へ入るとゴチャ〳〵小さい間が存外に澤山あると、近處で有名な一軒の二階家が建つて居る。表に障子が四枚立つて居て、中央の二枚の、右の方には、小いさく快樂亭と書いた札が貼つてあつて、左の方には、銘酒屋と書いた札が貼つてある。縦三寸ばかりの、玻璃戸の隙から、家の中を覗いて見ると、晝間はひつそり鳴りを鎭めて居るが、夜になると、何時

も首筋と顔ばかり、白ペンキで塗り立てたやうな、一見悽氣人を襲ひさうな、化粧の者が二人三人、怪しげな洋臺を圍むで、其前の椅子にでつかい臼尻を、さも輕さうに据えて居て、時々笑ひ聲も聞ゆる。今夜も瘋癲病院の大皷は、とうに十二時を報じたのに、此家ばかり表の雨戸を建てやうともせず、暗澹い洋燈の光線は、依然障子に映つて居て、立つたら頭が支えさうな低ひ二階の雨戸の隙間から、洋燈の光線が、チラ〳〵往來を窺いて居る。

處へ表の方から、圓い頭蓋を、西洋の手拭見たいな、白い襟布でスッポリ被つて居る、生塚の爺があつたら、かういふ鹽梅だらうと思はれる年の頃四十五六の男、一躰に脂肪ぎつた顏が、月の光りでぎら〳〵して居る處へ、面皰が一面に吹出して居る。着物は何んだか黑ツぽい裾長のものを着てゐるらしく、厚朴齒の下駄の音を竊んでやつて來たが、コッソリ表の障子を開けて、突如、

「お艶は二階?」

とヅカ〳〵例の洋臺の傍を通拔けながら、其上に載せてある老亂酒の空罎を鳥渡横目で睨むで、ヅン〳〵二階へ上らうとすると、ペンキ女の一人が、狼狽て其袖を控え、少し音聲を張上げて、

「あらまア少しお待ちなさいよ、默庵さん、此處で一杯召上つてからいらしやいよ。」

と專賣の黃い聲を出すと、何故か二階で、俄にドタバタ煤掃でも始まつたやうな騷動が聞えると、裏口から今這入つて來たと同じやうな動物が、忍ぶ戀路は……と小聲で端唄を唱ひながら、月を見上げて、

クスリとさも嬉しさうに笑ふ途端、二階の上で女の笑聲が、オホヽヽヽ。
日和北向には、彼處の廣い御椽側に限るワ、と毛糸の練習かた〴〵日一日遊びに行く、子守の集會所が、此頃はげつそり寂しくなつて、子供の泣聲も聞えなくなつたのは、どうしたものかと内々評判を聞ひて見ると、お春坊のとう〳〵あの蒟入の勸進で、木魚講に加入したと聞いて、流石一騎當千の阿婆摺連中も、俄におびえたと見えて、阿彌陀樣のお燈明はます〳〵暗くなつて、羽根をのすのは、高い棟の上の鳩ばかり、鐘の音はいよ〳〵寂滅爲樂と響いて來る。　これではまた近い内に、あの新坂でお石塔の裏面を土足に掛ける樣になるワサ、と泪脆の隱居が、土堤バかりの齒莖を喰〆めて、水鼻を啜り上げると、遠くで木魚の音が、モク〳〵〳〵〳〵。

◉青大將

二三度行つた位では、なか〳〵覺えることの出來ない程な、判り惡い路次口、巾が六尺未滿で、人が二人連立つては、歩行けぬと云ふ情けない狹さ。それでも入口には、下手な鈍帳芝居の道具立に見掛けさうな、心細い木戸が立つて居る。戸を開けるにも、なか〳〵素直に、ガラ〳〵と開かない。彼方につかへ、此方に突當つて、疳癪持は一度で毀壞してしまひさうな戸を、やう〳〵開けて這入ると、兩側は人の家屋の板圍。路次の眞中に溝板がある。店子が店賃の義務を果さないから、大屋に修繕をさせる權利が無いと見えて、歩行く毎に、其處等中で、ガタンピシヤン。慣れないものは、先づ此音響で氣味を惡くするのに、此處は又日蔭で毎日滿足の光線を受けない故か、その路の惡るさ。どんな晴天の日和でも、此路次口で駒下駄を足駄に、穿き替へねばならぬと云ひたい程、此泥濘を十間ばかり辿つて行くと、突當は少し道巾が廣くなつて居て、其處に長屋中の共同井戸がある。其腐つた井戸側を、左方に睨むだ處に、九尺ばかりの格子戸のはまつた家があつて、其中に茫乎一箇の提灯が吊下つて居る。此提灯も餘程時代を經過して居るものか、碇の繪や、清正殿の紋所などは、判然分らないが、花の屋ふが吉といふ苗字だけは、流石に黑く太く書いてあるから、格子戸を透して讀むことが出來る、此上り口の正面に、巾二尺バかりの板間があつて、其右側の障子に、燈火が射して居る。又此上り口の左の方も、同じやう

に障子がはまつて居て、所々の隙穴から、廣くもない臺所の火消壺などを見晴して居る。上り框の脇の方に、此家には不相應な立派な、南部表に、米蝶色の一樂裏皮の鼻緒のすがつた、背の低い小町形の女駒下駄が一足と、前皮の穿まつた、これも女物の足駄が二足、前方を向ひて置いてある傍に。裏替り綾海氣の機械骨で、彫刻のある象牙の柄のすがつた、女持の蝙蝠傘が番をして居る。薄暗い提灯の鹽梅から、上り口の工合を見ても、此家の爲躰、ヨモ只物の棲處ではあるまい。

斯る分り憎い地理も暗んじて居るか、溝板の地雷火も何んとも思はず、此格子先に忽然と現はれた一箇の壯漢。蘇格地のあらい竪横縞の二重外套を着て、同じ布で造つた鳥打帽を被つて居る。格子戸を開けて、上り口に突立つて、半分開いて居る障子から、家の内を覗込むで、唐突に、

「ふが吉さん、在家?

「誰方?

氣味の惡い程、首筋を長く延ばして、後方を振返つた女性の面躰。年齢は慥に二十有七八、頭髪は銀杏返を、ヤケに根下に結つて、お初形に擬鼈甲の櫛の外は、簪といふもの、一本も挿して居ない。生端い髮の毛が一寸ばかり、ヅーと奇麗に脫落て居て、少し目眥は釣上て居る方だが、眉毛は名ばかりに附いて居るといふ薄さ、目の緣が格段に黑づんで居て、それに鮪の紫血肉のやうな色合の唇、顏の色が全躰にドス黑いうちに蒼味を帶びて、總躰に垢拔て居るやうでもあり、又煤びて居るやうな處もあつて、

宛然明方の滊車の燈火と同樣、油氣が滅つて居る故か、ドンヨリと一種形容の出來ない凄味を帶びて居て、人間固有の色艶といふものが、皆脫剝つて居るのは、全く夜深と大酒の商標を顏面に現はして居る。

「オヤ誰かと思つたら、筆本さん。」

云つた切り、長火鉢の傍を立たうともせず澄したもの。これが普通尋常のものなら、此挨拶振をされても、既に自分を夫程ありがたく思はないことゝ知れるが、面皮が南蠻鐵の筋金入と來て居る筆本喰造。そんな事には一向無頓着で、それ程チヤホヤ乃公を欵待ないのは、所謂情男扱なるものだなど、自分極で勢威よくヅイと上り、隅の方で、まだ洋服屋に三分の二は拂殘があると、銘を打ちさうな二重外套を脫ぐと、下ゝ黑七子の、まッ新らしい羽織。直徑一寸の三つ紋、上げ羽の蝶が、闇にも眩めくと云ひたい程の立派さ。それに何んぞや羽織の紐は、東明舘で十三錢五厘の正札が下つて居さうなチヨツキリ結び。色が茜の派出なのと來ては、實は暖氣が出る。此羽織の立派に、引替て衣服の哀れさ。縞柄もそれ程鮮明分らない、二子の綿入といふと、まだ上品にも聞えるが、布子の上にドンツクの形容詞が、冠りさうな粗末な品。それも赤糸澤山で、俗にいふニヤケ縞とは偖も。帶は無論小倉、それでもまだ紺色の無地なうちがありがたい。御人品と御召物に懸隔れて不相應な七子の羽織。孰れ因緣ものと聞て見ると、あるぞへ〳〵。抑も此羽織は、ある駈出のデモ俳優が、自分の技藝を紙上で賞めて貰らいたいばつかりに、反物でそれ〴〵へ配つたのを染めたのと聞いて見ると、此羽織が此人に不相應な原因ゝ分つた

か。それから何處のを見ても、申合したやうに此俳優の技藝を、筆を極めて賞めちぎつて居るのが、分らないと云へば、言ふやうなものゝ、又考へ直して見ると、さて人間といふものは、罪の無いものサ！誰もサアお敷きなさいと、云つてくれるものがないから、三枚許り積重てあつた更紗の座希團を、御苦勞ゝも一枚引出して、長火鉢の向側に、ドッカと蹲踞を搔いて、貧遍土の卷烟草を、景物に貰つた紙製の吸口に挿して、高慢な面色をしてパク〳〵。

「どうだ？　ふが吉姐さん、近頃ハ相變らず御商業御繁榮かね？

「ハアどうも……御覽の通り、日曜の晩がからですもの。

「イヤ何處も同じ秋の夕暮、ハテ是非もなき憂世ぢやなア。

嗟嘆の吐息、口の内で、アヽ〳〵。

妙な首態をして、烏渡見えの眞似をする。其氣障さ、堪つたものにあらず。

「時にスの字の景況は如何だネ（それでもまだ○の字を附けることを知つて居る内が感心だ）

「オホヽヽヽ（凄く笑ふ）アノ妓は子、ソレ御存の通の達者もんですから、ホヽヽヽ、貴方の前でこんな事を申すのはをかしいんですが子、それだから、彼の妓は何處の待合でも大層便利がられて、大入大繁昌。妾と違つて移替の氣苦勞はなし、近頃は大變な上景氣なんですッサ。妾なんざア年齡は寄るし、第一肝腎の身躰が若い時分のやうに續きませんから、もう上つたりですワ。筆本さん、

何かいゝ工夫はありますまいかネ？
と鳥渡鬱いで見せる。此方の筆本、大きに得意になつて
「大わり〳〵。
「またろ〳〵筆本さんの御株が始まつたよ。人の惡るい、跡で笑はふと思つて……。
「笑ふなんて、けけしからん、冗談ぢやアない、我に妙策ありサ、とこれから床の淨瑠璃と來たい處だが、手短に平たく云つてしまうが（ヱヘンと一トつ咳拂をして）先づ一家親類は申すに及ばず、知己朋友ハ云ふ迄もなし、あそこの親睦會、こゝの送別會で、一度や半度、お目にかゝつたお客は勿論、それからそれへと手を廻して、色氣たつぷりの身振で、不潔い處でがすが、チト妾の家へもお遊びにいらつしやいなナカと、四方八方に出を掛る……。
「なるほど、それから。
「此家に引寄せて仕舞へば、もう此方のもの、それから便利さうな、閑で居さうな若い妓を、手が明いて居るなら、御馳走をするからとか何んとかいゝ加減な事を云つて、密々呼びにやる。呼びにやれバ、先方も御馳走と聞いて、それに遊んで居るものゝことだから。何んとか姉ヱさんの前を誤魔化して遣つて來る、遣つて來れば。もう〆めたもの。アノ妓も折角來ましたから、とそろ〳〵お客の懐中を當てに、天ドンか小田卷の二三杯も取つて、自分も喰べて、よしカネ、いゝ鹽梅に御酒が

廻つた時分に、お前は其お客に鳥渡目配をして、急に思ひ出したかの如くに、プイと外へはづしてしまふ、さうすれば、今時の若い妓だもの、ソコハソレ……跡は云はずと御推もじ。さうすれば、其お客も歸る時に、何程か置うし、其若い妓も默つては居まい。れ客も料理屋や、待合で、餘計な散財をするより、これは手輕でトンダいゝ處だ、ふが吉の家に限ると、自然客足が繁くなる、繁くなればお前の懷合も、マア暖まらうといふ道理。何んの事はない、ふが吉の家改め若い妓周旋所サ、何んと明治の楠孔明、樣々ッ。

立續けに懸河の辯をふるはれて、流石のふが吉、あつけに取られて、只茫然たるばかり。筆本ますく圖に乘つて。

「其内には僕も紙上で、花柳の新遊仙窟は、烏森にあり、とか何んとか君の爲に披露をするだらう。さうすれバ一ト月を出ないうちに、今の不景氣ハ昔語になるワサ。

「さうお誂向に行けばよござんすが。

「行かなくつて、どうするものか子。甘く行けば三割の手數料は承知して居るだらう子。それはさうと、ゴロ八は今夜どうした子?

この問題が、元來筆本の主眼と見える。

「先刻お坐敷で、出掛けましたが、もう歸つて來る時分ですから、マア話していらつしやい、アノ妓

もお蔭樣で、過日の雜報に出てから、少しは口が掛るやうになりましたよ。

「さうだらう、乃公の細工は、何んと巧いもんだらう、今夜歸つて來たら思ふさま油を搾つてやらうよ。

云つてニタリと笑ふ無氣味さ、成程これでは可厭がられるも無理はない。ふが吉も無理に一笑して。

「待つて居らつしやるうちに、何にもありませんが、一猪口附けませうカ子。

又さう惡るく取扱ふ譯にも行かぬ事情があると見えて、ふが吉澁々臺所へ立つて行く時、振向きざまに。

「憚りですが筆本さん、其鐵瓶へ藥罐の水を入れて置いて頂戴な。生憎今夜ハ、淸が鳥渡宿まで行つたもんですから……。

其内に酒が始る。ゴロ八も歸つて來る――顏を眞赤ゝして。夜も更けて行く。あとは竹の皮飛び箸跳る杯盤狼籍！　臺所の烏猫何に驚いたのやら、闇黑をねらつて、フーブツ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから一週間も經たぬ内、果して或る紙上に、城南の新仙窟と、麗々しく標題を置いた雜報が出たとは、偖もく。

◉美人車

其一――泪にじむ乙女が襤褸の袂。

「アヽもうそろ〳〵店を仕舞ふとしやうよ(一寸考へ)時にもう何時だらう、今晩は雨が降る故か、さツぱりお客が無い。(アヽと溜息一ッ)サア〳〵形附やう〳〵。

云ひながら立膝をして、店先にいろ〳〵列べ飾ッてあッた煙草を取形づけ、夫れ〴〵箱の中ゑ入れ、玻璃戸を〆めて錠を下し。今迄車の下へ列へて置た足駄を出して、それを穿きながら、外に吊してある暖簾をはづして、チャアンと疊むで、烟草箱の下へ入れ。

「まづ　これでよい。

吐息を洩しながら、自分が今迄据ッて居た脇に置てあッた二子の絆纏を一寸前の方へ出して、店の隅にあッた更紗の包につゝんである辨當箱を其脇に並べ、ソシテ前の絆纏を引ッ掛け、店の兩側に吊してあるランプを下して一箇を消して仕舞ひ、一箇を外へ出して、車の前庇の下――雨のかゝらない處――へ一寸置いて、雨戸を二枚立てゝ仕まひ、ランプを楫棒へ結び附け、今迄車の隅に立掛けてあッた毛繻子の蝙蝠傘を廣げ、片手にさしながら件の車を精一杯の力で押して道路の隅――往來の邪魔にならない處――へ挽いて行ッて、

「まづかうしておけバ明朝まではいゝ。

呟きながら、いそ〳〵お茶の水の茗溪坂を昇り行く小女。夜目でよくは分りませんが、此時小雨も全くあがッて美人の眉とも見ゆる破月が、こぼれ松葉の散形を巧に地上に染めて居ます。唐國の赤壁に譬へるお茶の水の流も其音微かに往來も途絶へて、只シンとして居ます、時々聞ゆるのハ土手の秋草が風に揉まれて囁く音ばかり。朧の月影で彼の小女をすかして見ると、年はさうです、兩方の指を折ッて未だ七ッ八ッは餘るでせう。何時結ッた島田髷ですか、酷く亂れてタボ抔は無下にヒシヤゲて、後れ毛が四五本、可惜薄桃色の頰を窘めて、そして前髪の先の太い一の字を富士額に畵いて居ます。顏は寧ろ痩方で、目は少し凹んで居ます、が、何處となく愛嬌——どうとも云へぬ——愛嬌を持ッて、笑ッた時は嘸……と一寸見てさへ思はれます。夫に濃過る程の眉、これが中々の愛嬌を增させます、が、通ッた鼻筋が此愛嬌の幾分を妬んで居る樣です。狹い唇、洩らすともなく、

「アゝ　妾程世の中に不仕幸なものハあるまい（鳥渡首を傾け）ト云ッても今更仕樣はないが、アー思ひ出しても悲くなる、妾が三歲の時、揃も揃ッて兩親ともお沒なり、妾は兩親の顏さへ覺えて居ない位、兄弟とても妾タッタ一人、アノ御親切な叔父樣御夫婦が引取ッて下すッて、着物から、何から何までイカイお世話——親が無くても子は育つ——と云ふ通り、妾もお兩方のお陰で一人前の人間になッたが、お兩方がよくして下さるだけ、妾もなんだかさう〳〵御厄介にもなッて居られな

い樣で、これが男でゐッたなら、どうともして、車を挽いて……も叔父樣御夫婦位はお樂におさせ申す事が出來るが、女の悲しさ……何一トつお兩方のお手助も出來やアしない。さうかうして居る内に叔父樣がアノ御大病、叔母樣だッて、お年は寄ッていらッしやるシ、只氣ばかりあせッてどうなさる事もお出來なさらない、かう云ふ時こそ日頃の御恩報じに……とは思ッても女子の悲しさ、たとへ此身を浮川竹に……所詮物堅いお兩方、お聽きなさる筈もなく、なんぼなんでも勤の身は……若しアノお方にてもお遇ひ申した時に、なんと妾がお云譯を……兎つおいつ思案に此頃は夜もろく〳〵寐附れ無い程、考へて居る處へ、不圖お隣家の內室が、アノ新聞を持ッて來ての話、早速ソノ本店へ行ッて今では……

思はず空を見上げて、太い息を吐く。

「商賣とは云へ、終日店先へ据ッて往來の人に顏をさらす其つらさ、トは云へ此もみんなお兩方の爲、勿体ない、つらいなんぞと。アヽもう思ふまい〳〵、夫りやアさうと今朝店の前を立派な黑塗の手車に乘ッて通ッた、官員風のお方は、どうも……若しや……が、おァ違う譯はない、いくら長い間お目に掛らないッて……が、どうも口元抔はソックリ、彼方でもしげ〳〵妾の顏を……若しや……よしんばソノ方にしろ、今の妾の此風俗ではお目に掛られた義理でもなし、ホヽヽ妾とした事がまだ何方だか分りもしない内から……それより少も早く歸ッて叔父樣の御看病でもしませう、又歸途

にはいつもの處てお酒を買ッて行ッて、叔父樣のお喜びなさるお顏を見ませう。考に路も果敢〳〵しく行きません。少し行ッては立止り、立止ッては又步を進めます。誠に不憫な小女、他の見る目もいぢらしい程。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ヲヤお歸りかい、今晩は常時よりチット遲い樣たねヱ、

「ハイ……ツイ……雨が降ッたもんですから、

「今日は雨が降ッたから、嘸おまへが困ッて居るだらうと、今方も叔父さんと話して居た處たよ。

「ヲヤ　さうでございますか、叔父樣の御病氣は如何でございます、今朝と別段お變もござ いませんか？

「アヽ　別段變ッた事もないよ、

「アノ　こちらにいつもの御酒を買ッて參りましたから、どうぞお上げなつッて……それ 共今御寐なッていらッしやいますか？

廣くもない部屋の中、病人も此聲が耳に入ッたか、病苦を聲に現はし、

「おりやうが歸ッたかい？

叔母はいそ〳〵、

「ヘイ、おりやうが常時の御酒を買ッて參ましたが、只今召上りますか?

「アヽ　それなら少許おくれ、

暫くたッて、叔母は温く燗をした酒を酒杯についで枕元に持ッて行きました、病人は一口味ひながら、

「アヽおいしい、(舌甜りしながら)私もかうやッて病氣になッてから、何も喰べる事も出來す、又喰べやうとも思はないが、只此寐酒の一杯が何より。かうやッておりやうがよくしてくれるに附けても思ひ出すが、世が世なら……――またこんな事を云ふと兩人に笑はれるが――これ程までに落ぶれ果つる尾羽枯雄でもなかッたが、時勢の變遷には詮方なく、かく浪々の身の上、おりやうとてもまた其通り……ト今更云ッても仕樣がない、アハヽヽヽ

僅に苦しき笑を裝ふ、

「アレまたそんな事をキナ〳〵思召さずに、御養生を御大切に少も早く御全快なさいまし、あんまりいろ〳〵な事を御心配あさいますから、ツイ御病氣にも障ります、ドレお肩でも揉みませう。

親切に介抱する可憐の少女、病苦に弱る不憫の老翁。悲し涙は嬉し涙と混る、

「アヽさうでございますとも、れりやうの申します通り、あまりいろ〳〵お考へなさらないやうに。

跡は泪、先立つものも泪。小夜更けて身に染む秋の風、破障子の隙を掠めて音淋し。

其二――夢にも……幻にも君が面影。

老女の化粧とも見ゑた殘んの月影も、ハヤ東の空へ名殘なく消ゑて仕舞ッて、朝暾が空に眞紅の糸を引いた。

「アヽ寒い、どうも朝方は……ひどい寒さだこと。

云ひながら煙草をそれ〴〵棚の中へ列べて居ます——一人の小女が——

「どうも手の先が……宛然氷る樣だよ。

とハタキを右手に持ちながら棚をはたき。

「毎日〳〵お天氣がいゝと、塵がひどく立つもんだから、どうもひどいごみだこと、こんなに。

脇にあッた淺黃の手拭を鳥渡開いて、島田髷の上へフーワリと載せ樣とした。

「アラ　モウこんなに髮がこはれッちまッたよ……一昨日叔母樣に結ッて戴いたばかりなのに……(一寸右の手で鬢の處を觸ッて見て)こんどは銀杏返に結ッていたゞかうヤ(首を傾け)ダガ　どうも銀杏返はどッか下卑て居る樣で……いけないよ(笑の漣を紅なす頰に現はした)ホヽヽ何に結ッたッて、妾の樣に寐ざうが惡くッてはお仕舞だよ(ます〳〵獨りで笑ひ出しました、イヱ笑ひ出さうとしました)今朝も叔母樣がさうおッしやるンだもの、おりやうが昨夜もまた妾の足を……オホヽヽヽ夜中に蹈むだッて……其爲め吃驚なすッて、とう〳〵目が覺めたッて……其癖自分は夢中で……チットモ知らないんだが、妾も世間で云ふ、ハヽヽヽ寐坊の女敎師か知らん(ます〳〵

嬉しさうに笑ッて居ます）ハヽヽヽヽヽオホヽヽヽホ（急に思ひ附いた樣に）ダガ　こんなになか〳〵笑ッて居られる譯には行かない、どうも昨夜の樣な容御子では……叔父樣は所詮……急にかうと云ふ譯でもあるまいが（太い吐息一とつ）所詮……元のお身体には（思はず　アヽ　と太い息を吐いて）妾が目でも、どうも……叔母樣がれ可愛さうで……れ口の先では　何時でも『ナアーニ〳〵』と云ッていらッしやるが、れ心の中でハ——お胸の內では、どの位……アヽ傍て見るのもれ氣の毒で……アヽ　これを思ふと　いつそ　妾がお身代に死んて仕舞たい……。

右手に持ッたハタキを一トつ棚に當て、

「アヽ　こんな事を云ッて居て、肝腎の掃除を忘れてしまッた、ドレ早く掃除を仕てしまはないと、また昨日の朝の樣にお客樣に笑れるよ、

思ひ直したら、熱心に煙草をそれ〴〵戸棚の中に列べて、玻璃戸をはたかうとすると向方に美人が……ションボリ。

「オヤッ。

思はぞ洩らして、暫ばしハタキの手を休めた。

「オヤッ。

又一ト言云ッたぎり、暫し呆れて居た、其女の姿に見とれて居た。

「オヤ。妾を見て笑ッて居るよ、いやな……何がをかしいのだらう……？ 人を馬鹿にしてサ……いやアナ。

云ふ途端 其美人ハ跡なく消えた——かき消す様に——

「オヤ 居なくなッたよ、をかあしな……。

こゝで『ホヽ』と云ふ笑ひ聲が何處となく聞えた。『アラ』と向ふを見ると又現はれた——以前の美人——

「アヽ どうしたんだらう、また來たよ、此人は……

見ると不思議 顔容が——以前の姿に引替へて——非常にやつれて居た。鬢のほつれ毛が、幾本となく、雪あす頰へ、ムシロ青ざめた顔にかゝッて居た。ソレが朝風に靡いて揉れて居た。

「オヤ みすぼらしい……。

思はぞ獨言を云ッて小女も——我形を恨むで、風の糸柳とも見える鬢の亂れ毛を搔き上げると、ますく不思議！ 前の婦人も同じ様に——鬢の亂れ毛を搔き上げて居ます。小女ハ太い息を洩らした、

「アヽ かうもやつれるものかしら。

『アヽ 見ッとも無い』 獨言ちて下を見れバ「カメオ」の煙草一箇、取り殘されて戸棚の前へ落ちて居た。その上にも美人の面影。

「アヽ　モウ　そろ〳〵いつもの……官員……さんが御通りになる時分だよ……オホヽヽヽ髪でもチアンとしてれからや。

愛らしい、何處迄も愛らしい顏――降り積む雪を搖き別けて咲いて居る薄紅梅とも見比べる――顏を一寸上げて見ると――噂をすれバ影とやら――黑塗の車一輛。此方に向ッて駈けて來る……載せて居る人は……ソモ……。

「オヤ……アノ車だよ……いつもの……アノお方だよ……。

馳せ來る車矢庭に此美人車の前に其楫棒を下ろした。車の響が止まると小女の胸が轟きだした。すると下り立つ一人の紳士――黑綾のフロックコートをゆたかに着た年少の美しい――紳士。

「シガアを少しばかり……。

思はす見合す顏二つ――四ッの眼球ハ那邊をさまよふ?

「……「マニラ」に致しませうか……「ハバナ」に……どちら……上げます……。

小女が幻の心は何處を浮かれ歩行く?

果敢なきものは、戀衣縫ひ初むる乙女心かも。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『營業人力車駐車塲』と書いてある棒杭の傍に、梶棒を列べて居る數輛の人力車、それに腰を掛けて居る數名の車夫。其名の熊にも劣らない程な黒い顔をしたのもあれば、虎の仇名通り、鼻が嘯いて居るのもあります。客を待間の浮世雜談——

「コウ　吉……暫く　てめヱと一處にならなかッたナ。

云ひ掛けたのは四十前後の逞しい骨々しい男、栗の毬彙よりモットこはい頬鬚を勿体さうに撫でゝかく云ッた。

「ほんとにョ、暫く會合さなかッたの。

同じ樣な挨拶をしたのハ二十四五の男盛り、車夫には珍らしく色の生ッ白の勇みの兄イです。

「時に　ヱイ　コウ　いやに寒くなッたナ。

「さうよゝどうも己らアどう云ふものか寒サが大の禁物よ。

「時候に連れて懐合も寒くなるンぢやアねへか。

「おめヱぢやアあるめへし、時候が寒くなッたッて、お召物の出し入れに氣を揉む樣なお兄イ樣たア違はア。

「巧く云ッてやアがらア、過日もアノ絆纏を出すからッて、一兩かしてくれと拜んだぢやア　ねへか、アハゝゝゝ。

「そりやさうと、今度此度おふれが變ッて、黒のハッピに限るとしたなア……豪氣ょ鉢巻に頭痛だあア。

「違えねヱ。風俗にはいゝかもしれねヱが、コシトラにはひどく當る奴サ。

「熊の畜生奴ッ、風俗なンて、いやアに洋語を使やアがるナ、生意氣ナ、それよりアノ書生ょかけて見ヤ。

「だめだッて事よ、アンナお芋がなんしにお車に召すものか？

「そら來た、こんだこそ、アノ年增は……。

「駄目だア、あらア直ぐ横町の師匠だア。

「……こりやア　大失策だ。

互に口角に泡を吹いて談し合ッて居る處へ、向方から空車を引いて來かゝッた黒鴨仕立の車夫、見るより此方の二三人聲を掛け、

「ヤア。

云ッたぎり双方首肯たばかり、下等社會の禮法ほど簡單なものはないです。

「マア休んでいきねヱ。

「どうしてそんな事が仕て居られるものか、大變に急な御用があらア。

「アハヽヽヽ吉の野郎め、急用があるッて、何にヲ……。
「ナアーニ　外でもねヱが。頗るッてのがお待ち申して居らア。
「アハヽヽヽ何を云ふかと思やア、吉の人情談も久しい奴だ。
「一体そりやア何者だア。
「ナアーニ　アノ　ソラ美人車とかに居る娘の事よ。
「アハヽヽヽモウすばしこく水道橋の角に目を附けた奴だ、道理で吉の野郎此頃いやに巻煙草をフカすと思ッた。アハヽヽヽ。
「ソーヨ　熊のめヱだが、己らア　あの位な美人は……恐らく世の中にあるめヱと思ふよ。
「豪氣と肩を入れる奴サ。
「ダガ　吉。思ひ切りねヱ、ありやア駄目だ、及ばぬ戀だア。
吉とやら、これを聞いて思はず眞面目になッて、熱心に問ひ初めた。
「ナニー　なにが駄目なんでヱ。
「駄目と云ふのは外でもねヱが。あれでも元はレッキとした旗元のれ孃樣で……。
「それがどうしたんだ。
ます〳〵熱心に聞きたゞしました。

「サウ　周章なさんな。
「其旗元の娘で……。
「ヱヽ　分ッて居らア、其旗元の娘がどうしたんだ？
「其旗元の娘が至ッての縹致よしで……。
「ヱヽ　分ッて居らア。
「マア　聞きねエ、縹致がいゝから、彼處でも嫁に欲しい、此方でも婿にならうと申し込むんだが、どう云ふものか肝腎の御本尊が承知しねエ。
「ハテナ　ハテナ　それからどうした？
「それから、親類もあんまり變に思ッて、よーく糺して見るとそれも其筈、尤の譯だ……とうにお安直の箪笥と來て居らア。
「アハヽヽヽ、虫が附いたと云ふ洒落か。
「だまッて聞きねエ、其儘うッちやッて置かうものなら、それこそ兩人手に手をとりが鳴く……ッてヱナ譯になる處を女の方の兩親が——其時代には珍らしい——開化した奴で、出來たものなら仕樣がねエ、トとう〳〵其男とおいひなづけと云ふものにしたとよ。
これを聞いた以前の車夫——吉とやら——驚き呆れて暫し——忙然——思はず、握ッて居た梶棒も

ゆるむまで。

其三——腸を斷つ乙女が物思ひ。

「大層今日は常時もよりお早いやうでございますネ。

常時もながら可愛らしい聲。夫も聞人が聞人、今話しかけられた者には如何ばかり。伽陵瀕迦もなんのその。

「アヽ（何故か口籠る）今日はネ、旦那が御役所から直ぐ外にお廻りになッたもンだから。

「オヤ　さうでございますか（嬌笑を洩らして）かうやッて貴所は毎日の様に買に來て下さいますが（一トつ息を切る）全体お宅は何處でございます？

思ふ坪。渡に舟。毎日の様に買に來るのも、元を糺せば、かうやッて親しく——馴々しく話しかけられたいばッかり。何條猶豫の候べき、が思へば何んだか……恥かしい様で……楫棒握る車夫風情でさへこれですもの、情を知らぬ人は無いと見ゑます！

「エヽ　わッちかい？　わッちは白山に居ます。

何んだか改ッた返答。

「白山ハ何處？

「白山ハ……指ケ谷町で……。

娘はくどくも聞糺したい風情。ハテ？

「指ケ谷町は何番地で居らッしやるの？

「エッ　番地かい　番地は卅五番地サ。

此れが往來で通りがゝり、田舍者に道でも聞かれうものなら、舌打もせんに、イケ可笑しな奴だ　と云はうものを。不思議と思ッたのも云ッて仕舞ッた跡の事。ナニ全然不思議と思はない程。問はれたいが結句心嬉しいとは、ハテ妙なもの！

「オヤさうでございますの、それならそんなに御遠方でもございませんネ（寧ロ腦殺すると云ふ風の笑―二ッ　三ッ）お名前は何んとおッしやるの？

此處で流石の男も考へた。なんしにそんなに詳しく聞糺すのだらう？　不思議ダ……とは思ッたが、其處が人間の悲しさ。自惚の鎌は巧に怪訝の芽を刈ッて行きます、が少しは變と思ッたのか、

「エッ　名前かい？

「ハイ　失禮ながらお名前は……何んとおッしやる御邸にいらッしやるの？

何んの爲め？　男―充分引け目のある男―何んで問ひ返す勇氣があらう？　直ぐ答へた。

「駒形芳文とおッしやる―大藏省にお出になる官員さんのお邸に居るンです。

テモ改ッた答辯！　シッ！　云はないでもいゝ事まで、聞きもしない御役所まで、下郎は兎角口の善

惡なきもの、娘は首を傾け駒形芳文。ハテ丸で名前が、只芳文の芳が芳之助の芳に適ふばかり、一字位同じ名前は世間にいくらもある、同名異人さへあるもの。併しどうも面色が……それも他人の空似とやら、シテ見ると、どう考へ直しても同じお方ぢやアないか知ら。怪しむに附け顔の色も今迄の艶々しさも其色を消します。矢ッ張心の迷か知ら？　が、どうも……どうしても、アノ目附、アノ口振、アヽ思ひ出しても可厭になる。車夫は此娘が不興な顔を見て、自分も其不興の半座を分ッた。心の中で　エーこんな事なら、名前なんぞは云はなければよかッたッけ。

「さうしてねまい、私ン處の旦那を御存じかい？

胸に一物アリ樣は、此間も仲間の噂話。此娘には立派ないゝなづけ……レッキとした旦那がある……若しや万一、私ン處の旦那を知ッて居るンぢやないか、併しそれはあんまり、邪推過る、どうも思ひ過すと邪推は何處まで手を延す事やら分らない程、それに又仲間の奴等が己を擔いだんぢやアないか、思ひ返すと尙々戀心ははびこるもの。是非も分別もいッたものでない。何かモット談話を續け樣としたが、偖かうなると捕へ處が無い—手持不沙汰—可笑しい程。

「アヽ大變遲くなッた、モウ歸らう。

シッ！　斷らずもがな。思ひ出した樣に云ふ丈尙可笑しさは增すです。

「マア　いゝぢやアありませんか、モット話していらッしやいナ。

偖止められば止められるだけ、居惡いもの―かうなると―又明日も來られる―思ひ直したか、

「又明日來やう。

「オヤ　さうでございますか、どうぞ明日も是非……。

此娘―可憐の小女―店先へ腰を掛けて往來を見るのが恥かしかッた時から見ると大違―習ふより馴れろ―商賣氣質はとうに二三遍繰返して讀むだかの樣です。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「どうしてもアノれ方に違ひない樣た。どう思ひ返してもアノお方に……オヤ　モウ跡見女學校の前へ來た。

太い吐息をツキ頃日頃、思ひ思ッた夫の事、ア丶妾でも人並に育ッたら、アンナ學校へ入ッて、リードルの一冊位は習へさうなもの、ほんとにア丶やッて紫の本包をかゝえて通る娘子を見ると、どんなに羨しからう、どんなに口惜しからう、流石感慨は乙女が狹い胸板を貫きます、よしあのお方にしろ、妾がコンナ風では所詮お目に掛られた義理でもなし、若し又お目に掛ッた處が、どうして、妾が貴郎のコレ〳〵と申す事が出來やう、イクラ鐵面皮だッて、却ッて恥を暴す樣なもの、ア丶歸らう〳〵、二足三足戻ッたが、引かる丶ものは後髪のみかは。責めて門口までゞも……ヨシお目に掛られないにしろ……

れ内の御樣子でも、又歩は前へ進みます。

「溫泉の御近處と云へば、モウ此邊だ。慥か右側と聞て居た。

見上る眼はハヤ露の玉を碎く、

「オヤ彼處ではない、アノ次の冠木門の家か知ら、オヤ彼處でもない……なんでも黒板塀か何か餘程立派なお家だと聞て居たから、アレに違ひない、アソコの黒板塀のお家に違ひない。

乙女が胸は今更の樣に轟く、

「アヽ これに違ひない。從六位駒形芳文と書いてある。

見れバ立派な冠木門、黒板塀は其威嚴を增させます、常盤なす松が枝は塀の上から外面を覗いて居る樣。見るから立派な一裏店に住ふ乙女には尙更立派に見える一ト構。門の前に敷き詰めてある花剛石、どうして此娘の下駄の齒に蹈まれうぞ。

「アヽ 歸らう〳〵たとへカウ〳〵と名のッた處が、アノれ方に恥をおかゝせ申す樣なものだ。どうしてこんなぼろ〳〵した服裝で（漫ろ泪は襤褸の袂に雨なす）どうまア オメ〳〵と行かれませう（泪の雫は續けざまに……）丸ッきり違ッたお方であらうものなら……アヽ 歸りませう〳〵。」

恨しさうに表札を見詰る目元、千萬無量の思を籠る、哀れとも。いぢらしいとも。

スゴ〳〵戻る半町ばかり、急に思ひ出したか、

「折角此處まで來たもの、責めてアノ方が妾のコレ〳〵といふ事だけでも……責めてアノ方が妾の夫といふ事だけでも突止めて歸らう。

獨り言云ふ内に、身はハヤ又其門前に來た、此度は思ひ定めたか、つか〳〵ッと敷石を蹈んで門―表札の打ッてある門の傍まで來たが、どうしても其中へ這入る勇氣がないと見えます。

「よし參上ッた處が、モウ屹度レッキとした奧樣がれあんなさるに違ひない、なんしに何時まで妾の來るのを待ッていらッしやるもんですか。ソレも親と親との口約束。少しの間はご一處に居た事もあッたッけが……何時まで、コノ見る影もない妾を何時まて待ッていらッしやるものか。若し奧樣でもいらつしやらうものなら、それこそ妾の恥……。

アヽと右の方―臺所の方を見ると、アラ……奧樣らしい人品のいゝ婦人が納戸の方へチラ〳〵。見ると其影は襖の彼方へ消えた、が、微に娘が耳朶を掠めるかんバしッた聲―

「奧樣引　只今ッ。

娘が胸は張り裂くばかり。

「アヽ駄目だ〳〵、早く歸らう、コンナ事に時間取ッて今日は大變遲くなッた、嘸叔母樣が待遠しがッて居らッしやるだらう。

見返り〳〵、今や敷石を離る折しも。矢庭に此邸内へ引込む一輛の車。娘は周章て身を板塀にヒタと

寄せた。車夫の聲。

「れ歸り引。

思はず顧眄く娘。玄關の式臺には書生らしい若者二三名、其奥に手を附いて居る婦人―人品のいゝ婦人。

門の蔭から瞥見した乙女が胸の中！　熱腸寸斷。

其四――心まで乘り合ッた馬車の內。

今しも九段の坂を下り來る男女の二人連、男といふのハ年の頃廿四五、男でさへ見とれる程の好男子鬚の鹽梅抔もこわらしくなく至極上品な男振。夫に着物もなか／＼サッパリして一くどい樣ですが一憎らしい程いゝ男です。同伴の婦人これもなか／＼の美形で、年の頃はさうです二十三四でせうか。丸髷を品よく結ッて銘仙の綿入に黑繻子に八反の腹合せの帶を〆め、夫に黑チリの羽織―勿論小サな縫紋あり――を着て所謂イキといふ點ハ少ない替り、扮裝が何處までもシットリとして至極音無造は大に此婦人の品位を高めます。誠に才子佳人の好對アナ羨ましの極です。後方から見ると兩人の羽織か一枚に見へる程接近して、少し歩行いては立止り、止まッては又歩行きだす樣に、さも睦しげに談しながら行きます。

「チョイト貴郎、モウ餘ッ程おそくなりハいたしませんかネ。今日歸途にソンナに廻にもなりませ

んとおッしやいましたからこちらに來ましたが大變に立派な勸工場でございまするネ。
見れば一六先生の書いた九段勸業場といふ大きな額が正面に覗いて居て門搆家造も立派。先づ東京中――日本中で一番立派な勸工場です。

「さうサ、おまいの云ふ通りまづ東京一だらうネ。

「サア這入ッて見ませう、

女は嬉しさうに其男の跡を尾いて行く心の中、嬉しさに思はず足も所謂――地に附かぬ程。

* * * * * * * * * * * * * *

勸工場を立出る以前の若夫婦、

「どうせこんなに遲くなッて今から歸ッて臺所を騷すのも氣の毒だから、堀江でも誘ッて金清樓へでも行ッて見やう、

「ヘヱ　それがよろしうございませう、れ竹さんにも暫く遇ひませんから（察して見るのに此れ竹さんは堀江とか云へる人の妻が娘で、また此婦人が駒形の妻君にならぬ以前同じ學校の朋友であらう）

「ムヽ　それならオムニバスゝ乗ッて萬世まで行かう

「ハイ

廣くもあらぬ乘合馬車の內。白髮の父爺が脇の下を十六十七の娘の振袖がくヾッて居れハ、小僧が持ッて來た荷物が旦那の膝の上に乘ッて居ます。彼の若夫婦の前に腰を掛けた老女、

「おりやうや、大層今日は步行いた故が餘ッ程草臥れた樣だよ、

「さうでございませう、今日ハ餘程步行きましたから、又家へ歸ッてから、腰が痛いなんてれつしやッてハいけませんよ、オホヽヽヽ、

「腰が痛んだら又おまいに揉んでもらうばかりサ、

老人の癖とて、馬車の內も、己が家の內も同じ樣に思ッて居ます。

「それはさうと早く歸らないと、叔父さんが獨りで嘸待ちどうしがッて居らッしやるだらうネ、おりやう、

おりやう〳〵と此老女が呼ぶ度に、以前の紳士が首を傾けて何か思ひ當る事でもある樣に老女と其娘――今老女に話しかけられて居るおりやうとやら云ふ娘の顏とを交る〳〵眺めて居ました。彼の娘もあまりに自分の顏を見詰められますから、こちらからも其紳士の顏を見ると、アラ！　紛れもない駒形芳文。シカモ二三日前に其門までわざ〳〵尋ねて行ッた程戀ひ焦れて居る駒形芳文。乙女が胸は今更に波立ます。見れば見る程かうやッて差向ひで見れば見る程どうも……似て居る。又しても乙女が忘想。紳士の方でもさうです、おりやうと云ふ名前も同じだし、夫に年頃も恰度合ッて居るし、モウ此位の年頃

になる時分、夫に何處となく幼立に見覺のある顔附。イッツ聞いて見やうか、『おまいが許嫁のおりやうかい』それもわんまりぶしつけ。夫に今はレッキとした此お愛といふ——今もヂキ脇に腰を掛けて居るお愛といふ妻がある。どうしたらよからう。マア聞いて見やうか。

乙女の方は夫れ處か、飛び立つ程『貴郎が妾の……』。どうして聞かれう？　見れば傍に立派な妻君。丸髷に結ッた美しい奥様が居る。どうして扮装から緻標まで、コンナむさい妾が其足元にも及ばない、アヽもうあきらめやう〳〵所詮ダメだ。思へば首筋も自然垂れて行きます。さうともしらぬ老女、

「おりやうや、萬世から家までは夫れ程遠くもないから、歩行いて行くとしやうネ、

道程の詮議立。おりやうが心では『おいて頂戴ッ』なか〳〵それ處ではない返事も何時になく不愉快に澁ッて居ます。

「エヽ　どうでもよろしい樣に……貴郎の……、

さりとは夢中な乙女心！

「ネ貴郎、お竹さんの處へ參りますのには矢ッ張萬世で下りた方がよろしうございますの？

「サウサ。

氣のない返事。何時に違ッた夫の不機嫌。

「お竹さんの處へは何か土産でも持ッて參りませうか、

「さうサ。
矢張氣のない返事。何か妾の申した事でもお氣に障ッたのやら？　ハテ？　知らぬお愛の心では是も無理でない。紳士は深く息を吐き、
「アヽどうも……、
「貴郎どッか……どうか……、
馬車は止る。下り立つ群集の客おもひ〳〵に別れ行く、別れかねるは娘が胸紳士が心。

其五――愛らしげな鉢の姫小松。

「今日は少し御退出が遲い樣でムいます子。
ニコ〳〵笑ひながら問ひかけたのは駒形芳文の令夫人愛子です。
「今日は役所の歸りがけ鳥渡吉本の處へ寄つたから、夫れで常時より少し遲くなつたンだらう、
洋服の外套を脫いで火鉢の脇に足を投げ出しながら答へたのは此家の主人駒形芳文です。
「さうでございますか吉本も皆樣御變りもない御樣子ですか？
「アヽみんな丈夫な樣だよソシテ歸る時にれ琴さんがお前にくれ〴〵もよろしくッてチット御天氣のいゝ節遊びにおいでッて、
「さうでございますか有がとう、嘸梅チャンが大きくなりましたらうねエ、

「アヽ暫く見ない内に見違る程大きくなつて今日なんぞも私の前へ來てチヤアンと兩手を突いてお辭義をしたよ

「オヤさうでございますか、アノ位小供で可愛らしいのは少なうございますネ、オホヽヽヽ、

「れ前も早くアンナ可愛らしい小供を持ちたからう？

「オホヽヽヽ、やッぱり自分が持ちますと、とんだ懊惱ものかも知れませんよオホヽヽヽ、

「餘計な談話で衣服を着替るのを忘れて仕舞ッたッ、

「さうでございますこと、妾もスッカリ忘れて仕舞ましたオホヽヽヽ、

云ひながら妻君ハ立つて次の部屋の隅に置いてある炬燵に掛けてあつた日本服を持ッて來て夫の前へ出しました。夫は又モーニングの上着を脫ぎチヨツキを外づし今ヅボンを取らんとして居た處、妻君は自分の持つて來た衣服を脇へ鳥渡置いて夫のヅボンの先を兩手で採ッて遣りながら、

「フランネルのシャツは着ていらッしやる方がよろしうございますよ、又れ風邪でも召すといけませんから、

「さうだねエ、

云ひながら夫の立つのを妻君は後方からチヤアンと揃へてある日本服をフウハリと掛けてやりながら、

「こちらにお帶を……、
出したのを夫ハ取ッて〆めながら
「どうも何時までこんなに寒いンだらう？
「妾の考でハまだこんな事では濟むまいと存じますよ、
始終笑ひながら嬉しさうに夫の顏を見て居ました、
「ソノ足袋を取つてれくれ、「ハイ
夫は足袋を穿いて仕舞ひ火鉢の向ふ——机の脇へ据りました。妻は又此方の隅て夫の脱ぎ捨てた洋服をそれ〳〵たゝんで居ました。夫は火鉢の脇にあッた煙草盆を自分の前へ引寄せ煙管に煙草を附けながら火入の前へ挿んである郵書を取ッて封押し切ッて讀むで居ましたが、
「誰か己の留守に來客はなかッたかい？
「ハイ誰方も……イヽヱ吉川さんがさッきれいでになりまして貴郎がれ留守だと申し上げたら——立ちながら——先達の事はれ蔭樣で漸く結局が附きましてどうもいろ〳〵有がとうムいますくれ〳〵れも宜敷申し上げてくれとさうれッしやッて何れ其内お目に懸ッてゆる〳〵御禮を申し上げるとさうおッしやッてれ歸りでした。
「さうかい……何れ又近日遇ふだらう。アレも感心な男だなア〳〵親切な男だ。己の處へ書生に來

て居た時分はカラ暴れ者で仕様が無ッたが今ぢやア大學を卒業して立派な官員になりをッた、

「オヤさうでございますか。これご覧あそばせ大層な塵埃でございます、お車に召してさへコレこんなに塵埃がたかりましてお召物が大なしになります、

云ひながら刷毛で洋服の塵埃を取ッて居ましたが、

「アノウ上野の博覧會は何時頃から始まるのでございます?

「上野のかい、上野のは四月からだらう、

「博覧會が開場になりましたら嘸上野は賑かになりませうねエ、櫻花も恰度咲く時分でございますから、

「なんてッたつて日本一の大博覧會だから諸國から見物人も上京するし嘸雑沓する事だらう、

「開場になりましたら千代と一處に參りたうございます、

「アヽ〳〵行ッてご覧とも　外國からわざ〳〵見物に來る人さへあるから日本人で見なかッては恥になるよ、

「千代で思ひ出しましたが仲働ト申せばどうも毎日〳〵請宿から連れて參りますがいつも長し短しで困りきりましたが今日參りましたのはトンダ氣立のいゝ音なしやかでどんなによろしうございませう、先づアレに極めやうかと妾は思ッて居ります、

「どうも小間使の千代ばかりでは、矢張用が足らないでいけないから今日來たのが音無しくッて役ゝ立つのならソレに極めたがよからう、

今日來た仲働とはソモ誰れ？　又其仲働とやらが此夫婦のいと睦ましげな光景を親しく垣間見たらマアどんな感じが浮ぶものだやら？　人間萬事塞翁が馬！

其六――何時に替らぬ松の色。

女の一念は恐ろしいもの！　むかし〳〵蛇となッた例もあるとやら、それは夫の不實を憤ッた嫉妬心、これハ又自分の許嫁の男に名乗り合ひたい、一目遇ッて今迄の苦心をツイかう〳〵と物語りたい一心から傳手を求めいろ〳〵苦心の末とう〳〵其夫――夫と思ひ詰めた男の家へ首尾よく這入り込んだ其心の中の不憫さ……思ひやるだにいぢらしい程。

「あのゥ　れまいの名は何とれ云ひだッけネ、どうも妾は記憶が惡くッて直く忘れて仕舞ふのには誠に困るよ。

「妾の名でございますか、妾の名はりやうと申します。

奥様はいと笑ましげに

「おまい今迄何處ぞへ奉公した事があるかい？

「イヽエ此方が初めてゞございます。

「さうかい……初めてゞは少しつらいかも知れないが、そんなに骨の折れる事も無いから辛抱して少しでも長く勤めて居る様にしておくれ。

「ヘイ貴女が御面倒見てお使いなさッて下さいますなら妾は何時までも此方に御奉公致して居ります。

「ア、そりやア、大變に妾の方でも都合がいゝよ、實はね、今迄來るものも來るものも、みんな長く居附かないんで、ほんとにぢれッたかッたよ、少し家の事に馴れて、妾の留居でも殿様に御飯の一トつも差支なく上げられる様に馴れて來ると、ヤレ親の病氣だ、ソレ縁者に不幸があるッて皆んな下ッて仕まふのには誠に困り切ッたよ。どうかお前もかうやッて縁あればこそ妾の所へ來たのだからそんな事の無いやうに少しでも長く居ておくれよ。

云はれて仲働のおりやうも喜び顏、

「ヘイ貴女の方でさへお使ひ下さいますなら、妾ハ一生でも此方に御奉公いたします積りでございます。

「お前がさう云ッてくれるとどんなに妾ハ嬉しからう。

おりやうハ急に思ひ附いたのやら、

「オヤ妾はお話にばかり身が入ッてまだ晩のお仕度をいたしますのをすッかり忘れて居りました。

「なあにそんなに急がなくッてもいゝよ。たッた今三時を打ッたばかりだもの、そして今日はアノ獨活を湯出て夫に玉子を落してお汁が出來たら夫に過頃買ッた小鯛を鹽燒にしてそれを殿樣に上げればそれでいゝンだよ。

「それなら其間に鳥渡お髮を撫でつけませう。

「さうかい。

おりやうは形の如く鏡臺を奧樣の前に据ゑた、鏡の面に映る一双の佳人、一ッは九谷の花生に挿んだ牡丹、一ッは溪間に咲める姫百合、眺めに孰れ優り劣りはありません。

「奧樣此のお根掛の玉は何でございます？　餘程珍らしい好い品でございますネ。

「夫れかい、それはネ殿樣が御洋行なすッた時お土産に持ッて來て下すッたンだよ。

「オヤそうでございますか大層光澤があッて結構なお品でございますネ。

「さう賞められたら何か驕らなければならないよ。

「オホヽヽ奧樣がご串戯をおッしやッてからよ……（急に氣を替へて相方きッぱり）時に異な事を伺ひます樣でございますが、殿樣のお郷國は何處でございます？

「お郷里かい、お郷里は長崎さ（何氣なくかう云ッた）

「長崎ッ（顏色少し替る）長崎でいらッしやいますの（言葉急はしく）長崎は何處でございます？

「妾はよくは知らないが長崎は東濱の町ださうだよ。
「それなら殿樣の御幼名は芳の助樣と申しは、致しませんか。
妻君は痛く驚いた樣子で
「どうしてれ前それを知ッてるンだい?
「夫を妾が忘れてどういたしませう。やッぱり妾の考へ通り殿樣は妾の……、
言葉は矢庭に口籠ッてそして涙の雫はおりやうの目縁を傳はッて露を結んで來ました、今は堪へ兼ねたか、はら／＼と妻君の肩へ落ちかゝッて來て櫛取る手も震はれて見へました、
「オヤをまへ泣いて居る子……おまへどうしてそんなに泣くの? 譯も話さないで。
おりやうは暫く其處に打伏して泣いて居ました、妻君は又何んでおりやうが泣くのやら解らないので只不思儀さうに此方を見返ッて居ましたがこれには何か仔細がなくては……と懇に尋ねました。おりやうは此處で僅に涙を收めて
「マア奥樣妾の申す事を一ト通りれ聞き下さいませ……、

* * * * * * * * * * * * *

これからおりやうは此家の主個駒形芳文の許嫁だと云ふ事を詳しく話し、今までいろ／＼の辛苦艱難

を涙相手に物語ッて、頼みに思ふ叔父が病死した後は叔母と相談してとう〳〵此家に下女奉公――賤しい水仕業をしても兼かての初一念――此處の主個が果して許嫁だと云ふ事を慥めたいばッかりに仲働となッた一伍一什を妻君に打明けたので妻君も大に其貞操に感じ入り、夫を又詳く夫芳文に話すと此も大に感じ入りおりやうの他愛ない心根に對しても自分が既に愛といふ現在妻を持ッた事を深く恥じ入ッたが今更罪もない――貞節を盡すれ愛を離別してれりやうを迎へとる譯にも行かず又さうするのは却ッておりやうの本意に悖るとの事で相談の上、以前自分の處に書生をして居た――今は大藏省の參事官を奉職して居る吉川初に合衾の仕度萬端整へて目出度四海波を謠ッた後は叔母も其家に樂隱居の身分となり兩夫婦とも至極仲よく――古い口調だが――彌が上にも彌榮えるとの事で此美人車も滯りなく此處で輓き仕舞ます。

◉可愛い子

上編。旅はうれしいもの面白いもの。

昔から小説抔では旅は悲しいものときめて書いてある。――旅は物憂きならひなるに雨を帶ぶる漁村の柳。夕を送る遠寺の鐘とは……――著作堂が得意になッて旅路の哀れさを形容した詞だがそれは親の讐敵を打つとか。戀人の跡を慕ふとかいづれ條件附の旅です。夫りやア成程悲しいに違ひない。行方を遮る高山を見てはア丶一層此山に頭でもぶつけて仕舞たい……前面を流れる深川を見てはア丶一層此川に身を投げて仕舞たい……成程心細に違ひない……が……只モウ喜樂に遊山旅をする程人世の愉快はありますまい……ないに違ひありません。平生喜樂な（但し……の苦勞は絶へませんが……）米俵を百俵積んでもヅボンの腰を折ッた事のない外史。腰を折るのは。オホン只居ながら名所を知る時ばかり。弗箱を山程積んでも欲しいとは思ひません（勿論ソンナ機會にも遇ひませんが）浮世を宇治にして暮す外史。或時本郷の若旦那眉山が來て何かの話柄の序に――どうだい思案子　伊豆の修善寺は豪氣にい丶處だッてねヱ――。此豪氣が豪氣に外史の神經を刺戟したと見えて善は急げと其翌日――頃は卯月の末つかた廿七日といふに旅裝を整へて……――と書くと大層手數の掛ッた樣だが――旅にはなまじ連れは邪魔――と獨旅の其簡略さ……其手輕さ……學校用カバンに手帳を入れ鉛筆を耳にくわへて自劣亭を飛び

出したのが午前の九時二十分……十時新橋發……こりやかうしては居られぬと直樣車に飛乘ツてから。シマッタ蝙蝠傘を忘れたッ。大急がせに車を急がせて新橋に着し切符を買ふのもソコ〳〵に列車に飛込んでまーづ安心。程なく人造の大百足は火焔を吐いて動きだしました其早さ……外史の前へ腰を掛けたのはナンデモ上方ものが東京見物の歸途。厚齒の日和下駄にケットが一枚。昔なら向島へ花見だツてコンナ簡な風は出來やしません。テモ凄ましい開化の勢力　ハテ喜ばしい文明の普及！

田畑の眞ッ青な敷物にところ〳〵紅い蓮華草の摸樣。夫れに黄い菜の花の中形雨上りの故か其艶々しい美しさは又格別。夫を据りながら眺める喜ばしさ此ばかりでも旅は澤山です。國府津迄の滊車は事ふりたれば端折ッて其先の滊車道の有樣を少しばかり書いて見ませう。まづ國府津の先の停車場は松田といッて餘程箱根の山から右の方へよッて居ます。其次の山北停車場からそろ〳〵道があがッて居ます。此停車場で滊車ゝ燈火をつけ程なく隧道の中を通り拔けます。隧道は都合七ッあッて長いのは三分餘もかゝり外史の乘ッた列車は機關車の近くでしたから蒸氣の黑烟が遠慮なく列車の窓から飛込みその苦しさ……その物凄さ……丸て黑暗地獄へでも行ッた樣だ（其癖行ッたと云ふ人に遇ッた事はないが……）夫れから小山といふ停車場。其次が御殿場。おやまからおてんばとはナンダカ女生徒の惡口にでもありさうです。佐野の停車場を通ッてとう〳〵沼津へ着いたのは午後二時半四時間半。の長い間退窟わくびて腮が痛んだ樣子。滊車を降ると胃の腑の虫が丸で腹の皮を嚙む樣に空腹でたまりませんからスタ〳〵

歩行いて沼津の市中へ出て。さて御飯を召上る處をと探したが見當らない。何處だ？　と聞くのもなんだか極が惡るい（これでも極が惡るい事があると見えます……）飛んだ處へ江戸ッ子の力瘤を出して脾だるい腹をかゝえて進んで行くと　アラ有がたや。かたばかりの茶漬屋。〆めたと飛込み。何が出來る？　エー鯵の鹽燒に……鮪のさしみ……。這入る時慧眼さとくも認めた擂鉢の螺……。アヽ螺はどうして喰へる？　酢にても漬けませうか？　甘煮にしてソシテ鯵の鹽燒……暫くたつと山の樣に皿の上に載せて來た螺の甘煮。空腹の故でもあるか其甘さ……其おいしさ……三谷の重箱の鯰より甘かッた。夢中に二三杯かッこんでさて勘定……大枚六錢でそれてどうも不漁でお魚が高かくッてお氣の毒樣とお世辭迄がおまけ……アヽ此を見ても無益な金錢は使はれないワイ。此處を出て數丁跡戻ッて三島の街道へ出る處で三島通の馬車に乘らうとする所に來かゝる二人の若者。四月の末といふのに單物一枚。微酒機嫌か何かで……矢張我黨の將士と見える。全体三島通の馬車は東京の鐵道馬車を氣取ッたのかチヤアント切符を鋏で切る處が可笑しい。夫れに馬車もペンキで塗つてイヤアニ太い針金で周圍を飾ッてある處。以前の若者の一人がいはく。今から二局へ送られる處だ……。ハテ何んの犯罪で？　知れしおん事。勿論惱殺事件で……ト果ては大笑フハヽヽ。笑ッて居る内に馬車は三島へ着し時計を見るとまだ四時半。日は高し。修善寺へはまだ五里半と聞たが此儘此處に一泊も惜いものだと憤然蹶乎。宿を通過る處に宮柱太しく立たせ給ふ社殿。棒杭を見ると三島神社。どうせ歸りの事だと呟いて其前を右へ折れた。積

日の降雨で田舎道の悪るさ。ナアーニこれしき……と口には云ッたが隨分困まッた。車に乘らうとしても賃錢が格外に高直だからご相談迄がのらない。。。。テク〳〵畑道を行く內に曇天の故か日光も常時より陣を早く引き下げ。空氣迄がナンダカ鼠色になッて來たから有繫の外史もそろ〳〵漁村柳遠寺鐘の味を甞めて心細くなッて來た。處へ來かゝる一輛の車。これ幸ひと飛び乘つて行くこと一里ばかりの處に街道の眞中に一間餘の巾サ何丁となく石を敷いた處があッた。ナンボ豆州は石が名物だッてさりとは勿体ない……。大仁と云ふ修善寺から一里ばかり手前の處へ來た頃車夫め。道のわるいのに愛想を盡かしたかどうぞアノ馬車にお乘り替へ下さいと歎願の趣聞屆け其馬車に乘り込むと乘合の大人が五人に乳呑兒が一人。何處らへと聞くと　今晚是非修善寺まで……外史は日は暮れる今夜はどうしても此處等邊で一泊の積りが此多人數の連れに遇ひ、盲木の浮木。浮曇華のはなはだ勇み喜び程なく此六人と馬車を降りて進みました。此連の內に夜目にもそれと艶々しい……イヽヱ腰の曲ッた老婆があッた。お年はおいくつ？　ト聞くと　ハイ今年六十三。アヽこんな老婆でさへ……我々の若者がとます〳〵勇みの大皷を叩いて進みました。加納川と云ふ川へかゝて居る橋を通る時四方を眺めると、屛風の樣ゞ取り圍んだ遠山は皆霞の薄衣をかぶつて著作にでも耽ッたのかポーットして居る處。溪川の妙な音樂。天然の味な風姿。日頃の風流氣がムラ〳〵ッと浮み出し暫らく橋の上にボンヤリ……連れにはぐれてはと跡追ッかけ行く處空が何を感じたのかソロ〳〵淚をこぼし始めた。こりや大變外史ハ傘を持たないと。見ると先の女連

に一箇の空傘。どうか……どうぞお使ひなさい。それから一里の山路を闇から闇。夢の中を辿ッて午後九時とうとう修禪寺の淺羽といふ旅店へ、ヘイいらつッしやいまし……。

下篇。旅は獨りでも世ヽなさけ。

昨夜着いた時は四邊は闇し景色も何にも夢中で旅寢の夢を結んで起き上ッたのが廿八日の朝。二階の障子を開けて前面を見ると溪川を隔てヽ向は一面見上る樣な山。青々と生茂ッた草木が溪川の銀の樣な水に映る鹽梅。天然の美景。今更賞め樣もない。溪川や山の工合。箱根の塔の澤に似て居てソシテ塔の澤よりは土地が一入幽邃なのです。から外に申分はない。夫に温泉も至極清潔で。透明て居る。温度もいヽ加減……それで諸病に効驗がある……これでは入らずには居られません。外史の宿ッた淺羽の内湯は其名を大同温泉と云ッて惟るに大同年間に出來たからだらう？　大同と云ふと時節柄どうやら後藤さんにでも見せて上けたい樣です。處は狹いが川の兩側にある都合二十六軒の旅店は大概内湯を持ッて居て其外に九ヶ處の外湯がある……隨分温泉には澤山の處と見ゑます。此外湯の内で中にも面白のは獨鈷の湯です。何故奇態かと云ふのに此湯は川の眞中にあつて兩側左右は溪川が流て居る棧橋を渡ッて入浴に行抔は頗る妙です。何故此湯を獨鈷と名づけたかと云ふのに深く舊記を案ずるに（ソリヤコソ……ソロ〳〵唾に眉毛だ……）往昔弘法大師が明州で吾求法衆生濟度に靈驗あらば諸佛是を結緣の地に導き給へ……ト難かしい事を云ッて所持を獨鈷の虛空に投られるとアラ不思議。其儘形は見えずなりぬ……歸

朝して見ると其獨鈷が此處にドッコとしよと落ちて居たから偖こそと地中を掘ると此靈泉――清香の湯泉滾々と湧上るを喫し、試み給ふに――ナカと大層勿体もない……有がたい……湯です。成程これでは弘法大師の功德と共に此温泉の効驗も灼乎でなければなりますまい。外史の宿泊ッた淺羽と云ふ旅店は先づ當地第一等の旅籠屋で家も綺麗だし取扱も宜ろしい、(勿論茶代の行渡がいゝ邊からでもあるが……)外史の居城は十疊の大廣間(外史の書齋から比べると……)夫にタッタ一人。しやう事なしの遊戯三昧。此風景に對したら少しは名文でも浮ぶかと殊勝氣に鉛筆をひねくッても――種のない手品ハ使へない道理――。エーぢれッたいと手拭を片手に温泉に飛び込み上ッて來ると疲勞が出て其處にゴロリ……其日の仕事といふのは寢ては喰い……喰ッては寐る……誠に喜樂な身分……只不思儀なは何んにもしないで腹のへる事……これが則ち温泉の効驗です。午後三時過といふのに竹の楊枝をくはへて湯殿へ行くとこれも浴客と見へて手拭を繩の樣によッて背中を流しながら――貴君もお晝寐ですか。どうも退窟で困りますネ――と同じ樣な挨拶。さて〳〵湯治塲は喜樂な物です。伊豆の修禪寺といふのは外史の宿屋の右隣にありますが堂宇もソンナに廣くもなく椽側抔はまだ普請が出來上らずに放擲ッた始末。音に響いた程の大伽藍とも思はれません。左の方へ五六丁も行ッた丘の上に範頼の墓があります。外史も行ッて見ましたが道も分らない小高い山の中程にあッて鳥居も腐ッて倒れかゝり堂といッても裏店の稲荷樣程もありません。只傍に石碑が番をして居るばかり。なんぼう見じめなおん有樣。蒲冠者源範頼と云ッ

ては誰あらう……征夷大將軍六十六國の總追捕使源賴朝公の實弟。其墓がこれですもの。有爲天變の世の中とは云へこれは又あんまり。此を思ふと泣くにも泣かれません。ヤレ慈善だの舞蹈だのと云ふと千金もなんのその……どうかかう云ふ舊跡は少し立派に保存したいものです。此外奥の院抔と云ッて弘法大師の舊跡がありますが無性が持前な外史。別段出掛もしませんでした。旅宿の前の山の後方に朝日瀧と云ふ飛瀑があッて至極壯觀だといふ噂は聞きましたがまだ瀧にあびる時候でもありませんから殘念ながら行くのを見合せました。此修禪寺の先き三里ばかりの處に吉奈といふ温泉塲があッて——行ッて見ないか——と勸告は受けましたが東京に殘して置いた令孃文子の事がどうも氣に掛ッてならないから（紅葉曰く。ヘン甘く云てらア……）僅か三晩二日居て三十日の朝名殘惜くも此美景を見棄て——後髮（ト云ひたいが……髮の毛が短いから……）頭蓋骨引かられる思ひ——で見返り〳〵此修禪寺を出立しました。何に致せ修禪寺はなか〳〵いゝ處。まだ行かない人は是ッ非行ッて見たまい　ト何も旅店の亭主に賴まれた譯ではありません。來た時は闇の夜。歸る時は明い朝。景色が丸て新らしく見えたのはモツケの幸足の進も早うムいます。例の大仁橋へ來ると今更の樣に景色が美しい。兎角の詞も出ません。感極まッて語出ですと同じ事。只アッケにとられて——田舍者の東京見物——ヂロ〳〵見廻して居るばかりです。韮山の伊豆學校には舊友が居ますからソンナに廻り道でもないと聞いて午前十一時頃韮山の伊豆學校へ着きました。舊友の名い——淺田新太郎氏——外史とは一所に小學讀本を讀み合ッた程の舊

友。懷舊の情は胸に溢れさうです。淺田もマサかと思ッた外史の來訪、誠に喜んで厚く取持ッてくれました。外史は寓居か如何にも閑靜なのに驚いて——どうもこりやア閑靜でいゝねヱ——ト云ふと淺田氏は又——ナア——ニ此處へ來て閑靜を賞るのは了間違だ……閑靜ハ通り過ぎて淋しすぎるよ——ト一本參られました。其內鷄のヂワ〳〵か何かで一酌を傾けました。聞けは此鷄肉は北條から買ッて來たの……北條と云へハ此處から一里餘。小使の勞は大したものです。昔から豆腐屋へ三里と云ふ事は聞ひて居ましたがシャモに一里とは始めてだと果ては大笑をしました。午後四時過迄此處に休んだ後で淺田氏に連られ當地有名の江川太郎左衞門氏の舊家を見ました。實に其家の古さ……造ッた時分ハ立木を柱にしたとのこと。板はみんな釿で削ッてあッて更に鉋を用ひません。此時分はまだ鉋がなかッたとのこと……これでも其古いのは分ッて居ます。此處から七八丁離れた田の中にある蛭子島の舊跡を見ました。寛政二年に建てた一ッの石碑があります。讀者もご存の通り蛭子島と申せは賴朝の流された處。それが今は只の田畠。雀海中に入ッて蛤となり。新造束髮に結ッて權妻となるのも無理はありません。半里ばかりの處て淺田氏に分れ獨りテク〳〵歩行く內日も漸く暮れかゝッて來ましたから歸り車に飛び乘ッて三島に着いた時分は雨さへポチ〳〵降ッて來ました。外史は傘を持ちませんから困りましたがナアーニ少し位濡れるのも亦一興かと負惜を云ひなから車を降りて。行く路に見殘した官幣神社へ飛び込んで山門の下で明治の五右衞門と云ふ格で雨止みをした時分は。モハヤ日もパッタリ暮れて仕舞ひ。池に躍る緋鯉。

樹に鳴く梟。社の九華なら早速新体詩でも唸り出しさうな處。暫くたッても雨が止みませんから社内を出て宿の千歳屋に一泊し翌五月一日同店を出たのハ午前の五時頃。雨が降ッてるのも搆はず沼津に來て午前七時五十六分同所發の滊車に乘込んで滊笛一聲ピユ――……欠伸をしながら。デモ滊車は早いものサ……。

（完）

◉わが戀

第一

私が二十一の歳であッた、即ち今から四年前の事であッた。何の用向であッたか詳しい事は忘れて仕舞つたが、なんでも女學に關係した事であッた。誰か其道に詳密い經驗のある婦人に遇つてよく女學生の狀態を聞き、其上出來るだけの助言もしてもらひたかッたが、其時は私も此廣い世界に女友と云ふものを一個も持たなかッた、尤も姉が三人あるが、私とは餘程年齡も違ひ、それに昔し風の教育だから成程裁縫禮式抔は可成習ッたが、學問にかけては私の助けになりさうなものは無い。至極困り切ッて居るのを或人が聞いて、それは番町のかう〲いふ婦人に聞くがいゝ、其婦人は或官立女學校の教師をして居て、女學の事には經驗も多し、其社會には非常に勢力もあるから、何しろ一度其婦人に遇ふがいゝ、幸ひ僕も一二度其婦人に或會で面會した事もあるが、噂に違はずなか〲快活な婦人だから、別段紹介が無くとも遇ッてくれやうけれど、僕の名刺でも持ッて行けばなほいゝからと、深切にも其婦人の居所を詳しく敎へて呉れた。私も始めてさういふ婦人に遇ふのだから、少しは覺束ないと思はないでもなかッたが、必用に迫られて、まゝよ何にしろ一度行ッて遇ッて見やうと決心した。今では婦人と對話するのは何とも思はないが、其時分はいよ〲訪ねて見やうと決心してさへ、我門口から其婦人の居宅まで

の路次、車に乘ッて居ても何とあく心が落着かずに、一体先方はどんな婦人であらう、馬鹿にされはしまいか抔と愚にも附かぬ苦勞を我から求めて、をかしい程胸が變になッた。

時は恰好秋の夕暮、なんとなく景色も寂れて物凄い樣な心持がしたが、流石夏の名殘が幾分か無いでも無かつた。愛らしい蝦夷菊が四ッ目籬の傍に咲いてゐて、葡萄棚が狹い庭中に蔓延てゐて、其果がさも甘さうにふさ〳〵と垂れて居た。何氣なく門標を見ると其婦人の姓名。オヤ此處でいゝよと車を下ると、どういふものか胸に少し疼痛を覺ゑて微に躊躇した後、表の格子を開けやうとすると、生憎ガラ〳〵ッと強い音、チョッ戸までが私を驚かすかと思ッたもの丶可笑しかッた。格子を開けて一間ばかりの上り框、これでも此家の玄關である。人造石の樣な沓脱があつて、其傍の隅には淺黄天鵞絨の鼻緒のすがつた疊附の木履と、樫木齒の日和下駄が列べて寄せ懸けてあつた、入口の板間の隅には可愛らしい婦人用の靴が、小さなブラッシユと同居して居た。私は沓脱の前に立ッて、充分おぢけた調子で、御免なさい、と微かにいッたが、家が狹い故か直ぐ聞ゑたと見えて、ハイ何誰？と障子を少しあけて、私の前に跪いたのは五十以上の柔和さうな老婆、衣服の粗末さ、下婢であらう。私ゝ慇懃に、お宅でゐらッしやいますか、鳥渡お目に懸りたうございます、實はこれ〳〵から此方樣のお話を承はりましてと（朋友の名前をいッて）どうぞお取次を願ひますがと云ひきらぬに、老婆は內へ姿を隱したと思ふと直に又出て來て、どうぞ此方へと傍の板戸を開けて、八疊の客間へ私を通した。疊なぞは借家の常、餘り新ら

しくもなかッたが、床の間には税所篤子の歌も筆も立派な幅を掛けて、其脇に青磁の花生には七草が三草ばかり、少し遠州流でも習ッたかの如くに、すねた風を見せて居ました。庭の方には、日暮ではある、細字で文句はよく分らなかッたか。書翰の額が掛けてあつた。暫く其處等中見廻して居る内、一番に私の目に際だつて映たのは、部屋の隅に疊二疊敷もあつて、高さもそれに相應する程大きな洋机樣のものが白い布を被つて居た、ハテ何んだらうとよく見ると、洋机ではない、洋琴であッた。洋琴だと思ふと同時に私の心に浮んだのは、誰か此家に居る人の内で洋琴を奏する人があらうとの想像で、其想像が浮ぶと唯なんとなく幽しい賴もしい心が起つて來た。なほ見ると其洋琴の脇に小さな本箱が二箇列んで置いてあッて、すぐ其傍に日本の琴が錦の袋を着たまゝで倚りかゝつて居た。ます〳〵音樂を嗜む人が此家の内にあると思はれて、私も性來音樂が非常に好きであるから、何んとなくその……妙に……最早知己にでもなつたかの樣に、心の中で喜んで……喜ぶ程でなくッても嬉しい程の氣がして居る處へ、襖子を開けて以前の老婆が煮花を持つて出て、それに煙草盆を勸め抔して、どうぞまア御一服なすッて……と云はれて、ハッと氣を替へた處へ、引續いて私が遇はうと思ッた婦人が出て來て、私の前に丁寧に一禮をしました。私も名告つて禮を返し、頭を擡げてよく〳〵其容貌を見ると年の頃三十一二、肥肉の方で、頰などはやゝともすると垂れさうで、此年まで昔日の愛嬌が名殘を現はして至極温和の氣が人を引く樣ですが、時々目蓋越しに人をジロ〳〵見る眼光のリヽしさ。年齡の割に額の皺の多いのは、若

年の時辛酸を經驗したものであらう。髮は束髮に結ッて、小さなゴム櫛の外、家に居る故か簪は何も挿して居ません。茶の綾綸子の被布を着てゐる樣子、一見女敎師の風を具へて居ました。私は初對面の口誼が濟んでから、種々女學に關係した質問を試みましたところ、以前朋友から聞いて居た想像の程度を越えて、實際もッと氣さくで、言葉なども明瞭にづん〴〵私の疑問に答へてくれました。私は實に預想外でした、女子と小人は養ひ難しで、女敎師抔といふものは、何となく可厭に見識ぶつて、人の云ふ事なぞは鼻頭であしらふものと思ひきッて居た處、此有樣に愉快を心の底から非常に感じて、なほ色々質問を續けました。婦人も亦私の熱心を頼もしく思ッたか、腹藏なく今迄自身が前後七年間婦人の敎育に從事した經驗を詳しく述べてくれて、果ては、さういふ事なら明日妾が學校へ參りました時、規則書と兼て幹事局に具へつけてある統計表とを借りて來て上げませうとまで親切に私に約束してくれました。私も其好意を喜んで、それならどうかさやう願ひます、いづれ兩三日中にまた參上りますからと、始て來て餘り長居は惡るからうと辭して歸らうとすると、マアいゝぢやアございませんか、幸ひ今日は暇てすから寛くり話してゐらッしやいまし、とお世辭かは知れませんが愛想の好い所は、成程多數の人々に交際し、多數の女子を敎育するほどの人は違ッたものと、何時になく感心の度を高めて考へてゐたが、初めて來たのだからさう長くは居られまいと無理に暇乞をして、以前の入口へ來懸りながら障子の開いて居た隙から見ると、次の間の長火鉢の前に、十七八の束髮の婦人が毛糸の編物をして居ましたが、今

私の歸るのを見て思はず編物の手を停めて上方を向いた途端、不圖私と顏を見合せたが、頭を下げる暇がない、只一寸目禮の眞似をしたばかり、膝を廊下に附ける暇もなく、見送ッてくれた以前の婦人と老婆の兩人に一禮して其日ハ歸途に就きました。

それから二三日經つて、彼約束もあるから午後四時頃また其家を尋ねました、幸ひ彼婦人は今學校から戻つたばかりといふ處と見えて、次の間の隅にはヒダの澤山とれた黑い洋服が脫ぎ棄てゝありましたかの婦人は例の客間へ私を通して、茶菓を勸め杯して以前に倍して欵待してくれました後、先日約束した規則書と統計表の机の上にあッたのを取て私に渡して、種々の質問に答へてくれた末、我國當時の女子の弊風を談じて其矯正の方法抔を物語りました。私も女學に關係しては聊か持論が無くもありませんから、議論といふ程角立ちはしませんが負けぬ氣になッて種々の難問を試みたが、了得かの婦人は多年の經驗があるから、澁滯なく答辨を與へました。談益佳境に入つて思はず二時間も過ぎましたから、近日を約して別れやうとすると、オヤさうでございますか、もうお歸りですか、そんなら又どうぞごゆツくりお話に入らつしやいましと挨拶をして、急に思ひ出したか、妾の妹が此間から英語を習ひたいと申して……二三年前まではハ少しは……リードルの一二冊も讀みましたが、久しく廢めて居りましたからもうみんな忘れて仕舞ましたらう、まるで新らしく始めるのも同し事でせう。始めるに就きましてはめッたな私立學校へは遣る譯には參りません、いろ〳〵いやな噂抔もちらほらございますから……誰方か貴

郎のお友達の中で、若しお心當りでもございませんかねと？　尋ねましたから、私も一寸さういふ心當りもありませんでしたから、さうです別段私の朋友に……私でよろしくば幸ひ此頃は學校の課業もそんなに忙しくはありませんから……」どうかさう願れると妾の方の都合は大層……願つたり叶ッたりです……がまだ其當人の妹を御紹介もいたしませんでこんな事を願ッて……オホヽヽヽ（少し聲を張上げ）アノお〇や一寸と、云はれて、次の間から出て來て私の前に丁寧に禮儀をしたのは、此前歸る時ちらと見た婦人でした、これは妾の妹で……どうか此後ともお心易く……さうでございますか、どうぞ私こそ末永く御交際を……又此度は突然上りましてとんだ御面倒な事をれ姉樣に願ひまして……云ッたが彼の妹は只少し笑を含だばかり、何とも言葉を返しません。私ハ又續けさまに、何處の學校へいらッしやいます？

問ひ懸けると妹の答を待たずに姉が、ヱ本郷の音樂學校へ參ります。之を聞いて私ハ心の中で、ハヽア偖ては此部屋の隅にある洋琴も此娘が彈くのかと思ふと、忽ちそこに何んとなく高尙な愛念が浮で來た。前にも云ッた通り私は性來非常に音樂が好きだから、其好きな音樂を好くものは其ものをまた好くのは人情です。オヤさうですか、もう餘程長くいらつしやるのでか。姉は答へた、ヱヽ去年漸く卒業致しまして只今は敎授に參ります。オヤさうでございますか……私も音樂が好きで、殊に西洋の音樂はどうしても又日本のとは違ッて進歩して居るやうに思ひます。此一語を聞いてかの妹はどう感じたもの

か。莞爾と笑つて私の顏を愛らしい眸でジロリと見ましたが、私が見返へす……それまでに、婦人は俯視いた。何故俯視いたのだらう？　羞かしいのか？　現今此婦人と私との親愛は、決して此何となく羞かしい時には想像せられなかつたらう、せられなかッたに違ひない。

第　二

私の英語と彼婦人の音樂と交換する事が愈決定つて、そんなら明日學校の歸途に貴郎のお宅へ伺ひませうとまでになッた。さて其日になッて私の學校は午後二時の退出、彼婦人のは三時だから、そんなに急がなくッてもいゝのだが、どういふものか此日に限ッて午後の二時が待遠しい樣な感じがして、一時からある源氏物語の講義の時間になると、博士の講義が昨日迄の樣に、身に染みて面白く感じないやうになッた。もう二時の鐘が鳴りさうなもの、鳥渡ポッケットから時計を出して、もう僅十分だ。さて其十分の長さ！　此十分間に幾度時計を見たのやら？　二時の鐘が鳴ると一番に敎場を飛び出して直く本郷通へ出た。何時なら繪草紙屋の店前に何か新板物でも出たかと立寄るのだが、此日はそれ處か、足を早めて肩で風を起す程急いで家へ歸ッて來た、歸ッて時計を見るとまだ二時十七分、存外早かッた。まだ三時には四十分餘もあり、三時の引けだから、女の事、いくら車に乘ッて急いでも二十分位はかゝるだらう、何もこんなに急がずともの事、まだ鳥渡一時間ゝある、先づ洋服でも脫いで着替でもしやうと自分の書齋へ這入ッた。着物を替へて下婢が當時の樣に持ッて來てくれた茶を一息に飲み干し、昨日

到來ッた風月堂のカステーラを二片口へ入れた後で、又時計を見るとまだ二時半、さて其後の待遠しさ！　こんな事なら途中をグツ／＼して來て、私が歸ッて直ぐ五分もたゝない内に彼婦人が來る樣な手筈にすればかういふ事はなかッたらうに……人を待ッ程苦しい事ハ無い、どうして此三十分間を費やさう？　今朝出る時讀み殘した新聞でも讀まうか、オイ政、今日の讀賣新聞を持ッて來てくれ、ヘイと下婢が持ッて來てくれた新聞を取ッて讀みかけたが、どうも氣が何んとなく浮き／＼して平常の樣に雜報も面白くないと思ふと、一度讀だ處をまた讀だり、其内に新聞の面に薄霧でもかゝッた樣に、妙に活字がボンヤリして來た。エヽイッ　新聞は晩の事としやう、それより庭でも歩行いて來やう……まだ日が入らないから暑くていけない、サテどうしたらよからう？　どういふ風に時間を過さう？　と立ッたり居たり、それは傍目で可笑しい樣にマゴ／＼して居る内に嬉しや三時の鐘、チン／＼／＼。〆めたッ　もう少うしだと思ふと尚更待遠しい。時間が近づく程待遠しさが增して來た。門前を軋る車の音が氣になツてならない、こんどこそ……アノ車の音がさうに違ひない、慥に私の家の門に這入ッたと思ふと、チヨッ音が遠くなッた、エヽ畜生メ。ならう事なら彼婦人の來るまで、彼婦人の車の外は暫く門前の往來を止めたかッたと思ッた位に、馬鹿げた我儘の願望まで起ッた。

其内に漸く彼婦人の車が私の門前に止ッた。彼婦人も今日始めて私の家へ來たのだから、なんだか極惡る想にして居た。下婢の知らせも待たずに私が玄關まで出迎へて、サアよくいらッしやいました、と

辭義をしてやがて私の書齋へ通した、座が定ッて、大層早うございましたネ。實は心中では、いやに遲かッたのネ、いくら待ッたか知れません、と云ひたかたッが……彼婦人は私の言葉を心にも無い世辭とは思はないから、丁寧に挨拶して、なァーに早くもございません、今日はいつもより少々學校の引けが遲うございました、云はれて私の心の中で、成程私の待遠しかッたのも無理はないと思ッた。其內に下婢が茶菓を持ッて來て彼婦人に勸めた。下婢は妙に私の顏と彼婦人の顏とを交る〴〵見くらべて居た。私は又早く行ッてくれゝばいゝのに、と思ふのに、なにやかや部屋を去りともない樣に見えたとは、矢張私の邪推であッたかも知れない。暫く學校の談話抔して後、始めませうと彼婦人が持ッて來たナショナルの第二讀本を、一時間餘もかゝッてやッと一章敎へた。全體私は非常の性急だから、人に物を敎へる樣なそんな面倒な事は決して出來ない。人の敎へて居るのを見てさえぢれッたくなる程の短氣だッたが、彼婦人にリードルを敎へる時だけは、私の性質が……人が生れ替ッた樣に、至極氣の長い丁寧な人になッた。同じ處を幾度も〳〵繰返し〳〵敎へたが、少しもアゝ面倒だと云ふ感じが起らなかッた、否ひつッこひ程丁寧に敎へた。さて英學も濟んだから、茶を一杯飮んで、こんどは私の音樂の稽古に取りかゝッた。彼婦人は兼て自分の脇に持ッて來て居た、黑塗の箱からバイオリンを取り出して調子を合はせて、それから姿勢や音調に附いて簡單に其規則を話してくれた、なか〳〵巧いもので、日頃學校で敎へつけてゐるから、私の英語の敎授法より巧い樣に思はれた。私は生れてから始めて此樂器を手に取

ッたのだから、腮でおさへて左の手で支へた鹽梅、煙草嫌のものが煙管を持ッたより餘程變に可笑しかッたかして、彼婦人も私が彈じやうとした時は少し顏に微笑を洩らした。それから唱歌集を私の前に開いて「霞か雲か」をやゝ一時間半もかゝッて敎へてくれた。至極丁寧に、其處は婦人だけに面倒を見て至極親切に、手を持ち添へて至極丁寧に敎へてくれた。私は又此奇妙な樂器が少し音がして來たから面白くッてたまらない、いつまでもかうやッて彈いて居たく、手の草臥るのも、何も彼も忘れて仕舞た。其内に日影がだん〳〵西に傾て書齋の內も薄暗くなッて來たから、彼婦人はそれなら今日は此處までに致しませう、跡は又明日と云はれて私は名殘惜い感じがしたが、それなら又明日と漸く此日の課業を終ッた。彼の婦人は私に唱歌集を渡して、よく此後を見てお置きなさい、明日はこれ〳〵を致しませうと親切に順を敎へてくれた。それなら今日はもうお暇をいたします。マアいゝじやアありませんか、と止めたが、又明日と彼婦人は一禮してパイオリンの箱を持ッて玄關へ出た。私は玄關まで送ッて行ッた、それなら又明日。はい今日位に參ります。目禮しながら門前に待たせておいた車に乘ッて歸ッた。私は又其車の後影を見送つて居た。やがて橫町を曲る時、彼婦人は鳥渡後方を向ひて思はず私と顏を見合せてニッコリ笑ッた。下婢のお政は突如金切聲で、今敎ッた口調で。若旦那樣、何をそんなにボンヤリして居らッしやいます。

第三

それからといふものは日曜土曜を除くの外、毎日彼婦人は私の家へ來た。一日〳〵と心易くなつて一週間も經つ内には餘程親しくなつて來た。偶には冗談を云ふまでに進んで來た。どうも昨日は貴女家へお歸りになッて復習はなかッたでせう、皆忘れてゐらつしやるぢやありませんかと私が叱る――叱るといッても笑て云ふのだから叱るといふ効力は皆無です。イヱ復習はないといふ譯ではありませんが、ツイ……人が參りましたから……。アハヽヽ矢張復習はないんぢアありませんか。兩人共笑ひの復習をするばかり。貴郎人の事をさうおッしやいますが、貴郎だッてよくお忘れなさいますぢアありませんか……此符號の時は中指でこゝん處をお押しなさるのですと、始終妾が申すのに何時でも……こんな見當違ひを……オホヽヽヽよく覺えて居らッしやい……もう今度からお教へ申しませんから……云ふ内も彼婦人が獨得の愛の光は彼が眉目の邊から始終私の顏面を照して居た。

どうした事か、一日例刻になッても彼婦人の車が見えない、私は又其前日彼婦人が例日の通り「又明日」と殘していッた言葉が慥に耳にあるから、どうして來ないのだらう？ 斷らずに來ない事はないが……と朋友が約束の時に來ないでさへ失望の不愉快を感ずるもの、況して親愛の彼婦人が來ないのだから氣を揉まない譯には行かない。今打ッたのヽ四時、もう來さうなもの……四時を打ッても來ない處を見ると何か今日は差支が出來たと見える、もう來ないと極まッたら明日の文章でも作ッておかう、併し何んとも……斷らずに來ないといふ事はないが……かういふ時は手紙をよこす筈だが、餘ッ程急用があ

ッたと見ゐる。エヽッ待ぼけといふものはいやなものだとつぶやいたが、また明日彼婦人が來た時にいやみでも云はうといふ考は浮ばなかッた。澁々書齋の机の前に行ッて、其上に載てあッた二三冊の洋籍を取除る機會に、一枚の端書が膝の前に落ちた。何氣なく差出人の名宛を見ると彼婦人の姓名、投函の時刻は其日の午前十時。なんだ此處にかういふ端書が來て居るのかと思ふと、何故政が私に渡さなかッたのかと、例の急性の刺激症が胸先へ一度に込み上げて來て、自分の脇にあッた喚鐘を續け樣にチヽヽヽチ——ン。何の急用かと馳せ附けた下婢のお政、ヘイ何御用ッ、私はまた其顏を見ると尚更怒氣が高まッて來て、其端書を前に投げ出し、此端書は何時來たい？　相手の下婢は一切無頓着で、ヘイ先程。無頓着が尚更私の怒氣を增さしめた。來たなら來たと何故私に渡さないのだッ。妾は又先程れ歸宅になッて貴郎がお机の前にいらッしやいましたから、とうにもう御覽の事と思ひました。平氣で微笑を洩らしてかう言ッた面惡さ！　私ハ拳骨の早蕨を下婢の橫面に與へたかッた位に其時は思ッたが、流石良心の制裁が働いたかして、それ程の事もしなかッた。其內に手に持ッて居た端書の裏を返して文言を讀み初める內に、妙！　漸々私の怒氣が緩んで來た。それならこれから氣を附けておくれ、と下婢に云ッたが我ながら、、い、い、それならの意味は解らなかッた。下婢ハ益々無頓着に笑ひながら納戶の方へ退いた。此端書は彼婦人が學校で認めたものと見ゐて殘らず鉛筆で書いてあッた、此端書が私によこした彼婦人の手書の一番初であッた。鉛筆だから文字の巧拙は少しも分らないが、文言は今日急に學校の用で歸りが

けに外へ廻るから貴郎の處へは行かれない、と至極眞率に認めてあッた――誰に書かせてもかうだらうが……私の贔負目からは此端書一枚を見ても、彼婦人の性質が至極淡泊で、そして虚飾がないといふ事が分るとまで思はれた。

其翌日何時もの時間は彼婦人が來たから、昨日の端書事件を話したら。さうでしたかそれはお氣の毒でございましたネ、お政さんこそとんだお相伴を受けましたネと果は笑ひに其局を結んだ。これから二週間ばかりの内に、夕方から散歩の序、彼婦人の家を尋ねて姉妹に遇ひ、種々談をして居る内に、彼妹の誠に無邪氣で天眞爛慢の美性を其擧動に現はして居る事をます〳〵是認する樣になッた。

ある夕暮、彼婦人が例時の通り課業を終ッて私の家を辭さうとした時、私も其處まで……番町まで用がありますから其處まで、ご一處に參りませう。さうですか、それならお供を致しませう、幸ひ今日はうちの車を返しましたから……と例のバイオリンを黑塗の箱に入れて片手に提げて彼婦人は出掛けた。」私は又彼婦人のリードルを入れた紫の包を持ッて一處に私の門を出ました。一町ばかりはどういふものか私も彼婦人の傍へさう寄らずに道路の兩側を……連れの樣でもあり、連の樣でもなさゝうに至極難かしく步行いて行きましたが、九段公園の大華表の邊から丸で――純然たる同伴の樣に一處に步行きました。其内に日は西山に隱れ、燃え立つ樣な眞紅の空が其際を色とッて居たが、それも間も無く薄鼠色に變ッて仕舞ッた。噴水の清々しさ、築山の巧みさも此日に限ッて一向私の目に充分――少しも映らな

かッた。その内此公園の裏門を出て眞ッ直に歩を進めた時分、私ハ貴女其箱は重うございませう、此包と替へてあげませう。彼婦人は始終笑ひを含んでから答へた。なあにそんなに重くはございません……。私は疊かけて、そんな事をおッしやらずにマア私に持たせて下さい、と眞一文字に切込んだ私が親切の一大刀、彼婦人は氣の毒とでも感じたか、なあに宜しうございます、妾が持ちますから、私は強ひて、マア私が持ッて上げませう。爭ッて居る内思はず私の右の手は彼婦人が左の手で持ッて居た箱の鐶の内にまで進んで行ッた。彼婦人の左の手と私の右の手とか互に此狹い鐶の内で此黒塗の箱を取り合ッた。此瞬間！　兩人の電話線が眞鍮の鐶を通過して果して如何なる談話を兩人の心臟へ通じたらう？　マア私が……イヽヱ妾が……と二三度爭ッたが、とう〳〵私ハ彼婦人から此箱を受取る程の勇氣がなかッた、彼婦人は依然其箱を持ッて歩行いて往ました。ヱヽ人の親切を無にして……と此時ばかり、少し憎らしいと初めて私も思ッた、それから行々學校の事抔話しながら、とう〳〵其私が訪ねやうとした家の門前まで來ました。彼婦人は、貴郎餘程長く御話でもございますの？　イヽヱ直ぐ用ハ濟みます。それなら妾は此處でお待ち申して居りますから歸りに妾と御一處に家へいらッしやいな……又琴とバイオリンを合して見ますから……。さうですかそれなら此處に待つて居て下さい直ぐ來ますから。早く來て下さい……と私一人門へ這入ッて玄關で、おたの申します。やがて取次が出て早速主人へ通じると主人が玄關まで出て來て、マアよくサアどうぞ……。今日はチト急ぎますから、こちらで失禮を……と云

ッたが彼主人は中々きゝません。マア……そこではお話が出來ません、どうか此方へ……。イヽヱ甚だ失禮ですが……再三云ッたが交際に長けた此家の主個はとう〳〵私を客間まで上げて仕舞ました。私は又表に人が待ッて居ますからとも云へず。客間へ通ッたものゝ表に居る彼婦人が氣になッて、ろく〳〵用談も出來ません。主人はそんな事は一向知る筈がないから。サアマアお茶を……コレ……何やお菓子……を抔と勸めてくれたが、私の心では、どうして菓子處ですか……早く用談を濟して此處を辭さうとしても、主人はマアいゝぢやアありませんか、珍らしくお出でしたからゆつくりお話しなさい、幸ひ今夜は私も暇ですから……。かう云はれると、貴君は暇かも知れませんが私は……とも云へず、もぢ〳〵して居る内に餘程の時間も經ッた樣子。嘸表で待ちくたびれて居るだらうとやう〳〵の働で此處を辛く切抜け、急いで表へ出て見ると彼婦人の影は見えず、南無……三、待ちきれずに歸ッたのかと、向ふの土手の方を見ると薄暗い處に書生らしい男二三人、此方を向ひて、彼奴の同伴か。

第四

談話をして居る內も氣が氣でなく、心は跳つて門外に待つて居る人に乘り移つて千思万考、やう〳〵の事で其處を切抜け、やれ嬉しやと始めは下駄を引きずる樣に、終りは駈け出す樣にして、とつかは門へ出て見ると、なつかしいその人の影は見えず、仕まつた、さては待ちくたびれて、否待兼ねて獨で歸ッたものと見える、まださう遠くは行くまい、急いだら途中で追附くだらうと何氣なく向方を透して見

ると腕まくりの壯士まがひの書生連が此方を向いて憎さげな言葉、嘲ける樣に云ッた「彼奴の連か」が氣になッて堪へきれず。日も漸く暮れ初めて今は人の影もよくは見えず、うそ淋しい此土堤通り、人にでもまた何んとかからかはれはしまひか、首尾よく家へ歸ッて居てくれゝばいゝが……なアにそれ程遠方ではなし、氣にかけるには及ばないが、其處がそれ妙なもの！　いやに氣にかゝッてたまらない、宙を飛ぶ樣にして番町の彼婦人の家へ行ッた、突然に格子戶を開けて挨拶もせず、兼て知て居る彼婦人の部屋へ行かうと椽側で出合がしら、例の老婆が、おやッ、よく……。まだ云ひきらぬ內に私れから問ひかけた。アノれ〇さんはれ歸り？　イヽエまだ……。あッ！　まだ歸らぬ……れやッ……、胸は一時にさわだッて動氣が烈しくなッて來ました。いくら男の足が早いッて――いくら女の足が遲いッて、もうとうに歸ッて居なければならない筈、それにまだ……こりア變だ、何か途中で……變ッた事でも……と思ふとさア尚々氣掛りでならない。心の憂は顏へも現はれたか、老婆はランプの光で私の顏を透して不審さうに、貴郞お孃樣にお遇ひになッたの？　問はれて私は一トつ息を內へ引いて、い、今其處でお別れ申したばかり……山本さんの處で私一人內へ這入て、お〇さんは門の前で待つてゐらしッたが、あんまり私が長話をして居たもんだから、とう〳〵待ちきれずに先へお歸りになッたのか……私が門へ出て來た時はもうゐらッしやらないから、私はすぐに跡から……もうとうにお歸りになつた事と思つて……。老婆は少し驚いた顏附で、おやッ、貴郞より先へお歸りになッたの、家のれ孃樣の方が……？　エヽも

うとうに歸ッてゐらッしやらなければなさらないのに……氣遣ふといふ念慮が起ッて來て、何故か私は堪へられなくなッて來ると、あア濟まない、假令少の間でも待たせて——待ちくたびれさせて、難かしくいふと友情に背いてあア濟まないといふ感想も續いて起つて來た。私が立ちながら腕を組んで首筋を垂れて考へて居るのを見て、老婆ハ氣の毒とでも思つたか少し微笑を含んで、お孃樣はお足が遲いから……併しもう直くお歸りになりませう、と慰めてくれた、が私はどういふものか妙に氣になッてならないから其處におちついて据ッて居る事が出來ず、立つたり居たりどぎまぎして居るのを見て老婆はます〳〵氣の毒と思ッたと見え、そんなに貴郎のやうに御心配なさる事もございません、もう直ぐお歸りになりますとも(自分で決めたやうな挨拶)まア其處へ休んでゐらッしやいまし、只今お茶でも差上げますから。云はれたがなか〳〵それ處ではない、決して茶を飲みたいとは思はなかッた。鳥渡其處まで出掛て探して來やうか……併し若し途中で行違ひにでもなると折角の親切も……と其人の姿——私には非常に可愛く見えた、その人の姿を見ぬ内は心の靜まる事はどうしても出來なかッた。私と老婆との對話を聞いて隣室に何か書き物をして居た姉は、此時漸く私の居た部屋へ出て來て、どうしました妹は？　なアーに途中ではくれて……もうとつくに歸ッてゐらッしやると思ひましたが……待ちくたびれたと見ゑて……。何んだか不規則極まるとんちんかんな私の挨拶、既に概畧は襖越に聞て知ッて居る姉も少しハ氣掛りになつたと見えて、それもみんな私があんまり氣を揉むので、骨肉の姉へ心配が及ぼしたので氣遣ハしげ

に、何をぐず〳〵して居るのですか早く歸ッて參ればいゝのに……ト少し首を傾けてから云ッた。私は又それから鳥渡其處まで私が見に參りませう？　姉は微笑を含んで、なアーにもう歸りませう……途中で行違ひにでもなるといけません、ト云ッて居る內に門前にぽッくりの音が聞えた、それが段々近くなつて來た、兼て聞き覺えの彼婦人の足音――少し肩の處を振りながら早足で步行くのが彼婦人の癖であつたから、足音までこんな細かい事まで覺えてしまふとは、私も彼婦人の所爲に附ては餘程綿密に注意して居たものと見えた。やれ嬉しやと私が急に玄關の方へ行かうとする途たん、出合がしらに彼婦人は部屋へ這入つて來たのと顏を見合せると……嘸待くたびれさせて怒つて居るだらうと思ひの外、そんな事には無頓着で例の微笑を洩らしながら、貴郎大變にお早くつてねエ。云はれて私は、貴女大變にお遲くつてねエ。我ながらをかしな挨拶、一方が早けりやこそ一方が遲い、知れきつた事、若し其時に氣が附いて居たなら嘸可笑しかつたらうが、云つた當人の私にはそんな事は夢中であつたと見えた。老婆はホヽと笑ひながら、お孃樣何處か途中でお寄路でもなすッたの？　かう問ひかけたのを、いゝえと彼婦人は無造作に答へた。それにしては大變お遲うございましたネ。老婆は重ねてかう問ひかけた、なアーに途中でいやアな書生見た樣なものが居ていろんな事を云つてからかつたから、態と廻り道をして來たのだよ。云はれて私の心の中では私さへ一處に脇に居たなら、そんな奴に指でもさゝせやアしないものを……、そりやア嘸こはかつたらうと氣の毒といふ心はます〳〵深くなつて來て、ツイ止められたも

んですから……直ぐ歸らうと思つたんですが先方で歸さないんですもの……。今更私の辯解も可笑なものであつた。姉は此時言葉を出して、何故早く歸つてこないのだい？　だつてさう早くは歩行ませんもの……少し甘へたる樣な口調も混つて居た。老婆は脇から仲裁顏で、お孃樣どんなに〇〇さんがお案じなすつたか知れやアしませんよ。云はれて私が心の底から彼女を氣遣つた事を姉も此老婆も充分知つて居たから、無頓着の妹もそれ程までに鳥渡の間でもさう妾の身を案じてくれるかと、思へば嬉しいといふ心が起つたが、どうとも云へぬ笑を顏に現はして、れやさうでしたか、とヂロリと私の顏を見詰めた其時程、今迄に嬉しさうな彼婦人の笑顏は見なかつた程であつた。これといふのも心から彼婦人を愛する感化力の効果とはいへ、老婆の仲裁も大に力を添へたに違ひない、さう思ふと心の中では手を合はして私はかう云ひたかつた、實に……婆アや、ほんとに有がとうよ。

第五

此處は見上げるやうないかめしい二階造の西洋館、大きな鐵門の脇から入口の前へ釣した幾百の提灯、闇黒に百園の紅玉を點綴して、既に外來の賓客を迎へ顏であッた。殊に室內所々にきらめく電氣燈、巧に晝の世界を造ッて目も眩むばかり、今夜招待に應じた貴女が胸間の金剛石と、紳士が黒綾の燕尾服とに對映して、熟視する事もできない程華麗であッた。若し目に見て華麗、耳に聞て優美なのが、果して極樂といふのなら、今夜此の處は正にソノ極樂界を形造ッたに違ひない、私も彼婦人の招待で此會に列

せんものと、式場の玄關まで來て、切符を内隱しから取り出して、テーブルの脇に扣えて居た接待員に渡すのを、其男子は一見して慇懃に貴郎の御姓名は？　……まだ私が私の姓名を名のらぬ内、其接待員の傍に立ッて居た、最一人の立派な紳士が、急に言葉を發して、よろしうございます（切符の隅に書き入れてある彼婦人の姓名を見て）……貴郎は○○さんでせう……と云ひ放つて微笑を洩らした。私は又どうして此紳士が私の姓名を知つて居るのか、若しや何處ぞで遇つた事でも……と考へたが全で知らず。切符は決して彼婦人に一枚しか來たものではない、何故といへば彼婦人が親切に此切符を私に郵送してくれた時、妾の友人に一枚上げて殘りの一枚を……と附記してあつた處を見ると、慥に二枚だといふ事が分る、よし一枚にした處が、彼婦人の姓名を見て、直に私の姓名を呼んだのは大に不思議といつてもよからう、併しさうかといつて、どういふ譯でと其場で尋ねる事も出來ず、又其時はそれ程までに强て聞かうとまで變だとは思はなかつたに違ひない。私は又室内に入ると、其私の姓名を呼んだ紳士は、慇懃に御帽子はこちらへと挨拶して、私が手渡した帽子にチャンと番號まで附けてくれた上、其合札を渡して、さアどうぞ此方へと、先きに立つて階子を昇つて其式場の入口まで私を案内してくれた。私は又其應接の至極丁寧なのを嬉しく思つて、流石はかういふ會の接待員に撰ばれるだけの事はあると思つて、輕く首を下げて其厚意を謝した。彼紳士は答禮して軈て階子を二三段も下りる處へ、下から二名連の貴婦人が上ッて來た、私はこれを見て、私の樣に必ず案内するだらう、私にも至極丁寧であッたから、

貴婦人には尙更慇懃に接待するだらうと思ッて居る內に、彼紳士は全で此人々の來たのを知らないやうに、式場の入口迄の案內はおろか、挨拶もせず、ヅン／＼下へ降りて玄關の元居た方へ行ッて仕舞ッた。この有樣を目擊した私は、ます／＼心の中に不審を重ねた。其內に私は恰度いゝ席が明いて居たから、それに腰をかけた、程無く演臺の方で鈴の音がすると、番組にある通りの演習が始まッた。兼て音樂の趣味は多少解して居る私、その面白さに堪へ兼ねて、終には靴の先で床下をドン／＼音させて拍子を取ッた程聞惚れて居た。其夢中の間でも何處に彼婦人が來て居るかと探す念慮は私の心を離れなかッた。其內に第一部の演習が終ッて、十五分の休憩の間も、私は始終キョロ／＼して、彼婦人は來て居る筈、何處に居るかと蔭ながら探したが、群集の中でとう／＼知れなかッた。第二部演習の始めになると、彼婦人の薰陶を受けて此度漸く首尾よく卒業した吉本安子と岸川芳子の兩人が、今夜を曠れの洋琴の連彈であッた。其洋琴の脇に茜色の洋服を着て立ッて居たのは、誰あらう? 紛れもない……先程から、此處に來てから始終探して居た彼婦人であッた。今迄永らく此女子等を敎授した骨折が見ゑて今日卒業の式に、此女子等の練習した技藝を諸人に披露するのだと思ふから、多少嬉しいといふ處はあるか、又心配な處もあッて、自分で彈ずるより寧ろ氣が揉めるといふ處もあるかして、彼婦人は少し首うなだれて・彼女子等が前にある樂譜の帳面を熟視して居た。何故か私も此演習の中は氣掛りで堪へられなかッた、蔭ながら氣を揉んで居た。やがて此演習が濟むと滿場崩るゝばかりの拍手喝采に。私は嬉しくて

堪へきれず、私も共に手を拍つて及ばずながら其幾分の響を助けやうと思ッたが、どう云ふものかイザとなると、手は兩ッ合ッたが音はしなかッた、が此時の喝采は外の時より一層場中に響き渡ッたやうに思はれた。それも其筈これが今夜十七組の內で一番面白かッたから……それも私にばかりはさう思へたのやら、考へれバ人間は妙なものと今更のやうに悟ッたのも、抑も悟るだけが既に妙だッたかも知れません。其內に此演習も全く終局を告げ、私も群集に混ッて出口まで來て、其處に待たせておいた車夫を探す內、後の方から突然私の姓名を呼ぶ者があるから振向くと、兼て知り合ひの或貴女で、其脇に手を連ねて立ッて居たのは彼婦人であッた。其貴女は○○さんと高く私の名を呼んで此間は失禮、途中で……車の上でツイ御挨拶もいたしませんで、私はから續けさまに云はれて、始めて此十日ばかり以前、途中で此貴女に行遇ッた事を思ひ起して首肯くのみ、此貴女がよく私に遇ッた事を忘れなかッた、中々交際には長けてゐる事を覺ッた。其內にも彼婦人は只鳥渡目禮したばかり、隻語を發しません。私は又今夜招待された禮を彼婦人に云はうと思はないでもなかッたが、ツイ其時はどういふものか云ひ出し切れなかッた。否云ひ出す塲合を得なかッた。只室內の燈光が遠く此處まで窓越しに薄く彼婦人の半面を照らして居た。これは笆垣に寄りかゝッた萩の花、彼れは花檀に咲き誇ッた牡丹花、何れを愛し何れを好む？彼婦人は此貴女に對して、一層私の心の中には床しい愛らしいといふ感想を浮ばしめた。歸途　私が公園の欝葱たる樹木闇を行く時、私の乘ッて居た車は、果して如何なる夢を運むだらう？

これから一年ばかりは、私もいろ〳〵忙がしい事があッて、それやこれやでツイ〳〵彼婦人に遇はなかッたが、私は彼婦人はどうしたらう？　今頃は何をして居るだらう？　といふ疑問は始終私の胸を往來して居た。遇はなければ遇はないで、それだけ想像を逞うして種々の見當違ひの推測を描いて居た。朋友が來て偶然彼婦人の性情を品評する時にも、私は斷して彼婦人は何處がいゝともいはぬかはり、何處が惡いともいはない、とまでは云ひ張ッたに違ひなかッた。彼婦人も私が自分に親切だといふ事は始終思ッて居たと見えて、一二度彼婦人がさう云ッた事を彼婦人の朋友から聞いた時は、私も流石嬉しくないとは思はなかッた。

或夕暮私はあまり頭痛が激しく堪へ兼たから、新鮮の空氣を呼吸して之れを治しかた〴〵妙想を練らうと思ッて、上野の公園に行く途中、湯島の切通坂を通る時、向ふから車に乘ッて來た婦人、淺黄縮緬の紋附を着て白襟の處、いづれ極ッた場所へでも行く樣なけば〳〵しい服裝の婦人が、行違ひさま私に目禮した、誰かと見ると一年餘も行遇はなかッた彼婦人、おやと思ふと、直ぐ其先に黒塗の一人乘の立派な車に乘つた一紳士が振り向きさま、ヂッと私の顏を睨んだ、おや何處でか見たやうな……？　と思ふと、先年音樂會の時、私を非常に欵待してくれたソノ紳士のやうであつた。其紳士のこはい顏と、其時の彼婦人の微笑を帶びた顏、此二人の顏は、いまだに私の胸に寫ッて居る……。

（完）

◉羽抜鳥

（一）

花の雲織り做せる櫻樹は、何時しか梢の春を、緑深き青葉に讓りて、朧月夜の影弱く、立ち罩むる薄霞烟に似て、人を鳴咽ばしめんばかり、人里離れし境内の晝猶寂しきに、詣づる人もなつの夜の、更くるに早き初夜の鐘、鏘々と響き渡りて、遠近に悄乎建てる常夜燈も、油既に盡きなんとしてほの闇く、石段を踏み鳴らす跫音絶えて、闇黒に嘯ぶく梟の、物凄くも亦哀れなり。

見上る如き階段を、呼吸急く登り來る女性、頸を垂れて俯向くさま、深く物思ふ風情にて來蒐りしが、如何したりけん、あいたッと一と聲高く叫びも敢えず、俯伏に倒れたるが、霎時は起きも得上らず、軈て漸く傍の石段に手を支えて、身を起しさま空打眺め、また何んだか降りさうになつて來た。吐息と共に語り出すやう、あんまり急いたんで、鼻緒を斷つたには困ッちまふ。打倒れし時痛所や覺ねけん、足の爪先を擦り居りしが、指先を闇に透し見て深く驚けるか、思はず身を後に退きて、おやッ、躓いた時に負傷でもしたのか、血が流れる、弱り目に祟り目とやら、怪我迄するとは、とハヤ言語も濕り勝、餘所に知られぬ一時雨、露重げなる風情なり。

袂より紙片取り出して傷口を結ひ、序に鼻緒も鳥渡着て行かうか、いや〳〵そんな事をして居る間に、

万一お歸りになつた跡へでも戻らうもんなら、それこそ何んな目に遇ふか知れやアしない、二度三度頷きつ、片方の下駄脱ぎ捨て、鼻緒の斷れたると諸共に、右手に提げたるまゝ、氷の如く冷えたる石段を物ともせず、夜露に衣裙を濡らしつゝ、跣足のまゝ尙も階段を登り行く途すがら、幾度か空打眺めて獨り言、ほんとに妾程此世の中に不幸なものはありやアしない、產み落ちると其儘里に遣られ、其當座こそ可愛がられもしたれ、行ッてから丸一年經つか經たぬ內、先方に小兒が出來てからは、妾は其方退け、冬單衣一枚着せられた事もあつたが、それでも七年といふ長の星霜、小供心にもヂッと其處に辛棒して居る內に、父親樣はお沒去りなされ、母親樣は……妾の口から申し上るのも可笑なものだが、人の評判には、何んでも外の方と遠方へお出でなすつたとの事、今更愚痴を列べても仕方がありやアしあがい、其內に程無く里の兩親も、同じやうにこの世を去つてからは、嚴然した親類もない妾の身の上、どうにもかうにも詮方盡きて、それからそれへと流れ渡り、憂艱難を仕盡した揚句、十何年振でやう漸と、生れ故鄕の東京へ戻つて來て、彼の藤本さんのお世話で、今の處へ婚禮てから、緣あればこそ二人の子迄設けたに、餘りと云へば良人の不行跡、おふみ樣もまたおふみ樣、妾と云ふ歷然とした女房があるのを御存知でありながら、彼樣な大それた事をなすッては、第一お沒去になつた孝次郎樣のお位牌に對しても濟むまいに。舅姑樣も近頃は薄々お氣取にでもなつたのか、それといふのも全くお前の仕向が惡いからだ、夫の浮氣をするのは、女房の行屆かない故だと、それと無くちく／＼妾へ當て附けがましく被仰

るが。急に泣き聲になりて呼吸を内に引き、是迄妾が何一とつ良吉樣のお命令に背きでもした事があらうか、今日も亦宵から、鳥渡其處迄散歩にと、お他出なすつたが、必然例時の處へお出でなすつたに違ひあるまい、何も決して妾が兎や角、嫉妬を燒くといふ譯でハないが、彼のお光や良一はお可愛くハ無いのかしら。思ひ餘りて我にもあらず喞つ折しも、颯と吹き來る一陣の夜風に、鬢の毛二三本パラリと富士額に搖るを、搔き上ぐる力もないじやくり、口に啣えて多時悄然たり。

あゝ〳〵何程考へたつて仕方がありやアしない、只此上は少しも早く良人が本心に立返へるやう、氏神樣へお願ひ申すより外に仕やうは無い、今良吉樣が飛んだ不了簡でもお起しになッて、彼處のお家でも出ていらしつたら、それこそ舅姑樣を明日の日から誰がお養ひ申す事が出來やう、お年齢は寄ッて居らつしやるし、それに舅御樣は近頃御持病のお咳かお惡いと見えて、毎晩オチ〳〵とよくハ寐しなられない御樣子、此上餘計な御心配でもお掛け申しては、嫁の身の妾が濟むまいと、それで毎晩遲くなると、かうやつて少しの間を見て、此社へ參詣に來るが、妾の心ばかりでも、早くお目が覺めて下さればいゝが、と女子の身の泪脆く、登り切りたる石段より怨めしげに、神前の燈火を見上ぐる途端、闇を貫く杜鵑一聲、血を吐く思ひハ、啻に鳥のみかは。

（二）

時の移り行くも忘れ果てゝ、稍多時社前に額き、祈願を罩め居たるおはまは、松吹く風に襟搔き合せ、

軈て身を起して、傍に置ける下駄携へつ、舞樂堂を右に歸り行かんとせしが、此處へ來りし迄は、夜路の寂しさも怖さをも、心裡に浮む間隙なかりしが、此瞬間より遽に畏懼だちて、昔語に聞ける踏む足元にも、何物か臥し居らんなど思ひ附きては足も地に添はず、心も空に歩を早めて來蒐る行路に、何者とも知れぞ、烱々たる兩眼濶と見開きて、此方を眺みて直立ものあり。おはまは思はず愕然として我にもあらぞ足ハ進まず、如何はせんと躊躇しが、心を靜めて熟視れば、何事ぞ正体見せぬ、叢の中に立てる瓦斯燈の、柱は半ば朽ち果てつ、破れたる玻璃の星明に燦爛なりければ、おはまは僅に胸撫で下ろし、吐息と共につき出す鐘の音も物思ふ身には、如何に響くらん。

今夜は常時より餘程遲くなつたやうだが、若し妾の留守にお歸宅になりはしまいか、れ歸宅遊ばした時に、妾が家に見ねなかツたら、それこそ如何樣にお立腹になるだらう、夫でなくツても此頃の御樣子のれ變りになつた事は、妾が何かと云ふとつんけんなすつて、怖いお顏ばツかり。今朝も今朝とて、少し御飯の焚け方が遲いからツて、妾が折角常時の通り、お嗜好の伽羅蕗から梅醬まで整然と取揃へて、彼のお氣に入の葢物に入れて差上げたのに今朝は心持が惡くて飯は喰はないと、菅無い被仰りやう、それなら鷄卵でも茹て差上げませうかと伺つたら、そんな物が喰べられるもんかと、づん〳〵洋服をお着替なすつて、御出勤遊ばしたが、御洋服を召す時ゝも、平常の通り後方へ廻つて、襟飾を直して上げるのを、突然お引つたくりになつて、こんな箝めやうといふがあるもんか、これぢやア直ぐに外づれて仕

舞ふと、眦をお釣上げになつた其怖らしいお容貌といふものは、前の姿見に映つて、妾にもよく見えたが、今迄彼樣怖いお顔色をお見掛け申した事はなかつたに、これといふのも全く彼の……おふみ樣が附いて居らつしやるばツかりに。將來を思へば思ふほど、心細くなつて來て、妾は居ても立つても居られなくなる。彼の道ばかりは深くなればなるほど、迷ふもんに決つて居るから、若しや妾が彼のお家を出て行くやうにでもなつたら、良坊とお光はどんな目に遇ふだらうと、今からそれが案じられてならないのに、小供心にこんな事とは夢にも知らず、先刻も良坊が妾の側へ來て云ふ事に、母ちやんお父樣ははんとに可厭なれ父樣だよ、毎晩〳〵外へ出ていらつしやるから、坊も一處に連れて行つてれ呉と申し上げたら、父樣は僕を怖い目で睨めて、小供の行く處でないよと、ぢん〳〵出ていらしツたか、母ちやん小供の行けない處ッて何んな處、是非とも一處に連れていらつしやるやう、母ちやんからも父樣に願つてと、泣ながら私に強請だが、そんなら私の口から坊を一處にとは、何うしても申し上げられず、これが全然知らないのなら、さう申し上げるも出來やうが、存知て居ては妾の口かられ願ひ申す譯にも行かず、お父樣は何か御用がれわんなさるんだらうから、坊は温順くして待ち〳〵してお出で、御褒賞に母ちやんがお前の好きな寫し繪を買つて上げるからと、漸く瞞し賺したら、小供といふものは誠に罪の無いもので、泣き草臥れたと見えて、寫し繪も買つてやらない內に就眠でしまつたが、もう常時便道に起きる時分、早く戾つて遣りませう、おゝもう何事も考へまい〳〵。

嚙み附く如く犬の吠ゆるに、おはまは幾度か狹き胸を躍せて、漸く我が家の裏口に辿り着き、四隣を憚る小聲にて、さよや〳〵と音のふに、唯と答へて手燭片手に立ち出づる下女は、灯影におはまを透かし見て、手燭取り落すまでに打驚き、あら、ど、どうして奧樣はお跣で、とハヤ聲潤ませ、其お姿は。

（三）

先づ何より心頭に掛るは、夫が歸宅しか否やなり。お濱はお小夜の問に答もなさで、半バ開ける戸の隙より首差し延べて、いと氣遣しげに、旦那樣はお歸宅になつたかえ。問ふにお小夜は霎時言語も行詰りしが、はい、たッた今しがたお歸宅になりましたばかり。聞くと其まゝお濱が胸は、言語と共に忽ち躍りて、そんなら何んとか妾が居ないのを、尋ねて居らつしやりやアしなかつたかい。お小夜は主婦の心を痛めては、と思ひ返へして何氣なく、いゝゑ、何んとも。云へど語調の自然と萎れ行くを、強いて引き立たせ、奧樣、それよりかア早く御足をお濯ぎ遊ばしませ、お手桶にお湯を汲んで參じますから。何にお湯でなくつても、お水で澤山。いゝえお釜に未だお湯が殘つて居りませう。甲斐〳〵しく立働く小夜が親切に、お濱はまた泪なり。

土に塗れたる足を洗ふ時は、宛然鈴の音を聞て後、停車場へ馳せ附けたらん如き心地に等しく、兎つかは急ぎ洗ひ居たるが、濯ぎ終ると忽ち手元も緩みて、今更に時の過ぎ行くを待つものゝ如し。お濱は捗々しく奧へも行かで、首傾けてお小夜に打向ひ、小夜や旦那樣は何んな御樣子だつたね。問はれてお

小夜は氣も輕く、あのう……何んでございますよ、常時の樣に大變に醉つてゐらつしやいまして、さうか濱は居ないか、と一言被仰つたばかり、別段お立腹の御樣子も見えず、何處へともお尋ねなさるでも無く、今しがた妾がお茶を持つて參りました時は、れ六疊へ寐轉んで居らつしやいましたが、未た寐しなりはなさいますまいから、早く御挨拶をなすつてゐらつしやいませ、何に其樣にれ心遣ひ遊はします程の事はございません、御自分樣も深更までさんさ遊んでゐらつしッたからにれ、そんなにれ叱言を被仰る譯にも行きますまい。と心配させまじとする程、お濱は心を痛めけるにや、右手を帶の間へ差し入れたるまゝ、恨らめしげにお小夜を見詰めて、小夜やとたつた一言。

恁て此儘挨拶もなさで、臥戸に入る可もあらねば、れ濱は佶然心を定めて、夫の居間へ赴きしか、左右無くは入り兼ねて、襖の外へ立ち止り耳欹てゝ、室内の樣子を立聽たれど音も無ければ、襖の間より頸を差し入れて、洋燈の灯影に覗き身れば、前面向きて寐轉び居る夫の後ろ姿に、お濱は力を得て、思はず二歩三歩進み入りて、只今戻りました。

お濱の聲に良吉は臥したるまゝ、顏のみ此方に振り向けて、おゝ騷々しい、今頃迄何處を逍遙て居た。醉ひたる舌の縺れながらも嚴然問はれて、お濱は行き詰り、言語も無くて俯向けば、良吉れ蕩つく醉眼を見張りて、げえぷッ、折角好い心持に眠りかけたのを、起すといふがあるもんか、あゝ醉つた〳〵、醉ふと咽喉が喝くには困る。云ふにお濱は機會を得て、急ぎ庖厨より洋杯に水を盛り、盃の上に載せて、

良人の前へ差し出せば、良吉ハ一口飲み終ると、此樣な溫まつこい水が飲めると思ふか、と呟きつ手を延ばせば、盆上の洋杯は忽ち覆りて、時ならず四邊に水の溢れけり。

えゝ冷てえ、此樣な處に居られるもんか、と語調も憎々しく、夫の突如と立つて行く後姿を見て、お濱は得堪えず、わッと其場に泣き伏しぬ。

お濱は軈て僅に泪の顏を上げ、溫るいから溫るいで、冷たいのとさう被仰れば、井戸から直ぐに汲んでも差上げやうものを、何にも此樣にお覆しなさらなくつてもよかろうに、吁妾ハもう長くは此家には居られまい。暫し泣き崩れて正体なかりしが、心を取り直して臥戸に赴けば、夫は着の身着の儘、寐衣も着替へず、はや高鼾にて寐ねたる傍の布團に、兩兒が小さき枕を列べて、餘念なくすや／＼眠りたる顏を、お濱は蚊帳越しに透かし見て、假令どんな辛い事があつても、この兩兒が可愛と思ふなら、辛棒しなくつては、と思はず小聲に口走る折しも、父樣、母ちやんが惡いのなら妾が謝罪るから堪忍して……。お濱は思はず蚊帳の中へ半身を突き入れて、何んだねヱ、お光が又寐言を云つてと、泪の目に振り返れば、枕頭の有明も今宵は光り無し。

（四）

五月雨の空定めなき今日此頃、歇むかと見れば又も降り出す細雨瀟々、軒端を傳ふ雨垂の音も懶げに、家居も朽ちなん鬱陶しさ、心地死ぬべう覺ゆとは、實に此頃の天候をや云ふなる可し。

良人が出勤したる後、晝の御飯拵にはまだ間隙もあり、お光は幼稚園へ赴きたる留守、良一は今しも就眠たるばかり、奥の間には舅姑方で何か密々對話、疑ふ心には我が身の上を打語るにもやと思へど、其室へ參り合すとお兩方とも何か愴惶なさる御樣子、急にお對話をお止なさるやうにも見えて居堪れず、外に爲す事もなければ此間にと、お濱は戸棚より針箱取り出でゝ、良一が寢て居る四疊半の枕頭に、裁縫の店を打ち擴げぬ。

縫ひ直す衣服を見るに附けても、お濱は針持つ手の戰慄くまで想像に堪へずや、矢庭に縫ひ掛けたる反物を其處に投げ捨て、吐息を深く内に吸きて、吁この衣服を見ても、既往の事が忍ばれる、妾が此家へ嫁てから、まだ全一年も經たない内、彼のお光がお腹に居る頃であつたが、或る日曜、旦那樣が是から通りの越後屋へ連れて行つて下さると被仰るから、妾は又此樣な大きなお腹を致して居りますから、妾こそ些とも構ひませんが、良人が嘸極りがお惡りでございませうと申し上ると、何に構ふもんか、妊娠になればお腹の大きくなるのは當然だ、そんな事を云つて居ると、もう行く機會は無いよと被仰るから、妾も急に其氣になつて、極りの惡るいのも何もかも忘れて仕舞つて彼のお小夜に髮を撫で附けて貰ふ間も急遽に、駿河町へ車を飛ばして、夫は〳〵巨額こと、番頭さんが妾の目の前へ積み重ねた反物の内から、柄もよく持久も宜いのを選んで、買つて戴いたんだが、家を出る時も、彼のお小夜が玄關の處で妾の袂を捉えて云ふには、ほんとに奥樣ほどお幸福なお方は、此廣い世界にも尠うございますよ、何から

何までおあんなさる上にも、又かうやつて旦那樣に買つてお貰ひ遊ばすんですもの、この小夜を御覽遊ばせ、此年齡をして未だに五枚と纏つた衣服は持つて居りませんよ、と痛く羨ましがるから、何にしとお前、こんな大きなお腹をして、旦樣那と御一處に晝日中、往來の多い街道を通るのは、極りが惡るくツて顏から火が出るやうだよ、若し萬一途中で轉びでもしやうもんなら、何樣に恥がしいか知れやアしないよと、妾が云ふと、お小夜ハ猶の事圖に乘つて、鼻の先でせゝら笑ひ、若しも貴女樣がお轉なさいましたら、それこそ旦那樣が背負をなさいませう、と囃されて妾が返答に行詰ッた事も、未だによく記憶て居るが、責めて其頃の思召の十分一も、現今に殘つて居て下すつた事なら、妾も此樣な苦勞はしないでも濟まうに、變り易いは男心の常態とは云へ、餘り此頃のなされ方は、變り過ぎて居るやうだが、其頃勿体ない程妾によくして下すッたのを、此頃はおふみ樣にして上げて居らつしやるだらうかと考へ出すと、妾だつて好い心持はしないよ。と思ひ餘りて丸窓より、外の方を眺むる折しも、心地よげに軒端に舞ふ蝴蝶一羽、忽ち雨に打たれて、泥濘の内に陷りしが、暫時起き上がらんと悶ゆる内、片羽を水に取られて、漸く萎れ行く哀れさに、お濱はしみ〴〵身に染み渡りて、拭ふに餘る袖時雨、何時霽る可しとも思はれざりけり。

何時の間にか後方に來れるお小夜か、此時わつと泣き出せし聲に、お濱は驚きて振り向き、何んだねえお小夜までが泣いてからに、何にをそんなに泣く事があるのだえ。れ小夜は身を顫はせて、奧樣、妾

は口惜しうございます。云ふにお濱は手を擧げて制しながら、お小夜の業々しさ、何もそんなに口惜がる事があるものかねえ。云はれてお小夜はお濱の前へにぢり寄り、或る處から旦那樣と物部樣の奧樣との事を詳しく伺つて、妾は口惜くつて口惜くつて、奧樣まア斯うなんですッさ、呆れて仕舞ひますぢやアありませんか、と語り出す顚末は。

（五）

隈なく照らす玉兎れ、松が枝を疊の上に送りて、袂涼しき夕風は、漫に軒の風鈴に音づる。庭の築山月光を浴びて蒼白く、潺々と流るゝ泉水の、白銀を溶したらん如きに、樹々の黒く映つる光景、又なく風情深し。

一閑張の食卓を中央にして、八疊の座敷に對座したる、此家の主人と云へるは、年の頃三十路を二つ三つ越せしかと思はれ、色淺黒く額廣く、隆からぬ鼻厚き唇、頰鬚の延びやかなるも懊惱なり。堅縞鼠、、、ふらんねるの浴衣を着て、白縮緬の三尺を巾廣に、腰の邊りに捲き附けたり。

主人の向ひに坐を占めたる來客は、年齢も主人より五歳ばかりの弟にて、色飽くまで白く、鼻筋凛々しく整然と通り、人を見る目元よ、態とならぬ愛嬌ありて、鼻の下に品よき八字の髯を蓄へ、千筋お召の單衣の上に、黒絽三つ紋の羽織を着て、これも白縮緬の屁子帶を占めたるが、金鎖をだらし無く結下けたるのみ、主個と異れり。

今しも強ひらるゝ酒に、顔を薄紅に染めつ、尚もつがんとする主人が手を制へ、君もう僕は飲めんよ。主人は聲に應じて、まアさう云はずと、もう少しは宜からう、僕の酌で氣に入らずば妻につがせやう、彼女でも婦人の内だから、アハヽヽ、さアそんなに遠慮をせずと、もう一杯遣り給へ。と又他事も無く欵待に、妻のお文は傍より、右手に銚子を持ち、左手に襟搔き合せ、身躰を少し前方へ屈め、岸上樣一とつれ熱いのを如何でございます、些とも召し上りませんやうぢやアありませんか。岸上と呼ばれたる客は、漸く醉の廻り來りてや、少し言語を縺れさせて、何に、ど、どうしまして、先時から獨りで大變に戴きました、もう充分これはと（前にありし猪口を傍に遠ざけて）お預けに致しませうそれよりかア御飯を一杯戴きたうございます、何時も鳥渡お目に掛つて、直ぐお暇乞申す心算で上りますと、つひつひ長座を致しまして、お忙しい處を飛んだお手を取りまして濟みません。と挨拶するに、主人の妻は手を擧げて、あら岸上樣のお世辭の宜くつてゐらつしやること、もつとお構ひが出來ますと宜いんですが、御存じの通りの此處は誠に邊鄙で、碌な物はございませず、お構ひ申し上げたいにも、お構ひが出來ませんから、責めて御酒でも澤山召し上つて、まアさう被仰らずともう一杯、お厭でも妾がお酌を致しますから。强ひられて客は指先にて、綺麗に分けたる頭髮を亂して、どうも奥樣のやうにさう被仰られては、僕も戴かない譯には行きませんと（傍に遠ざけし猪口を、又己が前へ取り寄せて）そんなら其積りでもう一杯戴きませう。銚子を持ちたる妻女は、袖を口に當てゝ微笑を洩らし、オホヽヽヽ其積

りてが宜いぢやアございませんか、そんなら妾も其積りでお酌を致しませう。岸上は一口に飲み干したる猪口を主人に指して、物部君、僕は此間からさう思ふんだが、君の令閨は實に活潑で宜いが、僕の處のは不開化の上に何故か陰欝の性で、何が悲しいのか、朝から晩まで、引つ立たない容貌をして居るには困つちまうよ、何んでも人の妻たるべきものは、學才が無けりやアいけんよ、君の令閨は立派な學校を卒業したゞけあつて物が解つて、何事もてきぱきするから宜いが、其處へ行つては、僕の處のなどは、實に驚く可きもんだよ、女房も宜い亭主を持たんければ損だが、亭主も宜い女房を持たんければ、一生の損になるから、ねえ物部君、まア理窟ハさうじやアないか。生醉の本性、徐々管を巻き始めぬ。

お文は岸上に打向ひ、貴君はさう奥様の事を悪く被仰いますが、何から何までお出來なさる上に、誠にお音無しく居らつしやつて、何一とつ點の打ち處の無いお方を、やれ不開化だの、てきぱきしないのなど丶被仰ると、それこそ今に罰が當りますよ。岸上は眼を圓るく見張りて、おや奥様が僕の嬶をお褒め下すつて、其積りで一とつ奥様に差し上げませう。おや可厭だ、飛んだ處で讐敵を打たれましたね。と岸上が指せる猪口を受取りたるお文は、飲る口と見えて、苦も無く飲み干して岸上へ返す内、主人の幸次郎は何時しか其處へ醉ひ倒れて高鼾。此方の男女ハ尙も酒杯の獻酬に、夜の更くるをも知らざりけり。

（六）

倘も觴を廻らすうち、夜の痛く更けたるに驚かされて、客は暇乞して立たんとするを、お文は强て押し止め、まアいゝぢやアございませんか、もうお一杯召し上つていらつしやいまし。と傍の銚子を取り揚げて、客の猪口につぎしが、おやこれは失禮、只今お熱いのをと云ふに。客は首を左右に打振りて、いえ、もう私は充分。まアさう仰被ずと。と云ひさま矢庭に手を打鳴らせしに、聲に應じて出で來りし小女に、お文は目配して燗の熱さをと吩咐くれば、小女は寢惚れたる目の縁を擦りながら、呆れ顔して捗捗しく返事もせず立ち去りしが、程無く持ち運びたる德利を見て、お文は小女の方を見返り、駒や其處へお銚子を置いて行つて宜いから、お前はもうお就眠よ。小女は主人の言葉に、得たりと打喜びて、此塲を立ち去りし後は、酒杯の一層繁く巡りたるぞ、なか〳〵に不思議なる。

客はかたへに打ち臥したる主人を見返へりて、奥様、物部君を何時までもかうやつて置いては、風邪でも引くといけますまいから、どうか私に構はずと、早くお寐かしなさい。お文は柳眉を少し逆立てゝ、何に些とも構ひませんよ、何時でも御酒を戴くとかうなんでございます、此まゝ打擲て置いて宜ろしうございますとも。醉ひたる客は聲音を高めて、これは怪しからん、放擲て置いていゝなんて、風邪でもお引きになつたら奥樣はどうなさるお積り。と常時になく言語に力を入れて佶ばり云はれ、お文は暫らく下を向き考へるやうなりしが、そんなら鳥渡失禮して寢褥せて參りますから、貴君はまアご寛り。と挨拶しつゝ手を打ち鳴らして、以前の小女と共に力を合はせ夫を扶け起して次の部屋へ連れ行きし

が、醉ひ倒れたる者の、夢路を辿るに異ならず、此儘寝首を搔かれんも前後正体無けん。

軈てお文の出で來りしを見て、此方の客は言語を改め、どうも奥樣、今夜はいろ〳〵御馳走になりまして有がたうございました、いよ〳〵お暇と致します。お文は瞠若と其處へ腰を据ゑ、まアさう被仰ずと、もう少うし對酌ぢやアありませんか（頸を差し延べて、外の方を打眺め）まア此月のいゝ事、岸上樣此方へいらつしやいませ、此椽側の處へお出掛け遊ばせ、妾がお布團を持ちますから、此風の宜い心持でございますこと、御酒に醉つて顔の熱ります處へ、冷ッこい風の當ります時ほど、氣色の宜いものはございませんね、さアどうでございます、もうお一杯お敵手を致しますから。云はれて客は今更打驚けるさまにて、いえもう私は、それよりかひとつお酌を致しますから、奥樣も一とつ如何で。と取らんとする銚子を取らしもせず、お文は少し鋭敏りたる語調にて、何んですねそんなお狡猾ことを被仰つてからに、ご自分が飲らずと、妾にばかり飲ませやうと思召してもさうは參りません、それよりかアお改め遊ばしたのを、お一杯戴かうぢやアありませんか。と斬込れて岸上ハ澁々猪口に酒を盛らせしが、一呼吸に飲み干してお文に指し、どうも奥樣のお世辭の宜いので、思はず酩酊てしまひました、もう此度こそいよ〳〵お暇と致しませう。と立たんとするを、お文は猶も押し止め、まアそんなにお急ぎ遊ばさずと、今夜は此方へお泊りなさいませな。と云はれて客はます〳〵打驚き、どう致しまして、此上お世話になりましては、さう遠方の處でもございませず、月はよし徐々歩行いて歸ります方が勝手でござ

います。云ふにお文は少し冷然として、さうでございますね、嘸お濱様がお家でお待ち遊ばしてゐらつしやいませうから、お戻りも宜しうございませう。と冷やかに打咲みたるお文の目元、冬の夜の月と列べて、これも凄きもの丶一つぞかし。

そんなら只今お車を。と岸上の制るをも聞かず、出入の車屋を呼びに遣りて、岸上の玄關に立ち出づる折も、お文は其帽子を取りて、親しく手渡したる欵待態。例はゞ香に迷ふ蝶の、花の露吸はんとて、無情き風に其羽を揉まれたらん如し。

車の出で行く後ろ影を、餘念なく眺め居たるお文は、傍に手を附ける小女を顧眄りて、獨り嫣然と打咲みぬ。

（七）

人は病の器と云ひて、その損じ易きこと、二圓八十錢の安直時計にだも如かず。

物部幸次郎は元來强壯の人にて、同僚中体量の二百磅を越ゆるものは、自己獨りならめと何時も誇り居る程にて、物部が是迄風邪一とつ引ける風評聞きたるもの無し。

少し急ぎ足にて道路の二三丁も歩めば、忽ち呼吸迫りて顔色を眞蒼にし、坂の麓に立ち止り、道行く人を怨めしげに見送りて、其方のだら〳〵上りの方を登らんと、苦しげに呼吸器外づしながら、澁面造る朋友を捉えて、君は何の爲に生存て居るのか、その位なら一と思ひに死ぬ方が利益ならん、と頰髯搔

き上げ大口開いて罵るゝものは、別人ならず何時も活潑の物部幸次郎君なり。

首尾よく赤門を潜り出でゝ間も無く、何省とやらの試補を拜命して、年俸五百五十圓に其身の箔を着け物部は氣の寛みてや、日頃醫師の勸告を守り、一滴も口に上せざりし酒を飲み始めて、夕飯の膳にのみ添へし一銚子が、三合より五合と昇り來て、日曜には晝飯にも猪口を手に取らねば、飯の味甘からぬやうになりて、何にや彼や無理に名目を負ふせて酒に親しみ、泥醉れたる後は、其儘寢入るを常としければ、何程壯健の身体にてもと、妻のお文も心配して、舅御樣も矢張御酒からお沒去り遊ばしたを、良人はお忘れかと異見云ふを、半ば夢の内に聞き流して、あゝ何事も酒だ〳〵。

世に酒量ほど階子昇りに上り行くものはあらじ。始め一合にて醉ひ潰しものが、僅か一月を過ぎぬ内、一升傾けて猶酒杯を呼ぶに至る。酒に醉ひて害なしと放言ものは、夏時ぷんと臭氣のする魚類に、舌鼓打つものゝ愚に等し。

あれ程面色のよかりし物部が、近頃の顏の色は何うだ、可厭に蒼黑くて艶の無いこと、一目見て慄然するやうに變り果しは、全く酒毒が全身に廻りしならんが、早晩身體を破壞さねば宜いがと、官省の食堂にて、白湯を飮みながら、寄り〳〵評判するものもありけり。

或る朝幸次郎は、平常の時刻に起き出で、一日の生命とも知らで牽牛花の咲き誇る、花の色に目を覺して、竹楊枝片手に口を嗽ぐ折しも、遽に胸先痛を覺えて、假令はゞ石塊の衝き上らん如き得ならぬ苦

痛に、喝と咳き入る途端、どろ〳〵したる血の塊を凡そ五勺餘も竹椽の側へ吐き出して、我にもわらぬ其塲へ昏倒れぬ。

尋常ならぬ物音に、お文は打驚きて馳せ附くれば、夫が口の端を韓紅に染めて、打倒れ居る有樣に仰天し、急ぎ扶け起して疊み掛けし臥戸を引き延べて夫を臥さしめ、時を移さず近處の醫師を招きて診せしめけるに、これは肺結核と呼びて、容易ならぬ病症、隨分お大事にとの挨拶に、お文は身の死せし折も、矢張此病氣なりしを想ひ起して、遽に眉を顰めけり。

此時より幸次郎は枕上らず、吐血の數も重なりて、霜夜の虫のそれならで、身体は日に〳〵弱り行くのみ。さしもに肥滿なりし物部も、今は骨と皮とのみ殘りて、全く別人の想あり。

物部ハ重き頭を擡げ、今日も又見舞に來れる岸上の顏を、下より覗き込みて、岸上君、所詮僕の今度の病氣は、全快しまいと思ふから、宜しく僕の死後を頼むよ。と云ふもいと苦しげに、幾度か咳嗽に言語を奪ハれて、辛くも云ひ續くるを岸上は打消し、物部君、日頃の君の氣象に不似合な、そんな氣の弱い事を云つて、この位な病氣の治らんと云ふがあるものかと勵ますに、病人は骨格の突き出でたる手を左右に打振りて、君はそんなに云つて呉れるが、迚も今度の病氣は、僕も全快るとは思はないよ（と傍に看護れるお文を見返りて）此女も未だ年若ではあり小兒も無い事だから、僕が若しもの跡は、君が媒妁人になつて、何處か適當な處へ嫁入てくれ給へ、こんな事まで賴む友人は、多數の中でも君より外に

は無いから。といと苦しげに云ひ切る言語に、岸上は猶も打消して、何んだね、そんな氣の弱い、併し君れ文さんの事は、慥に僕が保證つたから、安心して居給へと慰めつゝ、岸上は密と傍に坐せるれ文を顧眄れば、れ文は此時岸破と泣き伏して、袖に其面を掩ひたれば、其泣顏を見るに由なかりき。

（八）

假初の病を得てより、醫傑の内に投票せらるゝ、名ある博士の三人まで取り替へて、骨法とやらの新療法も施し試みけるか、命數の定まる處如何とも仕がたく、さしもに壯健なりし物部も、病むこと僅か二月にも滿たぬうち、月前の桐葉霜に落つるをも待たで、可惜有爲の才を齎したるまゝ、黄泉の行旅に上りけるぞ哀れなる。

お文は看護何くれとなく、甲斐甲斐しく立働きて、今日にて幾日と指を折るまでに睡眠もせで、病める良人の枕頭を去らず、氷嚢の交替より服藥の時間まで、看病婦も及ばぬ精勵しさに、下谷より手傳に來りし親類の婆が舌を捲きて、幾度か目脂に曇る眼鏡の水晶を拭ひ、責めてお文樣の看病の十分一も、十年前に沒なられた爺さんに仕てやりたかりしと、黄なる入齒を喰ひ〆めて、涓ぐみけり。

されバ孝次郎のいよ／＼賴み少なく、もう二時間とは難しからんと、案じ顏に首を捻れる醫師の言語にれ文は口惜しく、彼の帶の間に誇示す金時計に對しても、この位の病氣を治す事の出來ぬ筈は無いにと、憎いやうな、怨めしいやうな、不甲斐ないやうな心も起り、扮裝こそ彼の樣に壯麗なれ、内實は彼

も矢張玄關に書生や女中の下駄を列べて、病客を引く筍連に違ひなしと、果ては其醫師を讐敵のやうに思ふ心にもなりぬ。

孝次郎がいよ／＼呼吸を引き取りし時は、お文は宛然物狂はしき迄に泣き叫び、人の見る目も耻ぢず、夫の死骸に犇と抱き附きて、何故に妾も一處には連れ行き給はざるやと、傍に集へる人々に迄、泪ながらに喞ちける。

岸上は此日官省に在りしが、机を列べたる同僚の顔の色も、今日は自と蒼ざめたる如く、物部は如何なせしか、昨日の退省がけに見舞たる折は、容体頗る惡しく今宵が支えらるれば、と人皆案じ居たるが、今迄報知の來ぬ處を見れば、未だ生命はあるものと思へど、いと心元無き限なりと心を痛むる折しも、留守宅より使者來りて、物部の死去を報じ來せし書翰に、覺悟したる身の岸上も今更に打驚かされ、帳簿を疊む間も心急きて、後の事を同僚の誰彼に賴み置きて、官省の門を出づると其儘、其處に居合はしたる辻車に飛び乘りて、代價も定めず物部が家に馳せ行きし、車上の岸上が心の裡。

案内も乞はず飛び込むやうに駈け上りし出會がしらに、お文が蚯蚓腫の如く泣き腫らしたる目元を見て、岸上は弔みの言語も捗々しく咽喉を出でず、先づ孝次郎の枕頭に赴けば、昨日に變る四邊の光景、机上に立騰る一縷の線香も憐れにて、孝次郎が面を掩ひたる手布を取り除くる手も戰慄きて、良吉は口の内に、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

お文が力無く己れの傍に坐せしを見て、私もこれ程急だとは思ひませず、嘸お落膽でと岸上が漸く吊詞を云ふに答もせず、無音にて俯向けるお文は、多時して首を擡げ、岸上樣、ひよんな事になりました、と云ふに良吉は便りを得て、どうも何とも申し上げやうもござりませず、嘸かしお落膽でと、岸上は同じやうな言語を又も重復しぬ。

夫の遺言もございますし、只此上は何事も貴郎をお力に、どうぞ宜しくと云ふに岸上は前方に乘り出し、えゝ不行屆ではございますが私の力の及びますだけはと答ふる言語に、妾一人取り殘された心細さ、御推量下されませと窶れたる顏に、憂愁を含みて喞ちたる狀態は、海棠の雨を帶びたると評さんも、いと事古りにたれ。

（九）

今日は亡き夫の四十九日に當ればとて、お文は其前夜より在りし疇昔の事ども、そこはかと無く胸に浮び來て、十八の歲の新枕月に、江の島に連れ行かれ夫と手を連ねて、七里ヶ濱の砂濱を通る時、駒下駄の沙中に埋みて倒れんとせしを、夫に扶け起されし折、後方より來蒐りし漁夫に、畜生奴と囃されて、顏を眞赤にしたる事より、惠比壽屋の女中等がぢろぢろ自分を偸見るに勃然として、急に歸りませうと執拗し時の事まで、ありありと目前に彷徨きて、其折の快樂さと、現時の悲哀さとを比べて、幾度か枕に顏を押し當てゝ、潛然と獨り泣き居る內、夜の明け放れしに力を得て、此朝は殊に佛壇の掃除に心を

用ひ、水を替へ火を點せし後、お文は板金剛重たげに引摺りて、裏庭の花壇より可愛げに咲ける黄菊を手折り來て、眞鍮の花生に挿し入れ、手づから夫の好ける種々の食物を造りて、朱塗の膳に打載せ靈前に供へたる時、夫はこれが爲に生命を失ひ給ひしが、生來お嗜好の物なればと、臺附の洋杯に滿々と酒を盛て、膳の端に置けるも、なか〳〵に泪の種なり。

晝を過ぎてお文は力無げに車に打乘り、夫が谷中の墓地に赴く沿道も、その人の事は念頭を去らず、忘れんとする程忘れ難きは、在りし疇昔を忍ぶ心なりけり。

我が心を知りてか、空の打曇りたるも懶く、不忍の池に添ひて車を馳らする折、近く上野の森を望みて、あの森の彼方に夫の居ますかと不圖思ひ附きて、堰き來る泪にお文は得堪えす、密と袂より手布取り出で、目の縁を拭ひぬ。

墓地の入口にて車を降り、行きつけの茶屋三原屋といふへ赴けば、お文の姿を見るより、奧より駈け出でし内儀か、常時の斑白なる前齒を露はして、おや奧樣、よく今日は、どうも鬱陶しいお天氣で困り切ります、よく今日はお出掛でございました、まあどうぞ此方へと喋々挨拶せられて、お文は懊惱く碌々返辭もせで、其處の棚の上に載せありし桶の中より、七草を少し許り取り出して、それなら鳥渡お寺へ。

へいどうぞご寛りお參詣遊ばせ。

寺院にて經を上げし折も、お文は堰き來る泪に、其坐に堪へぬまで泣き入りしが、軈て讀誦も終りて、

居列びたる一人の僧が、御焼香をと云ふに、お文は氣を取り直し、滴るまでに濡れたる手布を持ちたるまゝ、香爐の前へ進みしが、香を半分は机の上にこぼせしをも知らざりけり。

恁て寺の門を出でし時、門番の處にて綿香に火を點け、預け置きたる花を受け取りて墓所に赴けば、此處は掃除行屆きて、木の葉一とつ落ち散り居らぬに、お文は嬉しく、竹筒の花を取り替へ、形の如く線香を立てゝ、生ける人に物云ふ如く、お文は手を合せて禮拜せし内は、夫の傍にゐる如き心地しつゝ、嬉しさに打咲みしが、忽ち心附きて又も泣き出しぬ。

此時後方の木戸の開く音に、お文が振り返れば、此處へ來りしは彼の岸上良吉なり、良吉はお文を見るより、私も最ッと早く參ります筈でしたが、官省の都合でつひ〳〵遲なはりました、そしてもうお經は濟みましたか。立ち上りたるお文は、おや岸上樣、よくお參詣下さいました、妾も貴郎が若しやお出にはなるまいかと存じまして、實は暫くお待ち申しましたが、餘り時刻が後れますので、妾一人でお經を上げて戴き、只今濟みました處でございます、おやそれは殘念な事を致しました、それなら鳥渡御拜をと、良吉は手に持てる樒を、お文が挿せる七草の傍に挿し入れ、丁寧に墓前に額き終れば、お文は岸上に打向ひ、もう直ぐお歸りでございますか、それとも何處か途中でお寄道でも。いえ今日は直に宅へ戻ります。そんなら其處まで御一處にと、兩人は以前の三原屋の前を打過ぎて、其處に待たせ置ける車を後より挽かせて、歩行つゝ家路に向ふ頃は、日も漸く山の端に入りて、塒に急ぐ鳥の聲に、上

野の森も黒み行きけり。

（十）

通りすがる人々には、夫婦の者と羨まれつゝ、良吉お文の兩人が、不忍の池近くへ來蒐る頃ハ、日も全く暮れ果て、闇黒に燦く燈火星に似たりけり。お文は良吉と四方山の談話の末、返す〲も我が身の上の不幸を打詫びて、日頃磊落なる夫の遺産も少なく、此上如何にして世の中を渡り行かんかと喞つに、良吉は言語を改め、百ケ日の法事も終りなば、我れ媒妁人となりて、宜き方へ縁附け申す可きにと云ふを、お文は口惜げに打消して、岸上樣の御冗談を、世間の手前そんな事が出來ませうかと答ふるに、岸上は首を傾け、それでも孝次郎君の遺言でと皆まで云はせず、假令亡つた夫はさう申したに致せ、そんな事をしては一旦人の妻となりし者の義務が濟ますか、又嫁入りせうにもと云ひ掛けて、密と後方より從ひ來る車夫を顧眄れば、遙か半町も彼方を挽き來るに安心し、こんな婆を誰が構ひ附けませうと云ひ續くるに、良吉は思はず立ち止りて、貴女がお婆さんでは、世間に若い女はございませんよと切込めば、お文は手を擧げて、輕く良吉の肩先を叩き、岸上樣の憎らしいそんなお世辭を、たんとまア人を馬鹿になさいませと打咲みたるお文。まだ二時間とは經たぬ以前に、眼の緣を泣き腫らしたるお文とは、何として同じ人と思はる可き。

軈て三枚橋の前へ來りし時、お文は岸上の顏を覗き込み、貴郞御迷惑でございませんのなら、何處か

其處等で晩食を認めて參りませうぢやアございませんかと云ふに、良吉は少し反身になり、だつて貴女、今日は御精進ではございませんか。何に構ひますものか。心の中を精進に致してさへ居れば、口では何を戴きましても、まア理窟はそんなもんぢやうございませんか、併し斯樣な婆と一處にいらつしやるのが、お可厭だと被仰るのなら夫迄ですがと、ぢつと良吉を睨むに、此方は打笑ひて、何に決してそんな譯ぢやアないんですが。そんなら妾と一處に行つて下さいますの。嬉しい事ねの下の句を、口の中に疊みたるお文は、立止りて追ひ附く車夫に、鳥渡少しの間待つてと、捻りし紙を與へたる後、兩人は只有る割烹店の敷石を踏鳴らせば、奥より鋭敏りたる女中の聲にて、いらつしやいまし。

餘まり歸宅が遲くあつては惡うございませうから、もう大概にして戻りませうと、顏を眞赤にしたる良吉が催促すれど、それ程醉ひたるとも思はれぬお文は、染附の猪口を手より放たで、岸上樣憚りですがモ一とつお酌をと、歸らん氣色のあらざるに、岸上は今更に呆れ惑ひたる面色にて、餘程今夜は階下のお客が込み合ふと見へて、女中が些とも此室へ遣つて來ないには困りますねと呟けば、お文はオホヽと笑ひ出し、岸上樣の生眞目面でゐらッしやること先刻貴郎が厠へお出のお留守に、妾が女中に祝儀を遣つてからは、薩張此室へ參りませんのヽ、大方粹とやらを利かせて居るんでございませうが、飛んだ邪推で婦女と申すものは、可笑しな者ぢやアございませんか、と微醺したる目元に睨まれて、良吉は我れにもあらず戰慄きて、つがんとしたる德利の酒を、仙臺平の袴の上に打溉けば、お文は痛く驚きた

る樣にて、おやこれは濟みません、斑點までもなりましては、と袂より絹手布取り出で、拭ひ取りぬ。眞實の泪を拭ひたる手布、今は即ち酒を浴びけり、手布の思慮聞きたやな。

（十二）

時ならぬ紅の霞を、空中に棚引かす電話線と同じく、忍ぶ戀路の下行く水は、何處を傳はり居るや、傍目には知れぬものなり。眞正の相愛なりせば、なぞて人に隱す可き事やある、忍ぶは己が心にも不正と思ふが故なりけり。されば始め不義なりと戰慄したる戀情も、度重りては迷霧の深淵に身を沈めて、浮かみ出づる事を知らず、其不義なる事を打忘るのみか、結句正當の戀情より愉快しとて、遂に其身を滅ぼすに至る。世に不義の快樂ほど淺猿しくも亦恐る可きものはあらずかし。

良人の墓詣の歸途に、割烹舖の門を潜りしさへ、一旦人の妻となりしものが、再緣なんどゝは思ひも寄らずと、良吉に打向ひて斷乎云ひ放ちたる言語に對しても、お文は消えも入る可きに、加かも酒を飮み肴を舐り、良吉に向ひて戲言云ひたるを思はば、先刻に寺にて打泣きたるは、全く噓泪にてありしか、虛僞にてありしか、否、其時に泣きしは、誠の心より泣きしなり、悲しさに堪へで打泣きしなり、全く虛僞に泣きしにはあらぬを知りては、人の心ほど賴み難きものはあらず。

良吉は孝次郎が死去てより、足繁く物部の家を訪問ひ、何暮となくいと親切に家事など世話して、何時も夜に入りて歸るさへあるに、痛く酒を蒙りて物部の門を出づるを常としければ、忽ち世間の口の端

にかゝりて、へん彼所の赤い信女も亦孕む積りかと、批評云ふものも出で來ぬ。

或る夜岸上の來りしに、平常の如く杯盤など狼籍して、お文は半ば崩したる膝を直しもせず、身を良吉に寄せ掛くるやうに斜に向け、いと甘ゝたる句調にて云ひ出づるやう、岸上樣、ほんとに世間の口はど懊惱ものはございませんね、かうやつて貴郎が一方ならず、御親切にして下さるもんですから、世間の者が兎や角種々な事を云ひ觸らして困り切ますよ、既に昨日なども出入の肴屋が參りまして、妾の顏を見るか早いか、奧樣お目出度ございますと突如に申しますから、何にがれ前目出度い事があらう、考へても御覽、旦那はお沒去なるし、此上何うしたら宜からうかと悒鬱で居る處、何が目出度い事があるものかねと申しますと、其肴屋が肩の處へ載せて居た手拭を取つて、顏の拭を汗さ〳〵、奧樣れ隱し遊ばしたつて行けません、もうちやアんと種が上つて居りますから、何程しらをれ切りになつても無益でございます、近々にお婿樣がれ出の事はようく存じて居りますよと散々嘲弄はれた末、比良目の大きなのを一枚、とう〳〵賣り附けられましたが、かうやつて居ては、ます〳〵世間の評判を高めるやうなもんですから、何處か閑靜な處へでも參つて、寛りれ話が至したうござりますね、と流眄にぢろりと良吉の顏を見上げければ、飽くまで迷ひ居る岸上は、世の誹謗も、妻のお濱の事も、兩人の子供の事も、何もかも打忘れ、酒臭さ呼吸を吐き出して、なアに譯やアありません、そんな事なら何處か御一處に湯治場へでも出掛けませうかと目眦を下ぐるに、さうあれバ妾は願つたり叶つたりですわとれ文は打喜

びて、箱根鹽原と種々選びたる末、伊香保へ赴く事に定め、その日限など打語りて、はや其處へ行きたる氣にもなりて、其折は髮を何に結はん、着物は何にが宜けんなど、いと睦ましげに物語りて、猶も杯を巡らしける。

これより二三日を經たる朝未起に、上野停車場の上等待合所の長椅子に横はりたるは、別人ならぬお文にてふらんねるの單衣に、黑繻子と友禪の晝夜帶をしめ、上に黑縮緬の羽織を着て、束髮には態と簪を一本も挿さず、極めて質素に扮りしは、人目に立たぬ用意なる可し。頻に同伴の來るを待合すものゝ如くなりしが、切符賣捌所の大時計は、發車の時刻に早や、十分と間の無さに其人の影は見えず、どうしたものか、あァは被仰つたやうなものゝ、お家の御都合で思ふやうには參らぬのやら、いらつしやるのならもうお姿が見ゑさうなもの、とお文は心も心ならず、獨り苦悶ゆる折しも、洋服着たる男子の入り來るを目敏く發見け、お文は打喜びて駈け寄り、大層お遲うございましたね、どの位お待ち申しましたらうも口の內、四邊の人を憚りて聲低く、兎つかは白色の切符を買ひ求め、上等列車に乘込みしハ、中等滊車の雜沓を避けたる心なるか。滊車は程無く此不義の男女を乘せて、勢ひよく烟を吐きて搖ぎ出でぬ。

（十二）

世の開け行くに從ひて、人々ます〳〵競ひて、豪奢を衒ふが故に、家に五圓の金錢の貯蓄も難かしき

を物ともせず、表に綺羅を飾る事にのみ心を砕き、棕梠箒のやうな腭の鬚も滅多に剃り落さず、蹴込に敷き詰めたる、勿体なき程の壯麗なる綿羊の毛皮に足を載せ、晃々したる二人輓の車を、大道狹しと馳せ違ふ時とはなれりける。かゝる世の風潮に連れて、近來所々の遊戯塲の繁昌凄まじく、名もなき山を切り開きて、拇指程の瀧を仕掛け、樹を伐り池を造り。ぺんき塗の三階造を打ち建て、土地高燥にして空氣清涼、避暑防寒には最窟竟の仙境なりと云ひ觸らば、人皆爭ひて其所に打集ふること、蟻の甘きに寄るに異らぬ光景は不思議といふも愚なる。

苟も當世の紳士とも云はるゝ者が、夏時自分の家の內に燻て居ては、第一乃公の体面に關ると、奥の離座敷に奈良團扇使ひて、事の足るものまでが、人知れぬ酷工面の算段に、苦しめずとも宜い腹を痛めて、自分獨り開化がつて、何の面白い事があらうか。扮裝も東京に居る時よりは、幾層美々しく着飾り、態々温泉塲行にと、新らしき衣服仕立てたる婦人ありと聞きては、流行の勢力ほど世に恐ろしきものはあらず。

大きやかなる鞄重たげに提げたる人々に問へば、衛生の爲めなりと一口に云ひ放てど、終日爲す事もなく、湯に茹りては轉りと寢り、覺ては又風呂に赴くを其の日の職務として、朝より晩まで身体を持て餘まして、不養生にこそなれ、などて養生になる可き。態々金錢を使ひ捨て、骨を折りて身体を不健康にするに同じ。世の中にこれ程痴愚の骨頂、間抜の行止はあらざる可し。

お文良吉の兩人は、かゝる類にはあらねど、これ亦温泉場を利用して、不義の快樂に耽らんとするものなり。此同類兩人の外に無きにしもあらざるを思はば、人心を委靡し世道を廢替するもの、蓋し夫れ温泉場なる乎と、破れ机を叩き飛ばすもの、豈向路次の火の玉先生のみかは。

今しも新らたに浴を出でたるお文は、大形の貸浴衣輕ろげに肌に着て、白縮緬のしごきだらしなく、ぐる〳〵と腰の邊に捲き附け、滴るばかりの髮の毛を、房々と肩の處へ垂らし、手拭にて耳の端を拭ひつゝ、障子の傍へ立ちながら、寐轉びて小說本繙ける良吉に打向ひて獨言のやうに、久し振で髮を解したら、ほんとに清々しましたよ、何んなに宜い心持でございませう（と手を後方に廻して、髮の毛を撫て見て）年を取るといけませんね、髮の毛がずん〳〵拔けて行くには困ります、これこんなにと髮の毛を五六本拔き取り、手に捲き附けて岸上に示せば、良吉は腮の處へ當てがひ居たる手を疊の上に下し、そんな物を僕に見せたからつて、拔けた髮の毛を元々通り生やすといふ譯には行かないから、早く捨てゝれしまひなさいと云へば、お文は少し冷然として、岸上樣の憎らしいこと、何も妾は此髮の毛を元の通りにして下さいとも、何んとも申しは致しませんよ。これは大失策だ、アハヽヽヽと良吉の大口開いて打笑ふを耳にも止めず、お文は急に心附きたる体にて、跪坐きさま良吉の顏をぢつと見詰め、それはさうと髮ハ何に結ひませうかねと問ふに、良吉は透かさず、さうさ銀杏返しに結ひにあつてもいゝが、根がれ粹な御生來でゐらつしやるから、惡くすると……。何んですと？　とお文が詰め寄りしに、何に

あまり粋き過ぎて、奥様に見ゑないといけませんから、矢張丸髷にお結ひの方が宜ろしからうと申し上げたばかりです。われ可厭な！　妾は生れてからまだ丸髷には、二三度しか結ッた事がございませんから、巧く似合へばよござんすがと答ふるに、良吉は少し濟して、御標緻が宜しくってゐらっしやるから、何に結ッても似合ない事がありますものかねと云へば、お文は右手を擧げて擲つ眞似を裝ひ、どう云へバかう云ふッて、どうせ貴郎のお口には敵ひませんよ、（一口切つて）妾は何に結ひましても構ひませんが、妾が丸髷に結つて、若し万一貴郎の奥様とでも間違へられては、どんなに貴郎が御迷惑でございませうかと思ひまして……と、語尾に力を入れて云ひ放ては、良吉は平氣なる容貌にて、何アに疾から皆なにさう思はれて居るんですから、今更遠慮をなさる事もありますまいがと云ふ時、隣室に當りて高聲き職人体の男の聲として、へんお靜にお狸き申しやす、へ面白くも無ゑ、此方に獨身者が居りやすッ。

（十三）

眞逆此年齢をして島田にも結はれますまい。何に四十島田といふ諺もあればと、譯も無き事迄に兎や角、調戯もしつ調戯れもしつ、軈て旅宿の女中を呼びて、亭主は洗濯屋を業とする、近所にて精勵者の夫婦と評判のある、お竹といふ名代の髪結を招きて、お文は髪を丸髷に結はせぬ。

お竹どんとやら此處に置きますよ。おや奥様これではお剰餘が。何ゝれ剰餘はいりませんから。それ

は有がたうござります、どうも奥様のお髪は、癖がおあんなさらないから、どんなに結ひよございませう。あら可厭な、お竹どんのお世辭の宜いこと、とお文が云ふに、鬢櫛を疊紙の中に仕舞ひ居たるお竹は、お文の方を振り返りて、奥様はもう所々御見物遊ばしましたか。否え此所へ來てから、未だ何處にも見物に行きませんが、何處か見に行く處でもありますかねとの間に、髪結は自分の子の生長を他人に問はれた程に得意になり、そりやア何んと申しましても、東京からも斯うやつて間斷無しに、皆様がいらつしやるほどでござりまして、第一伊香保の八景と申すのがござりますよ。へえ其樣に名所が澤山あるのかねとお文の呆れ顔に、髪結はます／＼得意になりて、此方の八景は外のと少々違ひまして、先づ第一が猿澤の猿と申しまして、直き此先の溪谷の所よ、今は餘り居ませんが、其以前は大層に猿が群集致しまして、きやつ／＼と申す鳴き聲が、此邊にまで聞えたうにござります、其又猿と列びまして、高根の鹿と申すのもござりまして、これも八景の一とつで、それに上の山の月、これが又中々宜ひ風景で、迚も妾などの口では申し盡されません程で、其又月に劣りませんのが、二つ山の雪の景色でござりまして、妾などのやうなものでも、其所の雪景色を見ますると、腰折の一とつも唸り出したくなる程で、これで月雪の二は揃ひましたが、其殘つて居ります花の名所は、これから榛名へ參ります途中にござります、伊香保沼の杜若に圓山の躑躅、それに關屋の紅葉此等は皆八景の内に數へてござりまして、それよ直ぐ此向方に。此方からも鳥渡其頭ばかり見えますが（と少し頸首を延ばして、障子の外を見て）

あの物聞山と申す山の巓に啼き渡る杜鵑、これが又なか〳〵風流なお方の御賞美遊ばす處でござりまして、さう遠方でもござりませんから、御飯でもお仕舞ひ遊ばしてから、御散歩がてら御一處にいらしつて御覧遊ばせ、中々風景のよい處で、御話の種になります、先づこれ迄が八景の御案内で、其外瀧がお望みなれば、七重の瀧、辨天の瀧、船尾の瀧などもございますし、少し道が遠くて宜ろしければ、榛名山の名所、これは妾が申し上げずとも、よく御存じでもござりませうが、榛名と申しては、妙義に負けぬ劣らぬ名所の大關株、岩の上に堂宇の建つて居りますのは、外に類と眞似がござりません、それに蠟燭岩に九折岩、お姿岩に戈の岩、坊主の好きな大黒岩、鳥渡此處等で腰掛岩などもござりまして、其外數へ切れぬ程の岩澤山で、岩といふ岩の無いものはござりません、ヱッへん岩のいは……れハ先づこんなもので、ほい餘計な事まで喋々喃々饒舌て、肝腎の御得意樣をもう二三箇處廻る處がござりましたのを忘れて居ましッたッけ、と其處にありし十錢銀貨をひよいと攫みて、これは有かたうござりました、ハイお喧しう左樣ならと、づん〳〵部屋を出で行く有樣に、此方の兩人はあつけに取られて、霎時其後姿を見詰めて居たりしが、暫くしてお文は、岸上樣隨分髮結と申す者は饒舌るもんでござりますが、あの位又舌の先の宜く廻る者はござりませんねと云ふに、岸上は手を拍つて彼奴位ゐ又ござりますの好きな奴もござりません、アハヽヽヽヽ。

此伊香保に來てより、最早三日を經たれど、未だ何處一とつ見物せし處なく、人目を憚りて外出もせ

ざりしが、餘りの退屈に堪へ兼ねて、此夕べ食事を終りて後、彼の髮結の披露せる物聞山へ赴かんものと、れ文良吉の兩人は打連立ちて、始めて木暮の旅舘を立ち出で、路傍の小川に物洗ふ女子に道を聞きて、其山の麓に至り着けば、物聞山の三字を大書せる木標を認めぬ。

れ文ハ幾度か呼吸が切れてと、良吉の手に吊り下るやうにして、漸く山の頂に着けバ、其處には荒れ果てたる些小なる祉ありて、祉前に置き捨てたる床机に腰打掛け四邊を望めば、れ竹が言語に違はず、遙に前橋安中の諸驛を靄の中に眺め、連山峨々として或ハ近く或は遠く、風光絶佳なりければ、れ文が袂より取り出せる燧木に、良吉は龜尾の巻烟草を燻らし、暫時餘念も無く憩ふ折しも、下より息急き登り來る人の氣息に、兩人ハ圖らず振り返りて大に打驚き、れ文は倉皇狼狽祉の小陰に身を忍ばす途端、いや岸上君と呼びかくるものあり。

（十四）

呼びかけたる男は、つか〳〵と良吉の傍近く進み來り、これは不思議な處で、お目に掛りますと挨拶され、全身に水を浴びたる如き心地したる岸上は、密に胸撫で下ろし、さあらぬ体を裝へど、心中の驚愕は掩ふに由なく、何時此方へと急き込めバ、其の人は沈着拂つて、昨夜着したばかり、して君は外に同伴は無いのかね、と驕慢に問はれて、岸上は忽ち行詰り……小生一人で參りました。おや君獨り、それは嘸かし退屈でせう、と後邊を振り返りて、腭の先にて其處に佇立る婦人を指し、岸上君、これは愚

妻でと紹介され、良吉はます〳〵狼狽て、これは奥樣でござりますか、お初にお目に掛ります、私は岸上良吉と申しまして、大層山川樣のお世話になります、以後何分お心易くと僅に云ひ續くる內、其山川と呼ばれたる男は、同じ床机に腰打掛け、どうも岸上君此處の景色は又格別だね、此處へ來ると忽ち氣が清々するやうだ、と云へど岸上が心は却りて結ぼるゝ心地やせん。山川は暫くして語を繼ぎ、そして此地は何處の旅宿に居るねと問はれて、良吉はお文の事氣に掛り心も心ならぬ處へ、忽ち此問に遇ひて、重き罪科を犯したらん如き心地しつゝ、虛構も云へず眞正も明かされぬ苦しさに躊躇て、心中搔き挘らるゝ如くなりしが、佶と心に決して、彼の聚遠館にと答ふれば何に聚遠館、それなら僕の旅宿と同じ事だと云はれて、岸上は思はず戰慄したるが、山川は其を知るに由なく、猶も談話を進めて、なか〳〵家屋の構造が大きいものだから、同じ處に居ても分らない、些と話しに來たまへ、僕も是非出掛るから、そして部屋は何番だねと問はれて、岸上が心の中には、己が物部の妻と來りたる事を知りて、態と執拗く尋ぬるにやと疑ひたれど、已む無くて十五番と答ふれば、山川は口の中にて十五番々々と三度許り繰り返したるも心憎く、そんなら山川樣、小生は一足お先にと云へば、山川は手を擧げて此を止め、まあいゝぢやア無いか、もう少し話して行き給へと云はれ、同伴がと危く口の端を辷らんとせしを僅に喰ひ止め、少し仕掛けた用がと、辻褄合はぬ事を云ひて、山川の妻女に挨拶も其處々々に山を降りて、お文が待ち詫び居らんにと足を早めたれど、其姿は見えざりけり。

お文は又岸上の目配に早くも其意を曉りて、社の小蔭に身を潜ませ、其人々の行過ぐるを見濟し、密と山を降て、今か〳〵と岸上の來るを待ち詫びたれど、其影だに見えざれば、名所の見物も滅茶々々にして獨り旅宿へ歸り着き、洋燈の傍に茫乎と思ひ沈む折しも、歸り來りし岸上は、帽子脫ぐ間も無く、吁、何うも油斷がならない、何處に何う知つた人が居ないとも云はれないと吐息吻くに、お文は傍より今のお方ハ何誰でござります、彼か彼は同じ官省の課長を勤める山川と云ふものだが、此處へ來て彼の人に遇ハふとは思ひ掛けなかつたよ、それに聞いて見れば、矢張此旅宿に逗留して居るさうだから、もう此處には居られない、明朝早く此處を出立しやうと云ふに、お文は眉根を寄せ、だつてそれではあんまり厭氣無いやうで、此處へ來て未だ何處一とつ見物もしませず、此儘歸る位なれば、東京の家に居りましたのも同じこと、あんまり情けないやうでござりますと喞つに、良吉は萎れ返り、さう云はれて見ると、そんなものだが、若し貴女と一處に此處へ來た事でも、課長の目に止まらうもんなら、何んなことになるかも知れませんから、其樣なだゝを云はずと、一先歸京と致しませうと說かれて、疵持つ足の踏み留る力無く、軈て旅宿の下女を呼びて、明朝出立すれば今迄の會計書をと吩附るに、下女は眞正とせず、何んでござりますお調戯遊ばしてはいけませぬと打笑ふに、何に嘘では無い、急に差し當つた用向が出來てと云ふに、下女は呆れ顏して帳場へ駈け戻りしが、暫時してそれではこれで明朝までの分まで戴いてござりますと、いと細に書き記したる會計帳を持ち來りければ、お文は銀貨三個許り紙に包

みて、これは誠の少許ですが、大變にお世話になりましたと與ふるを、下女は嬉しさうに押戴き、どうぞ又近々に是非お寬りお出で下さりませ、お待ち申して居ります。

次ぎの朝暗き内より、お文良吉の兩人は、伊香保の旅宿を立ち出でゝ、日のある中東京に入るは、不安心なりとの注意か前橋邊の名も無き小料理店の奥座敷に、日影の入る迄時を過し、夜に入りて上野に着し、お文を其の家に送り屆けたる後、良吉は何喰はぬ顔して我が家へ戻りぬ。

家に歸りて思へば、尠なからぬ金錢を費して、それ程愉快き事も無かりきと、良吉は心の中につくづく思ひぬ。憎きは彼の山川なり、其妻を同伴したる彼が愉快を思ひ量れば、憎しともいと憎し、と一度は思ひしが、忍ぶ戀路は此處等が身上なるかと思ひ返して、良吉は獨り打咲みぬ。

（十五）

話頭元に戻りて、或る日良吉ハ退省がけに、朋友を訪問んとて、燈火の點る頃歸り來りて、平常の如く夕餉の膳に向ひしが、三膳の飯を喰うべ終りて、尙箸を措くを惜む如き有樣なるに、此夕べは二膳目の終りに茶を掛け、掻き込むやうにして食事を濟ませしかば、傍に給事せるお濱は訝かりて、お朋友の處で何か召し上りましたかと問ふに、良吉は否ゝと首を打振るのみ、軈て煙草盆引き寄せて煙草を燻らし、お濱がついで出せる湯呑の茶を一口飲みて、さも云ひ出し惡くげに、急に朋友に誘はれて、明朝から伊香保の温泉へ行くからとの言語に、寐耳に水のお濱ハ、へゝゝと少し呆れたりしが、宜くお官省の

お暇が取れましたね、してお同伴ハ何誰と思はず躙り寄るに、良吉も行き詰りて暫時無言なりしが、何にそれはお前の知らない人さ、と事も無げに云ひ放ちたるが、其名を云はぬも氣に掛りてや、吉村といふ同じ課へ出勤するものさ、と口より出まかせの出鱈目を云ひて、良吉は手に持てる煙筒を灰吹の端にてぽんと撃きぬ。

公然の請暇を得て、同僚の者と伊香保の勝地に遊ぶに、何の隱蔽ことやある。さるを其妻女にまで告ぐるを憚るハ、衷心疚しき處あればなり。小惡だに爲し難きは、人の性は善なるが故なり。

妻女を欺きたる良吉は、軈て奥の間に赴きて、老父母にこれ〳〵にてとお濱に語りし通りを述れば、それは宜き身体の保養なり、羨ましき事なりと兩人は老顏に打咲みぬ。此時は良吉少しも躊躇ふ色だに無く、すらすらと云放ちぬ。人心の惡に慣れ易き速かさよ。

自己の部屋へ歸來りし良吉はお濱を見返て、御兩親のお許諾を得たればいよ〳〵明朝出立に定めぬ、それには少し買物もあれば、鳥渡其處等迄出て來る程に、土藏から彼の此前江の島へ行つた時の鞄を取出して、よく掃除をして置いておくれと、言語急はしく吩咐けて、帽子を片手に攫ふやうにして下駄を穿く間も倉皇しく出で行きぬ。はて何處へ買物に赴きし事やら。

お濱は良人の急遽の旅行と聞きて、一日にても遠く離るゝ事の心細さに、一旦は止めんものと思はざるにハあらねど、早やそれと決心したる良人の、生來の氣質も知りたれば、止めしとて止まるべうもあ

らねば、と斷念て何事も云はず、吩附けられたるまゝ土藏より鞄取り出でて、中を隈なく掃除し終りたる後、良人が常に用ひる花王散の齒磨、象牙の西洋楊枝、護謨の櫛、毛の剛き武瀏手、手拭石鹸鏡など、何くれとなく悉く取り揃へたるが、不圖心附きて小簞笥の抽斗より、自分の紙入を取り出して、其底より旅行用にと實母より貰ひ受けし、万金丹を入れ置きたる小さき蝦夷錦の藥袋をも、鞄の傍に置きぬ。

その旅中を氣遣ひて藥品まで取り揃ふる、妻の眞心をも外所にして、痴愚の限りを盡す夫の心は、鬼か蛇か。

娘のお光は母が大きなる鞄を、土藏の内より取り出せしを見て、母樣それは何んになさりますると問はれて、これは明朝父樣が伊香保の湯治場へいらつしやるから、その時持つていらつしやる爲めと答ふれば、お光は母の顏を覗き込みて、母樣も御一處にか。否え父樣お一人で。父樣ばかりでもいゝから、妾も一處に連れて行つて下さるやうに、母樣から願つてと何時か甘えたる語調にて、母に迫るをお濱は打消し、どうして父樣がお前を連れて行つて下さるものかね、それよりか音無しく待ち〳〵して居ると、今に宜いお土産を買つて來て下さるにと諭されて、理解よきお光は不性々々に肥えたる頰を膨らせて、鞄の錠前を憂乎さして居る愛らさしさ。これを一目見たりとて、正なき戀に身を任せて、伊香保に赴く心は起るまじきに。偖も無分別なるは、良吉といふ男なりけり。

（十六）

我が最愛の夫は、仇し女子と仇なる契を罩めて、遠く伊香保の靈泉に、不義の快樂を貪るとは、夢にだも知る由なく、無事にあれかし壯健におはせよかしと、祈る心の眞實から、日毎に供ふる影膳の出入も人手を借らず、假令僅少の時日なりとて、旅とし云へば氣に掛る、今頃は如何におはすや、傍に侍する我身無ければ、何かに附けて嘸な不便を感じ居給ふなる可し、日頃食物に喧しき事とて、お口に適ふものも無けん、旅宿の飯の剛きに困じ給ふておはさん、身体を損ね給はねば宜きがなと、女子の狹き心より推量り行けば、お濱は堪えぬ思に胸迫りて、お光の事も、良一の事も、何事も打忘れ果て、此儘直にも飛び行かま欲しく、心細さと慕はしさに、小さき胸を搔むしられて、我にもあらで岸破と其場に打伏す疊の中に、忽ち温泉宿の二階現はれ來て、夫が濡手拭片手に、お濱よく來られたね、と打咲みたる顏の、歷然と見ゆるやうな。

朝夕起臥を共にせし折は、係ること夢にだも浮かばざりしが、夫が伊香保へ出立せし時より、これまでに無き慕はしき情念募り來て、夫が留守中は間暇あれば彼の袷も縫ひ直ほし置かん、此の綿入れも裁縫らんものと、針箱取り出で〻縫ひかくれど、生憎其人の事のみ胸に浮び來て、忘れんとする程忘れ難く、針持つ手もしどろになりて、一筋縫ひては考へ、二筋縫ひては思ひに沈み、果は其儘其處に裁縫かけたる衣片投げ遣りて、再び針持つ勇氣も失せければ、我と我か心を制すれど、夫の面影のみ目前を

遮りて拂ふに術なく、ふら〳〵と椽先近くへ進み出で丶、籬に咲ける菊の花を、珍らしげに眺むる折しも、此方の襖を押開て入り來りしお小夜は、閾の脇に兩手を支え、あのう奥様、伊香保からお音信がござりましたか、お濱は呼び掛けられて始めて自己に返り、否え、まだ何んともと答ふれは、お小夜は小首を傾け、もう何んとかお音信がありさうなものでござりますねと、訝かるをお濱は打消し、何に直にお歸りになるので、夫れで何んともお音信が無いのだらうとよと云はれて、お小夜はいと不平なる容貌にて、假令直ぐにお戻りになりましても、お着になつたお音信位はありましても宜さ丶うなものでござりまする、とお濱の傍近くへ進み寄りて、奥様全体お同伴は何誰様でござります、と問ふをお濱は懊惱に聞き流し、妾の存じないお方だざうで、慥かお姓名を吉村様とか被仰つたよと答ふるに、お小夜はちつとお濱の顔を見詰め、奥様、何處の吉村様か知れたものぢやアございませんよ、吉村様が頭髪を島田に結ッて、白粉を附けてゐらつしやるかも知れません、と佶然云ふを聞きて、お濱は忽ち勃然として、小夜や滅多な事をお云ひだと聽きませんよ、と窘むるにお小夜は思はず摺り寄りて、私は何にも御存知ない奥様が、お可愛想でござりまする。

（十七）

平常に無くお小夜が、言語に力を入れて詰め寄る有様に、お濱は心を動かさぬにハあらねど、係る事のある可しとは、胸に描く想像の中にだも無ければ、徼りずまに又例のお小夜が惡戯なる可し、餘りに

夫の身の上を案じ顏なる妾の樣子を、何時か襖の蔭より偸見て、調戯ひ半分問ひ試み、若し浮か〳〵と調子に釣り込まれて、妾が打驚ける顏を見て、打囃さんとての下心なる可しと、お濱はお小夜が告ぐるをつや〳〵實事とせず、事も無げに微笑みて、何だねヱ、小夜が眞面目になつて、妾に調戯うと思つてからに、と傍を振向くお濱の顏を、追驅くるやうにぢつと見て、事によります、何で妾が其樣な冗談を申しませう、と答ふる言語は、平常に變りていと重々しかりき。

お小夜が言語の打濕りたるに、お濱は訝かりて振り向けば、お小夜が俯ける兩眼に、一杯の泪を支ふる有樣を見て、お濱は始めて打驚き、お前泣いて居るね、何が泣く事があります、可笑な人だねと續けさまに云はれて、お小夜は忽ちわつと其塲に泣き伏しぬ。

さも口惜げに噓唏きするお小夜の爲体に、お濱は何事とも知らねど、ます〳〵打驚き、思はずお小夜の傍へ詰め寄りて、何にが泣く事がある、理由も話さずに泣くといふがあるものかね、と叱るやうに宥るやうに云へど、お小夜は答へもなさで、猶も泪を收めず。

お濱は呆れて霎時無言なりしが、お小夜は漸く襦袢の袖にて泪を押し拭ひ、此方の旦那樣に限つて、其樣な事は万々ございますまいと思つて居ましたが、其後お音信は參りませず、假令僅少の時日に致せ、これ程までに御案じ遊バす、奥樣のお心に對しましても、お着になつたとの御報知位はありましても宜からうかと存じましたに、それも無い處を見ますると、過日上野の停車塲へ、旦那樣の御供をして參りま

した清吉の談話も思ひ當りまするに猶も泣かんとするに、お濱はお小夜が清吉より聞けると云ふが氣に掛りて、その清吉からお前が聞いた談話と云ふのは、全体何の樣の事かと詰め寄り問ふに、お小夜は決心したる体にて、成るたけ此樣なお話は、貴女のお耳にお入れ申したくないと、それで今迄申し上げずに居りましたが、彼の日清吉が戻りまして、密と妾に申しますには、今度旦那樣は何誰と御一處に、伊香保へお出で遊ばすのかと尋ねますから、妾は貴女に伺つて居ります通り、是れ〳〵で同じお官省へお勤めになる、吉村樣とか被仰るお方と、御一處にと申しますと、清吉は突然鼻の先でふゝんと嘲笑つて、旦那樣のお官省には束髮を結つた、慄然とするやうな美しいお官吏があると見ゑると云ひますから妾も不思議に思ひまして段々樣子を聞いて見ますると、實は彼の日に旦那樣をお載せ申して、上野の停車場へ着いてから、旦那樣の鞄を提げて、上等待合所へ跟いて行くと、其處の長椅子に、髮を當世の束髮に結つた、二十四五の素的な代物が一人待つて居て、旦那樣が入つて居らつしやるのを見て、莞爾してさも待ち兼ねて居たと云ふ風で、何か密々旦那樣と話して居りましたが、何んでも停車場で待合す約束が、ちやあんと其前から出來て居たものと見ゑますが、肝腎の其代物は素人のやうでもあり、黑人のやうでもあり、未だに當りが附かないのだと申しますから、妾も吃驚致しまして、さう聞いて見ると、旦那樣の近頃の御樣子に變な處もあり、又さう聞いて知つて居る身には、其後御安着の御端書一とつ參らないのも、何んだか可笑なやうにもあり、全体其婦人は何んでございませう、と始て告ぐる一伍一什に、お濱

はお小夜の顏を見護りて。あらまわ、

お小夜の物語るを聞けバ、成る程と思ひ當る事もありて、此時よりお濱は以前に倍して、夫の事氣に掛りて何事も手に附かず、其憎らしき婦人といふは、新橋日本橋邊のお馴染か、それにしても髮を束髮に結びたるハ、素人のやうにも思はるれど、深く謀計で人目に立たぬ用心なる可しなど思ひ量りて、胸の裡の有也無也に、お濱は遂に其夜を目睡もせで明しけり。

翌日に至りてもお小夜と面を合はす每に、夫の評判のみして、今頃は如何に樂しげに嬉しげになど、あらぬ事にまで想像を馳しらせて氣苦勞を增すのみ夜に入れば庖所の用を仕舞ひて、お小夜はお濱の部屋に入り來り、種々の物語に思はず夜を更し、それなら奧樣又明日と云ひさして今も申し上げます通、決して御油斷は出來ません、確乎なさりませんといけませんよ、とお小夜は捨臺辭のやうに佶然云ひ放ちて、自己が部屋へ戾りし間も無く、お小夜は走るやうに出で來り、奧樣、旦那樣がお歸りになりました、と思はずお濱と目を合しぬ。

（十八）

夫が歸り給はゞ、ありたけの怨言を述べ立てなん、妾が案じ居る心根に對しても、餘りと云へば情け無きは夫が心なり。罪惡も無き妾を欺きて、仇し女子と共に伊香保にまで赴き給ひしかと、襟元を捉えて問ひ糺さんものと思ひ居たる身は、今お小夜が「お歸りになりました」との報知に、胸遽に躍り上り

て、待ち焦れたる其人に遇ふ嬉しさは忽ち消えて、憎らしさ、怨めしさ、情けなきと云ふ情念のみ、胸に蔓り來て、兎つかは玄關の方へ出で行きしが、次の間にて鞄提げたる夫の歸り來るに行き遇ひ、洋燈の灯影に其人の顔を一目見ては彼の憎らしさ、怨めしさ、情け無さといふ情念は、譯も無く皆消え失せて、只嬉しと云ふ心のみ、胸先に衝き來りて、よく此樣にお早く。

傍に聞き居たるお小夜は、お濱の打喜ぶ有樣を見て、焦躁に堪へ難ね、胸のむしやくしや掩ふに由なく、平常に無き怖き顔して、ぢろりとお濱を睨むやうなりしが、お濱は开をまつたく知らざるもの丶如くなりき。お濱は甲斐々々しく、夫の持ち歸りし鞄、風呂敷包、紙包、毛布包、帽子など、行儀よく部屋の片隅に打列べて後、傍のお小夜を顧眄りて、もう外に何んにも御荷物は無かつたかねと云へど、お小夜はお濱の敏達しく立働く擧動に深く不平を懷きたるか、頬膨らせて碌々返事もせざりければ、お濱は焦思て、もう此外に何んにも御荷物は無かつたらうね、と同じ事を重復せど、お小夜は捗々しく返答だにせず、暫くしてもう大概ござりませんのでせう、と不性々々に答へて、お小夜は其儘次の間へ辷り行く。

夫が火鉢の傍へ座を占めたるを見て、お濱ハ立つて違棚より紫檀の茶盆を取り下し、九谷燒の湯呑に茶を一杯つぎて、夫の傍へ持ち行き其人の顔を見上ぐるやうにして、よく此樣にお早くお歸宅が出來ましたねと云はれて、足に疵持つ良吉は、早や事實露顯に及びたるかと、少し呆れたる容貌にてお濱の顔を熟視て言語無ければ、お濱ハ首を斜にして、あのう御飯はもう濟みましたかと問ふに、良吉は始めて

心を安んじ、飯か、飯はもう仕舞つて來たよ、と簡單く答ふる顔を、お濱はぢつと見て、伊香保は嘸お面白うござりましたらうねえ、些と御樣子が承はりたいものでござりますと云はれて、悸としたる良吉は、さわらぬ体を裝ひて、何にそれ程、此方で思つて居た程、面白くもなかつたよ、と云ひ消す夫の顔をつれ〴〵と打眺め、あんまりさうでもござりませんでしたらう、お留守番賃に些とお裾分が願ひたいものでござります、と思はず座を進むるお濱の有樣に、良吉は迷惑さうに頭を搔きて、もう今夜は草臥ても居るし、時刻も餘程更けて居るやうだから、明日寛り話して聞かせやうと云へど、お濱はいつかな聽かず、そんな事を被仰らずと早く話して聞かせて下さりませと、詰め寄る時のお濱の心の中には、我が夫ほど此世の中に、憎らしき、怨めしき、情けなき人は無かりしなる可し。

（十九）

お濱はお小夜の口より、始めて夫に欺かれたるを知り、伊香保へ同行せる同僚の吉村とは噓僞にて、全くその婦人なるを知りしが、何時の間に日頃生眞面目なる夫が、其樣な馴染を作り給ひしか、油斷はならぬもの哉と思ふ身には、夫の同伴を三筋の糸に嫖男を操つる種屬の婦女と思ひこそすれ、其を先頃沒去たる物部が未亡人とは、お濱もお小夜も淸吉も、夢にだも知らざりし。

夫婦となりて此浮世に旅立つ上は、足弱の婦を夫の扶け導くは、自然の道理なる可きに、开をしも懊惱とて、道傍に捨てゝ顧みず、夫のみ獨り進み行かんよは、一里の差は千里の距離を作りて、未來永劫

此夫婦が同一旅宿に宿り合はす事なかる可し。

お小夜より聞ける時のお濱の心にては、若し夫が馴染を重ねたる婦女と共に伊香保に赴んとなれば、斯く〱なりと打明し給ふとも、世の女子の如く、何の妾が嫉妬がましき事を云ふ可きぞ、勸めても共に行かしむ可きを、隱くすは水臭し、欺くは情けなし、夫婦の情愛はそんなものではあるまいに。

飽くまでお文が色香に魅せられたる良吉が心には、最早妻のお濱といふもの無ければ、早くお濱を離別して、お文を其跡に入れんものと憤搔き程に思へど世間の思惑浮世の義理に、押し切つてさうもならず、心ならずも密に不義の快樂に溺る。此男にても浮世の義理といふものを知るは、不思議なり。

伊香保より歸りたる時より、良吉とお濱との間柄精密と合はず、稍ともすれば良吉のみ獨り駈け拔けて歩まんとするに、始めの内はお濱も息急き切つて、夫の跡を追ひ行き追ひ蹤く事もありしが、尙も走り拔けんとする、無情き夫の早足に、足弱のお濱は唯身を焦燥るのみ、爭で夫に追ひ蹤き得べき、見す見す夫の後影を眺め入りて、遂には其姿を見失ふ事もありけり。

今日も朝より夫の機嫌平ならず、平常の如くお濱が汲み取りし金盥の湯を突如飜して、手桶の水につぎ替ゐたるさへ可笑しきに、朝餉の膳にも向はず、自ら簞笥の抽斗より洋服取り出して、急ぎそれに着替へ、疊み鞄を小脇に抱えたるまゝ、一語をも交えず出で行きしが、一丁ばかり我が家を隔たると、良吉は忽ち立止りて、霎時首を垂れて考へ居たるが、良吉が足は其儘官省へは向かず、引き返してお文の

家に向ひぬ。

案内知つたる家の事とて、良吉はづか〳〵と奥の間さして赴きし出合頭に、今寐起と見えて、寐卷姿のしどけなきお文に礑と行遇ひ、大層寐坊だねと挨拶しかくれば、朝早くより岸上の來るとは思ひ掛けねばお文は打驚き、おや大層お早く、こんな失禮な風姿を致しまして（と鳥渡自分の服裝を見返りて）只今直ぐに衣服を着替へて參りますから、まア御一服なさりませ、お駒やお客樣にお茶をお上げ申して置いておくれ。

（二十）

何うして此樣にお早くいらつしやりました、とお文が覗き込むやうにして不思議がるに、良吉は眞面目になり、何うしたツて、矢張兩足が互ひ違ひに歩行いて、此處へ來たんですと空嘯く有樣に、お文は口惜がり、あれ憎らしい、妾ハ其樣な事を伺つたのではござりません、平常になく今朝は大層お早うございますから、妾ハ又何うかでもなさいましたのかと思ひまして。妾は只今漸く目が覺めましたばかりでござりますよ、と額に垂れかゝる後れ毛を、指の先にて摘み上ぐれば、良吉は一層眞面目になりて、私の參つたのも大層早いかも知れませんが、貴女のお起になつたのも大層お早いやうですねと、眞向に太刀振翳されて、流石のお文も敵しがたく、懷中せし懷劍戞然と投棄てゝ、迚も貴郞のお口には敵ひませんから、妾は默つて居りますよ、と後は無言なり。霎時が程は睨み合ひしが、お文は手持不沙汰に堪

へかねて、女子の心弱くも、あのう、岸上樣朝御飯ハもう濟みましたのと口を切るに、良吉も默ては居られず、實は未なんですが、何か御馳走でもございますのなら、御厄介になりませうと云ふに、お文は迚も御馳走と申す程のものはござりませんが、と云ひ掛けしが、急に言語を途切らせて、良吉の顏を穴の開く程ぢつと見詰めて、御飯も召上らずに、此樣にお早くいらつしやる處を見ると、御遊樂の御歸途かと早や目眦を釣り上げかくるに、良吉は可笑がり、そんな事なら宜いんですが、それとハ大違で、今朝は官省へ行くのも厭になつて、途中から外れた證據には、其處に平常の鞄がと指示すに、お文はにたりと凄く笑つて、又奥樣との御喧嘩か、餘りお仲が好すぎるからの事、朝から奥樣の御惚氣で、妾はお腹が一杯になつて、もう朝御飯ハ喰べたうはござりませぬと、疊みかけられて、良吉は突如兩手を疊の上につき、これ此通り手を支いて謝罪るから、どうぞや御飯を一杯喰べさして下さりませと、皺枯たる假聲に調戲はじむれば、お文は腭にて打頷き、宜い〳〵、そんなに謝罪のなら、憎らしいのだが今度だけは勘辨して、妾が今美味ものを造へて上るから、其間奥の間で一睡とやつて待つておいで、ね、ね、と頸を傾くるに、良吉は打笑ひながら立つて奥の間に赴けば、お文は戸棚より海氣裏の小掻卷取り出でて、良吉が足の方へ打掛けぬ。

* * * * * * * * * * * * *

良吉が起き出でし時は、早や十時を二十分も過ぎたる頃なり、例の如くお文と食卓を挾みて、此日も亦酒に浸りぬ。

お文は急に心附けるものゝ如く、岸上樣今日は御官省はいらつしやらんでも、宜しいのでございますかと問はれて、良吉は手に持てる猪口を卓の上へに置き、何に決して行かなくても、宜いといふ譯は無いが、今から出勤するにしてもう、時刻が遲くなつたから、今日は廢止さ、何に一日や二日は休んでも構ふものかな、遇には骨休もしなければ、迚も身躰が續く譯が無い、朝早くから午後の五時まで、それ程用も無いのに、茫乎机と睨競をして居る位、辛い事はありやアしない、アハゝゝと高笑するに、お文は酒を溢るゝまでに良吉の猪口につぎ、そして過日の伊香保行は、未だ奥樣には知れませんのと甘えかくれば、良吉は手布にて口の端を拭ひ、何でも車夫の淸吉が家へ歸つて、さう云つたものと見えて、同伴の婦人と云ふ事だけは勘附いたやうだが、其婦人の風俗が滅方粹きだつたので、藝者か師匠か、何でも黑人と思ひ違へて、眞逆に物部樣の奥樣とは氣が附かなかつたやうだ、まア冗談は後にして、若し此樣な事が奥樣に知れました曉には、貴郎は何うなさるお積りかと、言葉に力を入れて問ひ掛くれば、どうするつて、外に仕方はありやアしない、お濱を離別して、其後へお前を直すばかりの事さ、と特にお前と云ひ放つ良吉の顏を、お文はつれ〴〵と打眺め、口の先ではさう被仰るが、何んだか眞誠に分つたもんぢやありやわしないよ、と云ふ時良吉は苦しげに叫び出すやう、これさ、みんな酒を零してしま

つた、仕末にいけないなあ。

こんな事を話して、此日は終日飲み暮したるが、尚も飽き足らでや、良吉ハ次の日の朝に至るも、お文が家の門を出でざりし。

（二十一）

世に男心ほど頼み難きものはあらざる可し。愛の心中に燃ゆる時は、其女子の爲に火中に飛び入るをも辭せざるが、一たび其火の消ゆる時は、水一滴だも惠まざるが常態なり。男子の愛は猶多數の林檎を皿の上に盛りたらんが如し、覆る時は悉く轉び出て、一顆だに殘らず。

己れに愛の衰へたる時も時とて。夫が敵手は其道の强者なり、情を賣り男を騙さんが爲に、此世に生れ來れりと云はん程のものなれば、夫の迷ふも無理ならぬかと思ひ當りては、お濱が心の中の恐怖は、勝り行くのみ。

彼村岡のお清樣が、先年肺病でお沒去の時、今呼吸を引取らうとなさる際に、夢中で紐育々々と、三度許り、囈言を被仰たまゝ、目をお瞑になつたが、あんなになつて死ぬ際まで、紐育に御坐る庄三樣の事を思つて、御自分の御心では、早や彼國へお出になつたお心持でゐらつしやるかと、其不憫なお心根をお察し申して、枕元に居た者は誰一人、顏を上げるものもなかつたが、それから全三月も經ぬ內に、庄三樣が歸つていらしつたのを見ると、彼國の女俳優とやらの手を、自慢らしく引いていらしつた

が、お清様のお心と對照せて見ると、親類でもない妾さへ口惜泪が零れて、庄三樣の喉吭でも嚙み切つて上げたいと思つた程、噫これを見ても此世の中に賴み少いものは男心。

つひぞ家をお明けになつた事のない良吉樣が、此頃は一週間に二夜も、他家へ宿つていらつしやる處を見ても、餘程鼻毛を長くしてゐらつしやるのは分るが、その爲め御役所の方を疎になさるやうな事があつては、それこそ大變だが、どうも近頃はちよく／＼御役所をお休みなさる事でもありやアしないかと、ろれが誠に案じられてならないが、旣に昨日も平常の通り、御役所から歸つていらしつたが、どうも何んだか變に思はれたのは、五時半頃に御役所からお戾りになつたのに、お顏の色を眞赤にして、御酒の臭を紛々させてゐらつしやるといふ理由はありやアしない、五時半では御朋友の處へ寄道をしてゐらつしやる時間は無し、何んでも彼の日も朝から御役所へは御出勤なさらず、例の御馴染の處から、直にお歸りになつたに違ひないが、肝腎の勤務をお懶けなすつては困る、それでなくつても近頃は、やれ改革だの節減だのと、喧しい世の中だから、妾はそれが第一氣になつてならない、と今宵も獨り孤燈の下に、悄然と腕拱きて耳端に響く鐘の音を數ふる折から、次の間の蚊帳の内にて、わつと泣き出す良一の聲音も、今宵ハ平常に變りて、身に染み渡るやうに覺ねぬ。

それに附けても一時も早く知りたきは、箇程までに罪も無き妾を苦しめ、科も無き夫を迷はす惡魔は、什麼何者ぞ、探ね出して怨言を云ハで置くべきかと、お濱がぢつと向方を見詰むる途端、閾の脇に手を

支へたるは島田髷を潰しに平たく結ひ、着物は灯影の闇き爲めよくは見ゑねど、大柄の竪縞闇黑にも著しく、緋博多の帶綺羅びやかに輝したる、年の頃二八許の美人にて、此方を見て靨然と打笑ふに、お濱は愕然として始て自己に返れば、油の盡きなんとする丸行燈の光、今や明滅の境に在り。

（二十二）

夫が内を外に歩行き廻ればとて、その妻の兎や角嫉妬がましく擧動ふは、最とはした無し。心の裡に嫉妬の念を蓄ふる時は、自然と容貌にまで露はれ出でて、釣り上げずとも宜き外眦を釣り上げ、睨まずとも宜きに怖き顔をなせばこそ、彼方の喜ぶ笑顔に比較べて、心憎き妻の顔ます〳〵憎く見ゑて、夫婦の愛は何時しか消え行く可し。夫が妻を虐待すればする程その妻の厚く夫に册きたらんには、夫が邪慳の角忽ち折れて、直に迷ひの夢を覺まさん。遮莫一旦は迷ひの淵に沈めばとて、妻が自己に對する仕打に恥ぢて浮氣を思ひ止むる氣にもなる可し。さるを若し心のまゝに、ありたけの嫉妬を起しなば、さらぬだに面白からぬ妻の顔、いよ〳〵面白く無くなりて、する事なす事一とつとして夫の氣に入らぬやうになれば、此夫婦の距離ます〳〵隔り行きて、再び一とつ處に膝を交ふる事思ひも寄らず。

玆に浮かれたる亭主ありけり、五日振りにて珍しく家に歸り、自己の家も他人のもの丶如き心地して、火鉢の傍に極り惡げに萎縮り、まだ晩飯を喰ひぬ程に、何か喰べる物は無きにやと、さも氣の毒げに其妻に打問へば、所詮今日もお歸宅にはなるまいと思ひて、何も其用意がしてござりませぬと、佛頂面膨

らせて慳貪に極め附けられ、腰の据りかけたる亭主も怫然として、さうか、さう云ふ譯なら、何處か其處等で喰べて來やうと、置いたばかりの帽子取り上げて、ぷいと出掛けたるまゝ、又七日ばかりは家に歸らず、歸れば又以前の如く妻に云はれて、夫の席の暖る機會なく、係る事を重復して、此夫婦遂に離れ〴〵になりけり。これにては妻の夫に浮氣をせよと勸むるに等し、これも嫉妬の損ありて益なき類似の一とつぞかし。

女子の第一に謹む可きは嫉妬の心なりと、常に我と我が心を制しながら、昨夜の夢は何事ぞ、敵手の女子を刺し殺したる處を、夫の發見て大に怒り、閃晃々したる刄を振り上げて追ひ詰められ、逃ぐるに逃げられず、遂に我が身も其の場にて打殺されたる處を見て、目を覺したるが、思はぬ事の何んとして夢に見る可き、日頃其女子を憎し妬しと思ひ居ればこそ、刺殺したる夢をも見るなれ。さるにても我が心のさもしさ、我が身にて我身に愛想の盡きたる話。何んの情婦の一人や二人、夫が持たればとて、憎き事のあらうぞ、怨めしき事のあらうぞ。

夫はそれにしても今日は夫も御出勤なされず、何故御出勤は遊ばされぬと伺へば、只少し氣分が優れないとのお言語、それなら當時の瀬川先生を呼びに遣しませうか、お藥は召し上りませぬかと申し上げても只首を左右にお振りなさるばかり。常時になく茫乎と机の上に頬杖突いて何事か考へて居らつしやる御樣子、どうも變でならないのは、若しや……御役所をお免官になりはしまいか、さうでもならうも

のならそれこそ大變、それが又案しられてと、お濱はそれからそれへと考へ行きて、あるにもあられぬ思に悶ゆる折しも、あのう奥樣御役所から御使者がと、耳の傍に響くお小夜の聲音に、お濱ハ愕然として、狀箱引つ攫ふやうに、奥の間さして走り行き、机の前の夫に差し出せバ、狀箱の眞田紐解く間も焦燥しがるお濱の心に似ず、良吉は悠然と蓋取り上げて、中なる一葉の書附取り出して、口の内にて默讀する間も、お濱は氣遣ハしく、夫の顏のみ見詰め居たるが、多時してさも憤慨したる語氣にて、何に役所にばかり、日は照らぬわとの夫の一言に、お濱は顏色を變へて、ど、ど、どうかなさりましたか。

（二十三）

御馴染と御一處に、伊香保に赴き給ひし事も、大概其筋とやらの、耳にも入りたるなる可し。人並外づれて、朝は定りたる時刻より三十分も早く、御役所の机の前の椅子に腰を掛け、退ける時は他人より一時間も遲く、洋彩塗の門を潜るやうにしても、容易に褒められさうにもしない近頃の世の中に、何んともない身体を病氣と詐つて、藝妓風情と伊香保に赴き給ひしさへ、如何あらんかと案じ居たりしに、其後は三日におげず、御役所をお懶なさるやうでは今度の御免職も無理ハ無く、此上どうなさるお積りか、今日も朝から、お出ましになつたぎり、未だにお歸宅にならないが、何處を歩行いていらつしやるのやら、なか／＼此頃の世の中、直ぐに外の口が發見るといふ目的ハ無し。此儘何處へも御勤めにならないやうになれば、御兩親樣と二人の小兒を、此後何うして養つていらつしやるお心か、一月や二月は、

何うにか斯うにか過ごして行かれるにもしろ、今迄が有り餘る財產といふでは無し、それを考へて見ると、妾は心細くなつて來て、何うしたら宜からうかと、實に途方に暮れて仕舞ふ、それで無くても伊香保以來大底心配な處へ、降つて沸いたる今度の氣苦勞、何うして宜い事やら、考へれば考へるほど、身を殺がるゝやうな。それに此度の御免職から、旦那樣が若し自棄におなりなさるやうなお心でもお起しになつて、家の事も何もかもお搆ひ附なさらず、其御馴染とやらの處へばかり、お出で切りにでもならうものなら、それこそ妾は何うしたら宜からう。旦那樣も御養子の御身分、此家が氣に入らぬから、出て行くと被仰たまゝ、其御馴染と一處に世帶をお持なさるやうな事にでもならうものなら、取殘された二人の小兒と妾は、何うして其の日を過ごして行く事が出來やう。若し万一そんな事にでもならうものなら、第一御兩親へ對して、妾が合はす顏がありやアしない。それでなくても舅樣は流石に男の事とて、妾に向つてそれ程にも被仰らないが、姑樣は隨分利かぬ氣の御氣象。旦那樣が近頃毎度お家をお明けなさるので御機嫌惡く、一昨夜も一昨夜とて、旦那樣の御歸宅にならぬを御承知でありながら良吉は昨夜何時頃戾つたかとの御尋問には、妾もお答の申し上げやうもなく、下を俯いて默つて居ると、何んでも亭主の浮氣をするのハ、女房の接待が惡いからだよ、女房が萬端搔い處へ手の届くやうにさへして居たことなら、亭主が浮氣をしやうと思つても、する隙が無いやうに出來て居る。彼のお梅樣を御覽、彼樣に親類中でも評判の浮氣者の政次郞樣が、彼のお梅樣が來てから、全然生れ替つたやうに、斷

然放蕩を廢めたのをと、何かに附けて兎や角さう被仰るが、妾の心の裡の切なさをも、少しは御推量下すつても宜からうにと、妾は明暮心の中て泣いてばつかり、今度旦那樣が御免職になつてからは、御兩親に對して、何んなに妾が辛からう。それ見なさい、お前の仕打が惡いので、とう〳〵良吉を免職させて仕まつたのも同じ事だと、口ではさう被仰らなくても、妾は針の莚に据つて居るよりも苦しく、それやこれやを思ふと、此頃は三度の御飯も碌々咽喉へは通らず、此樣に身躰も痩せてしまつたと、我が手を撫で擦り、落つる淚を拭ふ力だに無し。

此日も空しく思ひに暮らして、斜に射れる疊の上の晷影も、何時しか名殘なく消ゑ行きて、部屋の內の暗くなれるに、お濱は衝と立ち上りて、結ぼれたる氣を晴らさんものと、窓より外の方を眺むる折りしも、彼方より來蒐る男女の兩人連、夫婦と覺しきが、いと睦しげに笑ひ興じて、擦れつ縺れつ歩武を運ぶ有樣を見て、世には恁る夫婦もありけりと、お濱は有繫女心の妬ましさに、一度は顏を反向けたるが、又思ひ返して、如何なる話談を爲し居るならんかと、聞こゑぬと知りつゝ耳引き立てゝ、其後姿の見ゑずなるまで、おつと彼方を見入りぬ。

霎時してお濱が此方を振り向く途端、韋駄天の如くに窓前を走り過ぎたる二人乘の車上の男女ハ、こは什麼に！　一人は紛ふべくもあらぬ我が夫にて、それと肩を列べし女子は、深く蝙蝠傘に其半身を掩ひたれど、去頃死去りたる物部が未亡人のお文なるに、お濱は餘りの驚愕に、あはや其の場に卒倒れんと

して、僅に格子に攫りて、多時茫然たり。

餘りの驚愕に撃たれて、お濱は掌の裡の物を取られたる如き心地して、多時呆然たりしが、軈て自己に返ると共に、お濱はよゝと其場に泣崩れぬ。

偖はさうした敵手のありたるか、さうとは今が今迄夢にも知らぞ、全く新橋か日本橋邊の御馴染とばかり思ひ居たるは誤りにて、その女子と云ふは、物部樣の奧樣なりしか、こは〳〵とばかり、お濱は暫し言葉だに無し。

（二十四）

人もあらうに大それた、餘所の奧樣と不義密通をなさるといふがあらうか。また物部さまも物部樣、未だ孝次郎さまが御沒去になつてから間も無いに、あだし男と契を交ハすとは、云はうやうのない人非人。妾がお悔みに上つた時、何と被仰つた。此樣に兩眼をお泣き腫らしになつて、淚ながらに、妾の心細さを御推量下さりませ、杖とも柱とも賴みにする夫に死に別れて、此後何うして宜い事やら、實に途方に暮れて仕舞ひまする、こんな事なら寧そ夫と一處に死にたうござります、と被仰つた御言葉ハ、未だ妾の耳の端に殘つて居るのに、何んぼ女子の淺墓な心柄とは云へ、其時被仰つた御口上は、全くの詐言か、其時お墮しになつた淚は、全くの空淚か。土の下に御座る孝次郎樣が、此有樣を御覽になつたら、まあ何んと被仰るだらう。それに又家の旦那樣に限つて、眞逆に此樣な事をなさらうとは、思ひも

掛けなかつたに、敵手もあらうに、他人の妻、加かも其夫と云ふは、兄弟同様に睦しくして居らしつたお朋友だとは。妾は呆れて言語も云はれぬ。夫れは男子の事、偶には御愉快をなさる事もあらう、麝香の紛々する女子に酌を取らせて、御酒を召上る事もあらう、緋縮緬の透いて見ゆる透綾の上を、膝枕になさる事もあらう。が歴然とした他人の妻に、不義を仕掛るといふがあらうか。そんな事をなすつては、妾が世間へ對して、合はす面目があらうか。

お濱が狹き胸の中は、宛然沸騰りて、切なさ辛らさ堪へ難く、宜き思慮も出でばこそ、堰き來る涙止めかね、泣くより外に事ぞ無き。

此時次の間に當りて、お濱々々と呼び立つる聲に、お濱は吃驚愴惶て泣き顔押し隠くし、何氣なき体にて顧盼れば其處に居るのなら、何故早く返事をしない、先刻から何の位尋ねたか知れやしない、と皺枯たる聲音に極附られて、お濱ハ頭を下げて、両手を疊に支へ、おや左様でござりましたか、それは誠に濟みません事を致しました、と詫び入る間も待たず、少しお前に話して置きたい事があるから鳥渡彼室へお出でと云はれて、お濱は胸に針刺す思ひにて、姑に從ひて競々然と奥の間ゝ赴けば、姑は火鉢の傍の更紗の坐布團ゝ坐を占め、室の隅に縮りたるお濱を睨め付け、お濱此頃良吉が三日にあげず家を明けるのを、お前は知つて居るのかいと、そら〳〵しく打問はれて、良人の我が家を明け給ふを、其妻の知らぬ事のあるべき。さは云へ知つて居りまするとは、妻の身の何んとして云はりやうぞ、と答ハ無くて

ます〳〵俯向くお濱の有樣に、姑は猶も言語を暴らげて、お前ハ妾が何んにも知るまいとお思ひだらうが、一昨夜も前一昨夜も二晩續けて良吉が家を明けた事位は、何んぼ妾でもちやあんと知つて居りますよ、とさも憎く憎くしく云はれて、お濱が頸はいよ〳〵垂行くのみ、姑の顔を見上る力も、なき出さんとするをぢつと堪ゆる切なさを知るや知らでや、姑は猶も言語を續け、放蕩で夜を更かすから、自然肝腎の御役所をも休み勝で、とう〳〵免職になつて仕舞つたのも元はと云ば、全くお前が不束で、萬事に行屆かないからの事。良吉が放蕩をせずに、ちやん〳〵と御職務を勵んで居た事ならこんな事にもならなかつたらうに、良吉が免職になつて仕舞つた後、何うして兩親を養ふ積りか、親には苦勞を掛け、夫の機嫌は損ふ、そんな女房が此廣い世の中に、又と外にあらうか、と云はでもの事まで角立てゝ、頭ごなしに毒づかれて、そりやアあんまりなお言語、妾の胸の中の苦しさをも、少しは御推量下されても宜さゝうなもの、とお濱はあまりの口惜しさに、口の端まで迸る言語をぢつと呑込み、今生中此處にて口答をなさば、却つて姑の機嫌を損ふ道理と、唯何事も辛抱して頷き居たるに、姑はます〳〵怖き目にぢろりとお濱を睨め廻し、お濱、お前は良吉の敵手と云ふのを、知つてお出でかね、と意味ありげなる尋問に、お濱ハ心の中に兎つおいつ、姑は早や知つて居りながら、此問を起せしのやら、全く知ずして、此問を起せしのやら、何方とも心一とつに定めかねて、只口を噤みて居るのみなるに、姑は焦燥がり、知つて居るのか、知らぬのか、何故早く返事をしない、妾に返事が云ひたくなければないで、強ひて聞

かうとも云はないが、良吉をあんなにして仕舞つた上からは、妾兩人はこれからお前に養つて貰ふばかりさ、と煙草輪に吹く有様に、何んと返答もせん方なみだに暮るゝ折しも、次の間よりちよろちよろと駈け來る良一が、紅葉に似たる兩手を母の膝に突き、訝かしげに其顔を見上げて、母ちやん、泣いては可厭、坊が泣くと、母ちやんは叱るくせに。

（二十五）

あまりと云へば、姑様の無理難題、旦那様が此度御役所を御失策になつたのも、全く妾の不束から、不行屆からとは、お情けない御言語、それは妾の事、何うせ万事に附けて足らはぬ勝、不束者には違ひございますまい、不行屆者には定つて居りませう、が今迄何一とつ御兩親様に對して、これんばかりも御言葉に背きました事がございませうか。舅御様が肩が張ると被仰れば、直ぐに揉んで上げ、姑様が御腰が痛いと被仰れば、直ぐに摩つて上げるやうにして、妾の心の裡ではこれでも、精一杯に致して居ります積りでも、姑様の御氣には叶ひませぬのか、御氣に入らぬ處があるのなら、其處が惡るい、此處がいけぬと何故被仰り附けては下さりませぬ。惡るい處がございますのなら、改めも致しませう。御氣に召さない處がございますのなら、何うともして、御氣に召すやうにも致しませうが、只默つて居て厭味ばかり被仰つては、妾は何う致して宜いのやら、薩張理由が解りませぬ。妾の方で此程までに思つて居りまする心根を、少しは不憫と思召しても宜さそうなもの。御兩親にさへ其通り、況して旦那様に對し

ては、何一とつお氣に障るやうな事でも、申上げた事があらう。隨分無理な事を被仰る時でも、耳を塞いで只唯々と申上げて、そでない御命令でも、それは左樣ではござりますまいと、妾が抗言を致した事がありませうか。それに何が御不承知で、物部の奧樣と不義密通をなされましたか、あまりにお情けない旦那樣の御性根。彼のお光と良一とは、貴郎のお心では、御可愛くは思召されないのやら。今迄どんなに旦那樣に傅いて居るかは、始終傍で御覽になつて、御承知でありながら、良吉が免職になつて仕舞つたからは、兩人は是からお前に養つて貰ふばかりさとの御口上へ、妾をおいぢめなさると申すもの、女子の瘦腕に、二人の小兒まで抱えて居る身の、何んで此後妾が何うして御兩親をお過し申して行く事が出來やう。これと申すも、全く彼の物部樣の奧樣が、あんな事さへなすつて下さらなければ、こんな苦勞はせずとも濟まうに。怨しさはお文樣、情けなさは物部の奧樣。

否々、物部樣ばかりをお怨み申すのは女子の淺墓な心かも知れぬ。旦那樣の方からお挑みになつたのかも知れねば、滅多な事は申されない。今日も亦朝から、戸外へ御出ましになつたが、今頃は例の物部樣の處へいらしつてお出でかと思へば、怨めしさは旦那樣、情けなさは良吉樣。

此處で斯うやつて、兎や角案じてばかり居やうより、幸ひ物部の奧樣は、妾も知らないお方でもないから、親しくお目に掛つて、詳しく彼方の御樣子も伺つた上で、願つて見る方が捷徑かも知れないから、間を見てお文樣の御宅へ上つて見やう、それに越した事は無い、と何思ひけん、衝と立ち上りしが、

又も思ひ返して、撻と其場に膝を突き、とは云へ何んで其樣な端したない事が出來やう、阿容々々と何の面目あつて、これ〳〵で良人が毎度此方の御世話になりますそうですが、何うか御異見なすつた上、これからお寄せ附け下さらぬやう願ひまするとは、何の口で云ひ出す事が出來やう。彼の淨瑠璃にもある主水のお神さんのやうな眞似は、妾には迚も出來ないから、矢張〳〵此處で思つて居るより、外に仕方はあるまい。

そんな事を云つて居るばかりでは、夫が改心する時機はあるまいから、何程辛い切ない思ひをしても、何うでも一度お文樣にお目にかゝつた上で、妾の心の切なさをも、ようく口づから申上げて、旦那樣との仲を切つて頂くやうに、お願ひ申すより、外に宜い分別はござんせぬ。

兎やせんかくやと、お濱は立つたり居たり、多時躊躇ひしが、斯ては果てじと、佶と心を取り直し、何んしろお文樣の御宅へ伺つて見やう。

二人の小兒をお小夜に任せ置きて、獨り我が家を呻吟ひ出でたるお濱は、思案に塞がる胸を霽らさんと、淚に霞む目を擧ぐれば、早や宵月の影白く、此方を見て嘲るものゝ如し。

往來の人々に泣顏見らるゝも恥かしき心地して、お濱は頸を垂れて俯けるまゝ、お文の家を指してぞ急ぎ行きける。

お文の家の門を去る半町許の處へ辿り來ると、今迄走るが如きお濱の足並遽に緩く、幾度か立止り

て、何事をか考ふるにや、二歩進みては三歩戻り、何時其處へ達く時しなければ、斯くては果てじと、お濱は佶と心に決して、お文が家の小門より、小走りに其裏口に辿り着き、若し鳥渡御免下さりませ、と訪ふ聲音さへ、いと力無し。

（二十六）

鳥渡と奥様、あのう……岸上様の奥様が、お出で遊ばしましたよとのお駒の注進に、有繋のお文も、頸に白刄を當てられたる心地、氣味惡るさに思はず巡逡して、おやさうかいと口走りたるのみ、多時お駒の顔を凝視め居たるが、そしてお前、妾が居ると申したのかい、との問にお駒は造作なく、へい、彼方で奥様は居らつしやいますかとの御尋問ゆゑ、居らつしやいますると申上げましたばかりと、答ふるお駒をお文は睨め附け、妾が居ると返事をすることがあるものかね、不在を使つて追拂つて仕舞へば宜いのに、といふお文の顔を、お駒はつれ〴〵と打眺め、奥様彼のお方が、岸上様の奥様でいらつしやいますの、と云ふお駒をお文は叱りつけ、何んだねね、そんな事に念を押してどうする積りだい。併し居ると云つて仕舞つた上は、今更不在だとも云はれまいから、客室へ通して置きな、只今食事を致して居りますから、直ぐにお目に掛りまするとさう申しなと、お文は立ち上りて、次の間に赴きしが、程無く簞笥の抽斗の開く音の聞ねたるは、衣服を着替へんとてなる可し。

心ある身のお濱は、以前に來りし時とは、全く異りたる家を訪ねし如く、導かるゝお駒にさへ、後ろ

見らるゝ氣の指して、捗々しく歩みを運び得ず、漸く客室の隅の方に、小さくなりて座を占むれバ、どうぞお敷き下さりませと、お駒の差出す座布團を、脇の方へ押し遣り、軈てお駒が持ち來れる茶碗の茶を、お濱は夢中に一息に飲み干し、胸撫で下せど、生憎に心のみ騒立ちて、お駒の次の間に辷り出しより、お文の出で來るを今か今かと待つ心には、ガタリとする襖の音にも胸先づ轟きて、それにしてもよくお文樣のお會ひ下さる、此處へ參る迄は、迚も直ぐに御面會ハ願はれまい、不在よと一口に跳ね返されんと思ひ居たるが、心よくお會ひ下さるれば下さるゝで、何んだか妾ハ怖いやうな心持がする。それに第一お目に掛つたら、何んと申し上げたものかしら、何う云ひ出して宜いものかと、又も思案に沈む身は、簷頭に搖るゝ風鈴の音にだに、思はず慄然して、妾とした事が。

襖の開らく音して、徐々と入り來るお文の足音に、此方のお濱はます〳〵首を垂れて、お文が面を見上ぐる力も失せ、疊に兩手を支へ、其後は誠に御無沙汰を皆樣御機嫌克うも、半ば口の内にて呟きたれば、お文の耳にハ入らざりしならん。

お濱が小聲とハ反對にて、お文は聞ゑよがしの高聲にて、これは岸上樣の奧樣、ようこそ此樣な汚い處へお出で下さりました、誠に存じながらつひ〳〵御沙汰ばかり、皆樣……御小兒樣方も御壯健でそれは何より結搆な事でござりまする、と膝を進めてお文が傍に押し遣れる座布團を引寄せ、奧樣どうぞこれをお敷き下さりませ、御遠慮遊ばしては却て妾が迷惑致しまする。今日は遠路の處をよく御出で下

さりました、と縱板に水を流すとは是れ。爽かなる辯舌に驀しかけられて、お濱ば何んと挨拶の出ばこそ、ます／＼鼻白みて逡巡するのみなりければ、お文はいよ／＼進み出で、少し膝を崩して身体を斜に構へ、右手を疊の上に突きて、ぢろりとお濱の顔を眺め、奥樣何か妾に御用でもおあんなすつて、お出で下さりましたか、とお文に先を越されて、お濱はます／＼云ひ出し兼ね、云はんとしては口籠る風情を見て取るお文は、何か御用がございますのなら、何うぞお早く被仰つて下さりませと促されて、お濱はますます急き込み、あの、あの今日上りましたは、外の事でもござりませんが、少々貴女に折入つて、お願ひ申し上げたい事がござりまして……と云ひも終らぬに、お文は急に怪訝なる容貌を裝ひ、へゑ！妾にお賴みの筋がござりまして、と飽く迄空嘯く樣の、憎しともいと憎かり。

お濱は佶と心を決し、其お願ひと申しまするは……良吉が每度此方の御世話になりまするのは、誠に妾も嬉しう存しまするが、其爲と申す譯でもござりますまいが、此頃は每日のやうに家を外に遊び廻り、既に此度の免職も、そんなこんながお上に知れたのだらうと、兩親も申す位ゆゑ、どうぞ此後良吉が上りましても寄せ附けて下さらぬやう、お願ひに參りましたと、お濱は袂より手布取出でヽ、目の縁を拭ふ有樣に、お文はせヽら笑ひ、おや夫れで態々妾處までお出でになりましたか、それは近頃御念の入りましたこと、オホヽヽヽ。

（二十七）

叢に集く虫の音に、秋の名殘を告げ、軒端に響く風鈴の、冬に近きしを知らせ顏あるに、袂を拂ふ夜風、今宵は一層身に染渡りて、淡く霞を包む月代の、烟を吐も物凄し。市街を隔りたる新開地の、家並も揃はず、道路の片側は田甫に續きて、蛙の雨を呼ぶ聲、頻りに聞ゆ。

此處へ來蒐る一個の婦人、腮を深く襟の内に埋め、悄然と歩を運ぶやうなりしが、何思ひけん立止りて月を見上る顏のいと物凄く、ぱら〳〵と頬に懸る鬢の毛の風に揉まるゝを、懊惱げに口の端に咬え、思ひに窶れし顏の、肉落ち頬秀で、深く凹みたる眼球に、月影の蒼白く浴びたる、一見人をして悽然たらしむるが、深く物思ふにや、歩みを運ぶ風情も、いと懶げなり。

凄き目に後方を顧眄りて、それにしても怨しきは、お文樣のなされ方。お目ヌ掛かつてお願ひ申す妾の心の内の切なさ辛さを、少しはお察し下だすつても宜さゝうなもの、妾へ對しての今夜の御挨拶は何事ぞ。それほどに大事に思召す御亭主樣ならば、鐵の鎖にでも繋いで置いて、外へ出ないやうに、始終番をして居らつしやれば宜いのにとの御言語は、あまりといへば、人を馬鹿に仕過ぎていらつしやる。それに默つて伺つて居れば、宜い事と思召して、妾は決してお呼び申上げたい事もないが、良吉樣の方で、此方にお出でなさるから仕方がありますまい。妾に寄せ附けて呉れるなと、お頼みになるよりハ、其暇で早くお家へお歸りになつて、大事の〳〵の御亭主樣に、此後文の家へはお出掛け遊ばすなと、奥樣の貴女からお願ひ遊ばした方が捷徑でせうよと、他方を向いての被仰り方。妾が泪ながらに、事を分

けてお願ひ申すのを、鼻の先でおあしらひになつて、其樣にお大事な御亭主樣とは存じませず、妾の方でお呼び申したのが惡るければ、此の文を何うとも、貴女の御氣に召すやうに、擲つとも叩くともなされませと、仕舞には御自分の御躰軀を、妾に摺り附けての惡口雜言、妾の方で寄せ附けずとも、良吉樣の方で、づん〴〵いらつしやるから仕方がありませんよ。それにかうやつて今夜も、御家を御留守にしていらつしやる間に、大事の御亭主樣が、若し萬一外へ御出掛にでもなると、それこそ大變でございませうから、此處でつべこべ被仰ずと少しも早く、とつとゝ御家へ御歸り遊ばせ。駒や岸上樣の御下駄は、玄關に御直し申してあるかい、と突き出さぬばかりにして、妾を追ひ出した跡で、塩花まで撒くとは、餘りと云へば、人を輕蔑んだなされやう、それ程までに妾は罪も造るまいに、と思ひ餘りてはら〴〵と落つる泪は、葉末に置く露の、風に轉ぶが如くなり。

彼樣にまで被仰るやうでは、迚も妾の願望を聽いて下さらないばかりか、却つて妾への面當に、此上尚の事繁々良吉樣をお呼び出しなさるに違ひあるまい。妾の心が不憫だからと、三度お會ひになる處を二度にして下さるといふやうなお心は、お文樣には微塵もありやあしまい。良吉樣にお會ひなさるのもいゝが、さうなされバなさるだけ、妾が御兩親に叱られるばかり、妾が叱られるのも宜いが、旦那樣が此頃の樣に、朝から晩まで只ぶら〴〵としてゐらしつては御兩親始め妾達が、其日を過ごして行く事が出來なくなるだらう。それに今夜お文樣にお目に掛つて見れば、何うやら御姙娠の御樣子……それや

これやを考へて見ると、此後妾は何うなることやらそれに附けても、怨めしいのは彼のお文樣と、泪の顔を上ぐれば、月は何時しか雲間に入りて、今迄晴れつる空の、今にも雨降らんとす。

（二十八）

彼樣な事なら、初手より行かぬが宜かりし。態々彼處まで恥辱を搔きに出向いたも同じこと、今更幾度操返しても仕方は無いが、妾の參つた爲め猶の事、妾への面當に、此後繁々旦那樣をお呼寄せになりはしまいか、彼のやうなお文樣の御言葉にては、この跡何んな事をなさるやら、知れたものぢやアあるまい。これから家へ戻つて、お小夜に今夜の樣子を尋ねられた時に、妾が合はす顔はあるまい。何事も斯うなつて來ては、と吐息と共につく鐘の音に、今宵も痛く更け初めて、犬の遠吠も遙になりぬ。

只有る貧家の見るも鬱悒く、軒低く棟傾きて、表を建切る二枚の板戸も、その節穴を塞ぐに由なき、家の內に當りて、呱々と啼立つる小兒の泣聲に、通り蒐りしお濱は思はず立止りて、見るともなく戶の隙より內を覗き見れば、小かなる踏臺の上に、覺束なげに光る豆洋燈も影暗く、ほやの處々に紙を貼りあるも哀れにて、三疊敷ばかりの部屋の中央に、薄き煎餅布團の縞も柄も見分がたきに、鼠色の綿のはみ出でたる上に、打臥したる小兒の被へるものとては、夜目にも知るき垢染みたる單衣一枚にて、其傍の疊の上に臥したるは、三十路ばかりの女房にて、蓬に亂したる髮の毛も物凄く、日に燒けたる皮膚の赤銅に似て、頰骨隆く肉陷り、此世の者とも思はれぬが、傍なる小兒の泣き立つるをも知らで熟睡した

る、晝間の稼業の疲勞も推量られて、夫は何地行きけんと、お濱は漫ろに我が身の行末を思ひ當りたるか、袂より手布取り出で丶、密と目元を拭ふやうなりし。

此子の泣くに附けても、良一の事思ひ出されて、嘸や妾の歸りの遲きを待ち詫び居らん、お小夜一人にて困じ居らんなど思ひ附きてい、足の進行もはやく、軈て我が家に歸り着けば、お小夜は嬉しげに出迎へて、奧樣、あちらの御樣子は如何でござりましたと問はれて、お濱は答も無く、岸破と其塲に泣き伏しぬ。

れ濱は今宵のありし一伍一什を、泪と共にお小夜に物語れば、お小夜は聞く毎に、口惜し泪止め難ね、物部樣のあんまりな爲され方、そんな事まで奧樣に被仰りましたか、奧樣より妾が口惜しうござります、何んですつて妾の方ではお呼び申したくもないが、此方の旦那樣がお出でになるから仕方がありません、それ程お腹がお立ちなら、何うともなされませ、此處へ來て其樣な事を云つて居らつしやる暇に、家へ歸つて大事の〳〵旦那樣に、以後此方へいらつしやらないやうにお願ひ遊ばせつて。其樣な事は何も物部樣に伺はなくつても、誰でも存じて居ります、旦那樣に何程御異見を申上げても、御改心下さらねばこそ、恥かしい思ひをしてまで、物部樣の處へ參つて、お願ひ申すのです。假令心の中では何う思召して居らしつても、貴女がさうまでに被仰る事なら三度お會ひ申す處は二度、二度の處は一度に致しますると御答へ申すのが、女子の常かと此小夜でさへ思ひます。又眞人間の皮を被つた者なら、第

一貴女樣に顔を合はす事も出來ない筈だに、平氣でお會ひなさるばかりか、なんぼ口が横に裂けて居ればとて、そんな事が宜く奥樣に向つて被仰れたもの、なおに彼方が其樣な御了簡なら、此方も其積りで居りますばかりのこと、奥樣、何も其樣にお泣き遊ばす事ハござりません、今夜ももう餘程夜が更けて居りまするから、そんなにくよ〳〵考へてばかり居らつしやらずと、早く寐しなりませ、坊樣も先程小夜がいろいろにお賺し申して漸くお寢かせ申しましたから、もう小便にお起になる時分、早く脇へ行らしつてお上げ遊バせ、妾も就眠ますから、と立ち上りながら獨言のやうに、又今夜も所詮旦那樣はお戻りにはなりますまいから、裏口の戸〆を致して參りませう。

今宵も空閨を守るれ濱は、お文の云へりし事の口惜しさに、長き秋の夜も目睡もせで。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝良一は平常の如く起き出でゝ、自己のみの用に定め置く、小さきぶりきの金盥にて顔を洗ひて後、手拭片手に提げたるまゝ、椽先に立ちて、此間の縁日にて求め來りし金魚の、心地よげに泉水に泳ぐを餘念なく眺め居たるが、如何したりけん、足踏み外づして椽先より轉び落ち、ひいと一聲高く叫びたる聲にお濱もお小夜も、何事にやと馳せ出づれば、良一は敷石の角にて強く頭蓋を打ちたるものにや、韓紅に、額際を染めて、仰に打倒れ居る有樣に、お濱ハ膽潰れ、多時は开を起さんともせざりけり。

(二十九)

跣足のまゝ椽先より飛び下りたるお小夜に勵まされて、お濱は板金剛を穿く間も無く、急ぎ庭前に降り立ちて、お小夜と共に良一を扶け起し、漸く椽側に引上げしが、汐時にや、良一が出血は猶歇まざりけり。

流るゝ鮮血の目に入りてや、良一は目蓋を開き得ず、噓唏きする有様を見て、お小夜は言語遽しく、只今冷水を持つて參りますると云ひも敢へず、土に塗れたる足を拭ふ間も疾く〳〵、敷石の上にて、二三度足の裏を擦り、飛ぶが如くに庖厨の方へ駈け入りしが、程無く眞鍮の金盥を持ち來りぬ——水の滴るをも知らで。

おや妾とした事が、冷水ばかり持つて參つて、肝腎の手拭を忘れてと、又引返して手拭を持ち來り、良一の顔を洗ふ間に、お濱ハ納戸の方へ馳せ入りて、長火鉢の抽斗より、無名異を取出さんものと、隈なく探むれども、見ゑざるに氣を焦燥ち、取り外したる抽斗を、悉く疊の上に覆しぬ。

お濱ハ漸く無名異の袋を發見け出し、急ぎ开を良一の疵口に塗り附けて後、今疊みたるばかりの床を、奥の六疊の間に打敷て、靜に良一を臥さしめぬ。

出血も歇みたるやうなるに、お濱は漸く胸撫で下ろし、怖怖右手を良一の額に押し當つれば、其熱さこと、宛然火の如きに、お濱は又も胸を跳らす。全く兩眼を閉ぢて、苦痛に堪ゑぬものゝ如く、顔を顰

め手を悶掻き、泣きも出さぬ有樣を見て、お濱は泪を止め敢へず。

かゝる間に、お小夜は馳せて、常に賴み附の醫師許赴きぬ。時を移さず馳せ附けたる醫師は、良一の枕頭に進み寄り、帶の間より兩蓋の金時計を取り出して膝の上に置き、良一の可愛き手を握りて、小首を傾けたるに、お濱は早や胸を轟かせ　軈て其の打ちたる頭部の疵を撿め見て、おや大分お酷く……と醫師の打驚けるに、お濱は膽潰れたらん心地したるが、醫師は良一の額に手を觸れ、大分お熱氣がと云ひさま、傍に置ける小形の鞄革より、黑き筒入の驗温器を取り出でゝ、良一の腋の下に挾み、徐にお濱を顧眄りて、お頭蓋のお怪我は、それ程の事もござりませんが、場所が惡うござりますだけに、餘病を引き起しませんと宜しうござりますが、餘程お氣をお附け遊ばしませんと、惡く致しますと　お熱が昇りまして……。何うして又此樣なお怪我をと問ふに、お濱は漸く顏を上け、鳥渡の間妾が見て居りません内に、泉水の金魚に見惚れて、椽側から庭に墮ちまして、敷石の角で酷く頭を歐ちましたものと見ゑまするとゝ答ふるに、醫師は成る程〳〵と小首を仔細げに打傾けて、お濱の談話を聽き居たるが、お幼少うちは餘程傍でお氣をお附け遊ばされんと。既に過日も直ぐ私しとこの近處の小兒が、どうした機會か、洋燈を轉覆して大火傷を致しましたが、とう〳〵其爲め……と云ひ續けたるが、急に心附きて、外の談話に移りしが、お濱は時も時、可厭な事を物語る醫師かなと、心の内に此醫師を憎く思ひける。

多時して醫師は、腋の下の驗温器を取り出し透かし見て、大分お熱が……三十九度許りと云ひ棄てて、

又元の如く鞄革の裡に仕舞ひ、お小夜が傍に持ち運べる金盥の水にて手を洗ひ、手拭にて手を拭ひながら、お濱に打向ひ、氷囊で頭を冷やしてお上げ遊ばせ、成る丈け袋を大きく致しまして、と云ひさま下を向きて、此上お熱が昇りませんと宜しうござりますが。

御大事にと醫師が挨拶して歸り行きし後、お小夜は軈て水藥と散藥とを、二日分宛手に提げて歸り來ぬ。

哀れなるお濱は、此圖らざる良一の負傷に、又新たなる苦勞を增しぬ。醫師の言語にては、何んしろ場所の惡しければ、此上熱を增さねば宜きがとの事、生憎此頃の時候の不順さ、今良一が若しもの事でもあらうものなら、妾は迚も生きてゝ居られぬ。それに旦那樣のお留守に、此樣な事を仕でかして、お歸宅になつてから、何んと云ひ譯の致しやうがあらう、と堰き來る泪止め兼ねて、手に持てる氷囊を投げ捨てゝ、良一の枕頭に泣き伏せば、良一は僅に目を見開き、片手を頭に上げて。母樣痛いよ。

良一が泣聲にお濱は首を上げ、おゝ〳〵、嘸痛たからうが耐忍しておいで、今に直ぐ治るから、と又もや氷囊を良一の頭の上に載する折しも、次の間より入り來る良吉は、お濱をぢろりと尻目にかけて、良一は何うした、何處か加減でも惡いのかと問はれて、お濱は虚言も云へず、泪ながらに有りし一伍一什を物語れば、良吉はお濱の語り終るをも待たで、お濱お前は良一を殺しても宜い積りなのか。

（三十一）

これも全くお前の不注意から起ること、傍に附いて居ながら、此樣な大怪我をさせると云ふがあるものか、若し此儘にでもならうものなら、お前は何うする積りなのか、と嚙み附く如くお濱を叱りたる良吉は、一方に平常に無き温顔を裝ひ、右手を延ばして、良一の夜着の上を撫で摩り、オゝよし〳〵、嘸痛からう、憎い母さんだ、坊は何んにも知らないのだが、全く母さんが惡いのだよ、と宥め賺さんとせしに、良一は寐ながら首を左右に打振り、否々母ちやんが惡いんではないよ、坊が惡いんだ。坊がお池の金魚に見惚れて墮落たんだから、其樣に母ちやんを叱ッては厭やと、幼少ながら自己を愛する者を知りて、母親を回護ふいぢらしさに、お濱は嗚咽返り、氷嚢取る手も顫はれつ、良一の顏を見詰めて、頬を傳はる涙、はら〳〵。

案外なる良一の言語に、良吉は勃然として、そんなら何うでもするが宜い……死んだら母さんを恨むんだよ、といと憎くさげに不減口叩きたる良吉は、何事か心頭に懸るもの丶如く、そはそはして沈着かず、半時とは家に腰の据らで、又もや我が家を出で丶行く。

お濱は良吉の出で行く後影を見て、漸く虎口を逃れたらん心地したる内にも、又其袂に縋りて引止たき心も起りぬ。

夫と行違ひに入り來る姑は、目の縁に小皺を寄せて、凹みたる眼にお濱をじろり〳〵、ほんとに何うしたと云ふんだい、お前がちやあんと傍に附いて居ながら、此樣な大怪我をさせると云ふがあるものか

ね、妾が叱るとお前は直ぐに顔を顰るが平常から妾が喧しく云はない事ぢやアありやアしない。これで良一が若もの事でもあらうものなら、それこそ取りも直さず、お前が手を下して殺したも同じ事、世間に無慈悲非道な親も、何程もあるだらうが、現在の實子を殺すのは尠いやうだね、とさも憎く〳〵しく姑に責めらるゝも、お濱は身の過失に、何んと應答もなき伏すのみなれば、姑は猶も圖に乘りて、妾が傍で見て居てさへ、此樣な事をするからには、妾が目でも眠つた曉には、それこそ何んな事をするか知たものぢやアありやアしあい、と云ひつゝ後邊を見返りて、圖らず思ひ起したらん如き風情にて、良吉が今歸つて來たやうだつたが、何處に居るのだい……又出て行つたのか、と太き吐息を吻きて、おゝ、此樣な女房では、亭主の愛想を盡かすのも道理な譯さ、と飽くまで嘲りて、此方の良一に打向ひては、お前何ういふ鹽梅かとも尋ねず、ぷいと次の間に出で行きながら、ひゝゝと凄く笑ふ。

良夫と云ひ、姑と云ひ、揃ひも揃ひたる世にも無慈悲なるもの哉。良一を介抱せよとは云ひもせで、妾が椽先より良一を突き落しばしゑたるやうに云ひ懲して罵り呌喚けど良一が負傷は全く不時の出來事妾の不注意と云へば云へ、それ程迄に憎さげに云はずとも宜からんに、箇程迄に御兩方に憎まるゝ罪も無かるべきにと、お濱は餘の口惜しさに、胸も張裂く思ひなりしが、目を閉ぢて苦痛を忍ぶ良一の顏を見ては、その口惜しさも、忽ち何地へか消ゑ失せて、お濱は思はず我が頰を、良一の頰に押し當てゝ、泣くより外に事ぞ無き。

それ程とも思ひ居らざりし良一の怪我、生憎に餘病を惹き起してや、日に増し容体惡くなり行き、日頃嗜める鷄卵の半熟も、最早箸を取る氣力失せて、四十度を越ゆる体温に、良一は夢中に囈語を云ふやうになりければ、お濱はゐるにもゐられぬ物思ひ、この三日といふもの、少時も目蓋を合はさず三度の食も咽喉を通らざりけり。

これ迄は心頭にだも浮ばざりしが、良一が若もの事でもありたればと、思ひ廻らすお濱の心には、世間の良一と同じ年頃の男の兒に行遇ふ毎に、憎きやうなる、妬ましきやうなる、羨やましさうなる、一種云ふ可らざる感情に襲はれて、そんな不吉な、未だ何うとも今から分りもせざるにと、幾度か思ひ返しても、何時しか心は良一が亡き後の事に移り行きて、終には數多き男の兒に行遇ふが可厭さに、お濱は我が家の門で出ぬやうになりぬ。

裁縫かけたる良一の袷も、此頃の看病に暇無く打棄て置けるが、若しもの事ありての後には、縫んも可厭なればとて、強て針箱を取り出でて、良一が枕頭に其衣服を打擴ぐれど、裁縫終りても着する事の叶はねばと思へば、生憎に針の我が思ふまゝに、動かざるを奈何にせん。お濱は良一が早亡き人の數に入りたらん時の心にもなり。又など斯ばかりの怪我に、其生命を落さんや、全癒するに違ひなしなど、全く反對なる思想の、胸の裡に闘ひて、お濱は或は泣きつ、或ハ笑ひつ。

奧樣、只今髮結の談話では、物部樣の奧樣は、とう〳〵昨夜御安產遊ばしたさうで、とお小夜の遽しく告ぐるに、お濱は鋭き刄に胸を貫れたる如く、暫時茫然たりしが、男子か女子かと、心の內に問ひ試むる間も無く、憎いぢやございませんか、玉の樣な御男子ださうでござりまするとお小夜の云ひ續くるを聞きて、お濱は忽ち眼球を瞷と見開き、向ふを見詰めて、言葉も出でばこそ。

（三十一）

殘月將に雲に消ゑなんとして、蒼き影庭の築山を包み、潺々と流るゝ泉水の音全く收りて、天地寂莫眠むるに等し。

この夜も良一の看護に、目蓋を合はさゞるお濱は、悄然と病人の枕頭に坐りて、影闇き行燈の光に、我が子の病苦に瘦せ果てゝ、以前に變りし面影を、熟々と眺め入りて、思はず太き息を吻き、去年の春の大病に、早や醫師さへ見放せしを、やうやつとの思ひにて、生命だけは取り留め、近頃漸く元の身体に復りたるが、風邪一とつ引かぬやうになり、やれ嬉しや、これにて少しは安心も出來得べしと心の中にて手を合はし居たるが、此度の不慮の怪我にて、この儘若しもの事にもならば、如何はせんと右思左考、旦那樣始め姑樣までが、お前が手を下ろして殺したも同じ事と、妾を叱り給ひし時は、扞は思ひも寄らぬことなり、何んで妾が殺しませう、自分が池の金魚に見惚れればこそ落ちたるなれ、妾の知りたることある可きと、心の中に抵抗ふ處もありしが、今倩々考ふれば、傍に附いて居りながら、良一

が椽側より落つるを止め得ざりしは、全く妾の不注意より起りしかと思ひ當れば、若し此度の怪我にて、良一が生命を捨つるに至らば、取りも直さず、妾が手を下して殺せしも同じ事、かへす〴〵も濟まぬ事してけりと、早や回復の出來ぬ身の過失に、お濱は我と我が胸を掻挘らるゝ心地して、帶の間に手を差入れて、胸の痞を壓へぬ。

今に始めぬ事ながら、かへす〴〵も恨めしきは夫が心根なり。生命にまで關る我が子の大病を餘所にして、仇し女子と不義の快樂に耽るとは、云はうやうなき人非人、かくまでに不人情なる夫にてはあらざりしが、これも全くお文といへる魔の魅入りたる爲めなりと思へば、不人情なる夫にも增して恨めしきは、彼の、彼の、物部のお文樣なり。お小夜の談話にては、安す〳〵男の兒を產み落せしとの事、よく天罰の報はざる事よ、若し其子の健全に人となりなば、良一の捨てものとなるは、目に見えたる譯。どう思ひ返しても、心憎きはお文樣なりと、お濱は思はず齒を切りぬ。

多暫して厠に赴きたるお濱は、軈て雨戸を一枚開きて手を洗はんものと、思はず築山の方を望み見れば、黑き松が枝の下に佇むものあり。お濱は愕然として、恁る深夜に及びて、恁る處に人の佇む理由なし、全く心の迷想に外ならじと、幾度か思ひ返せど、目のあたり其人影を認めたる身の怖々ながら、月影に透かし見れば、其人は紛ふ方なき文にて、懷中に嬰兒を抱きて、此方を見てニッと打笑ふ凄さに、お濱は悽然として其塲に得堪えで、兩眼を閉ぢてぴしやりと雨戸を立て切り、急ぎ良一の枕頭に馳せ戻

り、僅に胸撫で下ろせど、動氣浪を打ちて、多時止むべうもあらざりけり。

かゝる深更にお文の我が家に來る筈なし、全く心の迷想ならめど、幾度か思ひ返せど、生憎に先時のお文が此方を向きて、ニッと笑ひたる顏目の前に彷徨て、思ひ忘れんと焦思る程、其姿あり〱と現はれ來て、お濱は我れにもあらず身を顫はしぬ。

油の盡きたるにや、行燈の灯影消えんとせしかば、お濱は衝と立ち上りて、油を注がんとせしに、後方の襖の開く音して、人の入り來る氣息するに、お濱は愕然として顧眄れど其影無く、夜風の雨戸を叩く音のみ、微に聞ゆ。

事の不思議にお濱は仰天し、ぴたりと其處に座を占むれば、耳の端にて人の囁く聲聞ゆるに、ますます打驚きて耳欹つれバ、其音聲は紛ふべくもあらぬ我が夫とお文が、いと睦ましげに物語る聲に外ならねば、お濱は怖さをも打忘れて、四邊を見廻せど、すや〱と眠むる良一の傍に、連夜の看病に疲れ果てゝ、居ぎたなく寐そべるお小夜の、行燈を背にして、横はる後姿の見ゆるのみなり。

（三十二）

夜の明くるに從ひて、其人影も其人聲も、全く消え失せて、お濱は始めて自己に返りぬ。

晝の間は何事もあらねど、夜に入りて其頃に至れば、あり〱と其人影現はれ、手に取る如く其聲音聞えて、お濱は我と我が胸を取り挘ぎて、此事バかりは何故かお小夜にも明かされず、獨り胸をぞ痛め

ける。
或る朝お小夜は、此二日ばかり坊様の御介抱の忙しさに、かなりやに水も餌も遣らざりし事を、礑と思ひ起し、急ぎ籠の傍に赴き見れば、一羽は圓く毛を膨らせて、お小夜の近づきしを見て、籠の棧に飛び來りて哀を求むる如く、一羽は果敢なくも餌壺の中に死に果てゝ居たりければ、お小夜は打驚きて、急ぎ餌壺を取り出さんとせしに、かなりやの怖さをも打忘れて、指の上に止まりしさへ泪ぐまるゝ折しも、お光の馳せ來りて、小夜や、可愛さうだから逃がしておしまひな、と云ふにお小夜は振返りて、それでも奥様が大事にしてゐらつしやいますから。だつて餌を遣らずに殺して仕舞つちやあ可愛さうだもの、お前が逃がして遣らなければ、私が放して遣るから宜いやと、ちよこ〳〵と籠の傍に進み來り、一方の口を開けば、かなりやは打喜びたる如く、羽搏して飛び去りし處へ、お濱出で來り此体を見て、平常に無く目眦を釣り上げ、お光の手を確と取り、言語に力を入れて、お光、お前は何故かなりやを逃がして仕まつたい、誰が逃がせと命令ました、さあたつた今、逃がしたかなりやを捕ねておいでとの難題に、お光は早や泪ぐみつ鼻詰らせ、母ちやん、そんな無理を云つたつて、逃がして仕まつたから仕方がありませんと云へば、お濱は目に角立て、只逃がしたで濟みますかと、突然お光の肩を目掛けて擊たんとする有様に、お小夜は打驚き、其手に縋り附きて聲曇らせ、奥様、貴女は何うかなさいましたか、これしきの事で御孃様をお打ちなさるといふがありますか、高がかなりやの一羽位でと宥れど、お濱は聽

かず、猶も撃たんと手を振り上ぐる權幕に、お小夜はいよ〳〵打驚き、お光に目配して、早く此場を去らしめんとせしに、お光は泣き出して立たんともせざれバ、お小夜は片手にれ光の手を取りて、無理に次の間に立たしめけるに、お濱は強て追はんともせず、お小夜の呆れて我を見詰る顔を見て、大口開けてアハヽヽヽ。

これ迄はお小夜の手を措らず、良一の服藥は皆お濱が與へしなれど、お小夜が不圖心附けば、まだ三度分ありたる水藥の一滴も罎の底に殘らざるを見て、訝かしと思ひ當るお小夜の心には、此頃のお濱の樣子、腑に落ちぬ處多く、あれ程までに片時も手を放たで、坊樣の頭を冷やし居給ひたるが、近頃は折々氷嚢の投棄て、坊樣の顔を見て、ニヤニヤ打咲み給ふ体、只事ならずとれ小夜は獨り胸を病ましぬ。

さしもに重かりし良一の病氣も、れ小夜の一心より、薄皮を剝ぐやうに、日増に快方に赴き、今は三度の食好をなすやうになりし時より、お濱の病勢益々募り來て、如何はせんとお小夜の案じ居る內、或る夕暮獨りブラリと我が家を出で行きしを、知るもの絶えて無かりけり。

程經てお濱の家出を知りて、お小夜は狼狽愴惶き、種々の心當りを探ねたれど、遂に見當らねば已を得ず、其筋に迄搜索願を出して、隈なく探ねたれど其詮なかりき。

良吉はお濱の家出を却つて心の內に喜び、今は公然とお文の家に宿泊して家に歸らず、程なく物部ふみと云へる標札の傍に、同居吉村良吉と云へる木札懸りぬ。

良吉の出で行きし後、お濱の媒妁人なる彼の藤本が親切にも、老夫婦を引き取りて世話するに、さしもの姑も我を折りて、此年齢をしてまで樂に足腰を延ばす事の出來ぬとは、前世の因縁事なるべしと、愚痴の泪を流しぬ。

程無く良一は全快し、れ光と共にお小夜の兩の袂に呆り下りて、小夜や、母ちゃんは〳〵と泣き叫ぶに、お小夜は泪の乾く間無し。

お濱ハ何地行きけん、絕ゑて其音信を得ず、今頃は何處を彷徨步行て。泪に嗚咽び居らん。世に哀れなるは、夫に愛されぬ妻ぞかし。

短篇小說 明治文庫第十二編 終

版權所有

明治廿六年八月三十日內務省許可
明治廿七年六月七日印刷發行

明治文庫定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十二册前金	壹圓六拾錢
廿四册前金	三圓拾錢
郵稅一册六錢	

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　曲田成
京橋區築地二丁目十七番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
仝所

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

石橋思案外史著　武內桂舟密畫

少年文學第廿九編

寧馨兒(ねいけいじ)

全一册和裝
正價拾二錢
郵稅四錢

精神一到何事か成らざらんと、本編は實に此語を實行せるものなり。人間到る處青山ありと、本編は實に此語を事實に表出して餘りあり。身を渺々たる一介の賤民に起して、加も不具の躰軀を以て、奮然猛進叱咤一番、誓つて正義の爲に一命を鴻毛より輕んじて、艱難に會ふ毎に志望漸く堅く、屈せず撓まじ、牢として抜くべからざるの氣慨あり。遂に單身孤劍深く不毛の境域に入り、蠻烟瘴雨の裏よく其縱橫の枝を擅にし、殘忍酷薄禽獸を相去る遠からざる蠻土の酋長をして、尚且つ歸依心服措かざらしむるに至る、愛すべき欽すべき好少年が、親しく經歷せる立志談なり。一讀惰夫をして起たしめ、再繙懶民をして愧死せざむるに足る。其あひだ或は泣き或は喜び、一起、一伏、一抑、一揚、案を打つて快哉と絶叫せしむる好談柄に富む。世の少年諸君、幸に一本を坐右に具へて熟讀玩味せば、諸子を益する事蓋し尠少にあらざるべし。敢て言ふ。

(春夏秋冬)第二編

夕すゞみ

全一册洋裝
大判密畫入
正價拾五錢
郵稅四錢

桂舟、永洗、廣業、年方、月耕五氏密畫

花散り葉茂りて、かこちし風もなつかしふなりぬ、螢とびかふ夕まぐれ、郭公なく夕月夜、晝の勞れを休むるは、いづれ夕すゞみにしく事あらず、納涼の品々

目次

光源氏寢覺睦言……山田美妙
落日観……松居松葉
萬年碑……遲塚麗水
命とり……武田仰天
有明……川上眉山

毎月一回發兌 洋裝美本
毎編彩色密畫挿入
正價一册（大判二百頁）拾五錢十二册前金一圓六拾錢〇郵税六錢ヅヽ

短篇小説
明治文庫

（本書既刊目次）

◉第壹編目次 武内桂舟畫 巖谷漣山人著
辻占飴。秋の蝶。けなげさ
黑衣魔。白面鬼。梢上月
山時鳥。京自慢。花の旅

◉第貳編目次 小林永興密畫
雪折竹 川上眉山著　福の神 村井弦齋著
佛魔一紙 廣津柳浪著　姥櫻 石橋思案著
薄命の鈴子 嵯峨の屋著　驚く鷗 江見水陰著

◉第參編目次 武内桂舟畫 江見水陰著
劍客。初嵐。疳癖太守。
骨武者。畫師。斷絃。信
天翁。初楓。故家水。漁
郎。はかれ霜。畫師の妻。

◉第四編目次 小林永興密畫
一夜の宿。雲烟過眼。
緣外緣 幸田露伴著　媒介人 巖谷漣著

新學士 多田漁山著 風流狂言記 川上眉山著 隅田川の秋 田山花袋著 庭の教子 嵯峨の屋著 都土産 渡部乙羽著

◉第五編目次

山田美妙齋著 三島蕉窓密書

みゝずはれ。曙の春。月花の見立。紅墻記。頼朝の墓。雪折れ竹。大龍王。田舎聖者。古切手。くされ縁。ゐなか娘。母のなさけ。春の花鳥。鴉の道行。戸隠山紀行。都門雜興。

◉第六編目次 武内桂舟密書

忠義お安 福地櫻痴居士著

當世二人女婿 依田學海居士著

◉第七編目次 三島蕉窓密書

中村花瘦著

俄長者 狂蝴蝶 合歡花

俠魂 片時雨 破鏡

◉第八編目次 富岡永洗密書

村上義光 山田美妙著 若水 巖谷漣著

國民大帝 嵯峨の屋著 夜行滊車 松華庵著

滑稽二人男 西森骨皮著　廿日月 田山花袋著
江戸舞蹈會 眠花道人著　青春夢 原抱一庵著

◉第九編目次　渡部乙羽著　寺崎廣業密畫

浮田一蕙。捨扇。邪正一如。戀の今樣。京屋娘。こぼれ梅。神田七不思議。新奥の細道。玉川河童泳記。故郷の錦繪。吉野初瀨花摺衣

◉第十編目次　富岡永洗密畫

僞稱紳士 福地櫻痴居士著
評判一人娘 巖谷漣山人著

母心 嵯峨の屋著　鏡花緣 松居十八公譯
銃獵 松華庵著　薄暮山 田山花袋著

◉第十一編目次　遲塚麗水著　寺崎廣業密畫

月雪花物語。懸想文賣。餓鬼。心字池。寳刀。畵師。偕樂園梅。啼美人。新佐世姬

◉第十二編目次　思案外史著　内桂舟密畫

斷腸花。片破月。禿木魚。靑大將。美人車。可愛い子。わが戀。羽拔鳥

◉第十三編目次　水野年方密畫

吉野拾遺名歌譽　依田百川著

香の雪　柳香散士著　未開紅　南翠外史著

世の中　嵯峨の屋著　納豆賣　腫花道人著

星　小金井喜美子　若木の梅　柳園主人著

◉第十四編目次　宇田川文海著　水野年方密畫

爪の痕。和氣清麿。藤袴。但馬行李。滑稽演説膭鼻褌。胸算用。竹生島。萬金丹。院本信夫摺。葉末の露

尾崎紅葉。渡部乙羽兩君校訂

校訂 西鶴全集

全二冊　紙數二千頁以上

洋裝背皮金字入上製　正價一冊五十錢郵税十六錢

上巻　六月一日發兌　下巻　六月十日發兌

井原西鶴は我邦小説家の元祖なり古くは榮花源氏等の物語あれども着眼上流社會を觀察するに止りて其下流の實相を描出せしものなし天和元祿の時始めて井原西鶴出で、靈妙の着想と艶麗の筆力とをもて世間の裏面に潜む惡霓外道を摘發し怒罵し鞭韃して餘す所あらず其一代に述作する著書二十餘巻悉く諷世嘲俗の文字ならざるはなく其文の至妙なること評するに語無し加之本書は元祿文學に精通なる尾崎紅葉渡部乙羽兩氏の校訂に成り名手の繪畫數十個を挿みたれば錦上に錦を添ふの美觀あらむ乃ち上巻載する所『一代男。二代男。一代女。五人女。二十不孝。大鑑。武道傳來記。永代藏』の八部となし下巻には『武家義理物語。本朝櫻蔭比事。織留。文反古。大下馬。俗つれぐ。胸算用。三代男。新可笑記。一目玉鉾。置土產と梅園堂作の元祿太平記』等を載せ旬日を出ずして全部を完成すべし大方の君子一本を机右に置ば坐乍らにして三百年前の文學を味ひ元祿時代の風俗を仔細に察知するを得べし希くは愛讀を賜へ

圖書出版
東京博文館